昭和九年二月十五日印刷
昭和九年二月二十日發行

國譯一切經　毗曇部十九

不許複製

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝（三一）一〇一四〇六番　〇番

製本所

兩角製本所

至、此の行を成就して、隨所に能く入り、若しは天眼の淸淨にして人に過ぐるを受けむと欲せば、能く衆生の生死を見、乃至、所造の業の如く、隨所に能く入り、若し有漏を盡くして無漏を成じ、心解脱・慧解脱を得、現世に自ら知證し、成就行すらく、[七]「我が生は已に盡き、梵行は已に立ち、所作已に辦じて後有を受けず」と。——〔是の如き〕を欲すれば、隨所に能く入る。是の如く四禪に親近し多く修學すれば、是の如きの果報を得。

（卷第十四竟）

【七】我が等。毘曇部一、初版、p.125等參照。

して覺無く觀無く、定生の喜樂あり、二禪行を成就するも、我は是を動と説く。此は何の動か有る。謂く、喜の未だ滅せざればなり。若し比丘の、喜を離れて捨行あり、念・正智ありて身に樂を受し、諸の聖人の「捨・念ありて樂行す」と解するが如く、三禪行を成就するも、我は是を動と説く。此は何の動か有る。謂く、捨樂の未だ滅せざればなり。若し比丘の、苦樂を斷じ、先に憂喜を滅し、不苦不樂にして捨・心、淨に、四禪行を成就すれば、我は是を不動と説く」と。——若し比丘(三)の欲・惡・不善法を離れて初禪に入り、初禪より起つて二禪に入り、二禪より起つて三禪に入り、三禪より起つて四禪に入る、是を不動處に到ると謂ふ。

比丘の是の如く四禪を修學し、通法を證せむと欲すれば、心の欲する所に隨つて卽ち能く證することを得、自在・無礙なり。四衢平處に、善く駕駟を調するもの有り、善御者有り、意に隨ひて自在なるが如く、是の如く、比丘も四禪に親近して多く修學し已り、通法を證せむと欲すれば、心に隨つて卽ち得て自在・無礙なり。水を盛るの瓶の、堅牢にして漏らざるあるとき、盛るに淨水を以つてし、平滿にして飮むことを爲さば、人の取用に隨つて如意自在なるが如く、是の如く、比丘の、四禪に親近して多く修學し已り、通法を證せむと欲すれば、心の欲する所に隨つて自在・無礙なり。陂泉の、水を遮し、平滿にして飮むことを爲すに、人の決用に隨つて如意自在なるが如く、是の如く、比丘の、四禪に親近し、多く修學し已り、通法を證せむと欲すれば、心の欲する所に隨つて卽ち能く證することを得、自在・無礙なり。——若し比丘の神足を以つて地を動さむと欲し、能く一を以つて多と爲し、多を以つて一と爲し、乃至、梵天まで、身の自在を得むと欲せば、所欲に隨つて入り、若し天耳の淸淨にして人に過るを受け、能く二聲——人・非人の聲を聞かむと欲せば、隨所に能く入り、若し他の衆生を知らむと欲せば、能く知り、有欲心は如實に有欲心と知り、無欲心は如實に無欲心と知りて、隨所に能く入り、若し無量の宿命を憶念せむと欲せば、能く一生を憶し、乃

比丘の清淨深心を修し、身の遍解行ありて遍ねからざる處無きが如し。男子・女人の、白淨衣を著けて、上下具足し、頭より足に至り、足より頭に至りて遍ねからざる處無きが如く、比丘も亦爾く、清淨心を修し、身の遍解行ありて遍ねからざる處無し。

比丘の第四禪に入るや、心高からず、下ならず、憎せず、愛せず、定住して不動なること、猶し靜室を遲もて治し、内外の戸牖を倶に閉ぢ、風塵有ること無きに、其の屋内に於て然すに油燈を以つてし、若しは人・非人、若しは風、若しは鳥の觸すること有ること無ければ、然焰は高からず、下ならず、傾かず、曲らず、定住・不動なるが如く、比丘の第四禪に入るも、亦復是の如く、心は高ならず、下ならず、乃至、定住して不動なり。――

云何が『高心』なる。掉と共に相應する心、是を『高心』と名く。

云何が『下心』なる。懈怠と共に相應する心、是を『下心』と名く。

復次に、[六九]七慢と共に相應する心、是を『高心』と名け、我と共に相應する心、是を『下心』と名く。

云何が『愛心』なる。染と共に相應する心、是を『愛心』と名く。

云何が『憎心』なる。瞋恚と共に相應する心、是を『憎心』と名く。

此の四禪の中にて、心の、掉・不掉と共に相應せず乃至、瞋恚と共に相應せざる、是を不高・不下・不憎・不愛と名く。

云何が『住』なる。若し心の住し、正住し、獨り定に處する、是を『住』と名く。

云何が『不動處』なる。不動は謂く第四禪なり。佛の[七〇]優陀夷に語るが如し、「若し比丘の、欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂あり、初禪行を成就すれば、我は是を動と說く。此は何の動か有る。謂く、覺・觀の滅せざればなり。若し比丘の、覺・觀を滅して內に淨信あり、一心に

【六九】七慢。法蘊足論九―毘曇部三、p. 236 f. 等を見よ。

【七〇】優陀夷。Udāyin.

比丘の若しは行じ、乃至、觸して喜を離れ、捨行あり、念・正智あり、身に樂を受し、諸の聖人の「捨・念ありて樂、行ず」と稱するが如く、三禪行を成就するが如く、比丘の行じ、乃至、觸して親近し、多く修學し已り、寂靜に向ひ[六四]已りて寂靜に向ひ、寂靜を尊上し、寂靜を尊上して寂靜に傾向し、寂靜に傾向し已りて無喜の樂寂靜し、無喜の樂の寂靜し、滅・[六五]沒・除・盡し已りて不苦不樂の捨の生じ、正生し、起し、正起し、具足し成就する、是を『不苦不樂の捨』と名く。

復次に、比丘の無喜の樂を[六六]離れて、不苦不樂捨定を修する如行人の身心に、苦樂を忍受せず、眼觸の不苦不樂受、乃至、意觸の不苦不樂受ある、是を『不苦不樂の捨』と名く。

云何が『[六七]念』なる。如行人の念・憶念、是を『念』と名く。

云何が『[六八]淨』なる。如行人の念の欲染を離れて清淨に、惡・不善法を離れて清淨に、覺を離れて清淨に、觀を離れて清淨に、喜を離れて清淨に、樂を離れて清淨に、苦を離れて清淨に、憂を離れて清淨に、及び餘の煩惱法を離れて清淨なる、是を『淨』と名く。

云何が『一心』なる。如行人の若し心の住し、正住する、是を『一心』と名く。

――此の四支は是を「第四禪」と名く。

何をか「[六九]四禪」と謂ふ。次の順にして逆ならず、次を以つて入定行するに、四と三と、中間有ること無ければ、是を四と名く。

何をか「禪」と謂ふ。心の垢を捨し、正捨し、緣捨する、是を「禪」と名く。

乃至、復次に、無喜の樂を離れて不苦不樂捨定を修する如行人の受・想・思・觸〔七〕思惟、乃至、及び餘の隨色、是を「禪」と名く。

復次に、隨法は禪に非ず、是れ修禪法にして、心の住し、正住する、是を「禪」と名く。

是の如きの定を得、威儀を護持して住し、行・微行する、是を「四禪行を成就す」と名く。

【六三】已りて。恐らく、一句、上に行きすぎたるものなるべし。已揭の諸文を參照せよ。
【六四】沒・除。大正本等、これを二回くりかへすも、宋元明の三本によりて一を省く。
【六五】離れ。大正本等、難に作るも、同上の三本及び宮內省本等に照して改め讀む。
【六六】念。Smṛti(Sati)
【六七】淨。Pariśuddham(pārisuddhiṃ)
【六八】四禪。こは本來は、「何をか四と謂ふ。(四)禪の次の……」等とあるべきを何うかしたものならむ。

智あり、身に樂ありて諸の聖人の「捨・念ありて樂行す」と解するが如く、三禪行を成就すべきが如し。便ち無喜の樂の身に滿ち、無喜の樂を得已りて、身炙・心炙、乃至、身の不除・心の不除を除く。比丘の、身炙・心炙、乃至、身の不除、心の不除を除き已りて、身の不炙、乃至、不燋を得、心の不炙乃至不燋を得て樂を得れば則ち煩惱の金剛無く、利を求めずして勤力・樂行するが如き、是を齊りて無喜の樂の身に遍滿すと名く。

[六二]云何が「苦・樂を斷じ」なる。比丘の苦樂を斷ずるが如し。是を「斷」と名く。

云何が「先に憂・喜を滅し」なる。比丘の、憂・苦の已に滅し、寂靜し、寂靜するが如し。是を「先に憂喜を滅し」と名く。

云何が「不苦不樂にして捨あり」なる。佛の舍利弗に告ぐるが如し、「聖人の、欲・惡・不善法を離れて喜行を成就するが如き、爾の時、五法有ること無し。謂く、欲染の相續と共なる喜樂・欲染の相續と共なる憂苦・不善と共なる喜樂・不善と共なる憂苦・〔p.624a〕善と共なる憂苦なり。舍利弗よ、聖人の欲・惡・不善法を離れて喜行を成就するが如き、是の如きの五法は盡く無し」と。聖人の欲・惡・不善法を離れて、喜行を得・成就するが如く、欲染の相續と共なる喜樂、乃至、善と共なる憂苦の、爾の時、已に滅し、及び餘の善と共なる憂樂も亦滅せる、是を第四禪に入ると謂ふ。

云何が「第四禪」なる。第四禪に四支有り。不苦不樂の捨・念・淨・一心なり。

云何が『[六三]不苦不樂の捨』なる。比丘の喜を離れ、捨行にして、念・正智あり、身に樂を受し、諸の聖人の「捨・念ありて樂行す」と解するが如く、三禪行を成就するが如し。比丘の、「無喜の樂の麁にして、心の猶ほ作有るがごとくなるも、若し不苦不樂の捨は勝にして寂靜なり」と觀ずるが如し。無喜の樂の麁を觀じて無喜の樂は寂靜し、正寂靜し、滅・沒・除・盡し已り、不苦不樂の捨の生じ、正生し、起し、正起し、具足・成就する、是を『不苦不樂の捨』と名く。

【六二】云何が以下。同前に第四禪の說明文を解釋す。

【六三】不苦不樂の捨。普通には「不苦不樂にて、捨・念・淨に」等と讀み、梵文等にも…adukkhamasukhaṃ upekkhā-sati-pārisuddhiṃ とあれど、今は上文來、いさゝか別途の讀方をするものゝ如し。

云何が津、云何が液、云何が遍、云何が滿なる。比丘の禪に住するの時、無喜の樂の初めに生じ、正生し、起し、正起し、觸證するが如し。比丘の、禪に住するの時、身の、無喜の樂あるが如き、爾の時を津と名く。

乃至、禪に住するの時、無喜の樂の能く彼岸に到る、是を齊りて無喜の樂と名け、爾の時を身に滿ずと名く。

農夫の[六〇]初め水を以つて田地に漑ぐが如し。始め津潤する、爾の時を津と名く。津潤し已りて水の漸く開ひて徴行するも、未だ增廣すること能はざる、爾の時を液と名く。液し已りて水の遂に增廣するも、未だ彼岸に到らざる、爾の時を遍と名く。遍じ已り、水の廣がりて彼岸に到り、地の一切の高下に盡く滿ち、滿つる時、水の還つて水口に壞するに、農夫の水の處を放つが如き、是を齊りて滿と名く。比丘も亦是の如し、禪に住するの時、身の無喜の樂ありて生じ、正生し、起し、正起し、觸證し、身の無喜の樂ある、爾の時を津と名け、乃至、禪に住するの時、無喜の樂ありて能く彼岸に到る、是を齊りて無喜の樂ありと名け、爾の時を身に滿ずと名く。

復次に、津・液・遍・滿――是の如きの諸句は、義は一なるも名、異り。[六一]佛の說くが如し、「此の苦の聖諦法の未だ曾て聞ざるを自ら思惟して智を生じ、眼を生じ、覺を生じ、明を生じ、通を生じ、慧を生じ、解を生ず。諸比丘よ、此は應に是の如く說くべからず。謂く、智異り、眼異り、覺異り、明異り、通異り、慧異り、解異り。此の如きの諸句は、義は一なるも名異り。津・液・遍・滿も亦、復、是の如し。義は一なるも名、異り。比丘の喜心を修するが如し。東方、南・西・北方、四維、上・下を遍解して喜心は普廣し、無異・無量・無怨・無恚に、一切の世間を遍解して行ずるに、爾の時、衆生を以つて境界と爲す。比丘の禪に住するの時、身の無喜の樂の津 液・遍・滿するも、身を以つて境界と爲す。應に是の如く說くべからず。比丘の、應に無我法を思惟して喜を離れ、捨行あり、念・正

【六〇】佛の喩。前出――卷の四、問分四聖諦品第四初を見よ。

生し、起し、正起し、具足し成就する、是を『共味の捨』と名く。
復次に、比丘の喜樂を離れて無喜の共味定を修する如行人の捨の勝にして捨もて心を調し、[五七]正親調し、心の無作・非受なる、是を『共味の捨』と名く。
云何が『念』なる。行人の念・憶念、是を「念」と名く。
云何が『正智』なる。如行人の觧射の方便を智見する、是を『正智』と名く。
云何が『無喜の樂』なる。如行人の、心に苦・樂を忍受せず、[五八]意觸の不苦不樂受ある、是を『無喜の樂』と名く。
云何が『一心』なる。如行人の心の住し、正住する、是を『一心』と名く。
――是の如きの五支は是を三禪と名く。
何をか『三』と謂ふ。四禪の次の順にして逆ならず、次を以つて入定行するが如き、三と二との中間有ること無ければ、是を『三』と名く。
云何が『禪』なる。謂く、心の垢を捨し、正捨し、勝捨する、是を『禪』と名く。
乃至、復次に、喜樂を離れ、無喜の共味定を修する如行人の受・想・思・觸・思、惟、乃至、及び餘の隨色、是を『禪』と名く。
復次に、隨法は禪に非ず。是れ隨禪法にして、若し心の住し、正住する、是を『禪』と名く。
[五九]是の定を得、威儀を護持して住し、行・微行する、是を三禪行を成就すと名く。
比丘の身の無喜の樂の津・液・遍・滿して減少有ること無きが如し。優鉢羅池・波頭摩池・拘勿頭池・分陀利池の花の[六〇]涅より湧出して、未だ水を出づること能はざるが如し。此の花の若しは根若しは頭を、水の津・液・遍・滿して減少有ること無きが如く、是の如く、比丘の身に無喜の樂の津・液・遍・滿して減少有ること無し。

【五六】 正親調。宋元明、宮内省の四本には親を覲に作るも果して如何。今は寧ろ親の字を衍字と見たきも、とにかく、他日の是正ん待ちたし。
【五七】 意觸の等。下の第四禪中の文を參照せよ。
【五八】 是の定を得。宋元明、宮内省の四本には「是の如きの定を」と作る。
【五九】 涅。同上四本には泥に作る。

云何が「捨行」[五三]なる。謂く、捨と共なる定を得し、正得し、威儀を護持して住し、行・微行する、是を「捨行」と名く。

云何が「念・正智あり」なる。念・正智を成就する。是を「念・正智あり」と名く。

云何が「身に樂を受し」なる。樂は謂く忍樂・意觸樂受、是を樂と名け、此の樂を身に受し、正受し、微受し、緣受する——何の身を以つてか受する。意身もて受す。——是を「身に樂を受し」と名く。

云何が「諸の聖人の解するが如く」なる。聖人とは謂く佛及び聲聞なり。自地の善法・現世の樂行・入定・出定を知り已りて顯示し、敎化し、流布し、開解し、演說し、分別し、顯現する、是を「諸の聖人の『捨・念ありて樂行す』と解するが如く」と名く。

云何が「三禪行を成就す」なる。三禪に五支有り。共味の捨・念・正智・無喜の樂・一心なり。

云何が『共味の捨』なる。比丘の覺・觀を滅し、內に淨信あり、心に無覺・無觀、定生の喜樂を觸し、二禪行を成就するが如し。比丘の、喜の麁を觀じて、「我が喜は麁心の踊躍するなり。共味の捨は勝にして寂靜なり」と觀ずるが如し。比丘の、喜の麁を觀じて喜の寂靜し、正寂靜し、滅・沒・除・盡し、喜の寂靜し、正寂靜し、滅・沒・除・盡すし已りて共味の捨は生じ、正生し、起し、正起し、具足し、成就するが如き、是を『共味の捨』と名く。

[五四]比丘の若しは行じ、乃至、觸して覺・觀を滅し、內に淨信あり、[五五]心觸に[五六]して、覺・觀無く、定生の喜樂ありて二禪行を成就するが如く、比丘の行じ、乃至、觸して親近し、正親近し、多く修學するが如く、比丘の行じ、乃至、觸して親近し、正親近し、多く修學し已りて心は寂靜に向ひ、心は寂靜に向ひ已りて寂靜を尊上し、寂靜を尊上し已りて寂靜に傾向し、寂靜に傾向し已りて喜が寂靜し、正寂靜し、滅・沒・除・盡し、喜の寂靜し、正寂靜し、滅・沒・除・盡し已りて共味の捨が生じ、正

【五三】捨行。玄奘譯等には、「捨に住し」。

【五四】比丘の等。前の「內の淨信」の諸復次釋中、「若は行を以てし、若しは數を受け……」等の文を參考とせよ。

【五五】心觸。一心のことで、心獨の誤ならむ。

農夫の初め水を以つて田地に漑ぐが如し、始に津潤する、爾の時を津と名く。津潤し已りて水の漸く開いて微行するも、未だ增廣なること能はざる爾の時を液と名く。液し已りて水の遂に增廣するも、未だ彼岸に到らざる、爾の時を遍と名く。遍し已りて水の彼岸に到り、地の一切の高下に盡く滿ち、滿つる時、水の還つて水口を擁する、爾の時を滿と名く。比丘も亦是の如し。禪に住するの時、身の定生の喜樂の生じ、正生し、起し、正起し、觸[四八]證する禪定生の喜樂ある、爾の時を津と名く。乃至、禪に住するの時、定生の喜樂の能く彼岸に至る、是を齊りて定生の喜樂と謂ひ、爾の時を身に滿すと名く。

復次に、津・液・遍・滿――是の如きの諸句は義は一にして名、異り。佛の說くが如し、「云何が觸なる。[四九]眼を緣とし、[p. 623a]色を緣として眼識を生じ、三法の和合して觸あり。眼は觸に非ず。色は觸に非ず。若し此ら法の共に和合・聚集する、是を觸と謂ふ。諸比丘よ、此の義は應に是の如く說くべからず。共異り、和合異り、集異り、聚異り。此の如きの諸句は義は一なるも名、異り」と。津・液・遍・滿も亦、復、是の如し。義は一なるも名、異り。比丘の悲を修するが如し。東方、南・西・北方、四維、上・下を遍解して、悲心は普廣し、無異・無量・無怨・無恚に、一切の世間を遍解して行ずるに、爾の時、衆生を以つて境界と爲す。比丘の禪に住するの時、身の定生の喜樂の津・液・遍・滿するも、身を以つて境界と爲す。應に是の如く說くべからず。比丘の應に苦行を思惟して覺・觀を滅し、內に淨信あり、[五〇]心獨にして、覺・觀無く、定生の喜樂ありて二禪行を成就すべきが如し。便ち定生の喜樂ありて身に遍滿し、定生の喜樂を得已りて身炙・心炙、乃至、身の不除、心の不除を除き、身の不炙・不煖・不熱・不然・不燋を得、樂を得て則ち煩惱の金剛無く、利を求めず、勤力・樂行す。是を齊りて、定生の喜樂ありて身に遍滿すと謂ふ。

[五一]云何が[五二]「離」なる。喜の滅・沒・除・盡、是を「離」と謂ふ。

【四八】證。宋元明の三本によりて補入。但し、次の禪の字が衍字で、恐らく、禪と證と今の本等は誤傳したものなるべし。

【四九】眼。宋元明、宮內省の四本には明に作る。

【五〇】心獨。一心のこと。

【五一】云何が等。以下は第三禪の文（上の論母代りの文中には略）を釋す。

【五二】離。實は「喜を離れて」（法蘊足論―毘曇部3.172等を見よ）の釋。

名く。

何をか「二」と謂ふ。四禪の次の順にして逆ならず、次を以つて入定行するが如き、二と初と、中間有ること無ければ、是を「二」と謂ふ。

何をか「禪」と謂ふ。禪は謂く心の垢を捨し正捨し、緣捨する、是を「禪」と名く。

乃至、復次に、無覺・觀行にして意の喜び、心の定せる如行人の若しは受・想・思・觸・思惟、乃至、及び餘の所隨の色、是を「禪」と名く。

復次に、隨法は禪に非ず、是れ隨禪法にして、若し心の定し、正住する、是を「禪」と名く。是の定を得已りて威儀を護持して住し、行・微行する、是を二禪行を成就すと名く。

若し比丘の、定生の喜樂の津・液・遍・滿し、此の身を盡して定生の喜樂の津・液・遍・滿して、減少有ること無し。大陂湖あるが如し、山を以て圍遶し、水は底より湧出して東方、南・西・北方より來らず。自ら底より湧出して、此の陂に津・液・遍・滿し、減少有ること無し。是の如く、比丘の、身に定生の喜樂あり、津・液・遍・滿して減少有ること無し。

云何が津、云何が液、云何が遍、云何が滿なる。比丘の禪に住する時の如し、身に定生の喜樂の生じ、正生し、起し、正起し、[四七]重證する身の定生の喜樂ある、爾の時を津と名く。

禪に住するの時、定生の喜樂の漸く開いて微行するも、未だ增廣すること能はざるの身の定生の喜樂ある、爾の時を液と名く。

禪に住するの時、身の定生の喜樂の能く增廣するも、未だ彼岸に到らざる定生の喜樂ある、爾の時を遍と名く。

禪に住するの時、定生の喜樂の能く彼岸に至る、是を齊りて定生の喜樂ありと謂ひ、爾の時を身に滿ずと名く。

[四七] 重。宋元明の三本には觸に作る。

を成就するが如し。比丘の行じ、若しは教を受け、乃至、親近し、多く修學し已りて、心の寂靜に向ひ、寂靜を尊上し、寂靜に傾向し、心の寂靜に向ひ、寂靜を尊上し、寂靜に傾向し已りて、覺・觀は寂靜し、正寂靜し、滅・沒・除・盡し、覺觀の寂靜し、正寂靜し、滅・沒・除・盡し已りて内に淨信を生じ、具足・成就するが如き、是を『内の淨信』と名く。

復次に、比丘の「覺・觀は是れ麁法なり」と思惟して麁法を滅し、心の淸淨なるに、淸淨の[四三]人心は、是を『内の[四四]淨信』と名く。

復次に、比丘の、「覺・觀は是れ麁法なり」と思惟して麁法を離れ、心の淸白なるときの淸白なる心は、是を『内の淨信』と名く。

復次に、比丘の、「覺・觀は是れ麁法なり」と思惟して麁法を除き、心の明了なるときの明了[四五]心は、是を『内の淨信』と名く。

復次に、比丘の、「覺・觀は是れ麁法なり。無覺・無觀地は寂靜・勝妙なり」と思惟する、是を『内の淨信』と名く。

復次に、比丘の、覺・觀有らば、其の心は軟ならず、調ならず、淸淨ならず、淸白ならず、明了ならず。覺・觀無ければ、其の心は軟・調・淸淨・淸白・明了なりと思惟して、其の心の軟乃至明了なる、是を『内の淨信』と名く。

復次に、比丘の無覺・無觀を思惟して心喜・心定せる如行人の若しは信・入信・究竟入信・勝信・淳信・心信、是を『内の淨信』と名く。

何をか『喜』と謂ふ。如行人の歡喜・踊躍、是を『喜』と名く。

何をか『樂』と謂ふ。如行人の心に忍受する樂・[四六]樂意觸樂受、是を『樂』と名く。

何をか『一心』と謂ふ。如行人の心信・正信、是を『一心』と名く。――是の如きの四支を二禪と

【四三】人。宋元明の三本にはこの字無し。
【四四】淨信。大正本等には信を行に作る。同上の三本によりて改む。
【四五】心。同上三本により補入。
【四六】樂。宋元明、宮本等には信に作る。或は衍字か。

すべきが如し。便ち離生の喜樂ありて身に遍滿し、離生の喜樂を得已りて身炙・心炙・身煖、心煖、身熱・心熱、身然・心然、身燋・心燋、身惡・心惡、身不樂・心不樂、身不調・心不調、身不輕・心不輕、身不煖・心不煖、身不除・心不除を除く。比丘の、身炎・心炙、乃至、身不除・心不除を除き已りて——身の不炙・不煖・不熱・不然・不燋を得るが如し。樂を得れば則ち煩惱の金剛無く、利を求めずして勤力・樂行す。是を齊りて、離生の喜樂ありて身に遍滿すと謂ふ。

[36]云何が「[37]覺・觀を滅し」なる。若し覺・觀の寂靜・正寂靜・滅・沒・除、[38]是を〔七〕「覺・觀を滅し」と名く。

云何が「內に淨信あり」なる。內に信有り、正勝信の生じ、具足・成就する、是を「內に淨信あり」と名く。

云何が「[39]一心」なる。心の獨り住し、正住し、正に獨り處して定に入る、是を「一心」と名く。

云何が「[40]覺無く觀無く」なる。若し覺・觀を除き已りて　[41]定心の喜樂を具足・成就する、是を「覺無く觀無く」と名く。

云何が「定生の喜樂ありて二禪行を成就す」なる。

云何が二禪なる。二禪は四支有り。[42]內の淨信・喜・樂・一心なり。

云何が『內の淨信』なる。若し比丘の、欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂ありて、初禪行を成就するに、比丘の、覺・觀の麁を思惟するが如し、「我が覺・觀は麁なり。內の淨信は寂靜にして勝なり」と。比丘の、覺・觀の麁を思惟し已りて覺・觀の寂靜し、正寂靜し、捨・滅・沒・除・盡し、覺・觀の寂靜し、正寂靜し、捨・滅・沒・除・盡し已りて內に淨信を具足・成就する、是を『內の淨信』と名く。

比丘の若しは行を以つてし、若しは敎を受け、若しは法相あり、若しは方便あり、若しは專心し、若しは思惟し、若しは觸して、欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂ありて、初禪行

【三六】云何以下。上の論母代りの文中には略記した第二禪の說明に關する論釋をのぶ。
【三七】覺・觀を滅し。Vitakka-vicārānaṃ vyupasamād (vitakka-vicārānaṃ vūpasamā)
【三八】內に等。Adhyātmaṃ saṃprasādāc(ajjhattaṃ sampasādanaṃ)
【三九】一心。Cetaso ekotibhāvaṃ (cetaso ekodibhāvaṃ)
【四〇】覺無く等。Avitarkaṃ avicāraṃ (Avitakkaṃ avicāraṃ)
【四一】定心。定生に非ざるか。
【四二】淨。宋元明の三本により補入。

を遍と名く。

禪に住する時、離生の喜樂の能く彼岸に到る、是を齊りて身の離生の喜樂あり〔p. 622b〕と謂ひ、爾の時を滿と名く。

農夫の、初め水を以つて田地に漑ぐに、始めの津潤を津と名け、潤し已りて水の漸く開き微行するも、未だ增廣すること能はざるを液と名け、液し已りて水の漸く增廣するも、未だ彼岸に到らざるを遍と名け、遍し已りて水の彼岸に到り、一切高下の盡く滿ち、滿つるの時、水の還つて水口に擁[三五]するを滿と名くるが如く、比丘も亦是の如く、禪に住するの時、離生の喜樂の初めて生じ、正生し、起し、正起し、觸證する身の離生の喜樂ある、爾の時を津と名け、離生の喜樂の漸く開いて微行するも、未だ增廣すること能はざる身の離生の喜樂ある、爾の時を液と名け、離生の喜樂の能く增廣するも、未だ彼岸に到らざる身の離生の喜樂ある、爾の時を遍と名け、離生の喜樂の能く彼岸に至る、是を齊りて離生の喜樂ありと謂ひ、爾の時を身に滿ずと名く。

復次に、津・液・遍・滿――是の如きの諸句は、義の一なるも名異り。佛の說くが如し、「何をか覺と謂ふ。若しは覺・重覺・究竟覺、諸の憶念する所、法の明の來りて思惟・心語に至る、是を覺と名く。諸比丘よ、此の義は應に是の如く說くべからず。覺異り、重覺異り、究竟覺異り、諸の憶念する所異り、法の明の來りて思惟・心語に至るも異り。覺の諸句の、義は一なるも、名の異るが如く、津・液・遍・滿も亦是の如く、義は一なるも名は異り。

比丘の慈心を修するが如し。東方、南・西・北方、四維、上・下を遍觧して、慈心は普廣し、無異・無量・無怨・無恚に、一切世間を遍觧するの行あるに、爾の時、衆生を以つて境界と爲す。是の如く、比丘の身の離生の喜樂の津・液・遍・滿するの時、身を以つて境界と爲す。應に是の如く說くべからず。比丘の應に無常行を思惟し、欲・不喜法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂ありて、初禪行を成就

【三五】擁。「おひのける」「ふりはらふ」などの意なるも、宋元明、宮內省の四本には灘（「どろ」「水の流るゝ形」等）に作る。

何をか初と謂ふ。若し此の四禪にて、次を以つてするに順にして逆ならず、次を以つて[三四]入定門するに、此は是れ始、此は是れ初、此は是れ一なれば、是を初と名く。
何をか禪と謂ふ。謂く、心の垢を捨し、正捨し、緣捨する、是を謂ひて禪と名く。
復次に、煩惱の未だ斷ぜざるを能く斷ずる、是を禪と名く。
復次に、煩惱を斷じ已りて現世の樂行を得る、是を禪と名く。
復次に、是の如きの善法を成就して禪に入り、明了・熾盛・淸淨なる、是を禪と名く。
復次に、是の如く、定に住して甚深の妙義あり、智慧に專著する、是を禪と名く。
復次に、行人の、覺・觀を行じて意の喜び、心の定せる如行人の若しは受・想・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・心捨・意界・意識界及び餘の隨色、是を禪と名く。
復次に、隨法は禪に非ず、是れ隨禪法にして、若し心の住し、正住する、此を禪と名く。
是の定を得已り、威儀を護持して住し、行・微行する、是を初禪行を成就すと名く。
若し比丘の身の、離生の喜樂ありて津液・遍滿し、此の身を盡して離生の喜樂の津液・遍滿して減少有ること無し。善洗浴師・善洗浴師の弟子の細澡豆を以つて器中に盛著し、水を以つて灑ぎ已り、調適に揣と作すに、此の揣の、津液・遍滿して乾せず、濕せず、內外、和潤するが如く、是の如く、比丘の此の身の離生の喜樂ありて津液・遍滿して減少有ること無し。
云何が津、云何が液、云何が遍、云何が滿なる。比丘の禪に住する時、離生の喜樂の初めて生じ、正生し、起し、正起し、觸證し、身に離生の喜樂あるが如き、爾の時を津と名く。
禪に住する時、離生の喜樂の漸く開いて微行し、未だ增廣すること能はざる身の離生の喜樂ある、爾の時を液と名く。
禪に住する時、離生の喜樂の能く增廣するも、未だ彼岸に到らざる身の離生の喜樂ある、爾の時

【三四】定門。宋元明、宮內省の四本には定行と。

世間の色は常住にして、　健者は欲染を離る。——

若し此の五欲の中にて貪・重貪ありて堪忍・繋著する、是を欲と名く。

云何が「悪・不善法」なる。身・口・意の悪行、是を悪・不善法と名く。

復次に、十不善業道、是を悪・不善法と名く。

復次に不善根相應の法、不善根が所起の無縁・非受の法、是を悪・不善法と名く。

復次に、貪欲・瞋恚・愚癡・忿怒・怨嫌・妄語・嫉妬・慳惜・諛諂・欺僞・匿悪・無慚・無愧・貢高・諍訟、及び我慢等、是を悪・不善法と名く。

復次に、邪見・邪覺・邪語・邪業・邪命・邪進・邪念・邪定・邪解脱・邪智、及び餘の隨邪法、是を悪・不善法と名く。

是の如きの欲・悪・不善法を若し遠離して近かず、雑はらず、純淨にして處を別つ、是を欲・悪・不善法を離ると名く。

云何が「覺有り、觀有り」なる。若し覺・觀を行ずる、是を覺有り觀有りと謂ふ。

云何が「離生の喜樂」なる。若しは欲・悪・不善法を離れて生ずる喜・樂、是を離〔〇〕生の喜樂と名く。

云何が「初禪行を成就し」なる。初禪に五支有り。——覺・觀・喜・樂・一心なり。

云何が『覺』なる。[三二]重覺・究竟覺、諸の憶念する所、法の明の來りて[三三]思惟心に至る、是を覺と名く。

云何が『觀』なる。心の行・順行・微行、津液・微觀、心の微轉、是を觀と名く。

云何が『喜』なる。歡喜・踊躍、是を喜と名く。

云何が『樂』なる。心の忍受する樂・意觸受樂、是を樂と名く。

云何が『一心』なる。心の住、正住、是を一心と名く。

此の五支ある、是を初禪と名く。

chandam//

【三二】 重覺等。尙、後の本文(本卷)中を參照せよ。

【三三】 思惟心。後の文中には(本卷)思惟心語と。

とを欲す」と。是を『勤力』と謂ふ。
云何が『楽行』なる。若し飢ゆれば、飢を縁とするが故に身心の苦受を生じ、若し食の過度ならば、過度を縁とするが故に身心の苦受を生ず。是を『不楽』[二四]と名け、若しは比丘の、足るを知り、善く量を思ひて食して不楽有ること無き、是を『楽行』と名く。
[二五]云何が『[二六]勤めて精進して睡眠せず』なる。若し比丘の、晝に於て或は結加趺坐して思惟し、或は經行して、心に、障礙法を離れ、初夜に若しは經行し若しは思惟して心に障礙法を離れ、中夜には右脇を床に著け、脚を累ねて而も眠り、[二七]起覺想を思惟し、後夜に若しは思惟し、〔若しは〕經行して心に障礙〔ひ〕法を離る。是を勤めて精進して睡眠せずと名く。
云何が「障礙法を離る」なる。障礙法は謂く五蓋なり。佛の說くが如し、「五蓋は是れ心の煩惱にして智慧法を損ず」と。又、佛の次いで說くが如し、「若しは在家も、出家人も、五蓋の心を覆ふこと有りて、若しは自ら義を知り、若しは[二八]他の義を知り、若しは自他の義を知り、若しは過人法あり、若しは欲を離れて知見を增進し、若しは知あり、若しは見あるは、是の處(ことわり)有ること無し。五蓋は善法を遮礙し、纏縛・汚染して結・使を生起す。故に障礙と名く。若し修行清淨にして障礙法を去り、清白明了なる、是を障礙法を離ると名く。
云何が「五蓋を斷ず」なる。離・滅・沒・除、是を五蓋を斷ずと謂ふ。
何をか「心垢」と謂ふ。五蓋は是れ心の煩惱・垢・膩・不明なり。是を心垢と名く。
云何が「損智慧法」なる。五蓋は心を覆ひ、慧力を羸劣にす。是を損智慧法と名く。
云何が「欲・悪・不善法を離れ」なる。欲は謂く五欲なり。復次に、塵は欲に非ず。聖法中には是を[二九]求那と謂ひ、若し憶想染著のある、此は是れ欲なり。[三〇]佛の說くが如し、
[三一]種種の色は欲に非ず。　衆生の想が欲染なり。

【二四】不楽。宋元明の三本には不楽行に作る。
【二五】云何が等。右の區切りまでは、「飲食知足」の解釋文の復、解釋で、謂はゞ傍論であつたから、こゝより再び、禪定の加行の本文に對する本筋の解釋にかへる。
【二六】勤めて等。前の文中には「勤行精進して初め睡眠せず」と。
【二七】起覺想等。毘曇部一、初版 p. 39 の本文及び註等參照。
【二八】他の義等。宋元明、宮内省の四本には「他が、義を知り」と。
【二九】求那。Guṇa. 功德と譯す。蓋し、右、五欲を數々また、五欲功德 Pañcakāmaguṇa と日はるゝに關していふの字である。
【三〇】佛の等。雜48, 20(大正99,1286—II, p. 354b) = 別雜14,16(大正99,284—II, p. 473a) = S.1,4,4(I, p. 22)
【三一】種々の等。巴文左の如し。
Na te kāmā yāni citrāni loke//
Saṅkapparāgo purisassa kāmo//
tiṭṭhanti citrāni tath-eva loke//
ath-ettha dhīrā vinayanti

し、善く量を思ひて食せば則ち瞋恚の、滅して生ぜず、起せず。是を『瞋恚を起さず』と名く。

云何が『梵行を修せむと欲し』なる。梵行は謂く八聖道なり。應に是の念を作すべし、「我は此の食を食し已りて能く梵行を修し、梵行をして久住して、苦の際を盡すことを爲さしめむ」と。是を『梵行を修せむと欲し』と名く。

云何が『故受を斷じて新受を生ぜず』なる。若し飢ゆれば、飢を緣とするが故に身心の苦受を生ず。是を『故受』と名く。

何をか『新受』と謂ふ。若し食の過度ならば過度を緣とするが故に、身心の苦受を生ず。是を『新受』と名く。

若し比丘の足るを知りて而も食し、善く量を思ひて食する、是を『故受を斷じて新受を生ぜず』と名く。

云何が『活命の爲の故に〔二〇〕（食す）』なる。應に是の念を作すべし、「我は此の食を食するは、命根を住せしめ、戒行を護持せむが爲めの故に」と。是を『活命の爲の故に食す』と名く。

云何が『憎愛の金剛を捨し』なる。若し飢ゆれば飢を緣とするが故に、愛煩惱の金剛を生じ、〔二一〕「我は是の如きの飲食を憎む」と憶念し、若し食の過量ならば、過量を緣とするが故に憎煩惱の金剛を生ずらく、「我は是の如きの過度の飲食を憶念せず」と。若し比丘の、足るを知り、善く量を思ひて食し、憎・愛の煩惱の金剛を捨離する、是を『憎愛の金剛を捨離し』と名く。〔二二〕

云何が『利を求めず』なる。若し麁食を以つて足ると爲さず、多食し、嗜味・貪味し、飲食を勸求・悕望する、是を『利を求む』と名け、若し比丘の、麁食を以つて足ると爲し、量食して嗜味〔二三〕せず、貪味せず、飲食を勸求せず、悕望せざる、是を『利を求めず』と名く。

云何が『勤力』なる。若しは是の念を作さく、「我は此の食を食して、身の勤進して、自ら勉めむこ

〔二〇〕食す。前文中にはこれを記せず。
〔二一〕我は等。宋元明の三本には「我は「是の如きの飲食を憎む」と憶念す」と作る。
〔二二〕名くの次。上文には「常に處中行あり」の文あるも、その解釋文を今、ここには記せず。
〔二三〕せず。宋元明の三本により補入。

云何が「[17]飲食は足るを知り」なる。量を知りて而も食し、掉ならず、貢高を生ぜず、養身の爲にせず、身を嚴飾する爲にせず、唯、身を安んぜむと欲し、瞋恚を起さず、梵行を修せむと欲し、故受を斷じ、新受を生ぜず、活命の爲の故に[18]憎愛の金剛を捨して常に處中の行あり、利を求めず、勤力・樂行す。人の患瘡あるとき、藥を以つて之に塗るは愈えしめむと欲する爲なるが如く、比丘も亦爾く、量を知りて而も食して掉を起さず、貢高を生ぜず、乃至、利を求めず、勤力・樂行す。

云何が『掉食』なる。若し是の念を作さく、「我は此の食を食し已りて、當に身・口・意の掉を作すべし」と。是を『掉食』と名く。

云何が『貢高食』なる。若し是の念を作さく、「我は此の食を食し已りて、當に放逸を增長すべし」と。是を『貢高食』と名く。

云何が『養身食』なる。若し是の念を作さく、「我は此の食を食し已りて、當に身を益すべし」と。是を養身食と名く。

云何が『身を嚴飾するの食』なる。若し是の念を作さく、「我は此の食を食して、當に端正、姝好の妙相を成就すべし」と。是を『身を嚴飾するの食』と名く。

若し比丘の、是の念を作さざるらく、「我は此の食を食して、當に身・口・意の掉を作すべく、當に貢高を作すべく、當に養身すべく、當に身を嚴飾すべし」と。是を『不掉食・不貢高・不養身・不嚴身食』と謂ふ。

云何が『[19]但、身を住せしめむと欲し』なる。應に是の念を作すべし、「我は此の食を食して、但、身を住せしめ、不終・不沒ならしめむと欲す」と。是を『但、身を住せしめむと欲す』と名く。

云何が『瞋恚を起さず』なる。若し飢ゆれば、飢を緣とするが故に身心の苦受を生じ、若し食の過度ならば、過度を緣とするが故に、身心の苦受を生ず。若し比丘の、足るを知りて而も〔p. 621a〕食

【一七】 飲食等。同上（毘曇部一、初版 p. 752）。

【一八】 憎愛の金剛。集異門足論二（右出毘曇部一）には「無罪の存濟」とあり、その巴文としては、anavajjatā 等の字があるから、これを何とか vajira(skt. vajra)即ち「金剛」に關係せしめて讀むだものなるべし。

【一九】 但、等。前文には「唯身を安ぜむと欲し」と。

云何が「善知識」なる。謂く、沙門・婆羅門の、持戒・賢善にして貢高・放逸を斷じ、忍辱を成就し、自調・自滅し、自ら涅槃に入り、欲を離れむと欲して欲を盡し、乃至、癡を離れむと欲して癡を盡し、應に染すべきの處に染せず、乃至、應に癡すべきの處に癡せず、應に止すべきの處に止せず、應に受すべきの處に受せず、身・口・意の業は淸淨、正命も淸淨にして、信を[一三]行じ、慚・愧あり、多聞・精進にして念慧を修行し、[一四]八道具足し、戒・定・慧・解脫・解脫知見あり、衣食は足ることを知る、是を「善知」と謂ふ。

何をか識と謂ふ。若し識・善識の知と共行し、慈重行あり、慈究竟行あり、慈を常に敬して離れざる、是を「善知識」と名く。

云何が「善く親厚し」なる。凡夫持戒人の、是れ凡夫持戒人に善く親近し、堅信人の、是れ堅信人に善く親厚し、堅法人の、是れ堅法人に善く親厚し、乃至、阿羅漢の、是れ阿羅漢に善く親厚す。——是の如く自らに等しきの共に親厚する是を「親厚」と名け、若し善知識の若し善く親厚し、隨順して離れず、相ひ親近する、是を「善知識に善く親厚す」と謂ふ。

云何が「善衆」なる。若しは持戒人に依りて持戒を學し、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、彼を解し、若しは定人に依りて定を學し、乃至、[一五]彼の解脫知見人にて解脫知見を學し、心の彼に向ひ、彼を尊上し、彼に傾向し、〔c〕彼を解する、是を「善衆」と謂ふ。

云何が[一六]「諸の根門を攝し」なる。若しは比丘あり、眼に色を見て色相を取らず、能く眼根を起さば、攝して放逸ならざらしめ、惡・不善法及び世を悕望することを斷じて、持戒を愛順し、眼根を守護し、眼根戒を得、乃至、意の法を識して法相を取らず、能く意根を起さば、攝して放逸ならざらしめ、惡・不善法及び世を悕望することを斷じて持戒を愛順し、意根を守護す。——此の如く六觸入にて護微念・解射念を善く成就行し、欲の過患を見、常に自ら意を護る、是を諸の根門を攝すと謂ふ。

【一三】行。宋元明、宮内省の四本にはまた信に作る。
【一四】八道。八聖道のこと。
【一五】彼。依の字の誤に非ざるか。
【一六】諸の根門等。毘曇部一の初(初版p. 74b)の同章下參照。

なり。是を五欲の非已行處に至ると名く」と。

云何が「已行處」なる。若し彼の非威儀行は此れ非已行處にして、〔是を〕捨離・正捨離・緣捨離して親近せず、正に親近せず、緣に親近せざる、是を「已行處」と名く。又、佛の說くが如し、「自國の已行處を行ずべし。若し比丘の自國の已行處にては、魔も便を得ず。比丘よ、何をか自國の已行處と謂ふ。謂く、四念處なり。是れ自國の已行處なり」と。

若し此の威儀行を以つて起し、正起し、受し、正受する、是を威儀・[一〇]已行處を成就すと謂ふ。

云何が「微戒を愛護して懼ること金剛の如く」なる。若し微細の戒も、若しは念作し、起意作し、欲和合作し、若しは彼に於て多く恐畏の相を起すらく、我をして犯すこと莫らしめよ」と。是を微戒を懼ること金剛の如しと謂ふ。

〔ロ〕何をか「戒を受持し」と謂ふ。若し比丘の、一切の戒を離れず、常に一切の戒を持し、常に一切の戒に住し、戒に親近し、持戒して不瑕・不穢・不垢・不懈・不缺に、一切の戒を受持する、是を戒を受持すと謂ふ。

云何が「邪命を[一一]捨して正命を行じ」なる。

云何が「邪命」なる。若しは沙門・婆羅門の、邪命にして自活するなり。謂く諛諂・詐稱し、吉凶を占相し、他が爲に使命し、現相激動し、利を以つて利を求め、此の非法を以つて衣鉢・醫藥・臥具の所須を得、食噉を受用し、此を以つて繫染貪著し、他人を[一二]陵蔑し、非法を堪忍して過患を見ず、出世を知らず。

若し比丘の、是の如き等の邪命を離れて如法に衣鉢・醫藥・臥具の所須を得、食噉を受用し、此を以つて繫染・食著せず、他人を陵蔑せず、非法を堪忍せず、深く過患を見、出世を知る、是を邪命行を斷じて正命を行ずと謂ふ。

【九】沽酒處。口吻の大乘的なるに著眼せよ。

【一〇】已行處。處の字、宋元明の三本によりて補ふ。

【一一】捨して。前文中には「斷じて」。

【一二】陵。宋元明、宮內省の諸本には凌に作る。

卷の第十四 〔p. 619c〕

非問分禪品[一] 第九

因縁の具足すれば卽ち能く定を得、因縁の具せざれば、定を得ること能はず。[二]定を修するには、此の如きの因縁有り。謂く、比丘の解脫戒を愛護し、威儀行、已行處を成就し、微戒を愛護して懼ること金剛の如く、戒を受持し、〔p. 620a〕邪命を斷じて正命を行じ、善知識に善く親厚し、善衆にして諸の根門を攝し、飮食は足るを知り、勤行精進して初め睡眠せずして、障礙法を離る。此の如くむば、比丘は五蓋の心垢・損智慧法を斷ずることを[三]知り、欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、喜樂あり、初禪行を成就し、乃至は、苦樂を斷じ、先に憂喜を滅して不苦・不樂にして、捨・念・淨に、第四禪行を成就す。――

[四]云何が「解脫戒[五]を愛護し」なる。若し戒に隨順して放逸を行ぜず、戒を以つて門と爲し、足と爲し、因と爲して、能く善法を生じ、具足・成就するに、此の戒を以つての故に、名けて持戒と爲し、此の順不放逸を以つて持戒と名け、威儀行を護持する、是を「解脫戒を愛護し」と謂ふ。

云何が「威儀行を成就し[六]」なる。一切の身不善行、一切の口不善行、一切の意不善行、是を非威儀行と名け、身の一切の善行、口の一切の善行、意の一切の善行、是を威儀行を成就すと名く。

復次に、[七]和尙及び和尙の[八]同學を恭敬し、[九]阿闍梨及び阿闍梨の同學を恭欲し、上を恭敬して下座する、是を「威儀行」と名く。

云何が「已行處」なる。六非已行處有り、若しは婬女處・寡婦處・大童女處・不能男處・比丘尼處・沽*酒處、是を六非已行處と名く。又、佛の說くが如し、「比丘よ、他國の非已行處に至ること莫れ。若し他國の非已行處に至らば、魔は其の便を得む。比丘よ、何をか他國の非已行處と謂ふ。謂く五欲

【一】禪品。Dhyānavarga. 前來諸品に同じ、佛教修行哲學として有名な四禪及びその加行 prayoga (payoga) に關して解說するの部門である。また毘曇伽論XII, Jhāna-vibhaṅga; 法蘊足論二、靜慮品十一その他を參照すべし。

【二】因縁等。まづ、例の論母に當る一般を揭げ、もつて、次段に至つて論釋するにあつ。

【三】知り。これの說明は下文にない。よつて考へれば、或はこゝは「……を知斷し」の意なるやも計られず。

【四】云何が等。右の論母的の文に對する以下は解釋分。

【五】解脫戒。? Pātimokkha.

【六】成就し。今は和文として、上の本文中には次の「已行處」の次にこの句を記す。

【七】和尙。Upādhyāya (Upajjhāya) ――毘曇部の一、初版、p.257 等參照。

【八】和尙の同學。同上等參照。

【九】阿闍梨。Ācārya (Ācariya) ――また同上等參照。

る、是を「欲定斷行成就して神足を修す」と名く。

(Ⅱ)精進定・(Ⅲ)心定・(IIII)慧定斷行を成就して神足を修するも亦是の如く廣く說く。

【一〇】定品。巻二八―三〇、諸分定品中をさす。

若しは比丘の、若し此の定に親近し、多く修學して地を離るゝこと半人身ほど上行し、若しは一人身・二人身、乃至、七人身ほど上行するときの如實人の若しは想・憶想・知想、是を「輕想」と名け、若し此の想を身の、微受・正微受・緣微受する——何の身を以つて受するぞ。意身もて受す。——是を「輕想上身行」と謂ふ。

若しは比丘の、此の定に親近し多く修學して若しは地を離るゝこと半多羅樹ほど上行し若しは一多羅樹乃至七多羅樹ほど上行するときの如實人の若しは憶・憶想・知想、是を「輕〔〇〕想」と名け、此の想を身の、微受・正微受・緣微受する——何の身を以つて受するぞ。意身もて受す。——是を「輕想上身行」と謂ふ。

若しは比丘の、此の定に親近し多く修學して、意の欲する所の如く、地を離れて上行し、限量有ること無く、近遠盡く能く[一〇八]往至するときの如實人の若しは想・憶想知想、是を「輕想」と名け、若し此の想を身の、微受・正微受・緣微受する——何の身を以つて受するぞ。意身もて受す。——是を「輕想上身行」と謂ふ。

若し比丘の、彼の樂想・輕想に親近・正親近し、多く修學して、我が心を調伏し寂靜にし、力に由りて自在ならしめむと欲し、意の欲する所の如く、種種の神足を成就し、若しは彼の樂想・輕想に親近・正親近し多く修學し已りて、心を調〔伏〕し、寂靜にし、力に由りて自在にし、意の欲する所の如く、種種の神足を成就することを得、彼の種種の無量の神足を受けて、能く大地を動かし、一を以つて多と爲し、多を以つて一と爲し、若しは近、若しは遠の[一〇九]高出せる牆壁を徹過すること無礙にして、虛空を行くが如く、結跏趺坐して空に遊ぶこと鳥の如く、地に於て出沒すること猶し水を出入するがごとく、水を履むこと地の如く、身より烟焰を出すこと大火聚の如く、日月をも、大威德有りて、手もて能く捫摸し乃至、梵天まで身の、自在を得ること、[一一〇]定品に廣く說くが如くな

【一〇八】往。大正本等は住に作る。宋元明、宮內省の四本もつて正す。

【一〇九】高出。前文(「神」の字釋中を見よ)中には高山とある。或は今の方が誤か。梵巴文等には——梵、Tiraḥ kudyaṃ tiraḥ prākāraṃ parvataṃ 巴、tiro-kuḍḍaṃ tiro-pākāraṃ tiro-pabbataṃ —毘曇部一、初版、p. 181 の本文、下註等參照。

如く、是の如く、比丘の、若し此の身を無喜の樂の津液遍滿し此の身を盡して津液遍滿して減少有ること無きの如實人の若しは想・憶想知想、是を「樂想」と名け、若し想を、身の微受・正微受・緣微受する——何の身を以つて受するぞ、意身もて受す。——是を「樂想上身行」と名く。

復次に、比丘の、苦・樂を斷じ、先に憂・喜を滅して、不苦不樂にして、捨・念淨に、四禪行を成就するとき、若し此の身を淸淨心を以て遍く解するの行あり、此の身を淸淨にして遍ねからざるの處無し。男子・[一〇三]女人の白淨衣を著け、上下具足して、頭より足に至り、足より頭に至り、覆はざる處無きが如く、[一〇四]〔是の〕如く、比丘の若し此の身を淸淨心を以つて遍く解するの行あり、此の身を淸淨にして遍ねからざるの處無きときの如實人の若しは想・憶想知想、是を「樂想」と名け、此の想を身の、微受・正微受・緣微受する——何の身を以つて受するぞ。意身もて受す。——是を「樂想上身行」と名く。

云何が「輕想」なる。若し比丘の身の輕を思惟して輕を知り、輕を解し輕を受し、兜羅綿の[一〇五]輕く、劫鉢の輕くして、平地に布著するに、微風の來り吹かば、便ち地を離るゝことを得るが如く、是の如く、比丘の身の輕を思惟して輕を知り、輕を解し、輕を受し、是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住し、卽ち定を得已りて地を離るゝごと四寸ほど上行するときの如實人の若しは想・憶想・知想、是を「輕想」と名く。

此の想を身の、微受・正微受・緣微受する——何の身を以つて身受するぞ。意身を以つて受す。——是を「輕想上身行」と名く。

若しは比丘の、此の定に親近し、多く修學して、若し地を離るゝこと一尺ほど上行し、若しは二尺ほど上行するときの如實人の若しは想・憶想・知想、是を「輕想」と名け、此の想を身の、微受・正微受・緣微受する——何の身を以つて受するぞ。意身もて受す。——是を「輕想上身行」と謂ふ。

【一〇三】女人。宋元明、宮内省、兩聖護藏本等には人を子に作る。
【一〇四】是の。聖護藏本の一にのみこれを記す。
【一〇五】兜羅。Tūla(?)=cotton.
【一〇六】輕く。原漢譯には、梵文に從つて如くを兜羅、劫鉢の一、一に附するも今は省く。
【一〇七】劫鉢。Karpāsa(Kappāsa)=silk-cotton.以上、毘曇部一、初版、二五五頁等參照。

云何が「樂想」なる。若し比丘の欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂あり、初禪行を成就するに、若し身に、離生の喜樂の津液遍滿し此の身を盡して、離生の喜樂の津液遍滿して減少有ること無し。善澡浴師・善澡浴師の弟子の細澡豆を以つて盛りて器中に著け、水を以つて灑ぎ已りて調適に摶摶に作るに、此の摶の津液遍滿して乾かず濕らず內外和潤するが如く、是の如く、比丘の身も、離生の喜樂の津液遍滿し此の身を盡して離生の喜樂の津液遍滿して減少有ること無きときの如實人の若しは想・憶想知想、是を「樂想」と名く。

此の想を、身の微受し、正微受し、緣微受する——何の身を以つて受するぞ。意身もて受す——是を「樂想上身行」と名く。

復次に、比丘の、覺・觀を滅し、內淨にして淨信あり、覺無く、觀無くして定生の喜樂あり、二禪行を成就するに、若し此の身を定生の喜樂の津液遍滿し、身を盡して定生の喜樂の津液遍滿して減少有ること無し。大陂湖あり、山を以つて圍繞し、水の底より湧出す。水の東・西・南・北方より來らず。陂水の自ら底より湧きて而も出るに、此の陂は津液遍滿して減少有ること無きが如く、是の如く、比丘の、此の身を定生の喜樂の津液遍滿し此の身を盡して定生の喜樂の津液遍滿して減少有ること無きときの如實人の若しは想・憶想、是を「樂想」と名け、此の想を、身の、微受・正微受・緣微受する——何の身を以つて受するぞ。意身もて受す。——是を「樂想上身行」と謂ふ。

復次に、比丘の、喜樂を離れて捨行あり、念・正智あり、身に樂を受す。諸の聖人の「捨・念ありて樂行す」と解するが如く、三禪行を成就するに、若し此の身を無喜の樂の津液遍滿し、此の身を盡して無喜の樂の津液遍滿して減少有ること無し。[九九]優鉢羅池・[一〇〇]波頭摩池・[一〇一]拘牟頭池・[一〇二]分陀利池の、若しは優鉢羅花乃至分陀利花ありて泥より涌出し、未だ能く水を出でざれば、此の花の若しは根、若しは頭を水の津液遍滿し〔一〕根より頭に至り、頭より根に至りて津液遍滿して減少有ること無きが

【九九】優鉢羅。Utpala(uppala)
【一〇〇】波頭摩。Padma or padum
【一〇一】拘牟頭。Kumuda
【一〇二】分陀利。Puṇḍarika.
以上、毘曇部三、p. 360 その他参照。

得、心の住し、正住し、身樂・身調・身輕・身軟・身除ある、是を「身を以つて心を定せしめ」と名く。

乃至、復次に、比丘の、若しは死屍を火聚上に在いて燒き、髮毛・皮膚・血肉・筋脈・骨髓の漸漸に消盡するを見、此の法を觀じ東・西・南・北・四維・上・下に至らず、餘處に至らずして住す。此の法、本、無くして生じ、已に有りて還た滅す。――身の是の如きの法を觀じ、不放逸に觀じて定を得、心の住し正住し、身樂・身調・身輕・身軟・身除を得る、是を身を以つて心を定せしめと名く。

（此の章、乃ち、[九五]三十四科の復次釋有り、自を以つて心を定することを釋す。一支道の說に異らざるが故に之を略す）

云何が[九六]比丘の「心を以つて身を定せしめ」なる。比丘の、心の無常を思惟して心の無常を知り、心の無常を解し、心の無常を受し、是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住し、心樂・心調・心輕・心軟・心除を得るが如き、是を心を以つて身を定せしめ」と名く。

復次に、比丘の、心の苦・惱・癰・箭・味・患・依緣・壞法・不定・不足・可壞・苦・空・無我を觀じ、緣を思惟して緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、卽ち無明緣にして行あり、行緣にしては識あり。……是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住し、心樂・心調・心輕・心軟・心除を得る、是を「心を以つて身を定せめ」と名く。

復次に、比丘の、心の滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受すらく、卽ち無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅す、……是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住し、心樂・心調・心輕・心軟・心除を得る、是を心を以つて定身を定せしめ」と名く。

復次に、比〔p. 619a〕丘の、有欲心は如實に有欲心と知り、無欲心は如實に無欲心と知り、乃至、有勝心・無勝心を如實に知り、是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住し、心樂・心調・心軟・心除を得る、是を「心を以つて身を定せしめ」と名く。

云何が「樂想・[九七]憶想の[九八]上身行」なる。

【九五】三。宋元明の三本には二に作る。

【九六】比丘の。同上三本及び宮內省本、これを缺く。

【九七】憶想。聖護藏乙本には想憶に作る。或は輕想の誤か。

【九八】上身行。上には擧身行に作る。

乃至、是を「明想と共なる心を修して有明心を修す」と名く。

復次に、比丘の、一聚落若しは二、若しは三、乃至十聚落にて淸淨心を以つて遍く解するの行あり。……乃至、是を「明想と共なる心を修して有明心を修す」と名く。

復次に、比丘の、乃至水陸を周匝して淸淨心を以つて遍く解するの行あり。……乃至、是を「明想と共なる心を修して有明心を修す」と名く。

云何が「身を以つて心を定せしめ、心を以つて身を定せしめ」なる。若し比丘の、心身を以つて上・正上・擧・正擧するなり。人の鉢を持して乞食し絡を以つて鉢に盛り、盛・正盛し、擧正擧するが如く、是の如く、比丘の、心身を以つて上・正上・擧・正擧するなり。

云何が比丘の「身を以つて心定せしめ」なる。若し比丘の、身の無常を思惟して無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住し、身樂・身調・身輕・身軟・身除ある。是を「身を以つて〔c〕心を定せしめ」と名く。

復次に、比丘の、身の苦・惱・癰・箭・味・患・依緣・壞法・不定・不滿・可壞・苦・空・無我[九四]なるにて、緣を思惟して緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、即ち無明緣にして行あり、乃至、名色緣にして六入あり、……と。是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住し、身樂・身調・身輕・身軟・身除ある、是を「身を以つて心を定せしめ」と名く。

復次に、比丘の、身の滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受すらく、即ち、無明滅すれば則ち行滅し、乃至、名色滅すれば則ち六入滅し、……是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住し、身樂・身調・身輕・身軟・身除ある、是を定を以つて心を定せしめ」と名く。

復次に、比丘の、知を行じ、樂を行じ、知に住し、樂に住し、知に坐し、樂に坐し、知を取り、樂を取り、是の如く身の樂に住して如實に樂に住することを知る。是の如く不放逸に觀じて定を

【九四】下の心の下には「觀じ」と。

云何が[九三]「有明心を修し」なる。若し比丘の、慧光明と共なる心を修して有明心を修し、明想と共なる心を修して有明心を修するなり。

云何が慧光明と共なる〔こ〕心を修すなる。若し三慧の照明謂く聞・思・修の慧ある、是を慧光明と共なる心と名け、若し〔彼に〕親近・正親近・勤行・修學する、是を「慧光明と共なる心を修して有明心を修す」と謂ふ。

云何が「明想と共なる心」なる。若し比丘の諸の明相を取る――若しは火光・日月光・珠光・星宿光なり。――諸の光明相を取り已り、若しは樹下・露處に光明を思惟して光明を知り、光明を解し、光明を受する如實人の若しは想・憶・想・知想、是を光明想心と名く。若し〔此の〕想と共に生じ、共に住し共に滅する、是を「明想と共なる心」と名け、若し〔彼に〕親近・正親近・勤行・修學する、是を「明想と共なる心を修して有明心を修す」と名く。

復次に、比丘の、若し樹下・露處に於て、清淨心を以つて遍く解するの行あり、有明心の勝なるときの如實人の若しは想・憶想・知想、是を明想心と名け、若し〔此の〕想と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を明想と共なる心と名け、若し〔彼に〕親近・正親近・勤行・修學する、是を「明想と共なる心を修して有明心を修す」と名く。

復次に、比丘の、若しは一樹下、若しは二、若しは三、乃至十樹〔下〕は、清淨心を以つて遍く解する行あり、有明心の勝なるときの……乃至、是を「明想と共なる心を修して有明心を修す」と名く。

復次に、比丘の、若しは一園に於て清淨心を以つて遍く解するの行あり。……乃至、是を「明想と共なる心を修して有明心を修す」と名く。

復次に、比丘の、一園若しは二、若しは三乃至十園に於て清淨心を以て遍く解する行あり。……

【九三】有明心等。前文には、「明了を修行して」と。

と名く。

若し欲向・欲染あり。欲染と共なり、欲染と相應し、多欲を淨と見て過患を觀ず、外の五欲に於て心の散じて色・聲・香・味・觸に著する、是を「散欲」と名く。

云何が「前後、常に想行し」なる。若し比丘の、[九〇]且に行じて、事の如く思惟して善法に入り、出間を出で、涅槃に入り、欲定相應を離る。[九一]且に行じ已りて、日中に行じ、日中に行じ已りて晡に行じ、晡に行じ已りてト[九二]經行し上經行し已りて下經行じ下經行し已りて入室し、入室し已りて初夜、行じ、初夜、行じ已りて夜、行じ、後夜行じ已りて、事の如く思惟して善法に入り、世間を出で、涅槃に入り、欲定相應を離る。是を「前後、常に想行し」と名く。

云何が「最も後の如く、後も前の如く」なる。比丘の、事の如く根・力・覺・禪・解脫・定・入定の前行あるが如く、事の如く、根・力・覺・禪・解脫・定・入定の後行あり、事の如く根・力・覺・禪・解脫・定・入定の後行あり已りて事の如く根・力・覺・禪・解脫・定・入定の前後行ある、是を「前も後の如く、後も前の如く」と名く。

云何が「晝も夜の如く、夜も晝の如く」なる。比丘の若し明想を取りて善く晝想を受くるの後、晝、明想を思惟するが如く、夜も亦是の如く、夜の如く晝も亦是の如くなるが如き、是を「晝も夜の如く、夜も晝の如く」と名く。

云何が「其の心は開悟して覆蓋有ること無く」なる、若し貪欲・瞋恚・愚癡の垢、煩惱垢は障礙・覆蓋・繫縛し、不善行の垢は是れ心を障礙し、心を開かしめず、心を覆蓋し、是れ心を蔽ひ、是れ縛に起向し、心を不淨ならしめ、是れ心を白ならしめず、明了ならざらしむ。是を「心を覆蓋す」と名く。若し心の、貪欲・瞋恚・愚癡の垢無く……乃至、心を明了ならしむ。是を「其の心は開悟して覆蓋有ること無く」と謂ふ。

【九〇】且。旦(あした)の誤字か。

【九一】且に。同上。

【九二】經行。巴、caṅkamati.

せざらしめよ」とて前後常に想行し、前も後の如く、後も前の如く、晝も夜の如く、夜も晝の如く、ならば、其の心は開悟して覆蓋有ること無く、明了を修行して身を以つて心を定せしめ心を以つて身を定せしめ、樂想・輕想の擧身行あり。

云何が「下欲」なる。若し欲の、懈怠と共に相應して、勤進せず、自ら勉めず、善を廢して法を退する、是を「下欲」と名く。

云何が「懈怠」なる。疏[八七]墮・憂懵にして善法に於て廢退する、是を懈怠と名く——若し欲の、懈怠と共に相應して勤進せず、自ら勉めず、善法を廢退する、是を「不欲」と名く。

云何が「高欲」なる。若し欲の、掉と共に相應し、寂靜と共に相應せずして亂行を成就する、是を「高欲」と名く。

云何が掉なる。若し心の亂れて寂靜ならざる、是を掉と名く——若し欲の掉と共に相應し寂靜と共に相應せずして亂行を成就する、是を「高欲」と名く。

云何が「沒欲」なる。若し欲の、睡眠と共に相應して滅念と共ならず、慧を成就せず、善法を別れざる、是を「沒欲」と名く。

云何が[八八]睡なる。煩惱の、未斷にして身の不樂・不調・不輕・不軟・不除なる、是を睡と名く。

云何が眠なる。煩惱の未斷にして心の憂懵・覆蔽なる。是を「眠」と名く。

——若し欲の睡・眠と共に相應して、滅念と相應せず、慧を成就せず、善法を別たざる、是を「沒欲」と名く。

[p. 618c]云何が「散欲」なる。欲染を起し、欲染と共に相應し、多欲を淨と見て過患を觀ず、外の五欲に於に於て心の散じ、色・聲・香・味・觸に著する、是を「散欲」と名く。

云何が欲染なる。若しは[八九]欲欲・欲膩・欲愛・欲喜・欲支・欲網・欲忍・欲得・欲集・欲悕望、是を欲染

【八七】墮。宋元明、宮、二聖護藏本等には惰に作る。

【八八】睡。大正本等には睡眠に作るも、宋元明、宮内省の四本によりて改む。

【八九】欲欲。宋元明、宮内省の四本には欲一つに作る。

復次に、惡・不善法を捨して善法を生じ、現世に樂行して、知・見・慧もて分別して諸の漏を斷じ、一切の苦際を盡す、是を「斷」と名く。

云何が「斷行」[七九]なる。悅・喜・信・捨・念・正智、是を「斷行」と名く。

復次に、欲定斷行成就修神足の、欲・精進・心・慧を除く餘の所隨法たる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・順信・悅・喜・[八〇]心除・信・不放逸・念・心捨・〔身〕除・身進、及び餘の所隨色、是を「斷行」と名く。

云何が「成就して」[八一]なる。欲定の斷及び斷行の共起・正共起・受・正受・正・正生・具足、是を「成就」と名く。

云何が「修」[八二]なる。此の欲定斷行成就神足の親近・正親近・〔○〕依・正依・勤行・修學、是を「修」と謂ふ。

云何が「神」[八三]なる。如意通あり、如意化あり、如意自在にして種種の變を作す。是を「神」と名く。

復次に、比丘の大神力有り、能く無量に變化し、大地を震動し一を以つて多と爲し、多を以つて一と爲し、若しは近き物・遠き物、若しは牆壁・高山を徹過して礙無きこと虛空を行くが如く、結跏趺坐して虛を陵ぐこと鳥の如く、地中に入出すること、水に出沒するが如く、水を履むこと地の如く、身より烟焰を出すこと、大火聚の如く、日月をも威德ありてを手を以つて捫摸し、乃至、梵天まで身の自在を得るが如き、是を「神」と名く。

何をか「足」[八四]と謂ふ。欲定斷行の、是れ足、是れ齊、是れ因、是れ門、是れ用、是れ道、是れ至、[八五]是れ緣、是れ緒、是れ[八六]勢にして神の生じ、正生し起し正起し、出で、正出し、如意正如意なる、是を「足」と謂ふ。

若し比丘の、欲定斷行を成就して神足を修し、「我が欲をして高ならず、下ならず、沒せず、散

【七九】斷行。prahānasaṅkhā=ra (padhānasaṅkhāra)

【八〇】心除。大正等、除を隨に作るは非。宋元明、宮、二聖護藏本によりて改む。

【八一】成就。Samanvāgata (Samannāgata)

【八二】修。巴、bhaveti. 今は和文に改めたるものであるは、本來は、この字は次の「神」、「足」の字釋の次位にゆくべき所とす。

【八三】神。Ṛddhi(iddhi)

【八四】足。pāda.

【八五】至。宋元明、宮、二聖護本等すべて主に作る。

【八六】勢。宋元明、宮內省の四本には熱に作る。

復次に、善を行ずることを欲せず。卽ち自ら思惟すらく「此は我が善とする所に非ず」「好む所に非ず」、「應ずる所に非ず」、「行ずべき所に非ず」、「我が行ずべき時に非ず」、「我は何が故に善を行ずることを欲せざる」と。便ち欲を以つて尊上と爲して定を得、心の住し、正住する、是を「欲定」と名く。

復次に、善法を行ぜむを欲し、卽ち自ら思惟すらく「是は我が善とする所なり」、「是は好む所なり」、「是は應ずる所なり」、「是は行ずべきの所なり」、「是は我が行ずべきの時なり」、「我は善を行ぜむと欲す」と。欲を以つて尊上と爲して定を得、心の住し、正住する、是を「欲定」と名く。

復次に、善欲、生ぜず。善欲の生ぜずし已つて不善欲、生じ、貪欲・瞋恚・愚癡と共に行ず。卽ち自ら思惟すらく「此は我が善とする所に非ず」、「好む所に非ず」、「應ずる所に非ず」、「行ずべき所に非ず」、「我が行ずるの時に非ず」、「我は何の故に善を行ずることを欲せず。乃ち貪欲・瞋恚・愚癡と共に行ずる」と。善欲を尊上して定を得、心の住し、正住する、是を「欲定」と名く。

復次に、不善欲、生ぜず。不善欲の生ぜずし已りて善欲、生じ、貪欲・瞋恚・愚癡と共に行ぜず。卽ち自ら思惟すらく「是は我が善とする所なり」、「是は好む所なり」、「是は應ずるの所なり」、「是は行ずべきの所なり」、「是は我が行ずべきの時なり」、「我は善を行ずることを欲す。貪欲・瞋恚・愚癡と共に行ぜず」と。善欲を以つて尊上と爲して定を得、心の住し、正住する、是を「欲定」と名く。

云何が「斷」[七七]なる。善法を以つて心を引く引・正引・調・正調・止・正止・不失・不移、是を「斷」と名く。

復次に、身心の發起・顯出・越度・堪忍・勤力・進不退、是を「斷」と名く。

復次に、[七八]四正斷を修する、是を「斷」と名く。

【七七】斷。巴、padhāna.

【七八】四正斷。前の四正勤に同じ。

何をか「具足し」と謂ふ。戒衆を未だ具足せざるを具足せしめむと欲し、[六八]乃至、解脫知見衆の未だ具足せざるを具足せしめむと欲する、是を「具足し」と名く。

何をか「修し[六九]」と謂ふ。若し善法に親近し正親近し、依し、正依し、勤行し、修學する、是を「修し」と名く。

何をか「忘れず[七〇]」と謂ふ。善法をして不失不奪にして念を相續し不忘ならしむる、是を「忘れず」と名く。

何をか「增廣せむ[七一]」と謂ふ。善法をして增長廣進せしめむと欲する、是を「增廣せむ」と名く。

乃至、何をか「斷」と謂ふ。惡法を捨て丶善法・淸白法を生じ、現世に樂行して、知・見・慧もて分別して、諸の漏を斷じ、一切の苦際を盡す、是を「斷」と謂ふ。

非問分[七二] 神足品[七三] 第八

問うて曰く、幾神足かある。答へて曰く四あり。謂く、(I)「欲定斷行を成就して神足を修す」、(II)精進定、(III)心定、(IIII)慧定斷行を成就して神足を修す」なり。

云何が「欲[七四]」なる。謂く、欲・重欲・〔欲〕作・欲の發起・欲の顯出・欲の越度・欲得・欲觸・欲解・欲證、是を「欲」と名く。

云何が「定[七五]」なる。若し心の住・正住、是を「定」と名く。

是の如きの欲、是の如きの定、是を「欲定[七六]」と名く。

復次に、貴欲し、向欲し、欲に依り、欲に趣き、欲を增上とし、欲を以つて主と爲して定を得、心の住し、正住する、是を「欲定」と名く。

復次に、善欲を發起して定を得、心の住し、正住し、不善欲を發起して定を得、心の〔住〕住し、正住し、無起欲を發起して定を得、心の住し、正住する、是を「欲定」と名く。

【六八】乃至。戒・定・慧・解脫・解脫智見の中三を乃至するの意。
【六九】修。巴、Bhāvanāya(dat.)
【七〇】忘れず。巴、Asammosāya(dat.)
【七一】增廣せむ。巴、bhiyyobhāvāya vepullāya(dat.)
【七二】非問分の上。上の相應所の註參照。
【七三】神足品。Iddhipādavaṅga.rga.— また同上に、所謂四神足に關して上來同準の解說をした部門で、同段に毘崩伽論IX I ddhipādavibhaṅga; 法蘊足論四、神足品八中等參照。
【七四】欲。chanda.
【七五】定。samādhi.
【七六】欲定。chandasamādhi

何をか[六〇]「欲を起し」と謂ふ。欲し、重欲し、欲作し、欲起し、欲の顯出し、[六一]欲の越度し、欲を得し、欲を觸し、欲を證する、是を「欲を起す」と名く。

何をか[六二]「自ら勉め」と謂ふ。堪忍力厲して、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲する、是を「自ら勉む」と名く。

何をか[六三]「勝進し」と謂ふや。身心の發起・顯出・越度・堪忍・不退・勤力・修進、是を進と名け、此の進の起り、正起し、正生し、觸證する、是を「勝進し」と名く。

何をか[六四]「攝心するの」と謂ふ。心・意・識、六識身・七識界、是を心と名け、是の心を攝し、正攝し、〔p. 617a〕緣攝し、勸厲し、正勸勉し、踊躍・勸喜する、是を「攝心し」と名く。

何をか[六五]「正」と謂ふ。正因・正思惟・正方便、是を正と名く。

何をか[六六]「斷」と謂ふ。惡法を捨てゝ善法・淸白法を生じ、現在に樂行して、知・見・慧もて分別して、漏を斷じ、一切の苦際を盡す、是を斷と名く。

「惡・不善法の已に生ぜるを必ず當に斷ずべしと、欲を起し、自ら勉め、勝進し、攝心するの正斷」も亦是の如く說く。但、已に生ぜるを異と爲す。

何をか「善法の未だ生ぜざるを生ぜしめむと欲し」と謂ふ。身・口・意の善行、是を善法と名く。乃至、何をか「斷」と謂ふ。惡法を捨てゝ善法・淸白法を生じ、現世に樂行して、知・見・慧もて分別して漏を斷じ、一切の苦際を盡す、是を「斷」と名く。

何をか「善法の生じ已れるを住せしめむと欲し」と謂ふ。身・口・意に善を行ずる、是を善法と名く。乃至、復次に、[六七]十正法――正見乃至、正智及び餘の隨正法、是を善法と名く――此の如きの善法の生じ、和合するを「我をして住して不失・不忘ならしめ我を究竟せしめよ」と、是を「善法の生じ已りて住す」と名く。

【六〇】欲を起す。巴、chanda=m janeti.

【六一】越度。宋元明、宮内省の四本には越を起に作る。但し下文中參照のこと。

【六二】自ら勉む。巴、vāyam=ati.

【六三】勝進し。巴、viriyam ārabhati.

【六四】攝心する。巴、cittam paggaṇhāti.

【六五】正。巴 Samma (Skt. Samyak.)

【六六】斷。巴、padhāna(skt. pradhāna.)

【六七】十正法。上の十邪法に照して知るべし。

工の熱鐵を鍛うるが如し、　流星の滅して象無く、
陶冶して漸く無に歸すれば、　相を求むるも信に得難し。
雨の海中に投ずるが如し、　本の渧の豈に復、存せむや。
解脱も亦何か有らむ。　空の故に湛然として樂し。
身を捨し、想を離れ　諸の受も覺する所無く、
所行盡く寂靜に、　滅も亦、自然に滅す。

非問分[五六]　正勤品[五七]　第七

問うて曰はく、幾正勤かある。答へて曰はく、四あり。

何をか四と謂ふ。(Ⅰ)若しは比丘あり、惡・不善法の未だ生ぜざるを生ぜざらしめむと欲して、欲を起し、自ら勉め、勝進し、攝心する正斷、(Ⅱ)惡・不善法の已に生ぜるを必ず當に斷ずべしと、欲を起し、自ら勉め、勝進し、攝心する正斷、(Ⅲ)善法の未だ生ぜざるを生ぜしめむと欲して、欲を起し、自ら勉め、勝進し攝心するの正斷、(Ⅳ)善法の已に生ぜるを住せしめ、具足し、修して忘れず、增廣せむと欲して、欲を起し、自ら勉め、勝進し、攝心するの正斷なり。

云何が「惡法の未だ生ぜざるを生ぜざらしめむと欲し」なる。身口・意の惡行。是を惡・不善法と名く。復次に、十不善業道、是を惡・不善法と名く。復次に[五八]不善攝・不善根の相應、不善根所起の非緣・非受なる、是を惡・不善法と名く。復次に、貪欲・瞋恚・愚癡・忿怒・怨嫌・妄瞋・嫉妬・慳惜・諛諂・欺僞・匿惡・無慚・無愧・自高・諍訟・强毅・放逸・我慢・增上慢等、是を惡・不善法と名く。復次に[五九]十邪法、是を惡・不善法と名く。——是の如き惡・不善法の未だ生ぜず、未だ起らず、未だ和合せざるを、『我をして、生ぜず、起さず、和合せざらしめよ』と、是を「惡・不善法の未だ生ぜざるを生ぜざらしめむと欲す」と名く。

【五六】非問分の上。原漢譯には「舍利弗阿毘曇論」の字を冠す。

【五七】正勤品。Sammyakpradhānavarga. 正勤は新譯には正勝又は正斷といふ。佛敎修行哲學項目の一で、今はそれに關して前來諸品同樣の解説をなす所である。また、Vibhaṅga VIII Sammāppadhāna-Vibhaṅga; 法蘊足論三、正勝品第七その他參照のこと。

【五八】不善根。貪・瞋・癡の三不善根のこと。卷六、不善根品中等參照。

【五九】十邪法。邪見、邪思惟(邪志)、邪語、邪業、邪命、邪進(邪精進)、邪念、邪定、邪智、邪解の十か—毘崩伽論 p. 391—2; その他參照。

復次に、比丘の、一切の行を厭離して甘露門に入る。是れ寂靜なり。此れ勝なり。一切の行を滅して愛滅・涅槃あり……乃至、是を内外法にて觀法行ありと名く。

及び餘の諸行——四大色身の攝する法と受と心とを除く及び餘の一切の内外の法若しは一處の内外の法にて、事の如く思惟して定あり、心の住し、正住する是を内外法にて觀法行ありと名く。

云何が「内外法にて」[五五]なる。法の若しは受若しは不受なる、是を「内外法」と名く。

餘の義は上に說くが如し。

是の如く比丘の法にて緣起法行を觀じ、法にて緣滅法行を觀じ、是の如く比丘の起滅法行を觀じて「法有り」との内念を起し、智を以つてし明識を以つてして法に依らず、無所依行ありて世を受せず。

是の如く比丘の、内法に觀法行あり、勤めて精進すれば正智・正念あり。世の貪憂を除く。外法・内外法も亦是の如し。

如實に四念處を修學すれば、當に是の怖有るべし「一切の世に於て常に無我行あらば、心、高からず、下ならず。亦住處無し。若し我想・衆生想・命想・人想有らば、是の處(ことわり)有ること無し」と。常に應に第一空行あるべし。若し此の後心を得て無益を作さされば、色・聲・香・味・觸に受せず、著せず。三世に於て無礙に、欲界に於て解脫し色界・無色界に於て解脫し、滅して復、生ぜず。此は是れ苦の際なり。春末の月の極盛熱の時は雲霧有ること無く、少水の瓦器に在るも便ち速かに煎滅するが如く、是の如く、比丘の若し後心を得て無益を作さされば、色・聲・香・味・觸に受せず、著せず。乃至、滅して復、生ぜず。此を是れ苦の際と名く。

風の猛焰を吹くが如し。　滅するの時、處を移さず。
覺を以つて名色を扇ぐも、　盡きて亦、至る所無し。

【五五】内外法にて。巴、Ajjhattabahiddhā dhammesu.

外の法にて事の如く、滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受すらく、即ち無明滅すれば則ち行滅し、乃至、生滅すれば則ち老・死・憂・悲・苦・惱・衆苦聚の集滅す……乃至、是を外法にて觀法行ありと名く。

復次に、比丘の、我が內に欲有らば如實に我が內に欲有りと知り、我が內に欲無ければ、如實に我が內に欲無しと知り、欲の未だ生ぜざる如きは如實に欲の未だ生ぜずと知り、欲の當に生ずべきが如きは如實に欲の當に生ずべしと知り、欲の現に生ずる如きは如實に當に斷ずべしと知り、欲の斷じ已れる如きは如實に復、生ぜずと知り、瞋恚・愚癡・睡眠・掉悔・疑も亦是の如く……乃至、是を內外法にて觀法行ありと名く。

復次に、比丘の、我が內に、眼の色を識して欲・恚有らば如實に我が內に、眼の色を識して欲・恚有りと知り、我が內に、眼の色を識して欲・恚無ければ如實に我が內に、眼の色を識して欲・恚無しと知り、眼の色を識して未だ欲・恚を生ぜざる如きは如實に未だ生ぜずと知り、眼の色を識して欲・恚を生ぜざるが如きは如實に當に生ずべしと知り、眼の色を識して現在に〔已〕欲・恚を生ずべきが如きは如實に當に斷ずべしと知り、眼の色を識して已に欲・恚を斷ぜる如きは如實に復、生ぜずと知る。耳・鼻・舌・身・意も亦是の如し……乃至、是を內外法にて觀法行ありと名く。

復次に、比丘の、我が內に[五四]念覺有らば如實に我が內に念覺有りと知り、我が內に念覺無ければ如實に我が內に念覺無しと知り、念覺の未だ生ぜざる如きは如實に未だ生ぜずと知り、念覺の未だ生ぜざるが如きは如實に當に生ずべしと知り、念覺の生じ已れる如きは如實に具足すること有りと知る。餘の六覺を修するも亦是の如し。乃至、是を內外法にて觀法行ありと名く。

復次に、比丘の、如實に苦・苦の集・苦の滅・苦滅の道を知り、如實に漏・漏の集・漏の滅・漏滅の道を知る……乃至、是を內外法にて觀法行ありと名く。

【五四】念覺等。以下は七覺支について論す。

て緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、卽ち無明緣にして行あり、乃至、生緣にして老・死・憂・悲・苦・惱・衆苦聚の集あり……乃至、是を外法にて觀法行ありと名く。

　復次に、比丘の、四大色身の攝する法と受と心とを除く及び餘の外の一切の法若しは一處の外法にて事の如く、滅を思惟して滅を知り、滅を解し、受すらく〔p. 616a〕卽ち無明滅すれば則ち行滅し、乃至、生滅すれば則ち老・死・憂・悲・苦・惱・衆苦聚の集滅す……乃至、是を外法にて觀法行ありと名く。

　及び餘の諸行——四大色身の攝する法と受と心とを除く一切の外法若しは一處の外法を事の如く思惟して定を得、心の住し、正住する、是を外法にて觀法行ありと名く。

　云何が「外法にて」なる。法の非受なるなり。謂く、外・非內・非緣・非自性・非己分なる、是を外と名く。

　餘の義は上に說くが如し。

　云何が比丘の「內外法にて觀法行あり」なる。比丘の、四大色身の攝する法と受と心とを除く一切の內外の法若しは一處の內外の法にて事の如く、無常を思惟して無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住するが如し。是を內外法にて觀法行ありと名く。

　復次に、比丘の、四大色身の攝する法と受と心とを除く餘の一切內外の法若しは一處の內外の法にて事の如くに苦・惱・癰・箭・味・患・依緣・壞緣法・不定・不滿・可壞・苦・空・無我を思惟し、緣を思惟して緣を知り、緣を解し緣を受すらく、卽ち無明緣にして行あり、乃至、生緣にして老・死・憂・悲・苦・惱・衆苦聚の集あり……乃至、是を內外法にて觀法行ありと名く。

　復次に、比丘の、四大色身の攝する法と受と心とを除く及び餘の一切の內外の法若しは一處の內

云何が「比丘の內法にて觀法行あり」なる。若し比丘の、四大色身の攝する法と受と心との若し餘の一切の內法若しは一處の內法にて、無常を思惟して無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し正住する、是を內法にて觀法行ありと名く。

復次に、比丘の、四大色身の攝する法と受と心との若し餘の一切の內法若くは一處の內法にて、苦・憂・患・癰・箭・味・病・依緣・壞法・不定・不滿・可壞・苦・空・無我を思惟し、緣を思惟して緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、卽ち無明緣にして行あり、乃至、生緣にして老・死・憂・悲・苦・惱・衆苦聚の集あり……乃至、是を內法にて觀法行ありと名く。

復次に、比丘の、四大色身の攝する法と受と心とを除く及び餘の一切の內法若しは一處の內法にて滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受すらく、卽ち無明滅すれば則ち行滅し、乃至生滅すれば則ち老・死・憂・悲・苦・惱・衆苦聚滅す……乃至、是を內法にて觀法行ありと名く。

及び餘の諸行――四大色身が所攝の法と受と心とを除く、若しは一切の內法若しは一處の內法と思惟して、定を得、心の住し、正住する、是を內法にて觀法行ありと名く。

云何が「內法にて」なる。法の受なるなり。謂く內、是れ內、是れ緣、是れ自性、是れ己分なる、是を內と名く。餘の義は上說の如し。

云何が比丘の「外法にて觀法行あり」なる。比丘の、四大色身の攝する法と受と心とを除く、若しは外の一切法若しは外の一處法にて、事の如くに無常を思惟して無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住するが如し。是を外法にて觀法行ありと名く。

復次に、比丘の、四大色身の攝する法と受と心とを除く餘の外の一切の法若しは一處の外法にて、事の如く、苦・惱・癰・箭・味・患・依緣・壞法・不定・不滿・可壞・苦・空・無我を思惟し、緣を思惟し

思惟して無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く不放逸にして定を得、心の住し、正住する如し。是を內外心にて觀心行ありと名く。

復次に、比丘の、若しは一切の內外心、一處の內外心にて苦・患・癰・箭・味・病・依緣・壞法・不定・不滿・可壞・苦・空・無我を觀じ、緣を思惟して緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、即ち無明緣にして行あり、行緣にして識あり……乃至、是を內外心にて觀心行ありと名く。

復次に、比丘の、一切の內外心、一處の內外心にて、滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受すらく、即ち無明滅すれば則ち行滅し行滅すれば則ち識滅し……乃至、是を內外心にて觀心行ありと名く。

復次に比丘の有欲心は如實に有欲心と知り、無欲心は如實に無欲心と知り、乃至、有勝心は如實に有勝心と知り、無勝心は如實に無勝心と知り、是の如く不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を內外心にて觀心行ありと名く。

及び餘の諸行――一切の內外心若しは一處の內外心を思惟して定を得、心の住し、正住する、是を內外心にて觀心行ありと名く。

云何が「內外心にて」なる。心の若しは受・非受なるなり。

餘の義は上に說くが如し。是の如く、比丘の心法の緣起行を觀じ、是の如く緣滅心行を觀じ、比丘の、緣起滅心行を觀じ「心有り」との內念を起し、智を以つてし、明識を以つてして心に依らず、無所依行無ありて世を受せず。是の如く、比丘の、內心にて觀心行あり、勤めて精進せば正智・正念ありて世の貪憂を除く。外心・內外心も亦是の如し。

云何が「法にて觀法行あり」なる。法とは謂く四大色身の攝する法と受と心とを除く〔三〕及び餘の若しは色・非色・可見・不可見、有對・無對、聖・非聖、是を法と謂ふ。

名く。

及び餘の法行――一切の內心若しは一處の內心を思惟にして、定を得、心の住し、正住する是の如きは比丘の內心にて觀心行あるなり。

云何が「內心にて」なる。若し心の受なるなり。謂く、內、是れ內、是れ緣、是れ自性、是れ已分なる、是を內と名く。

餘の義は上に說くが如し。

云何が比丘の「外心にて觀心行あり」なる。比丘の、一切の外心若しは一處の外心にて無常を思惟して無常を知り、無常を解し、無常を受く、是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住するが如し。是を外心にて觀心行ありと名く。

復次に、比丘の、一切の、外心若しは一處の外心にて苦・患・癰・箭・味・病・依緣・壞法・不定・不滿・不壞・苦・空・無我を思惟し、緣を思惟して緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、即ち無明緣にして〔b〕行あり、行緣にして識あり……乃至、是を外心にて觀心行ありと名く。

復次に、比丘の、一切の外心、一處の外心にて滅を思惟して滅を知り、滅を解し滅を受すらく、即ち無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し……乃至、是を外心にて觀心行ありと名く。

及び餘の心行――一切の外心、一處の外心を思惟して定を得、心の住し、正住する、是を外心にて觀心行ありと名く。

云何が「外心にて」なる。心の非受なるなり。謂く、外非內・非緣・非自性・非已分なる、是を外と名く。

餘の義は上に說くが如し。

云何が比丘の「內外心にて觀心行あり」なる。比丘の、一切の內外心、一處の內外心にて無常を

若しは有染の樂受を受すれば、我は有染の樂受ありと知り、若しは〔P. 615a〕無染の樂受を受すれば、我は無染の樂受ありと知り、苦受・不苦不樂受も亦是の如し。是を內外受にて觀受行ありと名く。及び餘の諸行――一切の內外の受若しは一處の內外の受を思惟して定を得、心の住し、正住する、是を內外受にて觀受行ありと名く。

云何が「內外受にて」なる。受若しは非受なる、是を內外と名く。

餘の義は上に說くが如し。

是の如く、比丘の、受法の緣起行を觀じ、受法の緣滅行を觀ず、是の如く、比丘の受法の[五三]起滅行を觀じ、「受有り」との念あり、內に智を以つてし、明識を以つてして受に依らせず、無所依の行ありて、一切の世を受せず。是の如く、比丘の內受にて受行あり、勤めて精進せば正智・正念ありて、世の貪憂を除く。外受・內外受も亦是の如し。

云何が「心にて觀心行あり」なる。

云何が心なる。若しは心・意・識、六識身、七識界、是を心と名く。

云何が「內心にて觀心行あり」なる。比丘の、一切の內心、若しは一處の內心にて無常を思惟して無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住するが如し。是を內心にて觀心行ありと名く。

復次に、一切の內心若しは一處の內心にて苦・患・癰・箭・味・病、依緣・壞法・不定・不滿・可壞・苦・空・無我を思惟し、緣を思惟して緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、即ち無明緣にして行あり、行緣にして識あり……乃至、是を內心にて觀心行ありと名く。

復次に、比丘の、一切の內心若しは一處の內心にて、滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受すらく、即ち無明滅すれば則ち行滅し行滅すれば則ち識滅し……是を比丘の內心にて觀心行ありと

【五三】起滅行。Samudayavayadhamma.

可壞・苦・空・無我を思惟し、緣を思惟して緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、無明緣にして行あり、乃至、觸緣にして受あり、……乃至、是を外受にて觀受行ありと名く。

復次に、比丘の、一切の外受若しは一處の外受にて、滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受すらく、卽ち無明滅すれば則ち行滅し、乃至、觸滅すれば則ち受滅し、……。是を外受にて觀受行ありと名く。

及び餘の諸行の一切の外受若しは一處の外受を思惟して定を得、心の住し、正住する、是を外受にて觀受行ありと名く。

云何が「外受にて」なる。行受の非受なる、謂く、外・非內・非緣・非自性・非己分なる、是を外と名く。

餘の義は上に說くが如し。

云何が「內外受にて觀受行あり」なる。比丘の、一切の內外受若しは一處の內外受にて無常を思惟して無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を內外受にて觀受行ありと名く。

復次に、比丘の、若しは一切の內外受若しは一處の內外受にて苦・患・癰・箭・味・病・依緣・壞法・不定・不滿・可壞・苦・空・無我を思惟し、緣を思惟して、緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、卽ち無明緣にして行あり、乃至、觸緣にして受あり、……乃至、是を內外受にて觀受行ありと名く。

復次に、比丘の、一切の內外の受若しは一處の內外の受にて滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受すらく、卽ち無明滅すれば、……乃至、觸滅すれば則ち受滅し、……乃至、是を內外受にて觀受行ありと名く。

復次に、比丘の、若しは樂受を受すれば、我は樂受ありと知り、苦受・不苦不樂受も亦是の如く、

を受せず。是の如く、比丘の、內身にて觀身行あり、勤めて精進せば、正智・[五二]正念ありて世の貪憂を除く。外身、內外身も亦是の如し。

云何が「受にて觀受行あり」なる。受とは謂く、六受——眼觸受、乃至、意觸受、是を受と名く。

云何が「內受にて觀受行あり」なる。比丘の、一切の內受若しは一處の內受にて、無常を思惟して無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住するが如し。是を內受にて觀受行ありと名く。

復次に、比丘の、一切の內受若しは一處の內受にて、苦患・癰・箭・味・病・依緣・壞法・不定・不滿・可壞・苦・空・無我を思惟し、緣を思惟して緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、即ち無明緣にして行あり、乃至、觸緣にして受あり、……乃至、是を內受にて觀受行ありと名く。

復次に、比丘の、若しは一切の內受、若しは一處の內受にて、滅を思惟して、滅を知り、滅を解し、滅を受すらく、即ち無明滅すれば則ち行滅し、乃至、觸滅すれば〔○〕則ち受滅す、……乃至、是を內受にて觀受行ありと名く。

及び餘の諸行——一切の內受、一處の內受を思惟して定を得、心の住し、正住する、是を內受にて觀受行ありと名く。

何をか「內受にて」と謂ふ。內は謂く、是れ內、是れ緣、是れ自性、是れ己分、是を內と名く。餘の義は上に說くが如し。

云何が比丘の「外受にて觀受行あり」なる。比丘の、一切の外受若しは一處の外受にて無常を思惟して無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を外受にて觀受行ありと名く。

復次に、比丘の、一切の外受、若しは一處の外受にて苦・患・癰・箭・味・病・依緣・壞法・不定・不滿・

【五二】正。宋元明、宮內省、兩聖護藏の何れにも、又、上文中にも缺く。下も同ず。

る。……乃至、是を內外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、若しは死屍の骨節相連り、餘は血皮に覆はれ、筋脈未だ斷ぜざるを見る。……乃至、是を內外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、若しは死屍の、骨節相連り、血肉已に離れて筋脈、未だ斷ぜざるを見る。……乃至、是を內外身にて〔已〕觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、若しは死屍の骨節已に壞するも未だ本處を離れざるを見る。……乃至、是を內外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、若しは死屍の、骨節斷壞して本處を遠離し、脚脛・[四八]膊髀・髖脊・脇肋・手足・肩臂・頂髑髏の諸骨の各自、處を異にするを見る。……乃至、是を內外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、若しは死屍の骨節の、久しく故りて色白きこと貝の如く、色の靑きこと、鴿の朽敗、碎壞せるが如きを見る。……乃至、是を內外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、若しは死屍の火聚の上に在りて髮毛・皮膚・血肉・筋脈・骨髓を燒き、一切の髮毛乃至骨髓の漸漸に消盡するを見、此の法を觀じて東方・南・西・北方・四維・上下の處に住し、此の法、本無くして而も生じ、已に生じて還た滅す。……乃至、是を內外身にて觀身行ありと名く。

及び餘の一切の諸行――四大色身の攝する法若しは一處の內外の四大色身の攝する法を思惟して定を得、心の住し、正住する、是を內外身にて觀身行ありと名く。

云何が「內外身にて」なる。〔身の〕若しは受、若しは非受なるなり。是を「內外身にて」と名く。

餘の義は上に說くが如し。

比丘の、身法の[四九]緣起行を觀じ、身法の[五〇]緣滅行を觀じ、比丘の、是の如く身法の緣起・緣滅行を觀じ、[五一]「身有り」と內念を起し、智を以つてし、明識を以つてして身に依らず、無所依行ありて世

【四八】膊。宋元明、宮內省の四本には腨に作る。

【四九】緣起行。巴、?Samudayadhamma.

【五〇】緣滅も。巴、?Vayadhamma.

【五一】「身有り」と等。巴、Atthi kāyo ti vā pan'assa sati paccupaṭṭhitā hoti.

定を得、心の住し、正住する、是を外身にて觀身行ありと名く。

云何が[四五]「外身にて」なる。謂く、身の非受・非内・非緣生・非自性・非己分なる、是を外と名く。餘の義は上に說くが如し。

云何が[四六]「内外身にて觀身行あり」なる。比丘あり、一切の内外の四大色身の攝する法若しは一處の内外の四大色身の攝する法にて、無常を觀じて無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住に住するが如し、是を内外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、一切の内外の四大色身に攝する法若しは一處の内外の四大色身に攝する法にて、若しは苦痛・癰・箭・著味・病・依緣・壞法・不定・不滿・可壞・苦・空・無我を觀じ、緣を思惟して緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、無明緣にして行あり、乃至、觸緣にして受あり、……乃至、是を内外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、一切の内外の四大色身の攝する法、若しは一處の内外の四大色身の攝する法にて、滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受すらく、無明滅すれば行滅し、乃至、名色滅すれば則ち六入滅し、……乃至、是を内外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、若しは死屍の棄てて塚間に在るを見ること、若しは一日より三日に至り、……乃至、是を内外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、若しは死屍の棄てて塚間に在るを見ること、若しは一日より三日に至り、膖脹・青瘀す。……乃至、是を内外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、若しは死屍の棄てて塚間に在るを見ること、若しは一日より三日に至り、烏・鳥・虎・狼、[四七]若干の諸獸の爲に食噉せらる。……乃至、内外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、若しは死屍の骨節相連り、青赤爛壞し、膿血不淨にして臭穢、惡むべきを見

【四五】外身にて。巴、Bahiddhā Kāye (loc.)

【四六】云何が等。また上記諸經入を參照すべし。

【四七】若干。宋元明、宮内省の諸本には野干に作る。

復次に、若し身心の發起・頻出・越度・不退なる、是を「勤めて精進し」と名く。

云何が「正智あり」[三六]なる。謂く、如實人の、解射の方便を知見する、是を「正智あり」[三七]と名く。

云何が「念あり」[三八]なる。謂く、如實人の、憶念・微念・緣念の住して不忘、相續し、念の不失・不[三九]集なる、是を「念あり」と名く。

云何が「世間の」[四〇]なる。二種の世間有り。衆生世間と行世間となり。五道に生を受くる、是を衆生世間と名け、五受陰、是を行世間と名く。

云何が「貪」[四一]なる。貪不善根、是を「貪」と名く。

云何が「憂」[四二]なる。意觸の苦受、是を「憂」と名く。

云何が「除くべし」[四三]なる。覆背・解斷・吐出、是を「除くべし」と名く。

[四四]云何が「外身にて觀身行あり」なる。若し比丘あり、外の一切の四大色身の攝する法若しは外の一處の四大色身の攝する法にて無常を思惟して無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く、不放逸に觀じて定を得、心(の住し、)正住する、是を外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、一切の外の四大色身が所攝の法若しは一處の外の四大色身が所攝の法にて、若しは苦・痛・癰・箭・著味・病・依緣・壞法・不定・不滿・可壞・苦・空・無我を觀じ、緣を思惟して緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、卽ち無明緣にして行あり、乃至、名色緣にして六入あり、……乃至、是を外身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、外の一切の四大色身が所攝の法、外の一處の四大色身が所攝の法にて滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受すらく[c. 614a]、無明滅すれば則ち行滅し、乃至、名色滅すれば則ち六入滅し、……乃至、是を外身にて觀身行ありと名く。

及び餘の諸行——外の一切の四大色身が所攝の法若しは外の一處の色身が所攝の法を思惟して、

【三六】正智あり。巴、Sampajāno(nom.)

【三七】正智。大正本等、こゝには智を作るも、上文及び、宋元明、宮內省の諸本によりて改む。

【三八】念あり。巴、Satimā(nom.)

【三九】不集。宋元明、宮內省、二聖護藏の諸本には「奪」に作る。

【四〇】世間の。巴、Coke(loc.)

【四一】貪。巴、Abhijjhā.

【四二】憂。巴、Domanassa.

【四三】除く。巴、Vineyya.(pot. 3rd sg.)

【四四】云何が以下。又、中、增一、巴の中、長(何れも上出)の諸文を參照せよ。

しと觀ず。火の薪に緣りて燃ゆることを得、薪無ければ則ち滅するが如く、是の如く、比丘あり、身の食住・食集にして、食に緣りて住することを得、食無ければ住せずと觀ず。佛說の如し。

身の所集の苦を觀ずるに、　一切、皆、食に緣る。
若し能く食を除滅すれば、　則ち是の諸の苦無し。
是の如く、過患にして、　食の是れ、苦を成就するを知り、
比丘の食を滅し已らば、　必定して涅槃を得、

と。是を內身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、身の盡くの[三〇]空・俱空を觀じ、〔〇〕念を以つて遍知・解行し、……乃至、是を內身にて觀身行ありと名く、

復次に、比丘あり、身は是れ癰・瘡なり。此の身に九瘡津漏門有り。若し出・津・漏する所は皆、是れ不淨なりと觀ず。乃至、摩訶迦葉の說くが如し、四大色身は是れ衰耗・相違・津漏にして乃至、壽命短促なりと。……乃至、是を內身にて觀身行ありと名く。

及び餘の諸行――一切の內の四大色身が所攝法、一處の內の四大色身が所攝の法を思惟して定を得、心の住し、正住する、是を內身にて觀身行ありと名く。

[三一]云何が「[三二]內身にて」なる。身の若し受なるあり。謂く、若し內緣生、自性・己分なる、是を內と名く。

云何が「[三三]觀」なる。謂く、如實人の微觀・正覺・緣觀・解、是を觀と名く

云何が「[三四]行」なる。是の如きの微觀を成就して法に違せず、護持するの行・微行、是を行と名く。

云何が「[三五]勤めて精進し」なる。謂く、如實人の若し法に順じて多行・精進なる、是を「勤めて精進し」と名く。

【三〇】空・俱空。上出の諸經文には？

【三一】云何等。以下については、法蘊足論の念住品中參照。

【三二】內身にて。巴、ajjhat=taṃkāye

【三三】觀。巴、Anupassi (n=om.)

【三四】行。巴、Viharati

【三五】勤めて等。巴、Ātāpi (n m.)

滅を思惟して滅を知り、滅を解し、滅を受すらく、卽ち無明滅すれば則ち行滅し、乃至、名色滅すれば則ち六入滅し、……乃至、是を內身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘の、[24]行樂ありて行樂を知り、乃至臥樂ありて臥樂を知り、身の住樂を如實に知り、……乃至、是を內身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘の、去來・屈申・廻轉を正知して[25]行じ、乃至、眠・覺・語・默を正知して行じ、……乃至、是を內身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘の、出息の長きは長しと知り、入息の長きは長しと知り、出息の短きは短しと知り、入息の短きは短しを知り、旋師の、繩を挽くとき、繩の長きは長しと知り、繩の短きは短しと知るの如く、……乃至、是を內身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、頂より足に至り、足より頂に至りて諸の不淨を見、身中に、髮・毛・爪・齒・薄皮・厚皮・血・肉・筋・脈・脾・腎・心・肝・大小穢藏・便利・涕・唾・膿・血・脂肪・腦・膜・淚・汗・髓・骨有るを觀ず。淨眼人の二門の倉に於て諸穀——胡麻・大豆・小豆・豍豆・大麥・小麥を觀見するが如く、是の如く、比丘あり、身中にて頂より足に至り、足より頂に至り、諸の不淨を具するを觀ず。……乃至、是を內身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、身の諸大——此の身中に唯、[26]地・水・火・風大有るを觀ず。巧なる屠牛師・屠牛師の弟子の、牛を屠するや、[27]四分と爲し、若しは坐・立・行・住——但、四分を見るが如く、是の如く、比丘あり、此の諸大——此の身に唯、地大、水・火・風大有り。然れども此の諸大は但、[28]水火に依りて各相違を生じ、飮食が長養して羸劣・無力・不堅・無强・念・念不住なることを觀じ、……乃至、是を內身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘あり、[29]身の食住・食集にして、食に緣りて住することを得、念無ければ住すること無

【二四】行樂等。聖護藏兩本等にやゝ異文もある如くなれど要するに文面に出入ありしなるべく、たゞ行住坐臥の樂に關言せるは明かならむ。中、增一、巴中等の諸經文を參照すべし。

【二五】行じ。この論にては他本に「住し」(viharati) といふ所(勿論、本論でも記すれど)といふ所を「行じ」と記すること多し。

【二六】地大等。中阿含には六大にして說く。

【二七】四分等。巴、中、その他の諸傳は何れも、屠殺した牛を町の四辻にさらげ出して坐するやうに記すが、今の論の文は原文の誤解に出でしもなるべく、この文のまゝでは解釋、困難ならん—— M. vol. I. p. 58, D. II. p. 294; 中—大正 I, p. 583 b; 增一、大正 II, p. 568a 等を參照せよ。

【二八】水火。宋元明、宮內省の四本には「火性」、兩聖護藏本には「大性」と記す。

【二九】身の等。食關係のこと、上出諸經文には外身觀中にのぶ。

是を「涅槃を得」と謂ふ。

何をか「[一八]五蓋を斷じ」と謂ふや。若し[一九]五蓋を滅する、是を五蓋を斷ずると謂ふ。

何をか「四念處を修するなり」と謂ふ。謂く、(I)內身にて觀[二〇]、身行あり、勤めて精進し、應に正智・念ありて世間の貪憂を除くべし。(II)外身にて觀身行あり、勤めて精進し、應に正智・念ありて、世間の貪憂を除くべし。(III)內外身にて觀身行あり、勤めて精進し、應に正智・念ありて、世間の貪憂を除くべし。受・心・法も亦是の如し。

云何が「身にて觀身行あり」なる。[二一]身は謂く四大色身にして、父母を因緣とし、飲食もて長養し、衣服調適にして塗油もて潤身し、無常・破壞・變異の法なる、是を身と名く。

復次に、身と名くるは色身、是を身と名く。

復次に、[二二]地身・水・火・風身、是を身と名く。

復次に、象衆・馬衆車衆・步衆、是を身と名く。

復次に、[二三]六識身・六觸身・六受身・六想身・六思身・六愛身・六覺身・六觀身、是を身と名く。

云何が「內身にて觀身行あり」なる。若し比丘の、一切の內の四大色身が所攝の法、若しは一處の四大色身が所攝の法にて、無常を思惟して、無常を知り、無常を解し、無常を受し、是の如く、不放逸に觀じて定を得、心の住し、正住する、是を內身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘の、一切內身の四大色身が所攝の法若しは內の一處の四大色身が所攝の法にて、苦・患・癰・箭・食味・病・依緣・壞法・不定・不滿・可壞・苦・空、無我を思惟し、緣を思惟して緣を知り、緣を解し、緣を受すらく、卽ち無明緣にして行あり、乃至、名色緣にして六入あり、……乃至、是を內身にて觀身行ありと名く。

復次に、比丘の、一切內身の四大〔己〕色身が所攝の法、若しは內の一處の四大色身が所攝法にて、

【一八】五蓋を斷じ。巴、中阿含には不記。前文中には「五蓋を斷除し」と。
【一九】五蓋。集異門足論十二の初—毘曇部二、初版、P. 30 中 等參照。
【二〇】內身等。毘曇部三、P. 138 中 參照。
【二一】身は等。以下の解說は何れも上記の中、增一、巴中等の諸經にその相應解說あれば、參照すべし。
【二二】地身。これらの身とはkāya=heap（聚、衆など譯さる）の意によりて說く。
【二三】六識身等。集異門足論十五—毘曇部二、初版 P. 106 中 等參照。

復次に、貪欲・瞋恚・愚癡の煩惱・障礙・覆蓋・繫縛の惡行の盡くる、是を一道と名く。

復次に、欲を離れ、寂靜にして、正覺を修し、惡を滅して涅槃を得る、是を一道と名く。

何をか[七]「道」と謂ふ。一[八]枝道乃至十一枝道、是を道と名く。是の道、是の橋、是の因、是の門、是の根、是の[九]起、是の勝、是の緒、是の辨の生じ、正生し、起し、正起し、出で、正出して、善法の和合・成就する、是を道と名く。

何をか[一〇]「衆生、清淨」と謂ふ。衆生は謂く五道の生なり。人・天の衆生の爲の故に、四念處に親近して修行・多學し、戒清淨・心清淨・見清淨を得ることを說き、疑を度するの清淨・道・非道を知見するの清淨、道に趣く知見の清淨ありて、知見の清淨を得ることを授記し、是の如くして不清淨の衆生を清淨ならしめ、垢穢ある衆生を垢穢無からしむる、是を衆生、清淨と謂ふ。

何をか[一一]「憂悲を遠離し」と謂ふ。

云何が[一二]憂なる。衆生の、若干苦法を觸しての若しは憂・重憂・內の燋熱・內の心熱、是を憂と名く。

云何が[一三]悲なる。〔P. 613a〕衆生の、憂纒の逼迫し、憂箭の具足し、憂惱の心を亂し、窮歎・啼哭・追憶・並語し、或は自ら堆撲して口に亂語を出す、是を悲と名く。

四念處を親近・修學して憂悲を遠離する、是を「憂悲を遠離し」と名く。

何をか[一四]「苦惱を滅盡し」と謂ふ。

[一五]苦とは謂く、若し身に覺するの苦――眼觸苦受乃至身觸苦受、是を苦と名く。

云何が[一六]惱なる。若し心に覺するの苦――意觸苦受、是を惱と名く。

四念處を親近・修學して苦惱の滅する、是を「苦惱を滅し」と謂ふ。

何をか[一七]「涅槃を得」と謂ふ。涅槃は謂く、四沙門果なり。四念處を親近・修學して四沙門果を得る

【五】處。宋元明、宮內省の四本には「樂」に作る。
【六】柔。宋元明、宮內省、兩聖護藏本には「未」に作る。
【七】道。巴、Magga. ―增一にてはこれを「所謂賢聖の八品道」と釋す。
【八】枝。下のと共に宋元明宮內省の諸本には支に作る。
【九】起。同上四本には趣に作る。
【一〇】衆生、清淨。巴、Sattānaṃ visuddhiyā(dat)
【一一】憂悲を遠離し。巴、Sokapariddavānaṃ Samatikkamāya(dat.)
【一二】憂。巴、Soka.
【一三】悲。巴、pariddava(or parideva)
【一四】苦惱を滅盡し。巴、dukkhadomanassānaṃ atthagamāya(dat.)
【一五】苦。巴、dukkha.
【一六】惱。巴、domanassa.
【一七】涅槃を得。巴、nibbānassa sacchikiriyāya(dat.)――前文中には「涅槃を得證す」と。

卷の第十三〔p.612b〕

非問分[一]念處品　第六

[二]一道を行ずれば、衆生、清淨にして憂悲を遠離し、苦惱を滅盡し、涅槃を得證す。五蓋を斷除し、四念處を修するなり。

何をか[三]「一道」と謂ふ。獨り閑靜に〔c〕處して精勤を樂ひ、諸業を樂はず、非業を樂はず、無義語を行ぜず、無義語を樂はず、睡眠を[四]行ぜず、睡眠を樂はず、集語を行ぜず、集語を樂はず、依止を行ぜず、依止を樂はず、放逸を行ぜず、放逸を樂はず、親近を行ぜず、親近を樂はず。――是の如く道の生じ、正生し、起し、正起し、觸證する、是を一道と名く。

復次に、獨り遠離して惡を捨し、遠離して垢穢を雜へず、諸の欲惡を離る。――是の如く、道の生じ、正生し、起し、正起し、觸證する、是を一道と名く。

復次に、貪欲・瞋恚・愚癡の煩惱と共ならず、障礙・覆蓋・繫縛の惡行と共ならず。――是の如く道の生じ、正生し、起し、正起し、觸證する、是を一道と名く。

復次に、獨り不放逸にして、精進・念・知あり、遠離行を修す。――是の如く、道の生じ、正生し、起し、正起し、觸證する、是を一道と名く。

復次に、獨り閑靜に處し、或は曠野・空處・山谷・崖窟・露處・草坐に親近・隨坐し、林藪・塚間・水側に[五]處在して聚落を遠離す。――是の如く道の生じ、正生し、起し、正起し、觸證する、是を一道と名く。

復次に、心の獨住し、正住し、正止し、一に入定する、是を一道と名く。

復次に、一向[六]柔軟にして調伏清淨なる、是を一道と名く。

【一】念處品。Smṛtyupasthānavarga. 所謂四念處に關して、經説を論母代りにあげ(法蘊足論中にも、その例がある)、次で例によりて詳しく解説するといふ組織をとつた一品である。毘崩伽論 VII. Satipaṭṭhāna-vibhaṅga(p. 193ff.) 法蘊足論卷五、念住品九（毘曇部三、p. 138 ff.）などを參照すべし（尙、四念處そのものについては、左記の中部等の經の外、雜 24＝S. 47, Satipaṭṭhāna-Saṃyutta 諸經や、乃至、集異門足論四法中――毘曇部一――のその下等々を見よ）。

【二】一道を等。中、九八、念處經（大正I, p. 582b ff.）＝增一、十二の一（大正II, p. 568 ff.）＝m. 10, Satipaṭṭhāna-S.(I, p. 55 ff.); D. 22, Mahāsatipaṭṭhāna-S.(II, p. 290ff.)印例參考 ;D. 22, Mahāsatipaṭṭhāna-S.(II, p. 290 ff.) 等參照(中の殊に增一の文と近い)

【二】一道。巴、Ekayāna maggo(nom.)―中も一道、增一は一入道。

【三】一道。增一は一入。蓋し、巴 Ekayāno の當字。

【四】行ぜず。宋元明、宮内省、二聖護藏の六本、何れもこの字無く、たゞ「睡眠せず」と作る。

云何が純苦陰の滅なる。純苦陰は謂く七苦法——老・死・憂・悲・苦・惱・大苦聚、是を純苦陰と名く。
復次に、十一苦、是を純苦陰と名く。
復次に、十八苦法＝無明乃至大苦聚、是を純苦陰と名く。
是の如き純苦陰の盡・變異・寂靜・滅沒を純苦陰の滅と名く。

或は自ら撲ちて亂語する、是を悲と名く。

云何が苦なる。若し身に覺する苦たる眼觸の苦受、乃至、身觸の苦受、是を苦と名く。

云何が惱なる。若し心に覺する苦たる意觸の苦受、是を惱と名く。

云何が大苦聚なる。若しは衆苦、若しは罵辱の苦、若しは心の不定なる、是を大苦聚と名く。

〔六六〕佛の說くが如し、『阿難よ、老・死・憂・悲・苦・惱・大苦聚は緣有り。』阿難の問ひ已りて答有り。『老〔b〕・死・憂・悲・苦・惱・大苦聚は何の緣か有る。』『生緣にして老・死・憂・悲・苦・惱・大苦聚あり。』此は是れ答なり。『阿難よ、若し生無くむば、老・死・憂・悲・苦・惱・大苦聚有らむや不や。』『世尊よ、無きなり。』『阿難よ、因・緒・緣を以つての故に、老・死・憂・悲・苦・惱・大苦聚あり。若し生緣にして、老・死・憂・悲・苦・惱・大苦聚あり。上に說くが如し。』——

云何が是の如くして純苦聚の集ありなる。謂く、七苦法＝老・死・憂・悲・苦・惱・大苦聚、是を純苦陰と名く。

復次に、十一苦法＝無明・行・識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生、是を純苦陰と名く。

復次に、亦十八苦法＝無明・行・識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・老・死・憂・悲・苦・惱・大苦聚、是を純苦陰と名く。

是の如き純苦陰の集・和合・生・倶生する有り、生じ已り、倶生し已りて出で、倶に出で、出で已り、倶に出で已りて得、成就する、是を純苦陰の集ありと謂ふ。

云何が無明滅すれば則ち行滅すなる。若し無明生ずれば則ち行生じ、無明滅すれば則ち行滅す。是を無明滅すれば則ち行滅すと謂ふ。

乃至、若し生有れば則ち老死有り。若し生滅すれば則ち、老死滅す。是を生滅すれば則ち老死滅すと謂ふ。

【六六】佛等。大緣方便經——大正 1p.61 b.

云何が無色有の卽ち生有なるなる。若し業を作し、成就し已りて、無色界天上に、四種の我分の身=受・想・行・識を受く、是を無色有の卽ち生有なると名く。此を受有と謂ひ、此を報有と謂ひ、是を[六〇]後有と謂ふ。

是の如き無色行の業有と、是の如き無色行の生有と、是を無色有と名く。

[六一]佛の說くが如し、『阿難よ、有は緣有り。』是の如く、阿難の問ひ已りて答有り。『有は何の緣かある。』『取緣にして有あり。』此は是れ答なり。『阿難よ、一切の取無くむば、有、有らむや不や。』『世尊よ、無きなり。』『阿難よ、因・緒・緣を以つて、阿難よ、取緣にして有あり。向に說く所の如し。是を以つての故に說く。』――

云何が有緣にして生ありなる。若しは諸の衆生の、衆中の生・重生・住胎・出胎・得生・陰具・諸の入衆の和合、是を生と名く。佛の說くが如し、『阿難よ、生は緣有り。』阿難の問ひ已りて答有り。『生は何の緣かある。』『有緣にして生あり。』此は是れ答なり。『阿難よ、若し一切の有無くむば、生有らむや不や。』『世尊よ、無きなり。』『阿難よ、因・緒・緣を以つて有緣にして生あり。向に說く所の如し。此を以つての故に說く。』――

云何が生緣にして、老・死・憂・悲・苦・惱・大苦聚ありなる。

[六二]云何が老なる。衆生の衰老・戰掉、諸根の熟・念・滅[六三]行の故に是を老と名く。

云何が死なる。若し諸の衆生の終沒・死盡・時過・陰壞・捨身、此の陰の變異、衆の別離、是を死と名く。

云何が憂なる。衆生の若干の苦法を觸し、若し憂・重憂・究竟憂あり、內の熱して內心の憂ある、是を憂と名く。

云何が悲なる。憂纏の逼迫する、[六四]憂、箭の具足する、憂惱心亂する、竊歎・啼哭・追憶・[六五]苦語する、

【六〇】後有。また、上註參照。

【六一】佛の等。大緣方便經――大正I, p. 60 c=Mahānidāna-S (II, 587,)。

【六二】云何が等。以下、卷四、四聖諦品中の已註參照。

【六三】行等。同上。

【六四】憂箭。箭字は大正本等は煎に作るも、宋元明、宮內省の四本によりて改む。

【六五】苦。大正本等には並に作る。同上四本に從つて改む。

有報の身・口・意業を作す、是を取緣にして有ありと名く。
復次に、取緣にして三有＝欲有・色有・無色有あり。
云何が欲有なる。二種の欲有あり。或は欲有の卽ち業有なる、或は欲有の卽ち生有なるなり。
云何が欲有の卽ち業有なるなる。欲行の未竟・未知・未斷にして若し欲行の有報の身・口・意業を作す、是を欲有の卽ち業有なると名く。
云何が欲有の卽ち生有なるなる。若し業を作し、成就し已りて、欲界天上に、五種の我分身――色・受・想・行・識を受くる、是を欲有の卽ち生有なると名く。此を受有と謂ひ、此を報有と謂ひ、此を[五八]後有と謂ふ。
是の如き欲行の業有と是の如き欲業の生有と是を欲有と名く。
云何が色有なる。二種の色有あり。或は色有の卽ち業有なる。或は色有の卽ち生有なるなり。
云何が色有の卽ち業有なるなる。色行の未竟・未知・未斷にして、若し色行の有報の身・口・意業を作す、是を色有の卽ち業有なると名く。
云何が色有の卽ち生有なるなる。若し業を作し、成就し已りて、色界天上に、若し五種の我分＝色・受・想・行・識を受くる、是を色有の卽ち生有なると名く。此を受有と謂ひ、此を報有と謂ひ、此を後有[五九]と謂ふ。
是の如き色行の業有と是の如き〔p. 612a〕色行の生有と、是を色有と名く。
云何が無色有なる。二種の無色有り。或は無色有の卽ち業有なる、或は無色有の卽ち生有なるなり。
云何が無色有の卽ち業有なるなる。無色行の未竟・未知・未斷にして、若し無色行の有報の身・口・意業を作す、無色有の卽ち業有なると名く。

【五八】後有。大正本等には復有に作るは非。宋・元・明、宮内省の四本によりて改む。

【五九】後有。上註を見よ。

云何が欲取なる。[五〇]欲界愛の初觸を除く、若し餘の欲界愛の廣なる、是を欲取と名く。

云何が[五一]見取なる。戒取を除く若し餘の見取なり。

云何が戒取なる。[五二]戒盜、是を戒取と名く。

云何が[五三]我取なる。色・無色界愛の初觸を除く、若し餘の色・無色界愛の廣なる、是を我取と名く。

云何が欲界取なる。欲界愛の初觸と見取と戒取とを除く若し餘の欲界の煩惱は、是を欲取と名く。

云何が見取なる。[五四]六十二見、及び邪見、是を見取と名く。

云何が戒取なる。戒は律なり、道は淨なり、〔○〕二は倶に淨なり、解脫・無依にして、苦の邊を盡すとて、若し彼に於て堪忍して欲受あるなり。――戒とは謂く、身口の戒なり。道とは謂く、[五五]邪緣にして吉を求むるなり。――髮を養ひ、入に入り、火に事へ、日・月に事へ、牛行・鹿行・狗行・獸行・求力行・求大人行の種々の苦行及び餘もて邪吉を求むる、是を道と名く。若し彼の戒と此の道とを求覓・重求覓・究竟求覓する、是を齊りて淨と謂ひ、解脫と謂ひ、「戒は淨なり」と謂ひ、「我、解脫す」と謂ひ、聖と謂ひ、阿羅漢と謂ひ、槃涅槃と謂ひ、若し彼に於て欲・重欲・究竟して堪忍する、是を戒取を名く。

云何が我取なる。色・無色界の初觸の愛と戒取と見取とを除く、若し餘の色・無色界の煩惱なる、是を我取と名く。

[五六]佛の說くが如く、『阿難よ、取は[五七]緣有り。』是の如く、阿難の問ひ已りて、答有り『取は何の緣かある。』『愛緣にして取あり。』此は是れ答なり。『阿難よ、若し一切の愛無くむば、取有らむや不や。』『世尊よ、無きなり。』『阿難よ、是を以つて因・緒・緣ありて取あり。阿難よ、愛緣にして取あり。向に說く所の如し、是を以つての故に說く。』――

云何が取緣にして有ありなる。欲取・見取・戒取・我取の緣の未斷にして若し欲行・色行・無色行の

【五〇】欲界等。右、集異門足論には「欲界繫の諸の見……」と作る。

【五一】見取。同上には、有身、邊執、邪、見の四見を列ねて說く。

【五二】戒盜。大正本には戒道に作るも、宋元明、宮の四本によりて改む。新譯にて戒禁など記す。

【五三】戒取。集異足論等には我語取。

【五四】六十二見。長阿含二一、梵動經＝支謙譯、大正 No 21. 梵網六十二見經＝D. I. Brahmajāla S. 等參照。「常住論」、「一分常住論」、「死後有論」、「邊無邊論」、「捕鰻論」（又は「詭辯論」）、「無因論」、「斷滅論」、「現在生死涅槃論」等八類六十二の――少くとも經の要求によつていへば――佛陀當時の論の邪見、外道見、總集である。

【五五】邪緣。宋元明、宮內省の四本には邪道に作る。

【五六】佛等。長部大緣方便經＝大正 1. p. 60 c＝D. 15. Mahānidāna-S, (II, 58) 等、何れも前註の場合に準ず。

【五七】緣。大正本等、「何の緣」とし疑問文に作るも、宋元明、宮內省の四本に從つて改む。

悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、意觸苦受を緣として、意觸苦受を生ず。彼は意觸苦受を觸し已りて、意觸樂受に於て悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、意觸苦受を緣として意觸苦受を生ず。彼は意觸苦受を觸し已りて、『我をして斷壞して有ること無からしめよ』と悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、意觸苦受を緣として、意觸苦受を生ず。彼は意觸苦受を觸し已りて、意觸の不苦不樂受に於て悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、意觸の不苦不樂受を緣として、意觸の不苦不樂受を生ず。若し意觸の不苦不樂受[四五]あり已りて、意觸の不苦不樂受に於て悕望堪忍して住す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、意觸の不苦不樂受を緣として、意觸の不苦不樂受を生ず。若し意觸の不苦不樂受を[四六]受し已りて、意觸の不苦不樂受に於て若しは相似、若しは勝妙を悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、意觸の不苦不樂受を緣として、意觸の不苦不樂受を生ず。若し意觸の不苦不樂受を[四七]緣じ已りて、意觸樂受に於て悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

[四八]佛の說くが如し、『阿難よ、受は緣有り。』阿難の問ひ已りて答有り。『愛は何の緣かある。』『受緣にして愛あり。』是は此れ答なり。『阿難よ、一切の受無くむば受有らむや不や。』『世尊よ、無きなり。』『阿難よ、因・緒・緣を以つて愛あり。阿難よ、受緣にして愛あり。向に說く所の如し。是を以つての故に說く。』——

云何が愛緣にして取ありなる。愛の未斷にして[四九]愛欲取・見取・戒取・我取ある、是を愛緣にして取ありと名く。

【四五】あり。原漢文の意觸の下に今一、觸の字あるべきを脫せるか。

【四六】受し。たゞ大正本等のみにありて、宋元明本等には無し。

【四七】緣じ。同上。

【四八】佛の等。長十三、大緣方便經——大正 1. p. 60c = D. 15. Mahānidāna-S. (II, p. 58—)。

【四九】愛欲取等。所謂四取にして、毘曇部一、(初版、p. 246 †) 集異門足論八のその下等を參照せよ。

[四一]復次、眼觸樂受を緣として眼觸樂受を生ず。彼は眼觸樂受を觸し已りて、眼觸の不苦不樂受に於て、悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、眼觸苦受を緣として、眼觸苦受を生ず。彼は眼觸苦受を觸し已りて、眼觸樂受に於て悕望す。是を受緣にして受ありと名く。

復次に、眼觸苦受を緣として、眼觸苦受を生ず。若し眼觸苦受を觸し已りて、『我をして斷壞して有ること無からしめよ』と悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、眼觸苦受を緣として眼觸苦受を生ず。若し眼觸苦受を觸し已りて眼觸の不苦不樂受に於て悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、眼觸の不苦不樂受を緣として、眼觸の不苦不樂受を生ず。彼は 觸の不苦不樂受を觸し已りて、眼觸樂受に於て喜樂・愛著・[四二]堪忍して住す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、眼觸の不苦不樂受を緣として、眼觸の不苦不樂受を生ず。若し眼觸の不苦不樂受を觸し已りて、異の眼觸の不苦不樂受に於て、若しは相似、若しは勝妙を悕望す。是の如く、受緣にして愛あり。

復次に、眼觸の不苦不樂受を緣として、眼觸の不苦不樂受を生ず。若し眼觸の不苦不樂受を觸し已りて、眼觸樂受に於て悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、耳・鼻・舌・身・意――意觸樂受を緣として、意觸樂受を生ず。[四三]彼は意觸樂受を觸し已りて、意觸樂受に於て喜樂・愛著・堪忍して住す。是を受緣にして愛ありと[四四]名く。

復次に、意觸樂受を緣として意觸樂受を生ず。若し意觸樂受を觸し已りて、異の意觸樂(h)受に於て若しは相似、若しは勝妙を悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、意觸樂受を緣として、意觸樂受を生ず。彼は意觸樂受を觸し已りて、不苦不樂受に於て

【四一】復等。一復次緣ニ眼觸樂受生ニ眼觸」まで大正本等には不記。宋元明、宮內省の四本もて補讀。

【四二】堪忍して。大正本等不記。宋元明の三本よりて補入。

【四三】彼は以下。大正本等には混亂があるので、宋元明の三本に從つて正す。

【四四】名くの下。大正本等には「復次に、意觸樂受を緣として喜樂・愛著・堪忍して住す」との混亂文をおくも、右註の次第もて今は省く。

復次に、六入緣にして七觸＝眼識界相應の觸・耳・鼻・舌・身・意界・意識界相應の觸ある、是を六入緣にして觸ありと名く。

復次に、六入緣にして十八觸＝眼の樂觸・苦觸・不苦不樂觸・耳・鼻・舌・身・意の樂觸・苦觸・不苦不樂觸ある、是を六入緣にして觸ありと名く。

[三九] 佛の說くが如し、『阿難よ觸は緣有り。』是の如く、阿難の問ひ已りて答有り。『觸は何の緣かある。』『六入緣にして觸あり。』此は是れ答あり。『阿難よ、若しは六入無くむば觸有らむや不や。』『世尊よ、無きなり。』『阿難よ、因・緒・緣を以つて觸あり、阿難よ、六入緣にしては觸あり。向に說く所の如し、是を以つての故に說く。』――

云何が觸緣にして受ありなる。觸緣にして二受＝身受・心受ある、是を〔p. 611a〕觸緣にして受ありと名く。

復次に、觸緣にして三受＝樂受・苦受・不苦不樂受ある、是を觸緣にして受ありと名く。

乃至、觸緣にして十八受あり。……上に說くが如し。是を觸緣にして受ありと名く。

[四〇] 佛の說くが如し、『阿難よ、受は緣有り。』阿難の問ひ已りて答有り。『受は何の緣か有る。』『觸緣にして受あり。』此は是れ答なり。『阿難よ、若し一切の觸無くむば受有らむや不や。』『世尊よ無きなり。』『阿難よ、因・緒・緣を以つて受あり。阿難よ、觸緣にして受あり。向に說く所の如し。是を以つての故に說く。』――

云何が受緣にして愛ありなる。眼觸樂受を緣として眼觸樂受を生ず。彼は眼觸樂受を觸し已りて彼の眼觸・樂受を喜樂・受著・堪忍して住す。是を受緣にして愛ありと名く。

復次に、眼觸樂受を緣として眼觸樂受を生ず。彼は眼觸樂受を觸し已りて、異の眼觸樂受に於て若しは相似、若しは勝妙を悕望す。是を受緣にして愛ありと名く。

【三九】 佛の等。長十三、大緣方便經等には又?。

【四〇】 佛等。大緣方便經――大正 I, p. 61a= D. 15; Mahānidāna-S. (II, p. 62)。

有漏の口善行、意善行の當に色界の生を受くべきを作し、善行を作し已りて、身壞命終して、色界天上に生じ、因・緒・緣を以つて色界天上の名色を得るに、四大と四大所造とは謂く色なり。意に由りて生ずる受・想・思・(c)觸・思惟は謂く名なり。名色、增長して色界天上の眼・耳・身・意・根を得。是の如く、未來の名色を緣として、未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の、當に無色界の生を受くべきを作し、有漏の口善行、意善行の、當に無色界の生を受くべきを作し、善行を作し已りて、身壞命終して、無色界天上に生じ、因・緒・緣を以つて、無色界天上の名を得るに、意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟は謂く名なり。名、增長して無色界天上の意根を得。是の如く、未來の[三七]名色を緣として未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。[三八]佛の說くが如し、『阿難よ、六入は緣有り。』是の如く、阿難の問ひ已りて答有り。『六入は何の緣がある。』『名色緣にして六入あり。』此は是れ答あり。『阿難よ、一切の名色無ければ、六入有らむや不や。』『世尊よ、無きなり。』『是の如く阿難よ、因・緒・緣を以つて、六入有り。阿難よ、名色緣にして六入あり。向に說く所の如し。是を以つての故に說く』――

云何が六入緣にして觸ありなる。六入緣にも二觸＝身觸・心觸ある、是を六入緣にして、觸ありと名く。

復次に、六入緣にして三觸＝樂觸・苦觸・不苦不樂觸ある、是を六入緣にして觸ありと名く。

復次に、六入緣にして三觸＝欲界繫觸・色界繫觸・無色界繫觸ある、是を六入緣にして觸ありと名く。

復次に、六入緣にて五觸＝五受根相應の觸ある、是を六入緣にして觸ありと名く。

復次に、六入緣にして六觸＝眼觸・耳・鼻・舌・身・意・觸ある、是を六入緣にして觸ありと名く。

【三七】名色。nāmarūpa.

【三八】佛の等。同上に長、一三、大緣方便經等には？。

り。彼は善の名色を作し已りて、身壞命終して、無處有處天上に生じ、因・緒・緣を以つて、無所有處天上の意根を得。是の如く、現在の名色を緣として未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、一切無所有處を離れ、非有想非無想處行を成就するに、若し行人の身業と口業とは謂く色あり。若し行人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。彼は善の名色を作し已りて、身壞命終して、非有想非無想處天上に生じ、因・緒・緣を以つて非有想非無想處天上の意根を得。是の如く現在の名色を緣として未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、不善の身・口・意行を作し、不善行を作し已りて、身壞命終して、地獄・畜生・餓鬼に墮し、因・緒・緣を以つて、地獄・畜生・餓鬼の名色を得るに、四大と四大所造は色なり。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟は謂く名なり。名色、增長して、地獄・畜生・餓鬼の眼・耳・鼻・舌・身・意根を得。是の如く、未來の名色を緣として未來の六入を生ずる、是を『名色緣にして未來の六入ある』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の、當に欲界の生を受くべきを作し、有漏の口善行、意善業の當に欲界の生を受くべきを作し、善行を作し已りて、身壞命終して、若しは人中、若しは欲界天上に生じ、因・緒・緣を以つて、人中・欲界・天上の名色を得るに、四大と四大所造とは色なり。意に由つて生ずる受・想・思・觸・思惟は謂く名なり。名色、增長して人中若しは欲界天上の眼・耳・鼻・舌・身・意根を得。是の如く、未來の名色を緣として未來の六入を生ずる、是を『名色緣にして未來の六入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の、當に色界の生を受くべきを作し、

し實の人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。彼は善の名色を作し已りて身壞命終して淨居天上に生じ、因・緒・緣を以っての故に淨居天上の眼・耳・身・意根を得。是の如く、現在の名色を緣として未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、聖共覺に依りて苦樂を斷じ、先に憂喜を滅し、不苦不樂にして捨・念・淨に、四禪行を成就するに、若し實の人の身業と口業とは謂く色なり。若し實の人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。彼は善の名色を作し已りて、身壞命終して淨居天上に生じ、因・緒・緣を以つて淨居天上の眼・耳・身・意根を得。是の如く、現在の名色を緣として未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして一切の色想を離れ、瞋恚想を滅し、若干想を思惟せず、無邊空處行を成就するに、若し行人の身業と口業とは、謂く、色なり。若し行人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。彼は善の名色を作し已りて身壞命終して、空處天上に生じ、因・緒・緣を以つて空處天上の意根を得。是の如く、現在の名色を緣として未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未(已)斷にして、一切空處を離れ、無邊識處行を成就するに、若し行人の身業と口業とは謂く色なり。若し行人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。彼は善の名色を作し已りて、身壞命終して識處天上に生じ、因・緒・緣を以つて、識處天上・意根を得。是の如く、現在の名色を緣として未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして一切識處を離れ、無所有處行を成就するに、若し行人の身業と口業とは謂く色なり。若し行人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名な

生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。〔彼は〕善の名色を作し已りて、身壞命終して、色界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に、色界天上の眼・耳・身・意根を生ず。是の如く、現在の名色を緣として、未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、是の如く思惟すらく、『想は是れ我が患、是れ癰・箭なり。無想は是れ寂・靜・妙なり』と。能く無想定行を成就するに、若し行人の身業と口業とは謂く色なり。無想定は謂く名なり。彼は善の名色を作し已りて、身壞命終して、無想天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に無想天上の〔三六〕身根を生ず。――是の如く、現在の名色を緣として未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、聖共覺に依りて、欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂あり、初禪行を成就するに、若し實の人の身業と、口業とは謂く色なり、若し實の人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。彼は善の名色を作し已りて、身壞命終して、淨居天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に、淨居天上の眼・耳・身・意根に生ず。是の如く現在の名色を緣として、未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、聖共覺に依り、覺・觀を滅し、內に淨信心ありて覺無く、觀無く、定に依りて生ずる喜樂あり、二禪行を成就するに、若し實の人の身業と口業とは謂く色なり。若し定の人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。彼は善の名色を作し已りて身壞命終して、淨居天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に、淨居天上の眼・耳・身・意根を得。――是の如く、現在の名色を緣として未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、聖共覺に依りて、喜を離れて捨行し念知あり、身に樂を受し、諸の聖人の能く『捨・念・樂行ず』といふ如く、三禪行を成就するに、若し實の人の身業と口業とは謂く色なり。若

〔三六〕身根。宋元明の三本には「眼・耳・身・意根」と。

しは人中〔若しは〕欲界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に人中・欲界天上の眼・耳・鼻・舌・身・意根を生ず。――是の如く現在の名色を緣として未來の六入を生ずる、是を『名色緣にして未來の六入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂あり、初禪行を成就するに、若し行人の身業と口業とは謂く色なり。若し行人の意業と、意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。彼は善の名色を作し已りて、身壞命終して色界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に、色界天上の[三四]眼・耳・身・意根に生ず。――是の如く、現在の名色を緣として未來の六入を生ずる、是を『名色緣にして未來の六入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、覺觀を滅し、內に淨信心ありて、覺無く、觀無く、定生の(c)喜樂のあり、二禪行を成就するに、若し行人の身・口業は謂く色なり。若し行人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。彼は善の名色を作し已りて、身壞命終して、色界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に色界天上の眼・耳・身・意根を生ず。――是の如く、現在の名色を緣として未來の六入を生ずる、是を『名色緣にして未來の[三五]入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、喜を離れて、捨行し、念・智ありて身に樂を受し、諸の聖人の能く『捨・念・樂・行ず』といふ如く、三禪行を成就するに、若し行人の身業と口業とは謂く色なり。若し行人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。彼は善の名色を作し已りて、因・緒・緣を以つて〔の故に〕色界天上の眼・耳・身・意根を生ず。――是の如く、現在の名色を緣として未來の入を生ずる、是を『名色緣にして未來の入あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、苦樂を斷じ、先に憂喜を滅し、不苦不樂にして、捨・念・淨に四禪行を成就するに、若し行人の身業と口業とは謂く色なり。若し行人の意業と意に由りて

【三四】眼等。有部同樣、上二界には摶食の性たる香味二境無く、從つてこれに對すべき鼻舌二根を今上二界に除く意なるべし。但し有部にては上二界には鼻舌二識は無しとするも同二根はこれを許す。この點の相違を心得るべし。

【三五】入。大正本等は六入とするも、宋、元、明、宮內省の四本によりて六を省く。

身・意根は潤益增長するに、若し實の人の身業と口業とを色と謂ひ、意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とを名と謂ふ。――是の如く、現在の名色を緣として現在の六入を生ずる、是を『名色緣にして現在の六入あり』と名く。

復次に、若し比丘有り、[三]大神足・大威力あり自身に於て起心して、餘の色身を化作し、一切の支節・諸根を成就して[b]、現在に潤益增長し、眼根・耳・鼻・舌・身・意根の潤益增長する、若し實の人の身業と口業とを色と謂ひ、若し實の人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とを名と謂ふ。――是の如く、現在の名色を緣として、現在の六入を生ずる、是を『名色緣にして現在の六入あり』と名く。

復次に、若し比丘有り、神足を得、心、自在を得、命行の住すること若しは一劫、若しは一劫を減ずべし。彼の現在の眼根の潤益增長し、耳・鼻・舌・身・意根の潤益增長する、若し實の人の身業と口業とを色と謂ひ、若し實の人の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とを名と謂ふ。――是の如く、現在の名色を緣として現在の六入を生ずる、是を『名色緣にして現在の六入あり』と名く。

復次に、若し人あり、無慧・無明・未斷にして、不善の身・口・意行を作する、不善の身行・口行は謂く色なり。不善の意行と、意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。不善の名色を作し已りて、身壞命終して、地獄・畜生・餓鬼に生じ、因・緒・緣を以つての故に、地獄・餓鬼・畜生の眼・耳・鼻・舌・身・意根を生ず。――是の如く、現在の名色を緣として未來の六入を生ずる、是を『名色緣にして未來の六入あり』と名く。

復次に、若し人あり、無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の當に欲界の生を受くべきを作し、有漏の口善行・意善行の、當に欲界の生を受くべきを作すに、身善行・口善行は謂く色なり。意善行と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とは謂く名なり。善の名色を作し已りて、身壞命終して、若

【三】大神足等。立世毘曇部―論集部一の初、拙註參照。

る、是を『識緣にして未來の名あり』と名く。[三一]佛の說くが如し、『阿難よ、名色は緣有り。』……是の如く、阿難の問ひ已りて答有り。『名色は何の緣かある、識緣にして名色あり。』此は是れ答なり。『阿難よ、識の、胎に入らずんば、名色の生ずること有らむや不や。』『世尊よ、無きなり。』『阿難よ、識の、胎に入るも、出でずんば、名色の集有らむや不や。」『世尊よ、無きなり。』『阿難よ、若し嬰兒の識の、斷壞して有らざれば、彼は名色の增長し、廣大なること有らむや不や。』『世尊よ、無きなり。』

『阿難よ、一切の識無くむば、名色有らむや不や。』『世尊よ、無きなり。』『是を以つて、阿難よ、因・緒・緣を以つて、名色有り。阿難よ、若し識緣にして名色あり。向に說く所の如し。是を以つての故に說く。』――

云何が名色緣にして六入あるなる。摶食を緣として現在の眼根は潤益・增長し、耳・鼻・舌・身・意根は潤益增長す。摶食は謂く色なり。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟は謂く名なり。――是の如く、現在の名色を緣として現在の六入を生ずる、是を『名色緣にして現在の六入あり』と名く。

衣服・洗浴・調身を緣として現在の眼根は潤益增長し、耳・鼻・舌・身・意根は潤益增長す。衣服・洗浴・調身・摶食は謂く色なり。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟は謂く名なり。――是の如く、現在の名色を緣として、現在の六入を生ずる、是を『名色緣にして現在の六入あり』と名く。

喜處の色を緣として、現在の眼根は潤益增長し、耳・鼻・舌・身・意根は潤益增長す。喜處の色は謂く色あり。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟は謂く名なり。――是の如く、[三二]名色緣にして現在の六入あり。

復次に、若し比丘有り、阿羅漢にして、諸漏已に盡き、所作已に辦じ、重擔を捨て、己利具足し・有煩惱盡きて正しく解脫し已り、勝業を受けて成就し、彼の現在の眼根は、潤益增長し、耳・鼻・舌、

【三一】佛等。長、一三、大緣方便經―大正 I, p. 61 b=D. 51 Mahānidāna-S. § 21 (II, p. 63)。

【三二】名。宋元明の三本によつて補入。

―是の如く、現在の識を緣として未來の名を生ずる、是を『識緣にして未來の名あり』名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、不善の身行、不善の口行、不善の意行を作し、不善行を作し已りて、身壞命終して、地獄・畜生・餓鬼に生じ、因・緒・緣を以つての故に地獄・畜生・餓鬼の初識と彼の識と共なる名色とを生ず。四大と四大所造の色と、是は色なり。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟、是は名なり。――是の如く、未來の識を緣として未來の名色を生ずる、是を『識緣にして未來の名色あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にて、有漏の身・口・意の善行の、當に欲界の生を受くべきを作し、善行を作し已りて、身壞命終して、若しは人中〔若しは〕欲界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に、人中、若しは欲界天上の初識と彼の識と共なる名色とを生ず。四大と四大所造の色と、是は色なり。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟は謂く名なり。――是の如く未來の識を緣として未來の名色を生ずる、是を『識緣にして未來の名色あり』と名く。

復次に、若しは人無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の、當に色界に生ずべきを作し、有漏の口善行・意善行の、當に色界に生ずべきを作し、善行を作し已りて、身壞命終して色界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に、色界の初識と彼の識と共なるに色とを生ず。四大と四大所造の色と、是は色なり。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟は是れ名なり。――是の如く、未來の識を緣として、未來の名色を生ずる、是を『識緣にして未來の名色あり』と名く。

復次に、若しは人、無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の、當に無色界に生ずべきを作し、有漏の口善行、意善行の、當に無色界〔p. 609a〕に生ずべきを作し、善行を作し已りて、身壞命終して無色界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に無色界天上の初識と彼の識と共なる名とを生ず。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟は是れ名なり。――是の如く、未來の識を緣として未來の名を生ず

意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟とを名と謂ふ。――是の如く現在の識緣として現在の名色を生ずる、是を『現在の識を緣として現在の名色あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、不善識を作し、彼の不善識を作し已りて、身壞命終して、地獄・畜生・餓鬼に墮し、因・緒・緣を以つての故に、地獄・畜生・餓鬼の名色を生ずるに、四大と四大所造の色と、是は色なり。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟は名と謂ふ。――是を『現在の識を緣として未來の名色を生ず』と名け、是を『識緣にして未來の名色あり』と爲す。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、有漏の善識の、當に欲界の生を受くべきを作し、善識を作し已りて、身壞命終して、若しは人中に生じ、若しは欲界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に人中若しは欲界天上の名色を受くるに、四大と四大所造の色とは是れ色なり。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟は是れ名なり。――是の如く、現在の識を緣として未來の名色を生ず。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂あり、初禪行を成就し、彼は初禪の尊上を喜樂し、堪忍して住す。初禪の尊上を喜樂し、堪忍して住し已りて識の、樂を取するに依り、彼は身壞命終して、色界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に色界天上の名色(〇)を生ず。四大と四大所造の色と、是は色なり。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟、是は名なり。――是の如く、現在の識を緣として未來の名色を生ずる、是を『識緣にして未來の名色あり』と名く。

乃至、復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、一切無所有處を離れ、非有想非無想行を成就し、彼の非有想非無想處の尊上を喜樂し、堪忍して住す。非有想非無想處の尊上を喜樂し、堪忍し、多住し已りて、識の取樂を多く修行するに依り、身壞命終して、非有想非無想處天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に非想非々想處天上の名を生ず。意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟を名と謂ふ。―

ること無きが如く、是の如く、最後の識滅して、初識續き、餘道に生ずるは、後識滅し已りて卽ち初識を受け、中間有る無し。

若しは最初識、若しは最後識の相應法は後識に至らず。喩へば、眼識滅し已りて耳識を生じ、耳識滅し已りて眼識を生ずるに、眼識の相應法は耳識に至らず、耳識の相應法は眼識に至らざるが如く、是の如く、最後識最後識の相應法にして初識に至らず、初識の相應法は後識に至らず。

後識滅し已りて卽ち初識を生ず。――謂く、此は時過ぐるなり。謂く此れ滅して彼れ生ずるなり。此れ終りて、彼れ始るなり。彼の命＝彼の身に非ず。異命異身に非ず。非常・非斷なり。非去・非來・非變なり。無因に非ず。無作に非ず、此作・此受に非ず、異作異受に非ず。去來有るを知り、生死有るを知り、業相續有るを知り〔こ〕說法有るを知り、緣有るを知れ。此より彼に至る者有ること無く、彼より此に至る者有ること無し。何を以つての故に。業緣の相續して生ずればなり。[二九]佛の說くが如し、『阿難よ、識は緣有り』。是の如く、阿難の問ひ已りて答有り『識は何の緣か有る。』『行緣なり。』此は是れ答なり。『阿難よ、若し行無ければ當に識有るべきや不や。』『世尊よ、無き也。』『是を以つて阿難よ、此の因・緒・緣もて識あり。若し行識にして識あり。向に說く所の如し。此を以つての故に說く。』――

云何が識緣にして名色ありなる。共欲の識の生ずるを緣として有欲の身業生じ、有欲の口業生じ、有欲の意業に生ずるに、共有欲の身業と、口業と、是を色と謂ひ、共有欲の意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟と、是を名と謂ふ。是の如く、現在の識の、現在の名色を生ずる、是を『識緣にして現在の名色あり』と名く。

[三〇]共有瞋恚あり、共有愚癡あり、無共欲あり、無共瞋恚あり、無共愚癡あり、善あり、不善あり、無記の識を緣として無記の身業・口業・意業ある有るに、無記の身業・口業を色と謂ひ、無記の意業と、

【二九】佛の等。長、十三、大緣方便經（大正 I, p. 608）參照。

【三〇】共有等。前の相應下には有共（瞋恚等）に作る。

善の思と彼の思と共なる識有り。――是の如く、未來の行を緣として未來の識を受くる、是を『行緣にして未來の識あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の、當に色界の〔p. 608a〕生を受くべきを作し、善行を作し已りて、身壞命終して、色界天上に生じ、有漏の口・意善行の、當に色界の生を受くべきを作し已りて、身壞命終して、色界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に、色界天上に生じ、思と思と共なる識と有り。――是の如く、未來の行を緣として、未來の識を受くる、是を『行緣にして未來の識あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の、當に無色界の生を受くべきを作し、有漏の口・意善行の、當に無色界の生を受くべきを作し、善行を作し已りて身壞命終して、無色界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に無色界天上にて不動の思と、彼の思と共なる識と有り。――是の如く、未來の行を緣として、未來の識を生ずる、是を『行緣にして未來の識あり』と名く。

復次に、若し最後行の未知にして而も滅するに、若し無間に行の滅し已りて、識の續き、餘道に生ずれば、彼の行の、彼の〔識〕に緣たるは[21]無間緣としてなり。若し因として識續き、餘道に生ずれば、彼の行の、彼の識に緣たるは[22]因緣としてなり。若し思行ありて彼の識續き、餘道に生ずれば、彼の行の、彼の識に緣たるは[23]境界緣としてなり。若し彼の行ありて、識續き、餘道に生ずれば、彼の行の、彼の識に緣たるは[24]依緣としてなり。若し報行ありて識續き、餘道に生ずれば、彼の行の、彼の識に緣たるは[25]報緣としてなり。若し起行ありて識續きて、餘道に生ずれば、彼の行の、彼の識に緣たるは[26]起緣としてなり。若し行に相應して識續き、餘道に生ずれば、彼の行の、彼の識に緣たるは[27]異緣としてなり。若し行增上に識續き、餘道に生ずれば、彼の行の、彼の識に緣たるは[28]增上緣としてなり。此の最後の識滅して初識續き、餘道に生ずるは、最後の識滅し已りて初識即ち生じ、中間有ること無し。喩へば影移り、日續き、日移り影續きて、影と日と、中間有

【二一】 無間緣。巴、Anantarapaccaya.―cf. Paṭṭhāna―Tīka I. p. 1; 2; 本論卷二十五・六、諸分遍品中參照。
【二二】 因緣。巴、Hetupaccaya;―同上參照。
【二三】 境界緣。巴、Ārammaṇapaccaya.―同上參照。
【二四】 依緣。巴、Nissayapaccaya.―同上參照。
【二五】 報緣。巴、Vipākapaccaya.―同上參照。
【二六】 起緣。巴、? 本論二十五、六中參照。
【二七】 異緣。巴、? Sahajātapaccaya. （本論卷二五中の異緣の解說參照）。
【二八】 增上緣。巴、Adhipatipaccaya.―同上參照。

に生じ、若しは欲界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に、若しは人中に生じ、若しは欲界六天に生じ、初識あり。業因・緒・集・緣を以つて、眼識乃至意識及び後の了識を生ず。是の如く、現在の行を緣として未來の識を生ずる、是を『行緣にして識あり』と爲す。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして有漏の身善行の、當に色界の生を受くべきを作し、有漏の口・意の善行の、當に色界の生を受くべきを作し、善行を爲し已りて、身壞命終して、色界天上に生じ、因・緒・緣を以つて色界天上にて初識を受け、業因・緒・集・緣にて眼識乃至意識及び後の了識を生ず。——是の如く、現在の行を緣として、未來の識を生ずる、是を『行緣にして未來の識あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の、當に無色界の生を受くべきを作し、有漏の口・意・善行の、當に無色界の生を受くべきを作し、善行を作し已りて、身壞命終して、無色界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に無色界天上に初識を受け、業因・緒・集・緣ありて、意界・意識界・及び後の了識を生ず。——是の如く、現在の行を緣として未來の識を生ずる、是を『行緣にして未來の識あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、身・口・意の惡行を作し、惡行を爲し已りて身壞命終して、地獄・畜生・餓鬼に墮し、因・緒・緣を以つての故に、地獄・畜生・餓鬼にて不善の思と彼の思と彼の思と共なる識と有り。是の如く、未來の行を緣として未來の識を受くる、是を『行緣にして未來の識あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の、當に欲界の生を受くべきを作し、有漏の口・意善行の、當に欲界の生を受くべきを作し、善行を作し已りて身壞命終して、若しは人中に生じ、〔若しは〕欲界天上に生じ、因・緒・緣に由るが故に、若しは人中、〔若しは〕欲界天上にて、

來の行あり』と名く。
[18]佛の說くが如し、「阿難よ、行は緣有り。』是の如く阿難の問ひ已りて答有り。「行は何の緣がある」。「無明緣にして行あり」——此は是れ答なり。「阿難よ、若し無明無ければ、行有りや不や」。「世尊よ、無き也」。「阿難よ、[19]因・緒・緣を以つての故に行あり。若し無明緣にして行あり。[20]向に說く所の如し。是を以つての故に說く」。

云何が行緣にして識ありなる。共欲の思を緣として共欲の識を生ずる有り。——是の如く、現在の行に緣りて現在の識を生ずるを『行緣にして現在の識あり』と名く。共瞋恚有り、共愚癡有り。無共欲あり、無共瞋恚あり、無共愚癡あり、善あり、不善あり。無記の思を緣とすること有りて無記の識を生ずる有り。——是の如く、現在の行を緣として現在の識を生ずる。是を『行緣にして現在の識あり』と名く。

眼を緣とし、色を緣として識を生ず。彼の眼行、色行の若し緣として識あり。是の如く、現在の行に緣りて現在の識を生ず。是を『現在の行に緣りて現在の識あり』と爲す。

耳・鼻・舌・身——意を緣とし、法を緣として識を生ず。彼の意行・法行の若し緣として識を生ず。是の如く、現在の行に緣りて現在の識を生ず。是を『現在の行に緣りて現在の識あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、不善の身行、不善の口行、不善の意行を起し、不善行を作し已りて、身壞命終して、地獄・畜生・餓鬼に墮し、因・緒・緣を以つての故に、地獄・畜生・餓鬼に生じ、初識あり。[c]業因・緒・集・緣を以つて、眼識乃至意識及び後の了識を生ず。是の如く、現在の行を緣として未來の識を生ずる、是を『行緣にして未來の識あり』と爲す。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の當に欲界の生を受くべきを作し、有漏の口・意・善行の、當に欲界の生を受くべきを作し、善行を作し已りて身壞命終して、若しは人中

【一八】佛の。長十三、大緣方便經（大正 I, p. 60b）(D.15. Mahānidāna-S.には？)參照。
【一九】因・緒・緣等。大緣方便經には「阿難よ、我は此の緣を以つて知る……」。—D. 15: Tasm t ih'Ānanda es'eva hetu etaṃ nidānaṃ eso samudayo esa paccayo……、
【二〇】向ふ等。大緣方便經には「我が說く所の者は、義、此に在り」、

して現世に行ず』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして一切無所有處を離れ、非有想非無想處行を成就する、彼の身業の無教戒にして法入に攝し、意識の所知なる、口業の無教戒にして法入に攝し、意識の所知なる意業と、意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟と、是の如きの身・口・意の善行、是を『不動行が無明緣にして現世に行ず』と名け、是を不動行と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、不善の身・口・意行を作し、不善行を作すが故に、身壞命終して、地獄・畜生・餓鬼に墮し、因・緒・緣を以つての故に、地獄・畜生・餓鬼に墮して五陰身を受く。——是の如く現世の行に緣りて未來の行を受くる、是を『無明緣にして未來の行あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして有漏〔の〕身善行の、當に欲界の生を受くべきを作し、有漏の口善行・意善行の、當に欲界の生を受くべきを作し、善行を爲し已りて、身壞命終して、若しは人中・欲界の天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に人中・欲界天上にて五陰身を受く。——是の如く、現世の行に緣り未來の行を受くる、是を『無明緣にして未來の行あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、有漏の身善行の、當に色界の生を受くべきを作し、有漏の口業行・意善行の、『當に色界の生を受くべきを作し、善行を作し已りて、身壞命終して、色界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に色界天上にて五陰身を受く。——是の如く、現世の行に緣りては未來の行を受くる、是を『無明緣にして未來の行あり』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、有漏の身・口・意の善行の、當に無色界生を受くべきを作し、善行を作し已りて、身壞命終して、無色界天上に生じ、因・緒・緣を以つての故に無色界天上にて四陰身を受く。——是の如く、現世の行に緣りて未來の行を受くる、是を『無明緣にして未

口・意の善行、是を『福行が無明緣にして現世に行ず』と名く。
復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、喜を離れ、捨を行じ、念・知あり、身に樂を受し、諸の聖人の『捨・念・樂・行ず』と解する如く、三禪行を成就する、彼の身業の無教戒にして法入に攝し、意識の所知なる、口業の無教戒にして法入に攝し、意識の所知なる、意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟と、是の如きの身口意の善行、是を「福行が無明緣にして現世に行ず」と名く。
[P.607b]復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、苦樂を斷じ、先に憂喜を滅し、不苦不樂にして捨・念・淨に、四禪行を成就する、彼の身業の無教戒にして法入に攝し、意識の所知なる、口業の無教戒にして法入に攝し、意識の所知なる、意業と、意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟と、是の如きの身・口・意の善行、是を『福行が無明緣にして現世に行ず』と名け、是を福行と名く。
云何が不動行なる。若し人の、無慧・無明・未斷にして一切の色想を離れ、瞋恚想を滅し、若干想を思惟せず、無邊空處行を成就する、彼の身業の無教戒にして法入に攝し、意識の所知なる、口業の無教戒にして法入に攝し、意識の所知なる、意業と、意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟と、是の如きの身・口・意の善行、是を不動行が無明緣にして現世に行ず』と名く。
復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、一切空處を離れ、無邊識處行を成就する、彼の身業の無教戒にして法入に攝し、意識の所知なる口業の無教戒にして、法入に攝し、意識の所知なる、意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟と、是の如きの身・口・意の善行、是を『不動行が無明緣にして現世に行ず』と名く。
復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして一切識處を離れ、無所有處行を成就する、彼の身業の無教戒にして法入に攝し、意識の所知なる、口業の無我會にして法入に攝し、意識の所知なる意業と意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟と、是の如きの身・口・意の善行、是を『不動行が無明緣に

る、是を不善の身行と名く。

云何が不善の口行なる。若し人の、無慧・無明・未斷にして、妄語・兩舌・惡口・綺語、及び餘の不善の口行を行ずる、是を不善の口行と名く。

云何が不善の意行なる。若し人の、無慧・無明・未斷にして、貪欲・瞋恚・邪見を起す、是を不善の意行と名く。

此の身・口・意の不善行を『非福行が無明緣にして現世に行ず』と名く。

云何が福行なる。身善行・口善行・意善行なり。

云何が身善行なる。若し人の、無慧・無明・未斷にして、殺・盜・婬せず、及び、餘の身善行ある、是を身善行と名く。

云何が口善行なる。若し人の、無慧・無明・未斷にして、妄語・兩舌・惡口・綺語せず、及び餘の口善行ある、是を口善行と名く。

云何が意善行なる。若し人の、無慧・無明・未斷にして、無貪・無恚・正見ある、是を意善行と名く。

此の身・口・意の善行、是を『福行が無明緣にして現世に行ず』と名く。

[一六]復次に、若し人の無慧・無明・未斷にして、欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂あり、初禪行を成就する、彼の身業の無敎戒の法入に攝し、意識の所知なる、口業の無敎戒の法入に攝し、意識の所知なる、意業と意に由りて生ずる[一七]受・想・思・觸・思惟と、――是の如きの身・口・意の善行、是を『福行が無明緣にして現世に行ず』と名く。

復次に、若し人の、無慧・無明・未斷にして、覺・觀を滅し、內に信心あり、覺無く、觀無く、定生の喜樂あり、二禪行を成就する、彼の身業の無敎戒の法入に攝し、意識の所知なる、口業の無敎戒の法入に攝し、意識の所知なる、意業と、意に由りて生ずる受・想・思・觸・思惟と、是の如きの身・

【一六】復等。以下、福行の別釋(四禪に釋す)。

【一七】受等。こゝは有部等がたゞ思＝意業とすると對比し、甚しき對比といふべきか。

沙門・婆羅門の正趣・正至にして、若し今世・後世に自ら證知して說くもの無きや』と。若しは法に於て疑惑して心、決定せず、猶豫・二心・疑心ありて了ぜず。無量の疑ありて盡きず、解脫するに非ず。彼の時には有ること無し。若しは沙門・婆羅門有りて異緣すらく、『實に我が世は常なり」――此のみ實にして餘は虛妄あり。乃至、如去は〔涅槃〕す、如去は〔涅槃〕せず』と。彼の時にも亦有ること無し。何に況んや聖緣方便を成就せんか、終に此の煩惱垢無きなり。云何が緣なる。[一一]佛の、諸比丘に告ぐるが如し。「我、當に緣と緣生法とを說くべし。

云何が[一二]緣なる。無明緣にして行あり。――若しは諸佛の世に出づるも、若しは世に出ざるも、法は住し、法界は住す。彼の法界を如來は正覺し正解し已りて、演說・開示・分別・顯現し、『無明にして行あり、乃至、生緣にして老死あり』と說く。若し此の如きの法は如爾にして如爾ならざるに非ず、異ならず、異物ならず、常法・實法・法住・法定なり。是の如き緣――是を緣と名く。

云何が[一三]緣生法なる。老死は[一四]無常・有爲・緣生・盡法・變異法・離欲法・滅法なり。乃至、無明は無常・有爲・緣生法・盡法・變異法・離欲法・滅法なり。是を緣生法と名く」と。

云何が緣方便なる。若しは彼の緣、若しは此の緣生法〔に於て〕若し解射の方便を見る、是を緣方便と名く。

比丘は、幾を齊りて善緣方便と名くるや。彼の緣・此の緣生法〔に於て〕如實に知り、如實に見る。是を齊りて善緣方便と名く。

云何が無明なる。癡不善根、是を無明と名く。

云何が無明緣にして行あるなる。[一五]無明の緣にして福行・非〔○〕福行・不動行あるなり。

云何が非福行なる。不善の身行・不善の口行・不善の意行なり。

云何が不善の身行なる。若し人の、無慧・無明・不斷にして殺・盜・婬、及び餘の不善の身行を行ず

の四本には「內緣」に作る。雜には「內に猶豫せず」、巴、ajjhattaṃ kathaṃkathi bhavissati.

【一〇】 與等。例へば、毘曇部一、初版、p.81; d.c.を參照すべし。

【一一】 佛の等。雜 12, 14 (大正 99, 296—II, 84b)=S. 12, 20 (II, 25 f); 法蘊足論十一中も參照。

【一二】 緣。巴、Paṭiccasamuppādaṃ(acc.)雜には「因緣法」

【一三】 緣生法。巴、Paṭiccasamuppanne dhamme (pl. acc.)—雜も同字。或は緣已生法等など記するものもある。

【一四】 無常以下。巴、"aniccaṃ saṅkhataṃ paṭiccasamuppannaṃ khayadhammaṃ vayadhammaṃ virāgadhammaṃ nirodhadhammaṃ"

【一五】 無明等。毘曇部三、p. 293 參照。

卷の第十二〔P.606a〕

非問分[一]縁品　第五

[二]善縁方便あらば、[三]善く縁を解す。縁方便有り、聖忍にして智に非ず。縁方便有り、聖智にして忍に非ず。縁方便有り、問を受けて因倶生法を答ふらく、『[四]若し此を因とせば此有り。[五]若し因無ければ此無し。[六]若し此生ずれば、此の生ずる有り。[七]若し此の滅すれば此の滅する有り。若し無明縁にして行あり。乃至、生縁にして老・死・憂・悲・苦・惱・苦聚を成就し、是の如くして純苦具足す。無明滅すれば則ち行滅す。乃至、生滅すれば則ち老・死・憂・悲・苦・惱・聚滅し、是の如くして苦聚滅す』と――是れ縁方便を成就するなり。[八]若しは彼の、過去縁に於て疑惑すらく、『我は過去に有なりしや』、『我は過去に有に非ざりしや』、『何の姓か過去の有なりし』、『何の因もてか過去に有なりし』と。若しは未來縁に於て疑惑すらく、『我は未來に有ならむか』、乃至『何の因もてか〔b〕未來に有ならむや』と。若しは彼の[九]因縁を疑惑すらく、『我は云何が有る』、『我は云何が非有なる』、『何の因もてか有なる』、『何の生處ぞ』、『此の衆生は何より來り、去つて何の處にか至る』と。若しは佛に於て疑惑すらく、『是は佛、世尊なりや』、『佛、世尊に非ざるや』、『世尊は善く法を説くや』、『世尊善く法を説かざるや』、『世尊の聲聞衆は善趣なりや』、『世尊の聲聞衆は善趣に非ざるや』、『行は常なりや』、『行は無常なりや』、『行は苦行なりや』、『行は非苦行なりや』、『我法ありや』、『我法非ざるや』、『寂靜涅槃ありや』、『寂靜涅槃非るや』、『[一〇]與有りや』、『與無きや』、『施有りや』、『施無きや』、『祀有りや』、『祀無きや』、『善惡業の果報有りや』、『善惡業の果報無きや』、『今世有りや』、『今世無きや』、『後世有りや』、『後世無きや』、『父母有りや』、『父母無きや』、『天有りや』、『天無しや』、『衆生に化生有りや』、『衆生に化生無きや』、『世に沙門・婆羅門の正趣・正至にして、若し今世・後世に自ら證知して説くもの有りや』、『世に

【一】縁品。Pratyayavarga. 毘崩伽論の VI, Paccayākāra-vibhaṅga に比すべき一品で、所説は色々あるけれども、畢竟ずるに、十二縁起に關する諸種の解説をした一門である。また法蘊足論十一――十二の「縁起品二十一」その他も對捨すべし。

【二】善縁方便等。また一種の論母又は目錄分か知らねど、その形式は、從來のものと甚だ異りといふべし。下出の雜十二の十四＝S. XII, 20 等を參照せよ。

【三】縁方便。巴、Paṭiccasamuppāda-Kusalatā.—cf. Dhammasaṅgaṇi 1336 (p. 229; D. 33, 2, 11 (III, p. 212).

【四】若し等。雜には「此有るが故に彼有り」(又は「是有るが故に是の事有り」巴、Imasmiṃ sati idaṃ hoti,

【五】若し因等。巴、Imasmiṃ asati idaṃ na hoti.

【六】若し此等。巴、imassa uppādā idaṃ uppajjati.（雜、「此起るが故に彼起る」、又は是の事有るが故に是の事起る」）

【七】若し此の滅等。巴、Imassa nirodhā idaṃ nirujjhati.

【八】若し等。又、雜十二の十四＝S. 12, 20中參照。

【九】因縁。宋元明、宮内省

世尊よ」と。諸比丘は至心に聴く。世尊の是の如く說けらく、——「云何が七十七智なる。無明は行に緣たるの智、無明無ければ行無きの智、如し過去も、無明は行に緣たるの智、無明無ければ行無きの智、如し未來も無明は行に緣たるの智、無明無ければ行無きの智、若し[六九]法住智——彼は亦[七〇]盡法・變法・離欲法・滅法たり〔との智〕、乃至、生は老死に緣たるの智、生無ければ老死無きの智、如し過去も、生は老死に緣たるの智、生無ければ老死無きの智、如し未來も生は、老死に緣たるの智、生無ければ老死無きの智、若し彼の法住智は亦盡法・變法・離欲法・滅法たり〔との智〕」と。——是を七十七智性と名く。智品竟り

【六九】法住智。巴、Dhammaṭṭhitiñāṇaṃ
【七〇】盡法等。巴、khayadhammaṃ vayadhammaṃ virāgadhammaṃ nirodhammantiñāṇaṃ

是の如く比丘は行を知る。

云何が比丘の、行の集を知るなる。比丘の、無明の集を以つて行の集なりと知るが如し。是の如く、比丘は行の集を知る。

云何が比丘の、行の滅を知るなる。比丘の、無明の滅を以つて行の滅なりと知るが如し。是の如く比丘は行の滅を知る。

云何が比丘の行滅の道を知るなる。比丘の、如實に八聖道＝正見・正覺・正語・正業・正命・正進・正念・正定を知るが如し。是の如く、比丘は行滅の道を知る。

比丘の、是の如く、行を知り、行の集を知り、行の滅を知り、行滅の道を知る。是を法智と謂ふ。

比丘の、現在に於て智あり、明了・常解し、以つて過去・未來を而も取りて比類す。過去の沙門・婆羅門の已に行を知り、行の集を知り、行の滅を知り、行滅の道を知るが如く、彼(かれら)の一切も已に知る。――我が〔今〕自ら知るが如し。未來の沙門・婆羅門の當に行を知るべく、當に行の集を知るべく、當に行の滅を知るべく、當に行滅の道を知るべきが如く、若し〔彼の(かれら)〕一切も當に知るべし。――我が〔今〕自ら知るが如し。是を比智と名く。

「比丘の、若し[六六]二智＝謂く、法智と比智と、明了ならば、是を『比丘の見解具足し、堪忍を得、勝法を得、無畏を得、此の法に向つて調伏し、此を知りて調伏し、此の法を見て調伏し、學の知あり、學の術あり、法に流向し、梵淨行法に於て必ず能く常住し、甘露門に於て、解射・自在なり』と謂ふ」と。

――是を四十四智性〔P. 606a〕と名く。

云何が七十七智性なる。[六七]世尊の說くが如し。「諸比丘よ、我、當に[六八]七十七智性を說くべし。諦聽せよ、諦聽せよ。善く受けて善く思惟すべし。我、當に說くべし」と。比丘の言へらく、「是の如し、

【六六】二智等。上註參照。

【六七】世尊等。雜14, 18（大正99, 357—II, p. 99c）＝S. 12, 34(II, 59 f)（殊に巴の方が近い）。

【六八】七十七智性。巴、Sattasattari ñāṇavatthūni. 十二緣起支中、無明對行、行對識といふ風にして行ぐ組合せ、十一の各一について、例せば(一)無明は行に緣たり。(二)從つて無明無ければ行も無し。(三)―(四)過去についても然り。(五)―(六)、未來にも亦然り。(七)法住智＝盡法乃至滅法智なりの七見地、總計七十七見地を立て、その各一を智として說けるものである。

比丘は、是の如く、老死を知る。

云何が、比丘の、老死の集を知るなる。比丘の、生の集を以つて老死の集なりと知るが如し。是の如く、比丘は老死の集を知る。

云何が、比丘の老死の滅を知るなる。比丘の、生の滅を以つて老死の滅なりと知るが如し。是の如く比丘は老死の滅を知る。

云何が、比丘の、老死の滅道を知るなる。比丘の、如實に八聖道＝正見・正覺・正語・正業・正命・正進・正念・正定を知るが如し。是の如く、比丘は老死の滅道を知る。

比丘の、若しは老〔○〕死を知り、老死の集を知り、老死の滅を知り、老死の滅道を知る。此は是れ法智なり。

[五五]比丘は現在に於て智あり、明了・常辨し、以つて過去・未來を而も取りて比類す。過去の沙門・婆羅門の已に老死を知り、已に老死の集を知り、已に老死の滅を知り、已に老死の滅道を知るが如く、[五六]彼の一切も已に知る。我が[五七]〔今〕自ら知するが如し。未來の沙門・婆羅門も當に老死の苦を知るべく、當に老死の集を知るべく、當に老死の滅を知るべく、當に老死の滅道を知るべきが如く、彼の一切も當に知るべし。我が〔今〕自ら知るが如し。此は是れ比智なり。

比丘の若し[五八]二智＝謂く、比智と法智と明了ならば、是を『比丘の、具辨具足して、堪忍を得、勝法を得、無畏を得、[五九]此の法に向つて調伏し、此の法知りて調伏し、[六〇]此の法を見て調伏し、[六一]學の知あり、[六二]學の術あり、[六三]法に流向し、[六四]梵淨行に於て必ず能く常住し、[六五]甘露門に於て解射自在なり』と謂ふ。

云何が比丘の生・有・取・愛・受・觸・六入・名色・識〔を知り〕、行を知るなる。

云何が行なる。三行＝身行・口行・意行、是を行と名く。

【五五】 比丘は等。S. 12, 33 (II, p. 58, § 18 f)を參照せよ。
【五六】彼の一切。巴、Sabbo te evaṃ abbhaññaṃsu.
【五七】 今。巴雜に etarahi といふにより、易解に資すべく補入。
【五八】 二智等。原漢文には「二智明了、謂法智、比智」とあれど、和文の都合上、少し順序を變ふ。
【五九】 此の法に向つて調伏し。巴、? tāgato imaṃ saddhammaṃ.
【六〇】 此の法を見て…巴? Passati imaṃ Saddhammaṃ (此の法を知りて……は巴、不記)。
【六一】 學の知あり。巴、Sekhena ñāṇena samannāgato.
【六二】 學の術あり。巴、? Lekhāya vijjāya samannāgato.
【六三】 法に流向し。巴、Dhammasotaṃ samāpanno.
【六四】 梵淨行に於て等。巴、Ariyo nibbedhikapañño.
【六五】 甘露門等。巴、Amatadvāraṃ āhacca tiṭṭhati.

を生じ、明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。比丘よ、(IX)我は此の滅の聖諦を已に證せりと先未聞の法〔に於て〕智を生じ、眼を生じ、覺を生じ、明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。比丘よ、(X)此は道の聖諦なりと先未聞の法〔に於て〕我は智を生じ、眼を生じ、覺を生じ、明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。諸比丘よ、(XI)當に此の道の聖諦を修すべしと、先未聞の法〔に於て〕智を生じ、眼を生じ、覺を生じ、明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。比丘よ、(XII)我は此の道の聖諦を已に修せりと先未聞の法〔に於て〕智を生じ、眼を生じ、覺を生じ、明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。比丘よ、此の四聖諦の三分十二行を、我、若し如實に知らずんば、無上正覺を得ず、亦、得たりと說言せず。比丘よ、此の四聖諦の三分十二行を我は如實に知るが故に、今無上正覺を得、亦得たりと說言す」と。是を十二智性と名く。

云何が四十四智性なる。[五二]世尊の說くが如し。「比丘よ、我、當に[五三]四十四智性を說くべし。諦聽せよ、諦聽せよ。善く受けて善く思惟すべし。我、當に說くべし」と。比丘の言はく、「是の如し、世尊よ。」諸比丘は至心に聽く。世尊の是の如く說けらく、

何等か四十四智なる。是の如く、比丘は、[五四]老死を知り老死の集を知り、老死の滅を知り、老死の滅道・生・有・取・愛・受・觸・六入・名色・識を知り、行を知り、行の集を知り、行の滅を知り、行滅の道を知る。

云何が比丘の老死を知るなる。

云何が老なる。謂く、諸の衆生の、諸の衆中にて衰耗・戰掉し、面皺あり、諸根熟し、命の俱行するが故に是を老と名く。

云何が死なる。謂く、諸の衆生の、諸の衆生〔中〕に終沒し、死盡し、除壞し、陰を捨し、此の物の變異して世を離る、是を死と名く。

【五二】 世尊等。雜一四・一七(大正九九・三五六―二、九九c)＝S・12, 33 (II. 56ff)(殊に巴を參照せよ)。

【五三】 四十四智性。巴、Catuttāras aṃ ñāṇavatthūni (acc. pl.)―十二緣起支中の老死―行までの十支に關する四諦的見解を智にして名けたものに他ならず。

【五四】 老死等。巴は「老死に於る智」(jarāmaraṇe ñāṇaṃ)と。以下も準ず。

是の如く、如來の[四九]漏盡を如實に選擇・分別し、慧に緣りて、解射の方便を知見する、是を有漏盡智如來力と名く。

何をか如來力と謂ふ。〔如來は〕此の處にて智力に由り、尊・自在力・勝力なり、最勝最上にして過る者無く、善人・大人なり。如來は此の力を成就して、欲する所の處には、欲する所の如く、欲する所を盡して出定・入定す。是を如來力と謂ふ。

――此は是れ如來の十力なり。

(7)云何が十二智性なる。[五〇]世尊の說くが如し。「諸比丘よ、當に[五一]十二智性を說くべし。諦聽せよ、諦聽せよ。善く受けて善く思惟すべし。我當に說くべし」と。「比丘の言さく、是の如し」と。諸比丘は至心にして聽く。世尊是の如く說かく、「何等か十二智なる。比丘よ、(I)此は苦の聖諦なりと先未聞の法〔に於て〕、我は智を生じ、眼を生じ、覺を生じ、明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。諸比丘よ、(II)當に此の苦の聖諦を知るべしと、先未聞の法〔に於て〕智を生じ、眼を生じ、覺を生じ、明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。比丘よ、(III)我は此の苦の聖諦を知り已れりと、先未聞の法〔に於て〕智を生じ、眼を生じ、覺を生じ、明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。比丘よ、(IIII)此は集の聖諦なりと先未聞の法〔に於て〕我は智を生じ、眼を生じ、覺を生じ、明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。諸比丘よ、當に知るべし、(V)此の集の聖諦を當に斷づべしと、先未聞の法〔に於て〕智を生じ、眼を生じ、覺を生じ、明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。比丘よ、(VI)我は此の集の聖諦を已に斷ぜりと。先未聞の法〔に於て〕智を生じ、眼を生じ、覺を生じ、明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。比丘よ、(VII)此は滅の聖諦なりと先未聞の法〔に於て〕我は智を生じ・眼を生じ・覺を生じ・明を生じ、術を生じ、慧を生じ、解を生ぜり。諸比丘よ、(VIII)當に此の滅の聖諦を證すべしと先未聞〔b〕の法〔に於て〕智を生じ、眼を生じ、覺

【四九】漏盡。大正本等には智を加ふる（漏盡智と）も、同前三本及び宮內省本によりて改む。

【五〇】世尊等。諸の初轉法輪經――雜15, 17（大正 99, 379―II, p. 103 c）= 安世高譯轉法輪經（大正 II, p. 503）= 義淨譯三轉法輪經（大正 II, p. 504）= S. 56, 11―12（V. p. 420 ff）; cf. Mahāvagga I, 6, 五分律 32（大正 22, p. 788）; 四分律 15（大正 22, p. 104）; &c. 等參照。

【五一】十二智性。以下の十二は要するに、四諦に關する所謂三轉十二法輪に關す。

し、正見業に緣るが故に、身壞命終して、善道——天上・人中に生ると。是の如く、天眼の清淨なること人に過ぎ、衆生の生・死、好色・惡色、善道・惡道、卑・勝を見、衆生を、所造の業の如くに知る。聚落・城邑の中に高臺有るとき、清淨なる眼ある人の、臺上に在りて住し、東方の衆生の西方に往來・周旋するを見、西方の衆生の、東方に往來・周旋するを見、南方の衆生の、北方に往來・周旋するを見、北方の衆生の、南方に往來・周旋する見、自ら臺邊に人の出入・往反・周旋するを見るが如く、是の如く、如來は天眼の清淨なること人に過ぎ、衆生の生死、好色・惡色、善道・惡道、卑・勝を見、乃至、衆生を所造の業の如くに知る。

是の如く、如來の衆生生死智證ありて如實に選擇・分別し、慧に緣りて[四四]解射の方便を知見する、是を衆生生死智證如來力と名く。

何をか如來力と謂ふ。如來は此の處にて、智力に由りて尊・自在力・勝力あり、最勝・最上にして過る者無く、善人・大人なり。如來は此の力を成就し、[p.605c]欲する所の處にて欲する所の如く、欲する所を盡して、出定・入定す。是を如來力と謂ふ。

[四五]何をか有漏盡智如來力と謂ふ。

何をか[四六]有漏と謂ふ。七漏あり。見斷漏・忍斷漏・親近斷漏・遠離斷漏・調伏斷漏・戒斷漏・思惟斷漏なり。是を漏と名く。

云何が[四七]盡漏なる。若し漏の盡・緣の盡・調伏・緣の調伏・離・正離捨・吐・斷・出、是を漏盡と名く。是の如く、如來は自ら及び他が漏盡を如實に知る。泉水あり、清淨にして濁せず。[四八]彼に、若し沙石・螺蜯・黿鼉・魚鼈有り、中に於て遊行す。泉水の邊に於て清淨なる眼ある人あり、彼を見ること明了なり。若し沙石・螺蜯・黿鼉・魚鼈・中に遊行すれば、彼の人は此の沙石・螺蜯・黿鼉・魚鼈の中に於て遊行するを見るが如く、是の如く、如來は自ら及び他の漏盡を如實に知る。

【四四】解射。宋元明。宮內省の四本には解脫に作る。

【四五】何をか等。毘崩伽論 p. 344

【四六】有漏。巴、āsavānaṃ (p. gen.).

【四七】盡漏。巴、āsavānaṃ khayā (abl.)

【四八】彼の上。原大正本等には「若」の字あるも、宋元明の三本によりて省く。

若干の宿命を憶念す——人の自らの聚落より他の聚落に至り、彼の聚落に在り若しは行き若しは住し、若しは坐し、若しは語り、若しは默す。彼の聚落より餘の聚落に至り、彼の聚落に在りて若しは行き若しは住し、若しは坐し、若しは語り、若しは默す。彼の聚落より、餘の聚落に至り、若しは行き、若しは住し、若しは坐し、若しは語り、若しは默す。此の人、後時に自らの聚落に來至し、前の一切の聚落を憶念して以つて難と爲さず。『我は自らの聚落より、他の聚落に至り、我は彼の聚落に在りて是の如く行き、是の如く住し是の如く坐し、是の如く語り、是の如く默せり。我は彼の聚落より餘の聚落に至り〔〇〕我は彼の聚落に在り、是の如く行き、是の如く住し、是の如く坐し、是の如く語り、是の如く默せり。我は彼の聚落より復、餘の聚落に至り、是の如く行き、是の如く住し、是の如く坐し、是の如く語り、是の如く默せり。我は還つて自らの聚落に至れり』と、いふが如し。

是の如く、如來は自ら及び他の無量・若干の宿命を憶念し、若しは一生・二生・三生を憶念し、乃至、此の行を成就すと憶念す。是の如く如來の、憶念宿命智證あつて如實に選擇し分別し、慧に緣りて、解射の方便を知見する、是を憶念宿命智證如來力と名く。

何をか如來力と謂ふ。如來は此の處にて智力に由りて尊・自在力・勝力あり、最勝最上にして過ぐる者無く、善人・大人なり。如來は此の力を成就して、欲す所の處にて、欲する所の如く、欲する所を盡して、出定・入定す。是を如來力と謂ふ。

(IX)[四三]何をか衆生生死智證如來力と謂ふ。是の如く如來は天眼の清淨なること人に過ぐるを以つて衆生の生死・好色・惡色・善道・惡道・卑・勝を見、衆生を所造の業の如くに知る。——衆生の身惡行・口惡行・意惡行あり、聖人を謗ずるの邪見行を成就し、邪見業に緣るが故に、身壞命終して、惡道＝泥犂＝地獄・畜生・餓鬼に墮す。此の衆生は身善行・口善行・意善行あり、聖人を謗ぜざるの正見行と成就

【四三】何をか等。毘崩伽論 P. 343ff.

云何が[三九]入定なる。想定、無想定、隨想定、不隨想定、不共色定、共色定、無勝定に入る、一切の入定、是を入定と名く。

云何が[四〇]垢なる。欲垢・瞋恚垢・愚癡垢・煩惱垢・障・蓋・繫・縛・惡行垢、及び餘の垢法、若しは禪・解脫・定・入定垢、不淨・不起、不清・不妙・汚染業・無光明、是を〔b〕垢と名く。

云何が[四一]淨なる。若しは欲盡・瞋恚盡・愚癡盡・煩惱盡・障・蓋・繫・縛・惡行の盡、及び餘の垢法の盡、若しは禪・解脫・定・入定の無垢、淨・起・淸・妙・不汚染業・有光明、是を淨と名く。

云何が[四二]起なる。初禪より起つて心の二禪に入る如き、初禪より起つて心の三禪に入る如き、初禪より起つて心の四禪に入る如き、二禪より起つて心死三禪に入る如き、二禪より起つて心の四禪に入る如き、三禪より起つて心の四禪に入る如き、是を起と名く。

復、次に、若しは淨は卽ち是れ起、若しは起は卽ち是れ淨なる、是を淨・起と謂ふ。

彼の如來は、禪解脫定入定垢淨起に於て如實に知り、是の如く如來は禪解脫定入定垢淨起に於て選擇・分別して、慧に緣りて解射の方便を知見すれば、見を禪解脫定入定垢淨起智如來力と名く。

何をか如來力と謂ふ。如來は此の處にて智力に由りて尊・自在力勝力あり、最勝・最上にして過ぐる者無く、善人・大人なり。如來は此の力を成就し、欲する所の處にて、欲する所の如く、欲する處を盡して入定・出定す。是を如來力と謂ふ。

(VIII)何をか憶念宿命智證如來力と謂ふ。如來は自及び他の若干の宿命を憶念す。一生・二生・三生・四生・五生・若しは十・二十・三十・四十・五十・百生・若しは千生・百千生・無量百生・無量千生、若しは劫成・若しは劫壞・若しは劫成壞・若しは無量劫成・無量劫壞・無量劫成壞を憶念すらく、我は本・彼に在りて、是の如きの名・是の如きの姓・是の如きの生・是の如きの飮食・是の如きの命・是の如きの命長短あり、是の如く苦樂を受く、彼より終りて彼に生じ、彼より終りて此に生じ、行を成就すと。

【三九】入定。巴、Samāpatti

【四〇】垢。巴、Saṃkilesa

【四一】淨。巴、Vodāna

【四二】起。巴、Vutthāna

若し行ずれば、力に由りて尊・自在を得ることを爲す。衆生の、若し行ずれば、母の命を斷ずること有ること無く、乃至、力に由りて尊・自在なるを得ること有ること無しと。

是の如く、如來は一切處の道に至り、如實に選擇・分別して慧に由りて解射の方便を知見す。是を至一切處道智・如來力と名く。

何をか如來力と謂ふ。如來は此の處にて、智力に由りて、尊・自在力・勝力有り、最勝・最上にして過る者無く、善人・大人なり。如來は此の力を成就して、欲する所の處にて欲する所に如く、欲する處を盡して出定・入定す。是を如來力と謂ふ。

[三五](V)何をか禪解脱定入定垢淨起智如來力と謂ふ。

云何が[三六]禪なる。比丘の、欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂あり、初禪行を成就し、覺・觀を滅し、內淨信あり、一心にして、覺無く、觀なく、定生の喜樂あり、二禪行を成就し、喜を離れて捨行じ、念知あり、身に樂を受し、諸の聖人の『捨・念・樂・行ず』と解するが如く、三禪行を成就し、苦・樂を斷じ、先に憂喜を滅し、不苦不樂にして、捨・念淨に、四禪行を成就するが如き、是を禪と名く。

云何が[三七]解脱なる。色を色と觀ずるは初解脱なり。內に色想無く、外に色を觀ずるは二解脱なり。御解脱は三解脱なり。一切の色想を離れ、瞋恚想を滅し、若干想を思惟せず、無邊空處行を成就するは四解脱なり。一切空處と離れ、無邊識處行を成就するは五解脱なり。一切識處を離れ、無所有處行を成就するは六解脱なり。一切不用處を離れ、非想非非想處行を成就するは七解脱なり。滅受想行を成就するは八解脱なり。是を解脱と名く。

云何が[三八]定なる。有覺有觀定、無覺有觀定、無覺無觀定、空定、無相定、無願定、是を定と名く。

【三五】何をか等。こゝらの解說態度は頗る毘崩伽論（p. 342 f）と彷彿相似するものがある。

【三六】禪。巴、Jhāna.

【三七】解脱。巴、Vimokkha.

【三八】定。巴、Samādhi.

有り。衆生の若し行ずれば、四天王天・三十三天・焰天・兜率天・化樂天・他化自在天に生ずる有り。衆生の、若し行ずれば、梵天——梵輔天・梵衆天・大梵天に生ずる有り。光天——少光天・無量光天・光音天に生ずる有り。衆生の、若し行ずれば、淨天——少淨天・無量淨天・遍淨天に生ずる有り。衆生の、若し行ずれば、實天——少實天・無量實天・果實天に生ずる有り、無想天に生ずる有り。此の衆生の、若し行ずれば、無勝天・無熱天・善見天・妙善見天・阿迦膩吒天に生ずる有り。衆生の、若し行ずれば、空處天・識處天・不用處天・非想非非想處天に生ずる有り。衆生の、若し行ずれば、欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂ありて、初禪行を成就する有り。覺、觀を滅し、內に淨信あり、一心にして、覺無く觀無く、定生の喜樂あり、二禪行を成就する有り。喜を離れて捨を行じ念・知ありて、身に樂を受し、諸の聖人の『捨・念・樂・行ずと解する如く、三禪行を成就する有り。苦・樂を斷じ、先に憂喜を滅し、不苦不樂にして捨・念・淨に、四禪行を成就する有り。衆生の若し行ずれば、一切の色想を離れ、瞋恚想を滅し、若干想を思惟せず、無邊空處行を成就する有り。一切の空處を離れ、無邊識處行と成就する有り。一切識處を離れ、不用處行を成就する有り。衆生の若し行ずれば、一切不用處を離れ、非想非非想處行を成就する有り。衆生の、若し行ずれば、無量・若干の神足を受けて能く大地を動かし、一を以つて多と爲し、多を以つて一と爲し、乃至、梵天まで身の自在を得る有り。天耳の淸淨なること人に過ぎ、二種の聲——人、非人の聲を聞く有り。他衆生・他人の心を知る——有欲心は如實に有欲心と知り、無欲心は如實に無欲心と知り、乃至、有勝心は如實に有勝心と知り、無勝心は如實に無勝心と知り、若しは若干の宿命——一生・二生・三生を憶念し、乃至、法行を成就し、若しは天眼の淸淨なること人に過ぎ、衆生の生・死、好色・惡色、善欲・惡欲、卑・勝、を觀じ、乃至〔p.604a〕衆生を所造の業の如くに知るなり。衆生の、若し行ずれば、正決定に上ることを得、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得る有り。衆生の、

化樂天・他化自在天に至る。多く此の道を修行すれば、牽いて梵天――梵輔天・梵衆天・大梵天に至る。多く此の道行を修行すれば、牽いて光天――少光天・無量光天・光音に至る。多く此の道を修行すれば、牽いて淨天――少淨天・無量淨天・遍淨天に至る。多く此の道を修行すれば、牽いて實天――少實天・無量實天・果實天に至る。多く此の道を修行すれば、牽いて無想天に至る。多く此の道を修行すれば、牽いて無勝天・無熱天・善見天・妙善見天・阿迦膩吒天に至る。多く此の道を修行すれば、牽いて、空處天・識處天・不用處天・非想非非想處天に至る。多く此の道を修行すれば、能く初禪定・二禪・三禪・四禪定に入る。多く此の道を修行すれば、能く空處定・識處、不用處・非想非非想處定に入る。多く此の道を修行すれば、神足證智を得、天耳證智を得、心擇證智を得、憶念宿命證智を得、衆生生死證智を得、〔三三〕此の道は苦にして難なりと解し、此の道は苦なるも速なりと解し、此の道は樂なるも難なりと解し、此の道は樂にして速なりと解す。多く此の道を修行すれば、能く正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得。多く〔三四〕此の道を修行すれば、力に由りて尊・自在を得、衆生の若し行ずれば、母の命を斷ずること有り、父の命を斷ずること有り、阿羅漢たる聲聞の命を斷ずること有り、衆僧を破すること有り、如來身に於て惡心もて出血せしむること有り。衆生の是の法の外に於て餘の尊勝を求むる有り、餘の供養者を求むる有り、餘の沙門・婆羅門の能く正見を說く者を求むる有り。餘の沙門・婆羅門を讃じて是れ一切智・一切見なりと言ふ有り。衆生の若し行ずれば、是の法の外に於て、餘の沙門・婆羅門の、異緣して、『實に我が世は常なり――此は實にして餘は虛妄なり。我が世は非常なり――此は實にして餘は虛妄なり。乃至、如去は〔涅槃有るに非ず〕如去は涅槃無きに非ず――此は實にして餘は虛妄なり』と。謂く異緣なるを眞實と爲す有り。衆生の〔〇〕若し、行ずれば、戒盜を以て淨と爲し、邪緣もて去を求め、地獄・畜生・餓鬼に墮し、第八人身を受く。衆生の若し行ずれば、刹利の大姓の家・婆羅門の大姓家・居士の大家に生ずる

【三三】此の等。集異門足論七――毘曇部一、初版 p. 220 ff の苦遲通行等參照。

【三四】此の。大正本等には記せぬも、宋元明、宮內省の四本によりて補入。

云何が[二九]若干界なる。色界・非色界・乃至、十八界なり。界品に説くが如し。是を[三〇]無量界と名く。

云何が[三一]世なる。二種の世有り。衆生世・行世なり。

云何が衆生世なる。衆生と謂く[三二]五道中――地獄・畜生・餓鬼・人・天中に生ずる、是を衆生世と名く。

云何が行世なる。行とは謂く五受陰――色受陰、受・想・行・識受陰、是を行世と名く。

如來は此の若干界・無量界・世に於て如實に知る。

是の如く、如來は若干界・無量界及び世を如實に選擇・分別し、慧に緣りて解脫の方便を知見すれば、是を若干界・無量界・世智如來力と名く。

何をか如來力と謂ふ。如來は此の處にて、力に由り、尊・自在力・勝力有り、最勝最上にして過る者有ること無く、善人・大人なり。如來は此の力を成就して、欲する所の處にて欲する所の如き、欲する所を證し、出定・入定す。是を如來力と謂ふ。

(VI)何をか至一切道智如來力と謂ふ。

云何が至一切道なる。一衆生の一法・一智・一道たりとも能く一切道に至ること有ること無し。唯、如來の報法有りて、一切道に至ると名くるを得。

如來は如實に至一切道を知る。――若し此の道行を成ずれば、能く牽いて短命・久命至る。若し此の道行を成ずれば、能く牽いて多病・少病に至る。若し此の道行を成ずれば、能く牽いて卑賤貴尊に至る。若し此の道行を成ずれば、能く牽いて醜陋・姝妙に至る。若し此の〔三〕道行を成ずれば、能く牽いて少賤・多賤に至る。若し此の道行を成ずれば、牽いて少威德・多威德に至る。――若し此の道行を成ずれば、牽いて有智慧・無智慧に至る。若し此の道行を成ずれば、能く牽いて刹利の大姓・婆羅門の大姓・居士の大家に至る。若し此の道行を成ずれば、牽いて四天王天・三十三天・焰天・兜率天・

【二九】若干界。巴、Anekadhātuṃ(noo.)
【三〇】無量界。巴、Anandhātuṃ (noo)
【三一】世。巴、Lokaṃ (noo)
【三二】五道中等。原漢文には「五道中生地獄……中」とあるが、この中は梵文の於格をそのまゝ出したものとの見解の下に、漢文としてはやゝ變則的讀方をする。

想を離れ、瞋恚想を滅し、若干想を思惟せず、無邊空處行を成就すること有り、一切の空處を離れ、無邊識處行を成就すること有り、一切の識處を離れ、不用處行を成就すること有り、一切の不用處を離れ、非想非非想處行を成就すること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは若干の神足を獲、能く大地を動かし、一を以つて多と爲し、多を以って一と爲し、乃至、梵天まで身の自在なること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは天耳の清淨なること人に過ぎ、二種の聲――人・非人の聲を聞くこと有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは他衆生・他人の他衆生の心を知る――有欲心は如實に有欲心と知り、無欲心は如實に無欲心と知り、乃至、有勝心は如實に有勝心と知り、無勝心は如實に無勝心と知ること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは若干の宿命を憶念し、一身・二身・三身を憶念し、乃至、此の行を成就すること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは天眼の〔p.603a〕清淨なること人に過ぎ、衆生の生死・好色・惡色、善道・惡道、卑・勝を見、乃至、衆生を、所造の業に如くに知ること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得ることを有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは力に由り、尊・自在なるを解す。〔此の〕衆生は、若しは母の命を斷ずること有ること無きを解す。〔此の〕衆生は若しは、乃至、力に由り、尊・自在なること有る無きを解すと。

是の如く、如來は他衆生、他人の若干の解を、如實に選擇・分別し、慧に緣りて、解射の方便を知見す。是を他衆生・他人若干解智如來力と名く。

何をか如來力と謂ふ。如來は此の處にて、智力に由りて尊・自在力・勝力の、最勝・最上にして過ぐる者無く、善人・大人なり。如來は此の力を成就して、欲する所の處にて、欲する所の如く、欲する處を盡して出定・入定すれば是を如來力と謂ふ。

V何をか若干界無量界及び世智如來力と謂ふ。

斷ずる有り。僧を破壞する有り。如來身に於て、惡心もて出血せしむる有るを解す。〔此の〕衆生は若しは是の法の外に於て、餘の尊勝を求め、供養を受するに堪ゆるも者を求むる有り、餘の沙門・婆羅門の能く正見を說くを讃じ、餘の沙門・婆羅門を此は是れ一切智・一切見なりと讃ずる有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは是の法の外に於て沙門・婆羅門の異緣して「實に我が世は常なり――此は實にして餘の虛妄なり。乃至如去は〔涅槃〕有るに非ず如去は涅槃無きに非ず――此は實にして餘は虛妄なり」と。いふ有るを〔二八〕解す。〔此の〕衆生は若しは戒盜を以つて〔己〕淨と屬し、邪緣もて吉を求め、地獄・畜生・餓鬼に墮し、第八人身を受くること有る解す。〔此の〕衆生は、若しは刹利の大姓の家・婆羅門の大姓の家・居士の大家に生ずること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは四天王天・三十三天・焰天・兜率天・化樂天・他化自在天に生ずるを解す。〔此の〕衆生は、若しは梵大――梵輔天・梵衆天・大梵天に生ずること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは光天――少光天・無量光天・光音天に生ずること有るを解す。〔此の〕衆生は若しは淨天――少淨天・無量淨天・遍淨天に生ずること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは實天――少實天・無量實天・果實天に生ずること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは無想天に生ずること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは無勝天・無熱天・善見天・妙善見天・阿迦膩吒天には生ずること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは空處天・識處天・不用處天・非想非非想處天に生ずること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは欲・惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂ありて初禪行を成就すること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは覺觀を滅し、內に淨信あり、一心にして、覺無く、觀無く、定生の喜樂あり、二禪行を成就すること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは喜を離れ、捨行あり、念知ありて、身に樂を受し、諸の聖人の『捨・念・樂、行ず』と解する如く。三禪行を成就すること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは苦樂を斷じ、先に憂喜を滅し、不苦不樂にして、捨・念・淨に、四禪行を成就すること有るを解す。〔此の〕衆生は、若しは一切の色

【二八】解す。大正本等には「能く」に作るも宋元明、宮內省の四本に從つて改む。

何をか如來力と謂ふ。彼の如來は此の處にて、智力に由り、尊・自在力・勝力あり、最勝・最上にして過る者無く、善人・大人なり。如來は此の力を成就して欲する所の處に欲する所の如く、欲する所を盡して出定し入定すれば、是を如來力と謂ふ。

(Ⅳ) 何をか〔b〕他衆生・他人若干解智如來力と謂ふ。

云何が他衆生・他・人なる。諸佛世尊を除く、若しは餘の衆生・是を他衆生・他人と名く。

云何が[25]解なる。若しは心の彼に向ひ、心の彼に至り、彼を尊上し、彼を解する、是を解と名く。

如來は他衆生・他人に〔於て〕如實に、若干解を知る。――此の衆生は衆を解する有り、勝を解する有り。〔此の〕衆生は惡を解する有り、善を解する有り、生死を解する有り。涅槃を解する有り。〔此の〕衆生は色を解する有り。聲・香・味・觸・法を解する有り。〔此の〕衆生は、刹利の大姓、婆羅門の大姓・居士の大家を解する有り。〔此の〕衆生、四大天王天・三十三天・焰天・兜率天・化樂天・他化自在天を解する有り。〔此の〕衆生は梵天――梵輔天・梵衆天・[26]大梵天を解する有り。〔此の〕衆生は光天――少光天・無量光天・光音天を解する有り。〔此の〕衆生は淨天――少淨天・無量淨天・遍淨天を解する有り。〔此の〕衆生は實天――少實天・無量實天・果實天を解する有り。〔此の〕衆生は無想天を解する有り。〔此の〕衆生は無勝天・無熱天・善見天・妙善見天・阿迦膩吒天を解する有り。〔此の〕衆生は空處天・識處天・不用處天・非想非非想處天を解する有り。〔此の〕衆生は初禪・第二・第三・第四禪に入るを解する有り。〔此の〕衆生は空處定・識處定・不用處定に入り、非想非非想定に入るを解する有り。〔此の〕衆生は神足證智を解する有り。天耳證智を解する有り。心擇證智を解する有り。憶念宿命證智を解する有り。衆生生死證智を解する有り。〔此の〕衆生は、正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得するを解する有り。〔此の〕衆生は力に由り尊・自在なるを解する有り。〔此の〕衆生は若しは能く母の命を斷ずる[27]有り、父の命を斷ずる有り。阿羅漢たる聲聞の命を

【二五】解。巴、adhimutti

【二六】大梵天。宋元明、宮内省の四本は不記。

【二七】有り。諸本、何れも「見」に作るも、寫誤か。

に樂を受し、諸の聖人の『捨・念あり、樂、行ず』と說くが如く、第三禪行を成就すること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、苦樂を斷じ、先に憂・喜を滅して、不苦不樂にして捨・念淸淨に、四禪の行を成就すること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、一切の色想を離れ、瞋恚を滅し、若干想を思惟せず、無邊空處行を成就すること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、一切空處を離れ、無邊識處行を成就すること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、一切識處を離し、不用處行を成就すること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、一切不用處を離れて、非想非非想處行を成就すること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、無量若干の神足を受け、能く大地を動かし、一を以つて多と爲し、多を以つて一と爲し、乃至、梵天まで身の自在を得るが如きこと有らむ。此の衆生は若し根を成就して、天耳の淸淨にして人に過ぎ、二種の聲――人聲、非人聲を聞くこと有らむ。此の衆生は若し根を成就して、他衆生・他人の心を知り、有欲心は如實に有欲心と知り、無欲心は如實に無欲心と知り、[三三]乃至、有勝心は如實に有勝心と知り、無勝心は如實に無勝心を知ること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、若干の宿命を憶念し、一生・二生・三生を念じ、乃至、此の行を成就すること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、天眼の淸淨にして人に過ぎ、衆生の生・死、好色・惡色、善道・惡道、卑・勝を見、乃至、如實に衆生所造の業を知ること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得、阿羅漢果を得ること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、有力なり、有力に由りて、自在なり、行を成就すること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、母の命を斷ずること有ること無く、乃至、力に由りて自在なり、行を[三四]成就せむ。と

如來は此の如く、他衆生・他人の根の勝・非勝を如實に選擇分別し、慧に緣りて解射の方便を知見すれば、是を他衆生・他人根勝・非勝智如來力と名く。

【三三】乃至の下。原漢典には知の字あるも、理によりて今は省く。

【三四】成就せむ。或は、この肯定文は本上に已に出せること故、こゝは「成ずること」〔無けむ〕と、母の命の斷にかけたる無の字が此處にまで及び來る心なるやも計られず。

る者有るべし。此の衆生は若し根を成就して、母の命を斷ずること有らむ、父の命を斷ずること有らむ、阿羅漢たる聲聞の命を斷ずること有らむ、衆僧を破すること有らむ、如來の身に於て惡心もて血を出すこと有らむ。此の衆生は若し根を成就して、是の法の外に於て餘の尊勝を求むること有らむ、餘の受供難者を求むること有らむ。餘の沙門・婆羅門の、能く正見を說くと謂はむ、餘の沙門・婆羅門を。此は是れ一切智・一切見なりと讃歎すること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、是の法の外に於て餘の沙門・婆羅門有りて、異緣して、「實に我が世常なり――餘は虛妄なり、乃至、如去は涅槃有るに非ず、無きに非ず――此は實にして餘は虛妄なり」といふに、異緣を謂ひて實に眞實と僞さむ。此の衆生は若し根を成就して、戒盜を以つて淨と僞し、邪緣もて去を求め、地獄、畜生・餓鬼に墮し、第八人身を受くること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、刹利の大姓の家・婆羅門の大姓の家・居士の大姓の家に生ずること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、[二]四天王、・三十三天・焰天・兜率天・化樂天・他化自在天に生ずること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、[三]梵天――梵輔天・梵衆天・大梵天に生ずること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、光天――少光天・無量光天・光音天に生ぜむ。此の衆生は若し根を成就して、淨天――少淨天・無量淨天・遍淨天に生ぜむ。此の衆生は若し根を成就して、實天――少實天・無量實天果實天に生ぜむ。此の衆生は若し根を成就して、無想天に生ずること有らむ。此の衆生は然し根を成就して、無勝天・無熱天・善見天・妙善見天・阿迦膩吒天に生ずること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、空處天・識處天・不用處天・非想非非想處天に生ずること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、欲惡・不善法を離れ、覺有り、觀有り、離生の喜樂あり、初禪の行を成就すること有らむ。此の衆生は若し根を成就して、覺・觀を滅し、內に正信あり、一心にして、覺無く、觀無く、定王の喜樂あり、二禪の行を成就すること有らむ。此の衆生は〔p.602a〕若し根を成就して、喜を離れ捨行じ、念あり、智ありて身

【二】四天王等。論集部一、立世毘曇中の拙註參照。
【三】梵天等。同上。以下すべて然り。

來は此の如きの力を成就し、欲する所の處にて、欲する所の如く、欲する所を盡して入定し出定する、是を如來力と謂ふ。

3 何をか他衆生・他人根勝・非勝智如來力と謂ふ。

云何が[17]他衆生・[18]他人なる。諸佛世尊を除く、若し餘の衆生なる、是を他衆生・他人と名く。

云何が[19]根なる。[20]二十二根、――眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・男根・女根・命根・樂根・苦根・喜根・憂根・捨根・意根・信根・進根・念根・定根・慧根・未知欲知根・根知・已知根・是を根と名く。

云何が非勝根なる。若し根の不善なる、是を非勝根と名く。

云何が勝根なる。若し根の善なる、是を勝根と名く。

復次に、非勝根とは、若し根の是れ聖に非ざる。是を非勝根と名く。

復次に勝根とは、若し根の聖なる、是を勝根と名く。

復次に非勝根とは、若し根の聖にして軟なる、是を非勝根と名く。

復次に、勝根とは、若し根の聖にして利なる、是を勝根と名く。

如來は、他衆生・他人の根の勝・非勝に於て如實に知るらく、此の衆生は利根なり、軟根なり、善徹・善解なるも、恐らくは、後に沈沒して金剛の如くならむ。法を聞かざるを以つて便ち退せむ。當に法を知る者有るべしと。譬へば優鉢羅花池・波頭摩華池・拘頭摩華池・分陀利華池に若し優鉢羅華・鉢頭摩華・拘頭摩華・分陀利華あるに、有る優鉢羅華・鉢頭摩華・拘頭摩華・分陀利華は泥より出るも未だ水を出でず、有る優鉢羅華・鉢頭摩華・拘頭摩華・分陀利華は泥より出でゝ水と等しく、有る優鉢羅(三)華・鉢頭摩華・拘頭摩華・分陀利華は已に水を出でゝ空中に住し、水に著せざるが如し。是の如く、如來は他衆生・他人の根の勝・非勝を如實に知るらく、此く衆生は利根なり、軟根なり、善徹・善解なるも、恐らくは後に沈沒して金剛の如くならむ。法を聞かざるを以つて便ち退せむ、當に法を知

【一七】他衆生。巴、Paraṣatta=tānaṃ (p. gen.)
【一八】他人。巴、Parapugg=alānaṃ(?)
【一九】根。巴、Indriya.
【二〇】二十二根。間分根品中參照。(卷第五)

乘・僮使多く、穀帛の、倉庫に盈滿する、是を處と謂ふ。若しは一の如來・無所著・等正覺の出世する、若しは如來・無所著・等正覺・の中國に生るゝ、若しは如來・無所著・等正覺の尊貴の家――剎利の大姓の家、婆羅門の大姓の家に生れ、端正・姝妙にして身相を成就する、若しは如來・無所著・等正覺の財寶多き家に生れ、金銀・錢財・玉貝・象馬・車乘・僮使有り、穀帛の倉庫に盈滿する、是を處と謂ふ。若しは男子の、轉輪聖王と爲る。若しは男子の、如來・無所著・等正覺と爲る。若しは男子の、天帝釋と爲り、魔王と爲り、梵王と爲る。是を處と謂ふ。復次に、如來の說かく、此の如きの時、地獄中に住し、畜生中に住し、此の如きの時餓鬼中に住し、此の如きの時人中に住し、此の如きの時天上に住すと。是を處と謂ふ。

何をか[一五]因と謂ふ。若しは業の貪を因とする、若しは業の恚を因とする、若しは業の癡を因とする、若しは業の不貪を因とする、若しは業の不恚を因とする、若しは業の不癡を因とする、是を因と謂ふ。

復次に、色は此の因、此の方便有り。受・想・行・識は此の因、此の方便有り。初禪定に入るは〔已〕此の因、此の方便有り。第二・第三・第四禪定に入り、惡法を斷じ、善法を成就する、是を因と謂ふ。

何をか[一六]報と謂ふ。若しは業・受業の、五道中の報を受る地獄・畜生・餓鬼・人・天の色・受・想・行・識、是を報と謂ふ。

此の過去・未來・現在の業・受業の處・因・報を如來は如實に知る。是の如く、如來は過去、未來、現在、の受業の處・因・報を如實に知り、如實に分別し、如實に解す。

是の如く、緣・慧に緣りて、解射の方便を知見する、是を過去・未來・現在・業・受業處因報智如來力と名く。

何をか如來力と謂ふ。如來は此の處に、智力由りて尊・自在・勝尊・最上・無勝・善人・大人たり。如

【一五】因。巴、hetuso.

【一六】報。巴、Vipākaṃ (a=cc.)

殺生せざるに緣るが故に種々心を以つて喜・樂を受く。喜を忍び、樂を忍び乃至、正見あり。正見に緣るが故に種々心を以つて喜・樂を受け、身壞命終して善道・天上に生ず。此は受業の現に樂にして後にも樂報有るなり。——是を受業と名く。

復次に、業・受業を以つて敎取し、敎取し已りて報を受く、是を過去・未來・現在業・受業と云ふ。

何をか[一三]處と謂ふ。若し身惡行・口惡行・意惡行の、不愛・不喜・不適意の報を受くる、是を處と謂ふ。若し身善行・口善行・意善行の、愛・喜・適意の報を受くる、是を處と謂ふ。若し身惡行・口惡行意惡行あり。聖人を謗ずるの邪見行を成就して、邪見業の因緣に緣るが故に、身壞命終して惡道・地獄に墮する、是を處と謂ふ。若し身善行・口善行・意善行あり。〔p.601a〕聖人を謗ぜざるの正見行を成就し、正見業の因緣に緣るが故に、身壞命終して、善道・天上に生るゝ。是を處と謂ふ。若し凡夫人の故らに母の命を斷じ、故らに父の命・羅漢たる聲聞の命を斷じ、故らに衆僧を破し、故らに如來身に於て、惡心もて出血せしむる、是を處と謂ふ。若し凡夫人の、是の法の外に於て餘の尊勝を求め、餘の受供養を求め、餘の沙門・婆羅門の正見を說くを求め、餘の沙門・婆羅門を讃じて是れ一切智・一切見と言ふ、是を處と謂ふ。若し凡夫人の、是の法の外に於て、若し沙門・婆羅門有り、異緣して「實に我が世常なり——此は實にして餘は妄語あり。乃至、[一四]如去は涅槃有るに非ず、如去は無きに非ず」と。異緣を以つて、實に眞實と爲す。是を處と謂ふ。若し凡夫人の、戒盜を以つて淨と爲し、邪緣を以つて吉を求め、地獄・畜生・餓鬼に墮し、第八人身を受くる、是を處と謂ふ。若しは一の轉輪聖王ある、若しは轉輪聖王の中國に生るゝ、若しは轉輪聖王の尊貴の家、——若しは剎利の大姓の家、若しは婆羅門の大姓の家、若しは長者の大姓の家に生じ、若しは端正・姝妙にして身相を成就する、若しは轉輪聖王の生れて財寶・金銀・珂貝・珊瑚・摩尼・眞珠・琉璃・象馬・車

【一三】處。巴、ṭhāna.

【一四】如去等。漢文を和文に直すにつき少し改めて讀む。

何等か現在業なる。若し業の生じて、未だ滅せざる、是を現在業と名く。

何等か[七]業なる。[八]思業・思已業、故作業・非故作業、受業・非受業、少受業・多受業、熟業・非熟業・色業・非色業、可見〔○〕業・不可見業、有對業・無對業、聖業・非聖業、是を業と名く。

云何が受業なる。[九]世尊の說くが如し。四受業有り。受業の、現に苦にして後にも苦報有る有り。[一〇]受業の現在は樂にして段に苦報有る有り。受業の現に苦にして後には樂報有る有り。受業の現にも樂にして後にも樂報有る有り。

何等か受業の現に苦にして後にも苦報有るなる。若しは人有り、[一一]憂を忍び、苦を忍びて殺生し、殺生に緣るが故に種々心を以つて[一二]憂苦を受け、憂を忍び、苦を忍びて竊盜・邪婬・妄言・兩舌・惡口・綺語、貪著・瞋恚・邪見し、邪見に緣るが故に、種々心を以つて憂苦を受け、身壞命終して惡道・地獄に生ず。此は、受業の現に苦にして後にも苦報有るなり。

何等か受業の現に樂にして後には苦報有るなる。若しは人の喜を忍び、樂を忍びて殺生し、殺生に緣るが故に種々心を以つて、喜を忍び、樂を忍び、乃至、邪見あり。邪見に緣るが故に、種々心を以つて喜を忍び、樂を忍びて身壞命終して惡道・地獄に墮す。此は受業の現に樂にして後に苦報有るなり。

何等か受業の現に苦にして、後には樂報有るなり。若しは人の、憂を忍び、苦を忍びて殺生せず、殺生せざるに緣るが故に種々心を以つて憂・苦を受く。憂を忍び、苦を忍びて、竊盜せず、邪婬せず、妄語せず、兩舌せず、惡口せず綺語せず、貪著せず、瞋恚せず、正見あり。正見行に緣るが故に種々心を以つて憂苦を受け、身壞命終して、善道・天上に生ず。此は受業の現に苦にして後には樂報有るなり。

何等か受業の現に樂にして後にも樂報有るなる。若しは人の、喜を忍び、樂を忍びて殺生せず。

【七】業。巴、Kamma.
【八】思業等。非問分業品中を見よ。
【九】世尊等。また同上中參照。(集異門足論八——毘曇部…、初版、p.204 ff も參照)。
【一〇】受業。巴、Samādāna.
【一一】憂を忍び等。集異門足論には「憂苦と俱なる」と。以下も準知すべし。
【一二】憂苦を受け。同上、「憂を得、苦を得」と。

著・等正覺の、尊貴の家——若しは刹利の大姓の家、婆羅門の大姓の家に生れ、端正・姝妙の顏色あり、第一の身相を成就するは是の處有り。非處は若し如來・無所著等正覺の、貧賤の家に生れ、多く飮食・衣服に乏しき所有るは是の處有ること無し。是處は、若し、如來・無所著・等正覺の、財寶多き家に生れ、金銀・錢財・玉貝・珊瑚・摩尼・眞珠・琉璃・象馬・車乘・僮使有り、穀帛の、倉庫に盈溢するは是の處有り。非處は、若し女人の轉輪聖王と爲るは是の處有ること無し。是處は、若し男子の轉輪聖王と爲るは是の處有り。非處は、若し女人の如來・無所著・等正覺と爲るは、是の處有ること無し。是處は、若し、男子の如來・無所著・等正覺と爲るは、是の處有り。非處は、若し女人の天帝釋と爲り、魔王と爲り、梵王と爲るは是處有ること無し。是處は、若し、男子の天帝釋と爲り、魔王と爲り、梵王と爲るは、是の處有り。

非處は、因無きが如く、門無きが如く、物無きが如く、悕望無きが如く、有ること無きが如し——是の如きは非處なり。〔是處は〕因・門・物・悕望の如[五]く、有ること有るが如し——是の如きは是處なり。〔是の如きの〕[六]處・非處を如來は如實に知り、是の如く如來は、處・非處を如實に分別し、如實に解す。

是の如く慧に緣りて、解射の方便を知見する、是を處非處智・如來力と名く。

何をか如來力と謂ふ。如來は此の處にて智力に由りて尊・自在・勝尊・最上・無勝・善人・大人なり。如來は此の如きの力を成就して、所欲の處にて、所欲の如く、所欲を盡して入定し、出定すれば、是を如來力と謂ふ。

(2)云何をか過去・未來・現在業受業處因報智如來力と謂ふ。

云何が過去業なる。若し業の生じて已に滅せる、是を過去業と名く。

何等か未來業なる。若し業の未だ生ぜず、未だ出でざる、是を未來業と名く。

【五】如く。大正本等には「知る」に作る。宋元明、宮內省の四本に照して改む。

【六】處。大正本等缺。同上四本によりて加ふ。

卷の第十一〔p.600a〕

非問分智品　第四【其の三】[一]

[二]非處は、若し見を具足する人の、若しは戒盜を以つて淨と爲し、邪緣もて吉を求め、地獄・畜生・餓鬼に墮し、[三]第八人身を受るは是の處有ること無し。是處は、若し凡夫人の、若し戒盜を以つて淨と爲し、邪緣して吉を求め、地獄・餓鬼・畜生に墮し、第八人身を受ることは是の處有り。非處は、未だ曾て二の轉輪聖王の出世すること有りとは、[四]是の處有ること無し。是處は、曾て一の轉輪聖王の出世すること有るは、是の處有り。非處は、若し轉輪聖王の邊國に生ずるは、是の處有ること無し。是處は、若し轉輪聖王の中國に生ずるは是の處有り。非處は、若し轉輪聖王の卑賤の家――若しは旃陀羅が家、及び諸の工師の家に生れ、若しは聾盲・瘖瘂・攣躄・跛蹇、偏枯身、不具足たり、及び餘病有るは是の處有ること無し。是處は、若し轉輪聖王の、尊貴の家――若しは刹利の大姓の家、若しは婆羅門の大姓の家、若しは長者の大姓の家に生れ、若しは端正姝妙の身相を成就するは是の處有り。非處は、若し轉輪聖王の、貧賤の家に生れ、乏少する所多く、財産・飲食・衣服有ること無きは、是の處有ること無し。是處は、若し轉輪聖王の、多財の家に生れ、金・銀・錢、財・玉貝・珊瑚・摩尼・眞珠・琉璃・象馬・車乘・僮使有り、穀帛の倉庫に盈滿するは、是の處有り。非處は、未だ曾て二の如來・無所著・等正覺の出世すること有るは、是の處有ること無し。是處は、若し一の如來・無所著・等正覺の出世するは、是の處有り。非處は、若し如來・無所著・等正覺の邊國に生ずるは、是の處有ること無し。是處は、若し如來・無所著・等正覺の中國に生ずるは是の處有り。非處は、若し如來・無所著・等正覺の卑賤の家――若しは旃陀〔b〕羅の家、及び諸の工師の家に生れ、聾盲・瘖瘂・攣躄・跛蹇、偏枯不具足たり、及び餘の病あるは是の處有ること無し。是處は、若し如來・無所

【一】【其の三】。原漢には「の餘」に作る。

【二】非處は。前卷末の註を見よ。尙、こゝは前卷末以來の如來十力の一の解說の續文である。

【三】第八人身。毘曇部三、P. 278 註〔二三四〕第八有中參照。

【四】是の等。原漢文には「…出世有者無是處」とある。このまゝでも、讀めぬこともないが、上來及び以下の文に照らして今の如く改む。

——此は實にして餘は虛妄なり。身は是れ命なり——此は實にして餘は虛妄なり。身とは命は異り——此は實にして餘は虛妄なり。無命・無身なり——此は實にして餘は虛妄なり。如去の涅槃有り——此は實にして餘は虛妄なり。如去の涅槃無し——此は實にして餘は虛妄なり。如去「の涅槃」有り、如去の涅槃無し——此は實にして餘は虛妄なり。如去の「涅槃」有るに非ず、如去の涅槃無きに非ず——此は實にして餘は虛妄なり』——異緣するを實に眞實と爲すは、是の處有ること無し。是處は、若し凡夫人の若し是の法の外に於て、若し沙門・婆羅門の異緣有りて、實に、我が世は常なり——此は實にして餘は虛妄なり。乃至、如去は「涅槃」有るに非ず、如去は涅槃なるに非ず』と異緣するを實に眞實なりと爲すは是の處有り。[四二]

【四二】有りの下。原本には何「非處は」を記するも、こは當然の事情により、次卷に送る。

具足する人の故らに父の命を斷ずるは是の處有ること無し。是處は、若し凡夫人の故らに父の命を斷ずるは是の處有り。非處は、若し見を具足する人の故らに羅漢たる聲聞の命を斷ずるは是の處有ること無し。是處は、若し凡夫人の故らに羅漢の命を斷ずるは是の處有り。非處は、若し見を具足する人の故らに衆僧を破するは是の處有ること無し。是處は、若し凡夫の故らに衆僧を破するは是の處有り。非處は、若し是を具足する人の如來身に於て惡心もて血を出すは是の處有ること無し。是處は若し凡夫人の如來の身に於て惡心もて血を出すは是の處有り。非處は、若し見を具足する人の是の法の外に於て餘の尊勝を求むるは是の處有ること無し。是處は、若し凡夫人の是の法の外に於て、餘の尊勝を求むるは是の處有り。非勝は、若し見を具足する人の是の法の外に於て、餘の受供養者を求むるは是の處〔〇〕有ること無し。是處は、若し凡夫人の是の法の外に於て餘の受供養者を求むるは、是の處有り。非處は、若し見を具足する人の是の法の外に於て餘の沙門・婆羅門の正見を說くを求むるは、是の處有ること無し。是處は、若し凡夫人の是の法の外に於て、沙門・婆羅門の正見を說くを求むるは、是の處有り。非處は、若し是を具足する人の、是の法の外に於て、若し餘の沙門・婆羅門の說法するを此は一切智・一切見なりと讚言するは是の處有ること無し。是處は、若し凡夫人の、是の法の外に於て、若し餘の沙門・婆羅門の說法するを、此は一切智・一切見なりと讚言するは是の處有り。非處は若し見を具足する人の、若し是の法の外に於て、若し沙門・婆羅門有り、異緣して『實に我が世は常なり――此は實にして餘は虛妄なり。我が世は非常なり。――此は實にして餘は虛妄なり。我が世は常・非常なり。――此は實にして餘は虛妄なり。我が世は常に非ず、無常に非ず――此は實にして餘は虛妄なり。我が世は有邊なり――此は實にして餘は虛妄なり。我が世は無邊なり――此は實にして餘は虛妄なり。我が世は有邊・無邊なり――此は實にして餘は虛妄なり。我が世は非有邊・非無邊なり――此は實にして餘は虛妄なり。命是れ身なり

復次に定順法とは、若し法を思惟して定の生ずる、是を定順法と名く。

善く法相を取り、善く思惟し、善く解する、是を善取順不順法相善思惟善解と謂ひ、是を九方便と名く。

(6)云何が[三六]如來の十力なる。(I)處・非處智如來力、(II)過去・未來・現在業受業處因報智如來力、(III)他衆生・他人根勝・非勝智如來力(IV)「他衆生・他人若干解智如來力、(V)若干界・無量世界智如來力、(VI)一切道至處智如來力、(VII)禪解脫定入定垢淨起智如來(三)力、(VIII)憶念宿命證智如來力(IX)、衆生生死證智如來力、(X)有漏盡智如來力なり。

[三七](I)何をか處・非處如來力と謂ふ。

云何が處・非處なる。非處は謂く、身行の惡・口行の惡・意行の惡にして、謂く、愛喜・適意の報を受るは非處なり。若し身行の惡・口行の惡・意行の惡にして不喜・不愛・不適意の報を受るは是の處有り。非處は謂く、身行の善・口行の善・意行の善にして、不愛・不喜・不適意の報を受くは非處なり。若し身行の善・口行の善・意行の善にして愛喜・適意の報を受るは是の處有り。非處は謂く、身行の不善・口行の不善・意行の不善なる、謗聖人の邪見業を成就するが、彼の因緣を[三八]故として身壞命終して善道――人天の中に生ずるは非處なり。若し身行の不善・口行の不善・意行の不善なる、謗聖人の邪見行を成就するが、邪見業を緣とするの故に、彼の因緣の故に身壞命終して惡道――地獄中に生ずるは、是の處有り。非處は、若し身善行・口善行・意善行あり、不謗聖人の正見行を成就するが、正見業の因緣を緣とするが故に、身壞命終して惡道――地獄中に生ずるは非處なり。若し身善行・口善行・意善行あり、不謗聖人の正見行を成就するが、[三九]正見業の因緣を緣とするが故に身壞命終して善道――人天の中に生ずるは是の處有り。非處は若し[四〇]見を具足する人の、故らに母の命を斷ずるは是の處有ること無し。是處は若し凡夫人の故らに母の命を斷ずるは是の處有り。非處は若し見を

【三六】 如來の十力。Vibhaṅga p. 335ff; m. 12, Mahāsīhanāda-s. 雜二六の諸經、その他參照。

【三七】 何をか等。毘曇部三、p. 270ff 參照。

【三八】 故として。宋元明、宮内省の四本には「以つて」に作る。

【三九】 正見行等。大正本等には原漢文として、緣行正見業因緣とありて、「正見業を行ずる因緣を緣として」と讀まれぬではなきも、行は前後の行の字の或は眼移り的に誤入せるものかと解し、暫く省いて讀む。

【四〇】 見を等。巴、Diṭṭhisampanno (nom.)

り、是は無覺有觀なり、是は無覺無觀なり、是は空なり、是は無相なり、是は無願なり、是は出定なり、是は出定し已る、是は法勝の出定なりと、若し解射の方便を知見する、是を出定方便と名く。

云何が定境界方便なる。若し法を思惟して定の生ずる、若し法の是れ定境界なるに、若し解射の方便を知見するを定境界方便と名く。

云何が定行處方便なる。定行とは謂く四念處にして、若し解射の方便を知見する、是を定行處方便と名く。

云何が定樂方便なる。定樂とは謂く、[三四]除樂業・定樂名字・定樂觸・定樂思惟あり、是は有覺有觀の定樂なり、是は無覺有觀のなり、是は無覺無觀のなり、是は空のなり、是は無相のなり、是は無願定のなり、是は定樂のなり、定は法勝定樂なりと、若し解射の方便を知見する、是を定樂方便と名く。

云何が轉定方便なる。初禪心より起つて二禪心に入りて住し、初禪心より起つて三禪心に入りて住し、初禪心より起つて四禪心に入りて住し、二禪心より起つて三禪心に入りて住し、二禪心より起つて四禪心に入りて住し、三禪心より起つて四禪心に入りて住し、若し解射の方便を知見する、是を轉定方便と名く。

何をか善取と謂ふ。順不順の法相を善く思惟し、善く解するなり。

云何が非定順法なる。若し法の不善なる、是を非定順法と名く。

云何が定順法なる。若し法の善なる、是を定順法と名く。

復次に非定順法とは。若し法の有勝なる、是を非定順法と名く。

復次に定順法とは、若し法の無勝なる、是を定順法と名く。

復次に非定順法なる。若し法を思惟して定の生ぜざる、是を非定順法と名く。

【三四】除。定の誤寫か。

云何が滅比智なる。若し人の已行の「法にかて」滅法智を生じ、及び餘の滅諦所攝の法中にて、彼の生の如く、彼の相の如く、彼の如く、比類して『此は彼の如く、彼は此の如し』とて若し聖・無漏智に於て比類して相を知りて餘す無き、是を滅比智と名く。

云何が道法智なる。若し聖道の出要にして正しく苦法を滅する中にて道と見、無我と見、道と思惟し、聖・無漏智に於て比類するに非ずして相を知りて餘す無き、是を道法智と名く。

云何が道比智なる。若し人の[三一]已行の法「に於て」道法智を生じ、及び餘の道諦所攝法中にて、彼の生の如く、彼の相の如く、彼の如く比類して『此は彼の如く、彼は此の如し』とて聖・無漏智に於て比類して相を知りて餘す無き、是を道比智と名く。

(5)云何が九方便なる。定定方便・定入定方便・定住方便・出定方便・定境界方便・定行處方便・定樂方便・轉定方便・[三二]順・不順法善法相善思惟善解なり。

云何が定定方便なる。定定衆・定定名字・定定觸・定定思惟あり、是は有覺有觀定なり、是は無覺有觀定なり、是は無覺無觀定なり、是は空定なり、是は無相定なり、是は無願定なり、是は定なりと若し[三三]解射の方便を知見するなり。

云何が定入定方便なる。入定衆・入定名字・入定觸・入定思惟あり、是は有覺有觀なり、是は無覺有觀なり、是は無覺無觀定[三四]なり、是は空・無相・無願定なり、定に入る、是の定に入る、是の定に入り已る、是は法勝の入定なりと、若し解射の方便を知見する、是を定入定方便と名く。

云何が定住方便なる。定住衆・定住名字・定住觸・定住思惟あり、是の定住は有覺有觀なり、是は無覺有觀なり、是は無覺無觀なり、是は空・無相・無願定なり、是は定住す、定住し已る、是は法勝の定住なりと、若し解射の方便を知見する、是を定住方便と名く。

云何が出定方便なる、出定衆・出定名字・出定觸・出定思[1.599c]惟あり、是の出定は有覺有觀な

【三一】已行の法。大正本等には以法行に作り、宋元明、宮内省の諸本には以を已に作るも、更に前來の文に反省して所記の如く改む。

【三二】順不順等。下の文中には善取順不順法相善思惟善解と記す。今も順不順法相善取善思惟善解の誤傳す。

【三三】解射。以下皆、同樣に作るも、射は脫の寫誤なるべく、上來、幾度かその例を見た所である。

【三四】定。宋元明、宮内省の四本は缺く。

趣するの人の是の法中に於て明了なり。及び餘の沙門・婆羅門の是の如く識を知り、識の集を知り、識の滅を知り、識滅の道を知り、識の味を知り、識の過患を知り、識の出を知らば、識を厭ひ、欲を離れ、滅を證し、解脱して復生ぜず、善く解脱す。若し善く解脱するの人は純善なり。若し純善の人は復、生ずるの處無し。——是の如きは比丘の七處方便なり。

云何が比丘の[二七]三種の觀なる。如し比丘の界を觀じ、入を觀じ、[二八]緣を觀ずる、是の如きは比丘の三種の觀なり。

七處の方便と六種の觀と、比丘の是の法中に於て純善遠聞なるを尊丈夫と謂ふと。是を七處の方便と名く。

(4)[二九]云何が苦法智なる。若し有漏・有爲の苦諦所攝の法に「於て」若しは苦を見、若しは無我を見、苦を思惟し、聖・無漏智に於て比類するに非ずして相を智りて餘す無き、是を苦法智と名く。

云何が苦比智なる。若し人の已行の「法に於て」苦法智を生じ及び餘の苦諦所攝の法中にて、彼の生の如く、彼の相の如く、彼の如く比類して『此は彼の如く、彼は此の如し』とて若し彼の聖・無漏智に於て比類して相を知りて餘す無き、是を苦比智と名く。

云何が集法智なる。若し苦因・苦緒・苦集を若しは集と見、無我と見、集と思惟して、聖・無漏智に於て比類するに非ずして相を知りて餘す無き、是を集法智と名く。

云何が集比智なる。若し人の[三〇]已行の「法に於て」集法智を生じ、及び餘の集諦所攝の法中にて、彼の生の如く、彼の相の如く、彼の如く比類して『此は彼の如く、彼は〔〇〕此の如し』とて、聖・無漏智に於て比類して相を智り、餘す無き、是を集比智と名く。

云何が滅法智なる。若しは苦を盡し、煩惱を盡し、漏法を盡す中にて若し滅を見、無我を見、滅を思惟し、聖・無漏智に於て比類するに非ずして相を知りて餘す無き、是を滅法智と名く。

【二七】三種の觀。巴、Tividhūpaparikkhī(三種の觀者——主格)。
【二八】緣。宋元明、宮内省の諸本及び雜等の諸經は陰に作る。巴は今の如く緣に作る。
【二九】云何が等。苦法智等の八智を明かす。
【三〇】已。大正本等には以に作るも、宋元明、宮内省の四本により改む。

、趣す。若し善く趣するの人は是の法中に於て明了なり。及び餘の沙門・婆羅門の是の如く行を知り、行の集を知り、行の滅を知り、行滅の道を知り、行の味を知り、行の過患を知り、行の出を知らば、行を厭ひ、欲を離れ、滅を證し、解脫して復、生ぜず、善く解脫す。若し善く解脫するの人は純善なり。若し純善の人は復、生ずるの處無し。

云何が比丘の識を知るなる。六識身――眼識・身、耳・鼻・舌・身・意識身、是は六識身にして、是の如きは比丘の識を知るなり。

云何が比丘の〔七〕識の集を知るなる。如し比丘の色色の集を以つて識の集なりと知る、是の如きは比丘の識の集を知るなり。

云何が比丘の識の滅を知るなる。如し比丘の名色の滅を以つて識の滅を知る、是の如きは比丘の識の滅を知るなり。

云何が比丘の識滅の道を知るなる。如し比丘の如實に八聖道――正見、乃至、正定を知る、是の如きは比丘の識滅の道を知るなり。

云何が比丘の識の味を知るなる。識を緣として喜樂を生ずるは是れ識の味にして、是の如きは比丘の識の味を知るなり。

云何が比丘の識の過患を知るなる。識の無常・苦・變異法なるは是れ識の過患にして、是の如きは比丘の識の過患を知るなり。

云何が比丘の識の出を知るなる。若し識の欲染の調伏、欲染の斷滅は是れ識の出にして、是の如きは比丘の識の出を知るなり。

若し沙門・婆羅門有りて是の如く識を知り、識の集を知り識の滅を知り、識滅の道を知り、識の味を知り、識の過患を知り、識の出を知らば、識を厭ひ、欲を離れ、滅を證し、道に趣き、善く趣す。若し善く

く趣す。若し善く趣するの人は是の法中に於て明了なり。及び餘の沙門・婆羅門の、是の如く想を知り、想の集を知り、想の滅を知り、想滅の道を知り、想の味を知り、想の過患を知り、想の出を知らば、想を厭ひ、欲を離れ、滅を證し、解脫して復、生ぜず、善く解脫す。若し善く解脫するの人、純善なり。若し純善の人は復、生ずるの處無し。

云何が比丘の行を知をなる。六思身――色思、聲・香・味・觸・法思、是を六思身と名け、是の如きは比丘の行を知るなり。

云何が比丘の行の集を知るなる。如し比丘の無明の集を以つて行の集を知る、是の如きは比丘の行の集を知るなり。

云何が比丘の行の滅を知るなる。如し比丘の無明の滅を以つて行の滅を知る、是の如きは比丘の行の滅を知るなり。

云何が比丘の行滅の道を知るなる。如し比丘の如實に八聖道――正見乃至正定を知る、是の如きは比丘の如實に行滅の道を知るなり。

云何が比丘の行の味を知るなる。若し行を緣として喜樂を生ずる是は行の味にして、是の如きは比丘の行の味を知るなり。

云何が比丘の行の過患を知るなる。行の無常・苦・變異法なるは是れ行の過患にして是の如きは比丘の行の過患を知るなり。

云何が比丘の行の出を知るなる。若し行の欲染の調伏、欲染の斷滅、是の如きは比丘の行の出を知るなり。

若し沙門・婆羅門有りて、是の如く行を知り、行の集を知り、行の滅を知り、行滅の道を知る。行の味を知り、行の過患を知り、行の出を知らば、行を厭ひ、欲を離れ、滅を證し、道に趣き、善

く趣す。若し善く趣するの人は是の法中に於て明了なり。及び餘の沙門・婆羅門の、是の如く受を知り、受の集を知り、受の滅を知り、受滅の道を知り、受の味を知り、受の過患を知り、受の出を知らば、受を厭ひ、欲を離れ、滅を證し、解脱して復、生せず。善く解脱す。若し善く解脱するの人は、純善なり。若し純善の人は復、生ずるの處無し。

云何が比丘の想を知るなる。六想身――色想、聲・香・味・觸・法想、是を六想身と名け、是の如きは比丘の想を知るなり。

云何が比丘の想の集を知るなる。如し比丘の觸の集を以つて想の集を知る、是の如きは比丘の想の集を知るなり。

云何が比丘の想の滅を知るなる。比丘の觸の滅を以つて想の滅を知る、是の如きは比丘の、想の滅を知るなり。

云何が比丘の想滅の道を知るなる。如し比丘の如實に八聖道――正見乃至正定を知る、是の如きは比丘の、想滅の道を知るなり。

云何が比丘の想の味を知るなる。若し想を緣として喜樂を生ずる是は想の味にして、是の如きは比丘の想の味を知るなり。

云何が比丘の想の過患を知るなる。想の無常・苦・變異法なるは是れ想の過患にして、是の如きは比丘の想の〔p.597a〕過患を知るなり。

云何が比丘の想の出を知るなる。若し想の欲染の調伏、欲染の斷滅は是れ想の出にして、是の如きは比丘の想の出を知るなり。

若し沙門・婆羅門有りて、是の如く想を知り、想の集を知り、想の滅を知り、想滅の道を知り、想の味を知り、想の過患を知り、想の出を知らば、想を厭ひ、欲を離れ、滅を證し、道に趣き、善

は善く趣す。若し善く趣するの人は、是の法中に於て明了なり。及び餘の沙門・婆羅門の是の如く色を知り、色の集を知り、色の滅を知り、色滅の道を知り、色の味〔c〕を知り、色の過患を知り、色の出を知らば、若しは色を厭ひ、欲を離れ、滅を證して解脱し、復、生ぜず。善く解脱す。若し善く解脱するの人は純善なり。若し純善の人は復、生ずるの處無し。

云何が比丘の受を知るなる。六受身——眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受、是を六受身と名け、比丘は是の如く、受を知るなり。

云何が比丘の受の集を知るなる。如し比丘の觸の集を以つて受の集なりと知る、是の如きは受の集を知るなり。

云何が比丘の受の滅を知るなる。如し、比丘の觸の滅を以つて受の滅を知る、是の如きは比丘の受の滅を知るなり。

云何が比丘の受滅の道を知るなる。如し比丘の如實に八聖道——正見・正覺・正語・正業・正命・正進・正念・正定を知る、是の如きは比丘の、受滅の道を知るなり。

云何が比丘の受の味を知るなる。若し受を緣として喜樂を生ずる是は受の味にして是の如きは比丘の、受の味を知るなり。

云何が比丘の受の過患を知るなる。受の無常・苦・變異法なるは是れ受の過患にして、是の如きは比丘の受の過患を知るなり。

云何が比丘の受の出を知るなる。受の欲染の調伏、欲染の斷滅は是れ受の出にして。是の知きは比丘の受の出を知るなり。

若し沙門・婆羅門有りて、是の如く。受を知り、受の集を知り、受の滅を知り、受滅の道を知り、受の味を知り、受の過患を知り、受の出を知らば、受を厭ひ、欲を離れ、滅を證し、道に趣き、善

知り、識の出を知るなり。
行の出を知り、識を知り、識の集知り、識の滅を知り、識滅の道を知り、識の味を知り、識の過患を
り、行を知り、行の集を知り、行の滅を知り、行滅の道を知り、行の味を知り、行の過患を知り、
り、想の集を知り、想の滅を知り、想滅の道を知り、想の味を知り、想の過患を知り、想の出を知

(1)云何が比丘の色を知るなる。如し、比丘の四大と四大所造の色とを如實に知る。比丘は是の如く、色を知るなり。

云何が比丘の色の集を知るなる。如し比丘の愛集を以つて[二五]色集なりと知る、是の如きは、比丘の、[二六]色集を知るなり。

云何が比丘の色滅を知るなる。如し比丘の愛の滅して、愛滅を以て色滅を知る。比丘の是の如きは色滅を知るなり。

云何が比丘の如實の色滅の道を知るなる。如し、比丘の如實に八聖道＝正見・正覺・正語・正業・正命・正精進・正念・正定を知る、是の如きは比丘の如實の色滅の道を知るなり。

云何が比丘の色味を知るなる。若し色を緣として喜樂を生ずる、是れ色味にして、是の如きは比丘の色味を知るなり。

云何が比丘の色の過患を知るなる。若し色の無常・苦・變異の法なるは是れ色の過患にして、是の如きは比丘の、色の過患を知るなり。

云何が比丘の色の出を知るなる。若し色の欲染の調伏、欲染の斷滅は是れ出にして、是の如きは比丘の色の出を知るなり。

若し沙門・婆羅門有りて是の如く色を知り、色の集を知り、色の滅を知り、色滅の道を知り、色の味を知り、色の過患を色り、色の出を知らば、若しは色を厭ひ、欲を離れ滅して道に趣き、若し

[二五] 色集。集字は宋元明、宮内省の四本により補讀。
[二六] 色集。この上、大正本等には知色の二字あるも、同上の四本によりて省く。

十・二十・三十・四十・五十・百・千生、萬生、十萬生、無量十生、無量百生、無量千生、無量百千萬生、乃至、若しは劫成・劫壞、若しは劫成壞・無量劫成・無量劫壞・無量劫成・壞我は本、彼(かしこ)に在りて是の如きの名、是の如きの姓、是の如きの生、是の如きの食、是の如きの命、是の如きの久壽、是の如きの短壽あり、是の如きの苦樂を受し、彼より死して彼に生れ已り、後、彼より死して彼に生れ已り、後より死して彼に生れ、より死して此に生れ、此の是の如きの行を成就せること有りと憶念し、若干の宿命を憶念する、是を宿命智證通と名く。

云何が[一九]衆生生死智證通なる。若し智の生じて天眼の清淨にして人に過ぎ、衆生の生死、好色・悪色、善道・惡道、卑勝を見、衆生の所造の業の如く、衆生は身惡行を成就し、口惡行を成就し、意惡行を成就し、聖人を誘ずるの邪見行あり、邪見を緣とするが故に、身壞命終して惡道——地獄・畜生・餓鬼に生る。衆生は身善行・口善行・意善行を成就し、聖人を誘ぜざるの正見行あり。正見を緣とするが故に身壞命終して善道——天上・人中に生ると知る。——是の如き天眼の清淨にして人に過ある、是を衆生生死智證通と名く。

[二〇]云何が漏盡智證通なる。若し智の生じて有漏、盡き、無漏を得、心解脫・慧解脫を、現世に自ら證知し、行を成就すらく、我が生、已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、復有に還らずと。是を漏盡智證通と名け、是を六通と名く。

(3)云何が七方便なる。[二一]世尊の說くが如し。比丘の、七處の方便、三種の觀ありて、此の法中にて純善遠聞ならば、[二二]尊丈夫と謂ふ。

云何が比丘の[二三]七處の方便有るなる。如し(I)比丘の衆を知り、(II)色の集を知り、(III)色の滅を知り、(IV)色滅の道を知り、(V)色の味を知り、(VI)色の過患を知り、(VII)色の出を知り、[二四]受を知り、受の集を知り、受の滅を知り、受滅の道を知り受の味を知り、受の過患を知り、受の出を知り、想を知

【一九】衆生等。同準に前卷中參照。

【二〇】云何等。同上。

【二一】世尊等。大正 No. 150. 安世高譯七處三觀經(大正 II. p. 375b); 雜二、一〇(大正99, 42—II, p.10a); 增一、四一の三(大正II. p. 745b); S. 22, 57(III. p. 61 ff)等參照。

【二二】尊丈夫。巴、Ut'ara. u=ris).

【二三】七處の方便。巴、Satta=tthānakusalo.

【二四】受以下。色のI、II、等に準じて知れ。

悪法を除くことを得」と内に智を生ず。(V)「[15]憶念して此の定に入り、憶念して此の定を生ず」と内に智を生ず。定を修すること無量にして無量に心等・明照なれ。比丘よ、定を修し已り、無量に心等・明照ならば、此の五智を生ずと。是を五智と名く。

(2)云何が[16]六通なる。神足智證通・天耳智證通・觀心心數法智證通・憶念宿命智證通・衆生生死智證通・漏盡智證通なり。

云何が[17]神足智證通なる。若し智の生じて無量の神足を受け六地を動かし、一を以つて多と爲し、多を以つて一と爲し、近處・遠處・牆壁・山崖も通達無礙なること虛空の如く、結加趺坐して空中を往來すること飛鳥の如く、地に入ること水の如く、水を履むこと地の如く、身より烟焰を出づること大火聚の如く、日月をも、神力・威德量り難くして、手もて能く捫摸し、乃至、梵天まで身は自在を得。是を神足智證通と名く。

云〔p.597c〕何が天耳智證通なる。若し智の生じて天耳の、人耳に過るありて、二種の聲を聞く。人と非人との聲なり。是を天耳智證通と名く。

云何が觀心・心數法智證通なる。若し智の生じて他の衆生・他の人の心・心數を知る——若し有欲心は如實に有欲心なりと知り、無欲心は如實に無欲心なりと知り、有恚心は如實に有恚心なりと知り、無恚心は如實に無恚心なりと知り、有癡心は如實に有癡心なりと知り、無癡心は如實に無癡心なりと知り、疾心は如實に疾心なりと知り、亂心は如實に亂心なりと知り、少心は如實に少心なりと知り、貴心は如實に貴心なりと知り、不定心は如實に不定心なりと知り、定心は如實に定心なりと知り、非解脫心は如實に非解脫心なりと知り、解脫心は如實に解脫心なりと知り、有勝心は如實に有勝心なりと知り、無勝心は如實に無勝心なりと知る、是を觀心心數智證通と名く。

云何が憶念宿命智證通なる。[18]若し智の生じて無量・若干の宿命を憶念し、一生、二・三・四・五・

【一五】憶念等。巴、“So kho panāhaṃ imaṃ samādhiṃ sato'va samāpajjāmi sato'va vuṭṭhahāmi.”

【一六】六通。Vibhaṅga p. 334; 集異門足論卷一五—毘曇部二、初版、p. 127 ff 等參照。

【一七】神足等。毘曇部一、初版、p. 180 f. 參照。

【一八】若し以下。前卷の三明下の同文參照。

云何が増長分智非退なる。智の若し増長して非退なる、是を増長分智非退と名く。

云何が退分増長分智なる。一智の退分にして増長分なる無し。彼は若し退分ならば増長分智に非ず、増長分智ならば、退分に非ず。是を退分増長分智と名く。

云何が非退分非増長分智なる。退分増長分智を除く。若し餘の智なる、是を非退分の非増長分智と名く。[三]

(6)云何が住分智非解分智なる。若し有住分にして〔○〕非解なる、是を住分智の非解と名く。

云何か解分智非住分智なる。若し有解にして非住なる、是を解分智の非住と名く。

云何が住分解分智なる。一智の若し住分にしての解分なる無し。若し住分智ならば解分に非ず、解分智ならば住分に非ず、是を住分解分智と名く。

云何が非住分非解分智なる。住分解分智を除く若し餘の智なる、是を非住分非解分智と名く。

(7)云何が増長分智非解分智なる。若し有増長にして非解なる、是を増長分智非解分と名く。

云何が解分智非増長分智なる。若し有解にして増長に非ざる、是を解分智非増長分と名く。

云何が増長分解分智なる。一智の若し増長分にして解分なる無し。若し増長分智ならば解分に非ず、解分智ならば増長分に非ず。是を増長分の解分智と名く。

云何が非増長分非解分智なる。増長分解分智を除く。若し餘の智なる、是を非増長分非解分智と名く。

(1)[四]云何が五智なる。[五]世尊の説くが如し。[六]無量義定を修し、[七]心等・[八]明照なれ。比丘よ、此の定を修し已り、無量義定あり、心等・明照なり已りて、[九]内に五智を生ず、何等か五なる。(I)「此の定は現在樂にして後に樂報を受く」と内に智を生ず。(II)「此の定は[一〇]聖にして無染なり」と内に智を生ず。(III)「此の定は[一一]聖人、親進す」と内に智を生ず。(IIII)「此の定は[一二]寂靜・[一三]勝妙・聖にして[一四]心に解脱を得、

【三】名く。次に目錄分には倚、(4)退分智非解分等の四、(5)住分智非増長分等の四の二種の四智を記する。或は脱す。とにかく、かくて數字も飛ぶに留意せよ。
【四】云何等。以下、五以上の多數智九種を解釋す。
【五】世尊等。A. V. 27(III. p. 24); cf. Vibhaṅga V. 2(p. 334).
【六】無量義定。巴、Samādhim appamāṇam.
【七】心等。巴、?nipakā(prudent, wise—pl.)
【八】明照。pāli—? patissatā (mindful-pl.)
【九】內に。巴、paccattaṃ =in his own heart,
【10】聖・無染。巴、ariyo nirāmiso
【一一】聖人等。巴、akāpurisasevito.
【一二】寂靜。巴、santo
【一三】勝妙。巴、panito.
【一四】心に等。巴、paṭippassaddhi addho,

卷の第十 〔p.596b〕

非問分智品　第四【其の二】[一]

(1a)[二]云何が退分智なる。若し智の不善なる、是を退分智と名く。

云何が住分智なる。若し智の無記なる、是を住分智と名く。

云何が增長分智なる。若し智の非聖の善なる、是を增長分智と名く。

云何が解分智なる。若し智の聖・有報にして能く煩惱を斷ずる、是を解分智と名く。

(1b)云何が退分智なる。若し智の住するも退して非聖の善法に於て住するに非ず、增長するに非ざる、是を退分智と名く。

云何が住分智なる。若し智の生じて、非聖の善法に於て住して退せず、增長せざる、是を住分智と名く。

云何が增長分智なる。若し智の生じて非聖の善法を增長し、退せざるも住せざる、是を增長分智と名く。

云何が解分智なる。若し共解・解相應なる、是を解分智と名く。

(2)云何が退分智の非住分智なる。若しは有退にして非住なる、是を退分智の非住分と名く。

云何が住分智の非退分智なる。若し有住にして非退なる、是を住分智の非退と名く。

云何が退分住分智なる。一智の退分にして住分智なる無し。彼の若し住分智ならば退分に非ず、若し退分ならば住分に非ず。是を退分住分智と名く。

云何が非退非住分智なる。退分住分智を除く若し餘の智見なるを非退非住分智と名く。

(3)云何が退分智非增長分智なる。若し有退にして增長に非ざる、是を退分智非增長と名く。

【一】【其の二】。原漢譯には「の二」に作る。

【二】云何が以下。諸の四智を明かす。

云何が覺智非盡なる。若し智の生じて非聖の五通の或は若しは一、若しは二を得る、是を覺智非盡と名く。

云何が盡覺智なる。若し智の生じて須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得る、是を盡覺智と名く。

云何が非盡非覺智なる。若しは無報なる、若しは智の有報なるも、能く煩惱を斷ずるに非ず、智を生ずるに非ざる、是を非盡非覺智と名く。

(11)解脫も亦是の如し。

く。

復次に非作非離智とは、若しは智の無報なる、若しは智の聖・有報なるも、煩惱を斷ずるに非ざる、是を非作非離智と名く。

[二五](7)有染〔p. 596 c〕無染、[二六](8)有扼・無扼も亦是の如し。

(8a)云何が智果智非斷果智なる。若し智の生じ已りて智を生ずるも、煩惱を斷ずるに非ざる、是を智果智非斷果智と名く。

云何が斷果智非智果なる。若し智の生じて煩惱を斷ずるも、智を生ずるに非ざる、是を斷果智非智果と名く。

云何が智果斷果智なる。若し智の生じ已りて智を生じ、煩惱をも斷ずる、是を智果斷果智と名く。

云何が非智果非斷果智なる。智果斷果智を除く若し餘の智なる、是を非智果非斷果智と名く。

(8b)復次に智果智非斷果とは、若しは智の生じて非聖の五通を得る、若しは非聖の五通の或は若しは、一若しは二を得る、是を智果智非斷果と名く。

復次に斷果智非智果とは、若し智の生じて斯陀含果を得る、是を斷果智非智果と名く。

復次に智果斷果智とは、若し智の生じて須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得る、是を智果斷果智と名く。

復次に非智果非斷果智とは、若しは智の無報なる、若しは智の有報にして智を生ずるに非ず、能く煩惱を斷ずるに非ざる、是を非智果非斷果智と名く。

(10a)智果・得果も亦是の如し。

(10b)云何が盡智非覺なる。若し智の生じて[二七]煩惱を盡し、覺智に非ず、[二八]盡智を除く若し餘の智なる、是を盡智非覺と名く。

〔二五〕有染等。目錄分中參照。

〔二六〕扼。目錄分中の註參照。

〔二七〕煩惱を盡し。宋元明、宮內省、聖護藏の五本には不記。

〔二八〕盡智。同上には盡覺智に作る。附記—察するに、この盡智以下は、衍日なるべく然らざれば、意義、通ぜざらむ。(前の智果智非斷果智等の說明と對照せよ。

復次に辭辯とは、三辯＝法辯・義辯・辭辯を得るを以つて、若し言語・開解して礙無く、纏無く、滯無く、[二〇]若し契うて明了に、若し解脫の方便を知見する、是を辭辯と名く。

復次に應辯とは、三辯＝法辯・義辯・辭辯を得るを以つて、若し[二一]隨開すること、無礙・無纏・無邊・無量・無盡・不可思議・不可計數にして、若し解脫の方便を知見する、是を應辯と名く。

(5d)復次に法辯とは、法智、是を法辯と名く。

復次に義辯とは、比智、是を義辯と名く。

5e)復次に若し法を分別して不可思議なる、是を法辯と名く。

復次に義辯とは。若し思の分別して義を思ふ、是を義辯と名く。

何をか辯と謂ふ。辯は謂く、緣智、謂く智力智、謂く、勝智、謂く金剛智、謂く無餘智なり。

此の如きの四辯は法方便・義方便・經方便・辭方便・應方便・過去方便・未來方便・過去未來方便を成就す。若し[二二]彼の此の四辯を成就し、若し人有りて此の經義を盡さむと欲するも、是の處(ことわり)有ること無し。是を四辯と名く。

(6a)云何が作智非離智なる。若しは非聖の有報なる、是を作智非離智と名く。

云何が離智非作智なる。若し聖・有報にして、能く煩惱を斷ずる、是を離智非作智と名く。

云何が作離智なる。一智にして若しは作、若しは離なる無し。彼は若し作智ならば離智に非ず、離智ならば[二三]作智に非ず、是を作離智と名く。

云何が非作非離智なる。作離智を除く若し餘の智なる、是を非作非離智と名く。

(6b)復次に作智非離[二四]智とは、若し欲界の有報なる、是を作智非離と名く。

云何か離智非作なる。若し聖・有報にして能く煩惱を斷ずる、是を離智非作と名く。

復次に作離智とは、若し智の生じて欲界の煩惱を斷じ、色界・無色界有を受くる、是を作離智と名

【二〇】若し契うて。宋元明の三本又は「善く契うて」に作る。
【二一】隨開。同上三本と宮內省本とには「隨つて開解すること」と。
【二二】彼の。彼(ヒ)は非に音通して或はこの彼は非の字の誤寫ならざるか、かくて、今の文は、「若し此の四辯を成就するに非ずして、若し人有り、此の經義を盡さむと欲するも……」とするに非ざれば、意義、快明なるを得ざるべし。
【二三】作智。智字、宋元明の三本によつて補讀。
【二四】智。同上の三本、宮內省本により補入。

心は如實に解脫心と知り、有勝心は如實に有勝心と知り、無勝心は如實に無勝心と知り、若し解脫の方便を智する、是を他心智と名く。

(5a)云何が法辯なる。法衆・法比・法觸を若し聖の智りて餘す無き、是を法辯と名く。

云何が義辯なる。義衆・義比・義觸を若し聖の智りて餘す無き、是を義辯と名く。

云何が辭辯なる。辭衆・辭比・辭觸を若し聖の智りて餘す無き是を辭辯と名く。

云何が應辯なる。應衆・應比・應觸を若し聖の智りて餘す無き、是を應辯と名く。

(5b)復次に法辯とは、辭辯・應辯を除く若し餘の聖無漏智の比類智に非ざるが相を知りて餘すなき、是を法辯と名く。

復次に義辯とは、辭辯・應辯を除く若し餘の聖・無漏智たる比類智の相を知りて餘すなき、是を義辯と名く。

復次に辭辯とは、若しは色受・想・行・識、若しは苦・集・滅・道、若しは地獄・畜生・餓鬼・人・天を若し是の如く說き、是の如く辭し、是の如く分別するに當りて、若し解脫の方便を智見する、是を辭辯と名く。

復次に應辯とは、應は謂く智にして、是の如きの智を以つて知り、若し解脫の方便を智見する、是を應辯と名く。

(5c)復次に法辯とは、若しは色・受・想・行・識、若しは苦・集・滅・道を義觸に非ず、因觸に非ず、緒觸に非ず、緣觸に非ずして、若し聖・無漏智の比類智に非ざるに於て相を知りて餘無き、是を〔6〕法辯と名く。

復次に義辯とは、義觸・因觸・緒觸・緣觸、――此の義を以つて、若しは色・受・想・行・識、若しは苦・集・滅・道を、若し無漏智たる比類智に於て相を知りて餘り無き、是を義辯と名く。

云何が世智なる。若しは諸の衆生を知り、若しは法・名字・語言を知り、若しは過去語・未來語・現在語、男女・非男女語、一語・二語・三語・衆語・無量語・一切語を知りて、若し解脫の方便を智見する、是を世智と名く。

云何が他心智なる。若し智を以つて他が心を知り、若し解[一〇六]脫の方便を智見する、是を他心智と名く。

(4b)復次に法智とは、若し相爲・有漏の苦諦所攝法を苦と見、無我と見、苦と思惟する、若しは苦因・苦緒・苦集を、集と見、無我と見、集と思惟する、〔若しは〕苦を盡し、煩惱を盡し、有漏を盡すを[一〇七]漏と見無我と見、滅と思惟する、若しは聖道を無我と見、道と思惟する、及び餘の法を思惟する、――若し彼の聖・無漏智に於ての比類するに非ずして一切相を智る、是を法智と名く。

復次に比智とは、若し人の已行法中に法智を生じ、彼の、餘の法中に於て、[一〇八]彼・彼の生の如く、彼の相の如く、彼の如く比類して、『此は彼の如く、彼は此の如し』とて若し聖・無漏智ありて比類して一切相を智る、是を比智と名く。

復次に〔c〕世智とは、若しは諸の衆生を知り、若しは法數若しは共に施設する語言・名字を知り、若しは色・受・想・行・識、若しは苦・集・滅・道、若しは地獄・畜生・餓鬼・人天を知り、若し解脫の方便を智見する、是を世智と名く。

復次に他心智とは、若し智を以つて、他の衆生・他の人の心數及び心を知り、[一〇九]有愛心は如實に有愛心と知り、無愛心は如實に無愛心と知り、有瞋恚心は如實に有瞋恚心と知り、無瞋恚心は如實に無瞋恚心と知り、有愚癡心は如實に有愚癡心と知り、無愚癡心は如實に無愚癡心と知り、嫉心は如實に嫉心と知り、亂心は如實に亂心と知り、少心は如實に少心と知り、實心は如實に實心と知り、不定心は如實に不定心と知り、定心は如實に定心と知り、非解脫心は如實に非解脫心と知り、解脫

【一〇六】脫。大正本には射に作るも、宋元明、宮内省の四本によりて改む。

【一〇七】漏。恐らく滅の誤ならむ。

【一〇八】彼。宋元明、宮、聖の諸本は似に作る。

【一〇九】有愛心等。また毘曇部一―五中の拙註を見よ。

復次に集智とは、此の愛の、復、欲染の相續すること有りて、處處の悕望あるに、若し解脫の方便を智見する、是を集智と名く。

云何が滅智とは、若し愛欲を離・滅盡・捨・出・解脫して依止有る無く、永く斷じて餘り無きに、若し解脫の方便を智見する、是を滅智と名く。

復次の〔p. 595 c〕道智とは、八聖道＝正見・正覺・正語・正業・正命・正精進・正念・正定に、若し解脫の方便を智見する、是を道智と名く。

(3c)復次に苦智とは、一切の有爲・有漏の苦諦所攝の法、若しは一處の有爲・有漏の苦諦所攝の法を、苦と見、無我と見、苦を思惟し、若し解脫の方便を智見する是を苦智と名く。

復次に集智とは、一切の苦因・苦集、若しは一處の苦因・苦緒・苦集を、集と見、無我と見、集と思惟し『此の因・此の緣にて一切の苦を成就す』として、若し解脫の方便を智見する、是を集智と名く。

復次に滅智とは、一切の苦を盡し、煩惱を盡し、漏法を盡し、若しは[一〇四]一切處にて、苦を盡し、煩惱を盡し、漏法を盡し、滅を見、無我を見、滅を思惟して、若し解脫の方便を智見する、是を滅智と名く。

復次に道智とは、一切の聖道の出要にして、正しく苦を滅し、若しは一處の聖道の出要にして正しく苦を滅するに、道を見、無我と見、道を思惟して「此の因・此の緣もて一切の苦を盡す」とて、若し解脫の方便を智見する、是を道智と名く。

(4a)云何が[一〇五]法智なる。若し智の聖・無漏にして、比類するに非ずして一切相を智る、是を法智と名く。

云何が比智なる。若し智の聖・無漏にして、比類して、一切相を智りて餘す無き、是を比智と名く。

【一〇四】一切處。宋元明。宮内省の四本及び上來の文例にては一處に作る。

【一〇五】法智等。cf. Vibhaṅga IV 4 (p. 315 &c); 集異門足論七部等。

復次に捨方便とは、定心の、是の如く貪欲を捨し、瞋恚・愚癡を羸くする、若し解脱の方便を智見する、是を捨方便と名く。

(30)云何が[九九]過去智なる。若し智の生じ已りて滅せる、是を過去智と名く。

云何が未來智なる。若し智の未だ生ぜず、未だ出でざる、是を未來智と名く。

云何が現在智なる。若し智の生じて未だ滅せざる、是を現在智と名く。

[一〇〇](1)云何が[一〇一]過去境界智なる。過去法を思惟しての智の生ぜる、是を過去境界智と名く。

云何が未來境界智なる。未來法を思惟して智の生ぜる、是を未來境界智と名く。

云何が現在境界智なる。現在法を思惟して智の生ぜる、是を現在境界智と名く。

云何が非過去非未來非現在境界智なる。非過去非未來非現在法を思惟して智の生ぜる、是を非過去非未來非現在境界智と名く。

(2)云何が[一〇二]欲界繫智なる。若し智の欲漏・有漏なる、是を欲界繫智と名く。

云何が色界繫智なる。若し智の色漏・有漏なる、是を色界繫智と名く。

云何が無色界繫智なる。若し智の無色漏・有漏なる、是を無色界繫智と名く。

云何が不繫智なる。若し智の聖・無漏なる、是を不繫智と名く。

[一〇三](3a)云何が苦智なる。此の苦の聖諦にて、若し解脱の方便を智見する、是を苦智と名く。

云何が集智なる。此の集聖諦にて若し解脱の方便を智見する、是を集智と名く。

云何が滅智なる。此の滅の聖諦にて若し解脱の方便を智見する、是を滅智と名く。

云何が道智なる。此の道の聖諦にて若し解脱の方便を智見する、是を道智と名く。

(3b)復次に苦智とは、生苦・老苦・病苦・死苦、不愛に會ふの苦・愛に別離するの苦・所求を得ざるの苦・愛を除く總じて五受陰の苦にて若し解脱の方便を智見する、是を苦智と名く。

【九九】過去智等。cf. Vibhaṅga III, 15 (p. 311)

【一〇〇】云何等。以下。諸の四智を明す。

【一〇一】過去等。cf. Vibhaṅga III, 16 (p. 311)

【一〇二】欲界等。cf. Vibhaṅga IV, 3 (p. 315; &c)

【一〇三】云何等。cf. Vibhaṅga. IV, 2 (p. 315;&c); 集異門足論七部等。

云何が無量智中位なる。若しは智の無量境界・無量利、若しは中間住にして犛牛頃或は多なるも七日或は多に非ざる、是を無量智中住と名く。

云何が無量智無量住なる。若しは智の無量境界・無量利、若しは無量間住にして七日或は多なる、是を無量智無量住と名く。

(28)云何が善道方便なる。善道とは謂く、善法及び人・天にして、若し解脫の方便を智見する、是を善道方便と名く。

云何が惡道方便なる。惡道とは謂く不善法及び地獄・畜生・餓鬼にして、若し解脫の方便を智見する、是を惡道方便と名く。

云何が善方便なる。此の因・此の緣もて色あり、此の因・此の緣もて受・想・行・識あり、此の因・此の緣もて初禪定に入り、第二・第三・第四禪定に入り、惡・不善法を斷じて善法を成就し、若しは解脫方便を智見する、是を善方便と名く。

(29a)云何が寂靜方便なる。寂靜とは謂く定にして、若し解脫の方便を智見する、是を寂靜方便と名く。

云何が取方便なる。取とは謂く進にして、若し解脫方便を智見する、是を取方便と名く。

云何が捨方便なる、この捨あり。捨の根と心とにして、若し解脫方便を智見する、是を捨方便と名く。

(29b)復次の寂靜方便とは、心の掉を過ぎて是の如く寂靜に相の滅せる如くなるとき、若し解脫の方便を智見する、是を寂靜方便と名く。

復次の取方便とは、若し軟進の、當に是の如く勤取・隨緣取・正取〔〇〕勸勉・正勸勉・正[九八]歡喜すべきとき、若し解脫の方便を智見する、是を取方便と名く。

【九八】歡。宋元明。宮内省の四本には勸に作る。

涅槃なる、是を無量智無量境界と名く。

(24)云何が少住智なる。若し智の少間住にして一彈指の頃、或は多なるも犛牛の頃、或は多に[九六]非ざる、是を少住智と名く。

云何が中住智なる。若し智の中間住にして犛牛頃或は多なる七日或は多に非ざる、是を中住智と名く。

云何が無量住智なる。若し智の無量間住にして七日或は多なる、是を無量住智と名く。

(25)云何が少智少住なる。若しは[九七]智の少境界・少軌、若しは少間住にして彈指頃或は多なるも、犛牛頃或は多に非ざる、是を少智少住と名く。

云何か少智中住なる。智の若しは少境界、少軌、若しは中住にして犛牛頃或は多なる、〔七〕是を少智中住と名く。

云何が少智無量住なる。若しは智の少境界、少軌、若しは無量住にして七日或は多なる、是を少智無量住と名く。

(26)云何が中智少住なる。智の若しは中境界、中軌、若しは少間住にして彈指頃或は「多なるも」犛牛頃或は多に非ざる、是を中智少住と名く。

云何が中智中住なる。若しは智の中境界、中軌、中間住にして犛牛頃或は多なるも、七日或は多に非ざる、是を中智中住と名く。

云何が中智無量住なる。智の若しは中境界・中軌、若しは無量間住にして七日或は多なる、是を中智無量住と名く。

(27)云何が無量智少住なる。智の若しは無量境界・無量利、若しは少間住にして彈指頃或は多なるも、犛牛頃或は多に非ざる、是を無量智少住と名く。

【九六】非ざる。大正本等には作に作り、宋元明、宮内省の四本は住に作るも、それらでは理屈にも且つ下文の例にも合はず。よつて今、試みに改め讀む。

【九七】智の少。明本により補入。

中境界智と名く。

云何が無量境界智なる。若しは智の無量衆生の若しは法の始めて生若しは如來の涅槃なる、是を無量境界智と名く。

(21)云何が少智少境界なる。若しは智の少住・少軟、若しは一衆生、若しは一法、若しは一行の始生にして、如來の涅槃を除く、是を少智少境界と名く。

云何が少智中境界なる。若しは智の少住・少軟、若しは數衆生、若しは法の始生して、如來の涅槃を除く、是を少智中境界と名く。

云何が少智無量境界なる。智の若しは少住・少軟、若しは無量衆生、法の始生、若しは如來の涅槃なる、是を少智無量境界と名く。

(22)云何が中智少境界なる。智の若しは智の中住・中軟、若しは一衆生、若しは一法・一行の始生にして、如來の涅槃に非ざる、是を中智少境界と名く。

云何が中智中境界なる。若しは智の中住・中軟、數衆生、若しは法の始生にして、如來涅槃に非ざる、是を中智中境界と名く。

云何が中智無量境界なる。若しは中住・中軟、若しは無量の衆生、法の始生、如來の涅槃なる、是を中智無量境界と名く。

(23)云何が無量智少境界なる。智の若しは無量住・無量利、若しは一衆生、一法・一行の始生にして、如來の涅槃を除く、是を無量智少境界と名く。

云何が無量智中境界なる。若しは智の無量住・無量利、若しは數衆生、若しは法の始生にして、如來の涅槃を除く、是を無量智中境界と名く。

云何が無量智無量境界なる。智の若しは無量住・無量利、若しは無量の衆生、法の始生、如來の

(17)云何が衆生境界智なる。衆生境界智無し。復次に、衆生の慈行、悲・喜・捨行の智の生ぜる、是を衆生境界智と名く。

云何が有爲境界智なる。有爲法を思惟して智の生ぜる、是を有爲境界智と名く。

云何が無爲境界智なる。無爲法を思惟して智の生ぜる、是を無爲境界智と名く。

(18)云何が衆生境界智なる。衆生境界智無し。復次に、衆生の慈行、悲・喜・捨行を思惟して智の生ぜる、是を衆生境界智と名く。

云何が法境界智なる。法を思惟して智の生ぜる、是を法境界智と名く。

云何が無境界智なる。[九一]無境界智無し。[九二]復次に、過去・未來法を思惟して智の生ずる、是を無境界智と名く。

[九三]云何が衆生境界智なる。衆生境界智無し。復次に、衆生の慈行、悲・喜・捨行〔にて智の生ぜる〕、是を衆生境界智と名く。

(19a)云何が[九四]少智なる。若し〔智の〕少少住・少間住なる、之を少智と名く。

云何が中智なる。若し智の中中住・中間住なる、是を中智と名く。

云何が無量智なる。若し智の無量無量住・無量間住なる、是を無量智と名く。

(19b)復次の少智とは、若し智の少住・少軟・少境界なる、是を少智と名く。

復次に中智とは、若し智の中住・中軟・中境界なる、是を中智と名く。

復次に無量智なる。若し智の無量住・無量利・無量境界なる、是を無量智と名く。

(20)云何が[九五]少境界智なる。若しは智の一衆生、若しは一法、若しは一行の始生にして如來の涅槃を除く、是を少境界智と名く。

云何が中境界智なる。若しは智の數衆生若しは法の始生にして、如來の涅槃を除く、是々〔p. 594c〕

【九一】無境界等。原大正本等には「無境無境界智」とするも宋元明、宮內省、聖語藏の五本により、改め讀む。

【九二】復々等。この復々釋は、有部で無を緣ずること無きを主張し、唯識でそれを有とすると比考せよ。

【九三】云何等。衍文か。とにかく、上來の同文の反復で、これだけでは意をなさず。

【九四】少智等。cf. Vibhaṅga III, (p. 310)

【九五】少等。cf. Vibhaṅga III, 12 (p. 310)

じ、若し智の生ぜる、是を內外受觀の內外受智と名く。

(13)云何が[八六]內心觀の內心智なる。一切の內の心、一處の內の心にて無常・苦・空・無我を觀じ、若し智の生ぜる、是を內心觀の內心智と名く。

云何が外心觀の外心智なる。一切の外の心、一處の外の心にて、無常・苦・空・無我を觀じ、若し智の生ぜる、是を外心觀の外心智と名く。

云何が內外心觀の內外心智なる。一切の內外の心、一處の內外の心にて無常・苦・空・無我を觀じ、若し智の生ぜる、是を內外心觀の內外心智と名く。

(14)云何が[八七]內法觀の內法智なる。四大色身の攝法・受・心を除く餘の一切の內の法、一處の內の法にて無常・苦・空・無我を觀じ、若し智の生ぜる。是を內法觀の內法智と名く。

云何が外法觀の外法智なる。四大色身の攝法・受・心を除く餘の一切の外の法、一處の外の法——彼を事の如くに無常・苦・空・無我と觀じ、若し智の生ぜる、是を外法觀の外法智と名く。

云何が內外法觀の內外法智なる。四大色身の攝法・受・心を除く餘の一切の內外の法、[八八]一處の內外の法を事の如くに無常・苦・空・無我と觀じ、若し智の生ぜる、是を內外法觀の內外法智と名く。

〔○〕(15)云何が[八九]內境界智なる。內の法を思惟して若し智の生ぜる、是を內境界智と名く。

云何が外境界智なる。外の法を思惟して智の生ぜる、是を外境界智と名く。

云何が內外境界智なる。內外の法を思惟して智の生ぜる、是を內外境界智と名く。

(16)云何が衆生境界智なる。衆生境界智無し。復次に衆生の[九〇]慈行、悲・喜捨行を思惟して智の生ずる、是を衆生境界智と名く。

云何が色境界智なる。色法を思惟して智の生ぜる、是を色境界智と名く。

云何が無色境界智なる。無色法を思惟して智の生ぜる、是を無色境界智と名く。

【八六】內心觀等。又、右註に準知すべし。下も同上。

【八七】內法等。以下また、上註に準知すべし。

【八八】一。宋元明の三本によりて補ふ。

【八九】內境界智以下。cf. Vibhaṅga III, 18 (p. 311).

【九〇】慈行等。所謂四無量行である。

る、是を修慧と名け、是を三慧と名く。
(10a)云何が[八〇]三眼なる。肉眼・天眼・慧眼なり。
云何が肉眼なる。若し眼の我分の攝たり、四大所造にして淨なる、是を肉眼と名く。
云何が天眼なる。若し天眼の我分の攝なる、是を天眼と名く。
云何が慧眼なる。三慧=思慧・聞慧・修慧なる、是を慧眼と名く。
(10b)復次に肉眼とは、天眼の我分の攝なるを除く若し餘の眼の四大所造の淨なる、是を肉眼と名く。
復次に天眼とは、若し天眼の我分の攝なる及び天眼を修する、是を天眼と名く。
復次に慧眼とは、天眼を修する除く若し餘の三慧なる思慧・聞慧・修慧、是を慧眼と名け、是を三眼と名く。
[八一](11)云何が[八二]內身觀の內身智なる。一切の內の四大色身の攝法、一處の內の四大色身の攝法にて、無常・苦・空・無我を觀じ若し智の生ずる、是を內身觀の內身智と名く。
云何が[八三]外身觀の外身智なる。一切の外の四大色身の攝法、一處の外の四大色身の攝法にて、無常・苦・空・無我を觀じ、若し智の生ずる、是を外身觀の外身智と名く。
云何が[八四]內外身觀の內外身智なる。一切の內外の四大色身の攝法、一處の內外の四大色身の攝法にて無常・苦・空・無我を觀じ若し智の生ずる、是を內外身觀の內外身智と名く。
(12)云何が[八五]內受觀の內受智なる。一切の內の受、一處の內の受にて無常・苦・空・無我を觀じ、若し智の生ずる、是を內受觀の內受智と名く。
云何が外受觀の外受智なる。一切の外の受、一處の外の受にて無常・苦・空・無我を觀じ、若し智の生ぜる、是を外受觀の外受智と名く。
云何が內外受觀の內外受智なる。一切の內外の受、一處の內外の受にて、無常・苦・空・無我を觀

【八〇】三眼。集異門足論五、(毘曇部一、初版、P. 171c)等參照。
【八一】云何等。以下、諸の四念處の說明を參照せよ。
【八二】內身等。目錄分中には內身觀身智と。
【八三】外身等。右註に準ず。
【八四】內外身等。又、右註に準知せよ。
【八五】內受等。又、右註に準知すべし。以下も同じ。

量劫成を憶念し、我は本、彼に在りて此の如きの名、此の如きの姓、此の如きの生、此の如きの命、此の如きの命あり、此の如く命、短く、此の如きの命ありて久住せり、此の如きの處にて苦樂あり、彼より終り、彼より生じ、彼に於て終りて復、彼に生ぜり――此の如く具足して若干の宿命を憶念する、是を憶念宿命智〔p. 593 c〕證明と名く。

[七七]云何が衆生生死智證明なる。若し智の生じ、天眼の清淨にして人眼に過ぎ、衆生の生・死、好色・惡色、惡道・善道、卑勝を見、衆生の造る所の業の如く、此の衆生は身惡行を成就し、口惡行を成就し、意惡行を成就し謗聖人の邪見行・邪見業ありて身壞命終して惡道＝地獄・畜生・餓鬼に生ず。此の衆生は身善行を成就し、口善行を成就し、意善行を成就し、不謗聖人の正見行・正見因業ありて身壞命終して善道＝天上・人中に生ずと知る――此の如く、天眼の清淨にして人眼に過ぐるありて、[七八]是の衆生の生・死、好色・無色、善道・惡道、卑微を見、衆生を所造の業の如くに知る、是を衆生生死智證明と名く。

云何が漏盡智證明なる。若し智の生じて漏、盡き、無漏・解脫を生じ、心解脫・慧解脫現身に自ら證知し、行を成就すらく、生、已に盡き、梵行已に立ち、名稱遠く聞え、所作已に辦じて更に有に還らずと、是を漏盡證智明と名け、是を三明と名く。

(9)云何が[七九]三慧なる。思慧・聞慧・修慧なり。

云何が思慧なる。他よりの聞に由りて聞ず、他の教を受けず、他の說を請はず、他の法を聽かずして自ら思ひ、自ら覺し自ら觀じて若し智の生じて修行に非ざる、是を思慧と名く。

云何が聞慧なる。他よりの聞に從ひ、他の教を受け、他の說を請ひ、他の法を聽き、自ら思ふに非ず、自ら覺するに非ず、自ら觀ずるに非ずして若し智の生ぜる、是を聞慧と名く。

云何が修慧なる。若し攝・力・覺・禪・解脫・定・入定を修し、若しは修し已りて修して若し智の生ぜ

【七七】云何等。同上、p. 193 中等を見よ。

【七八】是の等。大正本には增上寺麗本所缺の字を宋元明、宮内省の四本によりて補ひ、「見是名衆生生死――」とせるも、今は再び、名字を省いて暫く讀む。

【七九】三慧。cf. Vibhaṅga III, 1 (p. 310); 集異門足論卷五―毘曇部一、初版、p. 108 ff. &c.

是を非見斷非思惟斷因智と名く。
(6a)云何が卑智なる。若し智の不善なる、是を卑智と名く。
云何が中智なる。若し智の無記なる、是を中智と名く。
云何が勝智なる。若し智の善なる、是を勝智と名く。
(6b)復次に卑智とは、若しは智の不善、若しは無記なる、是を卑智と名く。
復次に中智なる。若し智の非聖の善なる。是を中智と名く。
復次に勝智なる。若し智の聖・無漏なる、是を勝智と名く。
(7a)云何が麁智なる。若し智の欲界繫なる、是を麁智と名く。
云何が細智なる。若しは智の色界繫若しは不繫なる、是を細智と名く。
云何が微智なる。若し智の無色界繫なる、是を微智と名く。
(7b)復次に麁智とは、若しは智の欲界繫、若しは色界繫なる、是を麁智と名く。
復次に細智とは、若しは智の空處・識處・不用處繫、若しは不繫なる、是を細智と名く。
復次に微智とは、若し智の非想非非想處繫なる、是を微智と名く。
(7c)復次に麁智とは、若しは智の欲界繫、若しは色界繫、若しは空處・識處・不用處繫なる、是を麁智と名く。
復次に細智とは、若し智の非想非非想處繫なる、是を細智と名く。
復次に微智なる。若し智の不繫なる、是を微智と名く。
(8)云何が[七五]三明なる。憶念宿命證智明・衆生生死證智明・漏盡證智明なり。
[七六]云何が憶念宿命證智明なる。若し智の生じて無量の宿命を憶念し一生、二・三・四・五、十・二十・三十・四十・五十・百生、千生、萬生、十萬生、無量百生、無量千生、無量萬生、或は無量劫壞、或は無

【七五】三明。集異門足論六—毘曇部一、初版、P 189f等參照。
【七六】云何等。同上 P. 190 等參照。

云何が捨智なる。若し智の不苦不樂受と相應する、是を捨智と名く。
(29)云何が[六八]有用智なる。若し智の[六九]生じて有境界なる、是を有用智と名く。
云何が[七〇]無用智なる。若し智の生じて無境界なる、是を無用智と名く。復次に、若し智の生じて無明を斷ずる、是を無用智と名く。
[七一](1)云何が善智なる。若し智の修なる、是を善智と名く。
云何が不善智なる。若し智の斷なる、是を不善智と名く。
云何が無記なる。智の若しは智の受なる若しは智の非報非報法なる、是を無記智と名く。
(2)云何が[七二]學智なる。若し智の聖にして無學に非ざる、是を學智と名く。
云何が無學智なる。若し智の聖にして學に非ざる、是を無學智と名く。
云何が非學非無學智なる。若し智の非聖なる、是を非學非無學智と名く。
(3)云何が[七三]報智なる。若しは智の受、若しは智の善報なる、是を報智と名く。
云何が報法智なる。若し智の有報なる、是を報法智と名く。
云何が非報非報法智なる。若し智の無記にして我分の攝に非ざる、是を非報非報法智と名く。
(4)云何が[七四]見斷智なる。若し智の不善にして思惟斷に非ざる、是を見斷智と名く。
云何が思惟斷智なる。若し智の不善にして見斷に非ざる、是を思惟斷智と名く。
云何が非見斷非思惟斷智なる。若し智の〔[illegible]〕無記なる、是を非見斷非思惟斷智と名く。
(5)云何が見斷因智なる。若しは智の見斷、若しは智の見斷法の報なる。是を見斷因智と名く。
云何が思惟斷因智なる。若しは智の思惟斷、若しは智の思惟斷法の報なる、是を思惟斷因智と名く。
云何が非見斷非思惟斷因智なる。若しは智の善若しは智の善法の報、若しは智の非報非報法なる、

【六八】有用智。目錄分中には有光智。
【六九】生じて。宋元明の三本によりて補入。
【七〇】無用智。目錄分中には無光智。
【七一】云何以下。三者一對の諸智を明す。
【七二】學智等。cf. Vibhaṅga III, 10 (p. 310).
【七三】報智等。cf. Vibhaṅga III, 5 (p. 310).
【七四】見斷智等。cf. Vibhaṅga III,

(24)云何が[六五]入定方便なる。入定衆・入定比、入定觸・入定思惟、此は想定・無想定に入る、此は隨想定・不隨想定に入る、此は離色定に入る、此は勝入定に入る、此は一切入定に入る、是の如きは諸定に入る、是の如きは諸定に入り已る、是の如きの勝法は定に入る——即ち〔彼〕に於て解脫の方便を知見する、是を入定方便と名く。

云何が出定方便なる。出定衆・出定比、出定觸・出定思惟、是の如きは想定・無想定を出づ、是の如きは隨想定を[六六]出で、不隨想定を出づ、是の如きは離色定を出で、不離色定を出づ、是の如きは勝入定を出で、一切入定を[六七]出づ。是の如きは諸定を出づ、是の如きは〔已〕諸定を出で已る、是の如きの勝法は定を出づ。——即ち彼に於て解脫の方便を知見する、是を出定方便と名く。

(25)云何が有覺智なる。若し智の覺と相應し、共に生じ、共に住し、共に滅する、是を有覺智と名く。

云何が無覺智なる。若し智の覺と相應するに非ず、覺と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を無覺智と名く。

(26)云何が有觀智なる。若し智の觀と相應し、共に生じ共に住し。共に滅する、是を有觀智と名く。

云何が無觀智なる。若し智の觀と相應するに非ず、共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる。是を無觀智と名く。

(27)云何が有喜智なる。若し智の喜と相應し、共に生じ、共に住し、共に滅する、是を有喜智と名く。

云何が無喜智なる。若し智の喜と相應するに非ず、共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を無喜智と名く。

(28)云何が有味智なる。若し智の樂受と相應する、是を有味智と名く。

【六五】入定等。集異門足論一、—毘曇部一、初版 p. 62 ff 等參照。

【六六】出づ。宋元明の三本によりて補讀。

【六七】出づ。大正本等は「入る」に作るも、同上の三本によりて改讀。

云何が涅槃智なる。若し智の聖にして涅槃境界なる、是を涅槃智と名く。

(21b)復次に法住智とは、緣如爾を除く若し餘の法如爾・非不如爾・非異非異物、常法實法、法住法定非緣なる、是を[p. 592 a]法住智と名く。

復次に涅槃智とは、彼の涅槃寂靜の是れ[六一]舍・是れ護・是れ證・是れ依・是れ不沒・是れ度・是れ不熱・是れ不燋・是れ無憂・是れ無惱・是れ無苦痛、及び餘の行もて涅槃を觀じて若し智の生ぜる、是を涅槃智と名く。

(22)云何が[六二]方便界なる。衆界・比界・觸界・思惟界、此は色界・此は無色界、此は可見界、此は不可見界、此は有對界、此は無對界、此は聖界、此は非聖界、此は界なりと、即ち彼の[六三]界に於て解脫の方便ある、是を方便界と名く。

云何が思惟方便界なる。若し思惟、衆思惟、比思惟、觸・憶念思惟、此は善思惟・此は不善思惟、[六四]此は正憶念・此は邪憶念、此は憶念なりと、即ち彼に於て方便解脫を知見する、是を思惟方便と名く。

(23)云何が非法方便なる。非法の衆・非法の比、非法の觸・思惟、非法の「此は輕罪」、「此は重罪」、「此は餘罪有り」、「此は餘罪無し」、「此は作惡なり」、「此は作惡に非ず」、「此は衆罪」、即ち彼に於て解脫の方便を知見する、是を非法方便と名く。

云何が除非法方便なる。非法の方便を除くの衆、非法の方便を除く比、非法の方便を除く觸・思惟、非法の方便を除くの「是の如きは非法の輕罪を除くことを得」、「是の如きは重罪を除く」、「此の如きは有餘無餘罪を除く」、「是の如きは作惡を除く」、「是の如きは非作惡罪を除く」、「是の如きは諸罪を除く」、「是の如きは諸罪を除き已る」、「是の如きの勝法は罪を除く」、――則ち彼に於て解脫の方便を知見する、是を除非法の方便と名く。

【六一】舍等。毘曇部一―五の拙註參照。
【六二】方便界。前の目錄分中には界方便智に作る。
【六三】界。宋元明、宮內省、聖護藏の五本にはこれを缺く。
【六四】此は。宋元明、三本によつて補入。

り。猶し船の流に逆うては難なるが如く、若し此の如きの智を得ることも、定得に非ず、難得たり[58]由力に非ず、[59]尊自在に非ず、所欲處に非ず、所欲の如くに非ず、所欲を盡さず、行進して生れこ難得たり。是を行進護持智と名く。

云何が[60]非行進護持智なる。若し智を得ること定、得ること難得に非ず、自由力・尊・自在・所欲處たり、所欲の如く、所欲を盡し、易行にして難生得に非ず。猶し船の流に順ひて難からざるが如く、若し此の如きの智を得ることも定智たり、難智ならず、自由力・尊・自在、所欲處にして所欲の如く、所欲を盡し、行ひて難生得に非ざる、是を非行進護持智と名く。

(19a) 云何が一分修智なる。若しは智の生じて想の光明有るも色を見ざる、若しは色を見るも想の光明有らざる、是を一分修智と名く。

云何が二分修智なる。若し智の生じて想も光明有り、亦色をも見る、是を二分修智と名く。

(19b) 復次に一分修智とは、若しは智あるも煩惱を斷ぜざる、若しは煩惱を斷ずるも智を生ぜざる、是を一分修智と名く。

復次に二分修智とは、若し智も生じ、亦煩惱をも斷ずる、是を二分修智と名く。

(19c) 復次に一分修智とは、若しは智の是れ盡智を生じて非無生智に非ざる、是を一分修智と名く。

復次に二分修智とは、若し智の盡智と無生智とを生ずる、是を二分修智と名く。

(20) 云何が盡智なる。貪欲・瞋恚・愚癡の盡き已りて『我は貪欲・瞋恚・愚癡盡く』と、卽ち彼に於て解脫の方便を智見する是れを盡智と名く。

云何が無生智なる。貪欲・瞋恚・愚癡の滅し已りて復、生ぜず。『我は貪欲・瞋恚・愚癡盡きて復、生ぜず』と、卽ち彼に於て解脫の方便を智見する、是を無生智と名く。

(21a) 云何が法住智なる。若し智の聖にして有爲境界なる、是を法住智と名く。

【五八】由力。上來は自由力とあり、また今の所の宋元明三本には由自力と作る。
【五九】尊等。同上の三本には非尊非自在と記す。
【六〇】非行進等。前の目錄分中には無行勝持智に作る。

云何が如金剛智なる。若し智の無量[五四]無量住・無量間住にして、猶し金剛の無量無量住・無量間住なるが如く、智も亦是の如く無量無量住・無量間住なる、是を如金剛智と名く。

(16b)復次に如電智とは、若し智の生じて、少煩惱分を斷じ、猶し電の雲間を出で少分を照して速かに滅するが如く、智も亦是の如く少煩惱分を斷ずる、是を如電智と名く。

復次に如金剛智とは、若し智の生じて一切煩惱を斷じて餘す無く、微細も盡く速斷せざるも無く、金剛の珠石を投ずるに破壞・摧折せざる無きが如く、智も亦是の如く、若し生じ已りて一切煩惱を斷じ、麁細も斷じて盡さゞる者あらざる、是を如金剛智と名く。

(16c)復次に如電智とは謂く、智の生じて須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得る。是を如電智と名く。

復次に如金剛智とは、若し智の生じて阿羅漢果を得る、是を如金剛智と名く。

(16a)復次に如電智とは、謂く、智の生じて須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得、阿羅漢果・辟支佛を得る、是を如電智と名く。

復次に如金剛智とは、如來の謂く智を生じて、一切法に於て無礙に知見し、自在自由力・尊貴勝・自在の知見・無上覺・如來の十力を得、四無所畏・大慈を成就し、自在の轉法輪を成就する、是の如きの智ある、是を如金剛智と名く。

(17)云何が[五五]不定得智なる。若し智を得ることの不定なる、得ることの難得なる、是を不定得智と名く。

云何が[五六]定得智なる。若し智を得ることの定にして、得ることの難得ならざる、是を定得智と名く。

〔一〕云何が[五七]行進護持智なる。若し智の得ること定に非ず、得ること、難得なり、自由力に非ず、尊に非ず、自在に非ず、所欲處に非ず、所欲の如くに非ず、所欲を盡さず、行進して生れて、難得た

【五四】無量。宮內省、聖語藏の二本に唯一の無量のみある。

【五五】不定等。cf. Vibhaṅga II, 33 (p. 309).

【五六】定得智。同上。

【五七】行進等。前の因緣分中には有行勝持智と作る。

(11)云何が外智なる。若し智の非受なる、是を外智と名く。
云何が有報智なる、若し智の報法なる、是を有報智と名く。
(12)云何が無報智なる。若し智の非報非報法なる、是を無報智と名く。
云何が凡夫共智なる。智の非凡夫も生得凡夫も亦生得なる、是を凡夫共智と名く。
云何が凡夫不共智なる。若し智の非凡夫の生得にして凡夫の不生不得なる、是を凡夫不共智と名く。
(13)云何が非凡夫共智なる。若し智の凡夫の[五三]得にして非凡夫も亦生得なる。是を非凡夫共智と名く。
云何が非凡夫不共智なる。若し智の凡夫の生得にして非凡夫の不生不得なる、是を非凡夫不共智と名く。
(14)云何が聲聞共智なる。若し智の非聲聞も生得たり、聲聞も亦生得なる、是を聲聞共智と名く。
云何が聲聞不共智なる。若し智の非聲聞の生得にして聲聞の不生不得なる、是を聲聞不共智と名く。
云何が非聲聞共智なる。若し智の聲聞も生得たり、非聲聞も亦生得なる、是を非聲聞共智と名く。
(15)云何が非聲聞不共智なる。若し智の聲聞の生得にして、非聲聞の不生不得なる、是を非聲聞不共智と名く。
云何が非聲聞不共智なる。若し智の聲聞の生得にして非聲聞の不生不得なる、是を非聲聞不共智と名く。
(16a)云何が如電智なる。若し智の少少住・少間住にして、電の少少住・少間住なるが如く、智も亦是の如く少少住少間住なる、是を如電智と名く。

【五三】得。明本には生得とす。

云何が[四三]無漏智なる。智の若し無愛なる、是を無漏智と名く。
云何が[四四]有愛智なる。智の若し有求なる、是を有愛智と名く。
云何が[四五]無愛智なる。智の若し無求なる、是を無愛智と名く。
(5)云何が有求智なる。智の若し當取なる、是を有求智と名く、
云何が無求智なる。智の若し非當取なる、是を無求智と名く。
(6)云何が[四六]當取智なる。智の若し有取なる、是を當取智と名く。
云何が[p. 591 a][四七]非當取智なる。智の若し無取なる是を非當取智と名く。
(7)云何が[四八]有取智なる。智の若しは有勝なる、是を有取智と名く。
云何が[四九]無取智なる。智の若し無勝なる、是を無取智と名く。
(8a)云何が[五〇]有勝智なる。智の若し有取なる、是を有勝智と名く。
云何が[五一]無勝智なる。智の若し無取なる、是を無勝智と名く。
(8b)云何が有勝智なる。若し此の智より、餘の智の勝妙・過上なる有る、是を有勝智と名く。
云何が無勝智なる。此の智より、餘に智の勝妙過上なるある、是を無勝智と名く。
(8c)云何が有勝智なる。如來の若し智を生じ、一切法の中に於て無礙に知見し、自在自由力・豪尊・自在の勝貴・自在の智見・無上最勝正覺、如來の十力を得、四無所長・大慈自在を成就し、轉法輪を成就する――彼の智を除く若しは餘の智なる、是を有勝智と名く。
云何が無勝智なる。若し前の餘す所の智なる、是を無勝智と名く。
(9)云何が受智なる。智の若し智の內なる、是を受智と名く。
云何が非受智なる。智の若し[五二]智外なる、是を非受智と名く。
(10)云何がが內智なる。若し智の受なる、是を內智と名く。

宮內省、聖語藏諸本には無し。
【四〇】尊。下には豪尊と記す。
【四一】云何以下。諸の二智を明かす。
【四二】有漏智。cf. Vibhaṅga p. 319 (II, 3). (但し、說明は違ふ)。
【四三】無漏智。同上。
【四四】有愛智。cf. Vibhaṅga II, 24(p. 309).
【四五】無愛智。同上。
【四六】當取智。cf. Vibhaṅga p. 309 (II, 18)
【四七】非當取智。同上。
【四八】有取智。同上。(II,17)
【四九】無取智。同上。
【五〇】有勝智。同上。(II,34)
【五一】無勝智。同上。
【五二】智外。外智の誤記か、でなければ智は衍字なるべし。

び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じ、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るゝ見、學人の若しは須陀洹、若しは斯陀含、若しは阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち一・一の沙門果の若しは須陀洹果、若しは斯陀含果、若しは阿那含果なるを證する、無學人の阿羅漢を得むと欲し、未だ得ざるの聖法を得むと欲し、修道して觀智具足し、若しは智地し若しは觀解脫心を觀じて卽ち[三六]阿羅漢果を得する若しは實の人の若しは趣の若しは法の擇・重擇・究竟擇・法思惟・覺るして自相・他相・共相に達する、[三七]思念・辨觀の生ずる、自在の智慧・智見・解射・方便・術焔・光明・照曜・慧眼・慧攝・慧力・擇法・正覺・無癡・正見なる、是を慧根と名く。

(4)云何が慧力なる。慧攝是を慧力と名く。

(5)云何が擇法正覺なる。慧力、是を擇法正覺と名く。

(6)云何が解脫智なる。若し解脫中に於て解脫の方便を智見し、心の、貪欲・瞋恚に於て解脫し、『我が心、貪欲・瞋恚に於て解脫す』と。卽ち彼の解脫の方便を智見する、是を解脫智と名く。

(7)云何が[三八]覺なる。如來の若し智、生じ、一切法の中に於て無礙に智見し、自在[三九]自由力・[四〇]尊・自在の勝貴・自在の知見・無上正覺・如來の十力を得、四無所畏・大慈を成就し、自在の轉法輪法を成就する是を覺と名く。

[四一](1)云何が正智なる。智の若し善順にして不逆なる、是を正智と名く。云何が邪智なる。智の若し不善・不順にして逆なる、是を邪智と名く。

(2)云何が聖智なる。智の若し無漏なる、是を聖智と名く。云何が非聖智なる。智の若し有漏なる、是を非聖智と名く。

(3)云何が[四二]有漏智なる。智の若し有愛なる、是を有漏智と名く。

宋元明、宮內省の四本によりて改む。但し、こゝの列名は完く混沌の感を免れず。

【二五】離染。大正本等有離染に作るも、四本によりて改む。

【二六】扼。宋元明、宮內省の四本には軛に作る。以下すべて然り。

【二七】智果等。下文中また二釋を出す。

【二八】解智等。下文中には例釋。

【二九】退分智以下。卷の一〇に攝め、諸の四智を列ぬ。

【三〇】住分智等。下文中、二釋を記す。

【三一】退分等。これに對する解釋文を下るは缺く。

【三二】住分等。同上。

【三三】五智等。以下は五數以上の多數智を列ぬ。

【三四】如來十智。その一の途中より、卷の第十一。

【三五】十二。大正本等、こゝには十に作るも下の本文（卷十一）及び、こゝの明・宮內省二本には十二に作るによりて改む。

【三六】忍。Kṣānti. 忍＝認。

【三七】思念等（卷五、慧根の說明下等には「思持辯、進辯」等とす。

【三八】覺。前の目錄分中には「正覺」に作る。

【三九】自由。由の字、宋元明、

方便、勤方便)[一七]・寂靜方便、取方便・捨方便、(30)過去智・未來智・現在智、[一八](1)過去境界智・未來境界智・現在境界智・非過去非未來非現在境界智、(2)欲界繫智・色界繫智・無色界繫智・不繫智、[一九](3)苦智・集智・滅智・道智、[二〇](4)法智、比智、世智、他心智、[二一](5)法辯・義辯・辭辯・應辯、[二二](6)作智非離智・離智非作智・作離智・非作非離智、[二三]非取非出智、(7)有染智、[二四]非離非離染智、非有染有染[二五]離染智・非有染非離染智、(8)[二六]扼智、非離扼離扼智・非離扼離扼智・非扼非離扼智、[二七](9)智果智非斷果智・斷果智非智果智・智果斷果智・非智果非斷果智智果智、(10)非得果得果智・非智果智・果得果智・非智果非得果智、(11)盡智非覺・覺智非[ㄅ]盡・盡覺智・非盡非覺智、[二八](12)解智・非脫脫智・非解解脫者・非解非脫智、[二九](1)退分智、[三〇]住分智、增甚分智、解分智、(2)退分智非住分・住分智非退分・住分退分智・非退分非住分智、(3)退分智非增甚分・增甚分智非退分・退分增甚分智・非退分非增甚分智、[三一](4)退分智非解分・解分智非退分・退分解分智、非退分非解分智、[三二](5)住分智非增甚分・增甚分智、非住分・住分增甚分智、非住分非增甚分智、(6)住分智非解分・解分智非住分・住分解分智・非住分非解分智、(7)增分智非解分・解分智非增分・增分解分智・非增分非解分智、[三三](1)五智、(2)六通、(3)七方便、(4)苦法智・苦比智、集法智・集比智、滅法智・滅比智、道法智・道比智、(5)九方便、[三四](6)如來十力、[三五](7)十二智性、(8)四十四智性、(9)七十七智性なり。

(1a)云何が正見なる。見の若し善順にして不逆なる、是を正見と名く。

(2a)云何が正智なる。智の若し善順にして不逆なる、是を正智と名く。

(1b)云何が正見なる。若し[三六]忍の善順にして不逆なる、是を正見と名く。

(2b)云何が正智なる。智の若し善順にして不逆なる、是を正智と名く。

(1c)云何が正見なる。盡智・無生智を除く若し餘の見の善順にして不逆なる、是を正見と名く。

(2c)云何が正智なる。盡智・無生智、是を正智と名く。

(3)云何が慧根なる。學人の結使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信若しは堅法　る、及

【一八】有共。この字は衍字か。
【一九】有光智・無光智。下文中には有用智・無用智に作る。
【二〇】善智等。以下は之を一對の智に當る。
【二一】卑智等。下文中に二釋を記す。
【二二】麁智等。同上三釋を記す。
【二三】三眼。同上二釋を出す。
【二四】衆生等。この一は、下文中にもあるが何の故たるを解せず。
【二五】少智等。下文中、二釋を出す。
【二六】惡方便・勤方便。下の解説文中、その解説を缺く。
【二七】寂靜等。下文中、二釋を出す。
【二八】過去等。以下諸の四智を明す。
【二九】苦智等。同上、下文中、三釋を出す。
【三〇】法智等。また下文中、二釋を出す。
【三一】去辯等。下文中、a、b、cの全三釋とdの前二者に對する釋(つまり三釋半)とを出す。
【三二】作智等。また下文には二釋を設く。
【三三】非取非出智。?下文にもその解説を見ず。
【三四】非離非離染智。大正本等には非雜非雜染智に作るも

卷の第九 (p. 589 c)

非問分智品[一] 第四【其の一】

(1)[二]正見、(2)正智、(3)慧根、(4)慧力、(5)擇法正覺、(6)解脫智、(7)正覺、(1)[三]正智・邪智、(2)聖智・非聖智、(3)有漏智・無漏智、(4)有愛智・無愛智、(5)有求智・無求智、(6)當取智・非當取智、(7)有取智・無取智、(8)[四]有勝智・無勝智、(9)受智・非受智(10)內智・外智、(11)有報智・無報智、(12)凡夫共智・凡夫不共智、(13)非凡夫共智・非凡夫不共智、(14)聲聞共智・聲聞不共智、(15)非聲聞共智・非聲聞不共智、[五](16)如電智・如金剛智、(17)不定得智・定得智、(18)有行勝持智・無行勝持智[六](19)一分修智・分修智、(20)盡智・無生智、[七](21)法住智・涅槃智、(22)界方便・思惟方便、(23)非法方便・除非法方便、(24)入定方便・出定方便、(25)有覺智・無覺智、(26)有觀智・無觀智、(27)有喜智・無喜智、(28)有味智・[八]有共捨智、[九](29)有光智・無光智、[一〇](1)善智・不善智、無記智、(2)學智・無學智・非學非無學智、(3)報智・報法智・非報非報法智、(4)見斷智・思惟斷智・非見斷非思惟斷智、(5)見斷因智・思惟斷因智、非見斷因智・非思惟斷因智、[一一](6)卑智、中智、勝智、[一二](7)麁智、細智、微智、(8)三明・(9)三慧・[一三](10)三明、(11)內身觀身智・外身觀身智・內外身觀〔p. 590 a〕身智、(12)內受觀受智・外受觀受智・內外受觀內外受智、(13)內心觀心智・外心觀心智・內外心觀內外心智、(14)內法中觀內法智・外法中觀外法智・內外法中觀內外法智、(15)內境界智・外境界智・內外境界智、(16)衆生境界智・色境界智・非色境界智・(17)衆生境界智、有爲境界智・無爲境界智、(18)衆生境界智、法境界智、無境界智、[一四]衆生境界智、[一五](19)少智・中智・無量智、(20)少境界智・中境界智・無量境界智、(21)少智少境界・少智中境界・少智無量境界・(22)中智少境界・中智中境界・中智無量境界・(23)無量智少境界・無量智中境界・無量智・無量境界・(24)少住智、中住智、無量住智、(25)少智少住・少智中住・少智無量住・(26)中智少住・中智中住・中智無量住・(27)無量智少住・無量智中住・無量智、無量住、(28)善道方便・惡道方便、善方便・[一六](惡

【一】智品。Ñāṇa-vagga. 有部の諸阿毘達磨論中にも發智以後のそれにはまた概ね同じ名のものを見出すべき一品であるが、而も內容上は、より以上に南傳毘崩伽論の XVI. Ñāṇa-vibhaṅga と比較せらるべき一品である。諸の有漏無漏、凡聖の智を巨細(一)列記して(二)解脫する所で、その毘崩伽論智分別との比較の如きは「阿毘達摩論の研究」の作者木村泰賢敎授の如きも、未だ必ずしも廣說的には個々比較檢討せられてゐない所であるが、今もその機會を十二分に得難く、別途の場合に殘されたる責任としてその試みを敢てすることゝしたい。但し、簡單には下註中亦、試る所もあるであらう。

【二】正見等二。下の解釋文中、三釋を記す。尙、こゝよりは二敎一對の諸智に當る。

【三】正智。大正本等には「正」字不記。宋元明、宮內省の四本により補入。

【四】有勝智。無勝智。下文中、各三釋を出す。

【五】如電等二。不文中には四釋を出す。

【六】一分等二智。準上に下文には三釋を記す。

【七】法住等二智。下文中、各、二釋を出す。

何をか法不發起人と謂ふ。欲を發起せず、瞋恚・愚癡を發起せざる、是を法不發起人と名く。

(99a)(68b)云何が[一二三]住劫人なる。若しは堅信・堅法、若しは復、善行有る、若しは人の現世に阿羅漢を得る、是を住劫人と名く。

何をか住劫と謂ふ。乃至一切世界の[一二四]煩惱不壞にして必らず彼の人をして四沙門果を得、三を得て觸證せしむるなり。——若しは須陀洹果、若しは斯陀含果、若しは阿那含果、若しは阿羅漢果なり。是を住劫人と名く。

(70)云何が[一二五]首等人なる。若し人の未だ行道せずして若しは有漏、若しは壽命の一時に倶斷する、復次に、漏を斷ずるの無間に命も斷ずることを得る。是を首等人と名く。

(71)云何が[一二六]度塹人なる。若し人の無明を斷ずる、是を度塹人と名く。

(72)云何が壞塹人なる。若し人の生死を斷ずる、是を壞塹人と名く。

(73)云何が乘進人なる。若し人の有愛を斷ずる、是を乘進人と名く。

(74)云何が無沾[c]汚人なる。若し人の五下分煩惱を斷ずる、是を無沾汚人と名く。

(75)云何が惰慢人なる。若し人の我慢を斷ずる、是を惰慢人と名く。

【一二三】住劫人。人施設論一の二〇。

【一二四】煩惱。人施設論にはこの字の相應なく、劫住人が目的を達するまでは一切世界の劫壞せぬ意をのぶ。

【一二五】首等人。人施設論一の一八。

【一二六】度塹人。以下はすべて人施設論には？

る、是を有退人と名く。

(62)云何が[二五]無退人なる。若し人の不共解脱心に於て住して[二六]變起せず、彼は共解脱心の退變せざる有るには非ざる、是を無退人と名く。

(63)云何が[二七]思有人なる。若し人の共解脱心に於て住するも、發起し、彼の有を思ふこと有り、『共解脱心に於て我を不終不退不變ならしめよ』と。是を思有人と名く。

(64)云何が[二八]有微護人なる。若し人の共解脱心に於て住するも發起し、彼の若し護るらく、『我をして共解脱心に於て不退不變ならしめよ』と。是を微護人と名く。

(65)云何が[二九]或は人有り、若し思はゞ退せず、思はざれば便ち退すなる。若し人の共解脱心に於て住するも發起し、彼の若しは我を害せむことを思へらく『我をして共解脱心に於て不退・不變ならしめよ』と。彼は共解脱心に於て不退・不變ならば我を害せむことを思はず、『我をして共解脱心に於て不退・不變ならしめよ』と。彼は共解脱に於て退變す。是を或は人有り、思はゞ退せず、思はざれば便ち退するの人と名く。

(66)云何が[三〇]或は人有り、若し微護すれば退せず、微護せざれば便ち退すなる。若し人の共解脱心に於て住するも發起す。彼の若し護るらく『我をして共解脱心に於て不退・不變ならしめよ』と。便ち共解脱心に於て不退・不變なり。若し『我をして共解脱心に於て不退・不變ならしめよ』と護らざれば、彼の共解脱心に於て不退・不變なるが彼、共解脱心に於て退變す。是を或は人有り、微護すれば退せず、微讀せざれば便ち退すと名く。

(67)云何が[三一]有緣射人なる。若し人の盡智生じて無生智に非ず。必らず當に無生智を生ずべく、當に緣射すべく、解脱心に於て終に發起せざる、是を有緣射人と名く。

(68a)云何が[三二]法不發起人なる。若し人の心、欲・瞋恚・愚癡を解脱する、是を法不發起人と名く。

【二五】無退人。同上一の六(無退法羅漢)。
【二六】變。宋元明、宮内省四本には「發」に作る。
【二七】思有人。人施設論一の七(思法羅漢)。こゝらの説明も、有部の少くとも俱舍廿五に於る等とは可成り相違せるを着目すべし。
【二八】有微護人。人施設論一の八。
【二九】或は等。人施設論?俱舍等(廿八)にはこれを思法羅漢とす。
【三〇】或は等。人施設論?
【三一】有緣射人等。同上。
【三二】法不發起等。人施設論?

(55) 云何が[一〇八]不濁想人なる。濁想とは謂く、欲想・瞋想・害想なり。不濁想とは謂く出想・不瞋恚想・非害想なり。若し人の欲想を捨てゝ出想を憶念し、瞋恚想を捨てゝ非瞋恚想を憶念し、捨害想を捨てゝ非害想を憶念する、是を不濁想人と名く。

(56a) 云何が[一〇九]除身行人なる。身とは謂く出息・入息なり。彼の若し寂靜滅除に入る、是を除身行人と名く。

(56b) 復次に除身行人とは、若し此の比丘の苦を斷じ、樂を斷じ、先に憂喜想を滅して不苦不樂にして捨・念清淨に、四禪行を成就する、是を除身行人と名く。

(57a) 云何が[一一〇]心善解脫人なる。若し人の、欲に於て心、解脫し、瞋恚・愚癡に於て心、解脫する、是を心善解脫人と名く。

(58a) 云何が[一一一]慧善解脫人なる。若し人の自ら法を知らるく『我が欲は斷じて必ず生ぜず、瞋恚・愚癡は斷じて必ず生ぜず』と、是を慧善解脫人と名く。

(57b) 云何が心善解脫人なる。若し人の、心、欲を解脫して無欲を得、觸證し已る、是を心善解脫人と名く。

(58b) 云何が慧善解脫人なる。若し人の、無明を離れ、慧解脫を得、觸證し已る、是を慧善解脫人と名く。

(57c) 云何が心善解脫人なる、若し人の盡智生じて無生智に非ざる、是を心善解脫人と名く。

(58c) 云何が慧善解脫人なる。若し人の盡智も生じ、及び無生智も生ずる、是を慧善解脫人と名く。

(59) 云何が[一一二]共解脫人なる。若し人の共解脫心に於て住するも發起する、是を共解脫人と名く。

(60) 云何が[一一三]不共解脫人なる。若し人の不共解脫心に住して發起せざる、是を不共解脫人と名く。

(61) 云何が[一一四]有退人なる。若し人の共解脫心に於て住するも、發起して、彼の、共解脫心の退變有

【一〇八】不濁想人。人施設論？

【一〇九】除身行人。同上。

【一一〇】心善解脫人。人施設論？

【一一一】慧善等。同上。

【一一二】共解脫人。人施設論は一の三〇。

【一一三】不共。目錄分中には非共。

【一一四】有退人。人施設論一の五、(退法羅漢)。

り。(3)我が世は常・非常なり――此は實にして餘は虚妄なり。(4)我が世は非常・非非常なり――此は實にして餘は虚妄なり。(5)我が世は有邊なり。――此は實にして餘は虚妄なり。(6)我が世は無邊なり。――此は實にして餘は虚妄なり。(7)我が世は有邊・無邊なり。――此は實にして餘は虚妄なり。(8)我が世は非有邊・非無邊なり――此は實にして餘は虚妄なり。(9)身は是れ命なり――此は實にして餘は虚妄なり。(10)[一〇〇]命は是れ身なり――此は實にして餘は虚妄なり。(11)身異・命異なり――此は實にして餘は虚妄なり。(12)[一〇一]無命無身なり――此は實にして餘は虚妄なり。(13)[一〇二]如去の涅槃有り――此は實にして餘は虚妄なり。(14)如去の涅槃無し――此は實にして餘は虚妄なり。(15)[一〇三]如去〔の涅槃〕有り、如去は涅槃せず――此は實にして餘は虚妄なり。(16)[一〇四]如去の涅槃有り如去は涅槃せざるに非ず――此は實にして餘は虚妄なり――彼の一切に於て滅害・捨解・吐出・離盡し已れる、是を滅異緣實人と名く。

(54)云何が[一〇五]求最勝人なる。若し人の欲求斷じ、有求斷じ、梵淨行を求めて所作の已に竟るなり。何をか欲求と謂ふ。欲界を未だ覺せず、未だ知らず、欲界を未だ斷ぜずして、法の若し欲界の陰界入なる若しは色・聲・香・味・觸、若しは衆生、若しは法――若し彼を求め、悕望し、聚集・盡求して、愛求し已り、悕望し已り、聚集・盡求し已る、是を欲求と名く。

云何が有求なる。色界・無色界を未だ覺せず、未だ知らず、色界・無色界を未だ斷ぜずして、若しは色界・無色界の陰・界・入、若しは禪、若しは解脫、若しは定、若しは[一〇六]三摩跋提――若しは此を求め、悕望し、聚集盡求して愛求し已り、悕望し已り、聚集・盡求し已る、是を有求と名く。

云何が梵淨行を求むなる。[一〇七]謂く八聖なり。若し彼を求め、悕望し、聚集・盡求して愛求し已り、悕望し已り、聚集・盡求し已る、是を梵淨行を求むる人と名く。

若し人の欲求斷じ、有求斷じ、梵淨行を求むる所作の已に竟る、是を求最勝人〔p.588:c〕と名く。

【一〇〇】命は等。普通は缺く。
【一〇一】無命等。同上。
【一〇二】如去等。普通文にては「如來は死後有り」(H. ti tathāgato paraṃ maraṇā)(漢譯にては「如來有後死」その他種々に記す)等と記せらる。
【一〇三】如去等。原漢文は―「有如去不如去涅槃」。
【一〇四】如等。同上は―有如去非不如去涅槃と。
【一〇五】求最勝人。人施設論?
【一〇六】三摩跋提。Samāpatti. 新譯に等至と譯す。
【一〇七】八聖。八聖道のこと。

(48a) 云何が堅法人なる若し人の寂靜解脫の、色・無色を過るを、彼の身もて觸行するに非ず、慧もて見て有漏を斷ずるに非ず、世尊の流布する所の法の如く慧觀もて而も堪忍する、是を堅法人と名く。

(47b) 云何が堅信人なる。若し人の性として信を好み、信多くして正決定に上り、未得の四沙門果の一一を觸證す。若しは須陀洹果、若しは斯陀含果、若しは阿那含果、若しは阿羅漢果なり。彼は[九二]五根に於て信根多く餘の四根の少く、未だ八解脫・滅盡定を得ず。是を堅信人と名く。

(48b) 云何が堅法人なる。若し人の性として擇法を好み、擇法多くして正決定に上り、未得の四沙門果の一一を觸證す。若しは須陀洹果、若しは斯陀含果、若しは阿那含果、若しは阿羅漢果なり。彼は此の五根に於て慧根多くして餘の四根少く、未だ八解脫・滅盡定を得ず。是を堅法人と名く。

(49a) 云何が[九三]斷五支人なる。若し人あり、五蓋を斷ず——欲愛蓋、瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋なり。是を斷五支人と名く。

(49b) 復次に斷五支人とは、若し人あり、五下分煩惱を斷ず——身見・疑・戒盜・欲愛・瞋恚なり。是を斷五支人と名く。

(50) 云何が[九四]六支成就人なる。若し人あり、六捨を成就す——彼は眼に色を見て憂無く、喜無く、[九五]捨行の念知ある、耳に聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に味を甞し、身に觸を覺し、意に法を知りて憂無く、喜無く、捨行の念知ある、是を六〔○〕支成就人と名く。

(51) 云何が[九六]一護人なる。若し人の念を以つての護心を成就する、是を一護人と名く。

(52) 云何が[九七]四依人なる。若し人の堪忍を知り、親近を知り、離を知り、捨を知る、是を四依人と名く。

(53) 云何が[九八]滅異緣實人なる。若し人の、此の外に於て、或は沙門・婆羅門の異緣見有り、(1)[九九]我が世は常なり——此の見は實にして餘は虛妄なり。(2)我が世は常に非ず——此は實にして餘は虛妄な

【九二】五根。宋元明、宮內省の四本には「此の五根」と。

【九三】斷五支人。人施設論?

【九四】六支等。同上。

【九五】捨行の念知ある。集異門足論一五「六捨行」下等に「順捨處の作意も思惟す」などいふにも關聯して解すべきか。

【九六】一護人。人施設論?

【九七】四依人。同上。

【九八】滅異緣實人。同上。

【九九】我が世等。所謂四無記といはるゝ所にして、漢巴共に全體で、十四又は十を數へるが普通である。雜五=S. 22; 雜 34=別雜 10—11=S. 33; 44 その他の諸契經中等を見るべし。

に非ざる、是を一分解脱人と名く。

(42a) 云何が二分解脱人なる。若し人の學時に八解脱・滅盡定を得し、後の無學の時に亦八解脱・滅盡定を得する、是を二分解脱人と名く。

(41b) 復次に一分解脱人とは、若し人の盡智生じて無生智に非ざる、是を一分解脱人と名く。

(42b) 復次に二分解脱人とは、若し盡智も生じ、無生智も生ずる、是を二分解脱人と名く。

(43) 云何が[八七]慧解脱人なる。若し人の寂靜解脱の色・無色を過るを、彼の身もて觸行するに非らず、見慧もて有漏を斷ずる、是を慧解脱人と名く。

(44) 云何が[八八]身證人なる。若し人の寂靜解脱の色・無色を過るを修し、身もて觸行し、慧もて見て有漏を斷ずるに非ざる、是を身證人と名く。

(45a) 云何が[八九]見得人なる。若し人の寂靜解脱の色・無色を過るを、彼は身もて觸行するに非ず、慧もて見て有漏を斷ずるに非ず、世尊の流布する所の法の如く、多く慧擇行を用ふる、是を(b)見得人と名く

(46a) 云何が[九〇]信解脱人なる。若し人の寂靜解脱の色・無色を過るを、彼は身もて觸行するに非ず、慧もて見て有漏を斷ずるに非ず、世尊の流布する所の法の如く慧擇行を以つてするも見得に及ばざる、是を信解脱人と名く。

(45b) 云何が見得人なる。若し人の堅法を得て正決定に上り、須陀洹果を得、斯陀含果を得、阿那含果を得るも、未だ八解脱・滅盡定を得ざる、是を見得人と名く。

(46b) 云何が信解脱人なる。若し人の堅信を得て正決定に上り、須陀洹果を得、斯陀含果を得、阿那含果を得るも、未だ八解脱・滅盡定を得ざる、是を信解脱人と名く。

(47a) 云何が[九一]堅信人なる。若し人の寂靜解脱の色・無色を過るを、彼の、身もて觸行するに非ず、慧もて見て有漏を斷ずるに非ず、彼の世尊を信受する。是を堅信解脱人と名く。

【八七】慧解脱人。人施設論一の三一。

【八八】身證人。同上一の三二。

【八九】見得人。人施設論一の三三。

【九〇】信解脱人。同上一の三四。

【九一】堅信人。人施設論一の三六。

身に阿羅漢果を得ず。多諸の緣業行を以つて親屬を慈愍し、宿業に由りて必らず當生に一天身を受け、彼は適意有り、適意を生じ、適意に住し、不適意を行じ、彼の天身に於て有行般涅槃す。何をか有行般涅槃と謂ふ。欲界に命終して、若し色界天上に生じ、彼は有行にして難得の無間道を得已り、便ち彼に於て般涅槃すれば、是を有行般涅槃と名く。復次に此は是れ彼の人の數、共に制して有行般涅槃と名くるなり。――是を有行般涅槃人と名く。

V　云何が[七八]上流至阿迦膩吒人なる。若し人の五下分煩惱を斷じ、身見・疑・戒盜・欲愛・瞋恚を聖道を以つて一時に倶斷す。此の聖は五根、最も軟なり。何等か五なる。信根〔p.588a〕進根・念根・定根・慧根なり。若し此の道は或は樂にして難解、或は苦にして難解なり。彼の道を修し已りて阿羅漢果を得るも、彼は留難有りて現身に阿羅漢果を得ず。多諸の緣行を以つて親屬を慈愍し、宿業に由りて必らず當生に五天身を受け、彼の天上に於て適意有り、適意を生じ、適意に住し、適意を行じ、此に若し命終せば上流して阿迦膩吒に至る。何をか上流して阿迦膩吒に至ると謂ふ。欲界に於て命終して色界の[七九]無勝天中に生じ、彼の天壽の如く彼の天壽を住し、住し已り、彼に命終して[八〇]無熱天中に轉生し、無熱天中に生じ已り、彼に命終して[八一]善見天中に轉生し、善見天中に生じ已り、彼に命終して[八二]如妙善見天中に轉生し、如妙善見天中に生じ已り、彼に命終して[八三]阿迦膩吒天中に轉生し、彼の天壽の如く住し、彼の天壽の如くに住し已りて無間道に[八四]逮び、阿羅漢果を得、阿羅漢果を得已りて卽ち彼に於て般涅槃す。是を上流至阿迦膩吒と名く。復次に、此は是れ彼の人の數、共に制して上流至阿迦膩吒と名くるなり。――是を上流至阿迦膩吒人と名く。

――是を五彼竟人と名く。

(41a)　云何が[八五]一分解脫人なる。若し人の先の學時に八解脫・滅盡定を得して後の無學の時に八解脫・滅盡定を得するに非さる、後の無學の時に八解脫・滅盡定を得して學の時に八解脫・滅盡定を得する

【七八】上流等。人施設論一の四六。

【七九】無勝天。集異門足論一四には相應所に廣果天を記し、次の無熱天との間に今一、無煩天をおく。

【八〇】無熱天。同上も同じ。

【八一】善見天。同上には善現天に作る。

【八二】如妙善見天。同上には善見天に作る。

【八三】阿迦膩吒天。同上には色究竟天に作る。

【八四】逮。宋元明、宮內省の四本には建に作る。

【八五】一分等。人施設論には？ 下も然り。

を中般涅槃人と名く。

Ⅱ云何が[七三]速般涅槃人なる。若し人の五下分煩惱を斷じ、身見・疑・戒盜・欲愛・瞋恚を聖道を以つて一時に俱斷す。此の聖は五根の利なること中般涅槃の如くならず。何等か五なる。信根・進根・念根・定根・慧根なり。若し此の道の若し速辨ならば若し彼の道を修して阿羅漢果を得るも、彼は留難有りて現身に阿羅漢果を得ず。多諸の緣行を以つて親屬を慈愍し、宿業に由りて必らず一天身を受け、彼に於て、不適意有り、不適〔〇〕意を生じ、不適意に住し、不適意を行じ、彼の天身に於て速般涅槃す。何をか速般涅槃と謂ふ。欲界に命終して色界天上に生じ、彼の天壽は樂少く離多くして速かに般涅槃すれば、是を速般涅槃と名く。復次に、此は是れ彼の人の數、共に制して速般涅槃人と名くるなり。――是を速般涅槃人と名く。

Ⅲ云何が無行般涅槃人なる。若し人の五下分煩惱を斷じ、身見・疑・戒盜・欲愛・瞋恚を聖道を以つて一時に俱斷す。此の聖は五根軟なり。何等か五なる。信根・進根・[七五]定根・慧根・念根なり。若し此の道の樂にして難辨ならば、若し彼の道を修して阿羅漢果を得るも、彼は留難有りて現身に阿羅漢果を得ず。多諸の緣行を以つて親屬を慈愍し、宿業に由つて、必らず當生に一天身を受け、彼は適意有り、適意を生じ、不適意に住し、不適意を行じ、彼の天中に於て無行般涅槃す、何をか無行般涅槃と謂ふ。欲界に命終して若し色界天上に生じ、彼に於て無行にして[七六]無間道を得、得已りて即ち彼の間に於て般涅槃すれば、是を無行般涅槃と名く。復次に此は是れ彼の人の數、共に制して無行般涅槃と名くるなり。――是を無行般涅槃人と名く。

Ⅳ云何が[七七]有行般涅槃人なる。若し人の五下分煩惱を斷じ、身見・疑・戒盜・欲愛・瞋恚を聖道を以つて一時に俱斷す。若し此の聖は五根、軟なり。何等か五なる。信根・進根・念根・定根・慧根なり。若し此の道の苦にして難辨ならば、若し彼の道を修し已りて阿羅漢果を得るも、彼は留難有りて現

【七四】速般等。人施設論一の四三。

【七五】無行般涅槃人。人施設論一の四四。

【七六】定等。宋元明、宮内省の四本には念定慧の順とす。

【七七】無間道。毘曇部一―五中の諸拙註等參照。

【七八】有行般涅槃人。人施設論一の四五。

IVa云何が[六八]一種人なる。若し人の見斷の三煩惱斷を斷じ、身見・疑・戒盜を聖道を以つて一時に倶斷し、思惟斷の欲愛・瞋恚煩惱の分斷を聖道を〔b〕以つて一時に倶斷し、上道を得て餘の思惟斷の欲愛・瞋恚の無餘斷を未だ斷ぜず、業を作りて必ず當生に一人身を受け、一人身を受行し已りて苦の邊を盡くす、是を一種人と名く。

IVb復次に一種人とは、若し人の見斷の三煩惱を斷じ、身見・疑・戒盜を聖道もて一時に倶斷し、思惟斷の欲愛・瞋恚を多斷すること斯陀含に過るも阿那含の如くに非ず、業を作りて必ず當生に一人身を受け、一人身を受行し已りて苦の邊を盡くす、是を一種人と名く。

V云何が[六九]現身に阿羅漢を得るの人なる。若し人の我分の身を以つて、[七〇]若しは長若しは幼にして正決定に上る。此の人は此の生の我分の身の若しは長、「若しは」幼にして須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得、阿羅漢果を得。是を現身に阿羅漢果を得るの人と名く。

――是を五此竟人と名く。

(40)云何が[七一]五彼竟人なる。中般涅槃人・速般涅槃人・無行般涅槃人・有行般涅槃人・上流般涅槃人なり。

I云何が[七二]中般涅槃人なる。若し人の五下分煩惱を斷じ、身見・疑・戒盜・欲愛・瞋恚を聖道を以つて一時に倶斷し、彼の聖は五根の利用、最勝なり。――信根・進根・念根・定根・慧根なり。若し此の道の樂にして速解ならば若し彼の道を修し已りて阿羅漢果を得むも、彼は留難有りて現身に阿羅漢果を得ず。或は多諸の緣行もて親屬を慈愍し、宿業もて必らず當生に一天身を受け、彼に於て不適意有り、不適意を生じ、不適意に住し、不適意を行じ、彼の天身に於て中般涅槃す。何をか中般涅槃と謂ふ。欲界に於て命終して若し色界天上に生じ、彼の天壽の中に於て、彼の斷法の中に於て般涅槃すれば、是を中般涅槃と名く。[七三]復次に此は是れ彼の人の數、共に制して中般涅槃と名くるなり。――是

【六八】一種人、同上一の三九。

【六九】現身等。人施設論には？

【七〇】若しは。大正本等すべて「此の」に作り、聖護藏本には缺。

【七一】五此竟人。又、人施設論には各別に一の諸人中に列ぬ。集異門足論一四中その外參照。

【七二】中流般等。人施設論一の四二。

【七三】復次に等。集異門足論等（一例卷一四―毘曇部二、初版 p. 96 等）に、「復次に、此は是れ彼の名、異語、增語、諸の想、等想、施設、言說の、……と謂ふが故に……と名く」などいふを參照すべし。

(38)云何が[六二]六通人なる。若し[六三]六通を成就して多く是の行を行ずる、是を六通人と名く。
(39)云何が[六四]五此竟人なる。七生人・家家人・斯陀含人・一種人・若しは現身に阿羅漢を得るの人なり。

Ia 云何が[六五]七生人なる。須陀洹、是を七生人と名く。

Ib 復次に七生人とは、若し人の見斷の三煩惱を斷じ、身見・疑・戒盜を聖道もて一時に倶斷し、彼が斷に住して未だ上道を得て思惟斷の欲愛・瞋恚煩惱を分斷せず、業を作りて必ず當に七天七人身を受け、七天七人身を受行し已りて苦の邊を盡くす、是を七生人と名く。

IIa 云何が[六六]家家人なる。若し人の見斷の三煩惱を斷じ、身見・疑・戒盜を聖道もて一時に倶斷し、上道を得るも、思惟斷の欲愛・瞋恚煩惱の分斷を未だ斷ぜず、業を作りて必ず當生に或は二・三の人身を受け、彼は或は二・三の人身を受行し已りて苦の邊を盡くす、是を家家人と名く。

IIb 復次に家家人とは、若し人の見斷の三煩惱を斷じ、身見・疑・戒盜を聖道もて一時に倶斷し、思惟斷の欲愛・瞋恚煩惱を分斷するも、未だ斯陀含に如かず。業を作りて必ず當生に或は二・三の人身を受け、二三の人身を受け已りて苦の邊を盡くす、是を家家人と名く。

IIIa 云何が[六七]斯陀含人なる。若し人の見斷の三煩惱を斷じ、身見・疑・戒盜を聖道を以つて一時に倶斷し、思惟斷の欲愛・瞋恚煩惱の分斷をも聖道を以つて一時に倶斷し、彼が斷に於て住し、未だ上道を得て餘の思惟斷の欲愛・瞋恚を餘無く斷ぜず、業を作りて必ず當生に一天一人身を受け、一天一人身を受行し已りて苦の邊を盡くす、是を斯陀含人と名く。

IIIb 復次に斯陀含人とは、若し人の見斷の三煩惱——身見・疑・戒盜を聖道を以つて一時に倶斷し、思惟斷の欲愛・瞋恚煩惱の分斷も家家人に過るも一種人の如くならず、業を作りて必ず當生に一天一身を受け、一天一身を受行し已りて苦の邊を盡くす、是を斯陀含人と名く。

【六二】 六通人。人施設論一の二七。
【六三】 六通。集異門足論十五の末等參照。
【六四】 五此竟人。人施設論には下の如く別々に記す。
【六五】 七生人。人施設論一の三七。
【六六】 家々人。同上一の三八。
【六七】 斯陀含人。同上一の四〇。

果を得する、是を空行人と名く。

(32b) 復次に無相行人とは、若し人の無相定を得て正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得する、是を無相行人と名く。

(33b) 云何が無願行人とは、若し人の無願定を得て正行定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得する、是を無願行人と名く。

(34) 云何が[五三]無惱行人なる。若し人の、無惱法を得るなり。何等か無惱法なる。謂く、若し人ありて勸讚を知り、不勸讚を知り、勸讚・不勸讚を知り已りて勸讚するに非ず、勸讚せざるに非ず。法を說くこと明了、法を知ること明了なり。法を知り已りて內に精進を樂うて、背に惡を說かず、面（まのあたり）に讚善せず。稱滿說法して稱滿せざるに非ず。必ずしも方語を顧みず、是れ非人禮ならず。方に隨つて說法す。復次に[五四]根・力・覺・禪・解脫・定を修し、修し已りて聖無漏の捨を得、若し捨あれば則ち法律に應じて欲樂の凡夫の卑行を行ぜず、非聖無義の苦行を行ぜず、常に二邊を捨して中道に應ずるの行に入り、勸讚を知り、不勸讚を知り、勸讚・[五五]非不勸讚を知り已りて、勸讚せず、勸讚せざるに非ず。法を說くこと明了、法を知ること明了なり。法を知り已りて內に精進を樂ひ、背處に惡を說かず、面前に讚善せず。稱滿說法して稱滿せざるに非ず。必ずしも方語を顧みざるも是れ非人禮ならず。方に隨つて說法す。惱害無く惱を離れ、惱に於て解脫して無惱法に入る。復次に、此は是れ彼の人の數（しばしば）、共に制して無惱と名くるなり。——是を無惱行人と名く。

(35) 云何が[五六]勝入行人なる。若し人の[五七]八勝入を得て、多く是の行を行ずる、是れ勝入行人と名く。

(36) 云何が[五八]一切入行人なる。若し人の[五九]一切入を得て多く是の行を行ずる。是を一切入行人と名く。

(37) 云何が[六〇]修八[p.587c]解脫人なる。若し人の[六一]八解脫を得て多く是の行を行ずる、是れ修八解脫人と名く。

【五三】無惱行人等。同前。

【五四】根等。五根、五力、七覺分、四禪、八解脫、四無色定(?)の義。集異門足論乃至、本論中その他の各相應下參照。

【五五】非。宋本には缺く。

【五六】勝入等。人施設論不記。

【五七】八勝入。新譯等の八勝處のこと(集異門足論十九初)。

【五八】一切等。人施設論又不記。

【五九】一切入。十一切入、卽ち新譯の十徧處のこと(同上中參照)。

【六〇】修八等。人施設論又不記

【六一】八解脫。集異門足論十八等參照。

(26)云何が二眼人なる。若し人の、眼を成就して未だ得ざるの財寶を能く得、得已りて弘く廣むる——是の如きの眼有り、如し人の眼を成就して未だ生ぜざるの善法を能く生じ、生じ已りて弘く廣むる——是の如きの眼有る、是を二眼人と名く。

(27a)云何が[五〇]慈行人なる。若し人の[五一]慈解心を得て多く是の行を行ずる、是を慈行人と名く。

(28a)云何が悲行人なる。若し人の悲解心を得て多く是の行を行ずる、是を悲行人と名く。

(29a)云何が喜行人なる。若し人の喜解心を得て多く是の行を行ずる、是を喜行人と名く。

(30a)云何が捨行人なる。若し人の捨解心を得て多く是の行を行ずる、是を捨行人と名く。

(27b)復次に慈行人とは、若し人の慈解調心を得已り、柔軟を修行し已りて次第に正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得する、是を慈行人と名く。

(28b)復次に悲行人とは、若し人の悲解調心を得已り、柔軟を修行し已りて、次第に正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果を得、阿那含果を得、阿羅漢果を得する、是を悲行人と名く。

(29b)復次に喜行人とは、若し人の喜解調心を得已り、柔軟を修行し已りて次第に正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得する、是を喜行人と名く。

(30b)云何が捨行人なる。若し人の捨解調心を得已り、柔軟を修行し已りて次第に正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含〔○〕果・阿羅漢果を得する、是を捨行人と名く。

(31a)云何が[五二]空行人なる。若し人の空定を得て多く是の行を行ずる、是を空行人と名く。

(32a)云何が無相行人なる、若し人の無相定を得て、多く是の行を行ずる、是を無相行人と名く。

(33a)云何が無願行人なる。若し人の無願定を得て、多く是の行を行ずる、是を無願行人と名く。

(31b)復次に空行人とは、若し人の空行を得て正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢

【五〇】慈行人等。人施設論不記。

【五一】慈解心。新譯の慈心定のことで前卷中の註參照。以下も準ず。

【五二】空行人等。同前。

(20) 云何が非學非無學人なる。凡夫人、是を非學非無學人と名く。
(21a) 云何が[四七]正定人なる。若し人の正決定に上れる、是を正定人と名く。
(22a) 云何が邪定人なる。若し人の邪定に入れる、是を邪定人と名く。
(23a) 云何が不定人なる。若し人の正決定にも上らず、邪定にも入らざる、是を不定人と名く。
(21b) 云何が正定人なる。若し人の正決定を得せる、是を正定人と名く。
(22b) 云何が邪定人なる。若し人の邪定を得せる、是を邪定人と名く。
(22b) 云何が不定人なる。若し人の正決定も得せず、邪定も得せざる、是を不定人と名く。
(21c) [四八]云何が正定人なる。若し人の聖五根を得し已れる、曾得せる、是を正定人と名く。
(22c) 云何が邪定人なる。若し人の五無間を作し〔七〕業を成就し已りて未だ受報せざる、五無間に於て業を成就して若しは一、若しは二を未だ受報せざる、是を邪定人と名く。
(23c) 云何か不定人なる。若し人の未だ聖五根を得せず、未だ曾得せざる、五無間を作さず、業を成就せず、受報せざる、五無間に於て業を成就せず、若しは一若しは二を受報せざる、是を不定人と名く。
(24) 云何が[四九]盲人なる。若しは人の、眼を成就して未だ得ざるの財寶を能く得、得已りて弘く廣むる——是の如きの眼無き、若しは人の、眼を成就して未だ生ぜざるの善法を能く生じ、生じ已りて弘く廣むる——是の如きの眼の無き、是を盲人と名く。
(25) 云何が一眼人なる。如し人の、眼を成就して未だ得ざるの財寶を能く得、得已りて弘く廣むる——是の如きの眼有るも、如し人の、眼を成就して未だ生ぜざるの善法を能く生じ、生じ已りて弘く廣むる——是の如きの眼無き、是を一眼人と名く。

【四七】正定人等。人施設論一の一五—一六（定・不定人）參照。
【四八】云何等。人施設論の釋はやゝこの說に近き唯一をのみ記す。
【四九】盲人等。人施設論三の六。

是を趣阿羅漢果證人と名く。

(15b) 復次に阿羅漢人とは、若し人の思惟斷の色行の煩惱・無色行の煩惱の餘り無く斷ぜる、是を阿羅漢人と名く。

(15c) 復次に阿羅漢人とは、若し人の、一切煩惱を斷ぜる、是を阿羅漢人と名く。一切の煩惱の盡きたる阿羅漢果を若し人の觸證することを得たる、是を阿羅漢人と名く。

(16) 云何が自足人なる。[四四]世尊の說くが如し、世に二人は得ること難し。何等か二なる。自足と他足となりと。

(17) 云何が他足なる。若し人の沙門・婆羅門・貪無厭人・貧窮乞匃人に飲食・車乘・衣服・香花・塗香・床褥・臥具・舍宅・依止・燈明を施す、是を他足人と名く。

云何が自足人なる。若し比丘の有漏盡き、乃至、所作已に辨じ、更に有に還らざる、是を自足人と名く。

是の如きの二人は誰か說く所なる。如來性の因みに曰く、

自足と他足とを　世間に甚だ希有なりと稱す。
施者は清池の如く、　常に淨戒の身に住し、
又能く飲食を施す。　是の人は甚だ得難し。
欲を離れ、瞋恚を斷じ、　癡を滅して無漏を得、
聖法、以つて自足す。　是の人は甚だ得難し。

(28) 云何が[四五]學[四六]人なる。趣須陀洹果證人・須陀洹人・趣斯陀含果證人・斯陀含人・趣阿那含果證人・阿那含人・趣阿羅漢果證人、是を學人と名く。

(19) 云何が無學人なる。阿羅漢、是を無學人と名く。

【四四】世尊等。A. II, 11,10 (I, p. 87)等。

【四五】云何等。以下三の諸人を說明す。

【四六】學人等。人施設論一の二二—二五。

だ觸證せざる、是を趣阿羅漢果證人と名く。

(15a) 云何が[四〇]阿羅漢人なる。若し人の阿羅漢果道の觸證を得已れる、是を阿羅漢人と名く。

(8b)[四一]復次に趣須陀洹果證人とは、[四二]堅信・堅法、是を趣須陀洹果證人と名く。

(9b) 云何が須陀洹人なる。若し人の見斷の三煩惱——身見・疑・戒取——聖道を以つて一時に彼の煩惱を俱斷し、彼の斷に住して未だ上道を得て思惟斷の欲愛・瞋恚・煩惱を分斷せざる、是を須陀洹人と名く。

(10b) 復次に趣斯陀含果證人とは、若し人の見斷の三煩惱＝身見・疑・戒取——聖道を以つて一時に彼の煩惱を俱斷し已り、上道を得るも、思惟斷の欲愛・瞋恚・煩惱の分斷を未だ斷ぜざる、是を趣斯陀含果證人と名く。

(11b) 復次に斯陀含人とは、若し人の、見斷の三煩惱＝身見・疑・戒取を聖道を以つて一時に俱斷し已り、思惟斷の欲愛・瞋恚・煩惱の分斷も聖道を以つて一時に俱斷し、彼が斷に於て住して未だ上道を得ず、餘の思惟斷の欲愛・瞋恚の無餘斷を未だ斷せざる、是を斯陀含人と名く。

(12b) 復次に趣阿那含果證人とは、若し人の見斷の三煩惱——身見・疑・戒取を聖道を以つて一時に俱斷し、思惟斷の欲愛・瞋恚煩惱をも聖道もて一時に俱斷し、上道を得るも、餘の思惟斷の欲愛・瞋恚の無餘斷を未だ斷ぜざる、是を趣阿那含果人と名く。

(13b) 復次に阿那含人とは、若し[四三]五下分煩惱斷じ、身見・疑・戒取・欲愛・瞋恚を、聖道を以つて一時に俱斷し、彼が斷に於て住して未だ上道を得ず、思惟斷の色行・無色行の煩惱の無餘斷を未だ斷ぜざる、是を阿那含人と名く。

(14b) 復次に趣阿羅漢果證人とは、若し人の五下分煩惱斷じ、身見・疑・戒取・欲愛・瞋恚を、聖道を以つて一時に俱斷し、上道を得るも、思惟斷の色行・無色行の煩惱の無餘斷を未だ斷ぜざる、〔p.586a〕

二九。

【二八】彼。宋元明、宮內省の四本には亦に作る。

【二九】自ら思ひ。同上四本には缺。

【三〇】云何が等。この第二解は同前の四本には缺く。

【三一】正覺人。人施設論の二八。

【三二】云何等。以下二の諸人を明かす。

【三三】趣須陀等。人施設論一の四七b、

【三四】須陀等。人施設論同上a、

【三五】趣斯陀等。同上一の四十八b、

【三六】斯陀等。同上a、

【三七】趣阿那等。同上一の四九b、

【三八】阿那含人。同上a、

【三九】趣等。同上一の五〇b、

【四〇】阿羅漢人。同上a、

【四一】復次等。如上の別釋。

【四二】堅信等。その別釋下參照。

【四三】五下分煩惱。五下分結のことで、集異門足論十二—毘曇部二、初版 p. 511f 等參照。

陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得、一切法に於て心、無礙にして知見し、心、自在を得、心の、力に由りて自在を得、心、豪尊・勝貴・自在なるも、無上最勝の正覺を知見するに非ず、如來の十力・四無所畏・大慈を成就して法輪を轉ずるに非ざる、是を緣覺人と名く。

(7)云何が[三二]正覺人なる。若し人の三十二相を成就し、他に從つて聞かず、他の教を受けず、他の說を請はず、他の法を聽かずして自ら思ひ、自ら覺し、自ら觀じ、一切法に於て知見、無礙なり、就力に由つて自在を得、豪尊・勝貴・自在たり、無上最勝の正覺を知見し、如來の十力・四無所畏を成し、大慈を成就し、自在に法輪を轉ずることを成就する、是を正覺人と名く。

(8a)云何が[三三]趣須陀洹果證人なる。若し人の須陀洹果道を證するを得て未だ須陀洹果を得ず、未だ觸せず、未だ證せざる、是を趣須陀洹果證人と名く。

(9a)云何が[三四]須陀洹人なる。若し人の須陀洹果を觸證し已りて果に住し、未だ上道を得て斯陀含果に趣かざる、是を須陀洹人と名く。

(10a)云何が[三五]趣斯陀含果證人なる。若し人の斯陀含果道を得て未だ斯陀含果の觸證を得ざる、是を趣斯陀含果證人と名く。

(11a)云何が[三六]斯陀含人なる。若し人の斯陀含果の觸證を得已りて彼の果に住し、未だ上道を得て阿那含果に趣かざる、是を斯陀含人と名く。

(12a)云何が[三七]趣阿那含果證人なる。若し人の阿那含果道〔〇〕を證することを得て未だ阿那含果を得ず未だ觸證せざる、是を趣阿那含果證人と名く。

(13a)云何が[三八]阿那含人なる。若し人の阿那含果の觸證を得已りて果に住し、未だ上道を得て阿羅漢果に趣かざる、是を阿那含人と名く。

(14a)云何が[三九]趣阿羅漢果證人なる。若し人の阿羅漢果道を證することを得て未だ阿羅漢を得ず、未

M. 91 Brahmāyu-S.;＝中、四一、梵摩經、長二〇、阿摩晝經＝D. 3, Ambaṭṭha-s; 中、十一、三十二相經、長一、大本經＝D. 14, Mahāpadāna-S.; 本行集經相師占看品(卷九)、Lalitavistara (Editi. by Lefmann I, p. 105)＝方廣大莊嚴經卷三、誕生品七、Dharmasaṅgraha 83 (p. 18 f); 荻原雲來教授「佛教辭典」中、その他大般若、智度論等甚だ多數の經中參照。

【三四】 十力。Daśabalāni—次の四無畏と共に、如來特有の不共力にして、雜一四の六、同二十六の諸經その他、乃至、俱舍二十七等參照、（本論卷一〇—十一中參照）

【三五】 四無所畏。右の十力中を四、抽出し、佛の不共力と立てた如き勝性項目にして、(一)正等覺無畏、(二)漏永盡無畏、(三)說障法無畏、(四)說出道無畏をいふ。增一、四二、同十九、俱舍同前、M. I, p. 71; A. 2. p. 8.; S. 12, 21＝雜十四、六その他を見よ。Cattāri vesārajjāni (Skt. Catvāri Vaiśāradyāni)

【三六】 大慈。Mahā-karuṇā. また、佛陀＝如來の不共法の一で、俱舍同前、婆沙三十一、その外參照。

【三七】 緣覺人。人施設論一の

(3a)云何が[二〇]性人なる。若し人の次第に凡夫の勝法に住して若し法の卽ち滅し、正決定に上る、是を性人と名く。

(3b)云何が性人なる。若し人の性法を成就するなり。何等か性法なる。若しは無常・苦・空・無我、涅槃の寂滅を思惟し、不定心にして未だ正決定に上らざる如實人の若しは受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅喜・心進・信・欲・不放逸・念・意識界・意界、若しは如實の身戒・口戒、是を性法と名く。若し人の此の法を成就する、是を性人と名く。

(4)云何が[二一]聲聞人なる。若し人の他に從つて聞き、他の教を受け、他の說を請ひ、他の法を聽き、自ら思ふに非ず、自ら覺するに非ず、自ら觀ずるに非ずして正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得る、是を聲聞人と名く。

(5)云何が[二二]菩薩人なる。若し人の[二三]三十二相を成就し、他に從つて聞かず、他の教を受けず、他の說を請はず、他の法を聽かず、自ら思ひ、自ら覺し、自ら觀じ、一切法を於て知見無礙にして、當に自力・自在・豪尊・勝貴・自在を得べく、當に無上正覺を知見するを得べく、當に如來の[二四]十力・[二五]四無所畏を成就し、[二六]大慈を成就して法輪を轉ずべき、是を菩[b]薩人と名く。

(6a)云何が[二七]緣覺人なる。若し人の三十二相を成就せず、[二八]彼、他に從つて聞かず、他の教を受けず、他の說を請はず、他の法を聽かず、[二九]自ら思ひ、自ら覺し、自ら觀じて正決定に上り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果、阿羅漢果を得、一切法に於て無礙の知見非ず、自在を得るに非ず、力に由つて自在を得るに非ず、豪尊・勝貴・自在に非ず、無上最勝の正覺を知見するに非ず、如來の十力・四無所畏・大慈を成就して法輪を轉ずるに非ざる、是を緣覺人と名く。

(6b)[三〇]何が緣覺人なる。若し人の三十二相を成就せず、亦他に從つて聞かず、他の教を受けず、他の說を請はず、他の法を聽かずして、自ら思ひ、自ら覺し、自ら觀じて正決定に上り、須陀洹果・斯

【九】五等。また下文中、中の初四人は二釋を出す。
【一〇】一分等二人。同上、各二釋を出す。
【一一】堅信等二人。また同上、各二釋を記す。
【一二】斷等。同上。
【一三】心韓等二人。同上三釋を出す。
【一四】法等。また同上二釋を出す。
【一五】住劫人。同上。
【一六】云何等。如上の應特勒伽 Mātṛkā（論母）に對する以下は解說で、まづ一の諸人を說明す。
【一七】凡夫人。人施設論 I, 9.
【一八】非凡夫人。人施設論不記。
【一九】五根。信・勤（本論には、進に作る）念・定・慧の五根のこと。
【二〇】性人。人施設論一の一〇、Gotrabhū.
【二一】聲聞人。人施設論不記。
【二二】菩薩人。同上。
【二三】三十二相。三十二大人之相といひ、印度の一般信仰として、生れて肉身的にこの相あるものは、もし在家せば理想的王者としての轉輪王となり、もし出家すれば則ち佛陀となるとせられたもの。詳しくはM, 77 Mahāsakuludāyi-S; M. 90 Kaṇṇakatthala-S;

卷の第八 [p.584c]

非問分 人品第三[一]

(1)凡夫人[二]、(2)非凡夫人[三]、(3)性人、(4)聲聞人、(5)菩薩人、(6)緣覺人[四]、(7)正覺人、(8)趣須陀洹果證人[五]・(9)須陀洹人、(10)趣斯陀含果證人・(11)斯陀含人、(12)趣阿那含果證人・(13)阿那含人、(14)趣阿羅漢果證人、(15)阿羅漢人、(16)自足人・(17)他足人、(18)學人・(19)無學人、(20)非學非無學人、(21)正定人[六]・(22)邪定人・(23)不定人、(24)盲人・(25)眼人(26)一眼人(27)慈行人[七]・(28)悲行人、(29)喜行人・(30)捨行人・(31)空行人[八]、(32)無相行人・(33)無願行人、(34)不惱行人、(35)勝入行人、(36)一切入行人、(37)修八解脫人、(38)六通人、(39)五比竟人[九]・(40)五彼竟人、(41)一分解脫人[一〇]・(42)二分解脫人、(43)慧解脫人、(44)身證人・(45)見得人、(46)信解脫人、(47)堅信人[一一]、(48)堅法人、(49)斷五支人[一二]、(50)六支成就人、(51)護人、(52)四依人、(53)滅異緣實人、(54)求最勝人、(55)不濁想人、(56)除身行人、(57)心善解脫人[一三]・(58)慧善解脫人・(59)共解脫人・(60)非共解脫人、(61)有退人・(62)無退人、(63)思有人、(64)微護人、(65)思はば退せず、思はされば退するの人・(66)護らば退せず、護らされば退するの人、(67)有緣射人、(68)法不發起人[一四]、(69)住劫人[一五]、(70)自等人、(71)度塹人、(72)壞塹人、(73)乘進人、(74)無沾汚人、(75)惰慢人。

(1a)云何が[一六]凡夫人なる[一七]。若し人の未だ正決定に上らざる、是を凡夫人と名く。
(2a)云何が[一八]非凡夫人なる。若し人の正決定に上れる、是を非凡夫人と名く。
(1b)復次に凡夫人とは、若し人の未だ正決定を得ざる、是を凡夫人と名く。
(2b)復次に非凡夫人とは、若し人の正決定を得たる、是を非凡夫人と名く。
(1c)復次に凡夫人とは、若し人の未だ聖を得ず、[一九]五根を未だ曾つて得ざる、是を凡夫人と名く。
(2c)復次に非凡夫人とは、若し人の聖を得、五根を曾得せる、是を非凡夫人と名く。

【一】人品。Puggala-vagga. 前來の非問分諸品と同段の組織をもつて種々凡聖の佛教的人格を陳列、解說する部門で、また南傳逼伽羅坋那埵 Puggalapaññatti (人施設論)に比較さるべき品である。而もかゝる研究については、既に椎尾辨匡教授の雜誌宗教界(第十卷)、六足論發達に關する諸論文中に散說)に於ける、並に木村泰賢教授の阿毘達磨論の研究(殊にその第二篇)於ける等、甚だ卓拔なる成績あれば、詳細はそれに讓り、以下註記も出來る限り、簡にすることゝしたい。因みに本品の記する所の全諸人は計七十五。中に解釋分中、數釋を設くる所あるものは概ね左註の如し。
【二】凡夫人・非凡夫人。下文中には各三釋を出す。
【三】性人。同上また二釋を出す。
【四】緣覺人。同上。
【五】趣須以下。八聖について同上、各二釋を出す。(但し最後の阿羅漢のみは三釋)
【六】正定等三人。下文中、三釋を出す。
【七】慈行等四人。また下文中、二釋を出す。
【八】空行等三人。同上三釋を出す。

(3)云何が三十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること穳矛の如くなるなる。自ら殺生する、他に殺生を教ゆる、殺生を讃歎する、乃至、自ら邪見ある、他に邪見を教ゆる、邪見を讃歎する、是れ三十法を成就すれば、地獄に墮することの速かなること穳矛の如くなるなり。

(4)云何が三十法を成就すれば善處に生ずることの速かなること穳矛の如くなるなる。自ら不殺生ある、他に不殺生を教ゆる、不殺生を讃歎する、乃至、自ら正見ある、〔○〕他に正見を教ゆる、正見行を讃歎する、是れ三十法を成就すれば善處に生ずることの速かなること穳矛の如くなるなり。

(5)云何が四十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること穳矛の如くなるなり。自ら殺生する、他に殺生を教ゆる、殺生を讃歎する、殺生を願樂する、乃至、自ら邪見ある、他に邪見を教ゆる、邪見を讃歎する、邪見を願樂する、是れ四十法を成就すれば、地獄に墮することの速かなること矛穳の如くなるなり。

(6)云何が四十法を成就すれば善處に生ずることの速かなること穳矛の如くなるなる。自ら不殺生ある、他に不殺生を教ゆる、不殺生を讃歎する、殺生を願樂せざる、乃至、自ら正見ある、他に正見を教ゆる、正見を讃歎する、正見行を願樂する、是れ四十法を成就すれば善處に生ずることの速かなること穳矛の如くなるなり。業品竟り

〔b〕云何が因不癡身業なる。若し身の善業にして不癡を因とし、癡を離るゝ、非癡覆心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、有漏の身の戒無敎、正業・身正命、是を因不癡身業と名く。

云何が因不癡口業なる。若し口業の善にして、不癡を因とし、癡を離るゝ、癡覆心所起の集聲・音句・言語の口敎、有漏の口の戒無敎、正語・口正命、是を因不癡口業と名く。

云何が因不癡意業なる。若し意業の善にして不癡を因とし、癡を離るゝ、非癡覆心相應の思、是を因不癡意業と名く。

(1)[一〇四]云何が十不善業道なる。殺生・竊盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見、是を十不善業道と名く。

(2)云何が十善業道なる。不殺生・不竊盜・不邪婬・不妄言・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・正見の行なり。是を十善業道と名く。

(3)云何が十法を成就すれば、地獄に墮することの速かなること穳矛の如くなるなる。殺生乃至邪見は十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること穳矛の如くなるなり。

(4)云何が十法を成就すれば善處に生ずることの速かなること穳矛の如くなるなる、不殺生乃至正見行、是れ[一〇五]十法を成就すれば、善處に生ずることの速かなること穳矛の如くなるなり。

(1)云何が二十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること穳矛の如くなる。自ら殺生する、他に殺生を敎ゆる、乃至、自ら邪見ある、他に邪見を敎ふる、是れ二十法を成就すれば地獄に墮することの速かなること穳矛の如くなるなり。

(2)云何が二十法を成就すれば善處に生ずることの速かなること穳矛の如くなるなる。自ら不殺生なる、他に不殺生を敎ゆる、乃至、自ら正見ある、他に正見行を敎ゆる、是れ二十法を成就すれば善處に生ずることの速かなること穳矛の如くなるなり。

【一〇四】云何以下。諸の十者一團の諸業を明かす。

【一〇五】十法。大正本等は法の字を脫す。宋元明、宮内省の四本によりて補ふ。

云何が因恚意業なる。若し意業の不善にして、恚を因とし、恚を離れざる、恚覆心相應の思、是を因恚意業と名く。

云何が因癡身業なる。若し身業の不善にして癡を因とし、癡を離れず、癡が心を覆して起す所の去來・屈申・廻轉の身教、身の非戒無教、是を因癡身業と名く。

云何が因癡口業なる。若し口業の不善にして癡を因とし、癡を離れず、癡が心を覆して起す所の集聲・音句・言語の口教、口の非戒無教、是を因癡口業と名く。

云何が因癡意業なる。若し意業の不善にして、癡を因とし、癡を離れざる、癡覆心相應の思、是を因癡意業と名く。

(2)云何が因不貪身業なる。若し身業の善にして不貪を因とし、貪を離るゝ、非貪覆心所起の去來・屈申・廻轉の身教、有漏の身の戒無教、是を因不貪身業と名く。

云何が因不貪口業なる。若し口業の善にして、不貪を因とし貪を離るゝ、貪覆心所起の集聲・音句・言語の口教、有漏の口戒無教、是を因不貪口業と名く。

云何が因不貪意業なる。若し意業の善にして不貪を因とし、貪を離るゝ、非貪覆心相應の思、是を因不貪意業と名く。

云何が因不恚身業なる。若し身業の善にして、不恚を因とし、恚を離るゝ、非恚覆心所起の去來・屈申・廻轉の身教、有漏の身の戒無教、是を因不恚身業と名く。

云何が因不恚口業なる。若し口業の善にして不恚を因とし、恚を離るゝ、非恚覆心所起の集聲・音句・言語の口教、有漏の口の戒無教、是を因不恚口業と名く。

云何が因不恚意業なる。若し意業の善にして不恚を因とし、恚を離るゝ、非恚覆心相應の思、是を因不恚意業と名く。

云何が趣天業なる。若し業の善の増にして、能く天上に生ぜしむる、是を趣天業と名く。
云何が趣涅槃業なる。若し業の聖の有報にして能く煩惱斷ずる、是を趣涅槃業と名く。

[一〇〇](1)云何が七不善法なる。殺生・竊盜・邪婬・妄言・兩舌・惡口・綺語、是を七不善法と名く。

(2)云何が七善法なる。不殺生・不竊盜・不邪婬・不妄言・不兩舌・不惡口・不綺語、是を七善法と名く。

[一〇一](1)云何が[一〇二]八非聖語なる。見ずして見ると言ふ、見て見ずと言ふ、聞かずして聞くといふ、聞いて聞かずと言ふ、覺せずして覺すと言ふ、覺して覺せずと言ふ、識せずして識すと言ふ、識して識せずと言ふ、是を八非聖語と名く。

(2)云何が八聖語なる。見ざるは見ずと言ふ、見るは見ると言ふ、聞かざるは聞かずと言ふ、聞くは聞くと言ふ、覺せざるは覺せずと言ふ、覺するは覺すと言ふ、識せざるは識せずと言ふ、識するは識すと言ふ、是を八聖語と名く。

[一〇三](1)云何が因貪身業なる。若し身業の不善にして、貪を因とし貪を離れず、貪が心を覆して起す所の去來・屈申・廻轉の身教、身の非戒無教、是を因貪身業と名く。

云何が因貪口業なる。若し口業の不善にして貪を因として貪を離れず、貪が心を覆して起す所の集聲・音句・言語の口業[P. 584a]の教、口の非戒無教、是を因貪口業と名く。

云何が因貪意業なる。若し意業の不善にして貪を因とし、貪を離れざる、貪覆心相應の思、是を因貪意業と名く。

云何が因恚身業なる。若し身業の不善にして、恚を因とし、恚を離れず、恚が心を覆して起す所の去來・屈申・廻轉の身教、身の非戒無教、是を因恚身業と名く。

云何が因恚口業なる。若し口業の不善にして恚を因とし、恚を離れず、恚が心を覆して起す所の集聲・音句・言語の口教、口の非戒無教、是を因恚口業と名く。

【一〇〇】云何等。以下七者一對の諸業を明かす。
【一〇一】云何等。以下八者一對の諸業を明かす。
【一〇二】八非聖等。集異門足論卷の十中參照。
【一〇三】云何以下。九者一對の諸業を明かす。

[九八]行籌唱令する、是を僧を壞するの無間と名く。

云何が如來身に於て惡心もて血を出すの無間なる。若し故らに如來身に於て惡心もて血を出して業を成就し、乃至、髮端の如きをも傷つくる、是を如來に於て惡心もて血を出すの無間と名く。

——是を五無間と名く。

(4)云何が五戒なる。不殺生・不竊盜・不邪婬・不妄言・不飮酒放逸處、是を五戒と名く。

(5)云何が越五戒なる。殺生・竊盜・邪婬・妄言・飮酒放逸處、是を越五戒と名く。

(1)[九九]云何が因貪業なる。業の若し貪因・貪緒・貪集・貪緣の身業・口業・意業なる、是を因貪業と名く。

云何が因恚業なる。業の若し恚因・恚緒・恚集・恚緣の身業・口意業なる、是を因恚業と名く。

(c)云何が因癡業なる。業の若し癡因・癡緒・癡集・癡緣の身業・口意業なる、是を癡因業と名く。

云何が不貪因業なる。若し不貪因・不貪緒・不貪集・不貪緣の身業・口業・意業なる、是を不貪因業と名く。

云何が不恚因業なる。若し不恚因・不恚緒・不恚集・不恚緣の身業・口業・意業なる、是を不恚因業と名く。

云何が不癡因業なる。若し不癡因・不癡緒・不癡集・不癡緣の身業・口業・意業なる、是を不癡因業と名く。

(2)云何が趣地獄業なる。若しは業の不善の增にして、能く地獄に生ぜしむる、是を趣地獄業と名く。

云何が趣畜生業なる。若し業の不善の中にして能く畜生に生れしむる、是を趣畜生業と名く。

云何が趣餓鬼業なる。若し業の不善の軟にして能く餓鬼に生ぜしむる、是を向餓鬼業と名く。

云何か趣人業なる。若し業の善の不增にして、能く人中に生ぜしむる、是を趣人業と名く。

【九八】行籌等。又、同上中參照。

【九九】云何等。以下七者一對の諸業を明かす。

瞋恚正見の緣、正見の故に、種種心を以つて憂苦を受け、身壞命終して善道・天上に生ず、――此は業の現苦にして後に樂報有るを受るなり。云何が業の現樂にして後に〔b〕樂報有るを受るなる。若し人あり、忍喜忍樂して不殺生の緣、不殺生の故に、種種心を以つて喜樂を受け、忍喜忍樂して不竊盜・不邪婬・不妄言・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・正見の緣、正見の故に、種種心を以つて喜樂を受け、身壞命終して善道・天上に生ず。――此は業の現樂にして後に樂報有るを受るなり。――是を四受業と名く。

(1)[九五]云何が五怖なる。若しは殺生の緣、殺生の故に、今身に怖を生じ、後身に怖を生ずる、竊盜・邪婬・妄語・飲酒放逸處の緣、飲酒放逸處の故に、今身に怖を生じ、後身に怖を生ずる、是を五怖と名く。

(2)云何が[九六]五怨なる。若しは殺生の緣、殺生の故に、今身に怨を生じ、後身に怨を生ずる、竊盜・邪婬・妄言・飲酒放逸處の緣、飲酒放逸處の故に、今身に怨を生じ、後身に怨を生ずる、是を五怨と名く。

(3)云何が五無間なる。母を害するの無間、父を害するの無間、阿羅漢を害するの無間、僧を壞するの無間、如來身に於て惡心もて血を出すの無間なり。

云何が母を害する無間なる。若し母を母想ありて故らに斷命する、是を母を害するの無間と名く。

云何が父を害するの無間なる。若し父を父想ありて、故らに斷命する、是を父を害するの無間と名く。

云何が阿羅漢を害するの無間なる。故らに阿羅漢たる聲聞の命を斷ずる、是を阿羅漢を害するの無間と名く。

云何が僧を壞するの無間なる。一面に[九七]四比丘或は多を請じ、第二面に四比丘或は多を請じて、

【九五】云何等。以下諸の五者一對の業を明かす。法蘊足論―毘曇部三の初參照。

【九六】五怨。同上。

【九七】四比丘。四比丘が僧伽の最下單位たるに由りていふ。詳細は、毘曇部一―五中の諸註參照。

生じ已りて觸觸す。觸す。我は衆生を、業の樂に與ふるに由りて知る。是を白業の白報と名く。云何が黑白業黑白報なる。若し人ありて淸淨・不淸淨の身行を行じ、淸淨・不淸淨の(P. 183a)口行を行じ、淸淨・不淸淨の意行を行じて、淸淨・不淸淨の業を成就す。彼は淸淨・不淸淨の身口意行を行じ已り、淸淨・不淸淨の業を成就し已りて淸淨・不淸淨の處に生ず。淸淨・不淸淨の處に生じ已りて淸淨・不淸淨觸を觸す。淸淨・不淸淨觸を觸し已りて淸淨・不淸淨の受を受し、苦樂を雜受すること人の如く、天の如し。若し衆生の往生するや、所作の業に隨ひて生じ、生じ已りて觸觸す。我は衆生を、業の苦・樂を與ふるに由りて知る。是を黑白業黑白報と名く。云何が非黑白業非黑白報業能盡業なる。若しは黑業黑報を若し斷ずるの思、若しは白業白報を若し斷ずるの思、若しは黑白業黑白報を若し斷ずるの思、是を非黑白業非黑白報業能盡業と名く。――是を四業と名く。

(4)云何が四受業なる。[九四]世尊の說くが如し、四受業あり。何等か四なる。有る業は現苦にして後に苦報有り。有る業は現樂にして後に苦報有り。有る業は現苦にして後に樂報有り。有る業は現樂にして後に樂報有り。云何が業の現苦にして後に苦報有るを受るなる。若し人あり、忍憂忍苦して殺生の緣、殺生の故に、種種心を以つて憂苦を受け、忍憂忍苦して竊盜・邪婬・妄言・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見の緣邪見の故に、種種心を以つて憂苦を受け、身壞、命終して惡道・地獄に墮す。――此は業の現苦にして後に苦報有るを受けるなり。云何が業の現樂にして後に苦報有るを受るなる。若し人あり、忍喜忍樂して殺生の緣、殺生の故に、種種心を以つて喜樂を受け、忍喜忍樂して竊盜・邪婬・妄言・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見の緣、邪見の故に、種種心を以て喜樂を受け、身壞命終して惡道・地獄に墮す。――此は業の現樂にして後に苦報有るを受るなり。――云何が業の現苦にして後に樂報有るを受るなる。若し人あり、忍憂忍苦して不殺生の緣、不殺生の故に、種種心を以つて憂苦を受け、忍憂忍苦して不竊盜・不邪婬・不妄言・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪・不欲・不

【九四】世尊等。A. IV. 85 (I, p. 85); 增一、二十九の一 (大正2, p. 655a)

云何が非黒非白業非黒非白報なる。若し聖・有報にして煩惱を斷ずる、是を非黒非白業非黒非白報と名く。

(3b)云何が黒業黒報なる。若し業の不善・有報にして此の業報ある、是を黒業黒報と名く。

云何が白業白報なる。若し業の善・有報にして此の業報ある、是を白業白報と名く。

云何が黒白業黒白報なる。一業の黒白黒白報なる無し。彼は若しは黒業黒報にして此の業報あり、若しは白業白報にして此の業報あり。是を黒白業黒白報と名く。

云何が非黒非白業非黒非白報なる。若し法の聖・有報にして煩惱を斷ずる、是を非黒白業非黒白報と名く。

(3c)云何が黒業黒報なる。[九〇]世尊の說くが如し、我は自ら正知して四業を說く。何等か四なる。黒業黒報・白業白報・黒白業黒白報・非黒非白業非黒非白報業能盡業なり。云何が黒業黒報なる。若し人ありて不清淨の身行を作し、不清淨の口行を作し、不清淨の意行を作して不清淨業を成就す。彼は不清淨の身・口・意行を行じ已り、不清淨の業を成就し已りて不清淨處に生ず。彼は不清淨の處に生じ已りて、不清淨の觸に觸る。不清淨の觸に觸れ已りて不清淨の受を受け、一向苦切なり、一向に苦燋を受し、一向に不善なり、一向に愛・喜・適意ならず、一向に憎惡せられ、天人の悕望する所に非ざること、地獄の衆生の如し。[九一]此の衆生の往生するや、所作の業に隨ひて生じ、[九二]生じ已りて觸觸す。[九三]我は衆生を業の苦を與ふるに由りて知る。是を黒業の黒報と名く。云何が白業白報なる。若し人ありて清淨の身行を作し、清淨の口行を作し、清淨の意行を作し、清淨業行を成就す。清淨の身口意行を成就し已り、清淨業を成就し已りて清淨處に生ず、清淨處に生じ已りて清淨の觸に觸す。清淨の觸を觸し已りて清淨の受を受し、一向樂あり、愛喜・適意なり、一向に憎惡せざる所たり、天人に悕望せらるゝこと、猶し遍淨天の衆生が如し。若し衆生の往生するや、所作の業に隨つて生じ、

【九〇】世尊等。A. IV. 232(II, 230ff); &c. 集異門足論七の文、參照。

【九一】此の。宋元明、宮内省の四本には「若し」に作る。下文も「若し」とす。

【九二】生じ已りて等。集異門足論には「生じ已りて復、是の如き類の觸を觸す」と。

【九三】我は等。同上には「是の故に、我は、諸の有情は自ら造る業に隨ふと說く」と。

(20b)云何が樂の報業なる。若しは業の善の有報なり。是を樂の報業と名く。
云何が苦報業なる。若し業の不善なる、是を苦報業と名く。
云何が非樂非苦報業なる。樂報・苦報業を除く、若し餘の業なる、是を非樂・非苦報業と名く。
(21)云何が過去業なる。若し業の生じ已りて滅せる、是を過去業と名く。
云何が未來業なる。若し業の未生・未出なる、是を未來業と名く。
云何が現在業なる。若し業の生じて未だ滅せざる、是を現在業と名く。
(1)[八八]云何が過去境界業なる。過去法を思惟して、若し業の生ずる、是を過去境界業と名く。
云何が未來境界業なる。未來法を思惟して若し業の生ずる、是を未來境界業と名く。
云何が現在境界業なる。現在法を思惟して若し業の生ずる、是を現在境界業と名く。
云何が非過去非未來非現在境界業なる。非過去・非未來・非現在法を思惟して若し業の生ずる、是を非過去非未來非現在境界業と名く。
(2)云何が欲界繫業なる。若し業の欲漏・有漏なる、是を欲界繫業と名く。
云何が色界繫業なる。若し業の色漏・有漏なる、是を色界繫業と名く。
云何が無色界繫業なる。若し業の無色漏・有漏なる、是を無色界繫業と名く。
云何が不繫業なる。若し業聖・無漏なる、是を不繫業と名く。
(3a)云何が[八九]四業なる。黑業黑報・白業白報・黑白業黑白報・非黑非白業非黑非白報なり。
云何が黑業黑報なる。若し業の不善・有報なる、是を黑業黑報と名く。
云何が白業白報なる。若し業の善・有報なる、是を白業白報と名く。
云何が黑白業黑白報なる。一業の若し黑白黑白報なる無し。彼は若しは黑業黑(c)報・若しは白業白報なり。是を黑白業黑白報と名く。

【八八】云何等。以下、諸の四者一對の業を明かす。

【八九】四業。集異門足論七―毘曇部一、初版 p. 224 等參照。

復次に憂處業とは、若し業の不善・有報なる、是を憂處業と名く。

復次に非喜處非憂處業とは、喜處・憂處業を除く、若し餘の業なる、是を非喜處非憂處業と名く。

(17) 云何が現法受業なる。若し業生の我分の、若し長幼の所作ありて此の業を成就し、此の生に於て我が長幼身の受報する、是を現法受業と名く。

云何が生受業なる。若し業生の我分の、長幼の所作ありて此の業を成就し、[八五]生受報なる、是を生受業と名く。

云何が後受業なる。若し業生の我分の、若し長幼の所作ありて、此の業を成就し、第三・第四生に受報する或は[八六]多なる、是を後受業と名く。

(18) 云何が與樂業なる。若し業の樂果を與ふる、是を與樂業と名く。

云何が與苦業なる。若し業の苦果を與ふる、是を與苦業と名く。

云何が非與樂非與苦業なる。樂與・與苦業を除く、若し餘の業なる、是を[八七]非與樂非與苦業と名く。

(19) 云何が樂果業なる。若し業の善にして樂報有る、是を樂果業と名く。

云何が苦果業なる。若し業の不善なる、是を苦果業と名く。

云何が非樂(b)果非苦果業なる。樂果・苦果業を除く若し餘の業なる、是を非樂果非苦果業と名く。

(20a) 云何が樂報業なる。若し業の樂果ある、是を樂報業と名く。

云何が苦報業なる。若し業の苦果ある、是を苦報業と名く。

云何が非樂非苦報業なる。樂報・苦報業を除く若し餘の業なる、是を非樂報非苦報業と名く。

【八五】生。未來第二生の意(卽ち次の生のこと)。

【八六】多。第五生乃至以後のこと。

【八七】非與樂等。大正本等不記。明本のみ記す。

(12c) 復次に麁業とは、若しは業の欲界繫・色界繫・空處繫・識處繫・不用處繫なる、是を麁業と名く。
復次に細業とは、若し業の不繫なる、是を細業と名く。
復次に微業とは、若し業の非想非非想處繫なる、是を微業と名く。
(13a) 云何が受樂業なる。若し業の樂受と相應する、是を受樂業と名く。
云何が受苦業なる。若し業の苦受と相應する、是を受苦の業と名く。
云何が受捨業なる。若し業の不苦不樂受と相應する、是を受捨業と名く。
(13b) 云何が樂受業なる。若し業の受樂報を受くる、是を樂受業と名く。
云何が〔P. 582a〕苦受業なる。若し業の苦報を受くる、是を苦受業と名く。
云何が捨受業なる。若し業の不苦不樂報を受くる、是を捨受業と名く。
(14) 云何が樂受業なる。苦受・不苦不樂受業を除く餘の業にして、若し善・有報なる、是を樂受業と名く。
云何が苦受業なる。若し業の不善なる、是を苦受業と名く。
云何が非苦非樂受業なる。樂受・苦受業を除く若し餘の業なる、是を非苦非樂受業と名く。
(15a) 云何が喜處業なる。若し業の發し已りて喜を生ずる、是を喜處業と名く。
云何が憂處業なる。若し業の發し已りて憂を生ずる、是を憂處業と名く。
云何が捨處業なる。若し業の發し已りて捨を[八四]生ずる、是を捨處業と名く。
(15b) 復、に喜處業とは、捨處業を除く餘の處業の若し善・有報なる、是を喜處業と名く。
復次に憂處業とは、若し業の不善なる、是を憂處業と名く。
復次に捨處業とは、喜處業を除く餘業の若し善・有報なる、是を捨處業と名く。
(16) 復次に喜處業とは、若し業の善・有報なる、是を喜處業と名く。

【八四】生。大正本等には出に作るも、宋元明、宮內省、聖護藏の五本に從つて改む。

云何が非報〔c〕非報法業なる。若し業の無記にして我分の攝に非ざる、是を非報非報法業と名く。

(9)云何が見斷業なる。若し業の不善にして思惟斷に非ざる、是を見斷業と名く。

云何が思惟斷業なる。若し業の不善にして見斷に非ざる、是を思惟斷業と名く。

云何が非見斷非思惟斷業なる。若し業の無記なる、是を非見斷非思惟斷業と名く。

(10)云何が見斷因業なる。若しは業の見斷、若しは見斷法の報なる、是を見斷因業と名く。

云何が思惟斷因業なる。若しは業の思惟斷、若しは思惟斷法の報なる、是を思惟斷因業と名く。

云何が[八一]非見斷因非思惟斷因業なる。若しは業の善なる、若しは業の善法の報なる、若しは業の[八二]報非報非報法なる、是を非見斷因非思惟斷因業と名く。

(11a)云何が卑業なる。若し不善なる、是を卑業と名く。

云何が中業なる。若し業の無記なる、是を中業と名く。

云何が勝業なる。若し業の善なる、是を勝業と名く。

(11b)復、次に卑業とは、若し業の不善・無記なる、是を卑業と名く。

復、次に中業とは、若し業の非聖の善なる、是を中業と名く。

復、次に勝業とは、若し業の聖無漏なる、是を勝業と名く。

(12a)云何が麁業なる。若し業の欲界繫なる、是を麁業と名く。

云何が細業なる。若し業の色界繫・[八三]不繫なる、是を細業と名く。

云何が微業なる。若し業の無色界繫なる、是を微業と名く。

(12b)復、次に麁業とは、若し業の欲界繫・色界繫なる、是を麁業と名く。

復次に細業とは、若しは業の空處繫・識處繫・不用處繫、若しは不繫なる、是を細業と名く。

復次に微業とは、若し業の非想非非想處繫なる、是を微業と名く。

【八一】非見斷等。宋元明、宮内省の四本には非見斷非思惟斷因業に作る。

【八二】報。前品相應下の註を參照せよ。

【八三】不繫。無漏業なるも色業の故に、色界繫業と同列にす。

云何が身非戒非無戒業なる。若し身業の無記なる、無記心所起の去來・屈申・廻轉の身教なる、是を身非戒非無戒業と名く。

(4)云何が口戒業なる。若し口業の善なる、善心所起の集聲・音句・言語の口教、有漏の口戒無教、正語・口正命なる、是を口戒業と名く。

云何が口無戒業なる。若し口業の不善なる、不善心所起の集聲・音句・言語の口教、口の非戒無教なる、是を口の無戒業と名く。

云何が口非戒非無戒業なる。若し口業の無記なる、無記心所起の集聲・音句・言語の口教なる、是を口非戒非無戒業と名く。

(5)云何が意戒業なる。若し意業の善なる、善心相應の思なる、是を意戒業と名く。

云何が意無戒業なる。若し意業の不善なる、不善心相應の思なる、是を意の無戒業と名く。

云何が意非戒非無戒業なる。若し意業の無記なる、無記心相應の思なる、是を意非戒非無戒業と名く。

(6)云何が善業なる。若し業の修なる、是を善業と名く。

云何が不善業なる。若し業の斷なる、是を不善業と名く。

云何が無記業なる。若しは[八〇]業の受なる、若しは業の非報非報法なる、是を無記業と名く。

(7)云何が學業なる。若し業の聖にして無學に非ざる、是を學業と名く。

云何が無學業なる。若し業の聖にして學に非ざる、是を無學業と名く。

云何が非學非無學業なる。若しは業の非聖なる、是を非學非無學業と名く。

(8)云何が報業なる。若しは業の受なる、若しは業の善報なる、是を報業と名く。

云何が報法業なる。若し業の有報なる。是を報法業と名く。

【八〇】業の。宋元明、宮內省の四本に從つて補入。

復次に說かく、一切業の、證にして事の如く知見するに非ざる、是を非證業と名く。
(40)云何が敎業なる。身業・口業、是を敎業と名く。
云何が無敎業なる。意業、是を無敎業と名く。
(41)云何が身敎業なる。若し、身業にして色入の攝なる、是を身敎業と名く。
云何が身無敎業なる。若し身業にして法入の攝なる、是を身無敎業と名く。
(42)云何が口敎業なる。若し口業にして聲入の攝なる、是を口敎業と名く。
云何が口無敎業なる。若し口業にして法入の攝なる、是を口無敎業と名く。
(1)云何が身業なる。若し業の非緣にして口業に非ざる、是を身業なり。
云何が口業なる。若し業の非緣にして身業に非ざる、是を口業と名く。
云何が意業なる。若し業の緣なる、是を意業と名く。
(2)云何が戒業なる。若し業の善心所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、有漏の身口の戒無敎、正語・正業・正命及び善の思なる、是を戒業と名く。
云何が無戒業なる。若し業の不善なる、不善心が所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、[七九]身口の非戒無敎及び不善の(b)思なる、是を無戒業と名く。
云何が非戒非無戒業なる。若し業の無記心が所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、及び無記の思なる、是を非戒非無戒業と名く。
(3)云何が身戒業なる。若し身業の善なる、善心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、有漏の身の戒無敎、正業・身正命なる、是を身戒業と名く。
云何が身無戒敎業なる。若し身業の不善なる不善心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、身の非戒無敎たる、是を身無戒業と名く。

【七九】身口。大正本等は「身口の作」とするも、宋元明、宮內省の四本によりて暫く作を除く。

(32)云何が知業なる。一切業は知にして事の如く知見す。是を知業と名く。
云何が非知業なる。知業に非ざる無し。
復次に說かく、一切業の、非知にして事の如く知見するに非ざる、是を非知業と名く。
(33)云何が識業なる。一切業は識にして意識が事の如く識す、是を識業と名く。
云何が非識業なる。識業に非ざる無し。
復次に說かく、一切業の、識にして〔P. 581a〕意識が事の如く識するに非ざる、是を非識業と名く。
(34)云何が解業なる。事の如く知見す、是を解業と名く。
云何が非解業なる。解業に非ざる無し。
復次に說かく、一切業の、解にして事の如く知見するに非ざる、是を非解業と名く。
(35)云何が了業なる。一切業は了にして事の如く知見す、是を了業と名く。
云何が非了業なる。了業に非ざる無し。
(36)云何が斷智知業なる。業の若し不善なる、是を斷智知業と名く。
云何が非斷智知業なる。若しは業の善、若しは無記なる、是を非斷智知業と名く。
(37)云何が斷業なる。若し業の不善なる、是を斷業と名く。
云何が非斷業なる。若しは業の善、若しは無記なる、是を非斷業と名く。
(38)云何が修業なる。若し業の善なる、是を修業と名く。
云何が不修業なる。若し業の不善・無記なる、是を非修業と名く。
(39)云何が證業なる。一切の業は證にして事の如く知見す、是を證業と名く。
云何が非證業なる。證業に非ざる無し。

業と名く。

云何が非共心業なる。若し業の不共心轉にして心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を不共心業と名く。

(23)云何が隨心轉業なる。若し業の心と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を隨心轉業と名く。

云何が不隨心轉業なる。若し業の心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を不隨心轉業と名く。

(24)云何が非業相應業なる。若し業の思の相應に非ざる、是を非業相應業と名く。

云何が非業相應非非業相應業なる。思、是を非業相應非非業相應業と名く。

(25)云何が共業なる。若し業の隨業轉にして業と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を共業と名く。

云何が不共業なる。若し業の不隨業轉にして業と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を不共業と名く。

(26)云何が隨業轉業なる。若し業の業と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を隨業轉業と名く。

云何が不隨業轉業なる。業と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を不隨業轉業と名く。

(27)云何が因業なる。若しは業の緣業なる、若しは業の非緣・[七六]善有なる、是を因業と名く。

云何が非因業なる。若し業の非緣・[七七]無報報・不共業なる、是を非因業と名く。

(28)[七八]云何が有因業なる。若し業の有緒なる、是を有因業と名く。

(29)云何が有緒業なる。若しは業の有緣轉業なる、若しは業の共業なる、是を有緒業と名く。

(30)云何が有緣業なる。若し業の有爲なる、是を有緣業と名く。

(31)云何が有爲業なる。業の若し有緣なる、是を有爲業と名く。

【七六】善有。宋元明、宮内省の四本には有報、聖護藏本には「非緣の善の報なる」とす。

【七七】無報報。同上の四本には單なる無報に作る。

【七八】云何等。以下、四ほどは二者一對にでなく、單說せるは前の諸品にも見たる如き省略の心なるべし。

(14)云何が非當取業なる。若し業の無取なる、是を非當取業と名く。
云何が有取業なる。若し業の有勝なる、是を有取業と名く。
云何が無取業なる。若し業の無勝なる、是を無取業と名く。
(15a)云何が有勝業なる。若し業の有取なる、是を有勝業と名く。
云何が無勝業なる。若し業の無取なる、是を無勝業と名く。
(15b)復次に、有勝業とは、若し此の業の、餘業の勝妙過上なる有に、是を有勝業と名く。
復次に無勝業とは、若し此の業の、餘業の勝妙過上なる無き、是を無勝業と名く。
(16)云何が受業なる。若し業の內なる、是を受業と名く。
云何が非受業なる。若し業の外なる、是を非受業と名く。
(17)云何が內業なる。若し業の受なる、是を內業と名く。
云何が外業なる。若し業の非受なる、是を外業と名く。
(18)云何が有報業なる。若し業の有報なる、是を有報業と名く。
云何が無報業なる。若し業の非報なる、是を無報業と名く。
(19)云何が心相應業なる。若し業の心數なる、是を心相應業と名く。
云何が非心相應業なる。若し業の非心數なる、是を非心相應業と名く。
(20)云何が心數業なる。若し業の緣なる、是を心數業と名く。
云何が非心數業なる。若し業の非緣なる、是を非心數業と名く。
(21)云何が緣業なる。若し業の心數なる、是を緣業と名く。
云何が非緣業なる。〔c〕若し業の非心數なる。是を非緣業と名く。
(22)云何が共心業なる。若し業の隨心轉にして、心と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を共心

復次に非受業とは――若し業の無報の身業・口業なる、是を非受業と名く。

(4)云何が少受業なる。若し業の少報を受くる、是を少受業と名く。

云何が多受業なる。若し業の少報を受けざる、是を多受業と名く。

(5)云何が熟業なる。若し業の報を近受する、是を熟業と名く。

云何が非熟業なる。若し業の報を近受するに非ざる、是を非熟業と名く。

(6)云何が色業なる。身業・口業、是を色業と名く。

云何が非色業なる。意業、是を非色業と名く。

(7)云何が可見業なる。若し業の色入の攝なる、是を可見業と名く。

云何が不可見業なる。若し業の法入の攝なる、是を不可見業と名く。

(8)云何が有對業なる。若し業の聲入・色入の攝なる、是を有對業と名く。

〔七五〕云何が無對業なる。若し業の法入の攝なる、是を無對業と名く。

(9)云何が聖業なる。若し業の無漏なる、是を聖業と名く。

云何が非聖業なる。若し業の有漏なる、是を非聖業と名く。

(10)云何が有漏業なる。若し業の有愛なる、是を有漏業と名く。

云何が無漏業なる。若し業の無愛なる、是を無漏業と名く。

(11)云何が有愛業なる。若し業の有求なる、是を有愛業と名く。

云何が無愛業なる。若し業の無求なる、是を無求愛と名く。

(12)云何が有求業なる。若し業の當取なる、是を有求業と名く。

云何が無求業なる。若し業の非當取なる、是を無求業と名く。

(13)云何が當取業なる。若し業の有取なる、是を當取業と名く。

【七四】云何が等。以下まづ二者一對の諸業を解說す。

【七五】不故作。大正本等には故を脫す。宋元明、宮內省の四本によりて補ふ。

受業・生受業・沒受業、(18)與樂業・與苦業・與不苦不樂業、(19)樂果業・苦果業・不苦不樂果業、[六四](2)樂報業・苦報業・不苦不樂報業、(21)過去業・未來業・現在業、(1)[六五]過去境界業・未來境界業・現在境界業・非過去非未來非現在境界業、(2)欲界繫業・色界繫業・無色界繫業・不繫業、(3)[六六]四業、(4)四受業、(1)五怖、(2)五怨、(3)五無間業、(4)五戒越、(5)五戒、(1)[六七]因貪業・因恚業・因癡業・因不貪業・因不恚業・因不癡業、(2)趣地獄業・趣畜[P.579a]生業・趣餓鬼業・趣人業・趣天業・趣涅槃業、(1)[六八]七不善法、(2)七善法、(1)[六九]八聖語、(2)非八聖語、(1)[七〇]因貪の身業・口業・意業、因恚の身業・口業・意業因癡の身業・口業・意業、(2)因不貪の身業・口業・意業、因不恚の身業・口業・意業、因不癡の身業・口業・意業、(1)[七一]十不善業道(2)十業業道、(3)十法を成就すれば地獄に墮することの速かなることと穳矛の若し。(4)十法を成就すれば[七二]天に生ずることの速かなることと穳矛の如し。(1)[七三]二十法を成就すれば、地獄に墮することの速かなることと穳矛の如し。(2)二十法を成就すれば天に生ずることの速かなることと穳矛の如し。(3)三十法を成就すれば地獄に墮することの速かなることと穳矛の如し。(4)三十法を成就すれば天に生ずることの速かなることと穳矛の如し。(5)四十法を成就すれば地獄に墮することの速かなることと穳矛の如し。(6)四十法を成就すれば天に生ずることの速かなることと穳矛の如し。

(1)[七四]云何が思業なる。意業、是を思業と名く。

云何が思已業なる。身業・口業、是を思已業と名く。

(2)云何か故作業なる。若し業の故作・受報なる、是を故作業と名く。

云何が不故作業なる。若し業の[七五]不故作・不受報なる、是を不故作業と名く。

(3a)云何が受業なる。若し業の有報なる、是を受業と名く。

云何が非受業なる。若し業の無報なる、是を非受業と名く。

(3b)復次に、受業とは――若しは業の有報及び無報の思なる、是を受業と名く。

---

a、b二釋を説く。

【五八】有因業以下。四業は二者一對にでなく、單者として揭ぐ。

【五九】身業以下。諸の三者一對の諸業を列ぬ。

【六〇】卑業等。下文中にはa、bの二釋を説く。

【六一】施業等。準じて、a、b、cの三釋を説く。

【六二】樂受等。下文中には受樂等とも作る。また、a、bの二釋を存す。

【六三】喜處等。下文中には、又、二釋を説く。

【六四】樂報等。下文中、又、二釋を説く。

【六五】過去等。以下諸の四者一對の業。

【六六】四業。下文中には、a、b、cの三釋を記す。

【六七】因貪等。以下二種の六者一圍の業を列ぬ。

【六八】七等。同上、七者一圍の諸業を列ぬ。

【六九】八等。同上、八者一圍のそれを列ぬ。

【七〇】因貪等。同上、九者一圍のそれを列ぬ。

【七一】十等。同上、十者一圍のそれを列ぬ。

【七二】天。後文には善處に作る。下も同じ。

【七三】二等。以下二十法等一圍のそれを明かす。

是の如きの空處定と是の如きの空處の生と、是を有爲の空處界と名く。云何が無爲の空處界なる。若し智を以て空處界を斷じ、若し斷ぜる、是を空處と名く。無爲の識處界・不用處界・非想非非想處界も亦是の如し。

[五三]云何が十八界なる。眼界・色界・眼識界・耳界・聲界・耳識界・鼻界・香界・鼻識界・舌界・味界・舌識界・身界・觸界・身識界・意界・法界・意識界、是を十八界と名く。

[五四]非問分[五五]業品　第二

(1)思業・思已業、(2)故作業・非故作業、(3)[五六]受業・非受業、(4)少受業・多受業、(5)熟業・非熟業、(6)色業・非色業、(7)可見業・不可見業、(8)有對業・無對業、(9)聖業・非聖業、(10)有漏業・無漏業、(11)有愛業・無愛業、(12)有求業・無求業、(13)當取業・非當取業、(14)有取業・無取業、(15)[五七]有勝業・無勝業、(16)受業・非受業、(17)內業・外業、(18)有報業・無報業、(19)心相應業・非心相應業、(20)心數業・非心數業、(21)緣業・非緣業、(22)共心業・不共心業、(23)隨心轉業・不隨心轉業、(24)非業相應業・非業相應非非業相應業、(25)共業・非共業、(26)隨業轉業・不隨業轉業、(27)因業・非因業、(28)[五八]有因業、(29)有緒業、(30)有緣業、(31)有爲業、(32)知業・非知業、(33)識業・非識業、(34)解業・非解業、(35)了業・非了業、(36)斷智知業・非斷智知業、(37)斷業・非斷業、(38)修業・非修業、(39)證業・非證業、(40)教業・非教業、(41)身有教・無教業、(42)口有教・無教業、[五九](1)身業・口業・意業、(2)戒業・無戒業・非戒非無戒業、(3)身戒・無戒・非戒非無戒業、(4)口戒・無戒・非戒非無戒業、(5)意戒・無戒・非戒非無戒業、(6)善業・不善業・無記業、(7)學業・無學業・非學非無學業、(8)報業・報法業・非報非報法業、(9)見斷業・思惟斷業・非見斷非思惟斷業、(10)見斷因業・思惟斷因業・非見斷非思惟斷因業、(11)[六〇]卑業・中業・勝業、(12)[六一]麁業・細業・微業、(13)[六二]樂受業・苦受業・捨受業、(14)樂受業・苦受業・非苦非樂受業、(15)[六三]喜處業・憂處業・捨處業、(16)喜處業・憂處業・非喜非憂處業、(17)現法

【五三】云何等。最後の十八界を辯ず。

【五四】非問分。この上、大正本等には例の如く、舍利弗阿毘曇論と記す。

【五五】業品。Karmavarga. 大體、前品のに同ずる形式、內容もて業を種々檢討解說する部門にて、その所攝、概ね左の如し。(一)二者一對の諸業四二(但し、內のa、b二種あるもの(3)受非受處、(15)有無勝業の二あり、又、單出のもの、(28)—(31)の四がある。而してその(1)—(5)の諸範疇は前品にはその例を缺ける所である)、(二)三者一對の諸業二十一、(但し中の、(11)衆業等、(13)樂受業等、(15)喜處業等、及び(20)樂報業等は各、a、bの二類を記し、また、(12)麁業等はa、b、cの三釋を記すれば、實質は二十七)、(三)四者一對それ四、(但し中の(3)はa、b、c三釋あり)、(四)五者一對のそれ五、(五)六者一對のそれ二、(六)七者一對のそれ二、(七)八者の同上、二、(八)九者同上、二、(九)十者同上、四、(一〇)二十以上の同上六等。

【五六】受業等。下文中にはこれにa、bの二釋を說く。

【五七】有勝業等。又、下文中、

むる若しは恚・重恚・究竟恚に、相應の忿怒・憎惡・惱心・佷戾・不慈・不愍・不利益、是を恚界と名く。

云何が害界なる。若しは衆生を惱ますに手拳・瓦石・刀仗を以てする、及び餘の諸の惱――是の如きの衆生を撾害し、悕望を侵惱し、命を斷ずる、是を害界と名く。

〔5〕云何が出界なる。慈悲を除く餘の善の出法、是を出界と名く。

云何が不恚界なる。慈、是を不恚界と名く。

云何が不害界なる。悲、是を不害界と名く。

(1)[五一]云何が光界なる。色光と慧光となり。

云何が色光なる。火光・日光・月光・珠光・星宿光・佛光・衆生光、及び餘の四大所造の明・照明、是を色光と名く。

云何が慧光なる。三慧――思慧・聞慧・修慧、是を慧光と名く。

――是の如きの色光と慧光と、是を光界と名く。

云何が淨界なる、淨解脫と及び餘の淨色となり。能く淨色の適意にして見て厭無ければ、是を淨界と名く。

云何が色界なる。色入と色陰と、是を色界と名く。

云何が空處界なる。二の空處界あり。或は有爲の空處界、或は無爲の空處界なり。

云何が有爲の空處界なる。空處定・空處の生なり。

云何が空處定なる。[五二]若し比丘の一切の色想を離れ、瞋恚想を滅し、若干想を思惟せずして、無邊空處を成就するなり。

云何が空處の生なる。若し此の空に親近し、多く修學するが故の空處天の四種にして、我分の攝なる受・想・行・識、是を空處の生と名く。

【五一】云何等。以下、七者一對(?)の諸界(唯一)を解說す。

【五二】若し比丘以下。集異門足論十七―毘曇部二、初版、p. 159 以下等參照。

(3)云何が[四五]樂界なる。眼觸樂受、耳・鼻・舌・身觸樂受・樂根、是を樂界と名く。
云何が苦界なる。眼觸苦受、耳・鼻・舌・身觸苦受・苦根、是を苦界と名く。
云何が喜界なる。若し心樂受・喜根なる、是を喜界と名く。
云何が憂界なる。若し心苦受・憂根なる、是を憂界と名く。
云何が捨界なる。身心の非苦非樂受、謂く眼觸の非苦非樂受、耳・鼻・舌・身觸の非苦非樂受・捨根なる、是を捨界と名く。
云何が無明界なる。癡不善根、是を無明界と名く。
(4)云何が[四六]欲界なる。欲・欲界、是を欲界と名く。
云何に恚界なる。恚・恚界、是を恚界と名く。
云何が害界なる。害・害界、是を害界と名く。
云何が欲界なる。若しは欲欲・欲膩・欲愛・欲喜・[四七]欲支・[四八]欲定・[四九]欲肯・欲渴・欲燋・欲網なる、是を欲界と名く。
云何が恚界なる。若し衆生を欺惱し、悕望を侵陵して、命根を斷ずるには非ざる、是を恚界と名く。
云何が害界なる。若し衆生を欺害し、悕望を侵陵して命根を斷ずる、是を害界と名く。
[五〇]云何が欲界なる。五欲の愛喜・適意・愛色・欲染・相續——眼に識する色の愛喜・適意・愛色・欲染・相續、耳・鼻・舌・身の識する觸の愛喜・適意・愛色・欲染・相續、若しは他が他の封邑・他の婦女、他の物を我が得たらしめむと欲しての若しは貪・重貪・究竟貪・相應の悕望・愛・欲染・重欲染・究竟欲染、及び餘の貪す可きの法の若しは貪・重貪・究竟貪・悕望・愛・欲染・重欲染・究竟欲染、是を欲界と名く。
云何が恚界なる。若しは少衆生、若しは多衆生の此の衆生を傷害し、繫縛して種種の苦を得せし

【四五】樂界等。以下の第三の六界については集異門足論二―毘曇部一、初版 P. 65 等參照。
【四六】欲界等。また以下の第四の六五ついては、集異門足論同前下參照。
【四七】欲支。宋元明、宮內省四本には欲枝。
【四八】欲定。同上四本には欲宅。
【四九】欲肯。宋元明、三本には欲態。宮內省本には欲能。
【五〇】云何等。以下は右上の三界の復釋。

云何が內の火界なる。若し此の身內の受の火熱なる、若しは熱の能く熱せしめ、身を熱せしめ、內を燋せしめ、若しは服せる食飮等を消せしむる、及び餘の此の身內の受の火なる、是を內の火界と名く。

云何が外の火界なる。若し外の火にして非受の熱なる、若しは火熱・日熱・珠熱・舍熱・牆熱・山熱・穀氣熱・草熱・木熱・牛糞熱、及び餘の外の火熱の非受なる、是を外の火界と名く。

――是の如きの內の火界と外の火界と、是を火界に名く。

云何が風界なる。二の風界あり。內の風界と外の風界となり。

云何が內の風界なる。若し此の身內の受の風なる上風・下風・依節間風・攣躄風・骨節遊風・出息入息風、及び餘の內の受の風なる、是を內の風界と名く。

云何が外の風界なる。若し外の風にして非受なる若しは東西南北風・雜塵風・不雜塵風・冷風・熱風・黑風・[四四]毘嵐風・動地風、及び餘の外の風にして非受なる、是を外の風界と名く。

――是の如きの內の風と外の風と、是を風界と名く。

云何が空界なる。二の空界あり、內の空界と外の空界となり。

云何が內の空界なる。若しは此の身內の受空にして四大の所覆に非ざる。若しは耳、鼻の孔、口門、若しは食飮所由の處、若しは食飮の住處、若しは食飮の出處、及び餘の此の身內の受の空にして四大の所覆に非ざる、是を內の空界と名く。

云何が外の空界なる。若しは外の空の非受にして四大の所覆に非ざる。若しは丘井・瓶甕・坎谷、及び餘の外の空の非受にして、四大の所覆に非ざる、是を[P.579a]外の空界と名く。

――是の如きの內の空界と外の空界と、是を空界と名く。

云何が識界なる。六識身――眼識・身・耳・鼻・舌・身・意識身、是を識界と名く。

【四四】毘嵐風。梵、Vairambhaka. 又、吠嵐、鞞嵐その他に作る。迅猛風など譯す。毘曇部一―五中に於る註も參照。

よ、一切想を出して、若し無想定心を善く修し、多く學して無量なれと。〔六〕復次に、比丘の、彼の比丘に向ひて是の如く說かく、我は[三七]我及び[三八]我所を滅するも、故らに疑惑箭有りて心を覆すと。彼の比丘の此の比丘を責むらく、比丘よ、是の如く說くこと莫れ。世尊を謗ずること莫れ。世尊を謗ずるは善に非ず。世尊は是の如く說かず。比丘よ此は悕望處に非ず。若し我及び我所を滅して、故らに疑惑箭の心を覆する者有るが如きは、是の處有ること無し。世尊の說かく、比丘よ、疑惑箭を出して若し我慢を斷ずべしと。——是を六出界と名く。

[三九]云何が地界なる。二の地界あり。內の地界と外の地界なり。

云何が內地界なる。若しは此の身の內の受の堅なる骨・齒・髮・毛・薄皮膚・肌・肉・筋・脈・脾・[四〇]腎・肝・肺・心・胃・大腸・小腸、此の身及び餘の內の受の堅、是を內の地界と名く。

云何が外の地界なる。若し〔七〕外にして受の堅に非ざる銅・鐵・鉛・錫・白鑞・金・銀・眞珠・琉璃・珂貝・璧玉・珊瑚・錢性寶・貝珠・沙石・草木・枝葉・莖節及び餘の外にして受の堅に非ざる、是を外の地界と名く。

——是の如きの內の地界と外の地界と、是を地界と名く。

云何が水界なる。二の水界あり。內の水界と外の水界となり。

云何が內の水界なる。若し此の身の內の受なる水涎・瘡・[四一]膽・汗・肪・髓腦・脂・[四二]膱・涕・唾・膿・血・小便及び餘の此の身の內の受なる水潤等、是を內の水界と名く。

云何が外の水界なる。若し外の水界にして受に非ざる[四三]蘇・油・蜜・石蜜・黑石蜜・乳酪・酪漿・醪酒・甘蔗酒・蜜酒、及び餘の外の水にして非受なる、是を外の水界と名く。

——是の如きの內の外の水界、是を水界と名く。

云何が火界なる。二の火界あり。內の火界と外の火界となり。

【三七】我。巴增一には Asmi. = I am.
【三八】我所。巴增には ahaṃ asmi (That I am;).
【三九】云何等。集異門足論一五(毘曇部二、初版 P. 114)等參照。
【四〇】腎。宋・元・明、宮內省の四本には胃に作る。
【四一】膽。宋・元・明・宮內省の四本には痰に作る。
【四二】膱。同上には脼に作る。
【四三】蘇。同上には酥に作る。

に非ず。若し悲解心に親近して多く修學し已り、作乘・作物し已り、謹愼し已り、識し已り、善進し已り、害の爲して心を覆せらるとは、是の處有ること無し。世尊の說かく、比丘よ、害心を出して若し悲解心に親近し、若し多く修し、多く學すること無量なれと。〔三〕復、次に、比丘の、彼の比丘に向ひて是の如く說かく、我は[二二]喜解心に親近して多く修學し、作乘・作物し、謹愼し識し善進するも、我は故らに[二三]不樂の爲に心を覆せらると。彼の比丘の、此の比丘を責むらく、比丘よ、是の如く說くこと莫れ。世尊を謗ずること莫れ。世尊を謗ずるは善に〔こ〕非ず。世尊は是の如く說かず。比丘よ、此は悕望處に非ず。若し喜解心に親近し已りて多く修學し已り、作乘・作物し已り、謹愼し已り、識し已り、善進し已りて、不樂の爲に心を覆せらるとは、是の處有ること無し。世尊の說かく、比丘よ、不樂心を出して若し喜解心を善く修し、多く學すること無量なれと。〔四〕復、次に、比丘の、彼の比丘に向つて是の如く說かく、我は[二四]捨解心に親近して多く修學し、作乘・作物し、謹愼し識し善進するも、我は故らに愛恚の爲に心を發せらると。彼の比丘の、此の比丘を責むらく、是の如く說くこと莫れ。世尊を謗すること莫れ。世尊を謗するは善に非ず。世尊は是の如く說かず。比丘よ、此は悕望處に非ず。若し捨解心に親近し已り、多く修し多く學し已り、作乘・作物し已り、謹愼し已り、識し已り、善進し已りて、若し愛恚の心を發することあるは是の處有ること無し。世尊の說かく、比丘よ、愛恚心を出して若し捨解心を善く修し、多く學して無量なれど。〔五〕復、次に、比丘の、彼に向つて是の如く說かく、我は[二五]無想定心に親近して多く修學し、作乘・作物し、謹愼し識し善進するも、我は故に[二六]念想識有りと。彼の比丘の、此の比丘を責むらく、比丘よ、是の如く說くこと莫れ。世尊を謗ずること莫れ。世尊を謗ずるは善に非ず。世尊は是の如く說かず。比丘よ、此は悕望處に非ず。若し無想定心に親近し已り、多く修學し已り、作乘・作物し已り・謹愼し已り、識し已り、善進し已りて、若し念想識有るは、是の處有ること無し。世尊の說かく、比丘

【二二】喜解心。巴、Muditā-Cetovimutti. 集異門足論には喜心定。

【二三】不樂。巴、Arati.

【二四】捨解心。巴、Upekhā-cetov.mutti. 集異門足論には捨心定。

【二五】無想定心。巴、Animittā-ce=tovimutti. 集異門足論には無相心定。

【二六】念想識。巴、Nimittā=nusāri viññāṇaṃ. 集異門足論には隨相識。

を出・解・離して是の痛を受せざる、是を出瞋恚界と名く。〔三〕復、次に、比丘の、害を念じ、害を念ずる時、心の、害の不淸に向はず、住せず、解せず、不害を念じ、不害にして心、情・住・解に向ひ、心〔P.578a〕善・至善・調善にして、心を修して若し害に於て出・解・起し、害を緣として生ずる有漏・燋熱、彼を出・解・離して是の痛を受けざる、是を出害界と名く。〔四〕復、次に比丘の色を念ずる時、心の、色の不淸に向はず、住せず、解せず、無色を念じて色無く、心、情・住・解に向ひ、心、善・至善・調善にして、心を修して色に於て出・解・起し、色を緣として生ずる有漏・燋熱を出・解・離し、是の痛を受せざる、是を出色界と名く。〔五〕復、次に比丘の、自身を念ずるとき、心の自身の不淸に向はず、住せず、解せず、自身の滅を念じ、自身を滅して、心、淸・住・解に向ひ、心、善・至善・調善にして、心を修して若し自身に於て出・解・起し・自身を緣として生ずる有漏・燋熱を出・解・離して是の痛を受せざる、是を出自身界と名く。是を五出界と名く。

云何が六出界なる。[二六]世尊の六出界を說くが如し。――〔一〕比丘の、彼の比丘に向ひて是の如く說くが如し。比丘よ、我は[二七]慈解心に親近し、多く修學し、[二八]作乘、[二九]作物し、謹愼し、[三〇]識し善進せるも我は瞋恚の爲に心を覆はると。彼の比丘、此の比丘を責むらく、比丘よ、是の如く說くこと莫れ。世尊を謗ずること莫れ。世尊を謗ずるは不善なり。世尊は是の如く說かず。比丘よ、此の悕望處に非ず。若し慈解心に親近して多く修學し已り、作乘・作物し已り、謹愼し已り、識し已り、善進し已りて、若し瞋恚の心を覆すとは、是の處(ことわり)有ること無し。世尊の說かく、比丘よ、瞋恚心を出して善く慈解心を若し修し、多く學して無量なるべしと。〔二〕復、次に、比丘の、彼の比丘に向つて是の如く說かく、比丘よ、我は[三一]悲解心にて親近し多く修學し、作乘・作物し、謹愼し識し善進するも、我は故(ことさ)らに害の爲に心を覆せらると。彼の比丘の、此の比丘を責むらく、比丘よ、是の如く說くこと莫れ。世尊を謗ずること莫れ。世尊を謗ずるは善に非ず。世尊は是の如く說かず。比丘よ、此は悕望處

【二六】 世尊等。A. VI, 13(III, p. 290)。—參考、D. 33 Saṅgīti-S. VI. 17; 長、九、衆集經六の一二、宋施護譯、大集法門經(大正一二、)六の一五(六種對治出離界)、集異門足論六の一六(毘曇部二、初版、p. 114ff); &c.

【二七】 慈解心。集異門足論には慈心定。巴、Mettā Cetovimutti.

【二八】 作乘。巴、Yānikata.=mastered, made a habit of.

【二九】 作物。巴、Vatthukata, =practisep thoroughly; made a foundation or basis of.

【三〇】 識し。巴、Paricita= Constantly practiced.

【三一】 悲解心。巴、Karuṇā Cetovimutti. 集異門足論には悲心定。

(2)云何が過去境界界なる。過去を思惟して若し法の生ぜる、是を過去境界界と名く。
云何が未來境界界なる。未來を思惟して若し法の[二四]生ぜる、是を未來境界界と名く。
云何が現在境界界なる。現在法を思惟して若し法の生ぜる、是を現在境界界と名く。
云何が非過去・非未來・非現在境界界なる。非過去非未來非現在を思惟して若し法の生ぜる、是を非過去非未來非現在境界界と名く。
(3)云何が欲界繫界なる。若し法の欲漏・有漏なる、是を欲界繫界と名く。
云何が色界繫界なる。若し法の色漏・有漏なる、是を色界繫界と名く。
云何が無色界繫の界なる。若し法の無色漏・有漏なる、是を無色界繫界と名く。
云何が不繫界なる。若し法界の聖無漏なる、是を不繫界と名く。
(1)[二五]云何が色界なる。色陰、是を色界と名く。
云何が受界なる。受陰、是を受界と名く。
云何が想界なる。想陰、是を想界と名く。
云何が行界なる。行陰、是を行界と名く。
云何が識界なる。識陰、是を識界と名く。
(2)云何が五出界なる。世尊の說くが如し、――五出界あり。何等が五なる。謂く、[一]比丘の欲を念ずる時、心の、欲の不淸に向はず、住せず、解せず、出を念じ、出を心とし、心、淸・住・解に向ひ、心の善・至善・調善にして、修心して、若し欲に於て出・解・起し、欲を緣として生ずる有漏・燋熱を出・解・起し、是の痛を受せざる、是を出欲界と名く。[二]復、次に、比丘の瞋恚を念ずる時、心の、瞋恚の不淸に向はず、住せず、解せず、不瞋を念じ、不恚を心とし、心、淸・住・解に向ひ、心、善・至善・調善にして、心を修して若し瞋恚に於て出・解・起し、瞋恚を緣として生ずる有漏・燋熱

【二四】生ぜる。大正本等には「未だ生ぜざる」とす。宋・元・明・宮內省の四本に從ふ。

【二五】云何等。以下二種の五者一對の諸法を說明す。

云何が滅界なる。愛盡・離滅・涅槃、是を滅界と名く。

(11)云何が欲界なる。[二〇]阿鼻大地獄從り、上、他化自在天に至るまでの、若し色・受・想・行・識分なる、是を欲界と名く。

云何が色界なる。梵天從り阿迦尼吒天に至るまでの若し色・受・想・行・識分なる、是を色界と名く。

云何が無色界なる。空處天從り、非想非非想處天に至るまでの、若し受・想・行・識分なる、是を無色界と名く。

(12)云何が[二一]色界なる。若し法の色なる、是を色界と名く。

云何が非色界なる。[二二]二滅を除く餘の非色法界なる、是を非色界と名く。

云何が滅界なる。二滅＝智緣滅と非智緣滅と、是を滅界と名く。

(13)云何が三出界なる。世尊の說くが如し。三出界あり。何等か三出界なる。謂く、〔A〕欲を出でて色に至り、〔B〕色を出でて無色に至り、〔C〕若しは所作・所集の滅する、是を出と謂ふ。何をか欲を出でて色に至ると謂ふや。若し欲を緣として生ずる有漏・燋熱にして彼の色中に無き、是を欲を出でて色に至ると謂ふ。何をか色を出でて無色に至ると謂ふや。若し色を緣として生ずる有漏・燋熱の、彼の無色中に無き、是を色を出でて無色に至ると謂ふ。何をか所作・所集の滅すると謂ふや。若し行を緣として生ずる有漏・燋熱、彼の涅槃して無き、是を所作・所集、滅すと謂ふと、是を出と謂ふ」と。是を三出界と名く。

(1)[二三]云何が過去界なる。若し法の生じて已りて滅せる、是を過去界と名く。

云何が〔○〕未來界なる。若し法の未生・未出なる、是を未來界と名く。

云何が現在界なる。若し法の未だ滅せざる、是を現在界と名く。

云何が非過去非未來非現在界なる。若し法の無爲なる、是を非過去非未來非現在界と名く。

【二〇】阿鼻等。論集部の拙譯立世阿毘曇論中參照。

【二一】色界等。集異門足論二—毘曇部一、初版、P. 66參照。

【二二】二滅。智緣盡、非智緣盡の實は二盡をさす。

【二三】云何等。以下四者一對のものを解說す。

云何が微界なる。若し法の非想非非想處繫なる、是を微界と名く。
(7b)復、次の麁界は、若し法の欲界繫、若しは色界繫、若しは空處繫、若しは識處繫、若しは不用處繫なる、是を麁界と名く。
復、次の細界は、若し法の不繫なる、是を細界と名く。
云何が微界なる。若し法の非想非非想處繫なる、是を微界と名く。
(8)云何が發界なる。進の若し發・正發・生起・觸證なる、是を發界と名く。
云何が出界なる。進の若し廣進未度なる、是を出界と名く。
云何が度界なる。進の若し[一七]廣・已度なる、是を度界と名く。
(9a)云何が勤界なる。力勤界なる、是を勤界と名く。
云何が持界なる。[一八]總持持界なる、是を持〔ち〕界と名く。
云何が出界なる。出出界なる、是を出界と名く。
(9b)復、次の勤界は、謂く勤・精進なり。[一九]何等か精進なる。若し身心の發・出・度用心の不退轉なる、勤力・正進なる、是を勤界と名く。
復、次の持界は、謂く、念なり。何等か念なる。所聞・所習の法の如く、彼の法を持し、正持して住せしめ、忘れず、想念あり、念の續する、是を持界と名く。
復、次の出界は、一切の漏を捨せる盡愛・滅・涅槃是を出界と名く。
(10)云何が斷界なる。若し比丘の樹間・空處にて如是に、身行の惡、惡報、今世の報、後世の報を觀じ、身の惡行を捨てて身善行を修する、如是に口・意行の惡、惡報、今世の報、後世の報を觀じ、口・意の惡行を捨てて口・意・善行を修する、是を斷界と名く。
云何が離欲界なる。愛盡・離欲・涅槃、是を離欲界と名く。

[一七] 廣。宋・元・明三本には廣度とし、宮內省本には廣を度に作る。
[一八] 總。宋・元・明・宮內省の四本には想に作る。
[一九] 何等か等。同上の四本には不記。

云何が非學非無學なる。若し法の聖に非ざる、是を非學非無學界と名く。
[P.577a](3)云何が報界なる。若しは法の受なる若しは法の善報なる、是を報界と名く。
云何が報法界なる。若し法の有報なる、是を報法界と名く。
云何が非報非報法界なる。若し法の無記にして我分の攝に非ざる、是を非報非報法界と名く。
(4)云何が見斷界なる。若し法の不善にして思惟斷に非ざる、是を見斷界と名く。
云何が思惟斷界なる。若し法の不善にして見斷に非ざる、是を思惟斷界と名く。
云何が非見斷非思惟斷界なる。若し法の善・無記なる、是を非見斷非思惟斷界と名く。
(5)云何が見斷因界なる。若し法の見斷法の報なる、是を見斷因界と名く。
云何が思惟斷因界なる。若しは法の思惟斷なる、若しは法の思惟斷法の報なり。是を思惟斷因界と名く。
云何が非見斷非思惟斷因界なる。若しは法の善なる、若しは法の善法の報なる、若しは法の[一六]報なる、非報非報法なる、是を非見斷非思惟斷因界と名く。
(6a)云何が卑界なる。若し法の不善なる、是を卑界と名く。
云何が中界なる。若し法の無記なる、是を中界と名く。
云何が勝界なる。若し法の善なる、是を勝界と名く。
(6b)云何が卑界なる。若し法の不善なる、若しは無記なる、是を卑界と名く。
云何が中界なる。若し法の聖にして善に非ざる、是を中界と名く。
云何が勝界なる。若し法の聖・無漏なる、是を勝界と名く。
(7a)云何が麁界なる。若し法の欲界繫色界繫なる、是を麁界と名く。
云何が細界なる。若し法の空處繫・識處繫・不用處繫、若しは不繫なる、是を細界と名く。

【一六】報なる。宋・元・明、宮内省四本には缺く。

(35)云何が非斷智知界なる。若しは法の善なる、若しは無記なる、是を非斷智知界と名く。
云何が斷界なる。若し法の不善なる、是を斷界と名く。
云何が非斷界なる。若しは法の善なる、若しは無記なる、是を非斷界と名く。
(36)云何が修界なる。若し法の善なる、是を修界と名く。
云何が非修界なる。若し法の不善・無記なる、是を非修界と名く。
(37)云何が證界なる。一切の法は證にして事の如く知見す、——是を證界と名く。
云何が非證界なる。證界に非ざる無し。
復、次に說かく、——一切の法の、證にして事の如く知見するに非ざる、是を非證界と名く。
(38)云何が有餘涅槃界なる。[一二]世尊の說くが如し。云何が彼・是の二涅槃界なる。何等か二なる。有餘涅槃界と無餘涅槃界となり。云何が有餘涅槃なる。謂く此に比丘あり、[一三]阿羅漢にして、諸漏盡き、所所竟り、重擔を捨て、己利を逮得し、是れ[一四]有煩惱を盡くし、正智ありて諸の陰・界・入を解することを得たるも、宿業の緣の住するを以ての故に、以て心に諸の苦・樂を受け、適意・不適意有りと。是を有餘涅槃界と名く。
云何が無餘涅槃界なる。謂く、比丘の五陰滅し、未來の五陰の復、續生せざる、是を無餘涅槃界と名く。
(1)[一五]云何が善界なる。若し法の修なる、是を善界と名く。
云何が不善界なる。若し法の斷なる、是を不善界と名く。
云何が無記界なる。若しは法の受なる、若しは法の非報非報法なる、是を無記界と名く。
(2)云何が學界なる。若し法の聖にして無學に非ざる、是を學界と名く。
云何が無學界なる。若し法の聖にして學に非ざる、是を無學界と名く。

【一二】世尊等。増一、卷六一品十六、二(大正 2, p. 579 a) = Itiv. 44(p. 38f).
【一三】阿羅漢以下。毘曇部一以下の六足論中に於る同文に關する拙註を參照せよ。
【一四】有煩惱。Bhavasaṃyojana.
【一五】云何が等。以下三寄一對門。

云何が無因界なる。若し法の無緒なる、是を無因界と名く。

(27)云何が有緒界なる。若し法の有緣なる、是を有緒界と名く。

云何が無緒界なる。若し法の無緣なる、是を無緒界と名く。

(28)云何が有緣界なる。若し法の有爲なる、是を有緣界と名く。

云何が無緣界なる。若し法の無爲なる、是を無緣界と名く。

(29)云何が有爲界なる。若し法の有緣なる、是を有爲界と名く。

云何が無爲界なる。若し法の無緣なる、是を無爲界と名く。

(30)云何が知界なる。一切の法は知にして事の如く知見す、是を知界と名く。

云何か非知界なる。知界に非ざる無し。

復、次に說かく、——一切の法の、知にして事の如く知見するに非ざる、是を非知界と名く。

(31)云何が識界なる。一切の法は識にして意識が事の如く識す、——是を識界と名く。

云何が非識界なる。識界に非ざる無し。

復、次に說かく、——一切の法の、識にして意識が事の如く識するに非ざる、是を非識界と名く。

(32)云何が解界なる。一切の法は解にして事の如く知見す、——是を解界と名く。

云何が非解界なる。解界に非ざる無し。

復、次に說かく、——一切の法の、解にして事の如く知見するに非ざる、是を非解界と名く。

(33)云何が了界なる。一切の法は了にして事の如く知見す、——是を了界と名く。

云何が非了界なる。了界に非ざる無し。

復、次に說かく、——一切の法は了にして事の如く知見するに非ざる、是を非了界と名く。

(34)云何が斷智知界なる。若し法の不善なる、是を斷智知界と名く。

云何が不隨心轉界なる。若し法の心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を不隨心轉界と名く。

(20) 云何が業界なる。身業・口業・意業、是を業界と名く。

云何が非業界なる。身業・口業・意業を除く餘の法なる、是を非業界と名く。

(21) 云何が業報界なる。若し法の愛なる、若しは法の善報なる、是を業報界と名く。

云何が非業報界なる。若しは法の[九]報なる、若しは非報非報法なる、是を[一〇]非業報界と名く。

(22) 云何が業相應界なる。若し[一一]法界の思相應なる、是を業相應界と名く。

云何が非業相應界なる。若し法の思相應に非ざる、是を非業相應界と名く。

云何が非業相應非非業相應界なる。思、是を非業相應非非業相應界と名く。

(23) 云何が共業界なる。若し法の隨業轉にして業と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を共業界と名く。

云何が不共業界なる。若し法の不隨業轉にして業と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を不共業界と名く。

(24) 云何が隨業轉界なる。若し法の業と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を隨業轉界なり。

云何が不隨業轉界なる。若し法の業と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を不隨業轉界と名く。

(25) 云何が因界なる。若しは法の緣なる、若しは法の非緣、有報なる、若しは法の非緣にして得・果を除く餘の善報及び四大なる、是を因界と名く。

云何が非因界なる。若し法の非緣・無報・不共業の得果なる、是を非因界と名く。

(26) 云何が有因界なる。若し法の有緒なる、是を有因界と名く。

【九】報なる。宋・元・明・宮内省・聖護藏の五本ともこの字を缺く。

【一〇】云何等。この一は三者一對になつてゐる。

【一一】法界。宋・元・明・宮内省の四本にはたゞ「法」に作る。

(11)云何が無勝界なる。若し法界にして、餘の界の勝妙・過上なる無き、是を無勝界と名く。
云何が受界なる。若し法の內なる、是を受界と名く。
(12)云何が非受界なる。若し法の外なる、是を非受界と名く。
云何が內界なる。若し法の受なる、是を內界と名く。
(13)云何が外界なる。若し法の非受なる、是を外界と名く。
云何が有報界なる。若し法の報法なる、是を有報界と名く。
(14)云何が無報界なる。若し法の報若しは[八]非報非報法なる、是を無報界と名く。
云何が心界なる。意入、是を心界と名く。
(15)云何が非心界なる。意入を除く餘の法、是を非心界と名く。
云何が心相應界なる。若し法の心數なる、是を心相應界と名く。
(16)云何が非心相應界なる。若し法の非心數なる、是を非心相應界と名く。
云何が心數界なる。心を除く餘の緣法なる、是を心數界と名く。
(17)云何が非心數界なる。若し法の非緣なると及び心と、是を非心數界と名く。
云何が緣界なる。若し法の相を取ると及び心と、是を緣界と名く。
(18)云何が非緣界なる。心を除く餘の非心數法なる、是を非緣界と名く。
云何が共心界なる。若し法の隨心轉にして心と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を共心界と名く。
云何が非共心界なる。若し法の不隨心轉にして心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、是を不共心界と名く。
(19)云何が隨心轉界なる。若し法の心と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を隨心轉界と名く。

【八】非報等。宋・元・明・宮內省・聖護藏の五本共單なる「非報法」に作る。

云何が非色界なる。法の、色に非ざる、是を非色界と名く。

(2)云何が可見界なる。色入、是を可見界と名く。

云何が不可見界なる。色入を除く餘の法、是を不可見界と名く。

(3)云何が有對界なる。十色入、是を有對界と名く。

云何が無對界なる。意入・法入、是を無對界と名く。

(4)云何が聖界なる。若し法の無漏なる、是を聖界と名く。

云何が非聖界なる。若し法の有漏なる、是を非聖界と名く。

(5)云何が有漏界なる。若し法の有愛なる、是を有漏界と名く。

云何が無漏界なる。若し法の無愛なる、是を無漏界と名く。

(6)云何が有愛界なる。若し法の有求なる、是を有愛界と名く。

云何が無愛界なる。若し法の無求なる、是を無愛界と名く。

(7)云何が有求界なる。若し法の當取なる、是を有求界と名く。

云何が無求界なる。若し法の非當取なる、是を無求界と名く。

(8)云何が當取界なる。若し法の有取なる、是を當取界と名く。

云何が非當取界なる。若し法の無取なる、是を非當取界と名く。

(9)云何が有取界なる。若し法の有勝なる、是を有取界と名く。

云何が無取界なる。若し法の無勝なる、是を無取界と名く。

[P.576a] (10a)云何が有勝界なる。若し法の有取なる、是を有勝界と名く。

云何が無勝界なる。若しは法の無取なる、是を無勝界と名く。

(10b)云何が有勝界なる。若し法界にして、餘の界の勝妙・過上なる有る、是を有勝界と名く。

者一對のもの四、(四)同上五者一對のもの二、(五)六者一對のもの四、(六)七者一對のもの一、並に(七)十八界といふ多數を含む。その各個については出來る限り、註記を省略、又は簡にしたいが、もし志あるの諸氏は日本佛教學協會會報第五年(昭和七年)度本中の拙稿、「南北兩阿毘曇論の交渉」、雜誌第一義、二九の一〇の拙稿「南傳陀兜伽他論と北傳舍利弗阿毘曇論」その他の參照を望む。

備考—右數擧の諸界法中、(一)の二者一對中には(10)有無勝界に a、b の二通りをあげ、又、(22)業相應界等は三者一對になつてゐる。又、(二)三者一對の(六)にも a、b の二種を分ち、(七)、(九)また準ず。

【三】有勝界等。下文中にはこれに二種をあげらる。

【四】卑界等。又、下文中には二種を出す。

【五】施界等。また準ず。

【六】勸等。同上。

【七】云何等。諸の二者一對の諸法解說。

卷の第七 (P.575b)

[一]非問分界品[二] 第一

(1)色界・非色界、(2)可見界・不可見界、(3)有對界・無對界、(4)聖界・非聖界、(5)有漏界・無漏界、(6)有愛界・無愛界、(7)有求界・無求界、(8)當取界・非當取界、(9)有取界・無取界、(10)[三]有勝界・無勝界、(11)有受界・非受界、(12)內界・外界、(13)有對界・無對界、(14)心界・非心界、(15)心相應界・非心相應界、(16)心數界・非心數界、(17)緣界・非緣界、(18)共心界・非共心界、(19)隨心轉界・不隨心轉界、(20)業界・非業界、(21)業報界・非業報界、(22)業相應界・非業相應界・非業相應非非業相應界、(23)共業界・不共業界、(24)隨業轉界・非隨業轉界、(25)因界・非因界、(26)有因界・無因界、(27)有緒界・無緒界、(28)有緣界・無緣界、(29)有爲界・無爲界、(30)智界・非智界、(31)識界・非識界、(32)解界・非解界、(33)了界・非了界、(34)斷智知界・非斷智知界、(35)斷界・非斷界、(36)修界・非修界、(37)證界・非證界、(38)有餘涅槃界・無餘涅槃界、(1)善界・不善界・無記界、(2)學界・無學界・非學非無學界、(3)報界・報法界・非報非報法界、(4)見斷界・思惟斷界・非見斷非思惟斷界、(5)見斷因界・思惟斷因界・非見斷非思惟斷因界、(6)[四]卑界・中界・勝界、(7)[五]麁界・細界・微界、(8)發界・(〇)出界・度界、(9)[六]勤界・持界・出界、(10)斷界・離欲界、滅界(11)欲界・色界・無色界、(12)色界・非色界・滅界、(13)三出界、(1)過去界・未來界・現在界・非過去非未來非現在界、(2)過去境界界・未來境界界・現在境界界・非過去非未來非現在境界界、(3)欲界繫界・色界繫界・無色界繫界・不繫界、(1)色界・受界・想界・行界・識界、(2)五出界、(1)六出界、(2)地界・水界・火界・風界・空界・識界、(3)樂界・苦界・喜界・憂界・捨界・無明界、(4)欲界・恚界・害界・出界・不恚界・不害界、(1)光界・淨界・色界、空處界・識處界・不用處界・非想非非想處界、十八界なり。

(1)[七]云何が色界なる。法の、若し色なる、是を色界と名く。

【一】非問分。?Apariprcchā-vāram. 前分にては、劈頭より問答往來して解説せるに對し、この分に於ては、最初は諸品、何れも、單に一種の論母 Mātrikā. を提出して、次段に至り、初めて問答釋説する故に、その最初の形式に從ひ、非問分といへるものなるべし。所攝は(一)界品、(二)業品、(三)人品、(四)智品、(三分さる)、(五)緣品、(六)念處品、(七)正勤品、(八)神足品、(九)禪品、(一〇)道品(三分せらる)、(一一)煩惱品、(同上三分)の十目品である。已に大體の施設上、南方諸毘曇の目錄分、解説分(Uddesa, niddesa)に酷似するものある如く、內容上、同じく南方諸阿毘曇に對比せらるべきものは頗る多い。解題及び下註の參照を望む。

【二】界品。Dhātu-varga. 前の問分界品とは所攝を異にし、ここには、かの南傳陀兜伽他論に見るが如き、乃至上來見來れる幾分の諸門分別の諸門を界と顯はしたるか如き諸法を各界の名によりて(一)列名、(二)解題す。中に(一)A及び non-A の關係にて示された、一對のもの三八(又は三九)、(二)善・不善・無記等三者一對のもの、十三、(中に二種をあぐるもの三)。(三)同上四

云何が不殺戒の現在なる。不殺戒の生じて未だ滅せざるを現在と名く。

乃至、不飲酒・不放逸戒も亦是の〔一〕如し。　問分第一の十品竟り

宋・元・明、宮内省の四本により補入—同上二の三四、斷非斷門。

【三五一】修等。同上二の三五、修非修門。

【三五二】證等。同上二の三六、證非證門。

【三五三】善等。同上、三の一、三性門。

【三五四】學等。同上三の二、三學門。

【三五五】報等。同上三の三、報等三門。

【三五六】見斷等。同上三の四、三斷門。

【三五七】見斷因等。同上三の五、三斷因門。

【三五八】欲界等。同上四の一、三界繫及び不繫分別門。

【三五九】過去等。同上四の二、三世非世門。

五戒は幾か[二三八]共業、幾か非共業なる。一切は不共業なり。一切は[二三九]不隨業轉なり。
五戒は幾か[二四〇]因、幾か非因なる。一切は因なり。
五戒は幾か[二四一]有因、幾か無因なる。一切は有因なり。一切は[二四二]有緒なり。一切は[二四三]有緣なり。一切は[二四四]有爲なり。
五戒は幾か[二四五]知、幾か非知なる。一切は知にして事の如く知見するなり。
五戒は幾か[二四六]識、幾か非識なる。一切は識にして意識が事の如く識す。一切は[二四七]解なり。一切は[二四八]了なり。
五戒は幾か[二四九]斷智知、幾か非斷智知なる。一切は非斷智知なり。[二五〇]一切は非斷なり。
五戒は幾か[二五一]修、幾か非修なる。一切は修なり。
五戒は幾か[二五二]證、幾か非證なる。一切は證にして事の如く知見す。
五戒は幾か[二五三]善、幾か不善、幾か無記なる。一切は善なり。
五戒は幾か[二五四]學、幾か無學、幾か非學非無學なる。一切は非學非無學なり。
五戒は幾か[二五五]報、幾か報法、幾か非報非報法なる。一切は報法なり。
五戒は幾か[二五六]見斷、幾か思惟斷、幾か非見斷非思惟斷なる。一切は非見斷非思惟斷なり。
五戒は幾か[二五七]見斷因、幾か思惟斷因、幾か非見斷非思惟斷因なる。一切は非見斷非思惟斷因なり。
五戒は幾か[二五八]欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か不繫なる。一切は欲界繫なり。
五戒は幾か[二五九]過去、幾か未來、幾か現在、幾か非過去非未來非現在なる。一切は三分にして或は過去、或は未來或は現在なり。
云何が不殺戒の過去なる。不殺戒の生じ已りて滅せるを過去と名く。
云何が不殺戒の未來なる。不殺戒の未生未出なるを未來と名く。

【二三三】緣等。同上二の一七、緣非緣門。
【二三四】共心等。同上二の一八、共不共心門。
【二三五】不隨等。同上二の一九、隨非隨心轉門。
【二三六】業等。同上、二の二〇、業非業門。
【二三七】業相應等。同上二の二一、業相應非相應門。
【二三八】共業等。同上二の二二、共非共業門。
【二三九】不隨等。同上二の二三、隨不隨業轉門。
【二四〇】因等。同上二の二四、因非因門。
【二四一】有因等。同上二の二五、有無因門。
【二四二】有緒等。同上二の二六、有無緒門。
【二四三】有緣等。同上二の二七、有無緣門。
【二四四】有爲等。同上二の二八、有無爲門。
【二四五】知等。同上二の二九、知非知門。
【二四六】識等。同上二の三〇、識非識門。
【二四七】解等。同上二の三一、解非解門。
【二四八】了等。同上二の三二、了非了門。
【二四九】斷智等。同上二の三三、斷非斷智知門。
【二五〇】一切等。大正本等旣、

花鬘・塗香せざる、　是の如きを八齋と名く。
彼の時に隨つて持齋し、　智人の、隨つて食を施し、
飲食を僧に供養し、　放逸・貪著ならず。
父母を供養し、　法の如く財物を求め、
以て自ら家業を修むれば　日光天に生ずることを得べし。

[二二六]五戒は幾か[二二七]色、幾か非色なる。一切は色なり。
五戒は幾か[二二八]可見幾か不可見なる。一切は不可見なり。
五戒は幾か[二二九]有對、幾か無對なる。一切は無對なり。
五戒は幾か[二三〇]聖、幾か非聖なる。一切は非聖なり。
五戒は幾か[二三一]有漏、幾か無漏なる。一切は有漏なり。一切は[二三二]有愛なり。一切は[二三三]有求なり。一切は[二三四]當取なり。一切は[二三五]有取なり。一切は[二三六]有勝なり。
[p. 575 a] 五戒は幾か[二三七]受、幾か非受なる。一切は非受なり。一切は[二三八]外なり。
五戒は幾か[二三九]有報、幾か無報なる。一切は有報なり。
五戒は幾か[二四〇]心、幾か非心なる。一切は非心なり。
五戒は幾か[二四一]心相應、幾か非心相應なる、一切は非心相應なり。
五戒は幾か[二四二]心數、幾か非心數なる。一切は非心數なり。
五戒は幾か[二四三]緣、幾か非緣なる。一切は非緣なり。
五戒は幾か[二四四]共心、幾か不共心なる。一切は不共心なり。一切は[二四五]不隨心轉なり。
五戒は幾か[二四六]業、幾か非業なる。一切は業なり。
五戒は幾か[二四七]業相應、幾か非業相應なる。一切は非業相應なり。

【二二六】五戒等。第二段、以上五戒の諸門分別。諸門完全に具はる。
【二二七】色等。同上二の一、色・非色門。
【二二八】可見等。同上二の二、可不可見門。
【二二九】有對等。同上二の三、有無對門。
【二三〇】聖等。同上二の四、聖非聖門。
【二三一】有漏等。同上二の五、有無漏門。
【二三二】有愛等。同上二の六、有無對門。
【二三三】有求等。同上二の七、有無求門。
【二三四】當取等。同上二の八、當非當取門。
【二三五】有取等。同上二の九、有無取門。
【二三六】有勝等。同上二の一〇、有無勝門。
【二三七】受等。同上二の一一、受非受門。
【二三八】外等。同上二の一二、內外門。
【二三九】有報等。同上二の一三、有無報門。
【二四〇】心等。同上二の一四、心非心門。
【二四一】心相應等。同上二の一五、心相應非相應門。
【二四二】心數等。同上二の一六、心數心數門。

の爲めを以ての故の若しは集聲・音句・言語の口敎、是れ妄語業なり。若し彼の業を行ずる者は是を妄語人と名く。

云何が不妄語の是れ優婆塞〔[illegible]〕戒なる。彼の業に於て樂はず、遠離して作さず、戒を護りて犯さず、根を斷じて不善を捨し、堪忍して善を行ずる、是を不妄語と名け、是れ優婆塞戒なり。佛の說くが如し、

若しは伴若しは衆中にて、　一一、不妄語を、
說かず、勸敎せず、　一切の虛妄を離るべし。

云何が飲酒・放逸處なる。若し飲酒・放逸處有るなり。――若し酒・醪酒・甘蔗酒・蒲桃酒・蜜酒及び餘物の酒ありて若しは飲酒し、若しは酒を愛樂し、[二四]身乃至、草葉の[二五]一渧を灑ぐに、彼の業は是れ飲酒放逸處にして、若し彼の業を行ずる者は是れ飲酒放逸人と名く。

云何が不飲酒不放逸の是れ優婆塞戒なる。若しは彼の業に於て樂はず、遠離して作さず、戒を護りて犯さず、根を斷じて不善根を捨し、堪忍して善を行ずるを不飲酒・不放逸處と名け、是れ優婆塞戒なり。佛の說くが如し。

聖の言はく當に酒を離るべし。　亦他に酒を與ふること勿れ。
飲まず、樂うことを勸めず　此の放逸處なるを知る。
此の不善門の、　憍傲の愚者のみ然るを知り、
此の處の不善なるを知らば、　戒德、自ら防護す。
殺さず亦盜まず、　實語して飲酒せず。
婬せずして欲法を斷じ、　夜・非時食せず。
謙卑にして高床せず、　聽を息め、觀の樂を止め、

【二四】身等。宋・元・明三本には「酒を以つて身乃至…」に作る。
【二五】一渧。宋・元・明、宮內省の四本には一滴に作る。

業を行ずる者は不與取人と名く。

云何が不盜の是れ優婆塞戒なる。彼の業に於て樂はず、遠離して作さず、戒を護りて犯さず、根を斷じ、不善根を捨し、堪忍して善を行ずる、是を不盜の優婆塞戒と名く。佛の說くが如し、

盜まず、亦敎へず。　取らず、持ち去らず。
亦他に取を勸めず、　諸の不與取を離るべし。

云何が邪婬なる。若し邪行人有り、若し母護・父護・兄護・弟護・姉護・妹護・自護・法護・姓護・親里護・信要護乃至花鬘有るに、若しは此の如きと共に宿して[二三]共に欲法を行ずる、若しは自ら妻の非道にて行ずる、——彼の業は是れ邪行なり。若し彼の業を行ずる者を是れ邪行人と名く。

云何が不邪婬の是れ優婆塞戒なる。若し彼の業に於て樂はず、遠離して作さず、戒を護りて犯さず、根を斷じて不善を捨し、堪忍して善を行ずる、是を不邪婬と名く。是れ優婆塞戒なり。佛の說くが如し、

婬不淨行を離れ、　欲を觀ること、火坑の如くむば、
未だ能く欲を離れずと雖も　他が妻を犯さざるに足る。

云何が妄語なる。若し人有りて妄語するなり。——若しは伴中・衆中・親里中・貴人中國主の前にて、若し人の、人を倩うて證と爲し、知る所の如く說かしむる彼の人は、知らずして知ると言ひ、知りて知らずと言ひ、見て見ずと言ひ、見ずして見ると言ひ、若しは自らの爲め他が爲め、若しは財の爲め、衆中に於て故らに妄語を作し、所忍を隱し、所欲を隱し、所覺を隱し、所想を隱し、心に知るを隱し、見ずして見ると言ひ、見て見ずと言ひ、聞かずして聞くと言ひ、聞いて聞かずと言ひ、覺せずして覺すと言ひ、覺して覺せずと言ひ、識せずして識すと言ひ、識して識せずと言ひ、先に妄語せむと欲し、語る時に妄語するを知り、語り竟りて妄語せるを知る——是の如きの虛誑の意ありて財

【二三】共に。宋・元・明・宮內省の四本又は「若しは」に作る。(從つて上文も、「此の如きと共に宿り」などと讀むべし)。

缺行せず、亂行せず、濁行せず、[二〇九]離行せず、戒に隨順して行ずる、是を齊りて、持戒の優婆塞と名く。[二一〇]偈に說くが如し——

智人能く戒を持し、　　三樂を悕望し、
尊重して利益を得、　　[二一一]終りて天上の樂を受く。
是の如きの等處を[二一二]見　　智者は能く惡を離れ、
利根にして淨戒を持ち　　常に第一樂を得。

云何が殺生なる。若し生あるとき、衆生想ありて故らに衆生の命の死時未だ到らず、到れる時に未だ死せざるを斷じ、敎へて殺害せしめ『命を斷じて活かしむること勿れ』と。彼の語を聞くこと已に過ぎて彼の時已に滅し、彼の生の已に地に仆るゝ、此の如きの身業・口業ありて是の衆生の故に衆生の命を斷じ、當に斷じ不定に斷を斷ずる、——彼の是の殺生業あり、若し彼の業を行ぜば、是を殺生人と名く。

云何が不殺生の優婆塞戒なる。若し彼の業に於て樂はず、遠離して作さず、護して犯さず、斷根して不善を捨し、堪忍して善を行ずるを不殺生と名け、是れ優婆塞戒たり。佛の說くが如し。

殺さず亦敎へず　　亦他を殺すことを勸めず。
諸定及び驚怖、　　及與大名稱ある、
一切の衆生に於て、　　書く諸の刀杖を捨つべし。

〔二〕何が不與取なる。若し人有りて與られずして取るなり。——若しは村中、若しは山澤にて與へられずして盜心もて他が物を取る。者しは他と共に行じ、若しは共に相交、劫めて取る。他が物との想を起し、盜心・悕望ありて愛護して已が有と作す——是の如きの身業・口業ありて取り去り取り來り、本家を離れて處を移し、封幟を壞し、出界せしむる、彼の業が是れ不與取なり。若し彼の

【二〇九】雜行。宋・元・明、宮內省の四本には離行に作る。正か。
【二一〇】偈。宋・元・明・宮內省の四本には「佛」に作る。
【二一一】終りて。命終後の意。
【二一二】見。宋・元・明・宮內省の四本には「是れ」に作る。

未だ[二〇四]第三寶有らざれば、　敎へて二寶に依らしむ。
[二〇五]彼を損ぜむと欲せる爲めには非らず。　[二〇六]大仙は悋しむ所無し。
此の法の義として應に爾るべし。　大仙は僧を毀せず。

[二〇七]法輪既に轉じて便ち聖衆有りてよりは卽ち三語を說き、口に三敎を受く。――歸依佛、歸依法、歸依僧なり。此の三語を受け已りて卽ち優婆塞と名く。[二〇八]偈に說くが如し。

歸依して、衆多の　山巖及び樹木、
園林及び神寺に處する、　斯は苦の所逼に由る。
此の歸は安穩に非ず。　此の歸は爲れ上に非ず。
[p. 574 a] 此の處に歸依するは　能く一切の苦を離るゝに非ず。
若し佛法僧に歸すれば、　正しく四眞諦を觀ず。
苦は集に由りて生ず。　能く苦の集を滅する
八正の安隱道は、　必らず甘露の處に至る。
此の歸を最も安と爲す。　此の歸を最も上と爲す。
此の處に歸依すれば、　能く一切の苦を離る。

問うて曰く、優婆塞は幾戒かある。答へて曰く、五あり。何等か五なる。壽を盡して殺生せず――是れ優婆塞戒なり。壽を盡して盜せず――是れ優婆塞戒なり。壽を盡して邪婬せず――是れ優婆塞戒なり。壽を盡して妄語せず――是れ優婆塞戒なり。壽を盡して飲酒せず――是れ優婆塞戒なり。是の如きの優婆塞の五戒は盡壽、受持して違犯することを得ず。

幾を齊りてか持戒の優婆塞と爲さむ。若し優婆塞の、此の五戒の中に於て常に持戒・護行・近行し、

は Tapussa; Bhallika 等に各作る。
【二〇二】垢等。以下の三句は佛をさす。
【二〇三】提謂。右註の如く、最初の二優婆塞の一人で、梵 Trapuṣa; 巴、Tapussa.
【二〇四】第三寶。僧寶のこと。
【二〇五】彼。僧寶のこと。
【二〇六】大仙。佛陀をさす。
【二〇七】法輪等。佛陀が鹿野苑で初轉法輪をなし、五比丘を說化して、初めて僧衆成りしを意味す。
【二〇八】偈等。說一切有部毘奈耶雜事二六(大正 34, p. 333 a)、俱舍論一四(國譯俱舍論―國民文庫本 12, p. 112f)等參照。

云何が地大の過去なる。地大の生じ已りて滅せるを過去と名く。
云何が地大の未來なる。地大の未生・未出なるを未來と名く。
云何が地大の現在なる。地大の生じて未だ滅せざるを現在と名く。
水・火・風大も亦是の如し。

[一九四]問分[一九五]優婆塞品　第十

問うて曰く、是れ優婆塞ありや。答へて曰く、是あり。
誰か優婆塞なる。是れ佛の優婆塞なり。
何の所[一九六]動か、是れ優婆塞なる。謂く法なり。
何等か佛なる。釋迦牟尼佛なり。
何等の法なる。離欲なり。
何等か離欲なる。滅盡なり。
何等か滅盡なる。涅槃なり。
[一九七]幾を齊り、名けて優婆塞と爲すや。若し人あり、諸根・男相具足し、心に錯亂無く、苦の[一九八]所逼の爲めならずして、優婆塞と作らむと欲し、[一九九]尊上心を向け、[二〇〇]彼に向ひて主と爲し、彼の喜樂を捨せるに依り、[二〇一]彼の法輪の未だ轉ぜず、未だ衆僧有らざるには、口に二教を受く――歸依佛・歸依法なり。此の二語を受け已りて、卽ち優婆塞と名く。偈に說くが如く。

[二〇二]垢・煩惱使を離れ、　第一常寂を證し、
降伏して稱の無量なるものは、　彼の[二〇三]提謂の爲めに
歸佛及び歸法を說く。　離垢は無上の寶なり。

【一九四】問分。上の相應下の註に準ずるものがある。翻顧すべし。
【一九五】優婆塞品。Upāsaka-vagga. 新譯に近事と譯する在俗男弟子（實は女弟子たる近事女＝優婆夷 Upāsikā も含む）に關する上來同樣の檢討をする一品に當る。
【一九六】動。宋・元・明、宮內省の四本には爲に作る。
【一九七】幾を等。法蘊足論一―毘曇部三、p. 15 等參照。
【一九八】所の字。宋・元・明、宮內省四本には不記。
【一九九】尊上心を向け。法蘊足論等に「段淨心を起し」といふに當るか。
【二〇〇】彼。宋・元・明、宮內省四本等には「彼彼」に作る。
【二〇一】彼の等。五分律一五（大正 22, p. 103 a）等に、佛陀が成道第一の七日をすぎたるとき、離謂、波利の三賈客が優婆塞となれるとき、未だ、三寶具備せず、從つて今記せる二歸依等なかりしことをとく等をさす心。（四分律三十一には右二人を瓜―宋・元・明、宮內省の諸本には爪―及び優波離に作り、中本起經上には提謂、波離の二人、大莊嚴經一〇には帝履富婆、婆履、同梵本には Trapuṣa, Bhallika, Vinaya I, 4―Vo. I. p. 4 に

り。

云何が地大の報なる。地大の受なるを地大の報と名く。

云何が地大の報なる。地大の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なるを地大の報と名く。

云何が地大の非報非報法なる。外の地大なるを地大の非報・非報法と名く。

水・火・風大も亦是の如し。

四大は幾か[一九〇]見斷・幾か思惟斷、幾か非見斷非思惟斷なる。一切は非見斷非思惟斷なり。

四大は幾か[一九一]見斷因、幾か思惟斷因、幾か非見斷非思惟斷因なる。一切は三分にして或は見斷因、或は思惟斷因、或は非見斷非思惟斷因なり。

云何が地大の見斷因なる。若し見斷法の報なる地大を地大の見斷因と名く。

云何が地大の思惟斷因なる。思惟斷因法の報なるに地大、是を地大の思惟斷因と名く。

云何が地大の非見斷非思惟斷因なる。善法の報の地大と非報非報法なるとを地大の非見斷非思惟斷因と名く。

水・火・風大も亦是の如し。

四大は幾か[一九二]欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か不繫なる。一〔〇〕切は二分にして或は欲界繫、或は色界繫なり。

云何が地大の欲界繫なる。欲漏・有漏の地大なるを欲界繫と名く。

云何が地大の色界繫なる。色漏・有漏の地大なるを色界繫と名く。

水・火・風大も亦是の如し。

四大は幾か[一九三]過去、幾か未來、幾か現在なる。一切は三分にして或は過去、或は未來、或は現在なり。

解門を不記。

【一八三】了等。同上二の三〇、了非了門。

【一八四】斷等。同上二の三一、斷非斷智知門。

備考―この品にも亦、この六に斷、非斷を記せず。

【一八五】修等。同上二の三二、修非修門。

【一八六】證等。同上二の三三、證非證門。

【一八七】善等。同上三の一、三性門。

【一八八】學等。同上三の二、三學門。

【一八九】報等。同上三の三、報等三門。

【一九〇】見斷等。同上三の四、三斷門。

【一九一】見斷因等。同上三の五、三斷因門。

【一九二】欲界等。同上、四の一、界繫門。

【一九三】過去等。同上四の二、世門。

四大は幾か[一六六]心、幾か非心なる。一切は非心なり。
四大は幾か[一六七]心相應、幾か非〔心〕心相應なる。一切は非心相應なり。
四大は幾か[一六八]心數、幾か非心數なる。一切は非心數なり。
四大は幾か[一六九]緣、幾か非緣なる。一切は非緣なり。
四大は幾か[一七〇]共心、幾か不共心なる。一切は不共心なり。一切は[一七一]不隨心轉なり。
四大は幾か[一七二]業、幾か非業なる。一切は非業なり。
四大は幾か[一七三]業相應、幾か非業相應なる。一切は非業相應なり。
四大は幾か[一七四]共業、幾か非共業なる。一切は不共業なり。一切は[一七五]不隨業轉なり。
四大は幾か[一七六]因幾か非因なる。一切は因なり。
四大は幾か[一七七]有因、幾か無因なる。一切は有因なり。一切は[一七八]有緒なり。一切は[一七九]有緣なり。一切は[一八〇]有爲なり。
四大は幾か[一八一]知、幾か非知なる。一切は知にして事の如く知見なり。
四大は幾か[一八二]識、幾か非識なる。一切は識にして事の如く識す。一切は[一八三]了にして事の如く知見す。
四大は幾か[一八四]斷智知、幾か非斷智知なる。一切は非斷智知なり。
四大は幾か[一八五]修、幾か非修なる。一切は非修なり。
四大は幾か[一八六]證、幾か非證なる。一切は證にして事の如く知見す。
四大は幾か善[一八七]、幾か不善、幾か無記なる。一切は無記なり。
四大は幾か[一八八]學、幾か無學、幾か非學非無學なる。一切は非學非無學なり。
四大は幾か[一八九]報、幾か報法、幾か非報非報法なる。一切は二分にして或は報、或は非報非報法な

【一六六】心等。同上二の一三、心非心門。
【一六七】心相應等。同上二の一四、心相應非相應門。
【一六八】心數等。同上二の一五、心數非心數門。
【一六九】緣等。同上二の一六、緣非緣門。
【一七〇】共心等。同上二の一七、共不共心門。
【一七一】不隨心等。同上二の一八、隨不隨心轉門。
【一七二】業等。同上二の一九、業非業門。
【一七三】業相應等。同上二の二〇、業相應非相應門。
【一七四】共業等。同上二の二一、共非共業門。
【一七五】不隨等。同上二の二二、隨非隨業轉門。
【一七六】因等。同上二の二三、因非因門。
【一七七】有因等。同上二の二四、有無因門。
【一七八】有緒等。同上二の二五、有無緒門。
【一七九】有緣等。同上二の二六、有無緣門。
【一八〇】有爲等。同上二の二七、有無爲門。
【一八一】知等。同上二の二八、知非知門。
【一八二】識等。同上二の二九、識非識門。
備考—本品にはこの次に僻非

木熱・牛屎糞熱、及び餘の外の火熱にして非受なるを外の火大と名く。

是の如きの內の火大、外の火大を火大と名く。

云何が風大なる。二の風大あり。內の風大と外の風大となり。

云何が內の風大なる。身〔內〕の受の風なる上風・下風・依節風・攣躄風・骨節遊風・出息入息風、餘の內の別の受なる風を內の風大と名く。

云何が外の風大なる。外の風の非受なる東風・南風・西風・北風・雜塵風・不雜塵風・冷風・熱風・黑風・旋嵐風・動地風、及び餘の外の風の非受なるを外の風大と名く。

是の如きの內の風大、外の風大を風大と名く。

[一五三]四大は幾か[一五四]色、幾か非色なる。一切は色なり。

四大は幾か[一五五]可見、幾か不可見なる。一切は不可見なり。

四大は幾か[一五六]有對、幾か無對なる。一切は有對なり。

四大は幾か[一五七]聖、幾か非聖なる。一切は非聖なり。

四大は幾か[一五八]有漏、幾か無漏なる。一切は有漏なり。一切は[一五九]有愛なり。一切は[一六〇]有求なり。一切は[一六一]當取なり。一切は[一六二]有取なり。一切は[一六三]有勝なり。

四大は幾か[一六四]受、幾か非受なる。一切は二分にして或は受、或は非受なり。

云何が地大の受なる。地大の若し內なるを地大の受と名く。

云何が地大の受なる。地大の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なるを地大の受と名く。

云何が地大の非受なる。外の地大を地大の非受と名く。

水・火・風大も亦是の如し。

四大は幾か[一六五]有報、幾か無報なる。一切は無報なり。

【一五三】四大等。以下、準上の第二段、四大の諸門分別。本品にては(一)二門下にて、內外門(十二)、解非解門(三十一)、及び斷非斷門(三三)の三を脫す。他は具さに備はる。

【一五四】色等。そのまゞ二の一、四非色門。

【一五五】可見等。同上、二の二、可不可見門。

【一五六】有對等。同上二の三、有無對門。

【一五七】聖等。同上二の四、聖非聖門。

【一五八】有漏等。同上二の五、有無漏門。

【一五九】有愛等。同上二の六、有無愛門。

【一六〇】有求等。同上二の七、有無求門。

【一六一】當取等。同上二の八、當非取門。

【一六二】有取等。同上二の九、有無取門。

【一六三】有勝等。同上二の一〇、有無勝門。

【一六四】受等。同上二の一一、受非受門。

備考—本品にはこの次に內外門を脫す。

【一六五】有報等。同上二の一二、有無報門。

[一四四]問分大品[一四五] 第九

問うて曰く、幾か大ある。答へて曰く、四あり。[一四六]地・水・火・風大なり。

云何が地大なる。二の[一四七]地大あり。內の地大と外の地大となり。

云何が內の地大なる。若し身內の別堅・[一四八]受堅なる骨・齒・爪・髮毛・姸膚・肌皮・[一四九]筋・脾・賢・肝・肺・心・腸・胃・大腸・小腸・大腹・小腹・糞穢、此の身及び餘の內の受の堅なるを內の地大と名く。

云何が外の地大なる。外の非受の堅なる銅・鐵・鉛・錫・白鑞・金・銀・眞珠・琉璃・珂貝・璧玉・珊瑚・錢性寶貝・珠・沙・石・土・鹹鹵石・糞掃・灰・土地・草・木・枝・葉・莖・節、及び餘の外の非受の堅なるを外の地大と名く。

是の如きの內の地大、外の地大を地大と名く。

云何が水大なる。二の水大あり。內の水大と外の水大となり。

云何が內の水大なる。身內の受の水膩なる涎・癃・[一五〇]膽・肝・肪・髓・腦・脂・䏈・涕・唾・膿・血・小便、及び餘の身內の受の水潤等を內の水大と名く。

[p. 573 c] 云何が外の水大なる。若し外の水膩の[一五一]非受なる[一五二]蘇・油・生酥、蜜・黑・石蜜・乳・酪、酪漿・醪酒・甘蔗酒・蜜酒及び餘の外の水膩の非受なるを外の水大と名く。

是の如きの內の水大・外の水大を水大と名く。

云何が火大なる。二の火大あり內の火大と外の火大となり。

云何が內の火大なる。身內の火の受の熱にして、若しは熱の能く熱せしむる身熱・內燋、若しは服せる食・飲等の消、及び餘の身內の別受の火なるを內の火大と名く。

云何が外の火大なる。外の火にして非受の熱なる火熱・日熱・珠熱・舍熱・牆熱・山熱・穀氣熱・草熱・

【一四四】問分の上。また、上註に準じて、大正本等には舍利弗阿毘曇論の字を記する。

【一四五】大品。Mahābhūtavarga—大 Mahābhūta とは則ち、新譯諸本にて大種と作る地水火風のことにして、今は聽てその地水火風に關する上來同準の二段(解說と諸門分別)的說明をする一品である。

【一四六】地・水・火・風。集異門足論一—毘曇部一、初版 p. 43 (註九三)等參照。

【一四七】地大。cf. Dhammasaṅgaṇi p. 177 No. 962; &c.

【一四八】受。Upādiṇṇa

【一四九】筋。宋・元・明三本には脈に作る。

【一五〇】膽。宋・元・明・宮內省の四本には痰に作る。

【一五一】非受。巴、Anupādiṇṇa.

【一五二】蘇。宋・元・明、宮內省の四本には酥に作る。巴、S.=ppi=butter.

る、是を無癡善根の報法と名く。

三善根は幾か[一四〇]見斷、幾か思惟斷、幾か非見斷非思惟斷なる。一切は非見斷非思惟斷なり。

三善根は幾か[一四一]見斷因、幾か思惟斷因、幾か非見斷非思惟斷因なる。一切は非見斷非思惟斷因なり。

三善根は幾か[一四二]欲界繫、幾か色界繫幾か無色界繫幾か不繫なる。二は欲界繫、一は四分にして或は欲界〔〇〕繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なり。

云何が二は欲界繫なる。無貪・無恚を二は欲界繫なりと名く。

云何が一は四分にして、或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なる。無癡善根を一は四分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なりと名く。

云何が無癡善根の欲界繫なる。欲漏・有漏の無癡善根なるを欲界繫と名く。

云何が無癡善根の色界繫なる。色漏・有漏の無癡善根なるを色界繫と名く。

云何が無癡善根の無色界繫なる。無色漏・有漏の無癡善根なるを無色界繫と名く。

云何が無癡善根の不繫なる。聖・無漏の無癡善根なるを不繫と名く。

三善根は幾か[一四三]過去、幾か未來、幾か現在、幾か非過去非未來非現在なる。一切は三分にして或は過去、或は未來、或は現在なり。

云何が無貪善根の過去なる。無貪善根の生じ已りに滅せるを過去と名く。

云何が無貪善根の未來なる。無貪善根の未生・未出なるを未來と名く。

云何が無貪善根の現在なる。無貪善根の生じて未だ滅せざるを現在と名く。

無恚・無癡も亦是の如し。

【一四〇】見斷等。同上三の四、三斷門。

【一四一】見斷因等。同上三の五、三斷因門。

【一四二】欲界繫等。同上四の一、界繫門。

【一四三】過去等。同上四の二、三世等四門。

云何が無癡善根の無學なる。無學の信根と相應する無癡善根を無癡善根の無學と名く。
云何が無癡善根の無學なる。無學人の阿羅漢を得むと欲し、[一三八]未だ得ざるの聖法を得むと欲し修道して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち阿羅漢果を得る若しは實の人、若しは趣の無癡なるを無癡善根の無學と名く。
云何が無癡善根の非學非無學なる。無癡善根の非聖の無癡なるを無癡善根の非學非無學と名く。
三善根は幾か[一三九]報、幾か報法、幾か非報非報法なる。二は報法、一は二分にして或は報、或は報法なり。
云何が二は報法なる。無貪・無恚を二は報法なりと名く。
云何が一は二分にして或は報、或は報法なる。無癡善根を一は二分にして或は報、或は報法なりと名く。
云何が無癡善根の報なる。無癡善根の無報なるを無癡善根の報と名く。
云何が無癡善根の報なる。見學人の須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する、無學人の阿羅漢を得むと欲して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち阿羅漢果を得する若しは實の人若しは趣の無癡なるを無癡善根の報と名く。
云何が無癡善根の報法なる。無癡善根の有報なるを無癡善根の報法と名く。
云何が無癡善根の報法なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じて未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るゝ、無學人の阿羅漢を得むと欲し、未た得ざるの聖法を得むと欲して修道に、若しは實の人若しは趣の無癡な

【一三八】未だ以下。原漢文には「未得聖法欲得聖法」とありて、聖法を二回出すも、已に前にも註した如く、この後の「聖法」は恐らく衍字なるべし。
【一三九】報等。門上三の三、報等三門。

三善根は幾か[一二九]識、幾か非識なる。一切は識にして意識が事の如く識す。一切は[一三〇]解なり。一切は[一三一]了なり。

三善根は幾か[一三二]斷智知、幾か非斷智知なる。一切は非斷智知なり。一切は[一三三]非斷なり。

三善根は幾か[一三四]修、幾か非修なる。一切は修なり。

三善根は幾か[一三五]證、幾か非證なる。一切は證にして事の如く知見す。

三善根は幾か[一三六]善、幾か非善、幾か無記なる。一切は善なり。

三善根は幾か[一三七]學、幾か無學、幾か非學非無學なる。二は非學非無學、一は三分にして或は學、或は無學、或は非學非無學なり。

云何が二は非學非無學なる。無貪無恚を二は非學非無學なりと名く。

云何が一は三分にして或は學、或は無學、或は非學非無學なる。無癡善根を一は三分にして或は學、或は無學或は非學非無學なりと名く。

云何が無癡善根の學なる。無癡善根の聖にして無學に非ざるを無癡善根の學と名く。

云何が無癡善根の學なる。學の信根と相應する無癡善根を無癡善根の學と名く。

云何が無癡善根の學なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる・及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じて未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るゝ、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含ならず、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脱心して卽ち沙門果の須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する若しは實の人、若しは趣の無癡善根なるを無癡善根の學と名く。

云何が無癡善根の無學なる。無癡善根の若し聖にして〔一〕學に非ざるを無癡善根の無學と名く。

【一二九】識等。同上二の二九、識非識門。
【一三〇】解等。同上二の三〇、解・非解門。
【一三一】了等。同上二の三一、了非了門。
【一三二】斷智知等。同上二の三二、斷非斷智知門。
【一三三】非斷等。同上二の三三、斷非斷門。
【一三四】修等。同上二の三四、修非修門。
【一三五】證等。同上二の三五、證非證門。
【一三六】善等。同上三の一、三性門。
【一三七】學等。同上三の二、三學門。

と欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るゝ、無學人の阿羅漢を得むと欲し、未だ得ざるの聖法を得むと欲して修道する。若しは實の人若しは趣の若し無癡なるを無癡善根の有報と名く。

云何が無癡善根の無報なる。無癡善根の報なるを無癡善根の無報と名く。

云何が無癡善根の無報なる。見學人の須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し若しは觀解脫心して卽ち沙門果の須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する、無學人の、阿羅漢を得むと欲して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは趣の無癡なるを無癡善根の無報と名く。

三善根は幾か[一一四]心、幾か非心なる。一切は非心なり。

三善根は幾か[一一五]心相應、幾か非心相應なる。一切は心相應なり。

三善根は(p. 572 a)幾か[一一六]心數、幾か非心數なる。一切は心數なり。

三善根は幾か[一一七]緣、幾か非緣なる。一切は緣なり。

三善根は幾か[一一八]共心、幾か不共心なる。一切は共心なり。一切は[一一九]隨心轉なり。

三善根は幾か[一二〇]業、幾か非業なる。一切は非業なり。

三善根は幾か[一二一]業相應、幾か非業相應なる。一切は業相應なり。

三善根は幾か[一二二]共業、幾か非共業なる。一切は共業なり。一切は[一二三]隨業轉なり。

三善根は幾か[一二四]因、幾か非因なる。一切は因なり。

三善根は幾か[一二五]有因、幾か無因なる。一切は有因なり。一切は[一二六]有緒なり。一切は[一二七]有緣なり。

一切は有爲なり。

三善根は幾か[一二八]知、幾か非知なる。一切は知にして事の如く知見す。

【一一四】心等。同上二の一四、心非心門。
【一一五】心相應等。同上二の一五、心相應非相應門。
【一一六】心數等。同上二の一六、心數非數門。
【一一七】緣等。同上二の一七、緣非緣門。
【一一八】共心等。同上二の一八、共不共心門。
【一一九】隨心轉等。同上二の一九、隨非隨心轉門。
【一二〇】業等。同上二の二〇、業非業門。
【一二一】業相應等。同上二の二一、業相應非相應門。
【一二二】共業等。同上二の二二、共非共業門。
【一二三】隨業等。同上二の二三、隨非隨業轉門。
【一二四】因等。同上、二の二四、因非因門。
【一二五】有因等。同上二の二五、有無因門。
【一二六】有緒等。同上二の二六、有無緒門。
【一二七】有爲等。同上二の二七、有無爲門。
【一二八】知等。同上二の二八、知非知門。

云何が無癡善根の非聖なる。無癡善根の有漏なるを無癡善根の非聖と名く。

云何が無癡善根の非聖なる。非學非無學の無癡善根、是を無癡善根の非聖と名く。

云何が無癡善根の聖なる。無癡善根の無漏、是を無癡善根の聖と名く。

云何が無癡善根の聖なる。信根と相應する無癡善根を無癡善根の聖と名く。

云何が無癡善根の聖なる。學人の結・使を離れ〔○〕聖心にして聖道に入り、堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じて未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るゝ見學人の須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀地具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して即ち沙門果の須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する、無學人の阿羅漢を得むと欲し、未だ得ざるの聖道を得むと欲し、[一〇九]聖法を得むと欲して修道し、觀地具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して即ち阿羅漢果を得する〔若しは實の人〕、若しは趣の若し無癡なるを無癡善根の聖と名く。

[一一〇]有漏・無漏、有愛・無愛、有求・無求、當取・非當取、有取・無取、有勝・無勝も亦是の如し。

三善根は幾か[一一一]受、幾か非受なる。一切は非受なり。一切は[一一二]外なり。

三善根は幾か[一一三]有報、幾か無報なる。二は有報、一は二分にして或は有報、或は無報なり。

云何が二は有報なる。無貪・無恚を二は有報なりと名く。

云何が一は二分にして或は有報、或は無報なる。無癡善根を一は二分にして或は有報、或は無報なりと名く。

云何が無癡善根の有報なる。無癡善根の報法なるを無癡善根の有報と名く。

云何が無癡善根の有報なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じ、未だ得ざるを得む

【一〇九】聖法を得むと欲して。從來の文例に鑑れば恐らく衍句なるべし。

【一一〇】有漏以下。同上二の五、有無漏門、二の六、有無愛門、二の七、有無求門、二の八、當非取門、二の九、有無取門、二の一〇、有無勝門等例釋。

【一一一】受等。同上二の一一、受非受門。

【一一二】外等。同上二の一二、內外門。

【一一三】有報等。同上二の一三、有無報門。

云何が無恚善根なる。心堪忍して離恚するを無恚善根と名く。

云何が無恚善根なる。若しは少衆生〔若しは〕多〔と〕衆生――此の衆生を傷害せざる、繋縛せざる、縛閉せざる、種種の苦を作さざる、不瞋・不重瞋・究竟不瞋・心・不應瞋・不忿怒・不横瞋・不憎惡・不惱亂心・不相憎惡・憐愍・利益衆生、及び餘の法の不瞋・不恚・不重恚・究竟不恚心・不應恚・不忿怒・不横瞋・不憎惡・不惱亂心・不瞋恚・不相憎惡、憐愍・利益法、是を不恚善根と名く。

云何が無癡善根なる。無明を離るを無癡善根と名く。

云何が無癡善根なる。心の堪忍して癡を離るゝを無癡善根と名く。

云何が無癡善根なる。苦・集・滅・道を知る、過去を知る、未來を知る、過去・未來を知る、內を知る、外を知る、內・外を知る、六觸入の集・滅・味・過・患を知る、如實の出を知る、如爾を知る、業報を知る、緣を知る善・不善・無記を知る、黑・白、有緣・無緣、有光・無光、作・不作、親・不親を知る、過去の法中の無癡・不奪・不奪心[一〇二]不相應・無礙・無覆蓋・無晤冥・無荒亂・無纒心・不癡・不濁、明・焰・光・[一〇三]照照・知見・解脫・方便・慧眼・慧根・慧力・擇法・正覺・正見、及び餘の法中の無癡・不奪・不奪心相應・無礙・無覆蓋・無闇冥、乃至正覺・正見を無癡善根と名く。

[一〇四]三善根は幾か[一〇五]色、幾か非色なる。一切は非色なり。

三善根は幾か[一〇六]可見、幾か不可見なる。一切は不可見なり。

三善根は幾か[一〇七]有對、幾か無對なる。一切は無對なり。

三善根は幾か[一〇八]聖、幾か非聖なる。二は非聖、一は二分にして或は聖、或は非聖なり。

云何が二は非聖なる。無貪・無恚を二は非聖なりと名く。

云何が一は二分にして或は聖、或は非聖なる。無癡善根、是を一は二分にして或は聖、或は非聖なりと名く。

【一〇一】善根品。Kuśalamūla-varga― 前品に準じて、すべて理解するを得べし。

【一〇二】不相應。宋・元・明三本には相應に作る。下文參照。

【一〇三】照照。同上の三本には照はたゞ一に作る。

【一〇四】三善根等。以下、第二段―諸門分別。この品にては諸の部門は、典型的に具備してゐる。

【一〇五】色等。そのまゞ二の一、色・非色門。

【一〇六】可見等。同上二の二、可不可見門。

【一〇七】有對等。同上二の三、有無對門。

【一〇八】聖等。同上二の四、聖非聖門。

云何が癡不善根の色界繫なる。色漏・有漏の癡不善根を色界繫と名く。
云何が癡不善根の無色界繫なる。無色漏・有漏の癡不善根を無色界の繫と名く。
三不善根は幾か[九九]過去、幾か未來、幾か現在、幾か非過去・非未來非現在なる。一切は三分にして或は過去、或は未來、或は現在なり。
云何が貪不善根の過去なる。貪不善根の生じ已りて滅せるを過去と名く。
云何が貪不善根の未來なる。貪不善根の未生・未出なるを未來と名く。
云何が貪不善根の現在なる。貪不善根の生じて未だ滅せざるを現在と名く。
恚・癡も亦是の如し。

[一〇〇]問分善根品[一〇一]　第八

問うて曰く、幾か善根ある。答へて曰く、三あり。
何等か三なる。無貪善根・無恚善根・無癡善根なり。
云何か無貪善根なる。不悕望を無貪善根と名く。
云何か無貪善根なる。心の堪忍して離貪する、是を無貪善根と名く。
云何が無貪善根なる。五欲中の喜愛・適意愛なる色欲染の相續、眼識の色の愛喜・適意・愛色欲染の相續、耳・鼻・舌・身、識の觸の愛喜・適意・愛色・欲染の相續、他が欲・他が色・他が財・他が妻女・他が童女・他が所順を得ることを悕望せざる不貪・不著心・不貪悕望・不愛・不欲染・不重欲染心・究竟不欲染、及び餘の法の不貪・不重貪・究竟不貪・不悕望・不愛・不欲染・不重欲染・究竟不貪・不悕望・不愛・不欲染・不重欲染・究竟不欲染を無貪善根と名く。
云何が無恚善根なる。不忿怒、是を無恚善根と名く。

知・非知門。
【八七】識等。同上二の二九、識非識門。
【八八】解等。同上二の三〇、解非解門。
【八九】了等。同上二の三一、了非了門。
【九〇】斷智等。同上二の三二、斷智非斷智知門。
【九一】斷等。同上二の三三、斷非斷門。
【九二】修等。同上二の三四、修非修門。
【九三】證等。同上二の三五、證非證門。
【九四】善等。同上三の一、三性門。
【九五】學等。同上三の二、三學門。
【九六】報等。同上三の三、報等三門。
【九七】見斷等。同上三の四、三斷門。
備考―從前の諸品にては、次の三の五。として三斷內門ありしも、今は不記。
【九八】欲界等。同上三の五、界繫門―他の諸品にては三界繫の外に不繫を加へ、四門とす。對檢すべし。
【九九】過去等。同上四の一、三世・非世門。
【一〇〇】問分。この上に、大正本等は舍利弗阿毘曇論の字を記す。

一切は[八五]有爲なり。

三不善根は幾か[八六]知。幾か非知なる。一切は知にして事の如く知見す。一切は[八七]識にして意が事の如く識す。一切は[八八]解なり。一切は[八九]了なり。

三不善根は幾か[九〇]斷智知、幾か非斷智知なる。一切は斷智知なり。一切は[九一]斷なり。

三不善根は幾か[九二]修、幾か非修なる。一切は非修なり。

三不善根は幾か[九三]證、幾か非證なる。一切は證にして事の如く知見す。

三不善根は幾か[九四]善、幾か不善、幾か無記なる。一切は不善なり。

三不善根は幾か[九五]學、幾か無學、幾か非學非無學なる。一切は非學非無學なり。

三不善根は幾か[九六]報、幾か報法、幾か非報非報法なる。一切は報法なり。

三不善根は幾か[九七]見斷、幾か思惟斷、幾か非見斷非思惟斷なる。一切は二分にして或は見斷、或は思惟斷なり。

云何が貪不善根の見斷なる。貪不善根の見斷因の貪不善根なる、是を貪不善根の見斷と名く。

云何が貪不善根の思惟斷なる。貪不善根の思惟斷因の貪不善根なるを貪不善根の思惟斷と名く。

恚・癡も亦是の如し。

三不善根は幾か[九八]欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫なる。二は欲界繫、一は三分にして或は[p.571 a]欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫なり。

云何が二は欲界の繫なる。貪不善根・恚不善根を二は欲界の繫なりと名く。

云何が一は三分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫なる。癡不善根を一は三分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫なりと名く。

云何が癡不善根の欲界繫なる。欲漏・有漏の癡不善根を欲界繫と名く。

【六九】受等。同上二の一一、受不受門。
【七〇】外等。同上二の一二、内外門。
【七一】有報。同上二の一三、有無報門。
【七二】心等。同上二の一四、心・非心門。
【七三】心相應等。同上二の一五心相・應非相應門。
【七四】心數等。同上二の一六、心數非心數門。
【七五】緣等。同上二の一七、緣非緣門。
【七六】共心等。同上二の一八、共不共心門。
【七七】隨心等。同上二の一九、隨・不隨心轉門。
【七八】業等。同上二の二〇、業非業門。
【七九】業相應等。同上二の二一、業相應非相應門。
【八〇】共業等。同上二の二二、共不共業門。
【八一】隨業等。同上二の二三、隨不隨業轉門。
【八二】有因等。同上、二の二四、有無因門。
【八三】有緒等。同上二の二五、有無諸門。
【八四】有緣等。同上二の二六、有無緣門。
【八五】有爲等。同上二の二七、有無爲門。
【八六】知等。同上二の二八、

癡・奪心・應奪心・礙・覆・蓋・闇冥、乃至、無知・無見・無觧・無脫・無方便を癡不善根と名く。

[五八]三不善根は[五九]幾か色、幾か非色なる。一切は非色なり。

三不善根は幾か[六〇]可見、幾か不可見なる。一切は不可見なり。

三不善根は幾か[六一]有對、幾か無對なる。一切は無對なり。

〔三〕三不善根は幾か[六二]聖、幾か非聖なる。一切は非聖なり。

三不善根は幾か[六三]有漏、幾か無漏なる。一切は有漏なり。

一切は[六四]有愛なり。一切は[六五]有求なり。一切は[六六]當求なり。一切は[六七]有取なり。一切は[六八]有勝なり。

三不善根は幾か[六九]受、幾か不受なる。一切は不受なり。

一切は[七〇]外なり。

三不善根は幾か[七一]有報、幾か無報なる。一切は有報なり。

三不善根は幾か[七二]心、幾に非心なる。一切は非心なり。

三不善根は幾か[七三]心相應、幾か非心相應なる。一切は心相應なり。

三不善根は幾か[七四]心數、幾か非心數なる。一切は心數なり。

三不善根は幾か[七五]緣、幾か非緣なる。一切は緣なり。

三不善根は幾か[七六]共心、幾か不共心なる。一切は共心なり。一切は[七七]隨心轉なり。

三不善根は幾か[七八]業、幾か非業なる。一切は非業なり。

三不善根は幾か[七九]業相應、幾か非業相應なる。一切に業相應なり。

三不善根は幾か[八〇]共業、幾か不共業なる。一切は共業なり。一切は[八一]隨業轉なり。

三不善根は幾か[八二]有因、幾か無因なる。一切は有因なり。一切は[八三]有緒なり。一切は[八四]有緣なり。

には困の字を缺く。

【五七】知らざる。この一、宋・元・明・宮內省四本に從つて補入。

【五八】三等。以下、第二段—諸門分別。附記—こゝの諸門分別中にては(一)二門分別は全三十五門具備するも、(二)三門分別にて、從前諸品に於る五門中の最後なる三斷內なく、又、三、四門分別同上二中の第一、界繫門が不繫門に省いて三門分別化し、かくて、四門は無門の唯一になつてゐる。

【五九】幾か等。そのまゞ二の一、色非色門。

【六〇】可見等。同上二の二、可不可見門。

【六一】有對等。同上二の三、有無對門。

【六二】聖等。同上二の四、聖・非聖門。

【六三】有漏。同上二の五、有無漏門。

【六四】有愛等。同上二の六、有無愛門。

【六五】有求等。同上二の七、有無求門。

【六六】當求。同上二の八、當非當求門。

【六七】有取。同上二の九、有無取門。

【六八】有勝等。同上二の一〇、有無勝門。

問分[四八]不善根品[四九]　第七

〔七〕問うて曰く、幾か不善根ある。答へて曰く、[五〇]三あり。

何等か三なる。貪不善根・恚不善根・癡不善根なり。

云何か貪不善根なる、悕望を貪不善根と名く。

云何が[五一]貪不善根なる。五欲中の[五二]喜愛・適意・愛色[五三]・欲染の相續、[五四]眼識の色の喜愛・適意・愛色・欲染の相續、耳・鼻・舌・身識の觸の喜愛・適意・愛色・欲染の相續、他の欲・他の色・他の財・他の婦・他の童女・他の所須を得むと悕望する。若しは[五五]貪・貪著心相應・貪悕望・愛心・欲染・重欲染・究竟欲染、及び餘の可貪法の若しは貪・重貪・究竟貪・悕望、愛心・欲染・重欲染・究竟欲染、是を貪不善根と名く。

云何が恚不善根なる。忿・怒を恚不善根と名く。

云何が恚不善根なる。若しは少衆生、若しは多衆生を傷害・繫縛し、種種の[五六]困苦を作す若しは瞋恚・重瞋恚・究竟瞋恚・相應瞋恚・忿怒・横瞋・憎惡・惱心・相憎・無慈、憐愍無き衆生を利益すること無き、及び餘の所瞋恚法の若しは恚・重恚・究竟恚、相應瞋・忿怒・横瞋・憎惡・惱心・瞋恚・相憎・無慈無憐愍・無利益法を瞋恚不善根と名く。

云何が癡不善根なる。無明、是を癡不善根と名く。

云何が癡不善根なる。苦・集・滅・道を知らざる。過去を知らざる、未來を知らざる過去・未來を知らざる、内を知らざる、外を知らざる、内外を知らざる、六觸入の集・滅・味・過・患を[五七]知らざる、如實の出を知らざる、如爾を知らざる、業報を知らざる、緣、善・不善・無記、黑・白・有緣・無緣、有光・無光・作・不作・親・不親を知らざる――彼(これら)の法中の若しは癡・奪心・應奪心・癡・覆・蓋・暗冥・荒穢・纏心・癡・濁・無明・無明流・無明淵・無明使・無知・無見・無辨・無脫・無方便、及び餘の法中の癡若しは

【四八】問分。この上に、大正本等は舍利弗阿毘曇論の字がある。
【四九】不善根品。Akuśalamūla-vagga. 不善根とは一切不善法の根本たるものの意にて、卽ち、その三たる貪・瞋・癡の如上同準の檢討するのが今の一品である。
【五〇】三。集異門足論（毘曇部一）のその下參照。
【五一】貪等。以下、集異門足論三の三、不善根の說明等と對照せよ。
【五二】喜愛。Nandirāga―宋・元・明・宮内省四本には愛喜に作り、以下準ず。―この邊、卷三、「六の貪に依る喜」の說明下の註等參照。
【五三】欲染の相續。卷三中には「欲染相」に作り、同下に註出しておいたやうに巴利雜部の經文も同ず。
【五四】眼識の色。また卷三中には眼知の色とす。
【五五】貪等。毘崩伽論 p.361等の文と對比せば、次の如くも讀むべし。（但し下の善根品中に反省せば、今の讀み方が正しくはあるべし）。
貪――rāgo,
貪著――sārāgo,
心相應の貪―cittassa sārāgo,
悕望――icchā――
【五六】困苦。宋・元・明・三本

漢果を得むと欲せる、若しは實の人若しは趣の若し念・憶念・微念・順念・住不忘・相續・念不失・不奪・不鈍・不鈍根・念、念根・念力・正念なるを念覺の報と名く。

云何が念覺の報法なる。念覺の有報なるを念覺の報法と名く。

云何が念覺の報法なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じ、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るる無學人の阿羅漢果を得むと欲し、未だ得ざるの聖法を得むと欲して修道する、若しは實の人、若しは趣の若し念・憶念・微念・順念・住不忘相續念・不失・不奪・不鈍・不鈍根・念・念根・念・力正念なるを念覺の報法と名く。

擇法・進・喜・除・捨覺も亦是の如し。

[四四] 七覺は幾か見斷、幾か思惟斷、幾か非見斷非思惟斷なる。一切は非見斷非思惟斷なり。

[四五] 七覺は幾か見斷因、幾か思惟斷因、幾か非見斷・非思惟斷因なる。一切は非見斷非思惟斷因なり。

[四六] 七覺は幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か不繫なる。一切は不繫なり。

[四七] 七覺は幾か過去、幾か未來、幾か現在、幾か非過去非未來非現在なる。一切は三分にして或は過去、或は未來或は現在なり。

云何が念覺の過去なる。念覺の若し生じ已りて滅せるを過去と名く。

云何が念覺の未來なる。念覺の未生未出なるを念覺の未來と名く。

云何が念覺の現在なる。念覺の生じて未だ滅せざるを念覺の現在と名く。

擇法・覺乃至捨覺も亦是の如し。

【四四】七覺。同上三の四、三斷門。
【四五】七覺等。同上三の五、三斷內門。
【四六】七等。同上四の一、界繫不繫門。
【四七】七覺。同上四の二、無門。

三九 七覺は幾か修、幾か非修なる。一切は修なり。

四〇 七覺は幾か證、幾か非證なる。一切は證如事知見なり。

四一 七覺は幾か善、幾か非善、幾か無記なる。一切は善なり。

四二 七覺は幾か學、幾か無學、幾か非學・非無學なる。一切は二分にして或は學或は無學なり。

云何が念覺の學なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じ、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るる、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、若しは觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脱心して即ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを證する若しは實の人若しは趣の若し念の憶念・微念・順念・住不忘・相續・念不失・不奪・不鈍・不鈍根・念・念根・念力・正念を念覺の學と名く。

云何が念覺の無學なる。無學人の阿羅漢果を得むと欲し、未だ得ざるの聖法を得むと欲して修道し、觀智具足し、若しは智地し若しは觀解脱心して、即ち阿羅漢果を得する若しは實の人若しは趣の若しは念・憶念・微念・順念・住不忘・相續・念不失・不奪・不鈍根・念・念根・念力・正念なるを念覺の無學と名く。

擇法・進・喜・除・定・捨覺も亦是の如し。

四三 七覺は幾か報、幾か報法、幾か非報非報法なる。一切は二分にして〔p. 570 a〕或は報、或は報法なり。

云何が念覺の報なる。念覺の無報なるを念覺の報と名く。

云何が念覺の報なる。見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し若しは觀解脱心して即ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する、無學人の阿羅

【三九】七覺。同上二の三四、修非修門。
【四〇】七覺。同上二の三五、證非證門。
【四一】七覺等。同上三の一、三性門。
【四二】七等。同上、三の二、三學門。
【四三】七覺。同上三の三、報等三門。

[二六]七覺は幾か業相應、幾か非業相應なる。五は業相應、二は二分にして或は業相應、或は非業相應なり。

云何が五は業相應なる。念覺・擇法覺・喜覺・定覺・捨覺を五は業相應なりと名く。

云何が二は二分にして或は業相應、或は非業相應なる。進覺・除覺を二は二分にして或は業相應、或は非業相應なりと名く。

云何が進覺の業相應なる。進覺の思に相應する心の度、發出を進覺の業相應と名く。

云何が進覺の非業相應なる。進覺の若し思相應に非ざる身の度・發出を、進覺の業相應と名く。

云何が除覺の業相應なる。除覺の若し思に相應する心樂・心柔・心輕・心軟・心除なる、是を除覺の業相應と名く。

云何が除覺の非業相應なる。除覺の若し思相應に非ざる身樂・身柔・身輕・身軟・身除を除覺の非業相應と名く。

〔〇〕業相應と名く。

[二七]七覺は幾が共業、幾か非共業なる。一切は共業なり。[二八]一切は隨業轉なり。

[二九]七覺は幾か因、幾か非因なる。一切は因なり。

[三〇]七覺は幾か有因、幾か無因なる。一切は有因なり。[三一]一切は有緒なり。一切は[三二]有緣なり。一切は[三三]有爲なり。

[三四]七覺は幾か知、幾か非知なる。一切は知にして事の如く知見す。

[三五]七覺は幾か識幾か非識なる。一切は意識が事の如く識す。

[三六]七覺は幾か解、幾か非解なる。一切は解にして事の如く知見す。

七覺は幾か[三七]了、幾か非了なる。一切は了にして事の如く知見す。

七覺は幾か[三八]斷智知、幾か非斷智知なる。一切は非斷智知なり。

【二六】七覺等。同上二の二一、業相應の非相應門。

【二七】七覺。同上二の二二、共非共業門。

【二八】一切等。同上二の二三、隨隨業轉門。

【二九】七覺。同上二の二四、因非因門。

【三〇】七覺等。同上二の二五、有無因門。

【三一】一切。同上二の二六、有無諸門。

【三二】有緣。同上二の二七、有無緣門。

【三三】有爲。同上二の二八、有無爲門。

【三四】七覺。同上二の二九、知非知門。

【三五】七覺。同上二の三〇、識非識門。

【三六】七覺等。同上二の三　解非解門。

【三七】了。同上二の三二、了非了門。

【三八】斷等。同上二の三三、斷非智知門。

備考―他の從前諸品中にはこの次に二の三四として斷非斷門あるも、今は不記。

と名く。
云何が進覺の緣なる。進覺の若し心數の度、發出なるを進覺の緣と名く。
云何が進覺の非緣なる。進覺〔三〕の若し心數に非ざる身の度、發出なるを進覺の非緣と名く。
云何が除覺の緣なる。除覺の若し心數なる心樂・心柔・心輕・心軟・心除を除覺の緣と名く。
云何が除覺の非緣なる。除覺の若し心數に非ざる身樂・身柔・身輕・身軟・身除なるを除覺の非緣と名く。

二三 七覺は幾か共心、幾か不共心なる。五は共心、二は二分にして或は共心、或は不共心なり。
云何が五は共心なる。念覺・擇法覺・喜覺・定覺・捨覺を五は共心なりと名く。
云何が二は二分にして或は共心、或は不共心なる。進覺・除覺を二は二分にして或は共心或は不共心なりと名く。
云何が進覺の共心なる。進覺の隨心轉にして心と共に生じ、共に住し、共に滅する心の度、發出を進覺の共心と名く。
云何が進覺の不共心なる。進覺の若し不隨心轉にして、心と共に生せず、共に住せず、共に滅せざる身の度、發出を進覺の不共心と名く。
云何が除覺の共心なる。除覺の若し隨心轉にして心と共に生じ、共に住し、共に滅する身樂・心樂・身柔・心柔・身輕・心輕、身軟・心軟、身除・心除を除覺の共心と名く。
云何が除覺の不共心なる。除覺の若し不隨心轉にして、心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる身樂・身柔、身輕・身軟・身除を除覺の不共心と名く。

二四 隨心轉・不隨心轉も亦是の如し。

二五 七覺は幾か業、幾か非業なる。一切は非業なり。

【二三】七覺。同上二の一八、共心非共心門。
【二四】隨心等。同上二の一九、隨心不隨心轉門。
【二五】七覺。同上二の二〇、業非業門。

は非心相應なりと名く。

云何が進覺の心相應なる。進覺の若し心數の度發出なるを進覺の心相應と名く。

云何が進覺の非心相應なる。進覺の若し心數に非ざる身の度、發出なるを進覺の非心相應と名く。

云何が除覺の心相應なる。除覺の若し心數の心樂・心柔・心輕・心軟・心除なる、是を除覺の心相應と名く。

云何が除覺の非心相應なる。除覺の若し心數に非ざる身樂・身柔・身輕・身軟・身除なる、是を除覺の非心相應と名く。

〔三〕七覺は幾か心數、幾か非心數なる。五は心數、二は二分にして或は心數、或は非心數なり。

云何が五は心數なる。念覺・擇法覺・喜覺・定覺・捨覺、是を五は心數なりと名く。

云何が二は二分にして或は心數、或は非心數なる。進覺・除覺、是を二は二分にして或は心數或は非心數なりと名く。

云何が進覺の心數なる。進覺の若し緣なる心の度、發出なるを進覺の心數と名く。

云何が進覺の非心數なる。進覺の若し非緣なる身の度・發出に非ざるを進覺の非心數と名く。

云何が除覺の心數なる。除覺の若し緣なる心樂・心柔・心輕・心軟・心除なる、是を除覺の心數と名く。

云何が除覺の非心數なる。除覺の若し非緣なる身樂・身柔・身輕・身軟・身除に非ざるを除覺の非心數と名く。

〔三〕七覺は幾か緣、幾か非緣なる。五は緣、二は二分にして或は緣、或は非緣なり。

云何が五の緣なる。念覺・擇法覺・喜覺・定覺・捨覺、是を五は緣なりと名く。

云何が二は二分にして或は緣、或は非緣なる。進覺・除覺を二は二分にして或は緣或は非緣なり

【三】七覺等。同上二の一六、心數非心數門。

【三】七覺等。同上二の一七、緣非緣門。

〔一八〕七覺は幾か有報、幾か無報なる。一切は二分して或は有報、或は無報なり。
云何が念覺の有報なる。念覺の報法なるを念覺の有報と名く。
云何が念覺の有報なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、實の如く苦・集・滅道を觀じて未だ得ざる得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るる、無學人の阿羅漢果を得むと欲し、未だ得ざるの聖法を得むと欲して修道する若しは實の人若しは趣の若しは念・憶念・微念・順念・住念・住不忘・相續念不失・不奪・不鈍根・念力・正念なるを念覺の有報と名く。

云何が念覺の無報なる。念覺の報なるを念覺の無報と名く。
云何が念覺の無報なる、見學人の須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得る、無學人の阿羅漢果を得むと欲して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち阿羅漢果を得る若しは實の人、若しは趣の若しは念・憶念・微念・順念・住不忘・相續・念不失〔p. 569 a〕不奪・不鈍・不鈍根・念・念根・念力・正念なる、是を念覺の無報と名く。
擇法・進・喜・除・定・捨覺も亦是の如し。
〔一九〕七覺は幾か心、幾か非心なる。一切は非心なり。
〔二〇〕七覺は幾か心相應、幾か非心相應なる。五は心相應、二は二分にして或は心相應、或は非心相應なり。
云何が五は心相應なる。念覺・擇法覺・喜覺・定覺・捨覺を五は心相應なりと名く。
云何が二は二分にして或は心相應、或は非心相應なる、進覺・除覺を二は二分にして或は心相應或

【一八】七覺。同上二の一三、有無報門。
【一九】七覺。同上二の一四、心非心門。
【二〇】七覺等。同上二の一五、心相應非相應門。

云何が除覺なる。學人の結・使を離れ、乃至、卽ち阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは趣の若し身樂・心樂・身柔・心柔、身輕、心輕・身軟・心軟、身除・心除なる。是を除覺と名く。
云何が定覺なる。學人の結・使を離れ、乃至、卽ち阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは若の心の住・正住・專住、心一向・心一樂・心不亂・依意心獨・定・定根・定力・正定、是を定覺と名く。
云何が捨覺なる。學人の結・使を離れ、乃至、卽ち阿羅漢果を得する若しは實の人若しは趣の若し捨・不著・心等・心直・不諂・心の不貴・非受なる、是を捨覺と名く。
[五]七覺は[六]幾か色、幾か非色なる。五は非色、二は二分して或は色、或は非〔[illegible]〕色なり。
云何が五は非色なる。念覺・擇法覺・喜覺・定覺・捨覺是を五は非色なりと名く。
云何が二は二分にして或は色、或は非色なる。進覺・除覺を二は二分して或は色或は非色なりと名く。
云何が進覺の色なる。身の度・發出を進覺の色と名く。
云何が進覺の非色なる。心の度・發出を進覺の非色と名く。
云何が除覺の色なる。身樂・身柔・身輕・身軟・身除を除覺の色と名く。
云何が除覺の非色なる。心樂・心柔・心輕・心軟・心除を除覺の非色と名く。
[七]七覺は幾か可見幾か不可見なる。一切は不可見なり。
[八]七覺は幾か有對幾か無對なる。一切は無對なり。
[九]七覺は幾か聖、幾か非聖なる。一切は聖なり。
[一〇]七覺は幾か有漏幾か無漏なる。一切は無漏なり。一切は[一一]無受なり。一切は[一二]無求なり。一切は非[一三]當取なり。一切は[一四]無取なり。一切は[一五]無勝なり。
[一六]七覺は幾か受幾か非受なる。一切は非受なり。一切は[一七]外なり。

【五】七覺。以下、第二段として、諸門分別をのぶ。中、二門分別中、他の三四とする斷非斷門をこゝには缺く。
【六】幾か等。例による二の一、色・非色門。
【七】七覺等。同上二の二、可見不可見門。
【八】七覺。同上二の三、有無對門。
【九】七覺は。同上二の四、聖非聖門。
【一〇】七覺。同上二の五、有無漏門。
【一一】無受。同上二の六、有無受門。
【一二】無求。同上二の七、有無求門。
【一三】當取。大正本等に取を趣に作るは非で、同上二の八、當取非當取門。
【一四】無取。同上二の九、有無取門。
【一五】無勝。同上二の一〇、有無勝門。
【一六】七覺。同上二の一一、受非受門。
【一七】外。同上二の一二、內外門。

卷の第六[一]〔p. 568 a〕

問分七覺品[二]　第六

問うて曰く幾か覺ある。答へて曰く、七あり。何等か七なる。[三]念覺・擇法覺・喜覺・進覺・除覺・定覺・捨覺なり。

云何か[四]念覺なる。學人の結・使〔じ〕を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じて未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るる、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀地具足し、若しは智地し、若しは觀解脱心して即ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する、無學人の阿羅漢を得むと欲し、未だ得ざるの聖法を得むと欲して修し、觀地具足し、若しは智地し、若しは觀解脱心して、即ち阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは趣の若しは念・憶念・微念・順念・住不忘・相續念・不失・不奪・不鈍・不鈍根・念・念根・念力・正念なる、是を念覺と名く。

云何が擇法覺なる。學人の結・使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは趣の若し法中の擇・重擇・究竟擇・擇法・思惟・覺了して自相・他相・共相に達する思持辯・觀進辯、慧・智・見・解脱・方便・術焰・光明・照耀・慧眼・慧根・慧力・無癡・正見なる、是を擇法覺と名く。

云何が進覺なる。學人の結・使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは趣の若し身心の發・出度・堪忍・不退・勤力・進、不離・不懈・不緩・不惰・進・進根・進力・正進なる是を進覺と名く。

云何が喜覺なる。學人の結・使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは趣の歡喜・踊躍・重躍踊・究竟踊躍・治淨滿足・心の歡喜、是を喜覺と名く。

【一】 卷の第六。今までの五卷は何れも一卷一品なりしも、この卷にては、一卷中に(一)七覺品、(二)不善根品、(三)善根品、(四)大品、(五)優婆塞品の五品を攝む。

【二】 七覺品。Sapta-bodhyaṅga-varga—所謂七等覺支、又は七覺分その他といはれるものについて、前來同段の(一)解說、(二)諸門分別をなす一品ですべては上來諸品に準ず。

【三】 念覺以下。集異門足論十六—毘曇部二、p. 142ff. 法蘊足論八—同三、p. 217ff. その外參照。新譯しその他にては一般に覺支と記す。

【四】 念覺等。新譯には念覺支、擇法覺支、喜覺支、精進覺支、輕安覺支、定覺支、捨覺支等に作る。

云何が意根の不繫なる。意根の聖、無漏の意界、意識界なる、是を意根の不繫と名く。

[五六]二十二根は幾か過去、幾か未來、幾か現在、幾か非過去非未來非現在なる。一切は三分にして或は過去、或は未來、或は現在なり。

云何が眼根の過去なる。眼根の生じ已りて滅せるを過去と名く。

云何が眼根の未來なる。眼根の未生、未出なるを未來と名く。

云何が眼根の現在なる。眼根の生じて未だ滅せざるを現在と名く。

乃至已知根も亦是の如し。

【五六】二十二根等。同上四の二、無分別門。

云何が樂根の色界繫なる。樂根の色漏、有漏の眼觸の樂受、耳・身觸の樂受なるを樂根の色界繫と名く。

云何が命根の欲界繫なる。命根の欲漏、有漏の欲行の壽なるを命根の欲界繫と名く。

云何が命根の色界繫なる。命根の色漏、有漏の色行の壽なるを命根の色界繫と名く。

云何が命根の無色界繫なる。命根の無色漏、有漏の無色行の壽なるを命根の無色界繫と名く。

云何が喜根の欲界繫なる。喜根の欲漏、有漏の意觸の樂受なるを喜根の欲界繫と名く。

云何が喜根の色界繫なる。喜根の色漏、有漏の意觸の樂受なるを喜根の色界繫と名く。

云何が喜根の不繫なる。喜根の聖、無漏の意觸の樂受なるを喜根の不繫と名く。

云何が捨根の欲界繫なる。捨根の欲漏、有漏の眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身〔P.568a〕觸の不苦不樂受なるを捨根の欲界繫と名く。

云何が捨根の色界繫なる。捨根の若し色漏、有漏の眼觸の不苦不樂受、耳・身・觸・意觸の不苦不樂受なるを捨根の色界繫と名く。

云何が捨根の無色界繫なる。捨根の無色漏、有漏の意觸の不苦不樂受なるを捨根の無色界繫と名く。

云何が捨根の不繫なる。捨根の聖無漏の〔五五〕意觸の不苦不樂受なるを捨根の不繫と名く。

云何が意根の欲界繫なる。意根の欲漏、有漏の眼識乃至意識なるを意根の欲界繫と名く。

云何が意根の色界繫なる。意根の色漏、有漏の眼識・耳識・身識・意識なる、是を意根の色界繫と名く。

云何が意根の無色界繫なる。意根の無色漏、有漏の意界、意識界なる、是を意根の無色界繫と名く。

〔五五〕意觸。大正本等には「意界・意識界・意觸」と作るもこれは非で、今は宋・元・明・宮内省の四本に順つて改む。

至意識を意根の非見斷非思惟斷因と名く。

[五三]二十二根は幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か不繫なる。六は欲界繫、八は不繫、四は二分にして或は欲界繫、或は色界繫、一は三分にして、或は欲界繫、或は色界繫、或は[五四]無〔三〕色界繫、復た一は三分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は不繫、二は四分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なり。

云何が六は欲界繫なる。鼻根・舌根・女根・男根・苦根・憂根を六は欲界繫なりと名く。

云何が八は不繫なる。信根乃至已知根を八は不繫なりと名く。

云何が四は二分にして或は欲界繫、或は色界繫なる。眼根・耳根・身根・樂根を四は二分にして、或は欲界繫、或は色界繫なりと名く。

云何が一は三分にして、或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫なる。命根を一は三分にして、或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫なりと名く。

云何が復た一は三分にして、或は欲界繫、或は色界繫、或は不繫なる。喜根を復た一は三分にして、或は欲界繫、或は色界繫、或は不繫なりと名く。

云何が二は四分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なる。捨根、意根を二は四分にして、或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なりと名く。

云何が眼根の欲界繫なる。眼根の欲漏、有漏の眼根なるを眼根の欲界繫と名く。

云何が眼根の色界繫なる。眼根の色漏、有漏の眼根なるを眼根の色界繫と名く。

耳根、身根も亦是の如し。

云何が樂根の欲界繫なる。樂根の欲漏、有漏の眼觸の樂受、耳・鼻・舌・身觸の樂受なるを樂根の欲界繫と名く。

【五三】二十二根等。同上四の一、界繫門。

【五四】無色界。界の字は宋・元・明・宮內省の四本に順つて補入。

云何が喜根の見斷因なる。喜根の若・見斷の意觸の樂受なるを喜根の見斷因と名く。

云何が喜根の思惟斷因なる。喜根の思惟斷の意觸の樂受なるを喜根の思惟斷因と名く。

云何が喜根の非見斷非思惟斷因なる。喜根の善法の報なる、喜根の若しは非報の非報法なる意觸の樂受を喜根の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が憂根の見斷因なる。憂根の見斷、憂根の見斷法の報なる意觸の苦受を憂根の見斷因と名く。

云何が憂根の思惟斷因なる。憂根の思惟斷、憂根の思惟斷法の報なる意觸の苦受を憂根の思惟斷因と名く。

云何が憂根の非見斷非思惟斷因なる。憂根の善、憂根の善法の報、憂根の非報非報法なる、意觸の苦受を憂根の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が捨根の見斷因なる。捨根の見斷、捨根の見斷法の報なる眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受を捨根の見斷因と名く。

云何が捨根の思惟斷因なる。捨根の思惟斷、捨根の思惟斷法の報なる、眼觸の不苦不樂受を捨根の思惟斷因と名く。

云何が捨根の非見斷非思惟斷因なる。捨根の善、捨根の善法の報、捨根の非報非報法なる眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受を捨根の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が意根の見斷因なる。意根の見斷、意根の見斷法の報なる眼識乃至意識を意根の見斷因と名く。

云何が意根の思惟斷因なる。意根の思惟斷、意根の思惟斷法の報なる、眼識乃至意識を意根の思惟斷因と名く。

云何が意根の非見斷非思惟斷因なる。意根の善、意根の善法の報、意根の非報非報法なる眼識乃

[五三] 二十二根は幾か見斷因、幾か思惟斷因、幾か非見斷因非思惟斷因なる。 九は非見斷因非思惟斷因、十三は三分にして、或は見斷因、或は思惟斷因、或は非見斷因非思惟斷因なり。

云何が九は非見斷因非思惟斷因なる。 樂根・信根・乃至已知根を九は非見斷因非思惟斷因なりと名く。

云何が十三は三分にして或は見斷因、或は思惟斷因、或は非見斷因非思惟斷因なる。 樂根を除く餘の眼根乃至意根を十三は三分にして或は見斷因、或は思惟斷因、或は非見斷因非思惟斷因なりと名く。

云何が眼根の見斷因なる。 眼根の見斷法の報なる地獄・餓鬼・畜生の眼根なるを眼根の見斷因と名く。

云何が眼根の思惟斷因なる。 眼根の思惟斷法の報なる地獄・畜生・餓鬼の眼根なるを眼根の思惟斷因と名く。

云何が眼根の非見斷因非思惟斷因なる。 眼根の善法の報なる天上、人中の眼根なるを眼根の非見斷非思惟斷因と名く。

耳・鼻・舌・身根・女根・男根も亦是の如し。

云何が苦根の見斷因なる。 苦根の見斷法の報なる眼觸の苦受、耳・鼻・舌・身觸の苦受なるを苦根の見斷因と名く。

云何が苦根の思惟斷因なる。 苦根の若し思惟斷法の報なる眼觸の苦受、耳・鼻・舌・身觸の苦受なるを苦根の思惟斷因と名く。

云何が苦根の非見斷非思惟斷因なる。 苦根の善法の報なる、 苦根の非報の非報法なる、 眼觸の苦受、耳・鼻[三]・舌・身觸の苦受なるを苦根の非見斷非思惟斷因と名く。

[五三] 二十二根等。 同上三の五、三斷因門。

云何が喜根の非見斷非思惟斷なる。喜根の善・無記の意觸の樂受なるを喜根の非見斷非思惟斷と名く。

云何が憂根の見斷なる。憂根の不善にして思惟斷に非ざる見斷の煩惱に相應する意觸の苦受を憂根の見斷と名く。

云何が憂根の思惟斷なる。憂根の不善にして見斷に非ざる思惟斷の煩惱に相應する意觸の苦受を憂根の思惟斷と名く。

云何が憂根の非見斷非思惟斷なる。憂根の善、無記の意觸の苦受なるを憂根の非見斷非思惟斷と名く。

云何が捨根の見斷なる。捨根の不善にして思惟斷に非ざる見斷の煩惱に相應する意觸の不苦不樂受を捨根の見斷と名く。

云何が捨根の思惟斷なる。捨根の不善にして見斷に非ざる思惟斷の煩惱に相應する意觸の不苦不樂受を捨根の思惟斷と名く。

[P.567a]云何が捨根の非見斷非思惟斷なる。捨根の善、無記の眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受なるを捨根の非見斷非思惟斷と名く。

云何が意根の見斷なる。意根の不善にして思惟斷に非ざる見斷の煩惱に相應する意界、意識界、是を意根の見斷と名く。

云何が意根の思惟斷なる。意根の相應不善にして見斷に非ざる思惟斷の煩惱に相應する意界、意識界を意根の思惟斷と名く。

云何が意根の非見斷非思惟斷なる。意根の善、無記の眼識乃至意識なるを意根の非見斷非思惟斷と名く。

云何が捨根の報法なる。捨根の善報なるを除く餘の捨根の善、不善の意觸の不苦不樂受なるを、捨根の報法と名く。

云何が捨根の非報非報法なる。捨根の無記にして我分の攝に非ざる眼觸の不苦不樂受〔6〕、耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受なるを捨根の非報非報法と名く。

云何が意根の報なる。意根の受、意根の善報なる、眼識乃至意識を意根の報と名く。

云何が意根の報法なる。意根の有報なるを意根の報法と名く。

云何が意根の報法なる。意根の善報なるを除く餘の意根の善、不善の意界、意識界なるを意根の報法と名く。

云何が意根の非報非報法なる。意根の若し無記にして我分の攝に非ざる眼識乃至意識を意根の非報非報法と名く。

〔五一〕二十二根は幾か見斷、幾か思惟斷、幾か非見斷非思惟斷なる。十八は非見斷非思惟斷、四は三分にして或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷、非思惟斷なり。

云何が十分は非見斷非思惟斷なる。眼根乃至苦根、信根乃至知根を十八は非見斷非思惟斷なりと名く。

云何が四は三分にして、或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷なる。喜根・憂根・捨根・意根を四は三分にして或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷なりと名く。

云何が喜根の見斷なる。喜根の不善にして思惟斷に非ざる見斷の煩惱に相應する意觸の樂受を喜根の見斷と名く。

云何が喜根の思惟斷なる。喜根の不善にして見斷に非ざる思惟斷の煩惱に相應する意觸の樂受を喜根の思惟斷と名く。

【五一】二十二根等。同上三の四、三斷門。

云何が苦根の報なる。苦根の業法、煩惱所生の報にして我分の攝なる眼觸の苦受、耳・鼻・舌・身觸の苦受なる、是を苦根の報と名く。

云何が苦根の非報非報法なる、苦根の無記にして我分の攝に非ざる眼觸の苦受、耳・鼻・舌・身觸の苦受なる、是を非報非報法と名く。

云何が喜根の報なる。喜根の受、喜根の善報なる意觸の樂受を喜根の報と名く。

云何が喜根の報法なる。喜根の有報なるを喜根の報法と名く。

云何が喜根の報法なる。喜根の善報なるを除く餘の喜根の善・不善の意觸の樂受なるを喜根の報法と名く。

云何が喜根の非報非報法なる。喜根の無記にして我分の攝に非ざる意觸の樂受なるを喜根の非報非報法と名く。

如何が憂根の報なる。憂根の受なるを憂根の報と名く。

云何が憂根の報なる。憂根の業法、煩惱所生の報にして我分の攝なる意觸の苦受なるを、憂根の報と名く。

云何が憂根の報法なる。憂根の有報なるを憂根の報法と名く。

云何がが憂根の報法なる。憂根の善、不善の意觸の苦受なる、是を憂根の報法と名く。

云何が憂根の非報非報法なる。憂根の無記にして我分の攝に非ざる意觸の苦受なるを憂根の非報非報法と名く。

云何が捨根の樂なる。捨根の受、捨根の善報なる眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受なるを捨根の報と名く。

云何が捨根の報法なる。捨根の有報なるを捨根の報法と名く。

正身除なる、是を知根の報と名く。

云何が知根の報法なる。知根の有報なるを知根の報法と名く。

云何が知根の報法なる。學人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じ、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るる若しは實の人、若しは趣の若し想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・滅盡定・正語・正業・正命・正身除なるを知根の報法と名く。

云何が已知根の報なる。已知根の無報なるを已知根の報と名く。

云何が已知根の報なる。無學人の阿羅漢果を得むと欲して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、即時に阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは趣の若し想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・滅盡定・得・果・正語・正業・正命・正身除なるを已知根の報と名く。

云何が已知根の報法なる。已知根の有報なるを已知根の報法と名く。

云何が已知根の報法なる。無學人の阿羅漢果を得むと欲し、未だ得ざる聖法を得むと欲して修道する若しは實の人、若しは趣の若し想〔b〕・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・滅盡定・正語・正業・正命・正身除なるを已知根の報法と名く。

云何が樂根の報なる。樂根の受なるを樂根の報と名く。

云何が樂根の報なる。樂根の業法、煩惱所生の報にして我分の攝なる眼觸の樂受、耳・鼻・舌・身・觸の樂受なるを樂根の報と名く。

云何が樂根の非報非報法なる。樂根の無記にして我分の攝に非ざる眼觸の樂受、耳・鼻・舌・身・觸の樂受なるを樂根の非報非報法と名く。

云何が苦根の報なる。苦根の受なるを苦根の報と名く。

分にして、或は報、或は報法なりと名く。

云何が二は二分にして或は報、或は非報非報法なる。樂根、苦根を二は二分にして或は報、或は非報非報法なりと名く。

云何が四は三分にして、或は報、或は報法、或は非報非報法なる。喜根・憂根・捨根・意根を四は三分にして或は報、或は報法、或は非報非報法なりと名く。

云何が信根の報なる。信根の無報なるを信根の報と名く。

云何が信根の報なる。見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智し、若しは觀解脫心して、卽ち沙門果の須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する、無學人の阿羅漢果を得むと欲して觀智具足し若しは智地し、若しは觀解脫心して、卽ち阿羅漢果を得する、若しは實の[P. 566a]人、若しは趣の若しは信・入信・究竟入信・眞信・入眞信・心淨を信根の報と名く。

云何が信根の報法なる。學人の結、使を離れ、聖心にして聖道に入り、堅信、堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じ、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るる、無學の人の阿羅漢果を得むと欲し、未得の聖法を得むと欲して修道する若しは實の人、若しは趣の若しは信・入信・究竟入信・眞信・入眞信・心淨是を信根の報法と名く。

進根・念根・定根・慧根も亦是の如し。

云何が知根の報なる。知根の無報なるを知根の報と名く。

云何が知根の報なる。見學人の須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、卽ち沙門果の須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する若しは實の人、若しは趣の、若し想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・[五〇]喜・悅・心除・欲・不放逸・心捨・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・

【五〇】 喜・悅。宋・元・明・宮内省の四本及び上來の一般の例としては悅・喜の順に作る。

云何が捨根の無學なる。無學人の阿羅漢果を得むと欲し、乃至卽ち、阿羅漢果を得たる若しは實の人、若しは趣の若し意觸の不苦不樂受なるを捨根の無學と名く。

云何が捨根の非學〔〇〕非無學なる。捨根の非聖の眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受なる、是を捨根の非學非無學と名く。

云何が意根の學なる。意根の聖にして無學に非ざるを、是を意根の學と名く。

云何が意根の學なる。意根の學の信根と相應する意界、意識界なるを意根の學と名く。

云何が意根の學なる。學人の結、使を離れ、乃至、卽ち阿那含果を得たる、若しは實の人、若しは趣の若し意界、意觸界なる、是を意根の學と名く。

云何が意根の無學なる。意根の聖にして學に非ざるを意根の無學と名く。

云何が意根の無學なる。意根の無學の信根と相應する意界、意識界なるを意根の無學と名く。

云何が意根の無學なる。無學人の阿羅漢果を得むと欲し、乃至卽ち阿羅漢果を得たる、若しは實の人、若しは趣の意界、意識界なるを意根の無學と名く。

云何が意根の非學非無學なる。意根の非聖の識・受陰・眼識乃至意識なるを意根の非學非無學と名く。

四九 二十二根は幾か報、幾か報法、幾か非報非報法なる。八は報、一は報法、七は二分にして或は報、或は報法、二は二分にして或は報、或は非報非報法、四は三分にして、或は報、或は報法、或は非報非報法なり。

云何が八は報なる。眼根乃至命根を八は報なりと名く。

云何が一は報法なる。未知欲知根を一は報法なりと名く。

云何が七は二分にして、或は報、或は報法なる。未知欲知根を除く餘の信根乃至已知根を七は二

【四九】二十二根等。同上三の三、報等三門。

云何が喜根の學なる。喜根の學の信根と相應する意觸の樂受なるを喜根の學と名く。

云何が喜根の學なる。學人の法、使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信、若しは堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じ、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざると解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るゝ、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、卽ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する若しは實の人、若しは趣の意觸の樂受なるを喜根の學と名く。

云何が喜根の學無なる。喜根の若し聖にして、學に非ざるを喜根の無學と名く。

云何が喜根の無學なる。喜根の無學の信根と相應する意觸の樂受なるを喜根の無學と名く。

云何が喜根の無學なる。無學人の阿羅漢果を得むと欲し、未だ得ざる聖法を得むと欲し、修道し、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、卽ち阿羅漢果を得たる若しは實の人、若しは趣の若し意觸の樂受なるを喜根の無學と名く。

云何か喜根の非學非無學なる。喜根の非聖の意觸の樂受なるを喜根の非學非無學と名く。

云何が捨根の學なる。捨根の若し聖にして無學に非ざるを捨根の學と名く。

云何か捨根の學なる。捨根の學の信根と相應する意觸の不苦不樂受なるを捨根の學と名く。

云何が捨根の學なる。學人の結、使を離れ、乃至、卽ち阿那含果を得たる若しは實の人、若しは趣の若し意觸の不苦不樂受なるを捨根の學と名く。

云何が捨根の無學なる。捨根の聖にして學に非ざるを捨根の無學と名く。

云何が捨根の無學なる。捨根の無學の信根と相應する意觸の不苦不樂受なるを、捨根の無學と名く。

[四七]二十二根は幾か學、幾か無學、幾か非學非無學なる。二は學、一は無學、十一は非學非無學、五は二分にして、或は學、或は無學、三は三分にして或は學、或は無學、或は非學非無學なり。

云何が二は學なる。未知欲知根、知根を二は學なりと名く。

云何が一は無學なる。已知根を一を無學なりと名く。

云何が十一は非學非無學なる。眼根乃至苦根憂根を十一は非學非無學なりと名く。

云何が五は二分にして、或は學、或は無學なる。信根・進根・念根・定根・慧根を五は二分にして、或は學、或は無學なりと名く。

云何が三は三分にして、或は學、或は無學、或は非無學なる。喜根・捨根・意根を三は三分にして或は學、或は無學、或は非學非無學なりと名く。

云何が信根の學なる。學人の結、使を分離し、聖心にして聖道に入り、若しは堅信、堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の寂滅を現じ、如實に苦・集・滅・道を觀じ、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離れ、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、即ち沙門果の須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する若しは實の人、若しは趣の、若しは信・入信・究竟入信・眞信・入眞信・心淨を信根の學と名く。

云何が信根の無學なる。學人の阿羅漢を得むと欲し、未だ得ざる〔已〕聖法を得むと欲し、修道して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、即ち阿羅漢果を得たる若しは實の人、若しは趣の、若しは信・入信・究竟入信・眞信・入眞信・心淨を信根の無學と名く。

進根・念根・定根・慧根も是の如し。

云何が喜根の學なる。喜根の若し[四八]聖法にして、無學に非ざるを喜根の學と名く。

【四七】二十二根等。同上三の二、三學門。

【四八】聖法。宋・元・明・宮内省の四本には「聖」に作り、「法」の字無し。

[四六]二十二根は幾か善、幾か不善、幾か無記なる。八は善、十は無記、四は三分にして或は善、或は不善、或は無記なり。

云何が八は善なる。信根乃至已知根と八は善なりと名く。

云何が十は無記なる。眼根乃至苦根を十は無記なりと名く。

云何が四は三分にして或は善、或は不善、或は無記なる。喜根・憂根・捨根・意根をと四は三分にして或は善、或は不善、或は無記なりと名く。

云何が喜根の善なる。喜根の若し修の意觸の樂受なる、是を喜根の善と名く。

云何が喜根の不善なる。喜根の斷の意觸の樂受なる、是を喜根の不善と名く。

云何が喜根の無記なる。喜根の受、喜根の非報非報法の、意觸の樂受なるを喜根の無記と名く。

云何が憂根の善なる。憂根の若し修の意觸の苦受なるを憂根の善と名く。

云[P. 565a]何が憂根の不善なる。憂根の斷の意觸の苦受なるを憂根の不善と名く。

云何が憂根の無記なる。憂根の受、憂根の非報非報法の意觸の苦受なるを憂根の無記と名く。

云何が捨根の善なる。捨根の修の意觸の不苦不樂受なるを捨根の善と名く。

云何が捨根の不善なる。捨根の斷の意觸の不苦不樂なるを捨根の不善と名く。

云何が捨根の無記なる。捨根の受、捨根の非報非報法の眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受なるを捨根の無記と名く。

云何が意根の善なる。意根の修の意界、意識界なる、是を意根の善と名く。

云何が意根の不善なる。意根の斷の意界、意識界なる、是を意根の不善と名く。

云何が意根の無記なる。意根の若し受、意根の非報非報法の眼識乃至意識なるを意根の無記と名く。

【四六】二十二根等。問上三の一、三性門。

云何が捨根の非斷智知なる。捨根の善、無記の眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受なるを捨根の非斷智知と名く。

云何が意根の斷智知なる。〔○〕意根の不善の意界、意識界なるを意根の斷智知と名く。

云何が意根の非斷智知なる。意根の善、無記の眼識乃至意識なるを意根の非斷智知と名く。

[四三] 斷・非斷も亦是の如し。

[四四] 二十二根は幾か修、幾か非修なる。八は修、十は非修、四は二分にして或は修、或は非修なり。

云何が八は修なる。信根乃至已知根を八は修なりと名く。

云何が十は非修なる。眼根乃至苦根を十は非修なりと名く。

云何が四は二分にして或は修或は非修なる。喜根・憂根・捨根・意根を四は二分にして、或は修、或は非修なりと名く。

云何が喜根の修なる。喜根の若し善の意觸の樂受なるを喜根の修と名く。

云何が喜根の非修なる。喜根の非善、無記の意觸の樂受なるを喜根の非修と名く。

云何が憂根の修なる。憂根の善の意觸の苦受なるを憂根の修と名く。

云何が憂根の非修なる。憂根の不善、無記の意觸の苦受なるを憂根の非修と名く。

云何が捨根の修なる。捨根の善の意觸の不苦不樂受なるを捨根の修と名く。

云何が捨根の非修なる。捨根の不善、無記の眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受なるを捨根の非修と名く。

云何が意根の修なる。意根の善の意界・意識界なるを意根の修と名く。

云何が意根の非修なる。意根の不善・無記の眼識乃至意識なるを意根の非修と名く。

[四五] 二十二根は幾か證、幾か非證なる。一切は證にして事の如く知見す。

【四三】斷等。同上二の三四、斷非斷門。

【四四】二十二根等。同上二の三五、修非修門。

【四五】二十二根等。同上二の三六、證非證門。

觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・滅盡定・正語・正業・正命・正身除を知根の因と名く。

云何が知根の非因なる。知根の非緣・無報・不共業なる得・果を知根の非因と名く。

巳知根も亦是の如し。

[三六]二十二根は幾か有因、幾か無因なる。一切は有因なり。[三七]一切は有緒なり。一切は有緣なり。一切は有爲なり。

[三八]二十二根は幾か知、幾か非知なる。一切は知にして事の如く知見す。

[三九]二十二根は幾か識、幾か非識なる。一切は識にして、意識が事の如く識す。

[四〇]二十二根は幾か解、幾か非解なる。一切は解にして事の如く知見す。

[四一]二十二根は幾か了、幾か非了なる。一切は了にして事の如く知見す。

[四二]二十二根は幾か斷智知、幾か非斷智知なる。十八は非斷智知、四は二分にして、或は斷智知、或は非斷智知なり。

云何が十八は非斷智知なる。眼根乃至苦根、信根乃至巳知根を十八は非斷智知なりと名く。

云何が四は二分にして或は斷智知、或は非斷智知なる。喜根・憂根・捨根・意根、是を四は二分にして或は斷智知、或は非斷智知なりと名く。

云何が喜根の斷智知なる。喜根の不善の意觸の樂受なるを喜根の斷智知と名く。

云何が喜根の非斷智知なる。喜根の善、無記の意觸の樂受なるを喜根の非斷智知と名く。

云何が憂根の斷智知なる。憂根の不善の意觸の苦受なるを憂根の斷智知と名く。

云何が憂根の非斷智知なる。憂根の善、無記の意觸の苦受なるを憂根の非斷智知と名く。

云何が捨根の斷智知なる。捨根の不善の意觸の不苦不樂受なるを捨根の斷智知と名く。

[三六] 二十二根等。同上二の二五、有無因門。
[三七] 一切等。同上二六、有無諸門、二七有無緣門、二八、有無爲門。
[三八] 二十二根等。同上二の二九、知・非知門。
[三九] 二十二根等。同上二の三〇、識・非識門。
[四〇] 二十二根等。同上二の三一、解・非解門。
[四一] 二十二根等。同上二の三二、了非了門。
[四二] 二十二根等。同上二の三三、斷智、非斷智知門。

云何が知根の業相應非業相應を說かずなる。思、是を知根の業相應非業相應を說かずと名く。

已知根も亦是の如し。

[三三] 二十二根は幾か共業、幾か不共業なる。十二は共業、八は不共業、二は二分にして、或は共業、或は不共業なり。

云何が十二は共業なる。樂根乃至未知欲知根を十二は共業なりと名く。

云何が八は不共業なる。眼根乃至命根を八は不共業なりと名く。

云何が二は二分にして或は共業、或は不共業なる。知根・已知根を二は二分にして、或は共業、或は不共業なりと名く。

云何が知根の共業なる。知根の隨業轉にして業と共に生じ、共に住し、共に滅する、想・思・觸・思惟・覺・觀・辯說・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・滅盡定・正語・正業・正命・正身除を知根の共業と名く。

云何が知根の不共業なる。知根の不隨業轉にして業と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる得・果を知根の不共業と名く。

已知根も亦是の如し。

[三四] 隨業轉・不隨業轉も亦是の如し。

[三五] 二十二根は幾か因、幾か非因なる。十二は因、八は非因、二は二分にして或は因、或は非因なり。

云何が十二は因なる。樂根乃至未知欲知根を十二は因なりと名く。

云何が八は非因なる。眼根乃至[七]命根を八は非因なりと名く。

云何が二は二分にして或は因、或は非因なる。知根、已知根を二は二分にして或は因、或は非因なりと名く。

云何が知根の因なる。知根の緣・知根の非緣・有報なる、得・果を除く餘の知根の報なる、想・思・

【三三】二十二根等。同上二の二二、共不共業門。

【三四】隨業轉等。同上二の二三、隨業、不隨業轉門例釋。

【三五】二十二根等。同上二の二四、因・非因門。

相應、或は非業相應、三は三分にして或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應を說かず。
云何が十は業相應なる。進根を除く餘の樂根乃至慧根及び意根を十は業相應なりと名く。
云何か八は非業相應なる。眼根乃至命根を八は非業相應なりと名く。
云何が一は二分にして或は業相應、或は非業相應なる。進根を一は二分にして或は業相應、或は非業相應なりと名く。
云何が三は三分にして或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應を說かざる。未知欲知根・知根・已知根を三は三分にして、或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應を說かずと名く。
云何が進根の業相應なる。進根の思相應の心の發・出度を進根の業相應と名く。
云何が進根の非業相應なる。進根の思の相應に非ざる身の發[P. 564a]・出度を進根の非業相應と名く。
云何が未知欲知根の業相應なる。未知欲知根の思相應なる、想・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨を未知欲知根の業相應と名く。
云何が未知欲知根の非業相應なる。未知欲知根の思相應に非ざる、正語・正業・正命・正身除を未知欲知根の非相業應と名く。
云何が未知欲知根の業相應非業相應を說かずなる。思を未知欲知根の業相應非業相應を說かずと名く。
云何が知根の業相應なる。知根の思相應なる、想・觸・思惟・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨を知根の業相應と名く。
云何が知根の非業相應なる。知根の思相應に非ざる、得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身除を知根の非業相應と名く。

身の發、出度なるを進根の不共心と名く。

云何が知根の共心なる。知根の隨心轉にして心と共に生じ、共に住し、共に滅する想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・正語・正業〔◎〕・正命・正身除なる、是を知根の共心と名く。

云何が知根の不共心なる。知根の若し不隨心轉にして心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身除なるを知根の不共心と名く。

已知根も亦是の如し。

〔三〇〕隨心轉・不隨心轉も亦是の如し。

〔三一〕二十二根は幾か業、幾か非業なる。十九は非業、三は二分にして或は業、或は非業なり。

云何が十九は非業なる。眼根乃至慧根を十九は非業なりと名く。

云何が三は二分にして或は業、或は非業なる。未知欲知根・知根・已知根を三は二分にして、或は業、或は非業なりと名く。

云何が未知欲知根の業なる。思・正語・正業・正命を未知欲知根の業と名く。

云何が未知欲知根の非業なる。想・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・正身除を未知欲知根の非業と名く。

云何が知根の業なる。思・正語・正業・正命を知根の業と名く。

云何が知根の非業なる。想・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・得・果・滅盡定・正身除を知根の非業と名く。

已知根も亦是の如し。

〔三二〕二十二根は幾か業相應、幾か非業相應なる。十は業相應、八は非業相應、一は二分にして、或は業

【三〇】隨心轉等。同上二の一九、隨不隨心轉門。
【三一】二十二根等。同上二の二〇、業・非業門。
【三二】二十二根等。同上二の二一、業相應非相應門。

云何が進根の緣なる。進根の心數の[二八]發、出度を進根の緣と名く。

云何が進根の非緣なる。進根の非心數の發、出度を進根の非緣と名く。

云何が未知欲知根の緣なる。未知欲知根の若し心數の想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨なるを未知欲知根の緣と名く。

云何が未知欲知根の非緣なる。未知欲知根の非心數の正語・正業・正命・正身除を未知欲知根の非緣と名く。

云何か知根の緣なる。知根の心數の想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨を知根の緣と名く。

云何が知根の非緣なる。知根の非心數の得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身除、是を知根の非緣と名く。

已知根も亦是の如し。

[二九]二十二根は幾か共心、幾か不共心なる。十は共心、九は不共心、三は二分にして、或は共心、或は不共心なり。

云何が十は共心なる。意根、進根を除く餘の樂根乃至未知欲知根を十は共心なりと名く。

云何が九は不共心なる。眼根乃至、命根及び意根を九は不共心なりと名く。

云何が三は二分にして、或は共心、或は不共心なる。進根・知根已知根を三は二分にして、或は共心、或は不共心なりと名く。

云何が進根の共心なる。進根の若し隨心轉にして、心と共に生じ、共に住し、共に滅する心の發、出度なるを進根の共心と名く。

云何が進根の不共心なる。進根の不隨心轉にして、心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる

【二八】發。明・宮內省二本には「心發」に作る。

【二九】二十二根等。同上二の一八、共不共心門。

云何が九は心數なる。意根、進根を除く餘の樂根乃至慧根を九は心數なりと名く。
云何が九は非心數なる。眼根乃至命根、意根を九は非心數なりと名く。
云何が四は二分にして、或は心數、或は非心數なる。進根・未知欲知根・知根・已知根を四は二分にして或は心數、或は非心數なりと名く。
云何が進根の心數なる。進根の若し緣の心發、出度なる、是を進根の心數と名く。
云何が進根の非心數なる。進根の非緣の身發、出度なるを進根の非心數と名く。
云何が未知欲知根の心數なる。未知欲知根の緣の想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨を未知欲知根の心數と名く。
云何が未知欲知根の非心數なる。未知欲知根の非緣の正語・正業・正命・正身除を未知欲知根の非心數と名く。
云何が知根の心數なる、知根の緣の想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨を知根の心數と名く。
云何が知根の非心數なる。知根の非緣の得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身除を知根の非心數と名く。
已知根も〔一〇〕亦是の如し。

二七 二十二根は幾か緣、幾か非緣なる。十は緣、八は非緣、四は二分にして或は緣、或は非緣なり。
云何が十は緣なる。進根を除く餘の樂根乃至慧根を十は緣なりと名く。
云何が八は非緣なる。眼根乃至命根を八は非緣なりと名く。
云何が四は二分にして或は緣、或は非緣なる。進根・未知欲知根・知根・已知根を四は二分にして、或は緣或は非緣なりと名く。

【二七】二十二根等。同上二の一七、緣非緣門。

〔二五〕二十二根は幾か心相應、幾か非心相應なる。九は心相應、八は非心相應、一は心相應、非心相應を說かず、四は二分にして、或は心相應、或は非心相應なり。

云何が九は心相應なる。意根、進根を除く除の樂根乃至慧根、是を九は心相應なりと名く。

云何が八は非心相應なる。眼根乃至命根を八は非心相應なりと名く。

云何が一は心相應、非心相應を說かざる。意根、是を一は心相應、非心相應を說かずと名く。

云何が四は二分にして、或は心相應、或は非心相應なる。進根・未知欲知根・知根・已知根を四は二分にして或は心相應、或は非心相應なりと名く。

云〔P. 563a〕何が進根の心相應なる。進根の心數なる心發、出度を進根の心相應と名く。

云何が進根の非心相應なる。進根の非心數なる身發、出度を進根の非心相應と名く。

云何が未知欲知根の心相應なる。未知欲知根の若し心數なる、想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨なるを未知欲知根の心相應と名く。

云何が未知欲知根の非心相應なる。未知欲知根の非心數なる正語・正業・正命・正身除なるを未知欲知根の非心相應と名く。

云何が知根の心相應なる。知根の若し心數なる、想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲不放逸・心捨なるを知根の心相應と名く。

云何が知根の非心相應なる。知根の非心數なる、得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身除なるを知根の非心相應と名く。

已知根も亦是の如し。

〔二六〕二十二根は幾か心數、幾か非心數なる。九は心數、九は非心數、四は二分にして或は心數、或は非心數なり。

【二五】二十二根同等。上二の一五、心相應不相應門。

【二六】二十二根等。同上二の一六、心數非心數門。

云何が知根の有報なる。見學人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、苦・集・滅・道を觀じて未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るゝ若しは實の人、若しは趣の、若し想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・滅盡定・正語・正業・正命・正身除を知根の〔○〕有報と名く。

云何が知根の無報なる。知根の報なるを知根の無報と名く。

云何が知根の無報なる。見學人の須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、卽ち沙門果の須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する若しは實の人の若しは趣の、若し想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身除なるを知根の無報と名く。

云何が已知根の有報なる。已知根の報法なるを已知根の有報と名く。

云何が已知根の有報なる。無學人の阿羅漢を得むと欲し、未だ得ざる聖法を得むと欲して修道する若しは實の人、若しは趣の、若し想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・滅盡定・正語・正業・正命・正身除なるを已知根の有報と名く。

云何が已知根の無報なる。已知根の報なるを已知根の無報と名く。

云何が已知根の無報なる。無學人の阿羅漢果を得むと欲して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、卽ち阿羅漢果を得る若しは實の人、若しは趣の、若し想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身除なるを已知根の無報と名く。

〔二四〕二十二根は幾か心、幾か非心なる。一は心、二十一は非心なり。

云何が一は心なる。意根を一は心なりと名く。

云何が二十一は非心なる。意根を除く餘の一切は非心なり。

【二四】二十二根等。同上二の一四、心非心門。

云何が捨根の無報なる。捨根の若しは報なる、捨根の非報非報法の眼觸の非苦非樂受、耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受なるを捨根の無報と名く。

云何が意根の有報なる。意根の報法なるを意根の有報と名く。

云何が意根の有報なる。意根の善報なるを除く餘の意根の善、不善の意界、意識界なる、是を意根の有報と名く。

云何が意根の無報なる。意根の報なる、意根の非報非報法の眼識乃至意識なるを意根の無報と名く。

云何が信根の有報なる。信根の報法なるを信根の有法と名く。

云何が信根の有報なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、苦・集・滅・道を觀じて、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、道を修して煩惱を離るる、無學の人の阿羅漢果を得むと欲し、未だ得ざる聖法を得むと欲して道を修する若しは實の人、若しは趣の信・入信・究竟入信・眞信・心淨を信根の有報と名く。

云何が信根の無報なる。信根の報なるを信根の無報と名く。

云何が信根の無報なる。見學人の須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、卽ち沙門果の須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得る、無學人の阿羅漢を得むと欲して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、卽ち阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは趣の信・入信・究竟入信・眞信・心淨を信根の無報と名く。

進根・念根・定根・慧根も亦是の如し。

云何が知根の有報なる。知根の報法なるを知根の有報と名く。

非受と名く。

〔三二〕内・外も亦是の如し。

〔三三〕二十二根は幾か有報、幾か無報なる。一は有報、十は無報、十一は二分にして或は有報、或は無報なり。

云何が一は有報なる。未知欲知根を一は有報なりと名く。

云何が十は無報なる。眼根、乃至、苦根を十は無報なりと名く。

云何が十一は二分にして、或は有報、或は無報なる。未知欲知根を除く餘の喜根乃至已知根を十一は二分にして或は有報、或は無報なりと名く。

云何が喜根の有報なる。喜根の報法なるを喜根の有報と名く。

云何が喜根の有報なる。喜根の善報なるを除く餘の喜根の善、不善の意觸の樂受なるを喜根の有報と名く。

云何が喜根の無報なる。喜根の若しは報なる、喜根の非報非報法の意觸の樂受なるを喜根の無報と名く。

云何が憂根の有報なる。憂根の報法なるを憂根の有報と名く。

云何が憂根の有報なる。憂根の善、不善の意觸の苦受なるを憂根の有報と名く。

云何が憂根の無報なる。憂根の〔b〕若しは報なる、憂根の非報非報法の意觸の苦受なるを憂根の無報と名く。

云何が捨根の有報なる。捨根の報法なるを捨根の有報と名く。

云何が捨根の有法なる。捨根の善報なるを除く餘の捨根の善、不善の意觸の不苦不樂受なるを捨根の有報と名く。

【三二】內外。同上二の一二、內外門例釋。
【三三】二十二根等。同二の一三、有無報門。

云何が喜根の非受なる。喜根の外なるを喜根の非受と名く。

云何が喜根の非受なる。喜根の善、不善、若しは無記の我分の〔P.562a〕攝に非ざる意觸の樂受を喜根の非受と名く。

云何が憂根の受なる。憂根の內なるを憂根の受と名く。

云何が憂根の受なる。憂根の業法、煩惱所生の報にして我分の攝なる意觸の苦受を憂根の受と名く。

云何が憂根の非受なる。憂根の外なるを憂根の非受と名く。

云何が憂根の非受なる。憂根の善、不善、若しは無記にして我分の攝に非ざる意觸の苦受なるを憂根の非受と名く。

云何が捨根の受なる。捨根の內なるを捨根の受と名く。

云何が捨根の受なる。業報、煩惱所生の報にして我分の攝なる眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身・觸の不苦不樂受なるを捨根の受と名く。

云何が捨根の非受なる。捨根の外なるを捨根の非受と名く。

云何が捨根の非受なる。捨根の若しは無記・善・不善にして我分の攝に非ざる眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身觸の不苦不樂受なるを捨根の非受と名く。

云何が意根の受なる。意根の內なるを意根の受と名く。

云何が意根の受なる。意根の業報、煩惱所生の報にして我分の攝なる眼識乃至意識なるを意根の受と名く。

云何が意根の非受なる。意根の若しは外なるを意根の非受と名く。

云何か意根の非受なる。意根の善・不善・無記にして我分の攝に非ざる眼識乃至意識なるを意根の

云何が意根の聖なる。意根の信根相應なる意界、意識界を意根の聖と名く。

云何が意根の聖なる。意根の、學無學なるなり――學人の結・使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得たる若しは實の人、若しは趣の、若し意界・意識界を意根の聖と名く。

三〇 有漏・無漏、有愛・無愛、有求・無求、當取・非當取、有取・無取、有勝・無勝も亦是の如し。

三一 二十二根は幾か受、幾か非受なる。八は受、八は非受、六は二分にして、或は受、或は非受なり。

云何が八は受なる。眼根乃至命根を八は受なりと名く。

云何が八は非受なる。信根乃至已知根を八は非受なりと名く。

云何が六は二分にして、或は受、或は非受なる。樂根・苦根・喜根・憂根・捨根・意根を六は二分にして、或は受、或は非受なりと名く。

云何が樂根の受なる。樂根の內なるを樂根の受と名く。

云何が樂根の受なる。樂根の業報、煩惱所生の報にして我分の攝なる眼觸の樂受、耳・鼻・舌・身・觸の樂受を樂根の受と名く。

云何が樂根の非受なる。樂根の外の眼觸の樂受、耳・鼻・舌・身觸の樂受なるを樂根の非受と名く。

云何が苦根の受なる。苦根の內なるを苦根の受と名く。

云何が苦根の受なる。苦根の業報・煩惱所生の報にして我分の攝なる眼觸の苦受、耳・鼻・舌・身・觸の苦受なるを苦根の受と名く。

云何が苦根の非受なる。苦根の外の眼觸の苦受、耳・鼻・舌・身・觸の苦受なるを苦根の非受と名く。

云何が喜根の受なる。喜根の內なるを喜根の受と名く。

云何が喜根の受なる。喜根の業報、煩惱所生の報にして我分の攝なる、意觸の樂受を喜根の受と名く。

【三〇】有漏以下。同上二の五、有無漏門、同上二の六、有無愛、二の七、有無求、二の八、當非當取、二の九、有無取、二の一〇、有無勝諸門例釋。

【三一】二十二根。同上二の一一、受・非受門。

云何が喜根の聖なる。喜根の信根相應の意、觸の樂受なるを喜根の聖と名く。
云何か喜根の聖なる。喜根の學若しは無學なるなり——學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じ、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して結・使を離るゝ見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、卽ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得する、無學人の阿羅漢を得むと欲し、未だ得ざる聖法を得むと欲し、修道して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、卽ち阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは趣の、若し意觸の樂受なるを喜根の聖と名く。
云何が捨根の非聖なる。捨根の有漏なるを捨根の非聖と名く。
云何が捨根の非聖なる。捨根の非學非無學なる、眼觸の不苦・不樂受・耳・鼻・舌・身・意・觸の不苦不樂受なるを捨根の非聖と名く。
云何が捨根の聖なる。捨根の無漏なるを捨根の聖と名く。
云何が捨根の聖なる。捨根の信根相應なる意觸の不苦不樂受を捨根の聖と名く。
云何か捨根の聖なる。捨根の、學無學なるなり——學人の結・使を離れ、乃至、卽ち阿羅漢果を得する、若しは實の人、若しは趣の、若し意觸の不苦〔〇〕不樂受なるを捨根の聖と名く。
云何が意根の非聖なる。意根の有漏なるを意根の非聖と名く。
云何か意根の非聖なる。識受陰を意根の非聖と名く。
云何が意根の非聖なる。意根の非學非無學なる、眼識乃至意識を意根の非聖と名く。
云何が意根の聖なる。意根の無漏なるを意根の聖と名く。

云何が未知欲知根の非色なる。想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・不放逸・心捨を未知欲知根の非色と名く。

云何が知根の色なる。正語・正業・正命・正身除を知根の色と名く。

云何が知根の非色なる。想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・得・果・滅盡定を知根の非色と名く。

云何が已知根の色なる。正語・正業・正命・正身除を已知根の色と名く。

云何が已知根の非色なる。想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫〔七〕・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・得・果・滅盡定を已知根の非色と名く。

〔一七〕二十二根は幾か可見、幾か不可見なる。一切は不可見なり。

〔一八〕二十二根は幾か有對、幾か無對なる。七は有對、十五は無對なり。

云何が七の有對なる。眼根、乃至男根を七は有對なりと名く。

云何が十五は無對なる。命根乃至已知根を十五は無對なりと名く。

〔一九〕二十二根は幾か聖、幾か非聖なる。八は聖、十一は非聖、三は二分にして或は聖、或は非聖なり。

云何が八は聖なる。信根乃至已知根を八は聖なりと名く。

云何が十一は非聖なる。眼根乃至苦根及憂根を十一は非聖なりと名く。

云何が三は二分にして或は聖、或は非聖なる。喜根・捨根・意根を三は二分にして或は聖、或は非聖なりと名く。

云何が喜根の非聖なる。喜根の有漏なるを喜根の非聖と名く。

云何が喜根の非聖なる。喜根の非學非無學なる意觸の樂受なるを喜根の非聖と名く。

云何が喜根の聖なる。喜根の無漏なるを喜根の聖と名く。

【一七】二十二根等。同上二の二、可見不可見門。

【一八】二十二根。同上二の三、有無對門。

【一九】二十二根。同上二の四、聖非聖門。

見・解脫・方便・術焰〔P.561a〕光明・[一二]照炬・慧眼・慧力・擇法・正覺の不薄なる、是を慧根と名く。

云何が未知欲知根なる。[一三]堅信・堅法の人の若し法の聖・無漏にして根に非ざるも、根と名くることを得る、未知欲知根を除く、中の[一四]思・想・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・捨・正語・正業・正命・正身除、是を未知欲知根と名く。

云何が知根なる。見の學人の若し法の聖、無漏にして根に非ざるも、根と名くることを得る、知根を除く、中の想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身除、是を知根と名く。

云何が已知根なる。無學人、阿羅漢果の若し法の聖、無漏にして根に非ざるも、根と名くることを得る、已知根を除く、中の想・思・觸・思惟・覺・觀・解脫・悅・喜・心除・欲・不放逸・心捨・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身除、是を已知根と名く。

[一五]二十二根は[一六]幾か色、幾か非色なる。七は色、十一は非色、四は二分にして或は色、或は非色なり。

云何が七は色なる。根根・耳根・鼻根・舌根・身根・女根・男根を七は色なりと名く。

云何が十一は非色なる。命根・樂根・苦根・喜根・憂根・捨根・意根・信根・念根・定根・慧根を十一は非色なりと名く。

云何が四は二分にして或は色、或は非色なる。進根・未知欲知根・知根・已知根を四は二分にして或は色、或は非色なりと名く。

云何が進根の色なる。身の發、出度を進根の色と名く。

云何が進根の非色なる。進根の非色なる心の發、出度を進根の非色と名く。

云何が未知欲知根の色なる。正語・正業・正命・正身除を未知欲知根の色と名く。

【一二】照炬。宋・元・明・宮內省の四本は炬を燿に作る。

【一三】堅信等。以下三根については、毘曇部 3, P. 257 參照。

【一四】思・想。宋・元・明・宮內省の四本には上來及び下の諸文同樣「想・思」に作る。

【一五】二十二根等。以下、例によりて、第二段として如上二十二根の諸門分別を記す。

【一六】幾か等。その中の例の如き二の一、色非色門。

云何が勝の識なる。若しは識の善、若しは識の善法の報、若しは識の非報非報法にして適意なるを勝の識と名く。

云何が遠の識なる。若し識の相遠・極相遠・不近・不近邊なるを遠の識と名く。

云何が近の識なる。若しは識の相近・極相近・近邊なるを近識と名く。

云何が信根なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信、堅法なる、及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じて、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ得ざるを得むと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るゝ、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して即ち沙門果の須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得る、無學人の阿羅漢果を得むと欲し、未得の聖法を得むと欲し、修道して煩惱を離れ、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して即ち阿羅漢果を得る、若しは實に人の若しは趣の、若し信・入信・究竟入信・眞信・心淨なる、是を信根と名く。

云何が進根なる。學人の結・使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得せる若しは實の人、若しは趣の身・心の發・出度・堪忍・不退・勤・力・進・不離・不懈・不緩・不厭・惰進・進力・進覺・正進、是を進根と名く。

云何が念根なる。學人の結・使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得せる若しは實の人、若しは趣の若し念・憶念・微念・順念・住不忘・相續念・不失・不奪・不鈍・不鈍・[一〇]根念・念力・念覺・正念なる、是を念根と名く。

云何が定根なる。學人の結・使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得せる若しは實の人、若しは趣の、若し心の住・正住・專住・心一向・心一樂・心不亂・依念・獨定・定力・定覺・正定なる、是を定根と名く。

云何が慧根なる。學人の結・使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得せる若しは實の人、若しは趣の、若しは法中の擇・重擇・究竟擇・擇法・思惟・覺了して自相・他相・共相に達する、[一一]思持辯・進辯・慧・智

【一〇】根念。恐らく念根の誤記ならむ。

【一一】思持辯才。卷八、慧根の說明中も參照すべし。

――是を六識身と名く。
云何が七識界なる。眼・耳・鼻・舌・身識界・意界・意識界なり。
云何が眼識界なる。若し識の、眼根より生じ、色を境界として已生・今生・當生・不定なるを眼識界と名く。
云何が耳・鼻・舌・身識界なる。若し識の、身根より生じ、觸を境界として已生・今生・當生・不定なるを身識界と名く。
云何が意界なる。意の法を知り、法を念じて、若し初心の已生・今生・當生・不定なる、是を意界と名く。
云何が意識界なる。若し識の相似にして彼の境界を離れざる。及び餘の相似の[九]心・識の已生・今生・當生・不定なるのを意識界と名く。
――是を七識界と名く。
云何が過去の識なる。若し識の生じて已りて滅せるを過去の識と名く。
云何が未來の識なる。若し識の未生・未出なるを未來の識と名く。
云何が現在の識なる。若し識の生じて未だ滅せざるを現在の識と名く。
云何が內の識なる。若し識の受なるを內識と名く。
云何が外の識なる。若し識の非受なるを外の識と名く。
云何が麁の[一〇]識なる。若し識の欲界繫なるを麁の識と名く。
云何が細の識なる。若し識の色界繫・無色界繫、若しは不繫なるを細の識と名く。
云何が卑の識なる。若しは識の不善、若しは識の不善法の報、若しは識の非報非報法にして不適意なるを卑の識と名く。

【九】心・識。入品には識の字無し。

云何が男根なる。若し男・男性・男形・男相なる、是を男根と名く。

云何が命根なる。壽、是を命根と名く。

云何が命根なる。若し衆生の住するを命根と名く。

云何が〔已〕命根なる。[六]諸の衆生の、諸の衆生中にて、不終・不退・不喪・不死なる時、未だ過ぎずして行在あり、護持するを命根と名く。

云何が樂根なる。若し身のを受、眼觸の樂受、耳・鼻・舌・身・觸の樂受、樂界を樂根と名く。

云何が苦根なる。若し身の苦受、眼觸の苦受耳・鼻・舌・身・觸の苦受、苦界を苦根と名く。

云何が喜根なる。若し心の樂受、意觸の樂受、喜界を喜根と名く。

云何が憂根なる。若し心の苦受、意觸の苦受、憂界、是を憂根と名く。

云何が捨根なる。若し身・心の不苦不樂受、眼觸の不苦不樂受、耳・鼻・舌・身・意觸の不苦不樂受、捨界を捨根と名く。

云何が意根なる。意入を意根と名く。

云何が意根なる。識陰を意根と名く。

云何が意根なる。若し心・意・識・六識身・七識界を意根と名く。

云何が意根なる。若し識の過去・未來・現在・內・外・麁・細・卑・勝・遠・近なる、是を意根と名く。

[七]云何が六識身なる。眼識身・耳・鼻・舌・身・意識身なり。

云何が眼識身なる。眼に緣り、色に緣り、明に緣り、思惟に緣るの四緣を以て識の[八]生じ、已生・今生・當生・不定なる、是を眼識身と名く。

云何が耳・鼻・舌・身・意識身なる。意に緣り、法に緣り、思惟に緣るの三緣を以て、識の已生・今生・當生・不定なるを意識身と名く。

【六】諸の等。毘曇部 3, p.254 に於る本文、註解の兩方參照のこと。

【七】云何等。上の正式の解釋文に對する第二段の釋文なること、例の如し。

【八】生じ。宋・元・明・宮內省の四本には缺く。

卷の第五 〔P.56b〕

問分[一]根品　第五

問うて曰く、幾根かある。答へて曰く、[二]二十二根なり。何等か二十二根なる。眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・女根・男根・命根・樂根・苦根・喜根・憂根・舍根・意根・信根・進根・念根・定根・慧根・未知欲知根・知根・已知根なり。

云何が[三]眼根なる。眼入を眼根と名く。

云何が眼根なる。眼界を眼根と名く。

云何が眼根なる。若し眼の我分の攝にして、四大所造の淨色なるを眼根と名く。

云何が眼根なる。若し眼の我分の攝にして、四大所造の過去・未來・現在の淨色なるを眼根と名く。

云何が眼根なる。若し眼の我分の攝にして、色を已に見ると今見ると、當に見ると不定なる[四]と、若し眼の我分の攝にして、色光の已に來ると、今來ると、當に來ると、不定なるとを眼根と名く。

云何が眼根なる。若しは眼の我分の攝にして、色に已に對すると、今對すると、當に對すると、不定なると、若しは眼の我分の攝にして、色に已に對すると、今に對すると、當に對すると、不定なるとを眼根と名く。

若し眼の無礙にして、是れ眼、是れ眼入、是れ眼根、是れ眼界、是れ田、是れ物、是れ門、是れ藏、是れ世、是れ淨、是れ泉、是れ海、是れ沃燋、是れ洄澓、是れ瘡、是れ翳、是れ[五]目、是れ我分に入る、是れ此岸、是れ內入の眼にして色を見る、是を眼根と名く。

耳根・鼻根・舌根・身根も亦是の如し。

云何が女根なる。若し女・女性・女形・女相なる、是を女根と名く。

【一】根品。Indriya-varga——根とは則ち例の二十二根をいふもので、こゝにはまた上來の諸品同準に、この二十二根に關し、(一)解脫(二)諸門分別を二段の檢討をなすものである。詳細はすべて上諸品に準ず。

【二】二十二根。毘曇部 3, p. 250ff; 同 5, p. 228ff その外參照。

【三】眼根等。六根の解に關しては、前の入品中のその解を參照せよ。

【四】と。宋・元・明・宮內省の四本には「を眼根と名く」として一文を完結し、次文は新しく出發してゐる。但し、次文に對してはかゝることはない。

【五】目。宋・元・宮內省の三本には「日」に、また、明本には「因」に作るも、卷一中の註參照のこと。

云何が集の聖諦の色界繫なる。集の聖諦の色漏、有漏にして色行の愛なる、是を集の聖諦の色界繫と名く。

云何が集の聖諦の無色界繫なる。集の聖諦の無色漏、有漏にして無色行の愛なる、是を集の聖諦の無色界繫と名く。

[八〇] 四聖諦は幾か過去、幾か未來、幾か現在、幾か非過去非未來非現在なる。一は非過去非未來非現在、三に三分にして或は過去、或は未來、或は現在なり。

云何が一は非過去・非未來・非現在なる。滅の聖諦、是を一は非過去・非未來・非現在なりと名く。

云何が三は三分にして或は過去、或は未來、或は現在なる。苦の聖諦・集の聖諦・道の聖諦、是を三は三分にして或は過去、或は未來、或は現在なると名く。

云何が苦の聖諦の過去なる。苦の聖諦の生じ已りて滅せる苦の聖諦なる。是を苦の聖諦の過去と名く。

云何が苦の聖諦の未來なる。苦の聖諦の未生・未出の苦の聖諦なる、是を苦の聖諦の未來と名く。

云何が苦の聖諦の現在なる。苦の聖諦の生じて未だ滅せざる苦の聖 [P. 560c] 諦なる、是を苦の聖諦の現在と名く。

集の聖諦、道の聖諦も亦是の如し。

【八〇】四聖諦等。同四の二、三世及び非世門。

云何が二は三分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫なる。苦の聖諦・集の聖諦、是を二は三分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫なりと名く。

云何が苦の聖諦の欲界繫なる。苦の聖諦の欲漏、有漏なる眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、香入・味入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸麁・非姸麁、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、身の冷・熱・輕・重・麁・細・堅・軟・澁・滑、欲行心所起の去來・屈申・廻轉の身教、集聲・音句・言語の口教、外色の眼識が所知にして欲漏・有漏なる、[七五]爲れ外觸の身識が所知にして欲漏・有漏なる、身口の非戒無教、有漏の身口の戒無教、有漏の身進、受・想・思惟・觸・見・慧・解脱・無癡・順信・悔・不悔・悦・喜・心進・信・欲・不放逸・念・疑・怖・煩惱・使・生・老・死・命・結・眼識[七六]及び色の三二識、是を苦の聖諦の欲界繫と名く。

云何が苦の聖諦の色界〔一〇〕繫なる。苦の聖諦の色漏・有漏の眼入・耳入・身入、身の好色・端嚴・姸麁・嚴淨、身の好聲・衆妙聲・軟聲、身の冷・熱・輕・細・軟・滑、色行心所起の去來・屈申・廻轉の身教、集聲・音句・言語の口教、外色の眼識が所知にして色漏・有漏なる、若しは聲、若しは外觸の身識が所知にして色漏・有漏なる、[七七]有漏の身口の戒無教、[七八]有漏の身進、有漏の身除、受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脱・無癡・順信・悦・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・疑・煩惱・使・生・老・死・命・結・無想定・眼識・耳識・身識・意識、是を苦の聖諦の色界繫と名く。

云何が苦の聖諦の無色界繫なる。苦の聖諦の若し無色漏・有漏なる有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除、受・想・思・觸・思惟・見・慧・解脱・無癡・順信・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・疑・煩惱・使・生・老・死・命・結・意界・意識界、是を苦の聖諦の無色界繫と名く。

云何が集の聖諦の欲界繫なる。集の聖諦の欲漏、有漏にして欲行の[七九]愛なる、是を集の聖諦の欲界繫と名く。

【七五】爲れ。宋元明、宮内省の四本には「若しは」に作る。

【七六】及び等。「乃至意識」の誤傳に非ざるか。

【七七】有漏の。大正本等には脱す。宋元明、宮内省の四本に照らして今挿入す。

【七八】有漏。大正本等には、この上に今一、「有漏」の二字を記するも、前註の脱字がこゝに流入せるものと知るべし。

【七九】愛。宋元明、宮内省の四本には受に作る。下の三もすべて準ず。

入、身の非好色・非端嚴・非姸膚・非嚴淨、身の非好聲・非衆妙聲・非軟聲、身の非好香・非軟香・非適意香、身の甜・酢・苦・辛・醎・淡・涎・瘮身の冷・熱・麁・重・堅・澁、見斷因の心の所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、身口の非戒無敎、有漏の身進、受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑怖・煩惱・使・生・命・結、眼識乃至意識、是を苦の聖諦の見斷因と名く。

云何が苦の聖諦の思惟斷因なる。苦の聖諦の思惟斷、苦の聖諦の思惟斷法の報なる眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、身の非好色・非端嚴・非姸膚・非嚴淨、身の非好聲・非衆妙聲・非軟聲、身の非好香・非軟香・非適意香、身の甜・酢・醎・淡・苦・辛・涎・瘮・冷・熱・麁・重・堅・澁、思惟斷因の心の所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、身口の非戒無敎、有漏の身進、受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進〔七〕・信・欲・念・怖・煩惱・使・生・命・結、眼識乃至意識、是を苦の聖諦の思惟斷因と名く。

云何が苦の聖諦の非見斷非思惟斷因なる。苦の聖諦の善、苦の聖諦の善法の報、苦の聖諦の非報非報法なる眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、身の好色・端嚴・姸膚・嚴淨、身の好聲・衆妙聲・軟聲、身の好香・軟香・適意香、身の甜・酢・苦・辛・醎・淡・涎・瘮、身の冷・熱・輕・細・軟・滑、非見斷非思惟斷因の心の所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、外色の眼識が所知なる、外の聲・香・味、外觸の身識が所知なる、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、疑・煩惱・使・結を除く餘の受・想乃至無想定、眼識乃至意識、是を苦の聖諦の非見斷非思惟斷因と名く。

[七四]四聖諦は幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か不繫なる。二は不繫、二は三分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫なり。

云何が二は不繫なる。滅の聖諦、道の聖諦、是を二は不繫なりと名く。

【七四】四聖諦等。同上四の一、界繫門。

覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・煩惱・使・結・意界・意識界、是を苦の聖諦の思惟斷と名く。

云何が苦の聖諦の非見斷非思惟斷なる。苦の聖諦の善・無記なる眼入・耳・鼻・舌・入・身入、香入・味入・觸入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、若しは善心若しは無記心が所起の去來・屈申・迴轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、外色の眼識が所知なる、外聲の耳識が所知なる、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、疑・煩惱・使・結を除く餘の受・想乃至無想定、眼識乃至意識、是を苦の聖諦の非見斷非思惟斷と名く。

[七三]四聖諦は幾か見斷因、幾か思惟斷因、幾か非見斷 (P. 559a) 非思惟斷因なる。二は非見斷非思惟斷因、一は二分にして或は見斷因、或は思惟斷因、一は三分にして或は見斷因、或は思惟斷因、或は非見斷非思惟斷因なり。

云何が二は非見斷非思惟斷因なる。滅の聖諦、道の聖諦、是を二は非見斷非思惟斷因なりと名く。

云何が一は二分にして或は見斷因、或は思惟斷因なる。集の聖諦、是を一は二分にして或は見斷因、或は思惟斷因なりと名く。

云何が一は三分にして或は見斷因、或は思惟斷因、或は非見斷非思惟斷因なる。苦の聖諦、是を一は三分にして或は見斷因、或は思惟斷因、或は非見斷非思惟斷因なりと名く。

云何が集の聖諦の見斷因なる。集の聖諦の見斷の集の聖諦なる、是を集の聖諦の見斷因と名く。

云何が集の聖諦の思惟斷因なる。集の聖諦の思惟斷の集の聖諦なる、是を集の聖諦の思惟斷因と名く。

云何が苦の聖諦の見斷因なる。苦の聖諦の見斷、苦の聖諦の見斷法の報なる眼入・耳入、鼻・舌・身

【七三】四聖諦等。同上三の五、三斷因門。

起の去來・屈申・廻轉の身教、集聲・音句・言語の口教、外色の眼識が所知なる、外の聲・香・味、外觸の身識が所知なる、有漏の身進、受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・生・老・死・眼識乃至意識、是を苦の聖諦の非報非報法と名く。

〔七三〕四聖諦は幾か見斷、幾か思惟斷、幾か非見斷非思惟斷なる。二は非見斷非思惟斷、一は二分にして或は見斷、或は思惟斷、一は三分にして或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷なり。

云何が二は非見斷非思惟斷なる。滅の聖諦、道の〔〇〕聖諦、是を二は非見斷非思惟斷なりと名く。

云何が一は二分にして或は見斷、或は思惟斷なる。集の聖諦、是を一は二分にして或は見斷、或は思惟斷なりと名く。

云何が一は三分にして或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷なる。苦の聖諦、是を一は三分にして或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷なりと名く。

云何が集の聖諦の見斷なる。集の聖諦の若しは見斷にして集の聖諦と名くる、是を集の聖諦の見斷と名く。

云何が集の聖諦の思惟斷なる。集の聖諦の思惟斷にして集の聖諦と名くる、是を集の聖諦の思惟斷と名く。

云何が苦の聖諦の見斷なる。苦の聖諦の不善にして思惟斷に非ず、見斷なる煩惱心所起の去來・屈申・廻轉の身教、集聲・音句・言語の口教、身口の非戒無教有漏の身進、受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結・意界・意識界、是を苦の聖諦の見斷と名く。

云何が苦の聖諦の思惟斷なる。苦の聖諦の不善にして見斷に非ず、思惟斷なる煩惱心が所起の去來・屈申・廻轉の身教、集聲・音句・言語の口教、身口の非戒無教、有漏の身進　受・想・思・觸・思惟・

【七三】四聖諦等。同上三の四、三斷門。

觀地具足し、若しは智地し若しは觀解脫心して卽ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の正見乃至正定、是を道の聖諦の報と名く。

云何が道の聖諦の報法なる、道の聖諦の善報なる、是を道の聖諦の報法と名く。

云何が道の聖諦の報法なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の〔E〕寂滅を觀じ、實の如く苦・集・滅・道を觀じて未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離れたる、無學人の阿羅漢を得むと欲し、未だ得ざる聖法を得むと欲して修道する、若しは實の人若しは趣の正見乃至正定、是を道の聖諦の報法と名く。

云何が苦の聖諦の報なる。苦の聖諦の善報なる、眼入・耳入・舌入・身入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、身の好香・非好香・軟香・非軟香・適意香・非適意香、身の甜・酢・苦・辛・醎・淡・涎・澁、身の冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、受心の所起なる去來・屈申・迴轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、無貪・無恚を除く餘の受・想乃至心捨・怖・生・命・無想定・眼識乃至意識、是を苦の聖諦の報と名く。

云何が苦の聖諦の報法なる。苦の聖諦の有報なる、是を苦の聖諦の報法と名く。

云何が苦の聖諦の報法なる。苦の聖諦の善報なるを除く餘の苦の聖諦の善・不善なる、善心若しは不善心が所起の去來・屈申・迴轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、受・想乃至煩惱・使・結・無想定・意界・意識界、是を苦の聖諦の報法と名く。

云何が苦の聖諦の非報非報法なる。苦の聖諦の無記にして我分の攝に非ざる、非報非報法心が所

云何が道の聖諦の學なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信若しは堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じて、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し[七〇]修道して煩惱の離るゝ、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀地具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち沙門果の若しは須陀洹果、若しは斯陀含果、阿那含果なるを得せる若しは實の人若しは趣の正見乃至正定、是を道の聖諦の學と名く。

云何が道の聖諦の無學なる。無學人の阿羅漢を得むと欲し、未だ得ざるの聖法を得むと欲し、修道して觀地具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の正見乃至正定、是を道の聖諦の無學と名く。

[七一]四聖諦は幾か報、幾か報法、幾か非報非報法なる。一は報法、一は非報非報法、一は二分にして或は報、或は報法、一は三分にして或は報、或は報法、或は非報非報法なり。

云何が一は報法なる。集の聖諦、是を一は報法なりと名く。

云何が一は非報非報法なる。滅の聖諦、是を一は非報非報法なりと名く。

云何が一は二分にして或は報、或は報法なる。道の聖諦、是を一は二分にして或は報、或は報法なりと名く。

云何が一は三分にして或は報、或は報法、或は非報非報法なる。苦の聖諦、是を一は三分にして或は報、或は報法、或は非報非報法なりと名く。

云何が道の聖諦の報なる。道の聖諦の無報なる、是を道の聖諦の報と名く。

云何が道の聖諦の報なる。見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀地具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得せる、無學人の

【七〇】修道等。例へば卷の第一等には「煩惱を離れて修道し」と逆に記する。

【七一】四聖諦等。同上三の三、報等の三門。

云何が一は三分にして或は善、或は不善、或は無記なる。苦の聖諦、是を一は三分にして或は善、或は不善、或は無記なりと名く。

云何が苦の聖諦の善なる。苦の聖諦の修の善心の所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、乃至、心捨・無想定・意界・意識界、是を苦の聖諦の善と名く。

云何が苦の聖諦の不善なる。苦の聖諦の斷の受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進、若しは不善心の所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、身口の非戒無敎、有漏の身進、信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結・意界・意識界、是を苦の聖諦の不善と名く。

云何が苦の聖諦の無記なる。苦の聖諦の受、苦の聖諦の非報非報法の眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、香入・味入・觸入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、無記心の所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、外色の眼識が所知なる、外聲の耳識が所知なる、有漏の身進、受・想・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・生・老・死命、眼識乃至意識、是を苦の聖諦の無記と名く。

[六九]四聖諦は幾か學、幾か無學、幾か非學非無學なる。二は非學非無學、二は二分にして或は學、或は無學なり。

云何が二は非學非無學なる。苦の聖諦、集の聖諦、是を二は非學非無學なりと名く。

云何が二は二分にして或は學、或は無學なる。滅の聖諦、道の聖諦、是を二は二分にして或は學、或は無學なりと名く。

云何が滅の聖諦の學なる。須陀洹果・斯陀含果・阿那含果、是を滅の聖諦の學と名く。

云何が[P.557a]滅の聖諦の無學なる。阿羅漢果、是を滅の聖諦の無學と名く。

【六九】四聖諦等。同上三の二、三學門。

六四 斷・非斷も亦是の如し。

六五 四聖諦は幾か修、幾か非修なる。二は修、一は非修、一は二分にして或は修、或は非修なり。

云何が二は修なる。滅の聖諦、道の聖諦、是を二は修なりと名く。

云何が一は非修なる。集の聖諦、是を一は非修なりと名く。

云何が一は二分にして或は修、或は非修なる。苦の聖諦、是を一は二分にして或は修、或は非修なりと名く。

云何が苦の聖諦の修なる。苦の聖諦の善、善心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、受・想、乃至六六身除・無想定・意界・意識界、是を苦の聖諦の修と名く。

云何が苦の聖諦の非修なる。苦の聖諦の不善・無記の眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、香入、味入・觸入身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸醜・非姸醜、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、不善心・無記心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、外色の眼識が所知なる、外聲の耳識が所知なる、身口の非戒無敎、有漏の身進、受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・生・老・死・命・結、眼識乃至意識、是を苦の聖諦の非修と名く。

六七 四聖諦は幾か證、幾か非證なる。一切は證にして事の如く知見す。

六八 〔三〕四聖諦は幾か善、幾か不善、幾か無記なる。二は善、一は不善、一は三分にして或は善、或は不善、或は無記なり。

云何が二は善なる。滅の聖諦、道の聖諦、是を二は善なりと名く。

云何が一は不善なる。集の聖諦、是を一は不善なりと名く。

〔六四〕斷等。同上二の三四、斷非斷門例釋。
〔六五〕四聖諦等。同上二の三五、修非修門。
〔六六〕身除。大正本等には疑除に作るも非。宋元明、宮內省諸本によりて改む。
〔六七〕四聖等。同上二の三六、證非證門。
〔六八〕四等。同上三の一、三性門。

云何が一は無因なる。滅の聖諦、是を一は無因なりと名く。

[57] 有緒・無緒、有緣・無緣、有爲・無爲も亦是の如し。

[58] 四聖諦は幾か知、幾か非知なる。一切は知にして事の如く知見す。

[59] 四聖諦は幾か識、幾か非識なる。一切は識にして意識が事の如く識す。

[60] 四聖諦は幾か解、幾か非解なる。一切は解にして事の如く解す。

[61] 四聖諦は幾か了、幾か非了なる。一切は了にして事の如く了す。

[62] 四聖諦は幾か斷智知、幾か非斷智知なる。一は斷智知、二は非斷智知、一は二分にして或は斷智知、或は非斷智知なり。

云何が一は斷智知なる。集の聖諦、是を一は斷智知なりと名く。

云何が二は非斷智知なる。滅の聖諦、道の聖諦、是を二は非斷智知なりと名く。

云何が一は二分にして或は斷智知、或は非斷智知なる。苦の聖諦、是を一は二分にして或は斷智知、或は非斷智知なりと名く。

云何が苦の聖諦の斷智知なる。苦の聖諦の不善・不善心所起の去來・屈申・廻轉の身教、集聲・音句・言語の口教、身口の非戒無教、有漏の身進、受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結・意界・〔の〕意識界、是を苦の聖諦の斷智知と名く。

云何が苦の聖諦の非斷智知なる。苦の聖諦の善・無記の眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・香入・味入・觸入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲・軟聲・非軟聲、善心若しは無記心所起の去來・屈申・廻轉の身教、集聲・音句・言語の口教、外色の眼識が所知なる外聲の耳識が所知なる、有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除、疑・煩惱・使・結[63]〔を除く〕餘の受・想乃至無想定、眼識乃至意識、是を苦の聖諦の非斷智知と名く。

【五七】有緒等。同上二の二六、有無緒門、二の二七、有無緣門、二の二八、有無爲門例釋。

【五八】四聖諦等。同上二の二九、知非知門。

【五九】四聖諦。同上二の三〇、識非識門。

【六〇】四等。同上二の三一、解非解門。

【六一】四聖等。同上二の三二、了非了門。

【六二】四聖諦等。同上二の三三、斷智非斷智門。

【六三】除の字。何れの本にも缺くも、恐らく缺字なるべく、前の諸卷の相應下に準じて挿字す。

云何が苦の聖諦の不共業なる。苦の聖諦の隨業轉ならずして業と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる十色入、身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進・不定心の思、生・老・死・命・結なる、是を苦の聖諦の不共業と名く。

[五三]隨業轉・不隨業轉も亦是の如し。

[五四]四聖諦は幾か因、幾か非因なる。二は因、一は非因、一は二分にして或は因或は非因なり。

云何が[五五]二は因なる。集の聖諦、道の聖諦、是を二は因なりと名く。

云何が一は非因なる。滅の聖諦、是を一は非因なりと名く。

云何が一は二分にして或は因、或は非因なる。苦の聖諦、是を一は二分にして或は因、或は非因なりと名く。

云何が苦の聖諦の因なる。苦の聖諦の緣、苦の聖諦の非緣の有報、苦の聖諦の非緣の善報、四大善心・不善心が所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言〔P.557a〕語の口敎、地大・水・火・風大、身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除・受・想乃至煩惱・使・無想定・眼識乃至意識、是を苦の聖諦の因と名く。

云何が苦の聖諦の非因なる。苦の聖諦の非緣・無報・不共業の眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、香入・味入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、無記心が所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、外色の眼識が所知なる外聲の耳識が所知なる、四大を除く餘の觸入の所攝、及び有漏の身進・生・老・死・命、是を苦の聖諦の非因と名く。

[五六]四聖諦は幾か有因、幾か無因なる。三は有因にして一は無因なり。

云何が三は有因なる。苦の聖諦、集の聖諦、道の聖諦、是を三は有因なりと名く。

【五三】 隨業轉等。同上二の二三、隨業・不隨業轉門例釋。
【五四】 四聖諦等。同上二の二四、因非因門。
【五五】 二。大正本等、一に作るは非。宋元明、宮內省の四本等も。二に作る。
【五六】 四聖諦等。同上二の二五、有無因門。

是を一は三分にして或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應を說かずと名く。
云何が道の聖諦の業相應なる。道の聖諦の若し思相應の正見・正覺〔○〕・正進・[五一]正念・正定なる、是を道の聖諦の業相應と名く。
云何が道の聖諦の非業相應なる。道の聖諦の若し思相應に非ざる正語・正業・正命・正身進なる、是を道の聖諦の非業相應と名く。
云何が苦の聖諦の業相應なる。苦の聖諦の若し思相應の、思を除く受・想、乃至、煩惱・使・眼識乃至意識なる、是を苦の聖諦の業相應と名く。
云何が苦の聖諦の非業相應なる。苦の聖諦の若し思相應に非ざる十色入・初の四色・生乃至無想定なる、是を苦の聖諦の非業相應と名く。
云何が苦の聖諦の業相應非業相應を說かずなる。思、是を苦の聖諦の業相應非業相應を說かずと名く。
[五二]四聖諦は幾か共業、幾か非共業なる。二は共業、一は不共業、一は二分にして或は共業、或は非共業なり。
云何が二は共業なる。集の聖諦、道の聖諦、是を二は共業なりと名く。
云何が一は不共業なる。滅の聖諦、是を一は不共業なりと名く。
云何が一は二分にして或は共業、或は不共業なる。苦の聖諦、是を一は二分にして或は共業、或は不共業なりと名く。
云何が苦の聖諦の共業なる。苦の聖諦の若し隨業轉にして、業と共に生じ、共に住し、共に滅する。漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除・受・想・定心の思・觸乃至煩惱・使・無想定・眼識乃至意識なる、是を苦の聖諦の共業と名く。

【五一】正念。宋元明、宮內省四本には正命に作るも、今の大正本等の方、正しからん。
【五二】四聖諦等。同上二の二二、共非共業門。

四八 隨心轉・不隨心轉も亦是の如し。

四九 四聖諦は幾か業、幾か非業なる。二は非業、二は二分にして或は業、或は非業なり。

云何が二は非業なる。集の聖諦、滅の聖諦、是を二は非業なりと名く。

云何が二は二分にして或は業、或は非業なる。苦の聖諦、道の聖諦、是を二は二分にして或は業、或は非業なりと名く。

云何が苦の聖諦の業なる。善心・不善心・無記心が所起の去來・屈申・廻轉の身教、集聲・音句・言語の口教、身口の非戒無教、有漏の身口の戒無教、思、是を苦の聖諦の業と名く。

云何が苦の聖諦の非業なる。眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、香入・味入・觸入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、妍腐・非妍腐、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲・軟聲、非軟聲、外色の眼識が所知なる、外聲の耳識が所知なる、有漏の身進、有漏の身除、思を除く餘の受・想乃至無想定・眼識乃至意識、是を苦の聖諦の非業と名く。

云何が道の聖諦の業なる。正語・正業・正命、是を道の聖諦の業と名く。

云何が道の聖諦の非業なる。正見・正覺・正進・正念・正定、是を道の聖諦の非業と名く。

五〇 四聖諦は幾か業相應、幾か非業相應なる。一は業相應、一は非業相應、一は二分にして或は業相應、一は三分にして或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應を說かず。云何が一は業相應なる。集の聖諦、是を一は業相應なりと名く。

云何が一は非業相應なる。滅の聖諦、是を一は非業相應なりと名く。

云何が一は二分にして或は業相應、或は非業相應なる。道の聖諦、是を一は二分にして或は業相應、或は非業相應なりと名く。

云何が一は三分にして或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應を說かずなる。苦の聖諦、

【四八】隨心等。同上二の一九、隨心不隨心轉門例釋。
【四九】四聖諦等。同上二の二〇、業非業門。
【五〇】四聖諦等。同上二の二一、業相應非業相應門。

云何が苦の聖諦の非緣なる。心を除く餘の苦の聖諦の非心數なる十色入・初の四色・生、乃至、無想定、是を苦の聖諦の非緣と名く。

云何が道の聖諦の緣なる。道の聖諦の心數なる正見・正覺・正進・正念・正定、是を道の聖諦の緣と名く。

云何が道の聖諦の非緣なる。道の聖諦の若し非心數なる正語・正業・正命・正身進、是を道の聖諦の非緣と名く。

[四七]四聖諦は幾か共心、幾か不共心なる。一は共心、一は不共心、二は二分にして或は共心、或は不共心なり。

云何が一は共心なる。集の聖諦、是を一は共心なりと名く。

云何が一は不共心なる。滅の聖諦、是を一は不共心なりと名く。

云何が二は二分にして或は共心、或は不共心なる。苦の聖諦、道の聖諦、是を二は二分にして或は共心、或は不共心なりと名く。

云何が苦の聖諦の共心なる。苦の聖諦の若し隨心轉にして心と共に生じ、共に住し、共に滅する有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除、受・想乃至煩惱・使、是を苦の聖諦の共心と名く。

云何が苦の聖諦の不共心なる。苦の聖諦の不隨心轉にして心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる十色入・初の四色・生、乃至、無想定・眼識乃至意識、是を苦の聖諦の不共心と名く。

云何が道の聖諦の共心なる。道の聖諦の隨心轉にして心と共に生じ、共に住し、共に滅する正見乃至正定、是を道の聖諦の共心と名く。

云何が道の聖諦の不共心なる。道の聖諦の不隨心轉にして心と共に生ぜず、共に住せず〔七〕、共に滅せざる正語・正業・正命・正身進 是を道の聖諦の不共心と名く。

【四七】四聖諦等。同上二の一八、共不共心門。

心數なり。

云何が一は心數なる。集の聖諦、是を一は心數なりと名く。

云何が一は非心數なる。滅の聖諦、是を一は非心數なりと名く。

云何が二は二分にして或は心數、或は非心數なる。苦の聖諦、道の聖諦、是を二は二分にして或は心數、或は非心數なりと名く。

云何が苦の聖諦の心數なる。心を除く餘の苦の聖諦の緣なる受・想、乃至、煩惱・使、是を苦の聖諦の心數と名く。

云何が苦の聖諦の非心數なる。苦の聖諦の若し非緣なる、及び心・十色入・初の四色・生、乃至、無想定・眼識乃至意識、是を苦の聖諦の非心數と名く。

云何が道の聖諦の心數なる。若し道の聖諦の緣なる正見・正覺〔P.556a〕・正心進・正念・正定、是を道の聖諦の心數と名く。

云何が道の聖諦の非心數なる。若し道の聖諦の非緣なる正語・正業・正命・正身進、是を道の聖諦の非心數と名く。

四六 四聖諦は幾か緣、幾か非緣なる。一は有緣、一は非緣、二は二分にして或は有緣、或は無緣なり。

云何が一は有緣なる。集の聖諦、是を一は有緣なりと名く。

云何が一は無緣なる。滅の聖諦、是を一は無緣なりと名く。

云何が二は二分にして或は有緣、或は無緣なる。苦の聖諦、道の聖諦、是を二は二分にして或は有緣、或は無緣なりと名く。

云何が苦の聖諦の有緣なる。苦の聖諦の若し心數 及び心なる受・想、乃至、煩惱・使・眼識乃至意識なる、是を苦の聖諦の緣と名く。

【四六】四聖諦等。同上二の一七、緣非緣門。

四四 四聖諦は幾か心相應、幾か非心相應なる。一は心相應、一は非心相應、一は〔三〕二分にして或は心相應、或は非心相應、一は三分にして或は心相應、或は非心相應、或は心相應非心相應を說かず。

云何が一は心相應なる。集の聖諦、是を一は心相應なりと名く。

云何が一は非心相應なる。滅の聖諦、是を一は非心相應なりと名く。

云何が一は二分にして或は心相應、或は非心相應なる。道の聖諦、是を一は二分にして或は心相應、或は非心相應なりと名く。

云何が一は三分にして或は心相應、或は非心相應、或は心相應非心相應を說かずなる。苦の聖諦、是を一は三分にして或は心相應、或は非心相應、或は心相應非心相應と說かずと名く。

云何が道の聖諦の心相應なる。道の聖諦の若し心數――正見・正覺・正心進・正念・正定なる、是を道の聖諦の心相應と名く。

云何が道の聖諦の非心相應なる。道の聖諦の非心數――正語・正業・正命・正身進なる、是を道の聖諦の非心相應と名く。

云何が苦の聖諦の心相應なる。苦聖諦の若し心數たる受・想乃至煩惱・使なる、是を苦の聖諦の心相應と名く。

云何が苦の聖諦の非心相應なる。苦の聖諦の若し非心數――十色入、初の四色・生、乃至、無想定なる、是を苦の聖諦の非心相應と名く。

云何が苦の聖諦の心相應非心相應を說かずなる。眼識乃至意識、是を苦の聖諦の心相應非心相應を說かずと名く。

四五 四聖諦は幾か心數、幾か非心數なる。一は心數、一は非心數、一は二分にして或は心數、或は非

【四四】四聖諦は等。同上二の一五、心相應非相應門。

【四五】四聖諦等。同上二の一六、心數非心數門。

教、外色の眼識が所知なる、外聲の耳識が所知なる、有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除、無貪・無恚・癡・煩惱・使・結を除く餘の受・想乃至無想定、眼識乃至意識、是を苦の聖諦の無報と名く。

云何が道の聖諦の有報なる。道の聖諦の報法なる、是を道の聖諦の有報と名く。

云何が道の聖諦の有報なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じて、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して欲惱を離るゝ、無學人の阿羅漢を得むと欲し、未得の聖法を得むと欲して修道する若しは實の人若しは趣の若し正見・正覺・正語・正業・正命・正進・正念・正定なる、是を道の聖諦の有報と名く。

云何が道の聖諦の無報なる。道の聖諦の[四二]無報、是を道の聖諦の無報と名く。

云何が道の聖諦の無報なる。見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得せる、無學人たる阿羅漢の觀地具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち阿羅漢果を得せる、若しは實の人若しは趣の正見乃至正定、是を道の聖諦の無報と名く。

[四三]四聖諦は幾か心、幾か非心なる。三は非心、一は二分にして或は心、或は非心なり。

云何が三は非心なる。集の聖諦・滅の聖諦・道の聖諦、是を三は非心なりと名く。

云何が一は二分にして或は心、或は非心なる。苦の聖諦、是を一は二分にして或は心、或は非心なりと名く。

云何が苦の聖諦の心なる。眼識、乃至、意識、是を苦の聖諦の心と名く。

云何が苦の聖諦の非心なる。十色入・初の四色、受・想、乃至、無想定、是を苦の聖諦の非心と名く。

【四二】無報。宋元明、宮內省の四本には無を「若し」とし、無報ならぬ報とす。蓋し、これを正とせむか。

【四三】四聖諦等。同上二の一四、心非心門。

云何が苦の聖諦の非受なる。苦の聖諦の外なる、是を苦の聖諦の非受と名く。
云何が苦の聖諦の非受なる。苦の聖諦の善若しは不善、無記にして我分の攝に非ざる、若しは善心・不善心・非報非報法心所起の去來・屈申・迴轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、若しは外色の眼識が所知なる、聲・香・味、若しは外觸の身識が所知なる、身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、命を除く餘の受・想、乃至、無想定、眼識乃至意識、是を苦の聖諦の非受と名く。

[三九] 內・外も亦是の如し。

[四〇] 四聖諦は幾か有報、幾か無報なる。一は有報、一は無報、二は二分にして或は有報、或は無報なり。
云何が一は有報なる。集の聖諦、是を一は有報なりと名く。
云何が一は無報なる。滅の聖諦、是を一は無報なりと名く。
云何が二は二分にして或は有報、或は無報なる。苦の聖諦、道の聖諦、是を二は二分にして或は有報、或は無報なりと名く。
云何が苦の聖諦の有報なる。苦の聖諦の報法なる、是を苦の聖諦の有報と名く。
云何が苦の聖諦の有報なる。苦の聖諦の善の報を除く餘の苦の聖諦の善・不善、[四一]不善心所起の去來・屈申・迴轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、受・想乃至、煩惱・使・結・無想定・意界・意識界、是を苦の聖諦の有報と名く。
云何が苦の聖諦の無報なる。苦の聖諦の若しは報、苦の聖諦の非報非報法なる、眼入・耳・鼻・舌・身入、香入・味入・觸入、身の好色・非好[b]色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、無記心所起の去來・屈申・迴轉の身敎、集聲・音句・言語の口

[三九] 內・外。同上二の一二、內外門例釋。
[四〇] 四聖諦等。同二の一三、有無報門。
[四一] 不善心。大正本等には「不善・善心」に作る。宋元明、宮內省諸本に從つて暫く改む。

云何が一は二分にして或は有對、或は無對なる。苦の聖諦、是を一は二分にして或は有對、或は無對なりと名く。

云何が苦の聖諦の有對なる。十色入、是を苦の聖諦の有對と名く。

云何が苦の聖諦の無對なる。[三四]初の四色と受・想乃至無想定、眼識乃至意識、是を苦の聖諦の無對と名く。

[三五]四聖諦は幾か聖、幾か非聖なる。二は聖にして二は非聖なり。

云何が二は聖なる。滅の聖諦、道の聖諦、是を二は聖なりと名く。

云何が二は非聖なる。苦の聖諦、集の聖諦、是を二は非聖なりと名く。

[三六]有漏・無漏、有愛・無愛、有求・無求、當取・非當取、有取・無取、有勝・無勝も亦是の如し。

[三七]四聖諦は幾か受、幾か非受なる。三は非受、一は二分にして或は受、或は非受なり。

云何が三は非受なる。集の聖諦、滅の聖諦、道の聖諦、是を三は非受なりと名く。

云何が一は二分にして或は受、或は非受なる。苦の聖諦、是を一は二分にして或は受、或は非受なりと名く。

云何が苦の聖諦の受なる。苦の聖諦の若し內なる、是を苦の聖諦の受と名く。

云何が苦の聖諦の受なる。苦の聖諦の業法、煩惱所生の報にして我分の攝なる眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚(P.555a)・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、身の好香・非好香、軟香・非軟香、適意香・非適意香、身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・瘡、身の冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟　受心が所起の去來・屈申・迴轉の身教、集聲・音句・言語の口教、有漏の[三八]身進、受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・生・命、眼識乃至意識、是を苦の聖諦の受と名く。

【三四】初の四色。卷一中の註參照。

【三五】四聖諦等。同上二の四、聖非聖門。

【三六】有漏等。同上二の五、有無漏門、二の六、有無愛門、二の七、有無求門、二の八、當非當取門、二の九、有無取門、二の一〇、有無勝門等例釋。

【三七】四聖諦等。同上二の一一、受非受門。

【三八】身進。大正本には身集に作るも、宋元明、宮內省の四本等に從つて改む。

四聖諦は[三〇]幾か[三一]色、幾か非色なる。二は非色、二は二分にして或は色、或は非色なり。
云何が二は非色なる。集の聖諦、滅の聖諦、是を二は非色なりと名く。
云何が二は二分にして或は色、或は非色なる。苦の聖諦、道聖諦、是を二は二分にして或は色或は非色なりと名く。
云何が苦の聖諦の色なる。眼入・耳鼻・舌・身入、色入・聲・香・味・觸入、身口の非戒無教、有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除、是を苦の聖諦の色と名く。
云何が苦の聖諦の非色なる。受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脱・無貪・無恚・無癡・順信・悔・悦・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・疑・怖・煩惱・使・生・老・死・命・結・無想定・眼識乃至意識、是を苦の聖諦の非色と名く。
云何が道の〔○〕聖諦の色なる。正語・正業・正命・正身進を道の聖諦の色と名く。
云何が道の聖諦の非色なる。正見・正覺・正心進・正念・正定、是を道の聖諦の非色と名く、
[三二]四聖諦は幾か可見、幾か不可見なる。三は不可見、一は二分にして或は可見、或は不可見なり。
云何が三は不可見なる。集の聖諦、滅の聖諦、道の聖諦、是を三は不可見なりと名く。
云何が一は二分にして或は可見、或は不可見なる。苦の聖諦、是を一は二分にして或は可見、或は不可見なりと名く。
云何が苦の聖諦の可見なる。色入、是を苦の聖諦の可見と名く。
云何が苦の聖諦の不可見なる。色入を除く餘の苦の聖諦は不可見なり。是を苦の聖諦の不可見と名く。
[三三]四聖諦は幾か有對、幾か無對なる。三は無對、一は二分にして或は有對、或は無對なり。
云何が三は無對なる。集の聖諦、滅の聖諦、道の聖諦、是を三は無對なりと名く。

【三〇】幾等。以下、例に依る、四諦の諸門分別。その諸門はすべて上來に同ず。
【三一】色等。同上まづ二の一、色非色門。
【三二】四聖諦等。同上、二の二、可見、不可見門。
【三三】四聖諦等。同上二の三、有無對門。

云何が正覺なる。學人の結・使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の、若し覺・重覺・正憶想・攀緣心了、是を正覺と名く。

云何が正語なる。學人の結使を離れ、乃至〔己〕、即ち阿羅漢果を得せる、若しは實の人若しは趣の、若し[二八]口の四不善・不樂を盡く離れ、過を見、戒を愼むで作さず、容せず、根を斷じ盡して餘無く、彼の不善法中にて善を行ずるに堪ゆる、是を正語と名く。

云何が正業なる。學人の結使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の、若し[二九]身の三不善・不樂を遠離し、過を見、戒を愼むで作さず、容せず、根を斷じ盡して餘無く、彼の不善法中にて善を行ずるに堪ゆる、是を正業と名く。

云何が正命なる。學人の結使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の、身・口の不善を除き、餘の邪命・不樂を遠離し、過を見、戒を愼むで作さず、容せず、根を斷じ盡して餘無く彼の不善法中にて善を行ずるに堪ゆる、是を正命と名く。

云何が正進なる。學人の結使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の、若し身心の發し出度し、堪忍して退せず、勤めて力進して離せず、懈せず、緩せず、懶墮せざる、進根・進力・進覺、是を正進と名く。

云何が正念なる。學人の結使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得せる、若しは實の人若しは趣の若しは念・憶念・微念・愼念、住して忘せず、語の如くに念相續して不失・不奪・不鈍・不鈍根なる、念根・念力・念覺、是を正念と名く。

云何が正定なる。學人の結使を離れ、乃至、即ち阿羅漢果を得せる、若しは實の人若しは趣の若しは心の住・正住・專住・心一向・心一業・心不亂、意に依りて心の獨り定せる、定根・定力・定覺、是を正定と名く。

[二八] 口の四不善。十不善業道中の口に關する口惡即ち、妄語、兩舌、惡口、綺語のこと。

[二九] 身の三不善。同上十不善中の殺生、偸盜、邪婬の身に關する三不善のこと。

云何が阿那含果なる。五下分煩惱――身見・疑・戒盜・欲愛・瞋恚斷じ、聖道の一時に煩惱を倶斷して若し甘露を得せる、是を阿那含果と名く。

云何が阿羅漢果なる。若し思惟斷の色界・無色界の煩惱の斷じて餘無き、是を阿羅漢果と名く。

云何が阿羅漢果なる。思惟斷の色界・無色界の煩惱の斷じて餘無く、若し甘露を得せる、是を阿羅漢果と名く。

云何が阿羅漢果なる。若し一切の煩惱の盡きたる、是を阿羅漢果と名く。

云何が阿羅漢果なる。若し一切の煩惱の盡きて若し甘露を得せる、是を阿羅漢果と名く。

云何が苦滅道の聖諦なる。此の[二一]八支の聖道―正見・正覺[二二]・正語・正業・正命・[二三]正進・正念・正定、是を苦滅道の聖諦と名く。

是の苦滅道の聖諦は[二四]眞實、如爾にして如爾ならざるに非ず、異ならず、異物ならず、如來の正說の如く、聖人の諦なれば、是を聖諦と謂ふ。

云何が正見なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、實の如く苦・集・滅・道を觀じて、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、修道して煩惱を離るゝ、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、若しは觀地具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを得せる、無學人の阿羅漢を得むと欲し、未得の聖法を得むと欲して修道し、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の、若しは法中の[二五]擇・重澤・究竟澤・法澤・思惟・覺了・自相・他相・共相に達する、思持辯・觀進辯・慧・[二六]智見・解射・方便・術焰・光明・[二七]炤炬・慧眼・慧根・慧力・擇法・正覺・不癡、是を正見と名く。

【二一】八支の聖道。又、集異門足論中等參照。

【二二】正覺。新譯には正思惟。舊譯中にも又數々正志等と記す。

【二三】正進。同上正精進のこと。

【二四】眞實。大正本等には眞を苦に作る。宋元明、宮內省諸本及び上來の例にならつて改む。

【二五】擇。pravicaya。大正本等、以下すべて澤に作るも非で、今は宋元明、宮內省本等に準じ、改め讀む。

【二六】智見。宋元明、宮內省諸本は「知見」に作る。

【二七】炤炬。同上諸本には「照耀」に作る。

云何が須陀洹果なる。見斷の三煩惱——身見・疑・戒盜の斷じ、若し甘露を得せる、是を須陀洹果と名く。

云何が須陀洹果なる。若し見斷の三煩惱——身見・疑・戒盜の斷じ、聖道の一時に煩惱を倶斷せる、是を須陀洹果と名く。

云何が須陀洹果なる。見斷の三煩惱——身見・疑・戒盜の〔斷じ〕、聖道の一時に煩惱を倶斷して、若し甘露を得せる、是を須陀洹果と名く。

云何が斯陀含果なる。若し見斷の三煩惱——身見・疑・戒盜の斷じ、煩惱の思惟斷なる欲愛・瞋恚・煩惱の分斷せる、是を斯陀含果と名く。

云何が斯陀含果なる。若し見斷の三煩惱——身見・疑・戒盜〔斷じ〕、思惟斷の欲愛、瞋恚の分斷して若し甘露を得せる、是を斯陀含果と名く。

云何が斯陀含果なる。若し見斷の三煩惱——身見・疑・戒盜を聖道の一時に倶斷し、煩惱の思惟斷なる欲愛・瞋恚・煩惱の分斷も聖道の一時に欲惱を倶斷する、是を斯陀含果と名く。

云何が斯陀含果なる。見斷の三煩惱——身見・疑・戒盜を聖道の一時に倶斷し、煩惱の思惟斷なる欲愛、瞋恚・煩惱の分斷も聖道の一時に煩惱を倶斷して若し甘露を得せる、是を斯陀含果と名く。

云何が阿那含果なる。若し[二〇]五下分煩惱——身見・疑・戒盜・欲愛・瞋恚を斷ぜる、是を阿那含果と名く。

云何が阿那含果なる。五下分煩惱——身見・疑・戒盜・欲愛・瞋恚を斷じて若し甘露を得せる、是を阿那含果と名く。

云何が阿那含果なる。五下分煩惱——身見・疑・戒盜・欲愛〔P. 554c〕・瞋恚斷じ、聖道の一時に煩惱を倶斷せる、是を阿那含果と名く。

【二〇】五下分煩惱。新譯の五順下分結—集異門足論中等參照。

(11)因得あり。(12)彼得あり。(13)是の如きの得あり。(14)異得あり。(15)希望は當に有るべし。(16)希望は彼、當に有るべし。(17)希望は是の如く當に有るべし。(18)希望異、當に有るべし。——是を十八愛行の內所造と名く。

云何が十八愛行の外所造なる。世尊の說くが如し、(1)『是れ此に因りて此有り。(2)是れ彼に因りて而も有り。(3)是れ是の如きの因有り。(4)是れ異因有り。(5)是れ當に因有るべし。(6)是れ當に因有るべからず。(7)是れ我は當に有るべし。(8)是れ彼我、當に有るべし。(9)是れ是の如きの我當に有るべし。(10)是れ異我當に有るべし。(11)是れ因得なり。(12)是れ彼得なり。(13)是れ是の如きの得あり。(14)是れ異得あり。(15)是れ希望は當に有るべし。(16)是れ希望は彼、當に有るべし。(17)是れ希望は是の如く當に有るべし。(18)是れ希望の異當に有るべし。——是を十八愛行の外所造と名く。

云何が苦滅の聖諦なる。彼の愛の〔○〕餘り無く離して欲の滅し、捨出し、解脫し、宅無く、已に斷じて復、生ぜざる、是を苦滅の聖諦と名く。

云何が苦滅の聖諦なる。智緣盡、是を苦滅の聖諦と名く。

是の苦滅の聖諦は眞實・如爾にして如爾ならざるに非ず、異ならず、異物ならず、如來の正說の如く、聖人の諦なれば、是を聖諦と謂ふ。

云何が[一四]智緣盡なる。若し法の、智の盡くすとき彼の法の盡くる、是を智緣盡と名く。

云何が智緣盡なる。若し法の、[一五]聖道を得て滅するときに彼の法の滅する、是を智緣盡と名く。

云何が智緣盡なる。[一六]數は謂く知なり。彼の智の、若し法を知りて滅するときに彼の結の滅する、是を智緣盡と名く。

云何が智緣盡なる。[一七]四沙門果なり。須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果、是を智緣盡と名く。

云何が須陀洹果なる。若し見斷の三煩惱——身見・疑・[一八]戒盜の[一九]斷ずる、是を須陀洹果と名く。

【一四】智緣盡。已註の如く、新譯の擇滅のこと。Pratisaṃkhyānirodha。

【一五】聖道。前文に所謂智のことで、無漏慧をさす。

【一六】數。Saṃkhyā or pratisaṃkhyā をさすなるべし。

【一七】四沙門果。集異門足論第六—毘曇部一、初版 p. 200 f 等參照。

【一八】戒盜。新譯の戒禁取 Śīlavrataparāmarśa。

【一九】斷。原漢文には「若見斷三煩惱斷、身見・疑・戒盜」とあれど、和文上の便宜に從つて改む。下をも準ず。

漏・新近・愛・支網の能く苦根・希望・渇宅・耽忍を生じ、能く愛を廣創する、是を外愛と名く。

云〔七〕何が[八]欲愛なる。欲界法中の欲染・重欲染・憐不逆・樂・樂欲・可重・可究竟・可不足・不滿・著・重著・津漏・親近・愛・支網の能く苦根・希望・渇宅・耽忍を生じ、能く愛を廣創する、是を欲愛と名く。

云何が有愛なる。色界・無色界の法中の欲染乃至愛を廣創する、是を有愛と名く。

云何が非有愛なる。若し有人の、强言して、『我、若し杖怖・苦病等の逼る有らば、便ち、我が斷壞して非有ならむことを希望す』といふときの、彼の法中の欲染乃至愛を廣創する、是を非有愛と名く。

[九]云何が欲染なる。若しは欲・欲膩・欲喜・欲愛・欲支・欲耽・欲態・欲渇・欲燋・欲網、是を欲染と名く。

云何が色染なる。若し色欲・色膩・色喜・色愛・色支・色耽・色態・色渇・色燋・色網、是を色染と名く。

云何が無色染なる。若し無色欲・無色膩・無色喜・無色愛・無色支・無色耽・無色態・無色渇・無色燋・無色網、是を無色染と名く。

云何が[一〇]見染なる。若し見欲・見膩・見喜・見愛・見支・見耽・見態・見渇・見燋・見網、是を見染と名く。

[一一]云何が色愛なる。眼に色を知るときの彼の法中の若しは欲染、乃至、愛を廣創する、是を色愛と名く。

云何が聲・香・味・觸・法愛なる。意に法を知るときの彼の法中の若しは欲染、乃至、愛を廣創する、是を法愛と名く。

[一二]云何が十八愛行の內所造なる。世尊の說くが如し、『此に因りて (1)此有り。(2)彼に因りて而も有り。(3)是の如きの因有り。(4)異因有り。(5)[一三]常に因有るべし。(6)[一三]當に因有らざるべし。(7)我は當に有るべし。(8)彼の我は當に有るべし。(9)是の如きの我は當に有るべし。(10)異我は當に有るべし。

【八】欲愛等。次で三愛を解說す。

【九】云何等。更に四愛を解說す。

【一〇】見。dṛṣṭi。(diṭṭhi)。

【一一】云何が等。復、六愛を解說す。

【一二】云何等。三十六愛行を解說す。

【一三】常。明本等には當に作る。次の外の所造の下にも同じく記す。

る、是を愛別離と名く。
云何が所求不得苦なる。若し定んで得むことを欲・希望して未だ得ざる、若しは色・聲・香・味・觸・法ありて、衆生の、若し彼の重ずるものを得ず、不得・不貴・不自在・不自由にして、所欲を成就せざる、是を所求不得苦と名く。
云何が愛を除く總五受陰苦なる。色受陰、受・想・行・識受陰なり。
云何が色受陰なる。若し一切の色の有漏・[有]取なる、是を色受陰と名く。
云何が受・想・行・識受陰なる。若し一切の識の有漏・[有]取なる、是を識受陰と名く。
——是を愛を除く總五受陰苦と名く。
云何が苦集の聖諦なる。此の愛は復、喜欲有りて彼彼に染す。是を苦集の聖諦と名く。
云何が苦集の聖諦なる。二愛あり。內愛・外愛なり。是を苦集の聖諦と名く。
云何が苦集聖諦なる。三愛あり。欲愛・有愛・非有愛なり。是を苦集の聖諦と名く。
云何が苦集の聖諦なる。四染あり。欲染・色染・無色染・見染なり。是を苦集の聖諦と名く。
云何が苦集の聖諦なる。六愛あり。色愛・聲・香・味・觸・法愛なり。是を苦集の聖諦と名く。
云何が苦集の聖諦なる。三十六愛行あり。十八愛行の內所造、十八愛行の外所造なり。是を苦集の聖諦と名く。
此の苦集の聖諦は眞實如爾にして如爾ならざるに非ず、異ならず、異物ならず、如來正說の如く、聖人の諦の故に是を聖諦と謂ふ。
[七]云何が內愛なる。內法中の欲染・重欲染・憐不逆・樂・樂欲・可重・可究竟・可不足・不滿・著・重著・津漏・親近・愛・支網の能く苦根を生じ、希望・渴宅・耽忍を生じ、能く愛を廣創する、是を內愛と名く。
云何が外愛なる。外法中の欲染・重欲染・憐不逆・樂・樂欲・可重・可究竟・可不足・不滿・著・重著・津

【七】云何が等。右の苦集の聖諦の解說の文中に於ける諸句を再び釋說す。今はまづ、二愛を解く。

卷の第四 [P. 552c]

問分四聖諦品[一] 第四

問うて曰く、幾の聖諦かある。答へて曰く四あり。苦の聖諦、苦集の聖諦、苦滅の聖諦、苦滅道の聖諦なり。

云何が苦の聖諦なる。生苦・老苦・病苦・死苦・不愛會苦・愛別離苦・所求不得苦、愛を除く總五受陰苦――是を苦の聖諦と名く。此の苦の聖諦は眞實如爾にして、如爾ならざるに非ず、異ならず、異物ならず、如來正說の如く、聖人の諦の故に是を[二]聖諦と名く。

[三]云何が生なる。若し諸の衆生の、諸の衆中の生・重・生・增・長生・陰得・諸入、衆の和合、是を生と名く。

云何が老なる。若し諸の衆生の、諸の衆中の衰寢・戰掉・諸根の熟、命の減、[四]行の故、是を老と名く。

云何が病なる。若し諸の衆生の、諸の衆中の病・作病・客病・苦病、熱に因りて生ずるの病、冷に因り、風に因り、[五]自ら地時の變、諸大の增減・不等、業報の雜病、是を病と名く。

云何が死なる。若し諸の衆生の、諸の衆中の終・沒・死・時過・陰壞・捨身・變滅・離衆、是を死と名く。

云何が不愛會なる。若し不愛・不喜・不適意の若しは惡獸・毒虫等、若しは棘刺穢[P. 553a]陋・坑岸・山嶮等、若しは不適意の色・聲・香・味・觸・法ありて、衆生の若し彼と居り、親近し、不獨・共離・[六]不離・不異・相應・不別なる、是を不愛會と名く。

云何が愛別離なる。若し愛喜・適意の若しは父母・兄弟・姉妹・妻子、若しは親厚の諸臣・眷屬、適意の色・聲・香・味・觸・法ありて、衆生の若し彼と共に居らず、親近せず、獨・不離・異・不相應・別離せ

【一】 四聖諦品。Catvāryāriyasatyānivarga。(?)――如上三卷＝三品に準じ、四聖諦に關して解脫及び諸門分別をなす一段である。その組織その他に關しては、自ら、前の三品參照のこと。又、四聖諦そのものに關しては、集異門足論六(毘曇部一、p. 202)以下六足論中の關係解說下等をも見るべし。

【二】 聖諦。Ārya satya。(Ariya sacca)。

【三】 云何等。以下の解說については、中、三一、分別聖諦經＝M. 141 Saccavibhaṅgasutta 等參照。

【四】 行の故。分別聖諦經等に、「身曲脚戾、體重氣上、拄杖而行」などいふに照らし、暫く今の如く讀む。

【五】 自の地時。宋元明、宮內省諸本には「自他の時」と記す。

【六】 不離。大正本等、これを二回記するも、宋元明、宮內省四本等に順じて省く。

繫と名く。

云何が行陰の無色界繫なる。若し行陰の無色漏、有漏の思・觸・思惟・見・慧・解脫・無癡・順信・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・疑・煩惱・使・生・老・死・命・結なる、是を行陰の無色界繫と名く。

云何が行陰の不繫なる。行陰の聖・無漏の思・觸・思惟・覺・觀、見・慧・解脫・無癡・順信・悅・喜・心進・心除、信・欲・不放逸・念・定・心捨・得・果・滅盡定なる、是を行陰の不繫と名く。

云何が識陰の欲界繫なる。識陰の若し欲漏・有漏の眼識乃至意識なる、是を識陰の欲界繫と名く。

云何が識陰の色界繫なる。識陰の色漏・有漏の眼識・耳識・身識・意識なる、是を識陰の色界繫と名く。

云何が識陰の無色界繫なる。識陰の無色漏・有漏の意界・〔〇〕意識界なる、是を識陰の無色界繫を名く。

云何が識陰の不繫なる。識陰の聖無漏の意界・意識界なる、是を識陰の不繫と名く。

[六八] 五陰は幾か過去、幾か未來、幾か現在、幾か非過去非未來非現在なる。一切は三分にして或は過去、或は未來或は現在なり。

云何が色陰の過去なる。色陰の生じ已りて滅せる、是を色陰の過去と名く。

云何が色陰の未來なる。色陰の未生未出なる、是を色陰の未來と名く。

云何が色陰の現在なる。生じて未だ滅せざる色陰、是を色陰の現在と名く。

受陰・想陰・行陰・識陰も亦是の如し。

【六八】五陰等。同上四の二、三世等の門。

除なる、是を色陰の無色界繫と名く。
云何が色陰の不繫なる。色陰の若し聖・無漏の正語・正業・正命・正身進・正身除なる、是を色陰の不繫と名く。
云何が受陰の欲界繫なる。受陰の欲漏・有漏の眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の欲界繫と名く。
云何が受陰の色界繫なる。受陰の色漏〔b〕・有漏の眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の色界繫と名く。
云何が受陰の無色界繫なる。受陰の無色漏、有漏の意觸受なる、是を受陰の無色界繫と名く。
云何が受陰の不繫なる。受陰の聖・無漏の意觸受なる、是を受陰の不繫と名く。
云何が想陰の欲界繫なる。想陰の欲漏・有漏の色想、聲・香・味・觸・法想なる、是を想陰の欲界繫と名く。
云何が想陰の色界繫なる。想陰の色漏、有漏の色想、聲・香・味・觸・法想なる、是を想陰の色界繫と名く。
云何が想陰の無色界繫なる。想陰の無色漏、有漏の法想なる、是を想陰の無色界繫と名く。
云何が想陰の不繫なる。想陰の聖、無漏の法想なる、是を想陰の不繫と名く。
云何が行陰の欲界繫なる。若し行陰の欲漏、有漏の思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無貪・無恚・無癡・順信・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・不放逸・念・疑・怖・煩惱・使・生・老・命・結なる、是を行陰の欲界繫と名く。
云何が行陰の色界繫なる。若し行陰の色漏、有漏の思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・疑・煩惱・使・生・老・死・命・結・無想定なる、是を行陰の色界

法なる、疑・煩惱・使・結を除く餘の行陰の非見斷非思惟斷因なる、是を行陰の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が識陰の見斷因なる。識陰の若しは見〔p. 552 c〕斷、識陰の見斷法の報なる眼識乃至意識、是を識陰の見斷因と名く。

云何が識陰の思惟斷因なる。識陰の思惟斷、識陰の思惟斷法の報なる眼識乃至意識、是を識陰の思惟斷因と名く。

云何が識陰の非見斷非思惟斷因なる。識陰の善なる、識陰の善法の報なる、識陰の非報非報法なる眼識乃至意識、是を識陰の非見斷非思惟斷因と名く。

六七 五陰は幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か不繫なる。一切は四分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なり。

云何が色陰の欲界繫なる。色陰の欲漏・有漏の眼入、耳・鼻・舌・身入、香入・味入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、身の冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、欲行心所起の去來・屈申・迴轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、外色の眼識が所知にして欲漏・有漏なる、外聲・外觸の身識が所知にして欲漏・有漏なる、身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎・有漏の身進、是を色陰の欲界繫と名く。

云何が色陰の色界繫なる。色陰の色漏なる眼入・耳入、身の好色・端嚴・姸膚・嚴淨、身の好聲・衆妙聲・軟聲、身の冷・輕・細・軟・滑・色行心所起の去來・屈申・迴轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、外色の眼識が所知にして色漏・有漏なる、外聲・外觸の身識が所知にして色漏・有漏なる、有漏の身口の戒無敎、有漏の身除、是を色陰の色界繫と名く。

云何が色陰の無色界繫なる。色陰の無色漏・有漏なる、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進・有漏の身

【六七】五陰等。同上四の一、界繫門。

屈申・廻轉の身教、集聲・音句・言語の口教、外色の眼識が所知なる、外聲香・味、外觸の身識が所知なる、有漏の身口の戒無教、有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除、是を色陰の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が受陰の見斷因なる。受陰の若しは見斷、受陰の〔若しは〕見斷法の報なる眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の見斷因と名く。

云何が受陰の思惟斷因なる。受陰の思惟斷、受陰の思惟斷法の報なる眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の思惟斷因と名く。

云何が受陰の非見斷非思惟斷因なる。受陰の善、受陰の善法の報、受陰の非報非報法なる眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が想陰の見斷因なる。想陰の不善にして。思惟斷の〔煩惱〕相應に非ざる見斷の煩惱相應の法想なる、是を想陰の見斷因と名く。

云何が想陰の思惟斷因なる。想陰の不善にして見斷に非ざる思惟斷の煩惱相應の法想なる、是を想陰の思惟斷因と名く。

云何が想陰の非見斷非思惟斷因なる。若しは想陰の善なる、想陰の善法の報なる、想陰の若しは非報悲報法なる色想、聲・香・味・觸・法想、是を想陰の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が行陰の見斷因なる。行陰の見斷、行陰の見斷法の報なる思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・生・老・死・命・結、是を行陰の見斷因と名く。

云何が行陰の思惟斷因なる。行陰の若しは思惟斷、行陰の思惟斷法の報なる思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・生・命・結、是を行陰の思惟斷因と名く。

云何が行陰の非見斷非思惟斷因なる。行陰の[六六]若しは善なる、行陰の善法の報なる行陰の非報非報

【六六】若しは以下。原漢文には「行陰若行陰善善法報、行陰非報非報法」等とあるも、よく解るやうにする爲め、上來の文に照らして今の如く改め讀む。

斷非思惟斷なる、是を行陰の非見斷非思惟斷と名く。

云何が識陰の見斷なる。識陰の若し不善にして思惟斷に非ざる見斷の煩惱相應の意界・意識界なる、是を識陰の見斷と名く。

云何が識陰の思惟斷なる。識陰の不善にして見斷に非ざる思惟斷の煩惱相應の意界・意識界なる、是を識陰の思惟斷と名く。

云何が識陰の非見斷非思惟斷なる。識陰の善・無記なる眼識乃至意識、是を識陰の非見斷非思惟斷と名く。

[六五]五陰は幾か見斷因、幾か思惟斷因、幾か非見斷非思惟斷因なる。一切は三分にして、或は見斷因或は思惟斷因、或は非見斷非思惟斷因なり。

云何が色陰の見斷因なる。色陰の見斷法の報なる眼入、耳・鼻・舌・身入、身の非好色・非端嚴、非妍膚・非嚴淨、身の非好聲・非衆妙聲・非軟聲、身の非衆妙香・非好香・非軟香・非適意香、身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・瘂、身の冷・熱・麁・重・堅・澁、見斷因心が所起なる去來・屈申・迴轉の身教、集聲・音句・言語の口教、身口の非戒無教、有漏の身進、是を色陰の見斷因と名く。

云何が色陰の思惟斷因なる。色陰の思惟斷法の報なる眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、身の非好色・非端嚴・非妍膚・非嚴淨、身の非好聲・非衆妙聲・非軟聲、身の非好香・非軟香・非適意香、身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・瘂、身の冷・熱・麁・重・堅・澁、思惟斷因心が所起なる去來・屈申・迴轉の身教、集聲・音句・言語の口教、身口の非戒無教、有漏の身進、是を色陰の思惟斷因と名く。

云何が色陰の非見斷非思惟斷因なる。色陰の善、色陰の善法の報、色陰の非報非報法なる眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、身の好色・端嚴・妍膚・嚴淨、身の好聲・衆妙聲・軟聲、身の好香・軟香・適意香、身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・瘂、身の冷・熱・輕・細・軟・滑、非見斷非[六六]思惟斷因心が所起の去來・

【六五】五陰等。同上三の五、三斷因門。

を色陰の非見斷非思惟斷と名く。

云何が受陰の見斷なる。受陰の不善にして思惟斷に非ざる見斷の煩惱相應の意觸受、是を受陰の見斷と名く。

云何が受陰の思惟斷なる。受陰の不善にして見斷に非ざる思惟斷の煩惱相應の意觸受、是を受陰の思惟斷と名く。

云何が受陰の非見斷非思惟斷なる。受陰の善・無記の眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受、是を受陰の非見斷非思惟斷と名く。

云何が想陰の見斷なる。想陰の不善にして思惟斷に非ざる見斷の煩惱相應の法想、是を想陰の見斷と名く。

云何が想陰の思惟斷なる。想陰の不善にして見斷に非ざる思惟斷の煩惱相應の法想、是を想陰の思惟斷と名く。

云何が想陰の非見斷非思惟斷なる。想陰の善・無記の色想、聲・香・味・觸・法想、是を想陰の非見斷非思惟斷と名く。

云何が行陰の見斷なる。行陰の不善にして思惟斷に非ざる見斷の煩惱と[六四]一時倶斷なる思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結、是を行陰の見斷と名く。

云何が行陰の思惟斷なる。行陰の不善にして見斷に非ざる思惟斷の煩惱と、一時倶斷なる思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・結・使、是を行陰の思惟斷と名く。

云何が行陰の非見斷非思[七]惟斷なる。行陰の善・無記にして疑・煩惱・使・結を除く餘の行陰の非

【六四】一時倶斷。卷一、「法入の見斷」中を參照せよ。

定なる、是を行陰の報法と名く。

云何が行陰の非報非報法なる。行陰の無記にして我分の攝に非ざる思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・生・老・死なる、是を行陰の非報非報法と名く。

云何が識陰の報なる。識陰の若しは受、識陰の善の報なる眼識乃至意識なる、是を識陰の報と名く。

云何が識陰の報法なる。識陰の有報なる、是を識陰の報法と名く。

云何が識陰の報法なる。識陰の善の報なるを除く餘の識陰の善・不善の意界・意識界なる、是を識陰の報法と名く。

云何が識陰の非報非報法なる。識陰の無記にして我分の攝に非ざる眼識乃至意識なる、是を識陰の非報非報法と名く。

[六三]五陰は幾か見斷、幾か思惟斷、幾か非見斷非思惟斷なる。一切は三分にして或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷なり。

云何が色陰の見斷なる。色陰の不善にして思惟斷に非ざる見斷の煩惱心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、身口の非戒無敎、有漏の身進、是を色陰の見斷と名く。

云何が色陰の思惟斷なる。色陰の不善にして見斷に〔p. 551 a〕非ざる思惟斷の煩惱心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、身口の非戒無敎、有漏の身進、是を色陰の思惟斷と名く。

云何が色陰の非見斷非思惟斷なる。色陰の善・無記の眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、香入・味入・觸入、身の好色・非好色、端嚴、非端嚴、姸膚・非姸膚、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、善心・無記心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、外の色の眼識が所知なる、外聲の耳識が所知なる、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除、是

【六三】五陰等。同上三の四、三斷門。

去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、若しは外色の眼識が所知なる、若しは外の聲・香・味・觸、若しは外觸の身識が所知なる、有漏の身進、是を色陰の非報非報法と名く。

云何が受陰の報なる。受陰の若しは受、受陰の善の報なる眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の報と名く。

云何が受陰の報法なる。受陰の有報なる、是を受陰の報法と名く。

云何が受陰の報法なる。受陰の善の報なるを除く餘の受陰の善・不善の意觸受、是を受陰の報法と〔〇〕名く。

云何が受陰の非報非報法なる。受陰の無記にして我分の攝に非ざる眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受、是を受陰の非報非報法と名く。

云何が想陰の報なる。想陰の若しは受、想陰の善の報なる色想、聲・香・味・觸・法想なる、是を想陰の報と名く。

云何が想陰の報法なる。想陰の若し有報なる、是を想陰の報法と名く。

云何が想陰の報法なる。想陰の善の報なるを除く餘の想陰の善・不善の法想なる、是を想陰の報法と名く。

云何が想陰の非報非報法なる。想陰の無記にして我分の攝に非ざる色・聲・香・味・觸・法想なる、是を想陰の非報非報法と名く。

云何が行陰の報なる。行陰の受、行陰の善の報なる、無貪・無恚を除く餘の思、乃至、心捨・怖・生・老・死・命・無想定・得・果・滅盡定なる、是を行陰の報と名く。

云何が行陰の報法なる。行陰の有報なる、是を行陰の報法と名く。

云何が行陰の報法なる。行陰の善の報なるを除く餘の行陰の善・不善の思、乃至、煩惱・使・結・二

し意界・意識界なる、是を識陰の學と名く。

云何が識陰の無學なる。識陰の若し聖にして學に非ざる、是を識陰の無學と名く。

云何が識陰の無學なる。識陰の無學の信根相應の意界・意識界なる、是を識陰の無學と名く。

云何が識陰の無學なる、無學人の〔七〕阿羅漢を得むと欲し、乃至、即ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の若し意界・意識界なる、是を識陰の無學と名く。

云何が識陰の非學非無學なる。識陰の非聖の識受陰なる眼識乃至意識、是を識陰の非學非無學と名く。

〔六三〕五陰は幾か報、幾か報法、幾か非報非報法なる。一切は三分にして或は報、或は報法、或は非報非報法なり。

云何が色陰の報なる。色陰の若しは受、色陰の善の報なる眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、身の好香・非好香、軟香・非軟香、適意香・非適意香、身の甜・酢・苦・辛・醎・淡・涎・癃、身の冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、受心が所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除なる、是を色陰の報と名く。

云何が色陰の報法なる。色陰の若し有報なる、是を色陰の報法と名く。

云何が色陰の報法なる。色陰の善の報なるを除く餘の色陰の善・不善、若しは善心若しは不善心が所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進・有漏の身除・正語・正業・正命・正身進・正身除、是を色陰の報法と名く。

云何が色陰の非報非報法なる。色陰の若し無記にして我分の攝に非ざる、非報非報法心が所起の

【六三】五陰等。同上三の三、報、報法、非二法門。

人若しは趣の法想なる、是を想陰の無學と名く。

云何が想陰の非學非無學なる。想陰の非聖の想受陰なる色想、聲・香・味・觸・法想なる、是を想陰の非學非無學と名く。

云何が行陰の學なる。行陰の聖にして無學に非ざる、是を行陰の學と名く。

云何が行陰の學なる。[六二]行陰の學の信根相應の心數法、若しは法の非緣・無漏、行陰の所攝にして無學に非ざる、是を行陰の學と名く。

云何が行陰の學なる。學人の結・使を離れ、乃至、卽ち阿那含果を得せる若しは實の人若しは趣の若し思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・得・果・滅盡定なる、是を行陰の學と名く。

云何が行陰の無學なる。行陰の聖にして學に非ざる、是を行陰の無學と名く。

云何が行陰の無學なる。無學の信根相應の心數法、若しは法の非緣・無漏、行陰の所攝にして學に非ざる、是を行陰の無學と名く。

云何が行陰の無學なる。無學人の阿羅漢を得むと欲し、乃至、卽ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・信順・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・得・果・滅盡定なる、是を行陰の無學と名く。

云何が行陰の非學非無學なる。行陰の若し非聖の受陰なる思乃至無想定、是を行陰の非學非無學と名く。

云何が識陰の學なる。識陰の若し聖にして無學に非ざる、是を識陰の學と名く。

云何が識陰の學なる。識陰の學の信根相應の意界・意識界なる、是を識陰の學と名く。

云何が識陰の學なる。學人の結・使を離れ、乃至、阿那含果を得せる若しは實の人若しは趣の若

[六二] 行陰の學の。宋元明、宮內省、聖護藏等諸本、何れも缺く。

正業・正命・正身進・正身除、是を色陰の無學と名く。
云何が色陰の非學非無學なる。色陰の非聖の色受陰なる十色入と初の四色と、是を色陰の非學非無學と名く。
云何が受陰の學なる。受陰の聖にして無學に非ざる、是を受陰の學と名く。
云何が受陰の學なる。受陰の學の信根相應の意觸受なる、是を受陰の學と名く。
云何が受陰の學なる。學人の結・使を離れ、乃至、阿那含果を證せる若しは實の人若しは趣の意觸受なる、是を受陰の學と名く。
云何が受陰の無學なる。受陰の聖にして學に非ざる、是を受陰の無學と名く。
云何が受陰の無學なる。受陰の無學の信根相應の意觸受なる、是を受陰の無學と名く。
云何が受陰の無學なる。無學人の阿羅漢を得むと欲し、乃至、卽ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の意觸受なる、是を受陰の無學と名く。
云何が受陰の非學非無學なる。受陰の非聖の受陰なる眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の非學非無學と名く。
云何か想陰の學なる。想陰の聖にして無學に非ざる、是を想陰の學と名く。
云何が想陰の學なる。想陰の學の信根相應の法想なる、是を想陰の學と名く。
云何が想陰の學なる。學人の結・使を離れ、乃至、卽阿那含果を得せる若しは實の人若しは趣の法想なる是を想陰の學と名く。
[p. 550 a] 云何が想陰の無學なる。想陰の聖にして學に非ざる、是を想陰の無學と名く。
云何が想陰の無學なる。想陰の無學の信根相應の法想なる、是を想陰の無學と名く。
云何が想陰の無學なる。無學人の阿羅漢を得むと欲し、乃至、卽ち阿羅漢果を得せる若しは實の

云何が行陰の善なる。行陰の修の思、乃至、心捨・無想定・得・果・滅盡定なる、是を行陰の善と名く。

云何が行陰の不善なる。行陰の斷の思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脱・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結なる、是を行陰の不善と名く。

云何が行陰の無記なる。行陰の受、行陰の非報非報法なる思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脱・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・生・老・死・命なる、是を行陰の無記と名く。

云何が識陰の善なる。識陰の修の意界・意識界なる、是を識陰の善と名く。

云何が識陰の不善なる。識陰の斷の意界・意識界なる、是を識陰の不善と名く。

云何が識陰の無記なる。識陰の受、識陰の非報非報法なる眼識乃至意識、是を識陰の無記と名く。

[六〇] 五陰は幾か學、幾か無學、幾か非學非無學なる。一切は三分にして或は學、或は無學、或は非學非無學なり。

云何が色陰の學なる。色〔〇〕陰の若し聖にして無學に非ざる、是を色陰の學と名く。

云何が色陰の學なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信若しは堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、實の如く苦・集・滅・道を觀じて未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、煩惱を離れて修道する、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脱心して即ち沙門果の若しは須陀洹果若しは斯陀含果若しは阿那含果なるを證する、若しは實の人若しは趣の正語・正業・正命・正身進・正身除なる、是を色陰の學と名く。

云何が色陰の無學なる。色陰の若し聖にして學に非ざる、是を色陰の無學と名く。

云何が色陰の無學なる。無學人の阿羅漢を得むと欲し、未だ得ざる聖法を得むと欲し、修道して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脱心して即ち阿羅漢果を得する若しは實の人若しは趣の正語・

【六〇】五陰等。同上三の二、三學門。

云何が識陰の非修なる。識陰の不善・無記の眼識乃至意識なる、是を識陰の非修と名く。

[五八]五陰は幾か證幾か非證なる。一切は證にして事の如く知見す。

[五九]五陰は幾か善、幾か不善、幾か無記なる。一切は三分にして或は善、或は不善、或は無記なり。

云何が色陰の善なる。若し色陰の修の善心が所起なる去來、屈申・迴轉の身教、集聲・音句・言語の口教、有漏の身口の戒無教、有漏の身・進有漏の身除、正語・正業・正命・正身除なる、是を色陰の善と名く。

云何が色陰の不善なる。若し色陰の斷の不善心が所起なる去來・屈申・迴轉の身教〔七〕集聲・音句・言語の口教、身口の非戒無教、有漏の身進なる、是を色陰の不善と名く。

云何が色陰の無記なる。色陰の受、色陰の非報非報法なる眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・香入・味入・觸入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、無記心が所起なる去來・屈申・迴轉の身教、集聲・音句・言語の口教、若しは外色の眼識が所知なる、外聲の耳識が所知なる、有漏の身進なる、是を色陰の無記と名く。

云何が受陰の善なる。若し受陰の修の意觸受なる、是を受陰の善と名く。

云何が受陰の不善なる。受陰の斷の意觸受なる、是を受陰の不善と名く。

云何が受陰の無記なる。受陰の受、受陰の若しは非報非報法なる眼識受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の無記と名く。

云何が想陰の善なる。若し想陰の修の法想なる、是を想陰の善と名く。

云何が想陰の不善なる。想陰の斷の法想なる、是を想陰の不善と名く。

云何が想陰の無記なる。想陰の受、想陰の非報非報法なる色想・聲・香・味・觸・法想、是を想陰の無記と名く。

【五八】五陰等。同上三の六三、證非證門。
【五九】五陰等。同上三の一、三性門。

五七 五陰は幾か修幾か非修なる。一切は二分にして或は修或は非修なり。

云何が色陰の修なる。色陰の若し善心所起の去來、屈申・廻轉の〔p.549n〕身教、集聲・音句・言語の口教、有漏の身口の戒無教、有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身除なる、是を色陰の修と名く。

云何が色陰の非修なる。色陰の不善・無記の眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・香入・味入・觸入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、妍膚・非妍膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、不善心・無記心が所起の去來・屈申・廻轉の身教、集聲・音句・言語の口教、若しは外色の眼識が所知なる・若しは外聲の耳識が所知なる、身口の非戒無教・有漏の身進なる、是を色陰の非修と名く。

云何が受陰の修なる。受陰の善の意觸受なる、是を受陰の修と名く。

云何が受陰の非修なる。受陰の不善・無記の眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の非修と名く。

云何が想陰の修なる。想陰の善の法想なる、是を想陰の修と名く。

云何が想陰の非修なる。想陰の不善・無記の色想、聲・香・味・觸・法想なる、是を想陰の非修と名く。

云何が行陰の修なる。行陰の善の思、乃至、心捨・無想定・得・果・滅盡定なる、是を行陰の修と名く。

云何が行陰の非修なる。行陰の不善・無記の思・觸・思惟・覺・觀、見・慧・解脱・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・生・老・死・命なる、是を行陰の非修と名く。

云何が識陰の修なる。識陰の善の意界・意識界なる、是を識陰の修と名く。

【五七】五陰等。同上二の三五、修非修門。

言語の口教、身口の非戒無教、有漏の身進なる、是を色陰の斷智知と名く。

云何が色陰の非斷智知なる。色陰の善・無記の眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・香入・味入・觸入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、善心若しは無記心が所起の去來・屈申・迴轉の身教、集聲・音句・言語の口教、若しは外色の眼識が所知なる、若しは外聲の耳識が所知なる、有漏の身口の戒無教、有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除なる、是を色陰の非斷智知と名く。

云何が受陰の斷智知なる。受陰の不善の思・觸・思惟・覺・觀、見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結、是を受陰の斷智知と名く。

云何が受陰の非斷智知なる。受陰の善・無記の眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の非斷智知と名く。

云何が想陰の斷智知なる。想陰の不善の法想なる、是を想陰の斷智知と名く。

云何が想陰の非斷智知なる。想陰の善・無記の色想、聲・香・味・觸・法想なる、是を想陰の非斷智知と名く。

云何が行陰の斷智知なる。行陰の不善の思・觸・思性・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結なる、是を行陰の斷智知と名く。

云何が行陰の非斷智知なる。行陰の善・無記なる疑・煩惱・使・結を除く餘の行陰の非斷智知なる、是を行陰の非斷智知と名く。

云何が識陰の斷智知なる。識陰の不善の意界なる、是を識陰の斷智知と名く。

云何が識陰の非斷智知なる。識陰の善・無記の眼識乃至意識なる、是を識陰の非斷智知と名く。

[五六] 斷・非斷も亦是の如し。

【五六】斷等。同上二の三四、斷非斷門例釋。

りと名く。

云何が色陰の因なる。色陰の若し報法なる、是を色陰の因と名く。

云何が色陰の因なる。色陰の善若しは不善及び四大、〔若しは〕善心若しは不善心が所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、地・水・火・風大、身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正精進・正身除、是を色陰の因と名く。

云何が色陰の非因なる。若し色陰の報、色陰の非報非報法なる眼入、耳・鼻・舌・入・身入、香・味入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴・姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、無記心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、若しは外色の眼識が所知なる、若しは外聲の耳識が所知なる、四大を除く餘の觸入の所攝、有漏の身進、是を色陰の非因と名く。

云何が行陰の因なる。行陰の緣、行陰の非緣の有報なる、得・果を除く餘の行陰の非緣の善報の思、乃至、煩惱・使・結・二定、是を行陰の因と名く。

云何が行陰の非因なる。行陰の[四九]緣・無報・不共業なる生・老・死・命・得・果、是を行陰の非因と名く。

[五〇]五陰は幾か有因、幾か無因なる。一切は有因なり。

[五一]一切は[五二]有結、一切は有緣、一切は有爲なり。

[五三]五陰は幾か知、幾か非知なる。一切は知にして事の如く知見す。

[五四]一切は識にして意識が事の如く識す。一切は解にして事の如く知見す。一切は了にして事の如く知見す。

[五五]五陰は幾か斷智知、幾か非斷智知なる。一切は二分にして或は斷〔[illegible]〕智知或は非斷智知なり。

云何が色陰の斷智知なる。色陰の不善なる、不善心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・

【四九】緣。前卷の法界の非因の下には「非緣」とある。對檢すべし。

【五〇】五陰等。同上二の二五、有無因門。

【五一】一切は等。以下同上二の二六、有無諸門、二の二七、有無緣門、同上二の二八、有無爲の答のみを記す。

【五二】有結。前二品相應下及び今の宋元明及び宮內省の四本には「有緒」と記す。

【五三】五陰等。同上二の二九、知非知門。

【五四】一切は等。又、以下同上の三〇識非識門、三一、解非解門、三二、了非了門を例釋し、その答のみを出す。（前二品には各、門も記する）。

【五五】五陰等。同上二の三三、斷非斷智知門。

云何が行陰の非業相應なる。行陰の若し思相應に非ざる生乃至滅盡定なる、是を行陰の非業相應と名く。

云何が行陰の業相應非業相應を說かずなる。思、是を行陰の業相應非業相應を說かずと名く。

[四六] 五陰は幾か共業、幾か不共業なる。三は共業、二は二分にして或は共業或は不共業なり。

云何が三は共業なる。受陰・想陰・識陰、是を三は共業なりと名く。

云何が二は二分にして或は共業、或は不共業なる。色陰・行陰、是を二は二分にして或は共業、或は不共業なりと名く。

云何が色陰の共業なる。色陰の若し隨業轉にして、業と共に生じ、共に住し、共に滅する有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除なる、是を色陰の共業と名く。

云何が色陰の不共業なる。色陰の若し隨業轉ならずして、業と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる十色入、初の三色なる、是を色陰の不共業と名く。

云何が行陰の共業なる　行陰の若し隨業轉にして、業と共に生じ、共に住し、共に滅する、又定心の思、觸乃至煩惱・使・無想定・滅盡定なる、是を行陰の共業と名く。

云何が行陰の不共業なる。若し〔〇〕行陰の隨業轉ならずして、業と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる不定心の思、生・老・死・命結・得・果なる、是を行陰の不共業と名く。

[四七] 隨業轉・不隨業轉も亦是の如し。

[四八] 五陰は幾か因幾か非因なる。三は因、二は二分にして或は因、或は非因なり。

云何が三因なる。受陰・想陰・識陰、是を三は因なりと名く。

云何が二は二分にして或は因、或は非因なる。色陰・行陰、是を二は二分にして或は因或は非因な

【四六】五陰等。同上二の二二、共不共業門。

【四七】隨業轉等。同上二の二三、隨業不隨業轉門例釋。

【四八】五陰等。同上二の二四、因非因門。

[四三] 隨心轉・不隨心轉も亦是の如し。

[四四] 五陰は幾か業、幾か非業なる。三は非業、二は二分にして或は業或は非業なり。

云何が三は非業なる。受陰・想陰・識陰、是を三は非業なりと名く。

云何が二は二分にして或は業或は非業なる。色陰・行陰、是を二は二分にして或は業或は非業なりと名く。

云何が色陰の業なる。若しは善心若しは不善心若しは無記心所起の去來、屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、正語・正業・正命、是を色陰の業と名く。

云何が色陰の非業なる。眼入・耳入、鼻・舌・身入、香・味・觸入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲〔p.548a〕・非軟聲、若しは外色の眼識が所知なる、若しは外聲の耳識が所知なる、有漏の身進、有漏の身除、正身進・正身除、是を色陰の非業と名く。

云何が行陰の業なる。思、是を行陰の業と名く。

云何が行陰の非業なる。思を除く除の行陰、是を行陰の非業と名く。

[四五] 五陰は幾か業相應、幾か非業相應なる。三は業相應、一は非業相應、一は三分にして或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應を說かず。

云何が三は業相應なる。受陰・想陰・受陰、是を三は業相應なりと名く。

云何が一は非業相應なる。色陰、是を一は非業相應なりと名く。

云何が一は三分にして或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應を說かさる。行陰、是を一は三分にして或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應說かずと名く。

云何が行陰の業相應なる。行陰の若し思相應の觸乃至煩惱・使なる、是を行陰の業相應と名く。

【四三】隨心轉等。同上二の一九、隨心不隨心轉門例釋。
【四四】五陰等。同上二の二〇、業非業門。
【四五】五陰は等。同上二の二一、業相應非相應門。

云何が三は緣なる。受陰・想陰・識陰、是を三は緣なりと名く。
云何が一は非緣なる。色陰、是を一は非緣なりと名く。
云何が一は二分にして〔〇〕或は緣或は非緣なる。行陰、是を一は二分にして或は緣或は非緣なりと名く。
云何が行陰の緣なる。行陰の若し心數の思乃至煩惱・使なる、是を行陰の緣と名く。
云何が行陰の非緣なる。行陰の若し非心數の生乃至滅盡定なる、是を行陰の非緣と名く。

〔四二〕五陰は幾か共心幾か非共心なる。二は共心、一は非共心、二は二分にして或は共心或は非共心なり。
云何が二は共心なる。受陰・想陰、是を二は共心なりと名く。
云何が一は非共心なる。識陰、是を一は非共心なりと名く。
云何が二は二分にして或は共心或は非共心なる。色陰・行陰、是を二は二分にして或は共心或は非共心なりと名く。
云何が色陰の共心なる。若し隨心轉にして、心と共に生じ、共に住し、共に滅する有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除なる、是を色陰の共心と名く。
云何が色陰の不共心なる。若し隨心轉ならずして心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、十色入・一切の法入の色、是を色陰の非共心と名く。
云何が行陰の共心なる。行陰の若し隨心轉にして心と共に生じ、共に住し、共に滅する思乃至煩惱・使なる、是を行陰の共心と名く。
云何が行陰の不共心なる。行陰の若し隨心轉ならずして、心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる生乃至滅盡定なる、是行を陰の不共心と名く。

【四二】五陰は等。同上二の一八、共非心門。

云何が一は心なる。識陰、是を一は心なりと名く。

云何が四は非心なる。色陰・受陰・想陰・行陰、是を四は非心なりと名く。

[三九] 五陰は幾か心相應、幾か非心相應なる。二は心相應、一は非心相應、一は心相應非心相應を說かず、一は二分にして或は心相應或は非心相應なり。

云何が二は心相應なる。受陰・想陰、是を二は心相應なりと名く。

云何が一は非心相應なる。色陰、是を一は非心相應なりと名く。

云何が一は心相應非心相應を說かざる。識陰、是を一は心相應非心相應を說かずと名く。

云何が一は二分にして或は心相應或は非心相應なる。行陰、是を一は二分にして或は心相應或は非心相應なりと名く。

云何が行陰の心相應なる。行陰の若し心數＝思乃至煩惱・使なる、是を行陰の心相應と名く。

云何が行陰の非心相應なる。行陰の若し非心數の生乃至滅盡定なる、是を行陰の非心相應と名く。

[四〇] 五陰は幾か心數、幾か非心數なる。二は心數、二は非心數、一は二分にして或は心數或は非心數なり。

云何が二は心數なる。受陰・想陰、是を二は心數なりと名く。

云何が二は非心數なる。色陰・識陰、是を二は非心數なりと名く。

云何が一は二分にして或は心數或は非心數なる。行陰、是を一は二分にして或は心數或は非心數なりと名く。

云何が行陰の心數なる。行陰の若し緣の思乃至煩惱・使なる、是を行陰の心數と名く。

云何が行陰の非心數なる。行陰の若し非緣の生乃至滅盡定なる。是を行陰の非心數と名く。

[四一] 五陰は幾か有緣、幾か非緣なる。三は緣、一は非緣、一は二分にして或は緣或は非緣なり。

【三九】 五陰は等。同上二の一五、心相應非相應門。

【四〇】 五陰等。同上二の一六、心數非心數門。

【四一】 五陰等。同上二の一七、有緣非緣門。因みに明本にはこゝより「卷第三の下、間分陰品第三の餘首」に作る。

云何が受陰の有報なる。受陰の善の報なるを除く餘の受陰の善若しは不善の意觸受なる、是を受陰の有報と名く。

云何が受陰の無報なる。若しは受陰の報、若しは受陰の非報非報法なる眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受、是を受陰の無報と名く。

云何が想陰の有報なる。想陰の若し報法なる、是を想陰の有報と名く。

云何が想陰の有報なる。想陰の善の報なるを除く餘の想陰の善若しは不善の法想、是を想陰の有報と名く。

云何が想陰の無報なる。想陰の若しは報の想陰、若しは非報非報法の色想、聲・香・味・觸・法想なる、是を想陰の無報と名く。

云何が行陰の有報なる。行陰の若し報法なる、是を行陰の有報と名く。

云何が行陰の有報なる。行陰の善の報なるを除く餘の行陰の善若しは不善の思乃至煩惱・使・結・二定なる、是を行陰の有報と名く。

云何が行陰の無報なる。行陰の若しは報の行陰、若しは非報非報法にして、無貪・無恚・癡・煩惱・使・結を除く餘の行陰の無報なる、是を行陰の無報と名く。

云何が識陰の有報なる。識陰の若し報法なる、是を識陰の有報と名く。

云何が識陰の有報なる。識陰の善の報なるを除く餘の識陰の善〔七〕若しは不善の意界・意識界、是を識陰の有報と名く。

云何が識陰の無報なる。識陰の若しは報の識陰、若しは非報非報法なる眼識乃至意識、是を識陰の無報と名く。

〔三八〕五陰は幾か心幾か非心なる。一は心、四は非心なり。

【三八】五陰等。同上二の一四、心非心門。

云何が行陰の非受なる。若しは行陰の善若しは不善若しは無記にして我分の攝に非ざる、命を除く餘の行陰の非受なる、是を行陰の非受と名く。

云何が識陰の受なる。若し識陰の內なる、是を識陰の受と名く。

云何が識陰の受なる。若し識陰の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる眼識乃至意識、是を識陰の受と名く。

云何が識陰の非受なる。若し識陰の外なる、是を識陰の非受と名く。

云何が識陰の非受なる。若しは識陰の善若しは不善若しは無記にして我分の攝に非ざる眼識乃至意識、是を識陰の非受と名く。

[三六] 內外も亦是の如し。

[三七] 五陰は幾か有報幾か無報なる。一切は二分にして或は有報或は無報なり。

云何が色陰の有報なる。若し色陰の報法なる、是を色陰の有報〔p.547a〕と名く。

云何が色陰の有報なる。色陰の善の報なるを除く餘の色陰の善・不善なる、若しは善心若しは不善心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身・進有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除なる、是を色陰の有報と名く。

云何が色陰の無報なる。若しは色陰の非報非報法なる眼入・耳・鼻・舌入、身入・香入・味入・觸入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、無記心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音・句言語の口敎、若しは外色の眼識が所知なる、若しは外聲の耳識が所知なる、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除、是を色陰の無報と名く。

云何が受陰の有報なる。若し受陰の報法なる、是を受陰の有報と名く。

【三六】內外等。同上、この一二、內外門例釋。
【三七】五陰等。同上二の一三、有無報門。

善心若しは不善心若しは非報非報法心所起の去來・屈申・廻轉の身教・集聲・音句・言語の口教、若しは外色の〔○〕眼識が所知なる、若しは聲・香・味・觸、若しは外觸の身識が所知なる、身口の非戒無教、有漏の身口の戒無教、有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除、是を色陰の非受と名く。

云何が受陰の受なる。若し受陰の內なる、是を受陰の受と名く。

云何が受陰の受なる。若し受陰の業法、煩惱所生の報にして我分の攝なる眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の受と名く。

云何が受陰の非受なる。受陰の若し外なる、是を受陰の非受と名く。

云何が受陰の非受なる。受陰の若しは善若しは不善若しは無記にして我分の攝に非ざる眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の非受と名く。

云何が想陰の受なる。若し想陰の內なる、是を想陰の受と名く。

云何が想陰の受なる。若し想陰の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる色想、聲香・味・觸・法・想、是を想陰の受と名く。

云何が想陰の非受なる。若し想陰の外なる、是を想陰の非受と名く。

云何が想陰の非受なる。若しは想陰の善若しは不善若しは無記にして我分の攝に非ざる色想、聲・香・味・觸・法想、是を想陰の非受と名く。

云何が行陰の受なる。若し行陰の內なる、是を行陰の受と名く。

云何が行陰の受なる。若し行陰の業法・煩惱所生報にして我分の攝なる思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・生命なる、是を行陰の受と名く。

云何が行陰の非受なる。若し行陰の外なる、是を行陰の非受と名く。

云何が行陰の聖なる。若しは行陰の學、若しは無學なるなり。——學人の結・使を離れ、乃至、卽ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の若し思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・得・果・滅盡定なる、是を行陰の聖と名く。

云何が識陰の非聖なる。若し識陰の有漏なる、是を識陰の非聖と名く。

云何が識陰の非聖なる。識受陰、是を識陰の非聖と名く。

云何が識陰の非聖なる。若し識陰の非學非無學の眼識乃至意識なる、是を識陰の非聖と名く。

云何が識陰の聖なる。若し識陰の無漏なる、是を識陰の聖と名く。

云何が識陰の聖なる。若し識陰の信根相應の意識界なる、是を識陰の聖と名く。

云何が意陰の聖と名く。若しは識陰の學若しは無學なるなり。——學人の結・使を離れ、乃至、卽ち阿羅漢果を得せる若しは實の人若しは趣の若し意界・意識界なる、是を識陰の聖と名く。

[三四]有漏・無漏、有愛・無愛、有求・無求、當取・非當取、有取・無取、有勝・無勝も亦是の如し。

[三五]五陰は幾か受幾か非受なる。一切は二分にして或は受或は非受なり。

云何が色陰の受なる。若し色陰の內なる、是を色陰の受と名く。

云何が色陰の受なる。若し色陰の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる眼入、耳・鼻・舌・身入、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸腐・非姸腐、嚴淨・非嚴淨、身の好聲・非好聲、衆妙聲、非衆妙聲・軟聲・非軟聲、身の好香・非好香、軟香・非軟香、適意香・非適意香、身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・瘖、身の冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、受心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、集聲・音句・言語の口敎、有漏の身進、是を色陰の受と名く。

云何が色陰の非受なる。若し色陰の外なる、是を色陰の非受と名く。

云何が色陰の非受なる。若しは色陰の善若しは不善若しは無記にして我分の攝に非ざる、若しは

【三四】有漏等。同上、二の五、有無漏門、二の六、有無愛門、二の七、有無求門、二の八、當非當取門、二の九、有無取門、二の一〇、有無勝門を例釋す。

【三五】五陰等。同上二の一一、受非受門。

云何が受陰の非聖なる。若し受陰の非學非無學の眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰の非聖と名く。
云何が受陰の聖なる。若し受陰の無漏なる、是を受陰の聖と名く。
云何が受陰の聖なる。信根相應の意觸受、是を受陰の聖と名く。
云何が受陰の聖なる。若し受陰の學若しは無學なるあり。——學人の結・使を離れ乃至阿羅漢果を證せむと欲せる、若しは實の人若しは趣の若し意觸なる、是を受陰の聖と名く。
云何が想陰の非聖なる。若し想陰の有漏なる、是を想陰の非聖と名く。
云何が想陰の非聖なる。想受陰、是を想陰の非聖と名く。
云何が想陰の非聖なる。若し想陰の非學非無學の色想、聲・香・味・觸・法想なる、是を想陰の非聖と名く。
云何が想陰の聖なる。若し想陰の聖・無漏なる、是を想陰の聖と名く。
云何が想陰の聖なる。若し想陰の信根相應の法想なる、是を想陰の聖と名く。
云何が想陰の聖なる。若しは想陰の學若しは無學なるなり。——學人の結・使を離れ、乃至、卽ち阿羅漢果を證せる若しは實の人若しは趣の若し法想なる、是を想陰の聖と名く。
云何が行陰の非聖なる。若し行陰の有漏なる、是を行陰の非聖と名く。
云何が行陰の非聖なる。若し行受陰なる、是を行陰の非聖と名く。
云何が行陰の非聖なる。若し行陰の非學非無學の思乃至無想定なる、是を行陰の非聖と名く。
云何が行陰の聖なる。若し行陰の無漏なる、是を〔b〕行陰の聖と名く。
云何が行陰の聖なる。若しは信根、信根相應の心數法、若しは緣・無漏にして行陰の所攝なる、是を行陰の聖と名く。

云何が一は二分にして或は有對或は無對なる。色陰、是を一は二分にして或は有對或は無對なりと名く。

云何が色陰の有對なる。十色入、是を色陰の有對と名く。

云何が色陰の無對なる。法入の色、是を色陰の無對と名く。

〔三三〕五陰は幾か聖幾か非聖なる。一切は二分にして或は聖或は非聖なり。

云何が色陰の非聖なる。若し色陰の有漏なる、是を色陰の非聖と名く。

云何が色陰の非聖なる。色受陰、是を色陰の非聖と名く。

云何が色陰の非聖なる。若し色陰の非學非無學なる十色入と初の四色なる、是を色陰の非聖と名く。

云何が色陰の聖なる。若し色陰の無漏なる、是を色陰の聖と名く。

云何が色陰の聖なる。若しは色陰の學、若しは無學なるなり。——〔p.546a〕學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、實の如く苦・集・滅・道を觀じ、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、煩惱を離れて修道する、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが觀智具足し、若しは智地し、若しは觀辨脫心して卽ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを證する、無學人の、阿羅漢果を得むと欲し、未得の聖法を得むと欲し、修道して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀辨脫心して卽ち阿羅漢果を得せる、若しは實の人若しは趣の正語・正業・正命・正身進・正身除なる、是を色陰の聖と名く。

云何が受陰の非聖なる。若し受陰の有漏なる、是を受陰の非聖と名く。

云何が受陰の非聖なる。若し受の受陰なる、是を受陰の非聖と名く。

【三三】五陰等。同上二の四、聖非聖門。

云何が外の識なる。若し識の非受なる、是を外の識と名く。

云何が麁の識なる。若し識の欲界繫なる、是を〔〇〕麁の識と名く。

云何が細の識なる。若し識の色界繫・無色界繫若しは不繫なる、是を細の識と名く。

云何が卑の識なる。若しは識の不善、若しは識の不善法の報、若しは識の非報非報法にして不適意なる、是を卑の識と名く。

云何が勝の識なる。若しは識の善、若しは識の善法の報、若しは識の非報非報法にして適意なる、是を勝の識と名く。

云何が遠の識なる。若し識の諸識と相遠・極相遠・不近・不近邊なる、是を遠の識と名く。

云何が近の識なる。若し識の相近・極相近・近邊なる、是を近の識と名く。

[二八]五陰は幾か[二九]色、幾か非色なる。一は色、四は非色なり。

云何が一は色なる。色陰、是を一は色なりと名く。

云何が四は非色なる。受陰・想陰・行陰・識陰、是を四は非色なりと名く。

[三〇]五陰は幾か可見、幾か不可見なる。四は不可見、一は二分にして或は可見或は不可見なり。

云何が四は不可見なる。受陰・想陰・行陰・識陰、是を四は不可見なりと名く。

云何が一は二分にして或は可見或は不可見なる。色陰、是を一は二分にして或は可見或は不可見なりと名く。

云何が色陰の可見なる。色入、是を色陰の可見と名く。

云何が色陰の不可見なる。色入を除く[三一]餘の色陰の不可見なる、是を色陰の不可見と名く。

[三二]五陰は幾か有對、幾か無對なる。四は無對、一は二分にして或は有對或は無對なり。

云何が四は無對なる。受陰・想陰・行陰・識陰、是を四は無對なりと名く。

【二八】五陰等。以下例の如き如上五陰の諸門分別。その諸門はすべて前二品に準ず。
【二九】色等。そのまゞ同前二の一、色・非色門。
【三〇】五陰等。同上二の二、可見不可見門。
【三一】餘の等。つまり法處所攝の諸色のこと。
【三二】五陰は等。同上二の三、有對無對門。

云何が識陰なる。若し心・意・識・六識身・七識界、是を識陰と名く。

云何が識陰なる。若し識の過去・未來・現在・內外・麁細・卑勝・遠近なる、是を識陰と名く。

[二六]云何が六識身なる。眼識身、耳・鼻・舌・身・意識身なり。

云何が眼識身なる。眼に緣り、色に緣り、明に緣り、思惟に緣る――此の四緣を以つての識の已生・今生・當生・不定なる、是を眼識身と名く。

云何が耳・鼻・舌・身・意識身なる。意に緣り、法に緣り、思惟に緣る――此の三緣を以つての識の已生・今生・當生不定なる、是を意識身と名く。――是を六識身と名く。

云何が七識界なる。眼識界・耳・鼻・舌、身識界、意界、意識界なり。

云何が眼識界なる。若し識の、眼根が色境界に[二七]主として已生・今生・當生・不定なる、是を眼識界と名く。

云何が耳・鼻・舌・身識界なる。若し識の、身根が觸境界に主として已生・今生・當生・不定なる、是を身識界と名く。

云何が意界なる。意の法を知り法を思惟して若し初心の已生・今生・當生・不定なる、是を意界と名く。

云何が意識界なる。若し識が彼の境界に相似不離なる、及び餘の相似心の已生・今生・當生・不定なる、是を意識界と名く。――是を七識界と名く。

云何が過去の識なる。若し識の生じ已りて滅せる、是を過去の識と名く。

云何が未來の識なる。若し識の未生未出なる、是を未來の識と名く。

云何が現在の識なる。若し識の生じて未だ滅せざる、是を現在の識と名く。

云何が內の識なる。若し識の受なる、是を內の識と名く。

【二六】云何が以下。又右文中の別釋。

【二七】主として。大正本等「生」に作るも、宋元明、宮內省四本及び前の諸品中等に準じて主に改め讀む。下も準ず。但し、大正本等の如くするも、「若し識の根根生にして色を境界とし、……」と讀まば咎あらざらん。

受相應の想を除く餘の想識想・究竟識想と名く。
云何が過去の想なる。若し想の生じ已りて滅せる、是を過去の想と名く。
云何が未來の想なる。若し想の未生未出なる、是を未來の想と名く。
云何が現在の想なる。若し想の生じて未だ滅せざる、是を現在の想と名く。
云何が內の想なる。若し想の受なる、是を內の想と名く。
云何が外の想なる。若し想の非受なる、是を外の想と名く。
云何が麁の想なる。若し想の欲界繫なる、是を麁の想と名く。
云何が細の想なる。若し想の色界繫、若しは無色界繫、若しは不繫なる、是を細の想と名く。
云何が卑の想なる。若しは想の不善、若しは想の不善法の報、若しは想の非報非報法にして不適意なる、是を卑の想と名く。
云何が勝の想なる。若しは想の善、若しは想の善法の報、若しは想の非報非報法にして適意なる、是を勝の〔三〕想と名く。
云何が遠の想なる。若しは想の諸想と相遠・極相遠・不近・不近邊なる、是を遠の想と名く。
云何が近の想なる。若し想の相近・極相近・近邊なる、是を近想と名く。
云何が行陰なる。受陰・想陰・識陰を除く餘の法の非色・有爲なる、是を行陰と名く。
云何が行陰なる。思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫、無貪・無恚・無癡、順信・悔・不悔・悅・喜・心進・心除、信・欲・不放逸・念・定・心捨・疑・怖・煩惱・使・生・老・死・命・結・無想定・得・果・滅盡定、是を行陰と名く。
云何が識陰なる。意入、是を識陰と名く。
云何が識陰なる。意根、是を識陰と名く。

云何が苦根・喜根・憂根・捨根相應の想なる。若し想の捨根と共生・共住・共滅する、是を[二五]非苦非樂根相應の想と名く。

云何が色想なる。若し想の眼識相應の想なる、是を色想と名く。

云何が聲・香・味・觸・法想なる。若し想の意識相應の想なる、是を法想と名く。

云何が[p.545a] 色想なる。色を境界とし色を思惟する若し想識想、究竟識想、是を色想と名く。

云何が聲・香・味・觸・法想なる。法を境界とし法を思惟する若し想、識想、究竟識想なる、是を法想と名く。

云何が眼識界相應の想なる。若し想の眼識界と共生・共住・共滅する、是を眼識界相應の想と名く。

云何が耳・鼻・舌・身・意界・意識界相應の想なる。若し想の意識界と共生・共住・共滅する、是を意識界相應の想と名く。

云何が十八意行相應の想なる。若し想の十八意行と共生・共住・共滅する、是を十八意行相應の想と名く。

云何が十八意行相應の想を除く餘の想識想・究竟識想なる。十八意行相應の想を除く餘の想、是を十八意行相應の想を除く餘の想識想・究竟識想と名く。

云何が三十六尊句相應の想なる。若し想の三十六尊句と共生・共住・共滅する、是を三十六尊句相應の想と名く。

云何が三十六尊句相應の想を除く餘の想識想・究竟識想なる。三十六尊句相應の想を除く餘の想、是を三十六尊句相應の想を除く餘の想識想・究竟識想と名く。

云何が百八受相應の想なる。若し想の百八受と共生・共住・共滅する、是を百八受相應の想と名く。

云何が百八受相應の想を除く餘の想識想・究竟識想なる。百八受相應の想を除く餘の想、是を百八

【二五】非苦非樂根＝捨根。

陰と名く。
云何が想陰なる。五想＝想陰の樂根相應の想、苦根・喜根・憂根・捨根相應の想なる、是を想陰と名く。
云何が想陰なる。六想＝想陰の色想、聲・香・味・觸・法想なる、是を想陰と名く、
云何が想陰なる。七想＝想陰の眼識界相應の想、耳・鼻・舌・身・意界・意識界相應の想なる、是を想陰と名く。
云何が想陰なる。十八意行相應の想及び餘の想識想、究竟識想、是を想陰と名く。
云何が想陰なる。三十六尊句相應の想及び餘の想識想・究竟識想、是を想陰と名く。
云何が想陰なる。百八受相應の想及び餘の想識想・究竟識想、是を想陰と名く。
云何が想陰なる。若し想の過去・未來・現在・內外・麁細・卑勝・遠近なる、是を想陰と名く。
[二三]云何が身受相應の想なる。若し想の身受と共生・共住・共滅する、是を身受相應の想と名く。
云何が心受相應の想なる。若し想の心受と共生・共住・共滅する、是を心受相應の想と名く。
云何が樂受相應の想なる。若し想の樂受と共生・共住・共滅する、是を樂受相應の想と名く。
云何が苦受と非樂非苦受との相應の想なる。若し想の苦受〔及び〕非樂非苦受と共生・共住・共滅する、是を[二四]苦受と非樂非苦受との相應の想と名く。
云何が欲界繫の想なる。若し想の欲漏・有漏なる、是を欲界繫の想と名く。
云何が色界繫の想なる。若し想の色漏・有漏なる、是を色界繫の想と名く。
云何が無色界繫の想なる。若し想の無色漏・有漏なる、是を無色界繫の想と名く。
云何が不繫の想なる。若し想の聖・無漏なる、是を不繫の想と名く。
云何が樂根相應の想なる。若し想の樂根と共生・共住・共滅する、是を樂根相應の想と名く。

【二三】云何が以下。上來揭揚し來れる諸受を別釋す。

【二四】苦受。宋元明、宮內省四本等及び上所記の文に從つて補入す。

和合、是を百八受と名く。

云何が百八受を除く餘の意受なる。百八受を除く餘の意受、是を百八受を除く餘の[二〇]意受と名く。

云何が過去の受なる。若し受の生じて已に滅せる、是を過去の受と名く。

云何が未來の受なる。若し受の未生未出なる、是を未來の受と名く。

云何が現在の受なる。若し受の生じて未だ滅せざる、是を現在の受と名く。

云何が內の受なる。若し受の[二一]受なる、是を內の受と名く。

云何が外の受なる。若し受の非受なる、是を外の受と名く。

云何が麁の受なる。若し受の欲界繫なる、是を麁の受と名く。

云何が細の受なる。若し受の色界繫・無色界繫・不繫なる、是を細の受と名く。

云何が卑の受なる。若しは受の不善、若しは不善法の報、若しは受の非報非報法にして不適當なる、是を卑の受と名く。

云何が勝の受なる。若しは受の善法の報、若しは受の非報非報法にして適意なる、是を勝の受と名く。

云何が遠の受なる。若し受の[二二]諸受と相遠・極・相遠・不近・不近邊なる、是を遠の受と名く。

云何が近の受なる。若し受の相近・極相近・近邊なる、是を近の受と名く。

云何が想陰なる。一想＝想陰の若し想識想・究竟識想なる、是を想陰と名く。

云何が想陰なる。二想＝想陰の身受相應の想、心受相應の想なる、是を想陰と名く。

云何が想陰なる。三想＝想陰の樂受相應の[〇]想、苦受と非苦非樂受との相應の想、是を想陰と名く。

云何が想陰なる。四想＝想陰の欲界繫の想、色界繫の想、無色界繫の想、不繫の想なる、是を想

【二〇】意。宋元明、宮內省の四本にはこの字を缺くも?。

【二一】受。前二品中の相應下を見るべし。

【二二】諸受と等。巴利毘崩伽(p. 4)論には「諸の不善の受は善・無記の諸受より遠く、諸の善の受は不善・無記の諸受より遠く、……」と說く。參照すべし。漢譯にては、例せば集異門足論十一（毘曇部二、p.98）等に說あるも、今と文面やゝ異り。

に依るの憂と名く。聲・香・味・觸・法は無我なれば、無常・變異・離欲・滅なりと知り、實の如く過去を觀じ、此の如く法の無常・苦・變を實の如く觀じ已りて、寂滅解脫の勝法に於て[一九]希求し、何の時にか當に諸の聖人の成就する所の如き行に入るべしとし、此に緣りて憂を生ず。是の如きの憂は是を出に依るの憂と名く。――是を六の出に依るの憂と名く。

云何が六の貪に依るの捨なる。眼に色を見、凡夫人は捨を生じ、癡なること小兒の如く、過患を見ず、報を知らず。是の如く捨を得するを知らずして色に於て方便無き、是を貪に依るの捨と名く。耳・鼻・舌・身・意に法を知り、凡夫人は捨を生じ、癡なること小兒の如く、過患を見ず、報を知らず。是の如く、捨を得するを知らずして法に於て方便無き、是を〔五〕貪に依るの捨と名く。――是を六の貪に依るの捨と名く。

云何が六の出に依るの捨なる。色は無我なれば、無常・變異・離欲・滅なりと知り、實の如く過去の色を觀じ、此の如く色の無常・苦・變異を實の如く觀じ已りて捨を生じ、是の如く捨を得するを知りて色に於て方便有る、是を出に依るの捨と名く。聲・香・味・觸・法は無我なれば、無常・變異・離欲・滅なりと知り、實の如く過去を觀じ、此の如く法の無常・苦・變異を實の如く觀じ已りて捨を生じ、是の如く捨を得するを知りて法に於て方便有る、是を六の出に依るの捨と名く。

是の如く六の貪に依りて生ずるの喜、六の出に依りて生ずるの喜、是の如く六の貪に依るの憂、六の出に依るの憂、是く如く六の貪に依るの捨、六の出に依るの捨、――是の如きの和合、是を三十六尊句と名く。

云何が三十六尊句を除く餘の意受なる。三十六尊句を除く餘の意受、是を三十六尊句を除く餘の意受と名く。

云何が百八受なる。過去の三十六尊句、未來の三十六尊句、現在の三十六尊句、――是の如きの

【一九】希求。上には悕求に作る。

云何が十八意行を除く餘の意受なる。十八意行を除く餘の意受、是を十八意行を除く餘の意受と名く。

云何が三十六尊句なる。六の貪に依るの喜、六の出に依るの喜[p. 544a]、六の貪に依るの憂、六の出に依るの憂、六の貪に依るの捨、六の出に依るの捨なり。

云何が六の貪に依るの喜なる。[一一]眼知の色の愛・喜・適意・愛色・欲染相應なるを今得、當に得べく、已に得たるは過去し變滅せるを憶念して喜を生ず。是の如きの喜は是を貪に依るの喜と名く。耳・鼻・舌・身・意知の法の愛喜適意愛法欲染相應なるを今得・當に得べく、已に得たるは過去し變滅せるを憶念して喜を生ず。是の如くして生ずる喜は是を貪に依るの喜と名け、是を六の貪に依るの喜と名く。

云何が六の出に依るの喜なる。[一二]色は[一三]無我なれば、[一四]無常・[一五]變異・[一六]離欲・[一七]滅なりと知り、實の如く過去を觀じ、此の如く色の無常・苦・變を實の如く觀じて喜を生ず。是の如きの喜を出に依るの喜と名く。聲・香・味・觸・法は無我なれば、無常・變異・離欲・滅なりと知り、實の如く過去を觀じ、此の如く法の無常・苦・變を實の如く觀じて喜を生ず。是の如きの喜は是を出に依るの喜と名く。――是を六の出に依るの喜と名く。

云何が六の貪に依るの憂なる。眼知の色の愛・喜・適意・愛色・欲染相應なるの、今未得、當未得にして、已得の變滅せるを憶念して憂を生ず。是の如きの憂は是を貪に依るの憂と名く。耳・鼻・舌・身・意知の法の愛・喜・適意・愛法欲染相應なるの今未得・當未得にして已得の變滅せるを憶念して憂を生ず。是の如きの憂は是を貪に依るの憂と名く。――是を六の貪に依るの憂と名く。

云何が六の出に依るの憂なる。色は無我なれば、無常・變異・離欲・滅なりと知り、實の如く過去を觀じ、此の如く色の無常・苦・變を實の如く觀じ已りて、寂滅・解脫の勝法に於て悕求し何の時にか當に諸の聖人の成就する所の如きを行に入るべしとし、此に緣りて憂を生ず。是の如きの憂は是を[一八]出

【一一】眼知等。例へば、S. 35. 98 (IV. 79) &c 等の文を參照せば、今の文と左の如く對比することを得よう。
眼知の色―(Santi bhikkhave) cakkhuviññeyyā rūpā,
愛―iṭṭhā,
喜―kantā,
適意―manāpā,
愛色―piyarūpā,
欲染相應―kāmupasaṃhitā, rajanīyā
備考―巴利阿毘達磨論中のこれらに關する說明は幾分相違するを留意すべし。―一例、毘崩伽論 p. 301; &c.
【一二】色は等。これらの文に關しては、雜一、二、三、S. XXII 等に於ける諸契經の文を參照すべし。
【一三】無我。巴、Anattā, (pl.)。
【一四】無常。巴、aniccā,。
【一五】變易。巴、vipariṇāmā。
【一六】離欲。巴、virāgā。
【一七】滅。巴、nirodhā。
【一八】出。大正本等は「六の出に依る」等と作るも、宋版藏の一本には「六」を省き、且つ上來の諸文に照合してもその方を正しとすべければ、今改めて讀む。

云何が樂根なる。若し身樂受にして〔一〇〕眼觸の樂受、耳・鼻・舌・身觸の樂受、樂界なる、是を樂根と名く。

云何が苦根なる。若し身苦受にして、眼觸の苦受、耳・鼻・舌・身觸の苦受、苦界なる、是を苦根と名く。

云何が喜根なる。若し身心の樂受にして意・觸の樂受、喜界なる、是を喜根と名く。

云何が憂根なる。若し身心の苦受意觸の苦受にして憂界なる、是を憂根と名く。

云何が捨根なる。若し身心の非苦非樂受にして眼觸の非苦非樂受、耳・鼻・舌・身・意觸の非苦非樂受、捨界なる、是を捨根と名く。

云何が眼觸の受なる。若し受の眼識相應なる、是を眼觸の受と名く。

云何が耳・鼻・舌・身・意觸の受なる。若し受の意識相應なる、是を意觸の受と名く。

云何が眼觸の受なる。眼に緣り色に緣りて眼識を生じ、三法和合して觸あり、觸に緣りて受あるを眼觸の受と名く。

云何が耳・鼻・舌・身・意觸の受なる。意に緣り法に緣りて意識を生じ、三法和合して觸あり、觸に緣りて受ある、是を意觸の受と名く。

云何が眼識界相應の受なる。若し受の眼識界と共に生じ、共に住し、共に滅する、是を眼識界相應の受と名く。

云何が耳・鼻・舌・身・意界、意識界相應の受なる。若し受の意識界と共に生じ共に住し共に滅する、是を意識界相應の受と名く。

云何が十八意行なる。六喜行・六憂行・六捨行あり。是の如きの六喜行・六憂行・六捨行、是を十八意行と名く。

〔一〇〕眼觸の等。下の本文中参照。

云何が受陰なる。五受＝受陰の樂根・苦根・喜根・憂根・捨根なる、是を受陰と名く。
云何が受陰なる。六受＝受陰の眼觸受、耳・鼻・舌・身・意觸受なる、是を受陰と名く。
云何が受陰なる。七受＝受陰の眼識界相應の受、耳・鼻・舌・身・意界・意識界相應の受なる、是を受陰と名く。
云何が受陰なる。[六]十八意行及び餘の意受、是を受陰と名く。
云何が受陰なる。[七]三十六尊句及び餘の意受、是を受陰と名く。
云何が受陰なる。[八]百八受及び餘の意受、是を受陰と名く。
云何が受陰なる。若し過去・未來・現在、內・外、麁・細、卑・勝、遠・近の受なる、是を受陰と名く。
[九]云何が身受なる。若し受の身識相應なる、是を身受と名く。
云何が心受なる。若し受の意識相應なる、是を心受と名く。
云何が身受なる。若し受の五識身相應なる—〔五識身とは〕眼識・耳識・鼻識・舌識・〔○〕身識なり—是を身受と名く。
云何が心受なる。若し受の意識相應なる、是の心受と名く。
云何が樂受なる。若し身心の樂受なる、是を樂受と名く。
云何が苦受なる。若し身心の苦受なる、是を苦受と名く。
云何が非苦非樂受なる。若し身心の非苦非樂受なる、是を非苦非樂受と名く。
云何が欲界繫の受なる。若し受の欲漏・有漏なる、是を欲界繫の受と名く。
云何が色界繫の受なる。若し受の色漏・有漏なる、是を色界繫の受と名く。
云何が無色界繫の受なる。若し受の無色漏・有漏なる、是を無色界繫の受と名く。
云何が不繫の受なる。若し受の聖・無漏なる、是を不繫の受と名く。

【六】十八意行。下文參照。
【七】三十尊句。下の本文中を見よ。
【八】百八受。下の本文中を見よ。
【九】云何が以下。上に概述せる所を以下細說するの文である。

云何が不可見無對の色なる。身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進・有〔己〕漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除、是を不可見無對の色と名く。
云何が過去の色なる。若し色の生じ已りて滅せる、是を過去の色と名く。
云何が未來の色なる。若し色の未だ生ぜず未だ出でざる、是を未來の色と名く。
云何が現在の色なる。若し色の生じて未だ滅せざる、是を現在の色と名く。
云何が內の色なる。若し色の受なる、是を內の色と名く。
云何が外の色なる。若し色の非受なる、是を外の色と名く。
云何が麁の色なる。若し色の欲界繫なる、是を麁の色と名く。
云何が細の色なる。若しは色の色界繫、若しは無色界繫、若しは不繫なる、是を細の色と名く。
云何が卑の色なる。若しは色の不善なる、若しは色の不善法の報なる、若しは色の非報非報法にして不適意なる、是を卑の色と名く。
云何が勝の色なる。若しは色の善なる、若しは色の善法の報なる、若しは色の非報非報法にして適意なる、是を勝色と名く。
云何が遠の色なる。若し諸色の相遠・極相遠・不近・不近邊なる、是を遠の色と名く。
云何が近の色なる。若し色の相近・極相近・近邊なる、是を近色と名く。
云何が受陰なる。一受=受陰の若し[五]心受なる、是を受陰と名く。
云何が受陰なる。二受=受陰の身受と心受と、是を受陰と名く。
云何が受陰なる。三受=受陰の樂受・苦受・非苦非樂受なる、是を受陰と名く。
云何が受陰なる。四受=受陰の欲界繫の受・色界繫の受・無色界繫の受・不繫の受なる、是を受陰と名く。

【五】心受。次の身心受と共に六足諸論中の註を對檢せよ。

卷の第三［p.543a］

問分陰品[一]　第三

問うて曰く幾陰かある。答へて曰く、五陰あり。
何等か五なる。色陰・受陰・想陰・行陰・識陰なり。
云何が色陰なる。若し色法は是を色陰と名く。
云何が色陰なる。十色入若しは法入の色、是を色陰と名く。
云何が色陰なる。四大若しは四大所造の色、是を色陰と名く。
云何が色陰なる。三行色――[二]可見有對の色、不可見有對の色、不可見無對の色、是を色陰と名く。
云何が色陰なる。若し色の[三]過去・未來・現在、內・外、麁・細、卑・勝、遠・近なる、是を色陰と名く、
云何が色法なる。眼・耳・鼻・舌・身入、色・聲・香・味・觸入、身口の非戒無教、有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除、是を色法と名く。
云何が[四]十色入なる。眼・耳・鼻・舌・身入、色・聲・香・味・觸入、是を十色入と名く。
云何が法入の色なる。身口の非戒無教・有漏の身口の戒無教・有漏の身進・有漏の身除・正語・正業・正命・正身進・正身除、是を法入の色と名く。
云何が四大なる。地大・水大・火大・風大、是を四大と名く。
云何が四大所造の色なる。眼・耳・鼻・舌・身、色・聲・香・味、身口の非戒無教、有漏の身口の戒無教、有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除、是を四大所造の色と名く。
云何が可見有對の色なる。色入、是を可見有對の色と名く。
云何が不可見有對の色なる。眼・耳・鼻・舌・身、聲・香・味・觸入、是を不可見有對の色と名く。

【一】陰品。Skandhavarga. 陰は新譯の蘊に當り、陰品は則ち、五陰（色受想行識）に關して前來同段の（一）解說、（二）諸門分別をなす所である。自ら前二品參照のこと。

【二】可見等。集異門足論中等の註及び今の下文中を見よ。

【三】過去等。下方本文中及び、集異門、法蘊その他の諸論中參照。

【四】十色入等。以下、前本文の解釋中の字句解說。

是を一は四分にして、或は過去、或は未來、或は現在、或は非過去非未來非現在なりと名く。
云何が眼界の過去なる。若し眼界の生じ已りて滅せる眼界、是を眼界の過去と名く。
云何が眼界の未來なる。若し眼界の未だ生ぜず未だ出でざる眼界、是を眼界の未來と名く。
云何が眼界の現在なる。若し眼界の生じて未だ滅せざる眼界、是を眼界の現在と名く。
乃至意識界も亦是の如し。
云何が法界の過去なる。若し法界の生じ已りて滅せる受・想、乃至、正身除、是を法界の過去と名く。
云何が法界の未來なる。若し法界の未だ生ぜず未だ出でざる受・想、乃至、正身除、是を法界の未來と名く。
云何が法界の現在なる。若し法界の生じて未だ滅せざる受・想、乃至、正身除、是を法界の現在と名く。
云何が法界の非過去非未來非現在なる。若し法界の無爲の智緣盡、乃至、非有想非非想處智、是を法界の非過去非未來非現在と名く。[六二]

【六二】名くの下。前卷末の註參照。

云何が意界の不繫なる。若し意界の聖・無漏の意界なる、是を意界の不繫と名く。

意識界も亦是の如し。

云何が法界の欲界繫なる。若し法界の欲漏・有漏なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無貪・無恚・無癡・順信・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・不放逸・念・疑・怖・煩惱・使・生・老・死・命・結、身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進なる、是を法界の欲界繫と名く。

云何が法界の色界繫なる。若し法界の色漏・有漏の受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・疑・煩惱・使・生・老・死・命・結・無想定・有漏の身口の[五八]戒無敎、有漏の身進、有漏の身除なる、是を法界の色界繫と名く。

云何が法界の無色界繫なる。若し法〔色〕界の無色漏・有漏なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・疑・煩惱・使・生・老・死・命・結、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、是を法界の無色界繫と名く。

云何が法界の不繫なる。若し法界の聖・無漏・無爲なる——受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身進・正身除・九無爲、是を法界の不繫と名く。

[五九]十八界は幾か過去、幾か未來、幾か現在、幾か非過去非未來非現在なる。十七は三分にして或は過去、或は未來、或は現在、一は四分にして、或は過去、或は未來、或は現在、或は[六〇]非過去非未來非現在なり。

云何が十七は三分にして、或は過去、或は未來、或は現在なる。眼界乃至意識界、是を十七は三分にして或は過去、或は未來、或は現在なりと名く。

云何が一は四分にして、或は過去、或は未來、或は現在、或は非過去非未來非現在なる。法界、

【五八】戒。宋元明、宮內省、聖護藏の五本には缺。

【五九】十八界等。同上四の二、三世非世門。

【六〇】非過去等。非世＝時間的關係なきこと。

妍膚、嚴淨・非嚴淨、欲行心が所起の去來・屈申・廻轉の身敎、若しは外色の眼識が所知にして欲漏、有漏なる、是を色界の欲界繫と名く。

云何が色界の色界繫なる。若しは色界の色漏・有漏なる身の好色・端嚴・妍膚・嚴淨、色行心が所起の去來・屈申・廻轉の身敎、若しは外色の眼識が所知にして色漏・有漏なる、是を色界の色界繫と名く。

云何が聲界の欲界繫なる。若しは聲界の欲漏・有漏なる身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、欲行心が所起の集聲・音句・言語の口敎、若しは外聲の耳識が所知にして欲漏・有漏なる、是を聲界の欲界繫と名く。

云何が聲界の色界繫なる。若しは聲界の色漏・有漏なる身の好聲・衆妙聲・軟聲、色行心が所〔七〕起の集聲・音句・言語の口敎、若しは外聲の耳識が所知にして色漏・有漏なる、是を聲界の色界繫と名く。

云何が觸界の欲界繫なる。若しは觸界の欲漏・有漏なる身の冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、若しは外觸の身識が所知にして欲漏・有漏なる、是を觸界の欲界繫と名く。

云何が觸界の色界繫なる。若しは觸界の色漏・有漏なる身の冷・熱・輕・[五七]細・軟・滑、若しは外觸の身識が所知にして色漏・有漏なる、是を觸界の色界繫と名く。

云何が眼識界の欲界繫なる。若し眼識界の欲漏・有漏の眼識界なる、是を眼識界の欲界繫と名く。

云何が眼識界の色界繫なる。若し眼識界の色漏・有漏の眼識界なる、是を眼識界の色界繫と名く。

耳識界・身識界も亦是の如し。

云何が意界の欲界繫なる。若し意界の欲漏・有漏の意界なる、是を意界の欲界繫と名く。

云何が意界の色界繫なる。若し意界の色漏・有漏の意界なる、是を意界の色界繫と名く。

云何が意界の無色界繫なる。若し意界の無色漏・有漏の意界なる、是を意界の無色界繫と名く。

【五七】細。宋元明、宮內省四本には重に作る。

不悔・悦・喜・心進・信・欲・念・[五四]疑・怖・煩惱・使・生・命・結、身口の非戒無教、有漏身進、是を法界の見斷因と名く。

云何が法界の思惟斷因なる。若しは法界の思惟斷、〔若しは〕法界の思惟斷法の報なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見〔P. 542a〕・慧・解脱・悔・不悔・悦・喜・心進・信・欲・念・怖・煩惱・使・生・命・結、身口の非戒無教、有漏の身進、是を法界の思惟斷因と名く。

云何が法界の非見斷非思惟斷因なる。若しは法界の善、若しは法界の善法の報、若しは法界の非報非報法なる、疑・煩惱・使・結・身口の非戒無教を除く餘の法界の非見斷非思惟斷因なる、是を法界の非見斷非思惟斷因と名く。

[五五]十八界は幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か不繫なる。六は欲界繫、九は二分にして或は欲界繫、或は色界繫、三は四分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なり。

云何が六は欲界繫なる。鼻界・香界・鼻識界・舌界・味界・舌識界、是を六は欲界繫なりと名く。

云何が九は二分にして、或は欲界繫、或は色界繫なる。眼界・耳界・身界・色界・聲界・觸界・眼識界・耳識界・身識界、是を九は二分にして、或は欲界繫、或は色界繫なりと名く。

云何が三は四分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なる。意界・意識界・法界、是を三は四分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なりと名く。

云何が眼界の欲界繫なる。[五六]若し眼界の欲漏・有漏の眼界なる、是を眼界の欲界繫と名く。

云何が眼界の色界繫なる。若し眼界の色漏、有漏の眼界なる、是を眼界の色界繫と名く。

耳界・身界も亦是の如し。

云何が色界の欲界繫なる。若しは色界の欲漏、有漏なる身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、妍膚・非

【五四】疑字。聖護藏には缺。

【五五】十八界等。同上四の一、三界繫及び不繫分別門。

【五六】若し等。前品の相應品中を參照せよ。

云何が觸界の見斷因なる。若し觸界の見斷法の報なる身の冷・熱・麁・重・堅・澁、是を觸界の見斷因と名く。
云何が觸界の思惟斷因なる。若し觸界の思惟斷法の報なる身の冷・熱・麁・重・堅・澁、是を觸界の思惟斷因と名く。
云何が觸界の非見斷非思惟斷因なる。若しは觸界の善法の報なる、若しは觸界の非報非報法なる身の冷・熱・輕・細・軟・滑、若しは外觸の身識が所知なる、是を觸界の非見斷非思惟斷因と名く。
云何が眼識界の見斷因なる。若し眼識界の見斷法の報なる地獄・畜生・餓鬼の眼識界、是を眼識界の見斷因と名く。
云何が眼識界の思惟斷因なる。若し眼識界の思惟斷法の報なる地獄・畜生・餓鬼の眼識界、是を眼識界の思惟斷因と名く。
云何が眼識界の非見斷非思惟斷因なる。若しは眼識界の善法の報なる、若しは眼識界の非報非報法なる天上、人中の眼識界、是を眼識界の非見斷非思惟斷因と名く。
耳識界・鼻識界・舌識界・身識界も亦是の如し。
云何が意界の見斷因なる。若し意界の若しは見斷の意界、若しは見斷法の報の意界なる、是を意界の見斷因と名く。
云何が意界の思惟斷因なる。意界――若しは意界の思惟斷、若しは意界の思惟斷法の報なる、是を意界の思惟斷因と名く。
云何が意界の非見斷非思惟斷因なる。若しは意界の善、若しは意界の善法の報なる、若しは意界の非報非報法の意界なる、是を意界の非見斷非思惟斷因と名く。意識界も亦是の如し。
云何が法界の見斷因なる。若し法界の見斷法の報なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・

云何が聲界の見斷因なる。若しは聲界の見斷、若しは聲界の見斷法の報なる身の非好聲・非衆妙聲・非軟聲、見斷因心が所起の集聲・音句・言語の口教、是を聲界の見斷因と名く。

云何が聲界の思惟斷因なる。若しは聲界の思惟斷、若しは聲界の思惟斷法の報なる身の非好色・非衆妙聲・非軟聲、思惟斷因心が所起の集聲・音句・言語の口教、是を聲界の思惟斷因と名く。

云何が聲界の非見斷非思惟斷因なる。若しは聲界の善法の報なる、若しは聲界の非報非報法なる身の好聲・衆妙聲・軟聲、非見斷非思惟斷因心が所起の集聲・音句・言語の口教、若しは外聲の耳識が所知なる、是を聲界の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が香界の見斷因なる。若し香界の見斷法の報なる身の非好香・非軟香・非適意香、是を香界の見斷因と名く。

云何が香界の思惟斷因なる。若し香界の思惟斷法の報なる身の非好香・非軟香・非適意香、是を香界の思惟斷因と名く。

云何が香界の非見斷非思惟斷因なる。若しは香界の善法の報なる、若しは香界の非報非報法なる身の好香・軟香・適意香、若しは外香の鼻識が所知なる、是を香界の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が味界の見斷因なる。若し味界の見斷法の報なる身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・瘂、是を味界の見斷因と名く。

云何が味界の思惟斷因なる。若し味界の思惟斷法の報なる身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・瘂、是を味界の思惟斷因と名く。

云何が味界の非見斷非[3]思惟斷因なる。若しは味界の善法の報なる、若しは味界の非報非報法なる身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・瘂、若しは外の味の舌識が所知なる、是を味界の非見斷非思惟斷因と名く。

想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・煩惱・使・結、身口の非戒無敎、有漏の身進、是を法界の思惟斷と名く。

云何が法界の非見斷非思惟斷なる。若しは法界の善若しは無記なる、疑・煩惱・使・結・身口の非戒無敎を除く餘の法界なる、是を法界の非見斷非思惟斷と名く。

[五三]十八界は幾か見斷因、幾か思惟斷因、幾か非見斷非思惟斷因なる。一切は三分にして或は見斷因、或は思惟斷因、或は非見斷非思惟斷因なり。

云何が眼界の見斷因なる。若し眼界の見斷法の報なる地獄・畜生・餓鬼の眼界なる、是を眼界の見斷因と名く。

云何か眼界の思惟斷因なる。若し眼界の思惟斷法の報なる地獄・畜生・餓鬼の眼界なる、是を眼界の思惟斷因と名く。

云何が眼界の非見斷非思惟斷因なる。若し眼界の善法の報なる天上、人中の眼界なる、是を眼界の非見斷非思惟斷因と名く。

耳界・鼻界・舌界・身界も亦是の如し。

云何が色界の見斷因なる。若しは色界の見斷若しは色界の見斷法の報なる身の非好色・非端嚴・非姸膚・非嚴淨なる、見斷因心が所起の去來・屈申・迴轉の身敎、是を色界の見斷因と名く。

云何が色界の思惟斷因なる。若しは色界の思惟斷、若しは思惟〔b〕斷法の報なる身の非好色・非端嚴・非姸膚・非嚴淨、思惟所斷因の心が所起の去來・屈申・迴轉の身敎、是を色界の思惟斷因と名く。

云何が色界の非見斷非思惟斷因なる。若しは色界の善、若しは色界の善法の報なる、若しは色界の非報非報法なる身の好色・端嚴・姸膚、非見斷非思惟斷因心が所起の去來・屈申・迴轉の身敎、若しは外の色の眼識が所知なる、是を色界の非見斷非思惟斷因と名く。

【五三】十八界等。同上三の五、三斷因門。

云何が色界の非見斷非思惟斷なる。若しは色界の善、若しは無記なる身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸醜・非姸醜、嚴淨・非嚴淨、若しは善心若しは無記心が所起の去來・屈申・廻轉の身敎、若しは外の色の眼識が所知なる、是を色界の非見斷非思惟斷と名く。

云何が聲界の見斷なる。若し聲界の不善にして思惟斷に非ざる、見斷の煩惱心が所起の集聲・音句・言語の口敎なる、是を聲界の見斷と名く。

云何が聲界の思惟斷なる。若し聲界の不善にして見斷に非ざる、思惟斷の煩惱心が所起の集聲・音句・言語の口敎なる、是を聲界の思惟斷と名く。

云何が聲界の非見斷非思惟斷なる。若しは聲界の善若しは無記なる身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・歎聲・非歎聲、若しは善心若しは無記心が所起の集聲・音句・言語の口敎、若しは外聲の耳識が所知なる、是を聲界の非見斷非思惟斷と名く。

云何が意界の見斷なる。若し意思の不[P. 541a]に善して思惟斷に非ざる、見斷の煩惱相應の心、意界なる、是を意界の見斷と名く。

云何が意界の思惟斷なる。若し意界の不善にして見斷に非ざる、思惟斷の煩惱相應の意界なる、是を意界の思惟斷と名く。

云何が意思の非見斷非思惟斷なる。若しは意界の善なる、若しは無記の意界なる、是を意界の非見斷非思惟斷と名く。意識界も亦是の如し。

云何が法界の見斷なる。若し法界の不善にして思惟斷に非ざる、見斷の煩惱と一時俱斷なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結、身口の非戒無敎、有漏の身進、是を法界の見斷と名く。

云何が法界の思惟斷なる。若し法界の不善にして見斷に非ざる、思惟斷の煩惱と一時俱斷なる受・

云何が意界の非報非報法なる。意界の若し無記にして[五一]我分の攝に非ざる意界、是を意界の非報非報法と名く。意識界も亦是の如し。

云何が法界の報なる。若し法界の善の報にして無貪、無恚を除く餘の受・想、乃至、心捨・怖・生・命・無想定・得・果・滅盡定、有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除・正語・正業・正命・正身進・正身除、是を法界の報と名く。

云何が法界の報法なる。若し法界の有報なる、是を法界の報法と名く。

云何が法界の非報法なる。法界の善の報を除く餘の法界の善有爲若しは不善の受・想・乃至、煩惱・使・結・二定・一切の色、是を法〔○〕界の報法と名く。

云何が法界の非報非報法なる。若し法界の無記にして我分の攝に非ざる、若しは聖の無爲――受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・生・老・死・有漏の身進・九無爲、是を法界の非報非報法と名く。

[五二]十八界は幾か見斷、幾か思惟斷、幾か非見斷非思惟斷なる。十三は非見斷非思惟斷、五は三分にして或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷なり。

云何が十三は非見斷非思惟斷なる。八色界と五識界と、是を十三は非見斷非思惟斷なりと名く。

云何が五は三分にして或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷なる。色界・聲界・意界・意識界・法界、是を三分にして或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷なりと名く。

云何が色界の見斷なる。若し色界の不善にして思惟斷に非ざる、見斷の煩惱心所起の去來・屈申・廻轉の身教なる、是を色界の見斷と名く。

云何が色界の思惟斷なる。若し色界の不善にして見斷に非ざる、思惟斷の煩惱心所起の去來・屈申・廻轉の身教なる、是を色界の思惟斷と名く。

【五一】我分の上。大正本等には、識の字あるも、宋元明宮内省の諸本によりて省く。

【五二】十八界等。同上三の四、三斷門。

云何が色界の報なる。若し色界の業報、煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、若しは受心が所起の去來・屈申・廻轉の身敎、是を色界の〔c〕報と名く。

云何が色界の報法なる。若し色界の有報なる、是を色界の報法と名く。

云何が色界の報法なる。若しは色界の善、若しは不善なる、若しは善心若しは不善心が所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、是を色界の報法と名く。

云何が色界の非報非報法なる。若し色界の無記にして我分の攝に非ざる、非報非報法心が所起の去來・屈申・廻轉の身敎、若しは外の色の眼識が所知なる、是を色界の非報非報法と名く。

云何が聲界の報なる。若し聲界の受なる、是を聲界の報と名く。

云何が聲界の報なる。若し聲界の業報、煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・歎聲・非歎聲、若しは受心が所起なる集聲・音句・言語の口敎、是を聲界の報と名く。

云何が聲界の報法なる。若し聲界の有報なる、是を聲界の報法と名く。

云何が聲界の報法なる。若しは聲界の善、若しは不善なる、若しは善心若しは不善心が所起なる集聲・音句・言語の口敎、是を聲界の報法と名く。

云何が聲界の非報非報法なる。若し聲界の無記にして我分の攝に非ざる、非報非報法心が所起の集聲・音句・言語の口敎、若しは外の聲の耳識が所知なる、是を聲界の非報非報法と名く。

云何が意界の報なる。若しは意界の受若して意界の善の報なる意界、是を意界の報と名く。

云何が意界の報法なる。若し意界の有報なる、是を意界の報法と名く。

云何が意界の報法なる。意界の善の報を除く餘の意界の善若しは不善の意界、是を意界の報法と名く。

非軟香・適意香・非適意香なる、是を香界の報と名く。
云何が香界の非報非報法なる。若しは香界の外なる、若しは外香の鼻識が所知なる樹根香・樹心香・樹膠香・樹皮香・葉香・花香・果香・好香・非好香、及び餘の外香の鼻識が所知なる、是を香界の非報非報法と名く。
云何が味界の報なる。若し味界の受なる、是を味界の報と名く。
云何が味界の報なる。若し味界の業報、煩惱所生の報にして我分の攝なる身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・癊、是を味界の報と名く。
云何が味界の非報非報法なる。若しは味界の外なる、若しは外味の舌識が所知なる若しは甜・酢・苦・辛・鹹・淡・水汁、及び餘の外味の舌識が所知なる、是を味界の非報非報法と名く。
云何が觸界の報なる。若し觸界の受なる、是を觸界の報と名く。
云何が觸界の報なる。若し觸界の業報、煩惱所生の報にして我分の攝なる身の冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、是を觸界の報と名く。
云何が觸界の非報非報法なる。若しは觸界の外なる、若しは外觸の身識が所知なる若しは冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、及び餘の外觸の身識が所知なる、是を觸界の非報非報法と名く。
云何が眼識界の報なる。若し眼識界の受なる、是を眼識界の報と名く。
云何が眼識界の報なる。若し眼識界の業報、煩惱所生の報にして我分の攝なる眼識界、是を眼識界の報と名く。
云何が眼識界の非報非報法なる。若し眼識界の外の眼識界なる、是な眼識界の非報非報法と名く。
耳識界・鼻識界・舌識界・身識界も亦是の如し。
云何が色界の報なる。若し色界の受なる、是を色界の報と名く。

不放逸・念・定・心捨・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡・決定、是を法界の學と名く。

云何が法界の無學なる。若し法界の聖にして學に非ざる、是を法界の無學と名く。

云何が法界の無學なる。無學の信根及び相應の心數法、若しは法界の非緣、無漏にして學に非さる、是を法界の無學と名く。

云何が法界の無學なる。無學人の、乃至、即ち阿羅漢果を得する若しは實の人若しは趣の若し受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脱・無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・信・心捨・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡、是を法界の無學と名く。

云何が法界の非學非無學なる。若し法界の非聖の受受陰・想受陰・行受陰、若しは色の不可見、有對にして有漏なる、若しは非聖の無爲——受・想・定・初の四色、非聖の七無爲、是を法界の非學非無學と名く。

五〇 十八界は幾か報、幾か報法、幾か非報非報法なる。五は報、八は二分にして或は報、或は非報非報、五は三分にして或は報、或は報法、或は非法非報法なり。

云何が五は報なる。眼界・耳界・鼻界・舌界・身界、是を五は報なりと名く。

云何が八は二分にして、或は報、或は非報非報法なる。香界・味界・觸界・眼識界・耳識界・鼻識界・舌識界・身識界、是を八は二分にして或は報、或は非報非報法なりと名く。

云何が五は三分にして或は報、或は報法、或は[P. 540c]非報非報法なる。色界・聲界・意界・意識・界法界、是を五は三分にして或は報、或は報法、或は非報非報法なりと名く。

云何が香界の報なる。若し香界の受なる、是を香界の報と名く。

云何が香界の報なる。若し香界の業報・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好香・非好香・軟香・

【五〇】十八界節。同上三の三、報等三門。

云何が意界の學なる。若し意界の聖にして無學に非ざる、是を意界の學と名く。

云何が意界の學なる。若し意界の學の信根と相應する意界なる、是を意界の學と名く。

云何が意界の學なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信若しは堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、實の如く苦・集・滅・道を觀じて、未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、煩惱を離れて修道する、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを證する若しは實の人若しは趣の意界、是を意界の學と名く。

云何が意界の無學なる。若し意界の聖にして學に非ざる、是を意界の無學と名く。

云何が意界の無學なる。若し意界の、無學の信根と相應する意界なる、是を意界の無學と名く。

云何が意界の無學なる。無學人の阿羅漢を得むと欲し、未だ得ざる聖法を得むと欲して修道し、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち〔○〕阿羅漢果を得する、若しは實の人若しは趣の意界なる、是を意界の無學と名く。

云何が意界の非學非無學なる。若し意界の非聖の意界なる、是を意界の非學非無學と名く。

意識界も亦是の如し。

云何が法界の學なる。若し法界の聖にして無學に非ざる、是を法界の學と名く。

云何が法界の學なる。學の信根及び相應の心數法なる、若しは法界の緣、無漏にして無學に非ざる、是を法界の學と名く。

云何が法界の學なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、乃至、卽ち阿那含果を得する若しは實の人若しは趣の受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・

云何が聲界の無記たる。若しは聲界の受、若しは聲界の非報非報法なる身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、無記心が所起なる集聲・音句・言語の口教、若しは外の聲の耳識が所知なる、是を聲界の無記と名く。

云何が意界の善なる。若し意界の修なる、是を意界の善と名く。

云何が意界の不善なる。若し意界の斷の意界なる、是を意界の不善と名く。

云何が意界の無記なる。若しは意界の受、若しは意界の非報非報法の意界なる、是を意界の無記と名く。意識界も亦是の如し。

云何が法界の善なる。若し法界の修の〔已〕受・想、乃至、心捨・無想定・得・果・滅盡定・有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除・正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡・決定なる、是を法界の善と名く。

云何が法界の不善なる。若し法界の斷の受・想・[四八]思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結・身口の非戒無教、有漏の身進なる、是を法界の不善と名く。

云何が法界の無記なる。若しは法界の受、若しは法界の非報非報法、非聖の無爲——受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・生・老・死・命・有漏の身進、非聖の七無爲、是を法界の無記と名く。

[四九]十八界は幾か學、幾か無學、幾か非學非無學なる。十五は非學非無學、三は三分にして、或は學或は無學、或は非學非無學なり。

云何が十五は非學非無學なる。十色界と五識界と、是を十五は非學非無學なりと名く。

云何が三は三分にして或は學、或は無學、或は非學非無學なる。意界・意識界・法界、是を三は三分にして或は學、或は無學、或は非學非無學なりと名く。

【四八】思。宋元明宮內省の四本にはこの字を除く。

【四九】十八界等。同上三の二、三學門。

教、有漏の身進・有漏の身除・正語・正業・正命〔P. 539a〕・正身進・正身除・智緣盡・決定、是を法界の修と名く。

云何が法界の非修なる。［若しは］法界の不善若しは無記なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・生・老・死・命・結・身口の非戒無教、有漏の身進、非聖の七無爲、是を法界の非修と名く。

〔四六〕十八界は幾か證、幾か非證なる。一切は證にして事の如く知見す。

〔四七〕十八界は幾か善、幾か非善、幾か無記なる。十三は無記、五は三分にして、或は善、或は不善、或は無記なり。

云何が十三は無記なる。八色界と五識界と、是を十三は無記と名く。

云何が五は三分にして、或は善、或は不善、或は無記なる。色界・聲界・意界・意識界・法界、是を五は三分にして、或は善、或は不善、或は無記なりと名く。

云何が色界の善なる。若し色界の修善心が所起なる去來・屈申・廻轉の身教、是を色界の善と名く。

云何が色界の不善なる。若し色界の斷不善心が所起なる去來・屈申・廻轉の身教、是を色界の不善と名く。

云何が色界の無記なる。若しは色界の受、若しは非報非報法なる身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、無記心が所起なる去來・屈申・廻轉の身教、若しは外の色の眼識が所知なる、是を色界の無記と名く。

云何が聲界の善なる。若し聲界の修善心が所起なる集聲・音句・言語の口教、是を聲界の善と名く。

云何が聲界の不善なる、若し聲界の斷不善心が所起なる集聲・音句・言語の口教、是を聲界の不善と名く。

【四六】十八界等。同上二の三六、證非證門。
【四七】十八界等。同上三の一、三性門。

を除く餘の法界の非斷智知なるなり。

[四四] 斷・非斷も亦是の如し。

[四五] 十八界は幾か修、幾か非修なる。十三は非修、五は二分にして或は修、或は非修なり。

云何が十三は非修なる。八色界と五識界と、是を十三は非修なりと名く。

云何が五は二分にして或は修、或は非修なる。色界・聲界・意界・意識界・法界、是を五は二分にして或は修、或は非修なりと名く。

云何が色界の修なる。若しは色界の善若しは善心の所起なる去來・屈申・廻轉の身教、是を色界の修と名く。

云何が色界の非修なる。若しは色界の不善若しは無記なる身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、若しは不善心若しは無記心が所起なる去來・屈申・廻轉の身教、若しは外の色の眼識が所知なる、是を色界の非修と名く。

云何が聲界の修なる。若しは聲界の善なる、若しは善心の所起なる集聲・音句・言語の口教、是を聲界の修と名く。

云何が聲界の非修なる。若しは聲界の不善なる、若しは無記なる身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、若し不善心若しは無記心の所起の集聲・音句・言語の口教、若しは外聲の耳識が所知なる、是を聲界の非修と名く。

云何が意界の修なる。若し意界の善の意界なる、是を意界の修と名く。

云何が意界の非修なる、若しは意の不善、若しは無記の意界なる、是を意界の非修と名く、意識界も亦是の如し。

云何が法界の修なる、若し法界の善の受・想、乃至、心捨・無想定・得・果・滅盡定、有漏の身口の戒無

【四四】斷等。同上二の三四、斷非斷門。
【四五】十八界等。同上二の三五、修非修門。

斷智知なり。
云何が十三は非斷智知なる。八色界と五識界と、是を十三は非斷智知なりと名く。
云何が五は二分にして或は斷智知、或は非斷智知なる。色界・聲界・意界・意識界・法界、是を五は二分にして或は斷智知或は非斷智知なりと名く。
云何が色界の斷智知なる。若しは色界の不善、若しは不善心が所起なる去來・屈申・廻轉の身教、是を色界の斷智知と名く。
云何が色界の非斷智知なる。若しは色界の善若しは無記なる身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、若しは善心若しは無記心が所起なる去來・屈申・廻轉の身教、若しは外の色の眼識が所知なる、是を色界の非斷智知と名く。
云何が聲界の斷智知なる。若し聲界の不善なる、不善心が所起なる集聲・音句・言語の口教、是を聲界の斷智知と名く。
云何が聲界の非斷智知なる。若しは聲界の善若しは無記なる身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、歎聲・非歎聲、若しは善心若しは無記心が所起なる集聲・音句・言語、の口教、若しは外聲の耳識が所知なる、是を聲界の非斷智知と名く。
〔〇〕云何が意界の斷智知なる。若し意界の不善の意界なる、是を意界の斷智知と名く。
云何が意界の非斷智知なる。若しは意界の善、若しは無記の意界なる、是を意界の非斷智知と名く。意識界も亦是の如し。
云何が法界の斷智知なる。若し法界の不善の受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結・身口の非戒無教、有漏の身進、是を法界の斷智知と名く。
云何が法界の非斷智知なる。若しは法界の善、若しは無記なる、疑・煩惱・使・結・身口の非戒無教

聲・非衆妙聲　軟聲・非軟聲、無記心が所起なる集聲・音句・言語の口教、若しは外聲の耳識が所知なる、是を聲界の非因と名く。

云何が觸界の因なる。四大――地大・水大・火大・風大、是を觸界の因と名く。

云何が觸界の非因なる。四大を除く餘の觸界所攝の法、是を觸界の非因と名く。

云何が法界の因なる。若しは法界の緣・若しは法界の非緣・有報なる、得・果を除く餘の法界の非緣若しは報の受・想・乃至煩惱・使・結・二定・一切の色、是を法界の因と名く。

云何が法界の非因なる。若し非緣・無報にして不共業なる生・老・死・命・得・果、有漏の身進・九無爲、是を法界の非因と名く。

〔三七〕十八界は幾か有因幾か無因なる。十七は有因、一は二分にして或は〔三〕有因、或は無因なり。

云何が十七は有因なる。十色界と七識界と、是を十七は有因なりと名く。

云何が一は二分にして或は有因、或は無因なる。法界、是を一は二分にして或は有因、或は無因なりと名く。

云何が法界の有因なる。若し法界の有諸の受・想乃至正身除なる、是を法界の有因と名く。

云何が法界の無因なる。若し法界の無緒の智緣盡、乃至、非想非非想處智、是を法界の無因と名く。

〔三八〕有緒・無緒、有緣・無緣、有爲・無爲も亦是の如し。

〔三九〕十八界は幾か知、幾か非知なる。一切は知にして事の如く知見す。

〔四〇〕十八界は幾か可識、幾か非可識なる。一切は識にして意識が事の如く識す。

〔四一〕十八界は幾か解、幾か非解なる。一切は解にして事の如く知見す。

〔四二〕十八界は幾か了、幾か非了なる。一切は了にして事の如く知見す。

〔四三〕十八界は幾か斷智知、幾か非斷智知なる。十三は非斷智知、五は二分にして或は斷智知、或は非

【三七】十八等。同上二の二五、有因無因門。

【三八】有緒等。同上二の二六、有緒無緒門、同上二の二七、有緣無緣門、同上二の二八、有爲無爲門を例釋。

【三九】十八等。同上二の二九、知・非知門。

【四〇】十八界等。同上二の三〇、識非識門。

【四一】十八等。同上二の三一、解非解門。

【四二】十八界等。同上二の三二、了非了門。

【四三】十八等。同上二の三三、斷智知、非斷知門。

進・正身除なる、是を法界の共業と名く。
云何が法界の不共業なる。若し法界の不隨業轉にして、業と共にして生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、不定心の思、生・老・死・命・結・得・果、身口の非戒無敎〔p.538a〕有漏の身口の戒無敎・有漏の身進・九無爲、是を法界の不共業と名く。

[三五] 隨業轉・不隨業轉も亦是の如し。

[三六] 十八界は幾か因幾か非因なる。七は因、七は非因、四は二分にして或は因或は非因なる。
云何が七は因なる。七識界、是を七は因なりと名く。
云何が七は非因なる。眼界・耳界・鼻界・舌界・身界・香界・味界、是を七は非因なりと名く。
云何が四は二分にして、或は因、或は非因なる。色界・聲界・觸界・法界、是を四は二分にして、或は因、或は非因なりと名く。
云何が色界の因なる。若し色界の報法なる、是を色界の因と名く。
云何が色界の因なる。若し色界の若しは善・不善なる、若しは善心若しは不善心が所起の去來・屈申・廻轉の身敎なる、是を色界の因と名く。
云何が色界の非因なる。若しは色界の報・若しは色界の非報非報法なる身の好色・非好色、端嚴非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、無記心が所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、若しは外色の眼識が所知なる、是を色界の非因と名く。
云何が聲界の因なる。若し聲界の報法なる、是を聲界の因と名く。
云何が聲界の因なる。若し聲界の善・不善、若しは善心・不善心が所起なる集聲・音句・言語の口敎、是を聲界の因と名く。
云何が聲界の非因なる。若しは聲界の報、若しは聲界の非報非報法なる身の好聲・非好聲、衆妙

【三五】隨業等。同上二の二三、隨業轉、不隨業轉門。
【三六】十八界等。同上二の二四、因、非因門。

の非業なる、是を法界の非業と名く。

〔三三〕十八界は幾か業相應幾か非業相應なる。七は業相應、十は非業相應、一は三分にして或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應を說かず。

云何が七は業相應なる。七識界、是を七は業相應なりと名く。

云何が十は非業相應なる。十色界、是を十は非業相應なりと名く。

云何が一は二分にして或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應を說かずなる。法界、是を一は三分にして或は業相應、或は非業相應、或は業相應非業相應を說かずと名く。

云何が法界の業相應なる。若し法界の思相應なる、思を除く餘の受・想・乃至、煩惱・使、是を法界の業相應と名く。

云何が法界の非業相應なる。若し法界の思相應に非ざる生乃至非想非非想處智、是を法界の非業相應と名く。

云何が法界の業相應非業相應を說かずなる。思、是を法界の業相應非業相應を說かずと名く。

〔三四〕十八界は幾か共業・幾か非共業なる。七は共業・十は不共業、一は二分にして或は共業或は不共業なり。

云何が七は共業なる。七識界、是を七は共業なりと名く。

云何が十は不共業なる。十色界、是を十は不共業なりと名く。

云何が一は二分にして或は共業、或は不共業なる。法界、是を一は二分にして或は共業或は不共業なりと名く。

云何が法界の共業なる。若し法界の隨業轉にして業と共に生じ共に住し共に滅する受・想・定心の思・觸、乃至、煩惱・使、二定・有漏の身口の戒無教・有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身

【三三】十八等。同上二の二一、業相應非業相應門。

【三四】十八等。同上二の二二、共業非共業門。

煩惱・使・有漏の身口の戒無教、有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除なる、是を法界の共心と名く。

云何が法界の不共心なる。若し法界の、不隨心轉にして、心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる生、乃至、非想非非想處智、是を法界の不共心と名く。

[二九]隨心轉・不隨心轉亦是の如し。

[三〇]十八界は幾か業、幾か非業なる。十五は非業・三は二分にして或は業・或は非業なり。

云何が十五は非業なる。八色界と七識界と、是を十五は非業なりと名く。

云何が三は二分にして、或は業或は非業なる、色界・聲界・法界、是を三は二分にして、或は業或は非業なりと名く。

云何が色界の業なる。若しは善心若しは不善心若しは無記心が所起なる去來・屈申・迴轉の身敎、是を色界の業と名く。

云何が色界の非業なる。身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、姸醜・非姸醜、嚴淨・非嚴淨、若しは外色の眼識が所知なる、是を色界の非業と名く。

云何が聲界の業なる。若しは善心若しは不善心若しは無記心が所起なる集聲・音句・言語の口敎、是を聲界の業と名く。

云何が聲界の非業なる。身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、若しは外聲の耳識が所知なる、是を聲界の非業と名く。

〔〇〕云何が法界の業なる。[三一]思、身口の非戒[三二]無敎、有漏の身口の戒無敎、正語・正業・正命、是を法界業と名く。

云何が法界の非業なる。思、身口の非戒無敎・有漏の身口の戒無敎・正語・正業・正命を除く餘の法界

〔二九〕隨心轉等。同上二の一九、隨心轉等二門例釋。
〔三〇〕十八界等。同上二の二〇、業非業門。
〔三一〕思。思は卽ち業である。
〔三二〕無敎。大正本等には非敎とあるも前來の例及び宋元明、宮內省本に從つて改む。

二六 十八界は幾か心數幾か非心數なる。十七は非心數、一は二分にして或は心數或は非心數なり。

云何が十七は非心數なる。十色界と七識界と、是を十七は非心數なりと名く。

云何が一を二分にして或は心數或は非心數なる。法界、是を一は二分にして或は心數或は非心數なりと名く。

云何が法界の心數なる。若し法界の有緣の受・想・乃至煩惱・使なる、是を法界の心數と名く。

云何が法界の非心數なる。若し法界の非緣の生乃至非想非非想處智なる、是を法界の非心數と名く。

二七 十八界は幾か有緣・幾か無緣なる。七は有緣、十は無緣、一は二分にして或は有緣或は無緣なり。

云何が七は有緣なる。七識界、是を七は有緣なりと名く。

云何が十は無緣なる。十色界、是を十は無緣なりと名く。

云何が一は二分にして或は有緣或は無緣なる。法界、是を一は二分にして或は有緣或は無緣なりと名く。

云何が法界の有緣なる。若し法界の心數なる、受・想乃至煩惱・使、是を法界の有緣と名く。

云何が法界の無緣なる。若し法界の非心數の生乃至非想非非想處智なる、是を法界の無緣と名く。

二八 十八界は幾か共心幾か不共心なる。十七は不共心、一は二分にして、或は共心或は不共心なり。

云何が十七は不共心なる。十色界と七識界と、是を十七は不共心ありと名く。

云何が一は二分にして或は共心或は不共心なる法界、是を一は二分にして或は共心或は不共心なりと名く。

云何が法界は共心なる。若し法界の隨心轉にして心と共に生じ共に住し共に滅する受・想、乃至、

【二六】十八等。同上二の一六、心數非數門。

【二七】十八界等。同上二の一七、有報無報門。

【二八】十八等。同上二の一八、共心、不共心門。

の有報と名く。
云何が意界の無報なる。若し意界の報若し意界の非報非報法の意界なる、是を意界の無報と名く。
意識界も亦是の如し。
云何が法界の有報なる。若し法界の報法たる、是を法界の有報と名く。
云何が法界の有報なる。法界の〔p.537a〕善の報なるを除く餘の法界の[二二]善有爲、若しは不善の受・想、乃至、煩惱・使・結・二定・一切の色、是を法界の有報と名く。
云何が法界の無報なる。若しは法界の報、若しは法界の非報非報法なる、無貪・無恚・無癡・煩惱・使・結・身口の非戒無教を除く餘の法界の無報なる、是を法界の無報と名く。
[二三]十八界は幾か心・幾か非心なる。七は心、十一は非心なる。
云何が七は心なる。[二四]七識界、是を七は心なりと名く。
云何が十一は非心なる。十色界と法界と、是を十一は非心なりと名く。
[二五]十八界は幾か心相應・幾か非心相應なる。十は非心相應、七は心相應非心相應を說かず、一は二分にして或は心相應或は非心相應なり。
云何が十は非心相應なる。十色界、是を十は非心相應なりと名く。
云何が七は心相應非心相應を說かざる。七識界、是を七は心相應非心相應を說かずと名く。
云何が一は二分にして或は心相應或は非心相應なる。法界、是を一は二分にして或は心相應或は非心相應と名く。
云何が法界の心相應なる。若し法界の心數なる受・想・乃至煩惱・使、是を法界の心相應と名く。
云何が法界の非心相應なる。若し法界の若し心に非ざる生乃至非想非非想處智なる、是を法界の非心相應と名く。

【二二】善の次。大正本等には「若しは」を入るも、宋元明、宮內省の四本によりて除く。
【二三】十八界等。同上二の一四、心・非心門。
【二四】七識界。新譯では普通七心界といふ所で、六識並に意根界を總稱す。
【二五】十八界等。同上二の一五、心相應非心相應門。

の非受なる、是を法界の非受と名く。

二〇 內・外も亦是の如し。

二一 十八界は幾か有報幾か無報なる。十三は無報、五は二分にして或は有報或は無報なり。

云何が十三は無報なる。八色界と五識界と、是を十三は無報なりと名く。

云何が五は二分にして或は有報或は無報なる。色界・聲界・意界・意識界・法界、是を五は二分にして、或は有報或は無報なりと名く。

云何が色界の有報なる。若し色界の報法なる、是を色界の有報と名く。

云何が色界の有報なる。若しは色界の善若しは不善なる、若しは善心若しは不善心が所起なる去來・屈申・迴轉の身敎、是を色界の有報と名く。

云何が色界の無報なる。若しは色界の報、色界の非報非報法なる身の好色・非好色・端嚴・非端嚴、姸醜・非屈醜・嚴淨・非嚴淨、無記心所起の去來・屈申・迴轉の身敎、若しは外の色の眼識が所知なる、是を色界の無報と名く。

云何が聲界の有報なる。若し聲界の報法なる、是を聲界の有報と名く。

云何が聲界の有報なる。若しは聲界の善若しは不善、若しは善心若しは不善心が所起なる集聲・音句・言語の口敎、是を聲界の有報と名く。

云何が聲界の無報なる。若しは聲界の報若しは聲界の非報非報法なる身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、無記心が所起なる集聲・音句・言語の口敎、若しは外の聲の耳識が所知なる、是を聲界の無報と名く。

云何が意界の有報なる。若し意界の報法なる、是を意界の有報と名く。

云何が意界の有報なる。意界の善の報なるを除く、餘の意界の善若しは不善の意界なる、是を意界

【二〇】內外。同上、二の一二、內外門例釋。
【二一】十八界等。同上二の一三、有報無報門。

云何が觸界の受なる。若し觸界の內なる、是を界の受と名く。
云何が觸界の受なる、若し觸界の業報・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、是を觸界の受と名く。
云何が觸界の非受なる。若し觸界の外なる、若し外觸の身識が所知なる若し冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、及び餘の外觸の身識が所知なる、是を觸界の非受と名く。
云何が眼識界の受なる。若し眼識界の內なる、是を眼識界の受と名く。
云何が眼識界の受なる。若し眼識界の業報・煩惱所生の報にして我分の攝なる眼識界、是を眼識界の受と名く。
云何が眼識界の非受なる。若し眼識界の外の眼識界なる、是を眼識界の非受と名く。
耳識界・鼻識界・舌識界・身識界も亦是の如し。
云何が意界の受なる。若し意界の內なる、是を意界の受と名く。
云何が意界の受なる。若し意界の業報・煩惱所生の報にして我分の攝なる、是を意界の受と名く。
云何が意界の非受なる。若し意界の外なる、是を意界の非受と名く。
云何が意界の非受なる。若し意界の善・不善若しは無記にして我分の攝に非ざる意界、是を意界の非受と名く。意識界も亦是の如し。
云何が法界の受なる。若し法界の內なる、是を法界の受と名く。
云何が法界の受なる。若し法界の業報・煩惱所生の報にして我分の攝なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・〔〇〕悅・喜・心進・信・欲・念・怖・生・命・有漏の身進、是を法界の受と名く。
云何が法界の非受なる。若し法界の外なる、是を法界の非受と名く。
云何が法界の非受なる。若し法界の善若しは不善若しは無記にして我分の攝に非ざる、餘の法界

云何が色界の非受なる。若しは色界の善若しは不善、若しは無記にして我分の攝に非ざる、若しは善心若しは不善心若しは非報非報法心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、若しは外の色の眼識が所知なる、是を色界の非受と名く。

云何が聲界の受なる。若し聲界の是れ內なる、是を聲界の受と名く。

云何が聲界の受なる。若し聲界の業報・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、受心が所起の集聲・音句、言語の口敎、是を聲界の受と名く、

云何が聲界の非受なる。若し聲界の外なる、是を聲界の非受と名く。

云何が聲界の非受なる。若しは聲界の善若しは不善若しは無記にして、我分の攝に非ざる、若しは善心若しは不善心若しは非報非報法心が所起の集聲・音句・言語の口敎、若しは外聲の耳識が所知なる、是を聲界の非受と名く。

云何が香界の受なる。若し香界の內なる、是を[一七]香界の受と名く。

云何が香界の受なる。若し香界の業報・煩惱所生の報にして我の分攝なる身の好香・非好香・軟香・非軟香・適意香・非適意香、是を香界の受と名く。

云何が香界の非受なる。若し香界の外なる、外香の鼻識が所知なる樹依香・樹心香・樹膠香・樹皮香・葉香・花香・果香・界香・非界香、及び餘の外香の鼻識が所知なる、是を香界の非受と名く。

云何が味界の受なる。若し味界の內なる、是を味界の受と名く。

云何が味界の受なる。若し味界の業報・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・澀・瘂、是を味界の受と名く。

云何が味界の非受なる。若し味界の外なる、外味の舌識が所知なる若し甜・酢・苦・辛・鹹・淡・[一八]外・汁及び餘の外味の舌識が所知なる、是を味界の非受と名く。

【一九】外・汁。宋元明三本には「水汁」。

云何が法界の有漏なる。若し法界の非學非無學なる受・想、乃至、無想定・初の四色、是を法界の有漏と名く。

云何が法界の無漏なる。若し法界の無愛なる、是を法界の無漏と名く。

云何が法界の無漏なる。信根及び相應の心數法、若しは法の非緣・無愛なる、是を法界の無漏と名く。

云何が法界の無漏なる。若し法界の若しは學・無學、若しは非聖の無爲なるなり。――學人の結・使を離れ、乃至卽ち阿羅漢を得する若しは實の人若しは趣の若し受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫〔p. 536a〕無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・得・果・滅盡定、正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡・非智緣盡・決定法・住・緣・空處智・識處智・不用處智・非想非非想處智なる、是を法界の無漏と名く。

[一六]有愛・無愛、有求・無求、當取・非當・取有・取無取・有勝無勝も亦是の如し。

[一七]十八界は幾か受・幾か非受なる。五は受、十三は二分にして或は受或は非受なり。

云何が五は受なる。眼界・耳界・鼻界・舌界・身界、是を五は受なりと名く。

云何が十三は二分にして或は受或は非受なる。色界・聲界・香界・味界・觸界、眼識界・耳識界・鼻識界・舌識界・身識界・意界・意識界・法界、是を十三は二分にして或は受或は非受と名く。

云何が色界の受なる。色界の若し內なる、是を色界の受と名く。

云何が色界の受なる。若し色界の業報・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好色・非好色・端嚴・非端嚴・姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨なる、若しは[一八]受心が所起の去來・屈申・廻轉の身教、是を色界の受と名く。

云何が色界の非受なる。若し色界の外なる、是を色界の非受と名く。

【一六】有愛等。同上二の六、有愛無愛門、二の七、有求・無求、二の八、當取・非當取、二の九、有取・無取、二の一〇、有勝・無勝の等例釋。

【一七】十八界等。同上二の一一、受・非受門。

【一八】受。Upādāna. 卽ち新譯の「取も」の意。

〔〇〕云何が法界の聖なる。若し法の無漏なる、是を法界と名く。

云何が法界の聖なる。信根及び信根相應の心數法、若しは法の[一三]非緣・無漏なる、是を法界の聖と名く。

云何が法界の聖なる。若しは法界の聖、若しは法界の學、若しは無學なるなり。――學人の結使を離れ、乃至、卽ち阿羅漢果を得する若しは實の人若しは趣の若し受・想・思・觸・思惟・覺・觀、見・慧・解脫・無癡・順信・悅喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・得・果・滅盡定、正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡・決定、是を法界の聖と名く。

[一四]十八界は幾か有漏・幾か無漏なる、十五は有漏、三は二分にして或は有漏・或は無漏なり。

云何が十五は有漏なる。十色界と五識界と、是を十五は有漏なりと名く。

云何が三は二分にして或は有漏或は無漏なる。意界・意識界・法界、是を三は二分にして或は有漏或は無漏なりと名く。

云何が意界の有漏なる。意界の若しは有愛なる、是を意界の有漏と名く。

云何が意界の有漏なる。意界の若し非學非無學の意界なる、是を意界の有漏と名く。

云何が意界の無漏なる、若し意界の無愛なる、是を意界の無漏と名く。

云何が意界の無漏なる。若し意界の信根と相應する意界なる、是を意界の無漏と名く。

云何が意界の無漏なる。若し意界の若し學・無學なるなり、――[一五]學人の結使を離れ、乃至、卽ち阿羅漢果を得する若しは實の人若しは趣の意界、是を意界の無漏と名く　意識界も亦是の如し。

云何が法界の有漏なる。若し法界の有愛なる、是を法界の有漏と名く。

云何が法界の有漏なる。受受陰・想受陰・行受陰、若しは色の不可見・無對にして有愛なる、是を法界の有漏と名く。

【一三】非緣。宋元明、宮內省の四本には非非緣に作る。卷第一中の相應處には「無緣」。

【一四】十八等。同上二の五、有漏無漏門。

【一五】學人。大正本等には「學」の字なきも、上來の文に照らし、且つ、宋元明、宮內省の四本に從つて補入。

云何が三は二分にして或は聖或は非聖なる。意界・意識界・法界、是を三は二分にして或は聖或は非聖なりと名く。

云何が意界の非聖なる。若し意界の有漏なる、是を意界の非聖と名く。

云何が意界の非聖なる。若し意界の非學非無學の意界なる、是を意界の非聖と名く。

云何が意界の聖なる。若し意界の無漏なる、是を意界の聖と名く。

云何が意界の聖なる。若し意界の信根と相應する意界なる、是を意界の聖と名く。

云何が意界の聖なる。若し意界の學若しは無學なるなり――學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信、若しは堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の寂靜を觀じ、實の如く苦・集・滅・道を觀じて未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、煩惱を離れて修道する、見學人の若しは須陀洹・若しは斯陀含・若しは阿那含なるが觀智具足し、若しは智地し若しは觀解脫心して即ち沙門果の若しは須陀洹果、若しは斯陀含果若しは阿那含果なるを證する、無學人の、阿羅漢を得むと欲し、未得の聖法を得むと欲し、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して、即ち阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは趣の若し意界なる、是を意界の聖と名く。

意識界も亦是の如し。

云何が法界の非聖なる。若し法界の有漏なる、是を法界の非聖と名く。

云何が法界の非聖なる。受受陰・想受陰・行受陰、若しは色の不可見・無對にして有漏なる、若しは非聖の無爲なる、是を法界の非聖と名く。

云何が法界の非聖なる。若し法界の、若しは非學非無學なる受・想乃至無想定、初の四色、非聖の七無爲、是を法界の非聖と名く。

非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡・非智緣盡・決定・法住・緣、空處・識處・不用處・非想非非想處、是を法界と名く。

九　十八界には幾か色幾か非色なりや。十は色、七は非色、一は二分にして、或は色、或は非色なり。

云何が十は色なる。眼界・耳界・鼻界・舌界・身界・色界・聲界・香界・味界・觸界、是を十は色なりと名く。

云何が七は非色なる。眼識界・耳識界・鼻識界・舌識界・身識界・意界・意識界、是を七は非色なりと名く。

云何が一は二分にして或は色、或は非色なる。法界、是を一を二分にして或は色、或は非色なりと名く。

云何が法界の色なる。身口の非戒無敎・有漏の身口の戒無敎、有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除、是を法界の色と名く。

云何が法界の非色なる。受・想乃至滅盡定・智緣盡、乃至非想非非想處、是を法界の非色と名く。

一〇　十八界は幾か可見、幾か不可見なる。一は可見、十七は不可見なり。

云何が一は可見なる。色界、是を一の可見と名く。

云何が十七は不可見なる。色界を除く餘は不可見なり。

一一　十八界は幾か有對、幾か無對なる。十は有對、八は無對なり。

云何が十は有對なる。十色界、是を十は有對なりと名く。

云何が八は無對なる。七識界と法界と、是を八は無對なりと名く。

一二　十八界は幾か聖、幾か非聖なる。十五は非聖、三は二分にして或は聖、或は非聖なり。

云何が十五は非聖なる。十色界と五識界と、是を十五は非聖なりと名く。

【九】十八界等。以下又前品同準に第二段、十八界の諸門分別。今はまづその(一)十八界の二種分別の一、色非色門。
備考―こゝの諸門分別も、(一)二門分別三六、三門分別五、四門分別二、合計四三門で、依然、前品中のそれに同じ。

【一〇】十八界等。同上二の二、可見、不可見門。

【一一】十八等。同上二の三、有對無對門。

【一二】十八界等。同上二の四、聖非聖門。

云何が味界なる。若し色の不可見・有對にして、舌識が所知なる、是を味界と名く。
云何が味界なる。若し味香の業報・煩惱所生の報にして、我分の攝なる身の[七]甜・酢・苦・醎・辛・淡・涎、瘡若しは外味の舌識が所知なる若しは甜・酢・苦辛・醎・淡・若しは水若しは汁、及び餘の外味の舌識が所知なる、是を味界と名く。
云何が觸界なる。若し觸入なる、是を觸界と名く。
云何が觸界なる。若し色の不可見・有對にして身識が所知なる、是を觸界と名く。
云何が觸界なる。若し觸界の業報・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の冷・熱[P.535a]・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、若しは外の觸の身識が所知なる、是を觸界と名く。
云何が眼識界なる。若し識の、是れ眼根が色境界に主として已に生ずると、今に生ずると、當に生ずると、不定なると、是を眼識界と名く。
云何が耳・鼻・舌・身識界なる。若し識の、身根が觸境界に主として已に生ずると、今に生ずると、當に生ずると、不定なると、是を身識界と名く。
云何が意界なる。意の法を知り法を思惟し法を念じて若し初心の已に生ずると、今に生ずると、當に生ずると、不定なると、是を意界と名く。
云何が意識界なる。若し識の、彼の境界に相似して不離なると、及び餘の相似の心の已に生ずると、今に生ずると、當に生ずると、不定なると、是を意識界と名く。
云何が法界なる。若し法入なる、是を法界と名く。
云何が法界なる。受陰・想陰・行陰、若しは色の不可見・無對なる、若しは無爲、是を法界と名く。
云何が法界なる。[八]受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無貪・無恚・無癡、順信・悔・不悔・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念定・心捨・疑・怖・煩惱・使・生・老・死・命・結、無想定・得・果・滅盡定・身口の

【七】酢。宋元明及び宮內省の四本には醋に作る。下も同じ。

【八】受等。第一卷中の同章下を參照せよ。

云何が色界なる。色入、是を色界と名く。
云何が色界なる。若し色の行色の相に隨ふ、是を色界と名く。
云何が色界なる。若し色の可見・有對にして眼識の所知なる。是を色界と名く。
云何が色界なる。若し色界の業報・煩惱所生の報にして我〔己〕分の攝なる身の好色・非好色、端嚴非端嚴・妍膚・非妍膚・嚴淨、非嚴淨・若しは善心若しは不善心若しは無記心が所起なる去來・屈申・廻轉の身教、若しは外色の眼識が所知なる青・黃・赤・白・紫・黑・麁・細・長・短・方・圓・水・陸・光・影・烟・雲・塵・霧・氣・明・闇及び餘の外色の眼識が所知なる。是を色界と名く。
云何が聲界なる。聲入、是を聲界と名く。
云何が聲界なる。若し色の不可見・有對にして耳識が所知なる、是を聲界と名く。
云何が聲界なる。若し聲界の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、若しは善心若しは不善心若しは無記心が所起の集聲・音句・言語の口教、若しは外聲の耳識が所知なる[五]唄聲・大鼓聲・小鼓聲・箏聲・箜篌聲・銅鈸聲・舞聲・歌聲・伎樂聲・[六]哭聲、男聲・女聲・人聲・非人聲・衆生聲・非衆生聲・牛聲・去聲・來聲・相觸聲・風聲・雨聲・水聲、諸大相觸の聲及び餘の外聲の耳識が所知なる、是を聲界と名く。
云何が香界なる。若し香入、是を香界と名く。
云何が香界なる。若し色の不可見・有對にして鼻識が所知なる、是を香界と名く。
云何が香界なる。若し香界の業報・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好香・非好香、軟香・非軟香、適意香・非適意香、若しは外香の鼻識が所知なる樹根香・樹心香・樹膠香・樹皮香・葉香・花香・果香、好香・非好香及び餘の外香の鼻識が所知なる、是を香界と名く。
云何が味界なる。若し味入なる、是を味界と名く。

【五】唄。宋元明、宮內省、聖語藏の五本には「貝」に作る。
【六】哭聲。宋元明及び宮內省の四本には笑聲に作る。

卷の第二[一]〔p.534b〕

問分界品[二]　第二

[三]問ふ幾界ありや。答へて曰はく十八界あり。

云何が十八界なる。眼界・耳界・鼻界・舌界・身界、色界・聲界・香界・味界・觸界・眼識界・耳識界・鼻識界・舌識界・身識界・意界・意識界・法界なり。

云何が眼界なる。眼根、是を眼界と名く。

云何が眼界なる。眼入、是を眼界と名く。

云何が眼界なる。若しは眼の我分の攝なる四大所造の淨色、是を眼界と名く。若しは眼の我分の攝なる眼界の四大所造の過去・未來・現在の淨色、是を眼界と名く。

云何が眼界なる。若しは眼の我分の攝にして已に色を見ると今に見ると當に見ると不定なると、若しは眼の我分の攝にして、色光の已に來ると、今に來ると、當に來ると、不定なると、是を眼界と名く。

云何が眼界なる。若しは眼の我分の攝にして眼の已に色に對すると、今に對すると、當に對すると、不定なると、若しは眼の我分の攝にして、色の已に眼に對すると、今に對すると、當に對すると、不定なると、是を眼界と名く。若しは眼の無礙にして、是れ眼なる、是れ眼入なる、是れ眼根なる、是れ眼界なる、是れ[四]田なる、是れ物なる、是れ門なる、是れ藏なる、是れ世なる、是れ淨なる、是れ泉なる、是れ海なる、是れ沃燋なる、是れ洄澓なる、是れ瘡なる、是れ繫なる、是れ目なる、是れ我の分に入る、是れ此岸なる、是れ內入の眼にして色を見る、是を眼界と名く。

耳界・鼻界・舌界・身界も亦是の如し。

【一】卷の第二。大正本等は以下每卷の初めに、「舍利阿毘曇論卷の……」、等及び譯者名を記せるも、今はすべて省く。

【二】界品。Dhātuvarga—右第一卷に於て十二處につきなしたると同じ檢討を今や累ねて十八界に關してする部門。從つて大體のことは右第一品に準じて知るべし。

【三】問ふ以下。第一段、十八界の列記及びその解說。

【四】田なる以下。前卷相應下を參照すべし。

云何が法入の未來なる。若し法入の未だ生ぜず、未だ出でざる受・想乃至正身除なる、是を法入の未來と名く。

云何が法入の現在なる。若し法入の生じて未だ滅せざる受・想乃至正身除なる、是を法入の現在と名く。

云何が法入の〔三〕非過去非未來非現在なる。若し法入の無爲——智緣盡、乃至、非有想非無想處智なる、是を法入の非過去非未來非現在と名く。〔一〇八〕

【一〇八】以下每卷末に、大正本等は例により、必ず「舍利弗阿毘曇論卷の……」等と記せるも、今にすべてこれを省く。

の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除、是を法入の色界繫と名く。
云何が法入の無色界繫なる。若し法入の無色漏、有漏の受・想・思・觸・思惟・見・慧・解脫・無礙・順信・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・疑・煩惱・使・生・老・死・命・結、有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除なる、是を法入の無色界繫と名く。
云何が法入の不繫なる。若し法入の聖無漏・無爲——受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無礙・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心・捨・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身進・正身除・九無爲なる、是を法入の不繫と名く。
[一〇六]十二入は幾か過去、幾か未來、幾か現在、幾か[一〇七]非過去非未來非現在なる。十一は三分にして或は過去或は未來或は現在、一は四分にして或は過去、或は未來、或は現在、或は非過去非未來非現在なり。
云何が十一は三分にして或は過去、或は未來、或は現在なる。眼入乃至觸入、是を十一は三分にして或は過去、或は未來、或は現在と名く。
云何が一は四分にして或は過去、或は未來、或は現在、或は非過去非未來非現在なる。法入、是を一は四分にして或は過去、或は未來、或は現在、或は非過去非未來非現在なると名く。
云何が眼入の過去なる。若し眼入の生じ已りて滅せる眼入、是を眼入の過去と名く。
云何が眼入の未來なる。若し眼入の未だ生ぜず未だ出でざる、是を眼入の未來と名く。
云何が眼入の現在なる。若し眼入の生じて未だ滅せざる眼入、是を眼入の現在と名く。
乃至、觸入も亦是如し。
云何が法入の過去なる。若し法入の生じ已りて滅したる受・想乃至正身除なる、是を法入の過去と名く。

【一〇六】十二入等。同上四の二、三世及非世分別門。
【一〇七】非過去等＝非世（超時間的）。

來・屈申・廻轉の身教、若しは外色の眼識が所知にして色漏、有漏なる、是を色入の色界繫と名く。

云何が聲入の欲界繫なる。若し聲入の欲漏、有漏の身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲・欲行心所起の集聲・音句・言語の口教、若しは外聲の耳識が所知にして欲漏・有漏なる、是を聲入の欲界の繫と名く。

云何が聲入の色界繫なる。若し聲入の色漏・有漏の身の好聲・衆妙聲・軟聲・色行心所起の集聲・音句・言語の口教、若しは外聲の耳識が所知にして色漏・有漏なる、是を聲入の色界繫と名く。

云何が觸入の欲界繫なる。若し觸入の欲漏・有漏の身の冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、若しは外觸の身識が所知にして欲漏・有漏なる、是を觸入の欲界繫と名く。

云何が觸入の色界繫なる。若し觸入の色漏・有漏の身の冷・熱・輕・重・麁・細・軟・滑、若しは外觸の身識が所知にして色漏・有漏なる、是を觸入の色界繫と名く。

云何が意入の欲界繫なる。若し意入の欲漏・有漏の眼識乃至意識なる、是を意入の欲界繫と名く。

云何が意入の色界繫なる。若し意入の色漏・有漏の眼識・耳識・身識・意識なる、是を意入の色界繫と名く。

云何が意入の無色界繫なる。若し意入の無色漏・有漏の意界・意識界、是を意入の無色界繫と名く。

云何が意入の[一〇五]不繫なる。若し意入の聖・無漏の意界・意識界なる、是を意入の不繫と名く。

云何が法入の欲界繫なる。若し法入の欲漏・有漏の受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無貪・無恚・無癡・順信・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・不放逸・念・疑・怖・煩惱・使・生・老・死・命・結、身口の非戒無教、有漏の身口の戒無教・有漏の身進なる、是を法入の欲界繫と名く。

云何が法入の色界繫なる。若し法入の色漏有漏の受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・[P. 534a] 悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・疑・煩惱・使・生・老・死・命・結・無想定、有漏

【一〇五】不繫。巴、Apariyāpanna。

觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・煩惱・使・生・命・結・身口の非戒無敎、有漏の身進、是を法入の思惟斷因と名く。

云何が法入の非見斷非思惟斷因なる。若し法入の若しは善[若しは]善法の報、若しは法入の非報非報法なる、疑・煩惱・使・結・身口の非戒無敎を除く餘の法入の見斷[因]に非ず思惟斷因に非ざる、是を法入の非見斷非思惟斷因と名く。

[一〇二]十二入は幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界の繫、幾か不繫なる。四は欲界繫、六は二分にして或は欲界繫、或は色界繫、二は四分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なり。

云何が四は欲界繫なる。舌入・鼻入・香入・味入、是を四は欲界繫なりと名く。

云何が六は二分にして或は欲界繫、或は色界繫なる。眼入・耳入・身入・色入・聲入・觸入、是を六は二分にして或は欲界繫、或は色界繫なりと名く。

云何が二は四分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なる。意入・法入、是を二は四分にして或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なりと名く。

云何が眼入の欲界繫なる。若し眼入の[一〇三]欲漏・有漏の眼入なる、是を眼入の欲界繫と名く。

云何が眼入の色界繫なる。若し眼入の[一〇四]色漏有漏の眼入なる、是を眼入の色界繫と名く。

耳入・身入亦是の如し。

云何が色入の欲界繫なる。若し色入の欲漏、有漏の身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、妍膚・非妍膚、嚴淨・非嚴淨、欲行心所起の去來・屈申・廻轉の身敎〔〇〕若しは外色の眼識が所知にして欲漏、有漏なる、是を色入の欲界繫と名く。

云何が色入の色界繫なる。若し色入の色漏、有漏の身の好色・端嚴・好膚・嚴淨、色行心所起の去

【一〇二】十二入等。以下同上の諸門四種分別の一、三界繫及び不繫等四門。

【一〇三】欲漏等。品類足論二、には「眼處の欲界繫の大種所造なるなり」(毘曇部五、p.104)と。

【一〇四】色漏等。準じて品類足論二には「眼處の色界繫の大種所造なるなり」と。

云何が香入の思惟斷因なる。若し香入の思惟斷法の報なる身の不好香・非歎香・不適意香なる、是を香入の思惟斷因と名く。

云何が香入の非見斷非思惟斷因なる。若し香入の善法の報、若しは香入の非報非報法なる、身の好香・軟香・適意香、若しは外香の鼻識が所知なる、是を香入の非見斷・非思惟斷の因と名く。

云何が味入の見斷因なる。若し味入の見斷法の報なる身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・癮、是を味入の見斷因と名く。

云何が味入の思惟斷因なる。若し味入の思惟斷法の報なる、身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・癮、是を味入の思惟斷因と名く。

云何が味入の非見斷非思惟斷因なる。若し味入の善法の報、若しは味入の非報非報法なる身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・涎・癮、若しは外味の舌識が所知なる、是を味入の非見斷非思斷因と名く。

云何が觸入の見斷因なる。若し觸入の見斷法の報なる身の冷・熱・麁・重・堅・澁、是を觸入の見斷因と名く。

云何が觸入の思惟斷因なる。若し觸入の思惟斷法の報なる身の冷・熱・麁・重・堅・澁、是を觸入の思惟斷因と名く。

云何が觸入の非見斷非思惟斷因なる。若し觸入の善法の〔ヒ〕報、若しは觸入の非報法なる身の冷・熱・輕・細・軟・滑、若しは外觸の身識が所知なる、是を觸入の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が法入の見斷因なる。若しは法入の見斷因なる、若しは法入の若しは見斷法の報なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・生・命・結・身口の非戒無教、有漏の身進、是を法入の見斷因と名く。

云何が法入の思惟斷因なる。若しは法入の思惟斷なる、若しは法入の思惟斷法の報なる受・想・思・

云何が意入の思惟斷因なる。若し意入の思惟斷法の報なる眼識乃至意識、是を意入の思惟斷因と名く。

云何が意入の非見斷非思惟斷因なる。若しは意入の善、若しは意入の善法の報、若しは意入の非報非報法の眼識乃至意識なる、是を意入の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が色入の見斷因なる。若しは色入の見斷、若しは色入の見斷法の報なる身の非好色・非端嚴・非姸膚・非嚴淨、見斷因心所起の去來・屈申・廻轉の身教なる、是を色入の見斷因と名く。

云何が色入の思惟斷因なる。若しは色入の思惟斷、若しは思惟斷法の報なる身の非好色・不端嚴・非姸膚、非嚴淨・思惟斷因心の所起の去來・屈申・廻轉の身教、是を色入の思惟斷の因と名く。

云何が色入の非見斷非思惟斷因なる。若しは色入の善、若しは色入の善法の報、若しは色入の非報非報法なる身の好色・端嚴・姸膚・嚴淨、非見斷非思惟斷の心所起去來・屈申・廻轉の身教、若しは外色の眼識が所知なる、是を色入の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が聲入の見斷因なる。若しは聲〔P. 533a〕入の見斷、若しは聲入の見斷法の報なる身の不好聲・非衆妙聲・非軟聲、見斷法因心が所起の集聲・音句・言語の口教、是を聲入の見斷の因と名く。

云何が聲入の思惟斷因なる。若し聲入の若しは思惟斷、若しは聲入の思惟斷法の報なる身の不好聲・非衆妙聲、非軟聲・思惟斷因心が所起の集聲・音句・言語の口教、是を聲入の思惟斷因と名く。

云何が聲入の非見斷非思惟斷因なる、若しは聲入の善、若しは聲入の善法の報、若しは聲入の非報非報法なる身の好聲、衆妙聲・軟聲・非見斷非思惟斷因の心が所起の集聲・音句・言語の口教、若しは外の聲の耳識が所知なる、是を聲入の非見斷非思惟斷因と名く。

云何が香入の見斷因なる。若し香入の若しは見斷法の報なる身の不好香・非軟香・不適意香なる、是を香入の見斷因と名く。

云何が意入の思惟斷なる。若し意入の不善にして、見斷に非ざる、思惟斷の煩惱に相應する心・意界・意識界なる、是を意入の思惟斷と名く。

云何が意入の非見斷非思惟斷なる。若しは意入の善若しは無記の眼識乃至意識なる、是を意入の非見斷非思惟斷と名く。

云何が法入の見斷なる。若しは法入の不善にして思惟斷に非ざる、見斷の煩惱と一時〔一〇〇〕俱斷なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結・身口の非戒無教、有漏の身進なる、是を法入の思惟斷と名く。

云何が法入の非見斷非思惟斷なる。若しは法入の善若しは無記にして、疑煩〔〇〕惱・使・結・身口の非戒無教を除く餘の法入なる、是を法入の非見斷非思惟斷と名く。

〔一〇一〕十二入は幾か見斷因、幾か思惟斷因、幾か非見斷非思惟斷因なる。一切は三分にして、或は見斷因、或は思惟斷因、或は非見斷非思惟斷因なり。

云何が眼入の見斷因なる。若し眼入の見斷法の報なる地獄・畜生・餓鬼の眼入、是を眼入の見斷因と名く。

云何が眼入の思惟斷因なる。若し眼入の思惟斷法の報なる地獄・畜生・餓鬼の眼入、是を眼入の思惟斷因と名く。

云何が眼入の非見斷非思惟斷因なる。若し眼入の善法の報なる天上、人中の眼入、是を眼入の非見斷非思惟斷因と名く。

耳入・鼻入・舌入・身入も亦是の如し。

云何が意入の見斷因なる。若しは意入の見斷、若しは意への見斷法の報なる眼識乃至意識、是を意入の見斷の因と名く。

〔一〇〇〕俱斷。宋元明、宮內省の四本には「斷」を除く。

〔一〇一〕十二入等。同上三の五、三斷因門。

云何が八は非見斷非思惟斷なる。眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・香入・味入・觸入、是を八は非見斷非思惟斷なりと名く。

云何が四は三分にして或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷なる。色入・聲入・意入・法入、是を四は三分にして或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷と名く。

云何が色入の見斷なる。若し色入の不善にして思惟斷に非ざる、見斷の煩惱心が所起なる去來・屈申・廻轉の身敎なる、是を色入の見斷と名く。

云何が色入の思惟斷なる。若し色入の不善にして見斷に非ざる、思惟斷の煩惱心が所起なる去來・〔b〕屈申・廻轉の身敎なる　是を色入の思惟斷と名く。

云何が色入の非見斷非思惟斷なる。若しは色入の善、若しは無記なる身の好色・非好色・端嚴・非端嚴・姸膚・非姸膚・嚴淨・非嚴淨、若しは善心若しは無記心が所起なる去來・屈申・廻轉の身敎、若しは外色の眼識が所知なる、是を色入の非見斷非思惟斷と名く。

云何か聲入の見斷なる。若し聲入の不善にして、思惟斷に非ざる、見斷の煩惱心が所起なる集聲・音・句言語の口敎なる、是を聲入の見斷と名く。

云何が聲入の思惟斷なる。若し聲入の不善にして見斷に非ざる、思惟斷の煩惱心が所起なる集聲・音句・言語の口敎なる、是を聲入の思惟斷と名く。

云何が聲入の非見斷非思惟斷なる。若しは聲入の善若しは無記なる、身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、若しは善心若しは無記心が所起の集聲・音句の口敎、若しは外聲の耳識が所知なる、是を聲入の非見斷非思惟斷と名く。

云何が意入の見斷なる。若し意入の不善にして思惟斷に非ざる、見斷の煩惱に相應する意界・意識界なる、是を意入の見斷と名く。

云何が聲入の非報非報法なる。若しは聲入の無記にして我分の攝に非ざる、非報非報法心が所起の集聲・音句・言語の口教、若しは外の聲の耳識が所知なる、是を聲入の非報非報法と名く。

云〔P. 530a〕何が意入の報なる。若しは意入の受、若しは意入の善の報なる眼識乃至意識、是を意入の報と名く。

云何が意入の報法なる。若し意入の有報なる、是を意入の報法と名く。

云何が意入の報法なる。意入の善報を除く餘の意入の善、若しは不善の意界、意識界なる、是を意入の報法と名く。

云何が意入の非報非報法なる。若し意入の無記にして我分の攝に非ざる眼識乃至意識なる、是を意入の非報非報法と名く。

云何が法入の報なる。若しは法入の受、若しは法入の善の報なる、無貪・無恚を除く餘の受・想乃至心捨・怖・生・命・無想定・得・果・滅盡定・有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除・正語・正業・正命・正身進・正身除なる、是を法入の報と名く。

云何が法入の報法なる。若し法入の有報なる、是を法入の報法と名く。

云何が法入の報法なる。法入の善の報を除く餘の法入の善・有爲、若しは不善の受・想乃至は煩惱・使・結・二定・一切の色、是を法入の報法と名く。

云何が法入の非報非報法なる。若しは法入の無記にして我分の攝に非ざる、若しは聖無爲――受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・生・老・死・有漏の身進、九無爲なる、是を法入の非報非報法と名く。

[九九] 十二入は幾か見斷、幾か思惟斷、幾か非見斷、非思惟斷なる。八は非見斷非思惟斷、四は三分にして、或は見斷、或は思惟斷、或は非見斷非思惟斷なり。

【九九】十二入等。同上三の四、三斷門。

云何が味入の非報非報法なる。若し味入の外なるなり——若し外の味入の舌識が所知なる若し甜・酢・苦・辛・鹹・淡・水・汁、及び餘の外味の舌識の所知なる、是を味入の非報非報法と名く。

云何が觸入の報なる。若し觸入の受なる、是を觸入の報と名く。

云何が觸入の報なる。若し觸入の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる、身の冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟なる、是を觸入の報と名く。

云何が觸入の非報非報法なる。若し觸入の外なるなり——若し外の觸の身識が所知なる、若しは冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、及び餘の外の觸の身識の所知なる、是を觸入の非報非報法と名く。

云何が色入の報なる。若し色入の受なる、是を色入の報と名く。

云何が色入の報なる。若し色入の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる、身の好色・非好色・端嚴・非端嚴・姸膚・非姸膚・嚴淨・非嚴淨、受心が所起の去來・屈申・廻轉の身教、是を色入の報と名く。

云何が色入の有報なる。若し色入の有報なる、是を色入の報法と名く。

云何が色入の報法なる。色入の若しは善・不善、若しは善心、若しは不善心が所起の去來・屈申・廻轉の身教なる、是を色入の報法と名く。

云何が色入の非報非報法なる。若し色入の無記にして我分の攝に非ざる、非報非報法心が所起の去來・屈申・廻轉の身教、若しは外色の眼識が所知なる、是を色入の非報非報法と名く。

云何が聲入の報なる。若し聲入の業法・煩惱所生の報にして我分の攝たる、身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲・受心が所起の集聲・音句・言語の口教、是を聲入の報と名く。

云何が聲入の報法なる。若し聲入の有報なる、是を聲入の報法と名く。

云何が聲入の報法なる。若しは聲入の善・不善、若しは善心若しは不善心が所起の集聲・音句・言語の口教なる、是を聲入の報法と名く。

果・滅盡定・正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡、是を法入の無學と名く。

云何が法入の非學非無學なる。若しは法入の非聖の[九五]受受陰・想受陰・行受陰、若しは[九六]色の不可見・無對有漏なる、非聖の無爲なる受・想乃至無想定、初の四色、非聖の七無爲、是を法入の非學非無學と名く。

[九七]十二入は幾か報幾か報法幾か非報非報法なる。五は報、三は二分にして、或は報、或は非報非報法、四は三分にして、或は報、或は報法、或は非報非報法なり。

云何が五は報なる。眼入・耳入・鼻入・舌入・身入、是を五は報なりと名く。

云何が三は二分にして、或は報、或は[九八]非報非報法なる。香入・味入・觸入、是を三は二分にして或は報、或は非報非報法なりと名く。

云何が四は三分にして、或は報、或は報法、或は非報非報法なる。色入・聲入・意入・法入、是を四は三分にして或は報、或は報法、或は非報非報法なりと名く。

云何が香入の報なる。香入の若し受なる、是を香入の報と名く。

云何が香入の報なる。香入の若し業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好香・非好香・軟香・非軟香・適意香・非適意香なる是を香入の報と名く。

云何が香入の非報非報法なる。若し香入の外なるなり――若し外香の鼻識の所知なる樹根香・樹心香・樹膠香・樹皮香・葉香・花香・果香・好香・非好香、及び餘の外香の鼻識が所知なる、是を香入の非報非報法と名く。

云何が味入の報なる。若し味入の受、是を味入の報と名く。

云何が味入の報なる。若し味入の業法・煩惱所生の報にして、我分の攝なる、身の甜・酢・苦・辛・鹹・淡・澀・癈、是を〔三〕味入の報と名く。

【九五】受受陰。初の受の字は、宋元明、宮內省四本によりて補入。

【九六】色の等。他の所には有漏の身口の戒無敎などあるもの。

【九七】十二入等。同上三の三、報報法等三門。

【九八】非報の下。大正本等には或の字があるが誤で、宋元明、宮內省四本に從ひて省く。

は實の入若しは趣の意界・意識界なる、是を意入の學と名く。
云何が意入の無學なる。若し意入の聖にして學に非ざる、是を意入の無學と名く。
云何が意入の無學なる。若し意入の無學の信根と相應する意界・意識界、是を意入の無學と名く。
云何が意入の無學なる。無學人の、阿羅漢を得むと欲し、未得の聖法を得むと欲して修道し、觀智具足し若しは智地し若しは觀解脫心して即ち阿羅漢果を得する若しは實の人、若しは趣の若し意界・意識界なる、是を意入の無學と名く。
云何が意入の非學非無學なる。若し意入の非聖の識受陰たる眼識乃至意識、是を意入の非學非無學と名く。
云何が法入の學なる。若し法入の聖にして無學に非ざる、是を法入の學と名く。
云何が法入の學なる。學の信根及び信根相應の心數法、若しは法の非緣、無漏にして無學に非ざる、是を法入の學と名く。
云何が法入の學なる。學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、乃至、即ち阿那含果を得せる若しは實の人若しは趣の若し受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡・決定〔b〕、是を法入の學と名く。
云何が法入の無學なる。若し法入の聖にして學に非ざる、是を法入の無學と名く。
云何が法入の無學なる。無學の信根及び信根相應の心數法、若しは法入の若し非緣、無漏にして學に非ざる、是を法入の無學と名く。
云何が法入の無學なる。無學人の乃至、即ち阿羅漢果を得せる若しは實の人、若しは趣の若しは受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・得・

入の無記と名く。

云何が法入の善なる。若し法入の修の受・想、乃至心捨・無想定・得・果・滅盡定、有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除・正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡・決定、是を法入の善と名く。

云何が法入の不善なる。若し法入の斷の受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・使・結・身口の非戒無教、有漏の身進、是を法入の不善と名く。

云何が法入の無記なる。若しは法入の受、若しは法入の非報非報法、非聖の無爲なる、受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・生・死・命、有漏の身進、非聖の七無爲、是を法入の無記と名く。

〔九四〕十二入は幾か學、幾か無學、幾か非學非無學なる。十は非學非無學、二は三分にして或は學、或は無學或は非學非無學なり。

云何が十は非學非無學なる。十色入、是を十は非學[P. 531a]非無學と名く。

云何が二は三分にして或は學、或は無學或は非學、非無學なる。意入・法入、是を二は三分にして或は學、或は無學、或は非學非無學なりと名く。

云何が意入の學なる。若し意入の聖にして無學に非ざる、是を意入の學と名く。

云何が意入の學なる。若し意入の學の信根と相應する意界・意識界なる、是を意入の學と名く。

云何が意入の學なる。學入の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信、若しは堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、如實に苦・集・滅・道を觀じて未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、煩惱を離れて修道する、見學人の若しは須陀洹若しは斯陀含若しは阿那含なるが、若しは觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して即ち沙門果の若しは、須陀洹果若しは斯陀含果、若しは阿那含果なるを證する、若し

【九四】十二入等。同上三の二三學門。

無記なり。
云何が八は無記なる。眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・香入・味入・觸入、是を八は無記なりと名く。
云何が四は三分にして、或は善、或は不善、或は無記なる。色入・聲入・意入・法入、是を四は三分にして或は善、或は不善、或は無記なりと名く。
云何が色入の善なる。若し色入の修善心が所起の去來・屈〔○〕申・廻轉の身敎なる、是を色入の善と名く。
云何が色入の非善なる。若し色入の[九三]隨不善心が所起の去來・屈申・廻轉の身敎なる、是を色入の非善と名く。
云何が色入の無記なる。若し色入の受、色入の非報非報法なる、身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、妍膚・非妍膚、嚴淨・非嚴淨、無記心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、若しは外色の眼識が所知なる、是を色入の無記と名く。
云何が聲入の善なる。若し聲入の修善心が所起の集聲・音句・言語の口敎、是を聲入の善と名く。
云何が聲入の不善なる。若し聲入の斷不善心が所起なる集聲・音句・言語の口敎、是を聲入の不善と名く。
云何が聲入の無記なる。若しは聲入の受、若しは聲入の非報非報法なる、身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、無記心所起の集聲・音句・言語の口敎、若しは外聲の耳識が所知なる、是を聲入の無記と名く。
云何が意入の善なる。若し意入の修の意界・意識界なる、是を意入の善と名く。
云何が意入の不善なる。若し意入の斷の意界・意識界なる、是を意入の不善と名く。
云何が意入の無記なる。若しは意入の受、若しは意入の非報非報法の眼識乃至意識なる、是を意

【九三】隨。宋元明、宮内省四本には斷に作る。下方本文中も準ず。

云何が四は二分にして或は(b)修、或は非修なる。色入・聲入・意入・法入、是を四は二分にして或は修、或は非修よりと名く。

云何が色入の修なる。色入の若し善心所起の去來・屈申・廻轉の身教なる、是を色入の修と名く。

云何が色入の非修なる。若しは色入の不善、若しは無記なる身の好色・非好色、端嚴・非端嚴、妍膚・非妍膚、嚴淨・非嚴淨、若しは不善心若しは無記心所起の去來・屈申・廻轉の身教、若しは外色の眼識の所知なる、是を色入の非修と名く。

云何が聲入の修なる。聲入の若し善・善心所起の集聲・音句・言語の口教なる、是を聲入の修と名く。

云何が聲入の非修なる。若しは聲入の不善、若しは無記なる身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、若しは不善心若しは無記心所起の集聲・音・句・言語の口教、若しは外聲の耳識の所知なる是を聲入の非修と名く。

云何が意入の修なる。意入の若し善の意界・意識界なる、是を意入の修と名く。

云何が意入の非修なる。意入の若しは不善、若しは無記なる眼識乃至は意識、是を意入の非修と名く。

云何が法入の修なる。法入の若し善の受・想乃至心捨・無想定・得・果・滅盡定・有漏の身口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除・正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡・決定、是を法入の修と名く。

云何が法入の非修なる。若しは法入の不善、若しは無記なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・生・老・死・命・結、身口の非戒無教、有漏の身進、非聖の七無爲、是を法入の非修と名く。

[九二] 十二入は幾か證、幾か非證なる。一切は證にして事の如く知見す。

[九三] 十二入は幾か善、幾か非善、幾か無記なる。八は無記、四は三分にして或は善、或は不善、或は

【九二】 十二入。同上二ノ三六、證・非證門。

【九三】 十二入等。同上十二入の諸門三種分別ノ一、三性門。

知と名く。

云何が色入の非斷智知なる。色入の若しは善、若しは無記なる身の好色・非好色、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、若しは善心若しは無記心所起の去來・屈申・廻轉の身教、若しは外色の眼識の所知なる是を色入の非斷智知と名く。

云何が聲入の斷智知なる。若し聲入の不善・不善心所起の集聲・音句・言語の口教、是を聲入の斷智知と名く。

云何が聲入の非斷智知なる。若しは聲の善、若しは無記なる身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、若しは善心若しは無記心所起の集聲・音句・言語の口教、若しは外聲の耳識の所知なる、是を聲入の非斷智知と名く。

云何が意入の斷智知なる。若し意入の不善の意界・意識界なる、是を意入の斷智知と名く。

云何が意入の非斷智知なる。意入の若しは善、若しは無記なる眼識乃至は意識、是を意入の非斷智知と名く。

云何が法入の斷智知なる。若しは法入の不善なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・疑・怖・煩惱・使・結・身口の非戒無教、有漏の身進、是を法入の斷智知と名く。

云何が法入の非斷智知なる。使・結、身口の非戒無教を除く餘の法入の非斷智知なる、是を法入の非斷智知と名く。

[八九] 斷・非斷も亦是の如し。

[九〇] 十二入は幾か修、幾か非修なる。八は非修、四は二分にして或は修、或は非修なり。

云何が八は非修なる。眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・香入・味入・觸入、是を八は非修なりと名く。

【八九】斷等。同上二ノ三四、斷非斷門。
【九〇】十二入等。同上二ノ三五、修非修門。

云何が法入の非因なる。若し法入の緣・無報・不共業の生・老・死・命・得・果・有漏の身進・九無爲、是を法入の非因と名く。

[七九] 十二入は幾か有因か、幾か無因なる。十一は有因、一は二分にして或は有因或は無因なり。

云何が十一は有因なる。十色入と意入と、是を十一は有因なりと名く。

云何が一は二分にして或は有因或は無因なる。法入、是を一は二分にして或は有因或は無因なりと名く。

云何が法入の有因なる。若し法入の[八〇]有緒の受・想乃至正身除なる、是を法入の有因と名く。

云何が法入の無因なる。若し法入の[八一]無緒の智緣盡乃至非想非非想處智、是を法入の無因と名く。

[八二] 有緒・無緒・有因[八三]・無因・有緣・無緣・有爲・無爲も亦是の如し。

[八四] 十二入は幾か知、幾か非知なる。一切、知にして事の如く知見す。

[八五] 十二入は幾か識、幾か非識なる。一切、識にして意識が事の如く識す。

[八六] 十二入は幾か解、幾か非解なる。一切、解にして事の如く知見す。

[八七] 十二入は幾か了、幾か非了なる。一切、了にして事の如く知見す。

[八八] [P. 530a] 十二入は幾か斷智知、幾か非斷智知なる。八非斷智知、四は二分にして或は斷智知、或は非斷智知なり。

云何が八は非斷智知なる。眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・香入・味入・觸入、是を八は非斷智知なりと名く。

云何が四は二分にして或は斷智知、或は非斷智知なる。色入・聲入・意入・法入、是を四は二分にして或は斷智知、或は非斷智知と名く。

云何が色入の斷智知なる。若し色入の不善・不善心所起の去來・屈申・廻轉の身敎、是を色入の斷智

【七九】十二入等。同上二ノ二五、有因非因門。

【八〇】有緒。? Saṃyojaniya.

【八一】無緒。? Asaṃyojaniya.

【八二】有緒以下。同上二ノ二六、有緒無緒門、二七、有緣無緣門、二八、有爲無爲門をのぶ。

【八三】有因等。今の文は恐らく不可で、宮內省、聖語藏二本、有因以下を有緣無緣、有爲無爲とするを可とせん。

【八四】十二入。同上二ノ二九、知非知門。

【八五】十二等。同上二ノ三〇、識非識門。

【八六】十二入等。同上二ノ三一、解非解門。

【八七】十二等。同上二ノ三二、了非了門。

【八八】十二入は等。同上二ノ三三、斷智知非斷智知門。

云何が一は因なる。意入、是を一は因なりと名く。
云何が七は非因なる。眼入・耳入・鼻入・舌入・意入・香入・味入、是を七は非因なりと名く。
云何が四は二分にして或は因、或は非因なる。色入・聲・入觸入・法入、是を四は二分にして或は因或は非因なりと名く。
云何が色入の因なる。色入の若し報法なる、是を色入の因と名く。
云何が色入の因なる。色入の若し善心・不善心が所起の去來・屈伸・廻轉の身敎なる、是を色入の因と名く。
云何が色入の非因なる。色入の若しは報なる、色入の若しは非報非報法なる、身の好色・非好色・端嚴・非端嚴、姸膚・非姸膚、嚴淨・非[三]嚴淨、無記心が所起の去來・廻轉・屈伸の身敎、若しは外色の眼識が所知なる、是を色入の非因と名く。
云何が聲入の因なる。若し聲入の報法なる、是を聲入の因と名く。
云何が聲入の因なる。若しは聲入の善・不善なる、若しは善心・不善心が所起の集聲・音句・言語の口敎なる、是を聲入の因と名く。
云何が聲入の非因なる。若しは聲入の報なる、若しは聲入の非報非報法なる、身の好聲・非好聲、衆妙聲・非衆妙聲、軟聲・非軟聲、無記心が所起の集聲・音句・言語の口敎、若しは外聲の耳識の所知なる、是を聲入の非因と名く。
云何が聲入の因なる。[七八]四大—地大・水大・風大・火大、是を觸入の因と名く。
云何が觸入の非因なる。四大を除く餘の觸入法なる、是を觸入の非因と名く。
云何が法入の因なる。法入の緣なる、若しは法入の非緣の有報なる得・果を除く餘の法入の非緣の善報・受・想、乃至、煩惱・使・二定・結・一切の色、是を法入の因と名く。

【七八】四大の上。宋元明、宮内省四本には「因たる」を附け加ふ。

云何が法入の業相應なる。若し法入の思相應なる、思を除く餘の受・想乃至煩惱・使、是を法入の業相應と名く。

云何が法入の非業相應なる。若し法入の思相應に非ざる生、乃至、非想非非想處智、是を法入の非業相應と名く。

云何が法入の業相應非業相應なる。思、是を法入の業相應非業相應を說くべからずと名く。

[七五]十二入は幾か共業幾が不共業なる。一は共業、十は非共業、一は二分にして或は共業[或は]非共業なり。

云何が一は共業なる。意入、是を一は共業なりと名く。

云何が十は非共業なる。十色入、是を十は非共業なりと名く。

云何が一は二分にして或は共業或は非共業なる。法入、是を一は二分にして或は共業或は非共業なりと名く。

云何が法入の共業なる。若し法入の隨業轉にして業と共に生じ共に住し共に滅する受・想・定・心・思・觸、乃至、煩惱・使・無想定・滅盡定・有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除、是を法入の共業と名く。

云何が法入の非共業なる。法入の若し隨業轉ならずして、業と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる、定心の思・生・老・死・命・結・得・果・身口の非戒無敎、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進[等]ならざる九無爲、是を法入の非共業と名く。

[七六]隨業轉・不隨業轉も亦是の如し。

[七七]十二入は幾か因幾か非因なる。一は因、七は非因、四は二分にして或は因、或は非因なり。

【七五】十二入等。同上二ノ二二、共業非共業門。

【七六】隨業等。同上二ノ二三、隨業轉非隨業轉門。

【七七】十二入等。同上二ノ二四、因非因門。

名く。

云何が三は二分にして或は業或は非業なる。色入・聲入・法入、是を三は二分にして或は業、或は非業と名く。

云何が色入の業なる。若し善心・不善心・無記心が所起の去來・屈申・廻轉の身教、是を色入の業と名く。

云何が色入の非業なる。身の好色・非好色、姝妙・非姝妙、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、若しは外色の眼識の所知なる、是を色入の非業と名く。

云何が聲入の業なる。若し善心・不善心・無記心が所起の集聲・音句・言語の口教、是を聲入の業と名く。

云何が聲入の非業なる。若しは好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、若しは外聲の耳識の所知なる、是を聲入の非業と名く。

云何が法入の業なる。思、身・口の非戒無教、有漏の身口の戒無教、正語・正業・正命、是を法入の業と名く。

云何が法入の非業なる。思、身・口の非戒無教、有漏の身口の戒無教、正語・正業・正命を除く餘の法入の非業なる、是を法入の非業と名く。

[七四] 十二入は幾が業相應、幾が非業相應なる。一は業相應、十は非業相應、一は三分にして或は業相應或は非業相應、或は業相應非業相應を說くべからず。

云何が一は業相應なる。意入、是を一は業相應なりと名く。

云何が十は非業相應なる。十色入、是を十は非業相應なりと名く。

云何が一は三分にして或は業相應或は非業相應或は業相應非業相應を說くべからずなる、法入、是を〔一〕一は三分にして或は業相應或は非業相應或は業相應非業相應を說くべからずと名く。

【七四】 十二入等。同上二ノ二
一、業相應非相應門。

[七〇] 十二入は幾か緣、幾か非緣なる。一は緣、十は非緣、一は二分にして或は有緣或は非緣なり。
云何が一は緣なる。意入。是を一は緣なりと名く。
云何が十は無緣なる。十色入、是を十は無緣なりと名く。
云何が一は二分にして或は緣或は非緣なる。法入、是を一は二分にして或は緣或は非緣なりと名く。
云何が法入の緣なる。若し法入の心數＝受・想乃至煩惱・使、是を法入の緣と名く。
云何が法入の無緣なる。若し法入の心數に非ざる生、乃至非想非非想處智なる、是を法入の無緣と名く。

[七一] 十二入は幾か共心、幾か非共心なる。十一は非共心、一に二分にして或は共心或は非共心なり。
云何が十一は非共心なる。十色入と意入と、是を十一は非共心なりと名く。
云何が一は二分にして或は共心、或は非共心なる。法入、是を一は二分にして或は共心或は非共心なりと名く。
云何が法入の共心なる。若し法入の隨心轉にして心と共に生じ、〔P. 529b〕共に住し、共に滅する受・想乃至煩惱・使、有漏の身口の戒無敎、有漏の身進、有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除、是を法入の共心と名く。
云何が法入の非共心なる。若し法入の不隨心轉にして、心と共に生ぜず、共に住せず、共に滅せざる生、乃至、非想非非想處智、是を法入の非共心と名く。

[七二] 隨心轉・不隨心轉も亦是の如し。

[七三] 十二入は幾か業、幾か非業なる。九は非業、三は二分にして或は業或は非業なり。
云何か九は非業なる。眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・意入・香入・味入・觸入、是を九は非業なりと

【七〇】十二等。同上二ノ一七、緣非緣門（緣非緣は新譯の有所緣、無所緣に當る）。
【七一】十二入等。同上二ノ一八、共心非共心門。
【七二】隨心轉等。同上二ノ一九、隨心非隨心轉門。
【七三】十二入等。同上二ノ二〇、業非業門。

使・結・身口の非戒無教を除く餘の法入は無報なり。

[六六]十二入は幾か心、幾か非心なる。一は心にして十一は非心なり。

云何が一は心なる。意入、是を一は心なりと名く。

云何が十一は非心なる。意入を除く餘は非心なれば、是を十一は非心なりと名く。

[六七]十二入は幾か心相應、幾か非心相應なる。十は非心相應〔〇〕、一は心相應非心相應を説くべからず。一は二分にして、或は心相應、或は非心相應なり。

云何が一は心相應非心相應を説くべからざる。意入、是を一は心相應非心相應を説くべからずと名く。

云何が一は二分にして或は心相應、或は非心相應なる。法入、是を一は二分にして或は心相應或は非心相應なりと名く。

云何が法入の心相應なる。若し法入の[六八]心數＝受想乃至煩惱使なる、是を法入の心相應と名く。

云何が法入の非心相應なる。若し法入の心所に非ざる生、乃至、非想非非想處智なる、是を法入の非心相應と名く。

[六九]十二入は幾か心數、幾か非心數なる。十一は非心數、一は二分にして或は心數或は非心數なり。

云何か十一は非心數なる。十色入と意入、是を十一は非心數なりと名く。

云何が一は二分にして或は心數或は非心數なる。法入、是を一は二分にして或は心數或は非心數なりと名く。

云何が法入の心數なる。若し法入の有緣の受・想乃至煩惱・使、是を法入の心數と名く。

云何が法入の非心數なる。若し法入の無緣なる生、乃至、非想非非想處智なる、是を法入の非心數と名く。

【六六】十二入等。同上二ノ一四、心・非心門。

【六七】十二等。同上二ノ一五、心相應非心相應門。

【六八】心數。新譯の心所。

【六九】十二入等。同上二ノ一六、心數非心數門。

云何が色入の有報なる。若し色入の[六二]善・不善心、善・不善心所起の去來・屈申・廻轉なる、是を色入の有報と名く。

云何が色入の無報なる。若しは色入の報、若しは色入の非報非報法なる、身の好色・非好色・姝妙・非姝妙・妍膚・非妍膚・嚴淨・非嚴淨、無記心所起の去來・屈申・廻轉、若しは外色の眼識の所知なる、是を色入の無報と名く。

云何が聲入の有報なる。若し聲入の報法なる、是を聲入の有報と名く。

云何が聲入の有報なる。聲入の若しは善、若しは不善なる、善心・不善心所起の集聲・音・句・言・語の口敎なる、是を聲入の有報と名く。

云何が聲入の無報なる。若しは聲入の報若しは聲入の非報非報法なる、身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、若しは無記心所起の集聲・音句・言語の口敎、若しは外の聲の耳識が所知なる、是を聲入の無報と名く。

云何が意入の有報なる。若し意入の報法なる、是を意入の有報と名く。

云何が意入の有報なる。意入の善報なるを除く餘の意入の善・不善の意界・意識界なる、是を意入の有報と名く。

云何が意入の無報なる。若しは意入の報若しは意入の非報非報法なる眼識乃至意識、是を意入の無報と名く。

云何が法入の有報なる。若し法入の報法なる、是を法入の有報と名く。

云何が法入の有報なる。法入の善報なるを除く餘の法入の善有僞なる、若しは不善の受・想乃至煩惱・使・結、[六三]二定、法入の[六四]一切の色、是を法入の有報と名く。

云何が法入の無報なる。若し法入の[六五]報[若しは]法入の非報非報法なる、無貪・無恚・無癡・煩惱

【六二】善・不善心。心は衍字か。下方聲入の下參照。

【六三】二定。滅盡定と無想定。

【六四】一切の色。上出の諸法入法列記の下參照。

【六五】報。宋元明三本及び宮內省本には「報法」に作る。

云何が觸入の非受なる。若し外の觸入にして身識の所知なる若しは冷若しは熱若しは輕若しは重若しは麁若しは細若しは澁若しは滑若しは堅若しは軟及び餘の外觸の身識の所知なる、是を意入の受と名く。

云何が意入の受なる。若し意入の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる眼識乃至意識、是を意入の受と名く。

云何が意入の非受なる。若し意入の外なる、是を意入の非受と名く。

云何が意入の非受なる。若し意入の善・不善・無記にして我分の攝に非ざる眼識乃至意識なる、是を意入の非受と名く。

云何が法入の受なる。若し法入の內なる、是を法入の受と名く。

云何が法入の受なる。若し法入の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・悔・不悔・悅・喜・心進・信・欲・念・怖・生・命・有漏の身進、是を法入の受と名く。

云何が法入の非受なる。若し法入の外なる、是を法入の非受と名く。

云何が法入の非受なる。若し法入の善・不善・無記にして、我分の攝に非ざる、命を除く餘の法入の非受なる、是を法入の非受と名く。

六〇 內・外も亦是の如し。

六一 十二入は幾か有報にして幾か無報なる。八は無報、四は二分にして或は有報或は無報なり。

云何が八は無報なる。眼入、耳・鼻・舌・身入・香入・味入・觸入、是を八は無報なりと名く。

云何が四は二分にして或は有[ヒ]報或は無報なる。色入・聲入・意入・法入、是を四は二分にして或は有報或は無報なりと名く。

云何が色入の有報なる。若し色入の報法なる、是を色入の有報と名く。

【六〇】內・外。同上二ノ一二、內外門。
【六一】十二入以下。同上二ノ一三、有報無報門。

云何が聲入の受なる。若し聲入の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲・受心が所起の集聲・音句・語言の口敎、是を聲入の受と名く。

云何が聲入の非受なる。若し聲入の外なる、是を聲入の非受と名く。

云何が聲入の非受なる。若しは聲入の若し善・不善・無記にして我分の攝に非ざる、若しは善心・不善心・非報非報法心が所起の集聲・音句・言語の口敎なる、若しは外聲の耳識が所知なる、是を聲入の非受と名く。

云何が香入の受なる。若し香入の內の香入なる、是を香入の受と名く。

云何が香入の受なる。若しは香入の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好香・非好香・軟香・非軟香・適意香・非適意香、是を香入の受と名く。

云何が香入の非受なる。若し香入〔P. 528a〕の外なるなり――若し外香の鼻識の所知なる樹根香・樹心香・樹膠香・樹皮香・葉香・花香・果香・好香・非好香、及び餘の外香の鼻識の所知なる、是を香入の非受と名く。

云何が味入の受なる。若し味入の內の味入なる、是を味入の受と名く。

云何か味入の受なる。若し味入の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の甜・酢・苦・辛・醎・淡・涎癊、是を味入の受と名く。

云何が味入の非受なる。若し味入の外なるなり――若し外味の舌識が所知なる若しは甜・酢、若しは苦辛、若しは醎・淡、若しは水若しは汁及び餘の外味の舌識が所知なる、是を味入の非受と名く。

云何が觸入の受なる。若し觸入の內なる、是を觸入の受と名く。

云何が觸入の受なる。若し觸入の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、是を觸入の受と名く。

云何が法入の無漏なる。若しは信根・信根相應の心數法、若しは法の無緣無愛なる、是を法入の無漏と名く。

云何が法入の無漏なる。若しは法入の學、若しは無學若しは無爲なるなり。――學人の結・使を離れ、乃至即ち阿羅漢果を證する若しは實の人若しは趣の若し受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨〔○〕・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡・決定法住緣・空處智・識處智・不用處智・非想非非想處智なる、是を法入の無漏と名く。

[五八] 有愛・無愛・有求・無求・當取・非當取・有取・無取・有勝・無勝も亦是の如し。

[五九] 十二入は幾か受にして幾か非受なる。五は受、七は二分にして或は受或は非受なり。

云何が五は受なる。眼入・耳・鼻・舌・身入、是を五は受なりと名く。

云何が七は二分にして或は受或は非受なる。色入・聲・香・味・觸入・意入・法入、是を七は二分にして或は受或は非受なりと名く。

云何が色入の受なる。若し色入の若しは內なる、是を色入受と名く。

云何が色入の受なる。若しは色入の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好色・非好色、姝妙・非姝妙、姸膚・非姸膚、嚴淨・非嚴淨、若しは受心所起の去來・屈申・廻轉の身數、是を色入の受と名く。

云何が色入の非受なる。若し色入の外なる、是を色入の非受と名く。

云何が色入の非受なる。色入の若しは善・不善・無記にして我分の攝に非ざる、若しは善心・不善心・非報非報法心所起の去來・屈申・廻轉、若しは外色の眼識の所知なる、是を色入の非受と名く。

云何が聲入の受なる。若し聲入の內の聲入なる、是を聲入の受と名く。

【五八】有愛以下。同上二ノ六、有愛無愛門、同七、有求無求門、同八、當取非當取門、同九、有取無取門、同一〇、有勝無勝門の五門例釋。
【五九】十二入等。同上一一、受非受門。

若しは觀解脫心して、即ち阿羅漢果を證する、若しは實の人若しは趣の若し受・想・思・觸・思惟・覺・觀・見・慧・解脫・無癡・順信・悅・喜・心進・心除・信・欲・不放逸・念・定・心・捨・得・果・滅盡定・正語・正業・正命・正身進・正身除・智緣盡・決定なる、是を法入の聖と名く。

[五五]十二入は幾か有漏にして幾か無漏なる。十は有漏、二は二分にして、或は有漏、或は無漏なり。

云何が十は有漏なる。十色入、是を十は有漏なりと名く。

云何が二は二分にして或は有漏或は無漏なる。意入と法入と、是を二は二分にして或は有漏或は無漏なりと名く。

云何が意入の有漏なる。若し意入の[五六]有愛なる、是を意入の有漏と名く。

云何が意入の有漏なる。識受陰、是を意入の有漏と名く。

云何が意入の有漏なる。意入の非學非無學の眼識乃至意識なる、是を意入の有漏と名く。

云何が意入の無漏なる。若し意入の無愛なる、是を意入の無漏と名く。

云何が意入の無漏なる。若し意入の信根相應の意界・意識界なる、是を意入の無漏と名く。

云何が意入の無漏なる。若しは意入の學、若しは無學なるなり。——學人の結使を離れ、[五七]乃至、即ち阿羅漢果を證する若しは實の人若しは趣の若しは意界・意識界なる、是を意入の無漏と名く。

云何が法入の有漏なる。若し法入の有愛なる、是を法入の有漏と名く。

云何が法入の有漏なる。受受陰・想受陰・行受陰、若しは色の不可見無對にして有愛なる、是を法入の有漏と名く。

云何が法入の有漏なる。若し法入の非學非無學の受・想、乃至無想定、初の四色なる、是を法入の有漏と名く。

云何が法入の無漏なる。若し法入の無愛たる、是を法入の無漏と名く。

身除」の四をいふか。

【五二】七無爲。九無爲中、右の二以外の七か。

【五三】寂滅の下。大正本等には道の字をおくも、宋元明宮内省四本に從つて省く。

【五四】滅。前の意入の下には盡に作る。參照すべし。

【五五】十二入等。同上二ノ五、有漏無漏門。

【五六】有愛。聖護藏本には有受に作る。下の無愛も準ず。

【五七】乃至等。上の二の同準の文下參照。

集・盡・道を觀じて未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、煩惱を離れて修道する、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果・阿那含果なるを證する、無學人の、阿羅漢[四七]果を得むと欲し、未得の聖法を得むと欲して觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち阿羅漢果を證する若しは實の人若しは趣の若しは意界若しは意識界なる、是を意入の聖と名く。

云何が法入の非聖なる。若し法入の有漏なる、是れを法入の非聖と名く。

云何が法入の非聖なる。[四八]受受陰・想受陰・行受陰、若しは[四九]色の不可見無對にして有漏なる、若しは[五〇]非聖の無爲、是を法入の非聖と名く。

云何が法入の非聖なる。法入の非學非無學の受想、乃至、無想定、[五一]初の四色の非聖・[五二]七無爲、是を法入の非聖と名く。

云何が法入の聖なる。若し法入の無漏なる、是を法入の聖と名く。

云何が法入の聖なる。若しは信根・信根相應の心數法、若しは法の無緣・無漏なる、是を法入の聖と名く。

云何が法入の聖なる。若し法入の學・無學なるなり。――無學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅心・堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の[五三]寂滅を觀じ、實の如く苦・集・[五四]滅・道を觀じて未だ得ざるを得むと欲し、未だ解せざるを解せむと欲し、未だ證せざるを證せむと欲し、煩惱を離れて修道する、見學人の若しは須陀洹・斯陀含・阿那含なるが、觀智具足し、若しは智地し、若しは觀解脫心して卽ち沙門果の若しは須陀洹果・斯陀含果、若しは阿那含果なるを證する〔て〕・無學人の、阿羅漢を得むと欲し、未得の聖法を得むと欲して觀智具足し、若しは智地し

に解説してよい場合には自ら問題はないが、種々分稱して解説する要ある場合には、最初、云云は二分（又は三分等）にして或は、或は××なりと總示しておき、次に、その各に約して個々說明するといつた大體の樣式である。而して、この型は以下のすべての品に於ける同樣の門に通じ、やゝ一貫的なる意義を有する。

【四二】可見等。十二入の諸門二種分別の二、可見不可見門。

【四三】有對等。同上二の三有對無對分別。

【四四】十色入。眼耳鼻舌身の五色根と色聲香味觸の五色境との十をさす。

【四五】聖等。同上二ノ四、聖非聖門。

【四六】受陰。新譯の取蘊 Upādāna-skandha に當る。

【四七】果。宋元明宮內省四本及び下文にはこの字を闕く。

【四八】受受陰。新譯の受取蘊 Vedanā-upādāna-skandha のこと。他も推して知るべし。

【四九】色の等。前の法處の解說中に、戒無表の有漏などいふものをさす。

【五〇】非聖の無爲。上出九無爲中、法住緣の二をさすか。

【五二】初の四色。上の法入を擧明せる中に「身口の非戒無敎、同戒無敎、有漏の身進同

正業・正命・正身進・正身除、是を法入の色と名く。

云何が法入の非色なる。受・想乃至滅盡定・智緣盡、乃至、非想非非想處智、是を法入の非色と名く。

十二入は幾か[四二]可見にして幾か不可見なる。一は可見にして十一は不可見なり。

云何が一は可見なる。色入、是を一は可見なりと名く。

云何が十一は不可見なる。九の色入・意入・法入、是を十一は不可見なりと名く。

十二入は幾か[四三]有對にして幾か無對なる。十は有對にして二は無對なり。

云何が十は有對なる。[四四]十色入、是を十は有對なりと名く。

云何が二は無對なる。意入・法入、是を二は無對なりと名く。

十二入は幾か[四五]聖にして幾か非聖なる。十は非聖、二は二分にして或は聖或は非聖なり。

云何が十は非聖なる。十色入、是を十は非聖なりと名く。

云何が二は二分にして或は聖或は非聖なる。意入と法入と、是を二は二分にして〔P. 527a〕或は聖或は非聖なりと名く。

云何が意入の非聖なる。若し意入の有漏なる、是を意入の非聖と名く。

云何が意入の非聖なる。若し意識[四六]受陰、是を意入の非聖と名く。

云何が意入の非聖なる。若し意入の非學非無學の眼識乃至意識なる、是を意入の非聖と名く。

云何が意入の聖なる。若し意入の無漏なる、是を意入の聖と名く。

云何が意入の聖なる。若し意入の信根と相應する意界・意識界なる、是を意入の聖と名く。

云何が意入の聖なる。若し意入の學・無學なるなり。――學人の結・使を離れ、聖心にして聖道に入り、若しは堅信・堅法なる、及び餘の趣の人の、行の過患を見、涅槃の寂滅を觀じ、實の如く苦・

【三五】 非戒無教。無教は則ち新譯の無表で、その非戒とは又二十一中參照。

【三六】 戒無教。又二十一中を見よ。

【三七】 智緣盡。以下は九無爲を明すもので、中の智緣盡は新譯の「擇滅」。

【三八】 非智緣盡。同上の「非擇滅」。

【三九】 決定等。又、二十一中を見よ。

【四〇】 空處智。以下順に同上の「空無邊處」「識無邊處」「無所有處」等に當る。

【四二】 十二入以下。如上十二入諸法の諸門分別をなす。今はまづ中の二種分別の一、色非色分別。而してこれらの諸分利門に關しては拙稿「南北兩七阿毘達磨論の交渉」(日本佛教學協會年報第五年＝昭和七年度)參照のこと。且つ各門の解說は又卷二十一中に概ね詳しいからまた參照すべし。備忘―以下の分別を大觀するに―(一)二種分別三十六門、(二)三種分別は三性門以下五門、(三)四種分別は三界繫及不繫門、三世及び非世門の二―以上合計四十三門。而してその個々の解說に當つては自なる一定の型があつて、まづ十二處中の例へば眼處がある一門に約し、單に全稱定言的

淡・涎・瘡、若しは外の味の舌識が所知なる若しは甜・酢、若しは苦・辛・鹹・淡・水汁、及び餘の外の味の舌識が所知なる、是を味入と名く。

云何が觸入なる。觸界、是を觸入と名く。

云何が觸入なる。若し色の不可見有對にして身識が所知なる、是を觸入と名く。

云何が觸入なる。若しは觸入の業法・煩惱の所生の報にして我分の攝なる身の[二二]冷・熱・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、若しは外の觸の身識の所知の若しは冷・熱(亡)・輕・重・麁・細・澁・滑・堅・軟、及び餘の外の觸の身識の所知なる、是を觸入と名く。

云何が法入なる。法界、之を法入と名く。

云何が法入なる。受・想・行陰、若しは[二三]色の不可見無對なる、若しは無爲、是を法入と名く。

云何が法入なる。[二四]受・想・[二五]思・觸・[二六]思惟・[二七]覺・[二八]觀・見・慧・[二九]解脫・[三〇]無貪・無恚・無癡・順信・悔・不悔・悅・喜・[三一]心進・[三二]心除・信・欲・不放逸・念・定・心捨・疑・怖・使・生・老・死・命・結・無想定・得・[三三]果・滅盡定・[三四]身口の[三五]非戒無教・有漏の身口の[三六]戒無教・有漏の身進・有漏の身除、正語・正業・正命・正身進・正身除・[三七]智緣盡・[三八]非智緣盡・[三九]決定・法住・緣・[四〇]空處智・識處智・不用處智・非想非非想處智、是を法入と名く。

[四一]十二入は幾か色にして幾か非色なる。十は色、一は非色、一は二分にして或は色或は非色なり。

云何が十は色なる。眼入・耳・鼻・舌・身入・色入・聲・香・味・觸入、是を十は色なりと名く。

云何が一は非色なる。意入、是を一は非色なりと名く。

云何が一は二分にして或は色或は非色なる。法入、是を一は二分にして或は色或は非色なりと名く。

云何が法入の色なる。身・口の非戒無教、有漏の身・口の戒無教、有漏の身進、有漏の身除、正語・

【二二】冷等。法蘊足論十（本國譯毘曇部三、p. 262）、品類足論（本國譯毘曇部五、p. 77）等を參照せよ。
【二三】色の等。無教色（新譯の無表色）のこと。
【二四】受等。以下諸の心所法で、使まで二十九ある。法蘊足論一〇（毘曇部三、p. 262）。品類足論一（同上五、p. 75以下）等を參照すべし。
【二五】思以下。上の受、想、行陰中の行陰攝の諸法をあぐ（滅盡定まで三十四ある）。詳細は卷二十一中に各解說あるをもつて參照のこと。
【二六】思惟。右の法蘊足論等には「作意」。
【二七】覺・觀。同上には「尋・伺」。
【二八】觀・見。同上の「智・見」に當るか。
【二九】解脫。同上には「勝解」。
【三〇】無貪等三。同上には「善根」。
【三一】心進。同上の〔心〕精進に當るべし。
【三二】心除。同上の心輕安に當る。
【三三】果。無想定の果たる同上の「無想事」のこと。
【三四】身口等。以下、上の法入全揭文中の「色の不可見無對なる」をかゝぐ（卽ち、新譯の無表業の列示）。

云何が色入なる。若し色の可見・有對にして眼識の所知なる、是を色入と名く。

云何が色入なる。若しは色入の業法・煩惱の所生の報にして我分の攝なる、身の好色・非好色、姝妙・非姝妙、妍膚・非妍膚、嚴淨(ヒ)・非嚴淨なる、若しは善心、若しは不善心、若しは無記心が所起の去來・屈伸・廻轉の[一九]身教、若しは外色の、眼識の所知たる青・黄・赤・白・黑・紫・麁・細・長・短・方・圓・水・陸・光・影・煙・雲・塵・霧・氣・明・闇等、及び餘の外色の眼識が所知なる、是を色入と名く。

云何が聲入なる。聲界、是を聲入と名く。

云何が聲入なる。若し[二〇]色の不可見有對にして耳識の所知なる、是を聲入と名く。

云何が聲入なる。若しは聲入の業法・煩惱所生の報にして我分の攝なる身の好聲・非好聲・衆妙聲・非衆妙聲・軟聲・非軟聲、若しは善心・不善心・無記心が所起なる集聲・音句・言語の口敎、若しは外の聲の耳識が所知なる貝聲・大鼓聲・小鼓聲・箏聲・箜篌聲・銅鈸聲・舞聲・歌聲・伎樂聲・悲聲・男聲・女聲・人聲・非人聲・衆生聲・非衆生聲・去聲・來聲・相觸聲・風聲・雨聲・水聲・[二一]諸大相觸聲、及び餘の外の聲の耳識が所知なる、是を聲入と名く。

云何が香入なる。香界、是を香入と名く。

云何が香入なる。若し色の不可見有對にして鼻識が所知なる、是を香入と名く。

云何が香入なる。若しは香入の業法、煩惱の所生の報にして我分の攝なる身の好香・非好香、軟香・非軟香、適意香・非適意香、若しは外の香の鼻識の所知なる樹根香・樹心香・樹膠香・樹波香・華香・葉香・果香・好香・非好香、及び餘の外の香の鼻識が所知なる、是を香入と名く。

云何が味入なる。味界、是を味入と名く。

云何が味入なる。若し色の不可見有對にして舌識の所知なる、是を味入と名く。

云何が味入なる。若しは味入の業法、煩惱の所生の報にして我分の攝なる身の甜・酢・苦・辛・鹹・

【一九】身教。新譯の身表(Kāya-vijñapti)。

【二〇】色の。「色陰攝にして」の意。

【二一】諸大。大は新譯の大種 Mahābhūta 卽ち地水火風をさす。

云何が意界なる。意の法を知り法を念じて、若し初心の已生・今生・當生・不定なる、是を意界と名く。

云何が意識界なる。若し識の相似にして彼の境界を離れざると、及び餘の相似の心との已生・今生・當生・不定なる、是を意識界と名く。

——是を七識界と名く。

云何が[一七]過去の識なる。若し識の已に滅せる、是を過去識と名く。

云何が未來の識なる。若し識の未生・未出なる、是を未來の識と名く。

云何が現在の識なる。若し心の生じて未だ滅せざる、是を現在の識と名く。

云何が內の識なる。若し識の受なる、是を內の識と名く。

云何が外の識なる。若し識の不受なる、是を外の識と名く。

云何が麁の識なる。若し識の欲界繫なる、是を麁の識と名く。

云何が細の識なる。若し識の色界繫・無色界繫・不繫なる、之を細の識と名く。

云何が卑の識なる。若しは識の不善なる不善法の報なる、若しは識の非報非報法にして、不適意なる、是を卑の識と名く。

云何が勝の識なる。若し識の善なる、善の報なる、若しは識の非報非報法にして適意なる、是を勝の識と名く。

云何が遠の識なる。若し諸の識の[一八]相遠・極相遠・不近・不近邊なる、是を遠の識と名く。

云何が近の識なる。若し諸の識の相近・極相近・近邊なる、是を近識と名く。

云何が色入なる。色界、是を色入と名く。

云何が色入なる。行たる色の相に隨ふ、是を色入と名く。

【一七】過去等。上文中に同じて、過去、現在、未來、內外、麁細、卑勝、遠近等といへるを釋す。

【一八】相。大正本の根に作るは非。縮藏本にも相に作る。

る、是れ[九]物なる、是れ[一〇]門なる、是れ藏なる、是れ[一一]世なる、是れ[一二]浄なる、是れ泉なる、是れ[一三]海なる、是れ沃燋なる、是れ洄澓なる、是れ瘡なる、是れ粱なる、是れ[一四]目なる、是れ我の分に入る、是れ[一五]此岸なる、是れ内入なる、眼の色を見ると、是を眼入と名く。

耳・鼻・舌・身入も亦是の如し。

云何が意入なる。意根、是を意入と名く。

云何が意入なる。識陰、是を意入と名く。

云何が意入なる、心・意・識・六識身・七識界、是を意入と名く。

云何が意入なる。若し識の過去・未來・現在、内・外、麁・細、卑・勝、遠・近なる、是〔P. 526 a〕を意入と名く。

云何が[一六]六識身なる。眼識身・耳・鼻・舌・身意識身なり。

云何が眼識身なる。眼に縁り色に縁り明に縁り思惟に縁る、此の四縁を以つて生ずる識の、已生・今生・當生・不定なる、是を眼識身と名く。

云何が耳・鼻・舌・身・意識身なる。意に縁り、法に縁り、思惟に縁る、此の三縁を以つて識の已生・今生・當生・不定なる、是を意識身と名く。

——是を六識身と名く。

云何が七識界なる。眼識界、耳・鼻・舌・身識界、意界・意識界なり。

云何が眼識界なる。若し識の、眼根が色境界に主として已生・今生・當生・不定なる、是を眼識界と名く。

云何が耳・鼻・舌・身識界なる。若し識の、身根が觸境界に主として已生・今生・當生・不定なる、是を身識界と名く。

【八】田。巴、Khettaṃ。—以下巴利毘崩伽論 p. 71 等參照（法僧伽尼論中も參照）。
【九】物。巴、Vatthuṃ。
【一〇】門。巴、Dvārā。
【一一】世。巴同上、Loko。
【一二】浄。巴同上、paṇḍaraṃ。
【一三】海。巴同上、Samuddo。
【一四】目。宋元明、聖語藏の四本には因に作る。然し、巴同上にも Nettaṃ (Guide or eye), Nayanaṃ (eye) 等とあれば今の目の方が正しかるべし。
【一五】此岸。巴、Orimaṃ tīraṃ。備考—毘崩伽論等には以上所出の以外にては今一、「空邑 Suñño Gāmo」といふを記するのみで、今あげられたる爾餘のものに當る所は見出されぬ。
【一六】六識身等。以下傍論で、右文中、六識身、七識界といふを釋す。

舍利弗阿毘曇論[一]

姚秦の罽賓三藏・[二]曇摩耶舍、[三]曇摩崛多[四]等と共に[五]譯す

卷の第一〔p.525c〕

[六]問分[七]入品　第一

問ふ、幾入ありや。答へて曰く、十二あり。

何等か十二なる。內の六入と外の六入となり。

何等か內の六入なる。眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・意入、是を內の六入と名く。

何等か外の六入なる。色入・聲入・香入・味入・觸入・法入、是を外の六入と名く。

——是の如きの內の六入と外の六入と、是を十二入と名く。

云何が眼入なる。眼根、是を眼入と名く。

云何が眼入なる。眼界、是を眼入と名く。

云何が眼入なる。若し眼の我分の攝にして、去・來・現在の四大所造の淨色なる、是を眼入と名く。

云何が眼入なる。若し眼の我分の攝にして過去・未來・現在の淨色なる、是を眼入と名く。

云何が眼入なる。我分の攝にして、已に色を見ると今に色を見ると當に色を見ると不定なると、若しは眼の我分の攝にして色光の已に來ると今に來ると當に來ると不定なると、是を眼入と名く。

云何が眼入なる。若し眼の我分の攝にして、色の已に眼に對すると、今に對すると、當に對すると、不定なると、若しは眼の無礙にして、是れ眼入なる、是れ眼根なる、是れ眼界なる、是れ[八]田な

【一】舍利弗阿毘曇論。Śāriputra-abhidharmaśāstra。

【二】曇摩耶舍。Dharmayaśas of Kubhā Cabul。(法稱)。407—415A.D.の間に主として翻經に從ふ。

【三】曇摩崛多。(Dharmagupta.)。(法藏、法護等)。

【四】等の字。宋元明、宮內省の四本には無し。

【五】譯。解題中參照。

【六】問分。? Paripṛcchā-vāra)。南傳 Vibhaṅga 論の同準の施設には Pañhāpucchakaṃ とある)。問答分別的に(一)入(新譯「處」)、(二)界、(三)陰(新譯「蘊」)、(四)四聖諦、(五)根、(六)七覺、(七)不善根、(八)善根、(九)大、(一〇)優婆塞(の五戒)の十段の諸法を(1)個々解說、(2)諸門分別の二段に分けて各記述せる部門。

【七】入品。Āyatana-varga。入は則ち新譯の「處」で、つまり、六內外處の記述をするもの。所謂六內外處に關しては集異門足論のその下(毘曇部二)等參照。

似るものがあつた旨をのべておいたが、その人氣ものであつたことに對する諸の證據としての諸文獻に隱顯する關係雜記は、色々の意味に於て、參考になり材料を價する所以も少くはなからうから、試みに氣づけるまゝを左に聊か列出し、もつて大方の披見に資し且つ顧みて私自らの備忘にもあてることゝしようか——

一、此の論と梵網六十二見經とは正量部の義なり。（上出—法華玄贊一—林常の倶舍論法義一—大日本佛教全書本上、p.14b; 三論玄義流通本 p.13b）。

二、有人の曰く、佛在世の時、舍利弗、佛語を解するが故に阿毘曇を作り、後、犢子道人等、讀誦して乃、今に至り、名けて舍利弗阿毘曇と爲す。（上出—智度論二—大正25, p.70a）。

三、舊譯家に準ずるに、舍利弗阿毘曇は乃ち正量部にして而も薩婆多に非ず（三論玄義頭註—同 p.13b）。

四、身子 Śāriputra（即ち舍利弗のこと）の毘曇とは舍利弗毘曇にして、正量部の義なり。上に已に辨ずるが如し。即ち、彼の論の非問分道品に具さに二空を辨ず。謂く、內空、外空、內外空、空空、大空、第一義空と。彼の論に明かすが如し。（三論玄義頭書同上— p.23b 上）

五、又、身子の毘曇も亦二空を辨ず。而も是れ小にして大に非ず……。問ふ、身子の毘曇も亦大を探りて小を釋せば……。彼、已に大を探れば則ち此は專らの小には非ざらむ。答ふ、身子の造る所は還つて佛の毘曇を釋す。佛說既に是れ小乘なり。彼の論寧ぞ大を探ると言はんや（同上本文—p.23bf）

六、可住子弟子部は即ち是れ舊犢子部なり。舍利弗は是れ羅睺羅の和上、羅睺羅は是れ可住子の和上にして、此の部は復是れ可住子の弟子なり。羅睺羅は舍利弗の毘曇を弘め、可住子は羅睺羅の所說を弘め、此の部は復、可住子の所說を弘むるなり。（同上本文—同上 p.57f）。

七、法上、賢乘、正量弟子、密林住—此の四部は舍利弗毘曇を釋して、義の少きこと有れば、經の義を以つて之に足す。故に異部を分つなり。（上出—同上頭書—同 p.52a 上）。

八、次に三百年中、可住子部より復、四部を出す。舍利弗毘曇の足らざるを嫌うて、更に各々論を作り、經中の義を取りて之に足すを以つて、所執の異るが故に四部となる。（同上本文—同 p.58a）

九、衆論の名を立つるに凡そ三種有り。一に法に從つて名と爲す……。二に人に從つて名を立つ。舍利弗阿毘曇等の如し（上本文—同 p.63ab）。

昭和九年一月盡日阿傘（讀者館）

當面の具體的な事實に照して考へれば、もと〳〵大衆部系佛教と上座部系佛教とは佛教として彼の浪漫派的基調に對しこれの合理主義的立場といふ譯で、殆ど根本的に相ひ容れぬ意義を存し、かくて極成的に大乘運動にまで進化したと、少くとも私らは想像を敢へてしたいその中の大衆部と汎阿毘達磨運動とは果して相ひ並行し得る性質のものかどうかさへ疑はるべき所以の想像され得よう所として、どうしても、本來の「複雜性」としての舍利弗阿毘曇論からあの大衆部等の如きが分化したと解するより、已に存在せる上座、大衆、有部等幾多の分派佛教の濃滲相ひ集つての合奏的「複雜性」として舍利弗阿毘曇論は出來たと考へる方がより合理性多きを思はされようからである。而もかうした見解の下に私はかつて（日本佛教學協會報第五年—昭和七年度—所載の拙稿「南北兩七阿毘達磨論の交渉」）、舍利弗阿毘曇論のかゝるものとしての成立論に關し、次の如き一案を提出して見たことがあるが、果してどんなものであらうか。謂く、根本上座部の本流が次第に南下して行つたことは幾多の證徵上、やゝ推測し得るに庶幾いことは、次で、今の舍利弗阿毘曇論中の主潮になつてゐる有部佛教の、時と共に北漸したことが同じく色々の證據に照して想像し得られると同じことである。而も果して然らば、二流の佛教の勢力間には一種の思想的間衝地帶が自づと出來上る譯であるが、さうした間衝地帶に於て、今や南北に地を隔てたる上座、有部の二佛教の影響を受るは固よりのこと、また大衆部等の色々の教派の潤色を蒙つて集大成的にものせられた一佛典、または同じやうな段取りで出來上つた一分派佛教に於ける一論典で、それを假託して聖舍利弗造などせる所こそ、軈がてこの舍利弗阿毘曇論そのものであつたではなからうか。已に上詮の通りに、元來、その部屬さへ殆ど想像するに由のない舍利弗阿毘曇論である。かやうな提案が、無論のこと、單なる一片の提案にとゞまるは改めて宣言するを要するまでもないけれども、然し、かうした提案でも、他日、自他がより廣い眼界と、同じくより精密なる見解とよりした大成的の提言に對し、幾らかでも礎石的意味を有し得るならば、私としては多大の幸とするもので、さうした期待を自らへの慰めともしつゝ、今はかうした論をこゝにとゞめることを寬恕せられたく思ふ。

七、關係諸論片について

最後に、冒頭の論中で、このが印度本土にては、少くとも文献的には、さう他への影響の認むべきがないに拘らず、支那佛教史上等に在つては、一大人氣ものゝ感もあつてその趣は大にかの成實論と

舍利弗阿毘曇論	Vibhaṅga		
四、沙門果品		三、四沙門果	非問、二一、人品
五、通行品		四、四通行	同、一〇、道品中
六、聖種品		五、四聖種	
七、正勝品	8. Smmappadhāna-v.	六、四正斷	非問、七、正勤品
八、神足品	9. Iddhipāda-v.	七、四神足	同　八、神足品
九、念住品	7. Satipaṭṭhāna-v.	八、四念住	同　六、念處品
一〇、聖諦品	4. Sacca-v.	九、四聖諦	問、四、四聖諦品
一一、靜慮品	12. Jhāna-v.	一〇、四靜慮	非問、九、禪品
一二、無量品	18. Appamaññā-v.	一一、四無量	非問、一〇、道品中 緒、一〇、定品
一三、無色品	(cf. 12)	一二、四無色	非問、一〇、道品中
一四、修定品	(cf. 12)	一三、四修定	同
一五、覺支品	16 Bojjhaṅga-v.	一四、七覺支	問、六、七覺品
一六、雜事品	17. Khuddakavatthu-v.		非問、十一、煩惱品
一七、根品	5. Indriya-v.	一五、二十二根	問、五、根品
一八、處品	2. Āyatana-v.	一六、十二處	同、一、入品
一九、蘊品	1. Khandha-v.	一七、五蘊	同、三、陰品
二〇、多界品	3. Dhātu-v.	一八、十八界	同、二、界品
二一、緣起品	6. Paccayākāra-v.		同、五、緣品
	11. Magga-v.		非問、一〇、道品
	15. Paṭisambhidā-v.		同　四、智品中
	16. Ñāṇa-v.		同
	18. Dhammahadaya-v.		

かくて再省するに、舍利弗阿毘曇論の南北二流の上代諸阿毘達磨に對する關係の濃やかなるや、蓋し意表に出づともいつた次第のものもある譯であるが、然しそれだからとて、上出の椎尾教授提唱のやうに、果して、舍利弗阿毘曇論が南方大方の諸阿毘曇論を受け持つて、轉じて北傳の上代有部諸論等に及ぶ橋渡的立場に立つなど早速に論じ得られようか否か。何となれば、已見の通り、舍利弗阿毘曇論は上座部、有部、大衆部などを初め、幾多の分派諸佛教に古來關係づけて考へられてきたほど、關係の多面的な一論典であるが、かうした複雜性は、(一)その複雜から漸次整理して他の純一なものが成り立つ場合、(二)逆にもと—まづ—純一のものが先在したのを、色々のもの、影響の下にかうした複雜に赴いた場合—少くとも純論理的にはかうした二方面より考察せられ得べきものながら、これを

諸論中にも幾分闘言せべ所であり、又、上同樣に在來の學者の間にても相當論議を價せる事、人の周知する如くである。便ちかくして椎尾辨匡教授の如きは、かゝる見解を總集せられた結論的意見として、曾て本舍利弗阿毘曇論は南方諸阿毘曇をやゝ打つて一丸とし、而してこれを北方有部の根本諸阿毘達磨へ橋渡すべきその橋梁的意義を存せるものであるなど見らるゝ如き口吻をなしてゐられるし(雜誌宗教界X, 1.6等)、また、故木村泰賢教授なども、同じやうな立場から、(一)舍利弗阿毘曇論の通局的組織大綱と南傳毘崩伽論の同じものとの相似を論じてゐられるし(「阿毘達磨論の研究」p.76ff)(二)次で、內進して、兩者の論究法の一致を考へ(ibid p.89ff)、(三)兩論に於ける特殊的施設としての小事分別(毘崩伽論)と煩惱品(舍利弗論)との相照を明かにせられており(ibid p.108ff)。(四)更に毘崩伽論以外に出でても、舍利弗阿毘曇論非問分人品と南傳逼伽羅坋那埏論との各所說の相應をまた指摘され(ibid p.117)、(五)かくて、舍利弗阿毘曇論及び毘崩伽論分化の起源論にまで筆を及ばしめられてゐる(ibid p.133)。而もこの木村教授のやり方のやうにしていはんか、人は尙、舍利弗阿毘曇論非問分界品と南傳陀兜伽他論 Dhātukathā 等との同準の相照をあげることが出來るを初め(cf.雜誌第一義29,10の拙稿「南傳陀兜伽他論と北傳舍利弗阿毘曇論」)、南方諸阿毘曇に對するだけでも、引き切りなく論じ得べきであらうのみならず(椎尾教授作の後出表參照)、更に北方有部諸論との形式・內容二途に跨る一致・相應まで論を及ぼすことゝもならば、殆どその果しなきの感さへ深められよう。さうした譯で、前の形式的の同じ考察だけについても(本解題二中)詳細は別設の特論を要すべく、到底、今の解題などといつた程度や範圍ではこれを能く盡すべき限りでもないことを明かしておいた次第であるが、察するに、かうした舍利弗阿毘曇論の南北兩傳の諸阿毘達磨論に對する緊密なる關係を完くの輪廓的ながらに、それだけ最も簡明に明示されたるは、右椎尾教授往年の製作にかゝる法蘊、毘崩伽、品類、並に舍利弗阿毘曇の諸論典間に於ける品施設の相照一覽表であるから、如上の諸論述を、もつて總括すべく、こゝに同一覽表を借來、揭出しておくことも强ちに徒爾のみの業ともしないであらう(cf.雜誌宗教界X,482f)便ち—

法蘊足品	Vibhaṅga	品類足	舍利弗毘曇
一、學處品	14. Sikkhāpadavibhaṅga.	一、五學處	問、一〇、優婆塞品
二、預流支品			
三、證淨品		二、四證淨	

の諸條件だけに反省しても關係する所は有部以外にまた上座部あり、大衆部などもあるとせらるべき所である。是に於てか本論の部屬については古くから隨分諸家の唱說を誘致し、早く已に「梵網六十二見經と此の論とは正量部の義」(本解題七中參照)といふもあれば、また「斯は誠に有部の永塗、大乘の靡趣」(道標作論序—大正28, p. 525a)などしたものも見え、乃至、或は、「卽ち是れ舊犢子部なり」、または、「犢子道人、此の毘曇を受持し、亦犢子毘曇と名く」(以上解題七中參照)と判ずる類もあり、更に擴げては、「法上、賢乘、正量弟子、密林住——此の四部が此の舍利弗阿毘曇論を不足として、經中の義を取つて之に足した」(同上)などいふの議論も出たことは、別項に概ね列記する通りである。然しからした諸主張については、近くまた椎尾辨匡(宗教界上出中論文)中參照、木村泰賢(「阿毘達磨論研究」p.140ff.)兩教授を初めその他色々の學匠が個々その所由を明かしつゝ反駁されたやうに、殆どその一として、これに定むべしとするに足る所は無く、所詮はかく色々と說の立てられるだけ、舍利弗阿毘曇論はそれら諸の分派佛敎に厚薄の關係があるといつた程度のことを歸結し得しめるにとゞまる。かくして、今の私としても、素より、快明にして充分妥當であり得るやうなともかくもの部屬論を提說し得るの沙汰ではなくたゞ上來の諸討究を前提に、「舍利弗阿毘曇論はまづ有部に最も重要なる關係があつて、上座、大衆その外色々の分派の影響をも蒙つた恐らく廣くは上座部系、而して直接には有部より分派した一敎派の所屬聖典か、でなければ、成實論同準に、かゝる一學匠の所造にかゝる一論部で、それを聖舍利弗作と假託した所でもあらう」位に差し當つての想像を敢へてしておきたいものであるが、果してその一敎派乃至一學匠や如何。これ單へに將來の研究に殘されたる一の課題なるべきと共に、それらの間の幾分の照明としては、差しづめ、次項の所述をもまた參照を得たいと思ふ所である。

六、南北諸阿毘達磨との關係・成立

前に組織の概相を述た下で、そもそも論組成の精神からが如何に南北兩傳の上代諸阿毘達磨に契通するかを敘し、且つ、さうした大局的相似はまた如何に細い形式上の問題にまでも波及して、同じ南北兩傳の上代諸阿毘曇と彷彿するものあるのをのべて、さうしたことが從來已に幾度も學者の筆端に上つたことを論じてきたが、已に形相上、かやうな次第であるから、これを思想內容について考てもまた同じて通じる趣のあることは言も要しない所であつて、そは上述の內容關係の諸

【三】 宗輪論述記發軔中、p. 43 aff; Wassiljew D r: Buddhismus 中; &c.
【四】 宗輪論同前下 p.36ff; Wassiljew: ib d; &c.
【五】 三者の所說を對比表出すれば左の如し

	（舍利弗毘曇）	（大衆部）	（化地部）
一、	智緣盡	擇滅	擇滅
二、	非智緣盡	非擇滅	非擇滅
三、	決定		？不動
四、	法住		（？別記三眞如參照）
五、	緣	緣起支性	緣起眞如
六、	空處	空無邊處	
七、	識處	識無邊處	
八、	不用處	無所有處	
九、	非想非非想處	非想非非想處	
		虛空	虛空
		聖道支性	道支性眞如
			善法眞如
			不善法眞如
			無記法眞如

備考 尙、K. V. VI,1-6をも參照せよ。

【六】 十空―內空・外空・內外空・有爲空・無爲空・無邊際空・本性空・無所行空・勝義空・空空。
【七】 十八空―(羅什譯大品般若)―內空、外空、內外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空。(玄奘譯にては、內空、外空、內外空、空空、大空、勝義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無際空、散空、無變異空、本性空、自相空、共相空、一切法空、不可得空、無性空、自性空、無性自性空の二〇)。

【八】 羅什譯大品般若十九、等學品第六三の「一切法本性淸淨」、無垢稱經（維摩經同本）二―大正 14, p. 563 c,「一切有情心性本淨」その他。尙、大乘では必ずしもないが、成實論三及び五―論集部三、p. 97 ; 176; 隨相論三、婆沙二七等も對檢のこと。
【九】 宗輪論述記發軔下 p. 33 b, 化地部下に「亦齊首補特伽羅有り」、婆沙一八五―大正 27, p. 927b,「分別論者說ニ齊有頂阿羅漢一」參照。
【一〇】 以上、有部は一例、集異門足論十四―毘曇部、二、初版 p. 89 ; 南方上座部は、Puggalapaññatti I, 42 (p. 16) ; 尙、立世阿毘曇論七―論集部一、p. 279 その外も參照すべし。
【一一】 參考―有部。―同上集異門足論十四等、正量部―三彌底部論、上座部―Puggalapaññatti I, 42―46 (pp. 16―17) ;立世阿毘曇論七―論集部一、p. 279 ff ; &c.
【一二】 宗輪論述記發軔中、p. 30bf の頭書乃至毘曇部一―五、二〇―二一その他有部の諸阿毘達磨論に於る諸法の界繫分別の論下等を見るべし。
【一三】 宗輪論同上、中、30 bff の本文(述記)及び頭書中を手近く參照。

五、部 屬

さてそれについて、今や舍利弗阿毘曇論のさうした分派佛教史的關係、中にもその心核たる部屬問題であるが、思ふにこの點にては、右掲の幾多の教相問題だけを一顧しても直に思ひ出られるのが、論と有部との密接緊切なる關係であらう。歴史を案じると、支那佛教史上、毘曇宗の綱領及び宗名が喧傳せられて未だその中心依典の渡來せざるや、この舍利弗阿毘曇論は同毘曇宗の宛然たる一代表的聖典たる立場におかれた觀もあつたが（本解題七中等對檢）、察するに、是の如きは舍利弗阿毘曇論の大方の建て前として强ちにいはれのない所でもないものであつて、それだけ、斯論の有部的色彩は牢固且つ普遍的なものがあり、斷じて如上の列記に見るなどの類にとゞまらないものである

けれども、反面、同じ如上の列記諸條件でもつて一顧にして見取し得るでもあらう通り、決して舍利弗阿毘曇論が全然有部の教相だけに終始するものでないのも餘に分明な事理であつて、已に如上列記

rinibbāyin)といふは、有部では、欲界に命終して、中有身を受け、未だ色界に生を受けずしてその中有身中に盡結般涅槃するをいふとし、南方上座部に在つては、欲界に命終して一度色界に受生し、同色界中で聖道を得て般涅槃すと說くなどして、諸部の見解が必ずしも一でないが、(註一〇)今の論(卷八、非問分人品第三)は、中の上座部の所見に近似する如くにして而もまた必ずしも全く同じでもないらしい。のみならず、一般に同中般涅槃人を初めとする所謂五不還諸聖についての說明(上出同段下參照)(註一一)がすべて、他分派のそれとはやゝ相違する趣のあるものゝ如くである。

八、既刊の識身足論中(毘曇部四、一〇)で示說しおける如く、虛無認識の事實を認めるか認めないかは、分派佛教時代の一問題たりし所で、中、有部は認めない測の一旗頭であるが、今の論(卷九非問分智品第四)にては分明にこれを許してゐる。

九、色界初禪天を大梵・梵輔・梵衆の三天とするか否かはまた有部の諸論間に於ても問題をかもした一話柄であるが(論集部一、p. 253(二九―三〇)參照)、本論(卷十一非問分智品第四中)はその三天說の方に與する一である。

一〇、無色界を絕對の無色とするか或は色といへない程度の色は許すかは、同じやうに分派佛教中の一問題で、(註一二)有部にては絕對に無色と說き、(註一三)大衆部は極めて微細なる色はこれを許すべしとしたけれども、今の論は折衷說をなし、或は無色界無色陰(卷の十二)或は無色漏有漏の色(卷三)を說く。

且つ、やゝ準ずる問題で、有部(俱舍二等參照)は段食(摶食)性たる香味の二境はたゞ欲界にしかなく、從つて鼻舌二識等の如きは上二界には無いとするものであるが、これにやゝ似て、上二界に香味二境及び鼻舌二根なしとは今の論(復、卷十二、非問分智品中)が同じて論是とする所である(但し有部は色界にも同二根だけは認む―俱舍二等を見よ)。

要之、以上全く瞥見したゞけでも、その留意を價する項目は比々として指摘し得とすべく、かくして、舍利弗阿毘曇論の教相學的意義は、如何にも僅少なりとせずといはねばなるまいが、殊にさうした關係からの分派佛教史的立場については、比例的に頗る注意するに足るものがあるとするを憚らぬだらう。

【一】椎尾教授作雜誌宗教界第十卷の六足論關係諸論文、殊に pp. 628―633 等及び木村教授著「阿毘達磨論の研究」の殊に p. 140ff その外參照。

【二】毘曇部五、拙作、品類足論解題中を見よ。

く斷片的で、これが思想體系的研究には甚大な教相學的豫備知識と組織的才能とを必要としよう。

而して、か丶る斷片的なる同論の一般內容如何については右記の品別を管見し、もつて概略を窺ふに足りようから、今こ丶には再說することを差し控へるが、次でもしか丶る諸內容中、特に注目的な諸思想項目について考察せむか、これまた既に(註一)幾度か學者の文稿を賑はしたやうに、可なり、盛にも見るに足るものがある。今左に試みにその主なるものを少しく列記して見よう。

一、有部の根本六足論中、最後の(註二)恐らく一たる品類足論に於て初めて明說されたる五位說、卽ち、色・心・心所・不相應行・無爲の說を、明かにでないが、また恐らくは本論も(卷一、間分入品、卷二、同界品その他)豫想する所である。但し、その各一の內含する所については勿論、有部のそれと可なり相違してゐる。

二、その相違するもの丶中の殊に著目すべき一は、最後の無爲說であつて、その無爲に關し、有部は虛空・擇滅・非擇滅の有名な三無爲說(毘曇部一—五、二〇—二一、その他婆沙、俱舍等同部關係の諸論典中參照のこと)をとるに對し、舍利弗阿毘曇論は九無爲說(右出卷一、卷二中その他參照)を說く。而してその九といふ數字は、諸分派中では、(註三)大衆及び(註四)化地の二部の無爲說と相ひ應じるけれども、その(註五)所據については、必ずしも全同であるとはなし難い。

三、また同段の有部(また毘曇部一—五中その他參照)に於ける特色的思想の一として喧しい無表業 Avijñaptikarma または無表色 Avijñaptirūpa を本論も無敎色等の譯語(一例、卷一、上出所中等)にて盛に喧說してゐる。

四、同じく有部の施設論中(毘曇部三p.424)にて(註六)十空をとき、かの大乘般若諸經等にて(註七)十八空として力說する所に對して、この論も六空をあげ、內空・外空・內外空・空空・大空・第一義空を列ぬる(卷十六、非問分道品第十の二中)所である

五、轉じて、大衆部測(宗輪論述記發靱中、p. 44b; &c.)の有名な特色的思想で(註八)大乘にまでも踏襲せらる丶心性本淨、客塵煩惱論を今論(卷二七、緒分行品第五)もまた認め且つのべてゐる。

六、(註九)北傳諸佛敎にても、必ずしもその例餘り多くなく、南方佛敎では遍伽羅坋那埊論 Puggalapaññati (I, 19-p. 13) がこれを認めてゐる首等人(巴、Samasisin) を本論(卷八、非問分人品第三)もまた說く。

七、同じく人關係で、例せば中般涅槃人 Antarāparinir.āyin (Antarāpa-

品(卷二一—二二)、二、相應品(卷二三—二四)を攝して、完くの關係論で、これまた專ら問答往返する所であり、最後に、(四)緖分は、

一、遍品(卷二五—二六)、二、因品(卷二六)、三、名色品(同)、四、假結品(卷二六—二七)、五、行品(卷二七)、六、觸品(同)七、假心品(同)、八、十不善業道品(同)、九、十善業道品(同)、一〇、定品(卷二八—三〇)、

など、善惡の因果といふ立場から、諸の善・不善法をまた上同段に分別・開說するものに他ならぬ。

かくして、如上の舍利弗阿毘曇論は決してその全組織が、あの龍樹以後の諸大乘論とか、無著等以降の唯識關係諸論典とか、乃至は大毘婆沙の撮要諸論部(毘曇部二〇—二一等、乃至倶舍論參照)とかに見るやうな思想の緊密な體系的立場よりせられたそれではなく、その點ではまづ廣く南方諸阿毘曇に同ずるが、また、顧みて北傳有部の上代諸阿毘達磨とも契通する。而も、かうした大局的相似より直に延ひて如上の委細の組織に於ては、同じく舍利弗阿毘曇論中、右上の南北諸論典に彷彿するものを甚だ多く含み、そのことは既に學者の筆端に幾度か上つた通りである(本解題六中參照)。然し、その詳細に至つては、正しく堂々とした別設の特論を要すべく、到底、今の解題などいつた程度及び範圍でこれを盡すことの出來る所でもないから、こゝにはすべてを省除するが、その一般については、何れ、後に至つて(同上に、解題六參照)、關說する所あるであらう。

而して、論の敍說の風致は已にいふ如く、例の阿毘達磨論通途のそれに準じ、殆ど終始して問答往來による所で、間々、偈頌の引用を挿入した所など(註七)は、氣分の緩和に與つて大なる力のあることを否定し難いけれども、尙もつて、全本に亘る論藏一流の煩瑣學術(スコラスティシズム)味を到底覆ふべき由もないだらう。

【一】本國譯毘曇部三、法蘊足論解題五中參照。備考——但し、この集異門足論を舍利弗造とすることについては、同じく毘曇部一、集異門足論解題中等參照のこと。

【二】衆經目錄—大正 50, p. 142a; 衆經目錄一、—大正 55, p. 188b; 大唐內典錄(上出)、大周刊定錄(上出)、開元錄(上出)、貞元錄(上出)、出三藏記集(同上)。

【三】大周刊定錄、開元錄、貞元錄、歷代三寶紀、出三藏記集(以上何れも上出)。

【四】衆經目錄一—大正 55, p. 188b.

【五】大周刊定錄(上出)。

【六】論の本文中には緖分とし、道標の論序に於ては序分とし、たゞ同宮內省本のみ緖分に作る。

【七】卷六、問分、優婆塞品第十、卷八、非問分人品第三、卷十三、非問分念處品第六、卷十四、非問分禪品第九、卷十九、非問分、煩惱品第十一、卷二五、緖分、遍品第一等。その經文を引用するものに至つては可成りに多い。

四、內容一般と同著目點

右言の通り、舍利弗阿毘曇論は、組織上、決して緊密な思想體系的なものではなく、それだけに、所詮はその內容が多

またはその意によるものであらうけれども、どうせが假託に過ぎぬにしても、それは、かの有部に於ける根本六足論の（註一）隨一としての集異門足論を同じく作るに比すれば、更にその假託の、一段と影の薄い感がある。何となれば、彼はその序分中にて、同聖舍利弗が佛陀に代つて同論を說くとの主旨を明記し、卷末またそれに應ずる所があつて、舍利弗造または說としての形式上の大に整頓せられてゐるのに反して、これは完く卒然として、たゞ、智慧第一の舍利弗に歸するといふ題名上の關係のあるにとゞまるからである。但し這間に於ける立ち入つたことは、成立論にふれることでもあるから（本解題五及び六中參照）、後に改めて考へることゝしたい。

而して、現本三十卷の支那以來の施設は譯傳の當初に於ては、もつと少く、或は（註二）二十二卷、乃至は（註三）二十卷等ともいはれ、また、紙數も、（註四）時に五九九紙、（註五）または七六〇紙等とも稱せられ、要するに、その時の都合によつたことは當然のことである。

然るに、かやうな支那以來の組織に對し、原梵典この方のそれに徵するに、まづ、舍利弗阿毘曇論は全局を大別して四段としてゐる。即ち、（一）問分、（二）非問分、（三）攝相應分、（四）緒分（または序分）（註六）がそれであつて、四者互に有機的必然關係の想定される譯ではなく、所要は今日の我々の「篇」とか、「章」とかいふ段別にも比すべく、その各の下にて、諸法の取り扱ひを漸次かへて、各諸法檢討の方便を確かにしようとせるにすぎぬ。便ち、（一）問分にては、

一、入品（卷一）、二、界品（卷二）、三、陰品（卷三）、四、四聖諦品（卷四）、五、根品（卷五）、六、七覺品（卷六）、七、不善根品（同）、八、善根品（同）、九、大品（同）、一〇、優婆塞品（同）

の十品の諸法を攝し、その各一について、一、諸法の列擧、二、解說、三、—大體決つて—二門三十六、三門五、四門二の計四十三（本文の各下註參照のこと）、の諸門からの所謂分別的檢討を問答往來的に明かし、（二）非問分にては同じて、

一、界品（卷七）、二、業品（同）、三、人品（卷八）、四、智品（卷九—一一）、五、緣品（卷一二）、六、念處品（卷一三）、七、正勤品（同）、八、神足品（同）、九、禪品（卷一四）、一〇、道品（卷一五—一七）、一一、煩惱品（卷一八—二〇）

といふ前後十一品の諸法を拉し來つて、一、諸法の列揭（目錄分—巴、Uddesavāra または論母 Mātṛkā—巴、Mātikā）、二、その一、一の解說（解釋分—巴、Niddesavāra）、の形にし、また、殊にその後者の方にては、問答的に記別する所で、非問分とて、必ずしも問答往來せぬ譯ではない。而して（三）攝相應分には、一、攝

曇論のそれの如きも、向後、時と共に益ゝつのりゆく意義を否定する譯にゆかぬだらう。

【一】 但し、この點では、成實論の方は古代、近代共に、舍利弗毘曇よりか幾分、部屬の想像すべき所以も存し、古く已に譬喩師に同じ、また、經部の義を用ゆなどいはれた如く、近代にてもまた大體同準に解するのが大方學者の漸く一致せむとする所の如くであらう。三論玄義流通本 p. 19a-b の本文及び頭註、乃至本國譯論集部三、宇井伯壽敎授作成實論解題中その他參照（然し古傳中には、或は「諸部の長を取る」とか、「群異を排して曇無德部を用ゆ」などいふもある。再び同上中等參照）。

【二】 例せば——一、全體の組織に於てまづ成實論の方が遙かに思想體系的になつており、二、その大乘關係は二論共に古代に於て（例せば三論玄義中等參照）隨分然幾せる一問題たりしに拘らず、事實は成實論の方が復、著しくより廣衍なるものを存し、私の私かに案じる所では、成實論は般若は勿論法華等まで知つてゐたかのやうであるが、當舍利弗毘曇に至つては、その點にてはたゞ所謂六空（本解題四中を見よ）をあげ且つ解說しおるの程度に過ぎぬ等々枚擧すれば幾らでも指摘せられよう。

二、原梵本の將來及びその漢譯

この舍利弗阿毘曇論の(註一)原梵本は、(註二)諸の經錄に記する所に從ふと、もと罽賓等に傳へられたものらしく、同罽賓の僧、曇摩耶舍、曇摩崛多（以上、共に本文中の下註參照）の二人が、姚秦の弘始九年（晋の義熙三年・407 A.D.）、入支して、姚興の爲に、國都長安に於て誦出し、書寫したものと稱せられる。

然るに、同じく(註三)諸經錄の傳うる所によれば、當時は、兩三藏ともに未だ秦語を閑はなかつたので、直に漢譯することをせず、そのまゝ同弘始十六年（晋の義熙十年＝414 A.D.）に及むだが、この時初めて譯機の熟するものがあつたから、兩三藏は命を蒙つて長安の石羊寺に譯業に從ひ、越えて同十七年（晋の義熙十一年＝415 A.D.）、その業を完了せる所といふ。時に、皇儲泓は親しく譯業を管理し、飾文、綴潤、校正、すべて意を配せられたとはまた例せば(註四)道標撰の同序文等の傳へる所であるけれども、新譯を見得る今日の我らからいへば、難は色々出し得られるにしても、當時、前例の極めて少かつた頃にては、その苦心のほどもまた察すべく、恕すべきものありとするに足らう。

【一】 舍利弗毘曇の原本が梵文であつたことについては、その譯傳をのぶる諸書に概ね一致和唱さるる所で、例せば道標作の論序（大正 28, p. 525 b.）に曰く「罽師本難ニ闇誦一、誠宜ニ謹備一、以ニ秦弘始九年一、命書ニ梵文一、至ニ十年一尋應レ令レ出」云云と。もつて知るべし。且つ次の諸經錄中の同準の諸文等もまた參照のこと。

【二】 衆經目錄五——大正 50, p. 142a；大唐內典錄三——大正 55, p. 252,b；大周刊定衆經目錄一〇——大正55, p. 435a；開元錄四——大正55, p. 517b；貞元錄六——大正55, p. 814a-b；歷代三寶記八——大正49, p. 77b；出三藏記集二——大正55, p. 11b 等（尙、右出の道標作、論序中も參照）。

【三】 同上中の——大唐內典錄、開元錄、歷代三寶紀、及び道標の論序等の文參照。

【四】 上の註中參照。その他尙、大唐內典錄、歷代三寶紀（上出）等にも同じく見ゆる。

三、名義・組織・敍述形式

題して舍利弗阿毘曇論 Śāriputra-abhidharma-śāstra といふ。蓋し智慧第一の大聲聞たる聖舍利弗 Ārya Śāriputra 說

舍利弗阿毘曇論解題

一、佛教文獻史上の意義

後說の如く（本解題五中參照）、この舍利弗阿毘曇論の部屬は分明でない。にも拘らず、その思想的及び形相的關係は、今日よりこれをいふと、南方諸阿毘曇に比べて至大のそれあるは改めて論じるまでもない所であり、且つ北方有部の諸阿毘達磨論などに對比しても亦甚だ密接なるものを存し（以上本解題三及び六參照）、かくして、かうした關係論的意味に於て、それはまづ印度佛教文獻史上に、頗る意義ある位置を有すとせらるべき所である。

而も、次で支那佛教史より眺めるに、右言のやうに、部屬の明かならぬとは關係なく、毘曇といふ點の興味から、それは、古來、頗る喧しく傳へられた消息があつて、別項に列記することもあらうが如く（本解題七中參照）、その隱顯、關說さるゝの類は蓋し僅少ではない。

かくて、如上の印度・支那兩佛教史上の舍利弗阿毘曇論の意義より、直に聯想されるのは、斯論とその歷史的位置の酷似する成實論そのものであつて、二者は第一に部屬の（註一）充分解明せぬ點で相ひ彷彿し（成實論については差し當り、本國譯論集部三、宇井伯壽教授作成實論解題中等、また今の論については本解題五中—上出—等參照）、次では、かく部屬の判明せぬ必然的結果として、後代思想史上及び文獻史上、甚だ重大な影響をなしてゐるとも、必ずしも解せられぬに關せず、とにかく、支那、日本の何れに於ても、かなりの人氣を博した事實が亦互に共通し（成實論は同前中、本論は今の解題七中等各參照）、更に、その成立上、有部佛教に二論とも重大な影響を蒙りながら、また、反面、大衆部系より受けた影響も頗る緊切なものある（成實論はまた同前中、本論は當解題五又び六各參照）、點も完く兩者相ひ應ぜる所であらう。

勿論、かやうにいへばとて、兩論は何らかうした運命を擔ふべき必然的關係や乃至理由の想定し得られる所ではなく、右の反面にては、二者は並で幾多の（註二）相違點も存するものであるが、何れにもせよ、以上のべ來れるやうな位置が位置であるから、この舍利弗阿毘曇論にしても、右の成實論にしても、從來の如き、すぐ眼の前の利益を眼中においてした佛教研究からすれば、その價値は強ちにさう重大ともいへなかつたであらうけれども、今や東西の佛教學界は單なる眼前的ではなくなつて、眞の學術的立場をとらうとしてゐるにつけては、何れもその學的位置の頓に向上してきたものといふべきで、從つて差し當り、當面の舍利弗阿毘

（小見出下の括弧内の數字は卷數なり）

目次

するの一の試みをしておいたから、これらが私自らとしてのせめてもの心遣りである。

本國譯の成立については、私の學生にして溫良・篤學の君子光地英學君の至大なる幇助を被つた。同君は客年中夏頃より、その勉學の餘暇をさき、私の爲に、本論の原漢文書き流しをせられ、晦澁なる舊譯を苦心して日本文態に改められた。然るに、私自身に至つては、公刊をせかれるまゝに、僅かに舊臘半ばより本氣の加筆に從ひ、爾來、講義及びその準備の時間等を除けば、殆ど一日一卷の割に筆を加へたといつても不可なく、同君の熱精に比べて誠に相ひすまぬ譯である。かくて全局を通じ、殊に舊譯難解の書なるが爲に過誤を幾多まぬがれざる所だらうが、これ單へに私自らの不敏に基く産物で、ここに讀者並に刊行者に篤く罪を謝せむとする所である。尙、刊行者及び校正者に對しても、この機に際し、甚深の敬意を表したい。(索引は都合で次卷に纒めることにした。)

昭和年九年一月三十一日

渡邊楳雄誌

序　言

昭和二年（1927 A.D.）秋、巴里から英京倫敦にわたり、南郊ストレッサムの巴利語學者ステッド氏の宅に旅装をといて、大英博物館の東洋研究者室（オリエンタル、スデウデント・ルーム）に、午前は巴利律藏を讀み、午後は伯林以來の北傳諸阿毘達磨論の讀み續けをしたが、その後者の最後の一として、翌昭和三年一月二十八日、倫敦から船出して歸朝の途に上る丁度直前に讀み切つたのが卽ち今の舍利弗阿毘曇論三十卷であつた。そしてかうした因緣がたま〳〵本國譯の計畫さるゝに當り、私の本書の國譯を割り當てらるゝ所以になつたのであつたが、實は當初の編輯責任者との打ち合せでは、三十卷の大本として、大體、三冊に分割し、私本來の主張に從つて、かうした機會に、出來る限り、克明・仔細且つ入念に、文献學的研究を試みるといふ心算であつた。而も、爾後計畫の進展に伴ひ、當初、全一百卷の計畫は忽ち超過し、次で同一百五十卷の企圖も今や下手をすると、再超過の患もあるに至つたので、當然、本舍利弗阿毘曇論の割り當ても自づからの變更を指圖せらるゝの外なかつた。かくてこゝには全三十卷の前十四卷を一とまづ一冊とし、一般讀者の机邊にそなへることになつたが、冊數の縮少は自然と頁數の過大といふ結果を齎らし、それが爲に、延いて私の最初以來試みて來た所であり、且つ年來の念願に基く所の、頭書の挿入、科段の明示、並に註解の克實などいふことは、殆ど斷念しない譯にゆかぬことゝなつた。私として、遺憾の極みとする外もないが、たゞ、從來公にせる毘曇部一――五、同二〇――二一、及び論集部一等にて、讀者の參考に資し得るだけのことは試みておいたし、且つ、本書に於ては、私自身の經驗から反省して、便宜を思ひ、臺本たる大正藏經（vol. 28）中の頁數段別を〔p.……a〕、〔b〕、〔c〕といふ風にして新に挿入

毗曇部 十九

渡邊楳雄譯

國譯一切經

大東出版社藏版